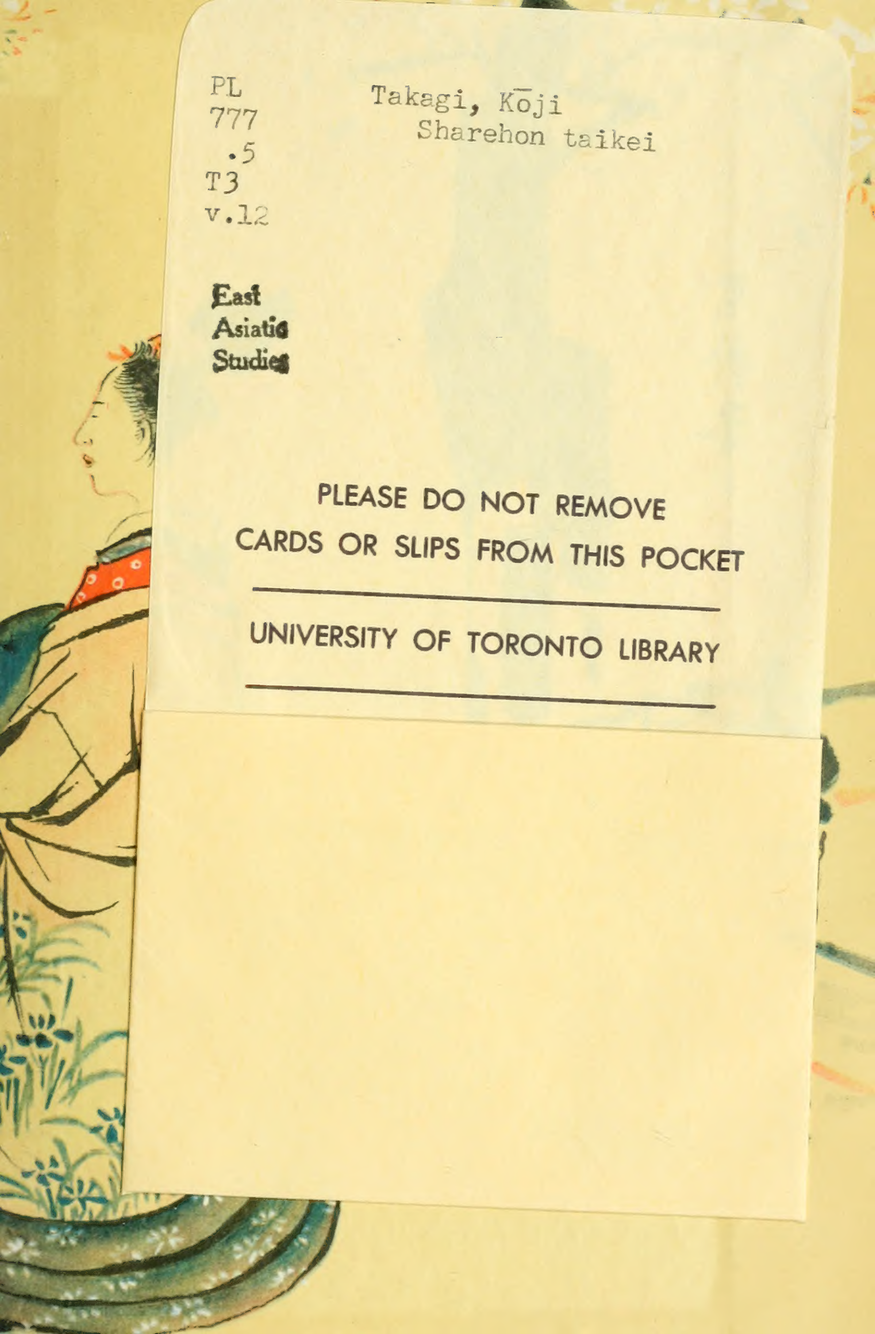


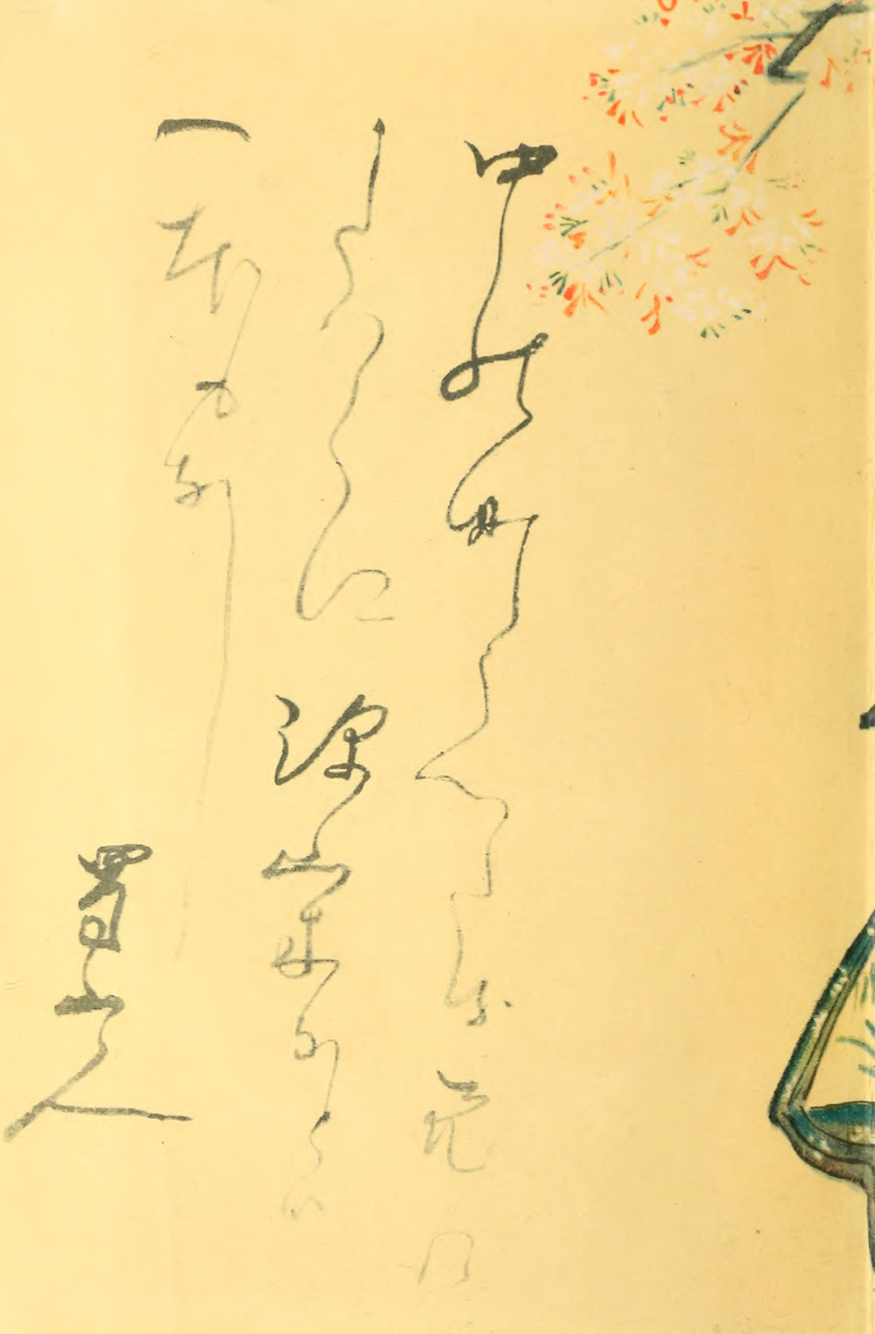
PL
777
.5
T3
v.12

Takagi, Kōji
Sharehon taikei

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

http://www.archive.org/details/sharehontaikei12taka

洒落本大系

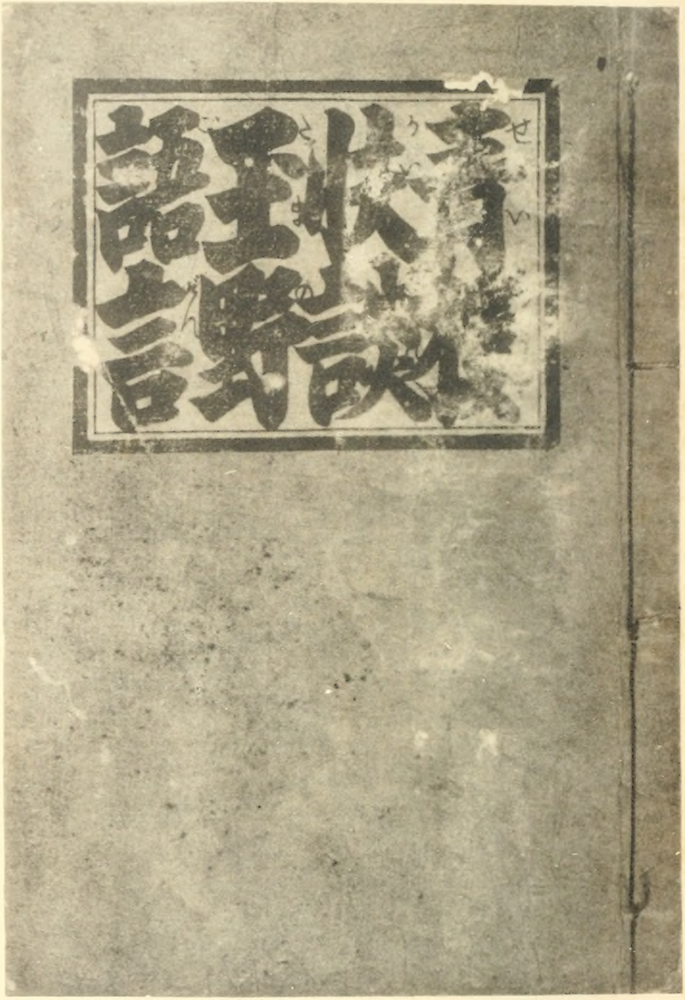
第十二巻

PL
777
.5
T3
V.12

LIBRARY
SEP 2 1966
UNIVERSITY OF TORONTO

1128127

廓宇久爲壽の表紙



青樓怪談玉野語言の表紙

洒落本大系 第十二巻 目次

解題……………一―六〇

	解題	本文
當世空言の河	一	一
傾城買花角力	三	五九
叶福助畧縁記	五	八九
面和倶噺	八	一〇九
船頭深話	一〇	一二九
通容一盃記言	一三	二〇一
やまあらし	一五	二三一
粋好傳夢枕	一八	二五九

籬の花……二〇……二七五
妓娼精子……二二……三〇五
船頭部屋……二六……三四三
吉原帽子……二八……三七七
夜廓行燈……三一……四〇一
四十八手後の巻(京傳居士談)……三五……四三一
廓宇久爲壽……三八……四五七
婦身噓……四〇……四九一
青樓快談玉野語言……四三……五二九
花街鑑……四七……五五三
青樓女庭訓……五一……六一一

傾城情史……五四一……六五一
縞潜妻……五六一……六七五
意氣客初心……五八一……七一九

目次終

解題

山口剛閲
高木好次記

▲當世空言の河　原本　縦七寸五分　横五寸

梓川子作　文化元年刊

書名「空言の河」は又「嘘之川」とも書く、天明三年刊の「徒然睟が川」(本大系第五卷所載)及びその後編天明五年刊「まゝの川」と三部作をなすもので、序にも「壬生の狂言空也の踊躍は凡様の目を遊はすの方便をもて勸善懲惡の理を示せとも寢られぬ夜半の伽にもならねはこたひ嘘の川と題してうその嘘ならぬも誠を述老らくの寐覺を慰めうらわかき人の戒ともならんかと筆をとり」と述べて居るのでその由來が知られる。

作者梓川子の傳記は「徒然睟か川」の項を參照ありたい。序の梅松山人、跋の華頂山陰浦園の傳は詳でない。

本書は五卷より成つて居る半紙本型である。「睟か川」「まゝの川」と同じい形式のものである、內容は、一卷が他所行、二卷が風呂屋、小樓、三卷が館（藝子妓の居る家）四卷が中宿、五卷が妾宅より成つて居る、作者も自序に於て述べて居る如く「睟が川」が發表されたのは本書より丁度二十一年前であつた、昨日の少年は今日の白頭になつて今ではそれも老の昔語りとなつてしまつた、「睟か川」の發表された天明三年は作者は未だ二十七歲の壯年時代であつた、遊びに對しても最も油の乘つた時期である、しかるに本書の出たのは作者が四十八歲の折である、そこで一書肆何かし又もやかゝる今やうふりを毫しくれよと需められけれとなとか花街青樓にうとき老の身のなすへきわさにあらすとひたふるにいなみ侍れとあへて需めけるにそ今のわかうとらに聞およひにしあらましかいつゝりて倚いさゝか善のはしをもかいそへし」と序に云ふて居る、梅松山人の序にも「勸善懲惡の理を示」すと云ひ、華頂山陰蒲團の跋にも「嗚呼風流閑雅。歸於粹而後已焉。將通達於大道之端而亦勸善懲惡之一助云爾」とある、爲政當局へ對して保護的に勸善懲惡の文字を使用した點もあらうが、一面作者の二十年間の心境の變化をも窺ふに足りるであらう。

本書には纒つた構想がない、他所行、風呂屋、小樓、館、中宿、妾宅を描寫するに當つても

一貫した筋がない、中宿、妾宅二項に亘つて富菊と云ふ遊妓が素島と云ふ旦那に身請けされて町へ出て妾となる、その妾宅の道具を調へるところが描寫されて居る、これとて斷片的場面の描寫で、それ〴〵の或時間に於ける姿は描かれて居るが、構想の點になると問題にならないのである、本書は前に出された二書に比較して讀み劣りがする、それは作者の心境の變化がしからしめたものと云へばそれまでゝあるが、既に作者は時代の人ではないのである、これが自己の身の廻りの描寫であるならば、又生彩も見られようが、遊里から遠く離れただらうことを本書に缺けて居る氣力から窺ひ得られよう、この事を作者も斷つて居る、蓋し自らを知れるものと云ふべきか。

▲傾城買花角力　原本　縦六寸 横四寸一分

菊黄舍雲裡作　文化元年刊

書名「傾城買花角力」は遊女對遊客を、角力の取組に見立たが故に名付けられたものである。

作者菊黄舍雲裡は何人の匿名か未詳である。

遊客對遊女を角力の取組に見たてたのは、寛政年間刊、關東米作「取組手鑑」がある、凡て

の脚色を角力に結び付けてある、本書はこの書の刺戟を受けて成つたものである、顔觸も、息子株、白齒、杜撰、靑切、浮の客、醉醒、醉丹棒、振袖、人目の關、心の嶽等となつて居る、內容もあどけない取組、茶かした取組、馬鹿げた取組、うるさい取組の四つに分れて居る、あどけない取組は、內は大見せで馴染の息子客が部屋持や新造とあどけない噺をして遊ぶ、茶かした取組は、內は小見世で馴染の若隱居が部屋持女郞其他を集めて古者の眞似をして可笑しく遊ぶ。馬鹿げた取組は、內は小見世で初會の客が淸花と云ふ遊女を買つたが、廻されて冷遇されたので中ゥ腹でもあるまい、むちやにして歸らうとて一寸外出して戾るからと云つてその家を出た、その跡へ隣座敷で新造を買つた客が小便に立つた歸りに、部屋を間違へて入り込んでしまふ、そこへ淸花が醉つぱらつて來る、客も醉がまはつて居るから間違つた事は互に分らない、後で隣座敷の新造が淸花に自分の客を尋ねに來てばれると云ふ。うるさい取組は、內は大見世、客は息子株、遊女は中三、茶屋の拂がとゞこほつてせかれて居るのを、新造の取計ひで新造買に化けて上つた客が、相方に逢つたが、互に愚痴つぽく痴話喧嘩をはじめる、それも愛し合へばこその結果で遂に睦言にかはると云ふのである。

　本書は角力の取組に類して四つの遊びの形式を描寫せんとしたものである、相當所期の目的

を達して居るものと云へよう、發端に於て作者自身述べて居るところによれば、新春の挨拶に來た本屋が洒落本の作を注文するが、自分の名前さへ書けないのだから、洒落本どころではないと云ふが、本屋のたつての望みに、誰か持つて來て置いて行つた作がある「こんな本さ、四十八手の後編でもあらうかだ」と云ふのでその作意の程を窺ふことが出來よう「四十八手」と云へば山東京傳作、寛政二年刊「傾城買四十八手」を指すのである、これは外題の示す如く、傾城買の種々な手を描寫したものなのである。

本書は作者のところで、本屋と作者とが替り番に讀んでは一項の終りに批評を加へて居る、この形式は十返舍一九などが、しばしば用ゐる手法であるが、本書が刺戟を受けただらう「取組手鑑」には未だ採られない手法であつた、この批評が作者には相當得意なものと考へられて居たようである、事實各取組を要言してのみこみ易くする等效果は尠くないのである。

式明の作品としては先づ注目されるであらう。

▲叶福助略縁起　原本　縦五寸二分 横三寸六分

振鷺亭主人作　文化二年刊

書名「叶福助畧縁記」は、本書の内容が、叶福助神の開帳の折の兩國の盛り場を描寫したものであるので斯く命名したのである、畧縁記と云ふたのは勿論、神佛の縁記物から出たのであるが、こゝでは開帳の折の殷賑を簡略に記したものと云ふ意味であらうと思ふ。

作者振鷺亭主人の傳記は、本大系第九卷所載「御膳手打翁曾我」の項を參照ありたい。

刊年は丑の春とあるのみだから、これだけでは何年の丑であるか判明しないが、從來文化二年の丑であると云はれて居るのでそれに假定して置く。

叶福助神の開帳が兩國回向院で行はれたのは何時であつたか判然しない、が事實あつた事にしてその繁昌は實にすばらしいものであつた、作者はそれを描寫せんと努力したのである、してその構想は江戸者の案内者が田舍者の年寄夫婦、その嫁、寺の和尚を連れて兩國橋北詰から南詰、回向院へと案内し乍ら、澤山の人出を當に出た諸商人、見世物等の情景を描寫して居る、然し後には田舍人であつた人々は壽老人、福祿壽、辨才天等の化身で、その正體を現はしを案内者はもつと正直者となれと訓戒されると云ふのである、案内者と田舍人とがその賑かな中に於ける可笑味の描寫が中心をなして居るに過ぎない。

兩國繁榮の描寫された作品には、先に「兩國しほり」（本大系第五卷所載）が明和八年に刊行

されて居る、同書にも開帳の時の人出の描寫がある、しかし船中に於ける賑かな遊樂は本書では見られない、構想の展開にその差の所以が知られよう、同書が漫然たる描寫に對して本書は案内者及田舍人の行動に制限を受けて居るからである、何れにしても本書は同書の影響を受けて著作されたものである。

兩國盛り場を描寫した作品は尠い、「兩國しほり」も本書も本格的洒落本には屬しないが、先づ珍重されてゐる作品である、あの文學の高潮期に於て、何故數が尠いのかと云ふ疑ひが生じもしようが、それは兩國盛り場それ自體の盛衰に原因するものである「兩國しほり」の出た明和の頃は、未だ江戸中の繁榮を獨占した形であつたが、安永になつて中洲富永町が出來、岡場所と共に種々な見世物がかゝつて、遂に兩國の盛り場がさびれる程の殷賑を極めるに至つた、それが寛政の初めまでつゞいた、安永、天明、寛政は江戸文學にとつては最も重要な時期であつた、寛政は例の松平定信の改革等があつて一體に其の昔とは趣きを異にした、しかしそれも時間の問題である、松平定信の引退の後は、所謂大御所時代の積極的な氣風が、昔に倍して繁榮を兩國に齎すに至つたのである、それが本書によつて表現されて居る。

「兩國しほり」の影響を受けた本書は、後に二代三遊亭圓朝によつて彼の得意とした「兩國

八景」に系統を引かれて居るのである。
兩國の繁榮を描寫することに、主眼の存することは云ふまでもないが、案内の江戸者が田舍人を愚弄する優越感が、露骨に出て居る一面、壽老人や福祿壽、辨才天等によつて代表された江戸者が、假に田舍人と身拵へして逆に江戸者の案内者を嘲弄する皮肉が現はれて居る、終結に於てこの事を露はすところに落語的價値を認めるのである、全般に亘つて所謂浮世聲色の表現された作品として尊重すべきである。

▲花妓素人 面和俱嘶（つらわくはなし）　原本　縱五寸 横三寸四分

遠樓亭主人作　文化三年刊

書名「面和俱嘶」は「おもはく嘶」のことである、作者が斯うあらうと考へた嘶を綴つた、即ち實際の事ではないと云ふ謙遜の意味であらう。
作者遠樓亭主人は傳未詳である。
刊年は只千里を走春とのみしか明記がない、「戯作評判花折紙」（本大系第十一卷所載）に載つて居ないので、恐らくそれ以後の作品である事には間違ひあるまい、從來文化三年の寅年とさ

れて居るので、今も矢張りその説に從つて置く。

本書は四谷新宿を描寫した作品である、第一回獨寢の噺し、第二回あやなす噺し、第三回眞のはなしの三項目に分れて居る、獨寢の項は客七が遊女歌を買つたものゝ、馴染客が來て獨寢をさせられた噺、あやなす噺は客太助が相方花町にあやなされて金をせしめられる噺、眞の噺は客八五郎、遊女菊里に深く契つて通つたが、茶屋が不首尾となつたので、或夜他の茶屋から行つて會つた、思つて居ればこそ互に愚癡ぽくなつて口舌を起すが、やがてそれも打解けると云ふ噺である。

本書は三つの型の遊客及遊女を描かうと努めたものである、これは既に洒落本にはしば〳〵用ゐられた手法である、何等新鮮味を感受するものではない、書名に花妓素人と割註する所以も強ち謙遜ばかりではあるまい。

獨寢の中に出て來る馬士の會話の中、密會者が誤つて肥桶の中へ落ちる話がある、これは、既に一田舍芝居(萬象亭作、本大系第六卷所載)や「田舍談義」(竹塚東子作、本大系第七卷所載)の中に使用されたところである、異なる所は、前書がそれから生ずる滑稽が比較的自然性に富んで居るのに反して、本書の方は、隱居の醫術が爪のはがれたのに、足袋の小鉤を使つた

と云ふ殊更の諧謔を用ゐた事である。

本書にはこの諧謔が目立つ、あやなす噺しの最後に、扨客を充分あやなして金をせしめた、少しは客の機嫌もとらねばならぬ、眞情を見せるふりして、心の中では「ヱ、きたねへ」と考へるところなぞ、この一句があつて一層あやなすと云ふ行動が效果づけられるのである。

本書は後に「成子綱」と改題して再版された、成子は四谷新宿の先の地名である、本書は當時に於ては新宿描寫の作品として珍らしいものである、それを明瞭に分りよくする爲めに斯く改題されたのであらう、「成子綱」の方が遙かに鄕土的臭を發して受け入れられ易いのである、四谷新宿には付きものゝ馬士をとり入れて背景を生かし、宿場の雰圍氣をたゞよはしてあるのも、全般を通じてあつさりとした作風と共に、本書をして品の良い作品たらしめて居る。

▲船頭深話　原本　縱五寸二分 横三寸六分

四季山人作　文化三年刊

書名「船頭深話」は明の瞿宗吉が「剪燈新話」の洒落であることは、作者自ら附言に於て述べて居る。

作者四季山人は式亭三馬の別號である、同人の傳記は、本大系第八卷所載「辰巳婦言」の項を參照ありたい。

本書は作者の云ふ通り七年ぶりにての著作である、この作者が「辰巳婦言」を發表したのは、寛政十年であつた、作者の自負ばかりではなく、事實好評を博し得たのであつた、然し乍らその世に行はれたにも拘らず、何故この七ヶ年を經過せしめたのであらうか、「辰巳婦言」を出した翌年、卽ち寛政十一年に黄表紙「（夫有杉 是嘩氣）俠太平記向鉢卷」（三二）を發表した、同書に取材されたのは、前年一番組と二番組との火消人足の喧嘩であつた、これを見たよ組の人足が大きに立腹して、當年の正月五日、版元西宮、作者三馬の住宅を破壞した、數名の人足は入牢し、版元は過料に、作者は手鎖五十日の刑に處せられた、斯る事件が、當時禁止されて居た洒落本への執筆を躊躇せしめたのではあるまいか、七年と云ふ星霜は謹愼を緩ませるには充分であつたのだ、本書の形式は上下二冊に製本されて居る。

扨本書の內容は勿論前編の連續である、前編に於て一人のおとまと云ふ遊女を中心に、藤兵衞、喜之八、長五郎の三人の遊客を配して、手ごはくかゝれる段、うまくかゝれる段、しんにもてる段とを書き別けた、本書では、矢張りおとまが長五郎に眞實を盡す段、藤兵衞がおとま

に吝氣する段、喜之介を突き出す段とより成つて居る、然し眞實突き出す氣持ではない、みす紙へ書いて、別れに際して喜之介に渡したおとまの文には、不可解な迷が殘されて居る。

右の構想で全部ではない、幾組かの座敷の光景が描寫されて居るが、それは情緒をより効果的たらしめようと云ふ手法であつたのだ、長五郎、藤兵衛、喜之介の段だけでも情緒は充分出し得るであらうが、所謂三馬の三馬たるの氣分ははじめてこゝに表現されて居るのである、滑稽味、可笑味の描寫によつて、殺風景に墮しようとする、風俗描寫の弊を救つて居る。

風俗描寫、これは作者が最も力を入れた所である、前編に於ては、「名家の糟粕を嘗て予が分に應じたる新石場の世界を著」したのであるが、本書は、「先年先人の糟粕をねぶりて辰巳婦言一冊を著す。幸に世に行はれり。尤古市場の小說。他に類書なし。衣之則ち後編を作して以外場所通の一笑に備ふる而巳」と云ふ、而してこれが描寫に當つては「文法ハ前編ノ如く。鄙俚片言を以てす」と附記されて居る、如何に忠實に、その世界を描寫し出さうか、と努力を拂つたのである、手法こそ先人の例に習ふとも、その盛られたる內容は獨特なものだ、と云ふ優越感を容易に感受する事が來る、細緻な觀察が辛辣に表現される所に、末期の洒落本中特記すべき內容を見るのである、本書の後編、卽ち「船頭部屋」(本卷所載)の凡例に前編の二書に

古市場の穴を穿ち風俗言語の趣を盡したと述べて居るが、作者の目的の全部がこゝに存したのである、構想の如きは全く、この目的遂行の爲めの機關にしか過ぎない、「船頭部屋」の刊行されるに至る理由も、斯る描寫に偏し過ぎたを轉換せざるを得なくなつた結果であらう。

▲通客一盃記言　稿本　縦六寸二分 横四寸二分

五岳亭作　文化四年刊

書名「通客一盃記言」は、序に「予一片の徳利の口をすぼめて一篇の草紙をつゞる目して一盃記言と云ふ」とあるのでも知り得られる。

作者五岳亭は又五岳山人とも云ふ、岳亭岳山と同一人と稱せられる。とすれば同人は、本姓は平井氏、後八島、通稱を丸屋鈴吉と云ふ、春信、定岡、陽亭、夕開亭、堀川太川、或は堀河多樓と號した、青山久保町、大傳馬町等に住し、天保年間に大阪中ノ島に轉居した、狂歌を六樹園、畫を堤秋榮、魚屋北溪、葛飾北齋等に習つた、嘉永初年歿。

刊年は本書には卯の春だけが記されて居る、本文中に「わしらァしやれ本のやうに人のあたりや穴をほつていふなァきつるきれへさァなんでも一九がしやれをかくやうに人のさハりにな

らねへのがよからふとおもつていやす」とあるので、或は未だ一九が洒落本を著述する頃のものではないかと想はれるのである、そこで先づ文化四年刊かと假定して置く。

本書の內容は三段に分れて居る、それは凡例にても知られる通りであるが、その構想は町人穴物屋豐平、連は安之助、藤次郎といふ侍で或妓樓へ行つた、豐平は相方が淸舟と決つたが、馴染客が來たとて若者周吉が座敷を貰ひに來た、豐平は快くはなかつたが、名代や廻しをとつて居ようより歸るに如ずと歸りかけた時、周吉が金づくで歸るのだと失言した事から、紛爭を來たして藤次郎も一緒になつて太平樂をならべる、遣り手も遊女も持て餘したところを淸舟の相方文二郎が歸る事によつて鎭まる、豐平は自分の不粹を後悔して機嫌よく淸舟と遊ぶ、藤次郎は綾機とは長い馴染であつた、心安さが過ぎて口舌を初めるが、それも互に思へばこそで、やがてはしつぽりとした場面を展開する、安之助の相方は松瀧と云ふのであるが、安之助が如在なくするので、松瀧はぐつと乘りが來て厚遇すると云ふのである。

本書に描かれて居るこの三人の客は、それ〴〵三つの型が表現されたものである、野暮な遊びの豐平、馴染深い藤次郎、厚遇を受ける安之助がそれである、粹人らしく取扱はれた、淸舟の馴染客紀久屋文二郎の傾城買極儀の魂膽は、後編に述べるとて一寸引き出されて居るが、構

想上あまり必要ではないのである。

豐平の如く太平樂を述べる樣になると從來の手法では極端に振りつけられるのが例である、然るに本書ではその友人で馴染客の藤次郎を配して一とまづおさめて居る、こゝは一寸例外な點である、本書の中最も見るべきは茲であらう、藤次郎の諧言、安之助の持て方もあまりに陳腐な描寫である、又今迄の多くの作品では町人階級が厚遇されて、武士階級は冷遇されたのであるが、こゝでは町人の豐平が薄遇され、二人の侍が持てゝ居るのも珍な現象と云はざるを得ない、本書は決して佳作ではない、しかし斯る點に於て注目に價する作品である。

五　やまあらし　原本　縦五寸一分 横三寸九分

柳亭種彦作　文化五年刊

書名は又「山嵐」とも書く、自序の中で其の由來を詳述してあるが、「質ねかの豚にして。人を化す術もなく。人を噛害も無し。讀んで易なく。讀ぬで支かけず」と謙遜して居る、これは又豪猪の見世物を見ての思ひ付きと云ふて居る、年代は明かでないが、其頃のことであらう。

作者柳亭種彦は初代で高屋知久、通稱を彦四郎、號を足薪翁、木卯、柳の風成、心の種成、

愛雀軒、修紫樓等の別號がある、幕府旗下の士で、畫、俳諧、狂歌をもよくした、戯作では合卷本に最も得意であつた、洒落本は本書が處女作であり、これだけしか發表されて居ない樣である、天保十三年七月十三日歿、享年六十、赤坂一ッ木淨土寺に葬つてある。

本書の內容は三段に分れて居る、淺草の段、心中の段、かこわれの段が卽ちその三つである、淺草の段は、淺草觀音の水茶屋に於て、本町邊の息子株の梅太郎と幇間半分の町醫で誹名春夕と云ふのが出會ひ、梅太郎の馴染で行く春待屋の遊女室咲の文を託されたが家に忘れたからとて兩人が春夕の宅へ行く、梅三郎文を受取つて見ると、室咲が日頃せかれて居る梅太郎を隱して揚げたので、新造に下げるの腰元にするのと大もめであるから、一そ鞍替へとふておほせて明日はそんじよそこらへ下る、生きた氣持はないとの文面である、心中の段は、室咲から の手紙で梅三郎が廓へ行き、斯うなつた以上は所詮術がないから心中しようと、先づ別々に駈落ちして土堤で一緒になる、そこへ稲村の陰から此邊の口利きらしい人が出てとめる、かこわれの段は、梅太郎室咲の兩人は止め手のあるを幸に、叔父を賴んで親父に詫を入れて家の首尾をつくろひ、室咲は圍はれの身分となつた、山の宿か山谷あたりに居をかまへた、室咲を改名してお町と云ひて素人めかす、或日近所のおなに、小間物屋のお杉の二人がお町の所へ集つて

世間話をすると云ふ構想である。

本書は構想が一貫して居るものゝ、主人公梅太郎、宝咲を初めとして登場する人物の性格が判りと描寫されて居らぬ恨みがある、本書で注意すべきところは、先づ心中の段に脚本の形式を用ゐた點である、洒落本の一つの型が確に脚本の脱化と見られる事は、既に初期の作品の中にも散在するので知られるが、その一端がこゝに頭を出したのである、又宝咲が身請けされて囲者となつてからの描寫が、山東京傳作、天明七年刊「古契三娼」の手法と酷似することである、「古契三娼」は吉原で遊女をしたお仲、深川で遊女をしたお芳、品川で遊女をしたお品の三人が、今は人妻たり、囲者たるが、或日一所へ集つて吉原、深川、品川の三ヶ所の遊里の話をすることが描寫してある、本書はそれとは一寸異つて居るが、宝咲はお町と改名して素人めかして居るものゝ廓の癖は中々ぬけない、近所のおなるも長屋で流の勤をした事がある、お杉は去る屋敷の飯焚きであつた、商賣上りの女だと自ら努めるが他の二人には見ぬかれて居る、斯うした三種類の女の話を描寫したところは、京傳の作品によつて暗示を得たのであらうが、洒落本の中には拙い手法である。

卷末に後編のないこと、若し成績がよかつたら後編を書かうか云ふことを表示して居る、最

初から全く本書だけの豫定であつたのである、斷らなくてもよさそうであるが、作者は結末の調子の落ちたのを氣兼ねしたのであらう。

▲粹好傳夢枕（すいこでんゆめまくら）　稿本　縱六寸二分 横四寸二分

市中庵作　文政十二年刊

書名「粹好傳夢枕」は「水滸傳」の洒落に、邯鄲の夢枕をとつたものであらう、洒落本に水滸傳を洒落た作品は山東京傳の「通氣粹語傳」（寛政元年刊、本大系第七卷所載）がある。

作者市中庵の傳は詳かでない。

本書は、神戸湊川の遊里を、描寫した作品である、「其むかし楠公の戰ひ給し場にそありしに時代換れバ品かわるとやらて今や男女戰の花里にやなりぬ」と本文中に述べて居る、これがために書名にとつた水滸傳の洒落が利くのである、當時こゝの遊里の藝者共は何れも轉んだので隨分繁昌した、それを或る藝子が桃の揚の禮の爲めお茶屋を廻つて居た時、ふと藝子衆が專ら轉ぶと云ふ蔭口を耳にはさんだので、歸つて親方に話したところがとり合はれない、そこで行司宅へ訴へた、行司がそれを調べて見ると、成程女郎より藝子の方が繁榮して居る、これ

では嶋の亂りになるからとて早速千秋庵へ藝子を殘らず集めた、一同何事かと晴着美々しく馳せ寄せたが、去る藝子からの訴へにて藝子が客をとりすぎる事は愼しむべきだと訓戒をされた、誰が願出たか探したが不明である、生木屋に伺つたら賣れぬ藝子衆の魂の寄集つたのだろうが、これは春の夜の夢であつたと云ふ構想である。

本書は天之卷と云ふて次いで後編の發表さるべき事が卷末に述べられて居る、專らにはやる藝者は車へんと云ふ川柳の氣持が具體的に表現されたものである、當時の遊里に於ては寧ろ藝者は遊女の從たるべき位置のものであつた、江戸吉原等ではこの藝者の轉ぶことを非常に嚴しく取締つたのである、遊女を買ひその上酒宴の席へ藝子を呼ぶ事は、尠い金では面白く遊べない、そこで簡易に藝者が轉ぶとなると勢ひの赴くところ制止し難くなるのである、「部屋の客を取或ハ我方より付文したりまたハ貳調鼓の口でさしたの座古寢の口餅搗の口などゝ嶋中のひやうばんそれに腹の子をミつにした娼妓も有といふ事ハ皆空にもせよマァ藝子たるべきものが客の數多でハいかんでないかかりそめにも七八人の客取モシとやなど煩ふたらどしやうと思ふぞや我身大事親方大事急度たしなむべし」と本文中に述べられて居るが、これによればこゝでは制裁がある樣子でもない、遊女は遊女、藝子は藝子の役目があつたのが、藝子が遊女の役目ま

で淩したと云ふことを問題にして居るのである、しかしそれは德義上の問題で、それに對して强く制裁する法の述べられて居ないところを見ると、餘程ゆるやかなものであつたらうと考へさせられる。

本書は、神戸遊里の酒落本としては、恐らく數尠いものゝ一つであらう、地之卷の發表されたか否かも知られて居ない、それだけに一層研究資料として珍重して置かれないのである。

▲青樓籬の花　原本　縱五寸二分 縱三寸六分

鼻山人作　文化十四年刊

書名「青樓籬の花」は內題では「娼妓美談籬の花」とも云ふ、何れも、籬の花は妓樓に於ける美妓を贊へたものである、本書では梅川と云ふのがその代表的なものになつて居る。

作者鼻山人は又東里山人、九陽亭とも號した、本名を細川浪次郎と云ふ、元幕府の與力で麻布三軒家に居住した、後所々に浪流したが晩年は芝切通に轉居して傳授屋を營んだと云ふ、山東京傳の門人で戲作が少くない、就中人情本は三十余種の多きに達して居る。

刊年は序末に「ひのとうしのはつはる」とあるので、文化十四年の丁丑であることが知られ

る。

本書の内容は前後二章に分れて居る。背景を吉原にとり、梅川忠兵衛の情事を取材したものである、即ち前章に於ては、梅川は忠兵衛と深く契つたが、忠兵衛は茶屋の拂ひがとゞこほつて二階を遠慮して居る、梅川は何とかして金の工面をしようとて、自分に惚れて來る八右衛門に不本意ながら好意を見せかける、後章に於ては、茶屋中の島屋に居る八右衛門が、梅川を呼びによこす、梅川はその日十五兩取引する約束であるから、忠兵衛と互に中の丁へは出まいと云ひ交したのを破約して出かける、それを知つた忠兵衛は中の島屋の入口で突然飛び出して、やつて來た梅川を打擲する、八右衛門は後で梅川に嫌味を云ふ、梅川は大事なところであるから髪を根本からふつすり切つて、八右衛門に渡すので得心して節句の仕廻も、呉服屋の注文も全部負擔してくれる、と云ふ、八右衛門の歸つた後、忠兵衛は自分で十兩の金を工面して、茶屋の不義理も少し緩和さして梅川のところへ來た、そして酒宴を始めた時梅川が綺麗に結ひ直した髪を引きぬいて腹癒せをして戻ると云ふのである。

作者が本書に描寫し出さんとしたことは目錄に於て明かである、梅川が忠兵衛に對する心盡しを、其角が秀句、鶯や梅はさほどに思はねど、と云ひ、その心盡しの過ぎたるを、祇徳の名吟

鶯やあまりに愛でゝこぼれ梅と譬へて居る、前者は梅川の手管を、後者はその眞情を描かんとしたものである、總括して作者は、遊女の實情を寫すべく努力したのである。「娼妓の。誠と。鷄卵の四角。あれバ。晦暮に大陰も顯と。謠ひ物せしれ。其理を不究の論。可咄の妄誕也」と云へる序にてもその意氣を知り得よう。

作者は山東京傳の門人である、鼻山人と云ふに京傳鼻を用ゐて居るほどの信者でもある、本書に遊女の眞情を描かうとするに當つて、梅川忠兵衛の情事を取材したのも、既に師京傳によつて試みられた點を追ふたに過ぎない、即ち寛政三年刊「娼妓絹麗」（本大系第七卷所載）の影響の下に成つたものである、新造買に化けて梅川に逢ふ忠兵衛を、梅川の新造梅里が骨折つて居るのは、京傳の用ゐた梅春の手段を眞似たのである。

本書には後篇がある、最初から前後二篇に構想が立てられて居たのである、それは本書の出た年の翌文政元年の春刊行された「廓宇久爲壽」（本卷所載）である、これが二章ある、つまり前後編四章が起承轉結の分類によつて居るのである、詳細は同項を參照ありたい。

▲契情奇談　妓娼精子　原本　縦五寸九分　横四寸一分

鶯蛙山人作　文政年間刊歟

書名「妓娼精子」は「起請誓紙」の洒落である。

作者鶯蛙山人は、また鶯蛙樓主人とも云ふが傳は詳かでない。

刊年は明記を缺く、只本書が文政三年刊「遊子娯言」の後編であるから、其の後で、先づ文政年間中の刊行であらう、從來文化年間刊と云はれて居るがそれは前編を文化五年刊とするからで、前編の刊年は、本文中に、古今亭三鳥作「花園平三四季物語郭寄生」の廣告があるから、同書より前の刊行ではあり得ない、その上辰年の序があるから、少くとも文政三年の刊行であらう、そこで本書は先づ文政年間と推定するのである。

本書は上下二冊に別れて居る、又本の大さも縱五寸三分、横三寸七分のもある、多分斷ち落す時の加減で相異が出來たのであらう。

本書の構想は喜佐と云ふ唄歌ひが、新吉原神屋の代の町と云ふ遊女の年明け後、夫婦になつて袖摺稻荷の向ふ裏で師匠をして居る、そこへ熊次、清雅、露笑、里遊と云ふのが稽古に集つて來る、一同揃つて吉原へ行く事に話が出來て居るが、熊次が酒癖がよくないので露笑が講釋場まで連れて行つたが、酒に醉つて寐たのでまいてしまふ、熊次は目が覺めた時は講釋もはね

てしまつた所だが、山口巴屋の若い者善八に出會つたので、二人で西河岸稻毛屋へ上る、熊次は香山と云ふお茶引き遊女に決つて持てる、善八はげひ川と云ふ遊女に冷遇される。柳屋へ上つた里遊は此糸と云ふ遊女に馴染であるが、此糸は蘭蝶と云ふ深く契つた男が居る、今は拂につまつて堰かれて居る、此糸は蘭蝶とほつた腕の彫物を消して里遊から二十兩の金をまきあげた、蘭蝶は廻し方與七と此遊の心盡しで隱くれて此糸に逢つた、此糸は里遊からの金二十兩を以て、蘭蝶の爲めに深川へ身を沈めた、蘭蝶の女房お富を請け出す足しにしてくれと出す、蘭蝶は其の好意を避けて、殿樣から預つた色紙が紛失して親爺が座敷牢へ入つて居る、それを道具屋で見かけたからその二十兩を内金にすると云ふ、清雅はおす川と云ふ遊女を相方にしたが、体よく振られるに反して、露笑の相方は初花と云ふが相當に厚遇されると云ふのである。

本書の構想は纏りが惡い、そして中心がない、全體的情緒の中に、里遊對此糸對蘭蝶の描寫を生かさうとしたのであらうが、それにしても骨子をなす所が判然としない、つまり煩雜になりすぎて居る、當然一册位にて纏り得るところであるが、收拾のつかぬところから上下にせざるを得なくなつたのであらう。

前編「遊子語言」の構想も脫線——作者は廓情調の纏綿と云ふであらうが——が多い、要約

すれば、榊屋の此糸に里遊と云ふ客がある、一方蘭長と云ふ深く契りを重ねた男もある、蘭長は廓の金につまつて家屋敷も人手に渡した上に、女房お宮も昔とつた杵柄で再び深川へ身を沈めた、老いたる母は蘭長の行末を案じて病つて居る、お宮も見かねて或日女客になつて榊屋の此糸に會ひ、花山と云ふ遊女に手を借りて、蘭長と此糸とが一時切れる様にと依頼したと云ふのである、矢張りこれだけの構想を運ぶのに煩雑な描寫が可成多い、作者の腕の問題であらう。

此糸蘭蝶の事は、新内節「若木仇名草」によつて既に安永初期から膾炙されて居る、歌舞伎狂言に入つた經路は判然しないが、文政六年三月、江戸市村座で鶴屋南北作「浮世柄比翼稲妻」の二番目に小紫蘭蝶が出て來るが、新内節のそれとは構想の相異がある、人情本に、文政七年刊「傾城小糸 蘭蝶記」と云ふのがある、新内節の脫出以外に前編や本書あたりの影響もあつたであらう。

今日の上方狂言に於ける此糸蘭蝶は、明治の初年に書かれたものと云はれて居るが、茶人の[illegible]は本書の色紙によつてなされたものではないかと云ふ臭ひがする。

本書は、決して佳作と稱せられる程のものではない、然し、此糸蘭蝶が演劇に、或は小説に取材される様になつた時代から考察して、また捨つべき作品でもあるまい。

▲船頭部屋　原本　縦五寸二分　横三寸六分

猪牙散人作　文化四年刊

書名「船頭部屋」は、深川通ひの猪牙船の船頭が、客を妓樓へ送つて行つた時の溜りを船頭部屋と稱する、それを採つた名稱である。

作者猪牙散人は式亭三馬の別號である、同人の傳記は本大系第八卷所載「辰巳婦言」の項を參照ありたい。

本書は「船頭深話」の後編である、寛政十三年に「辰巳婦言」を出し、七年置いて文化三年に「船頭深話」を發表した、二書何れも世に行はれた、然るに、未だ完結を告げて居らぬ、前編の二書に古市場の穴を穿ち風俗言語の趣を盡したが、然しお筥が眞賓や、三人の客の達引の結末がついて居らぬ、それを描寫したのが本書である、作者が云ふ聊か流行を加ふとは、流行物の取材ばかりでなく實情描寫を行つたと云ふことなのであらう。

お筥に突出された喜之助は、別れ際にお筥から文を貰つた、内容は不可解な事だつた、とまれ、土軒堀の親里の家まで來てくれと云ふのであつた、腹立まぎれに引き上げて來た船宿で、

一杯飲んでからその親里へ出かけて行つた、兩親にもあつて話て居る中に、二階から長五郎が下りて來た、そしてお管は己のものだと云つて喜之助を極言して罵倒した、喜之助は取合すに引き去らうとすると長五郎が聲かけて止めた、そしてお管と長五郎はきれいに切れたからどうか藤兵衞と張合つてお管を手に入れてくれと頼む、それから二人は揃つて出かけて行く、藤兵衞はお管の腕にあつた長五郎の彫物の消させてしまつた、今はいゝ氣になつて鶴ヶ岡の山本で騷いで居る、お管は長五郎とも切れた、喜之助をも突き出した、そして藤兵衞の顏も立つて居る、今度は藤兵衞を突き出して喜之助に戾り、喜之助の男を立てようとする、が藤兵衞は先を越してお管と切れてしまつた、と云ふのである。

長五郎は金比羅樣へ大願があつて女郎買を絕ち、藤兵衞は不首尾の店に歸參が許りるを機會に野夫から脫すると云ふので、結局お管と喜之介は握手する事が出來るのである、作者が從來の手法を變へて、意地と達引の實情を描寫した所が本書の特性である、如何にしてこの構想を纏めようかとする努力が明かに認められる、それが爲めに作者自らも斷つて居る通りである如く、穿ちや、言語風俗の細緻な描寫が手薄になつたのである。

初編から三編まで、足掛け八年に亘つてのお管を中心に、三人の客の達引も、一ト先づ團圓

を告げる事となつた、然るに興味は殘る、そこで附言して、二河屋へ戻つてからの三人一座、三人割床の廻しに三人の情を書き分け、お笘は年季を入れ直して辰巳籔内に喜之助を圍ふ、その貞烈に感じて喜之助の勘當が許されて夫婦となる事は、追而出版するからと斷つてあるが、四編は出なかつた、文化四年五年と云へば既に洒落本も澆季であつた、黃表紙敵討物の流行に遲れて氣まづい思ひをしたこの作者である、そうした轍を再ご踏ざらん事を願つて居た、彼は思ひ切つて方向を轉換した、十返舍一九の得意の擅上である滑稽本の世界へと移住した、元々この作者は滑稽描寫に秀て居たが、それまではさまで實が入つては居なかつた、文化六年に「浮世風呂」の初編を出し、七年にその二編、八年にその三編と「浮世床」の初編とを發表した、江戸文學の多くの著述の中、最も代表的な聲價を得て、今日も彼の名よりも、「浮世風呂」「浮世床」の名の方がより膾炙されて居るのを見ても、彼が末期の洒落本に對して思ひ切りのよかつた事の、如何に幸福であつたかを窺ひ得るであらう。

▲吉原帽子　原本　縱五寸九分 横四寸一分

煙花浪子作　文化年間刊

書名「吉原帽子」は當時流行の帽子の名を採つたと云ふ、種々の頭巾の名がある、それを捻つて殊更帽子と名付けたとも云ふ。

作者煙花浪子の傳は未詳である、山東京傳作の「娼妓絹籭」(本大系第七卷所載)の後序を書いた末に、京傳艸廬食客、煙花浪子跋と記して居るので、京傳と關係のある人と云ふだけは知られる。

刊年は明記を缺くので判然と知る事は出來ないが、本書の內容が、並木五瓶作、寛政十年正月、桐座初演の「富岡戀山開」の二人新兵衞と小女郎とを取材して居るから、際物を覗つた意味から原作とあまり離れない中の著作にかゝるものであらう、從來文化年間刊と稱せられて居るからそれに從つて置く。

並木五瓶作の二人新兵衞——卅間堀藍問屋の玉屋新兵衞は、もとは下總結城の家中鵜飼の家來であつたが、若殿九十郎は大の放蕩者で家寶の一軸を盜み出し、加之妹小菊を深川の三國屋へ遊女に賣つた、玉新は主家の爲めに一軸詮議に努力するが、小菊が小女郎とて流の身となつたのを知つて呼ぶ、その中にお互に戀仲となる、こゝに又宇田川の木綿問屋の出村新兵衞と云ふのが小女郎の客であつた、戀爭ひで玉新から額に疵までつけられたが、通り者であるから玉

新の境遇に同情を寄せて、一軸の代金として二百兩貸してくれる、九十郎からとり戻さうとした玉新は、却て欺かれて二百兩の金を奪はれる、玉新は怒の余り九十郎を刀にかけて主人斬りの大罪を犯す、捕手が廻つた、玉新は一軸を持つて逃げると云ふのである。

本書に描かれた二人新兵衞に小女郎は、名こそ同じであるが少し構想が異ふ、即ち、茶屋玉屋から小女郎に馴染んで來る客に新兵衞と云ふのがある、一方茶屋出村屋から來る客にも新兵衞と云ふのがある、玉新と小女郎とは深く契つた仲である、そして今の玉新は家が不首尾になつて、小女郎の貢ぐ金で圍はれてゐる身分である、小女郎は玉新の子を宿して居る、出新は通り者である、小女郎が玉新に貢ぐ事を知りつゝ、小女郎の無心を聞き入れる、玉新は小女郎から出新の話を聞いてそれが女房の兄源之介の様な氣がしてならない、或日出新は妹を連れて小女郎の許へ來た、その席で玉新にあてこすつて罵倒した、玉新は出新が義兄である事を見定めようと隣座敷に居たので、それを聞いて立腹して飛び出し、女房を去れば兄ではないと出新の眉間を割る、大勢がとめたので出新はその疵跡を手拭で縛り吉原帽子を冠つて、妹を連れて一同に送られて戻る、玉新は出新の仕打は皆自分を思つての結果であり、小女郎も既に身請する事にまでしてくれた事を亭主にきかされて、自分の行動を不甲斐なく思ひ、大門を去らんとす

る駕籠に追ひすがつて謝罪する、小女郎は身請されて、根岸の別荘で安産する事が出來ると云ふ構想なのである。

並木の脚本と本書との相異は全然目的が違ふのであるから、其處に可成りの距離がある、前者を洒落本としての典型にもらんとしたのだから勢ひ局限された構想にならざるを得ない、遊女の姙娠を扱ひ、妹が可愛いばかりに努力を續ける出新の描寫は、從來見る事の尠い點である。

遊女の姙娠は、多くの場合は墮胎されるのが常であるが、それを安産にまで運んだところは、京傳の「傾城買四十八手」（本大系第七卷所載）と其の後編、馬鹿山人作「四十八手後の卷」（本卷所載）との間の構想の展開を期せずして結ぶ結果となり、遊女が安産するを得るまでの展開の一例を見せてくれたのである。

歌舞伎脚本からの脱出の跡があまりに濃厚だが、末期の洒落本としては上々の部である、玉屋新兵衛と三國小女郎の名は既に「傾城歌三味線」（享保十三年刊）の中に見られるのであるが、それまで本書への影響を考へる必要はあるまい。

▲夜鄽行燈　原本　縦五寸二分　横三寸六分

桃猿舍犬雉作　文化年間刊

書名「夜郭行燈」は序の夜郭にかゝげられて居る行燈を指して云ふのである、又「後編吉原談語」と云ふがこの方が本外題であるらしい。

作者桃猿舍犬雉の傳は未詳。

刊年の明記はない、前編が享和二年に發表された、然して本書の凡例には「此書前編八十年前ニ絶テ板木ヲ滅ス儂ニ古本ニ遺ルアリ」とある、次いで「後篇モ又其頃埋レ木トナリテ知ル者稀ナリ偶コレヲ反古ノ中ヨリ拾得テ以前後ヲ合ス」と云ふ、これは本書を發表するに際してもつたいらしくしたのであらうが、前編の十年前の絶板を發行後間もなくとしても、本書の刊行は文化八年以後であらねばならぬのである。

然して玆に問題とするところは、この前編の十年前の絶板と云ひ、其頃後編も埋木となつたと云ふ點である、又前編の卷末には本書を「來亥春出版御もとめ御覽被下可候」と云つて居る、前編の內容からして當然間もなく發表されなければならぬし、作者も著作する意圖であつたに違ひない、扨そこで當時十返舍一九の身上に付いて考察する必要がある、それは文化元年に黃表紙「化物太平記」(三)の發表された事を想起せしめられるのである、本書は當時の禁令「一

枚繪草紙類、天正之頃以來之武者等名前を題し畫き候儀は勿論、役所合印名前等紛敷認め候儀も決て相成間敷候」に觸れて、絕版を命ぜられ、作者は手鎖、版元山口は過料に處せられて居る、此場合事の序に「吉原談語」にも影響したものではあるまいか、一九が滑稽本に多忙を極める樣になつた事にもよるであらうが、その後頓に洒落本の發表を見ないのである、後編の作者桃猿舍犬雉は或は一九の匿名ではあるまいか、これにて春踏みした後、文政三年「初惠比壽」の作品を通り名で發表するに至つたのではあるまいか、斯う聯想されて行くのである。

本書は前編に於て友人遊糸の相方春風をとつた七三郎は、長兵衞と云ふ客が春風に切れる樣にと注意しても、春風も切れられぬまゝに逢つて居た、田舍へ行つて居た遊糸も家へ戾る事が出來て、今では立派な客となつて廓へ通ひ得る身分となつた、茶屋の借金も半分程拂つて春風のところへ行き、七三郎と春風との噂を責める、春風も遊糸が田舍から何の便りもせず、二年もほつて置いた事をなぢるので遂に遊子がまけてしまふ、この時世話になる客長兵衞が來て居る、春風はその座敷へ出てまた二十兩の金を無心する、その金と云ふのは、七三郎が三浦屋の女郎浦風と馴染であつたが、花山と云ふ新造を買つた事から、春風と色事になつたのでその遊女に捕つて連て行かれた、坊主にでもして突出されたのでは春風の顏がたゝぬから、三浦屋

のかたをつけて七の顏を立てゝから切れようとする、遊糸の方は七三郎と戀をしてその顏をつぶしたのだから、二階をあけて立派に戻らせた上で、遊糸から春風が突き出されようとするのであると聞いた長兵衛は、二十兩出してやる、春風は遊糸と七三郎に切れる證據を髮を切つて見せる、春風は二十兩で遊糸の茶屋小花屋の二階をあけ、七三郎の茶屋藤田屋から交渉させて、浦風につかまつて居るを放免させた、七三郎は急ぎ藤田屋へ來て、二階に待つて居た春風に逢ひ二人は駈落ちする、大音寺前の田川屋の奥座敷で休息する、七三郎は春風を遊糸に歸さんと話し出す、隣座敷から遊糸が出て春風を七さんへ進上すると云ふ、その中へ長兵衛が出て春風を預かる、長兵衛は春風の年季證文をも春風に渡す、其の後春風は尼となつて田舍へ引込み世の中を風雅にのがれたと云ふのである。

前編「吉原談語」の作者十返舍一九は凡例で「滑稽の詞を花とし實情の其實を結んで全體を濃（コイヤカ）にす」と述べて居る、本書も凡例に「桃太郎ガ黍團子ニ倣ヘテ日本一書肆ノヤウナ吉原談語ナリ然トイヘトモ能傾城ノ實情ヲ穿チ覽者ヲノ感慨セシムルニオイテハ又身ヲ脩ルノ戒トモナラザランヤト云爾」とある、所謂實情描寫に作意のあつた事は申すまでもない、あまりに長兵衛の出現春風の苦境にとらはれた結果、前編程の出來榮は見られない、發展し切つた構想に

結末をつけんとするのであるから、そこに無理の作ふのも止むを得ない、譯知りの客長兵衛の行動もその老人の心境を遺憾なく表現しては居るもの丶、その積極的行動は眞實性に逆行して行くのである、これは遊女春風の眞情を描寫することが主眼であるのから、勢ひ斯う云ふ人物を必要とするに至つたのであらう。

▲四十八手後の卷　原本 縦五寸一分 横三寸七分

馬鹿山人作　文政元年刊歟

書名「四十八手後の卷」は「四十八手後の卷　京傳居士談」が本名であらうが、今はその原本がないので、京傳居士談を除いた再摺本らしいのに依つた、京傳居士談と云ふのは山東京傳の追善記であるので、彼の作品、寛政二年刊「傾城買四十八手」（本大系第七卷所載）の後編と目して斯く名付たものである。

作者馬鹿山人の傳は詳でない、享和二年版の黄表紙「武家物語奇談」の作者馬鹿山人花道と同一人であらう、序を書いた東垣舍主人は馬鹿山人の別號であらう。

刊年は明記がない、從來文化年間刊とされて居るが、それは疑問である、本文中に、山東

京傳が去年死んだと云ふこと、感和亭鬼武も次いで物故したと云ふことが記されて居るので、著作されたが、京傳の歿年は文化十三年であるからその翌十四年であることが知られる、しかし鬼武の歿したのは從來文政元年二月廿一日と云はれて居るから、本書の記事と一年の齟齬を來たす、これは本書の云ふ去年京傳の死したことを是とすれば、鬼武の死は文化十四年であらねばならぬし、又鬼武の死が文政元年であるとすれば、本書で云ふ京傳の死は文化十四年となるのである、しかるに又本文中に「いださんおめへがことし廿七になるから廿八年むかしだ」と「傾城買四十八手」の記事に言及して居るので、當年は文化十四年と云ふことになるのである、すると鬼武の死が文政元年にあらずしてその前年文化十四年であると云はざるを得ない、尙後考を待つとして、今は文化十四年作の文政元年刊歟として置く。

本書の內容は前にも一寸云ふた通り、山東京傳が死んだのでその追善記として著作されたのである、作者はその效果を擧げるために、內容を彼の「傾城買四十八手」から失敬して居る、郎ち尾の上伊太八の情事を取材した、尾の上伊太八の兩人は互に思ひ思はれた仲であるが、廓の金にはつまるが習ひで大きに困つて居る中に、源三郎と云ふ敵が現はれて尾の上を身請けすると云ふので、所詮この世では添ひとげられぬので、いつそ死なうとするところへ京傳の幽靈が

現はれて、兩人を押しとどめて談義する、それも五の夢に見た事であると云ふ構想である、これが外花街、內花街の二項に別れて居て、尾の上と伊太八とは外花街卽ち假宅に於て馴染になつたのだと云ふて居る、この取材された假宅は、丁度本書の成る前、文化十三年五月三日中刻に、新吉原町一丁目から出火して廓中殘らず燒亡した、假宅が田町、聖天町、山の宿、瓦町、深川等に出來た、その時の淺草に出來た方のである。

外花街、內花街に於ける遊女遊客の應對は、これも一つの手の內であらうが、作者が「四十八手」と關聯をつけたのは、登場人物の上により重點があるのである、卽ち、伊太八の父は四十八手の眞の手の伊之、母は同じくささおか、尾の上の父は四十八手のしつぽりした手の榮、母は江戸花、源三郎は四十八手の見ぬかれた手の家中者尾屋敷源吾、若い者里助は、四十八手のやすい手の里風のなれのはてと云ふのである。

本書は佳作として問題にされ得る作品ではない、只山東京傳の追善記として見る時、洒落本にはほとんど他に求められない珍種に屬するものと云ひ得るのである、本書には別本がある、何の爲めか知る由もないが、題名が四十八手後の卷の字を殘して、京傳居士談は何れも抹消されて居ることである、京傳居士談は、京傳の幽靈が話をするのに由來したものであるが、これ

を除いて「傾城買四十八手」の後編に粧ふて居る理由の判斷に苦しむのである、或は「傾城買四十八手」に後編の出づることを豫告して居るので、それを利用したのかも知れないが、それにしては、寛政二年から卄七八年餘の歳月が經つて居ようから何うかと思ふのである。

▲廓宇久爲壽（さとうぐるす）　原本　縱四寸一分 横三寸六分

鼻山人作　　文政元年刊

書名「廓宇久爲壽」は、本書が文化十四年刊の「籬の花」（本卷所載）の後編であるところから、それに困んで、斯く命名したのである。

作者鼻山人の傳記は、前編の「籬の花」（本卷所載）の項を參照ありたい。

刊年は序に「戊寅はつ春」の記事がある、即ち文政元年である。

本書は前編に於いては忠兵衛が腹立まぎれに梅川の心盡しも理解せず打擲して戻つた、その翌日忠兵衛は元の茶屋龜屋へ行き、舞鶴屋へ上つて舞鶴と馴染になる、舞鶴も梅川と忠兵衛との關係をしらないのではないが、忠兵衛の如在なさに遂に契る、忠兵衛も一時は意地張づくになつたもの丶十兩ばかりの借金が出來た、それに困つて茶屋龜屋へ來て居ると、梅川の新造梅

春が何とか元の様に和解させようとやつて來る、忠兵衛は昔の馴染の好しみに十兩ばかり梅川に工面を頼む、梅春は早速それを梅川に話して、忠兵衛に茶屋の拂ひをすまさせる、それにてもとの誤解もとけて和解するが、それは梅川が梅春をつれて、箕輪の別莊に於ける病氣保養の夢であると云ふのである。

前編に於ても一寸言及した事であるが、本書に至つて一層山東京傳の影響の多いことを知るであらう、後章の中に妓樓の晝の光景に就いて「有る無きまで顯れに知れる晝の世界錦の裏にくわしければ今更又いふも。くだなり」と逃げるかと思へば、本書の結びを箕輪の別莊に療養で引籠中、新造梅春に看護に付き添はれて居る病床に於ける梅川の夢とした事など、最も「倡妓絹籭」からの脱出の跡が判りとして居る。

本書は「倡妓絹籭」の生命とした梅川の實情描寫が矢張り中心をなして居る、京傳が「傾城買四十八手」（日本大系第七卷所載）に云ふ眞の手がこれである、しかし京傳とは比較にならないその脱出ぶりも何等新鮮味がないのである。

本書が最も特色とするところはその人情本味の濃厚になつた事である、「絹籭」による實情描寫は、本書ばかりでなく、他の作品にも尠からざる影響を與へて居るが、本書の如きは、既に

人情本にまで展開させる程の變化を與へられて居るのである、最初から前後二編に構想を立てた事等も、洒落本と云ふよりは寧ろ人情本と云ふべきであらう、只小本仕立と云ふ形式にからうじて洒落本としての範疇に入り得る要素を見出すに過ぎないのである。

本書は決して上作と云ふべき作品ではない、洒落本より人情本への展開期に於ける、好資料となり得ると云ふ點に於て、本書の存在價値が決定づけられるものであらう。

▲婦身嘘（ふみうそ）　稿本　縦五寸四分　横四寸

陶器家輪成作　文政三年刊

書名「婦身嘘」は文の嘘の洒落か。

作者陶器家輪成は、又墨之山人と號するが傳は詳かでない。序を書いた譯案の傳も未詳。

刊年は序末に庚辰の記錄があるから、本文中に出て來る杵屋勝太郎の記事等を綜合して、文政三年の庚辰であることには間違ひあるまい。

本書は稿本である、恐らく板下ではあるまいかと想はれる、惜しい事には序文に破れがある爲めに完本たり得ない事である、板本であるならば他に類書を見出し得る可能性も考へられる

が、稿本だけに其の望みの薄からざるを得ないのを誠に遺憾とするものである。

本書は深川描寫の作品である、内題の割書に櫓下妓樓とある、即ち櫓下の妓樓を對象として居る、これを鎌倉の世界に位置をとつた事は、演劇や洒落本の常套である、櫓下伊藏茂屋の二階では遊客里夕と遊女おなにとが對座して居る、おなには意氣消沈で居る、里夕が何うしたかと云へば、同じ家に居る遊女おでんの馴染客が、おでんを止めて私に出てくれと云ふ、然も今夜來て居る、それが苦慮の種であると云ふ、實の所は或一座の中で岡惚れした男を里夕に隱して呼んであるから、里夕を欺瞞してそちらへ行かうとするのである、これを色仕立のきたない奴と云ふ。喜兵衛と云ふ客が連傳吉と一緒に茸遊びに來た、一ト通り藝者を呼び酒事あつて扨床へ廻る、喜之助の相方をおはねと云ふ、馴染である、喜之助はおはねが金と云ふ男のある噂をおはねに訊すとおはねも覺えのある事だけに驚いたが、うまく喜之助をまるめて其の場を逃げる、これがうまくかゝれたばらあをいふ段である。夜宵の部は遊客勝五郎遊女おなゐを呼ぶ、おなゐは勝五郎に惚れた振りをして一緒に逃げてくれと頼む、おなゐは勝五郎と一緒に逃げて一ト先づ落ちついた上で、勝五郎に愛憎づかしをして色男のところへ逃げようと云ふ腹であるが、勝五郎はそれとは知らずに、おなゐの提議を眞に受けてあゝして斯うしてと相談する、これを手

こわいこつてりした段と云ふ。居續宵泊の段は、客六三郎は遊女お園と深い仲であつたが、お園は六三郎に無斷で突然福田屋淸兵衞と云ふ大盡に受け出された、六三郎はこの事を知つてすつかりお園に欺れたと誤解して、お園をばらしてしまふとせき込むだが、お園に逢つて理由を聞けば、自分の邪推と知れる、兩人は別れて暮すよりはいつそ死んだがよいと心中しようとする處を、福田屋淸兵衞に止められた、淸兵衞はかつて六三郎の父に世話になつた侍である。偶々江戶へ來て六三郎の行狀を聞き、不憫に思つてお園を身請けして六三郎に添はせてつまらぬ遊びを止めさせようとしたのである、これを聞いて兩人嬉しさに泣く、然しこれは兩人が同時に見た夢である、お船が出來ましたと迎が來た、これがはがねのまわくらであると云ふ。

本書は櫓下の世界に於て、四つの形式の遊客及遊女を描寫しようとしたものである、それが爲めに一貫した構想がない、止むを得ない事である、斷落ちを相談する描寫は他にいくらも散見する所であるが、本書のは先づよく描けて居る方である、背景は鎌倉の世界をもおりながら深川が可成よく活寫されて居る、それがあまりに穿ち過ぎたと云ふでなく、纒綿たる情緖を感受する事が出來よう。

お園六三郎の事は、寬延二年三月、豐竹座初演「八重霞浪花濱荻」の淨瑠璃で名高いお園六

三を使つたものである。大阪南新地福島屋清兵衛方の遊女そのと大寶寺町の大工六三とが西横堀にての心中、その日北の新地の遊女かしくが請出されて、天滿老松町で妾となつたが酒狂にて兄吉兵衛を殺して獄門にさらされた、又神崎にて駕籠舁十右衛門と云ふ者が數多の馬方と喧嘩して互に負傷して檢擧された、相次いで惹起された事件がこの淨瑠璃の内に取材されて居るが、本書もこれからの脫出の跡をはつきりと印して居る。

末期の洒落本としては、最も人情本味の薄い、典型の作品と居ひ得るであらう、又本書中にはめりやすが澤山引用されて居るが、これは他の作品の影響になつたもので、三馬の作品による所が多からう。

▲青樓快談玉野語言（せいろうかいだんたまのごげん）　原本　縱六寸 横四寸一分

玉齋笑馬作　文化七年刊歟

書名「青樓快談玉野語言」は「青樓怪談たまのごげん」の洒落であらう、玉と云へるは、本書が新吉原玉屋の世界を取材して居るからの緣語である。

作者玉齋笑馬は又花山亭笑馬、花山道人とも號す、尾張の藩士で文政四年の夏まで江戸新橋

附近に居住したが、其の後は尾張へ歸つた。

刊年は只午の春とのみで何年の午か判然しない、從來文政五年の午とされて居るが、それは取り入れられない說であらう、前に出したと云ふ「角鷄卵」の天明四年から文政五年までは四十年の歲月がある、廿歲の時に前書を書いたとしても本書は六十歲の時の發表にかゝることゝなる、又本文中に嵐冠十郞淺尾爲十郞の名が出て來る、淺尾爲十郞が九太夫の心底と云ふて居るところを見ると、これは元祖爲十郞であらう、淺尾元五郞の弟子で寶暦七年爲十郞と改名した、實惡が上手であつたので九太夫の役を演じて居たのである、文化元年四月七日に年七十にて歿して居る、その子が二代目を繼いだがこれも文化三寅年七月廿五日に享年廿八にて歿した、文政五年までに十七年もたつて居るので、新につき易い洒落本が引用するとは考へられない、結局文化七年年頃の作品ではなからうか、しかし尾張に居て著作したのだから、この位の用事の遲れて居るのも亦止むを得ずとするか、兎に角疑問は殘るので後考をまつとする。

本書の作者は述意の中に自らも云ふて居るところであるが、二醉亭佳雪と共に「角鷄卵」（天明四年刊、本大系第六卷所載）を發表した、この二醉亭佳雪は同書によれば月亭可笑であると云ふことになる、それは四谷新宿の作品である、これは吉原玉屋の世界を寫す、作者は「角鷄

卯」が世に行はれたによつて、契情買の美味を覺て今又一篇を著すと云ふて居る。

本書は三章から成立して居るが、その中第一章は客を送り歸した遊女等が客の噂をして居る光景を描寫したものである、次に二章から、こゝに正六と云ふ年頃四十斗りの男が花の戸と云ふ遊女を買つた、正六は花の戸が部屋を出る時、落して行つた文を色客からのかと思つて拾ひ讀みするとそれは花の戸の妹――深川に遊女となつて居る――からの手紙である、文中には母が病氣である、そこへ兄も病氣になつた、是非治したいがそれには拾兩の金が入る、私が三兩持つから、姉さんは七兩出して下さいと云ふのである、それを讀み了らうとする時花の戸に見つかつてしまつた、花の戸はつまらない自分の家庭の事など知られてしまつて面目ながる、正六は何かまふものかと深い同情を寄せる、花の戸は誰一人相談する人もないと云ふと正六はぐつと大きく自分が引受ける、そら七兩、まだ入るなら身で出來るだけの事はするからと云ふて渡す、花の戸は大いに感謝する、正六はしめたりと我意に靡びかせようとする時、花の戸は煙草盆を強く打つて會圖すると、禿が飛んで來て今麻布の親許から急用と云ふ使が來た、と云つて花の戸を呼び出す、花の戸は猪三郎とて深く契つた男がある、それが家をしくじつて寺へ預けられて居るが、今夜玉屋へ來て居る、花の戸は其の部屋へ來た、猪三郎が家の首尾もなほら

す金に困つて居ると云ふので、正六から貰つた七兩の金に三兩を足して猪三郎に渡す、そして實は斯うして手に入れた金だと由來を話す、それを花の戸が何時迄立つても來ないいに待ちくたびれて、小便をしに行つた正六が戻りにこの話を立聞ひてせきこみ、花の戸と猪三郎とが居る部屋へ飛込む、が猪三郎の顏を見ると、すぐ障子ぴつしやりで飛び出した、それは猪三郎の家の番頭正六であつたからと云ふのである。

本書の構想は纒つて居る方がある、親の病氣を種に客から金をせしめて、色男へ貢ぐ手法は從來しばしば用ゐられたところである、しかし姉妹二人が遊女になつて居ることは、本大系第一卷所載「跖婦人傳」の夜鷹お跖と吉原で遊女をして居る青柳とが姉妹であること、及び「妓娼精子」(本卷所載)の此糸、お宮を姉妹と云ふ以外、あまり出合はさない點である、斯うした事實は可成り澤山あつた事であらうが、取材されて居るのは尠いのである。

金をしぼられたのが番頭で、金を惠まれたのがその主人の若旦那である、と云ふのも少からず面白い對照である、作者の茶氣を窺ふに足りるであらう。

作者は述意の中に「江戸ッ子の口眞似すれとも片言不通尤多かるべし」と書いて居る、實際尾張の人であつて見れば、言語の上などにもその訛が出ようが、斯く云ふ裏には江戸ッ子に負

けるものか、と云ふ強い信念のあつたらうかとも、感受されないわけではない。

▲玉菊全傳花街鑑(くわがいかゞみ)　原本　縦五寸七分　横三寸八分

文政九年刊

書名「玉菊全傳花街鑑」は本書が玉菊の傳を記したものであり、玉菊の行動が廓の鑑であると云ふ意味から名附けられたものである。

作者の明記はないが從來東里山人の作であると云はれて居る、本大系に採用したのは再摺本である、私が嘗て原本を所持して居た事があるが、賣つてしまつたので今何處へ行つたか尋ねる由もない、比較的數の尠い作品である、元摺本には東里山人の署名もあつた樣に想はれもするが、その時は深く注意しなかつたので判りとしない。

刊年についても從來文政五年と云ふが、本大系採錄本には「文政九丙戌年正月發兌」とある、只今は止むを得ず採錄本に從つて文政九年刊として置く。

本書の元摺本は上中下三冊になつて居る、内容は上下としか分れて居らぬが、下の方が紙數が多すぎるので、それを二つに分けたのである、場所はこれ亦判然としないが、何でも章によ

つて分られては居なかつたと思ふ、元摺本の三冊に分れて居た事は、全部元題簽の存して居た記憶が明かであるから間違ないのである、扨本大系採錄本は一冊に纒められて居る、紙質と云ひ摺の跡と云ひ再摺本に相違はない。

玉菊が洒落本に取材されたのは、既に安永九年刊、南陀伽紫蘭作「玉菊燈籠辨」（本大系第四卷所載）が發表されて居る、其の他には山東京傳の「近世奇跡考」、山崎美成の「遊女玉菊考」等の著述がある、芝居にも上演されて居る。本書は玉菊の全傳と云ふところに「玉菊燈籠辨」と異なるところがある、即ち全の構想は、上野池端の水茶屋の玉藏夫婦が子供がないので願掛なぞして居たが、或日淺草觀音で女の子を拾つた、迷子札にて兩國柳橋新道家主緑右衛門店の屋根介の娘と知れたので、送り歸さうとするが何うしても嫌ぢやと云ふ、玉藏の知らせで屋根介が來た實は、屋根介は下總佐原の生れのものだが庄屋の娘と駈落ちして江戸へ出て、二人の間に出來た子供がこの娘であるが母は去年の春病死した、後妻をとつたが鬼女で娘を折檻ばかりするので家へ戻るのが嫌と云ふ事が分つたので、玉藏夫婦が子供に貰ひ受けた、其の後成長して見世へも出してあつたので、瀧三郎と云ふ青年と仲好く成つた、が悪疫流行して瀧三郎が病床に居る間に玉藏夫婦も他界の人となつた、瀧三郎が全快して來て見ると生き殘つた娘は叔父に伴は

れて行つたと云ふ話、瀧三郎は友人幸之介から、その娘が吉原で玉菊と名乘る遊女となつたと聞いて、早速出かけて行つて馴染む、元々戀人同志の間柄であるので深く契るに至つた、玉菊は戀人の關心を買はんと瀧三郎が好きと云ふまゝ立派な茶杓、蓋置、茶碗などで二百兩ばかりの借金をした、それを延壽と云ふ客から金を貰つて拂はふと工夫する、しかしその延壽は瀧三郎の親が若し玉菊が貞節な女なら息子の嫁に身請するから、一つ調べてくれと云ふ事を番頭の堅兵衛に賴んだ、堅兵衛から延壽へと又賴みされて居たのである、玉菊は是非金をせしめんと瀧三郎の彫物まで消すので、これを聞いた瀧三郎は大いに立腹して切れてしまふ、玉菊は元々そんなふしだらな譯ではなかつた、元は瀧三郎を愛すればこその問題であるが、その人にも切れてしまへば詮術べなし、と書置を遺して遂に自害してしまふ、その貞節に感じて玉菊の追善の爲めに燈籠が立てられると云ふのである。

　洒落本に於て遊女の生立の物語られることは尠いのである、本書の構想の立て方は全く人情本としての構成である、本書は實情描寫によつて人情本臭と云ふのみでなく、この組織に完全な人情本としての本質を見るのである、然し作者は人情本としてよりも洒落本としての方をより多く意識して描寫して居る、洒落本から人情本への展開が際立つて居るのに氣付くのである。

本書は鼻山人作「籬の花」その後編「廓宇久爲壽」の影響を受けて居る、作者が東里山人、即ち鼻山人と云ふのであるから本書が前二書と作風の同じいのも無理ではない、本書に於ける瀧三郎が玉菊と切れて腹癒に筋向ひの類松田屋へ行つて、半蔀と云ふ遊女と馴染んで漆膠の交りをするのは、「廓宇久爲壽」の忠兵衛が梅川と別れて舞鶴屋の舞鶴と契るところの脱出である、玉菊を死に至らしめたのは、燈籠に結び付けんとする爲めの結果で、膾炙された事件だけに夢に結ばれなかつたのである。

本文中に新板の洒落本と稱して「契情胃傳受の卷」の記事が出て居るが、何人の作か未詳である。

ミなせへ來年の草ざうしが。今頃、出るやうに成ちやァ。正月松過に。雛さまをたてねへけりやァ。ならねへ勘定になりやす。

とあるがこれは當時に始つた事ではない、既に數十年前から、草雙紙の定期發行が暮に行はれて居るのである、それは、或種の草雙紙はお正月の讀物としての役割を演ぜしめられて居たれて居るのである、それは、或種の草雙紙はお正月の讀物としての役割を演ぜしめられて居た今日雜誌のその前月に出る事を以ても推測し得るのである、三月雛にしても今日も二月初めから賣つて居るので作者の云ふた通りの勘定になつてしまつたのである。

本文中に風邪流行の事があるが、これは文政四年二月中旬から流行し、賤民へは御救米錢を賜はつて居るのを指すのであらう。

一　青樓女庭訓　原本　縦五寸四分　横四寸

鼻山人作　　文政六年刊

書名「青樓女庭訓」は青樓に於ける女への教訓の意をとつたのである。

作者鼻山人の傳記は、本卷所載「籬の花」の項を參照ありたい。

本書は「倡客穴學問」(享和二年刊、本大系第十一卷所載)の後編である、「倡客穴學問」は十返舍一九の著作であるが、本書には執筆しなかつたのである、何故であつたらうかと云へば、一九が洒落本に筆を執るを遠慮したが爲めであらう、この事については本卷所載の「夜鄽行燈」の項を參照ありたい。

本書は又三郎が茶屋芳川屋から三浦屋の見さきのところへ馴染んで通つたのが、先輩共洞との交際で、茶屋藤田屋から千歳屋の常盤路の許へ遊んだのが元で馴染む樣になつた、又三郎は意志が弱いので鄽の法則をも犯して兩方へ通つた、或日芳川屋の若い者と三浦屋の若い者とが

千歳屋へ又三郎を貰ひに行つた事から、悶着が起きた、芳川屋の與六が仲へ入つて又三郎を一寸三浦屋へ借りて行つた、常盤路には直ぐ返すからと云ふ約束であつた（前編）が又三郎は家へ歸つてしまつた、與六は家からの急用であつたと常盤路に諒解を求めた、又三郎は父を松戸屋又兵衛と云つて神田に居住する有徳な町人であつた、十二の時から淺草天王町の井出屋四郎兵衛へ奉公に預けられて居たが、遊をおぼへて三百五拾兩も費ひ込みをしたので、親許へ返されてしまつた、親元の方ではお笥と云ふ嫁を持たせたが、心學なぞをだしに廓通ひを止めぬので、二階住居にさせられてしまつた、又三郎の家にかつて召使はれた女が、神田の首尾の緒と云ふ水茶屋の女房になつて居るのを使つて廓から内通して來る、千歳屋に置いて來た紙入も歸つて來た、それには見さきと、常盤路とからの手紙が入つて居た、それを見た又三郎は女房お笥をおためごかしにして兩親に忍んで廓へ遊びに出るが、お笥はその紙入を見て自分の欺れたのを知つて鬼女の様になり、吉原さして出かけようとすると云ふのである。

本書は上下二冊より成つて居る、それが春夏秋冬の四季に分られて居る「倡客穴學問」の結末をつけようと試みたのであらうが、二冊を費して猶解決されない、これは描寫法の問題である、人情本臭味が濃厚である、そこに無理がある、本書は洒落本と云ふよりも人情本と稱する

方が適切であらう程の作品である、從來洒落本には描寫される事の尠い方面、卽ち遊客の家庭の事どもを對象にして居る、これが大部分をなして居る、所謂人情本の世界の取材と云ひ得るのである、未解決に終つたが爲めに「靑樓未明草」の刊行を卷末に廣告して逃避して居る、從來の年表によれば、文政八年に刊行されたと稱して居るが未だ見て居ない。

本書は甚だ冗漫である、構想の展開にも興味が薄い、女房お管の心情と、戀に引かされる又三郞の迷とを對照して、靑樓の女への敎訓を描寫せんとしたのが主眼であらうが、何等迫る力がないのである。

本書其の一の卷末にある「倡婦肝潰志」は文政八年に刊行されたと從來の年表にある、これは後に人情本に改裝された、これ等を以てしても旣に洒落本と人情本との區別が明瞭を缺く樣になつて來た、やがて鼻山人が人情本作者として立つの日が近づいて來たのである、この作者が最初洒落本を出したのは「籬の花」と其の後編「廓宇久爲壽」とであるが、それで得た人氣が精進せしめる刺戟となつたのであらう、本書の構想は、文政五年刊「花街鑑」（本卷所載）のそれと似寄つたところである、家庭の問題をとり入れた點がそこで、作者の興味の然らしめるところであらう。

▲傾城情史　原本　縱七寸四分　橫五寸二分

闘亭京鶴作　天保二年刊

書名「傾城情史」には他意はあるまいが、或は、「傾城情死」の洒落かとも想はれる、中華の韓放曹、日本の弓削道鏡の二靈より、大客なる一書を賜はつたのに和文で註を加へ、それを更に傾城情史と名けたのである。

作者闘亭京鶴は京都の人である、山月庵京鶴、山月庵主人、鶴山逸人、隔梅散人等の號がある、「嵐峽花月奇譚」（天保五年刊）「四谷怪談」（天保六年）等の著作がある。

本書は漢文體と和文體とで書かれて居る、恰も明和七年刊、茶釜散人作の「一蕩子笑枉解」の形式である、それは唐詩選を遊里の事に關して枉解したものであるが、本書は遊里の事を先づ漢文體で書き、次いで和文體で註釋を加へたものである、これに付いて作者は云ふ「總て此書の文倭にあらず又漢にあらず按ずるに中華と本朝との二神よりして授りしものなればかくやあらんや」と、蓋し作全體をこの形式で押し切つた事は、末期の作品には異色とする所である、初期の頃には和漢混合の描寫法が盛んに行はれたのであるが、澆季の時代に於ては全く珍

しい現象と云ふべきである。此書は百年先生の經典餘師にならつたと屏に云ふてる。

本書の内容は、先づその内題から見る必要がある、曰く、大客、曰く酒氣章句と、大客は大學、酒氣章句は朱熹章句の洒落であるが色欲と讀むなとも洒落て居る「酒酊子曰大客古之妓書而云云」とあるも、朱程子の洒落に外ならない、この諧謔が全作を一貫して居るのである、漢書のもぢりや洒落によつて、遊里を對象として滑稽描寫を試みたのである。

斯く試みられた滑稽描寫も、その内容は第十章に細別されて居る、第一章は眞實を明にする事、第二章は客を引く事、第三章は人情風俗、第四章は姉女郎が妹女郎に傳授する事、第五章は勤する事を記すのであるが今はない、第六章眞實の無い事、第七章は心を奪はれるを愼むべき事、第八章虚を推察して情を知る事、第九章は妓と妓の接る所以の事、第十章は市中と廓中の事を穿つて通を以て色とする事となつて居る、而してこの十章も前四章は床盃の如く、後六章は三三九度盃の如しと云ふ　尚第五章は愼むべく、第六章は恐るべきを云ふ、これを註釋には、床盃は綱要と記し、三三九度は重ね〲詳述したものとある。

諧謔によつて表現されたものゝ細緻な穿ちのあるのが本書の特色である、又云ひ盡し難き所を、諧謔や、川柳によつて補足して居るのも如在なき手法である。

本書は遊客の爲めに書かれたものである、遊ぶには通を以て遊ぶべきである、その通たるには先づ本書によるがよいと云ふ意識下になつた作品である、即ち序の中に「願クハ遊ツ斜セ郎ノ請、焚レ香讀-了レ之、得レ觀ニ彼ノ龍ノ之形一、免ニ其ノ害一矣」と云ふて居る、容易に著作の動機を把握する事が出來得よう。

▲竊潜妻（滑稽粋書）　原本　縦七寸五分　横五寸三分

盛田小塩作　文化四年刊

書名「竊潜妻」は手生けの花の洒落である。

作者盛田小塩は京都の人で大原に居住した、又大原舎の號がある、「完義武逸傳」（文化四年刊）「石非物語」（文化五年刊）等の著作がある。

刊年は序末に寅の初冬の記錄と、卷末に文化四卯正月成刻の奥附とがあるので、文化三年に稿が出來て、文化四年に發刊された事が知られる、從來の年表には天保三年の刊行と稱して居るが、それは再摺の時のとの混同による誤謬であらう。

本所は京都を背景にした作品である、上下二冊に分れて居て、形式は半紙二つ折り本と寸伸

ご美濃四つ折りとの二種類ある、然し板本は同一である、寸伸ご美濃四つ折の形式のものが再摺で、半紙本のが原摺であらう。

本書の内容は、これを洒落本の本格的部屬とするには、些か躊躇するのであるが、變格的なものとして採錄した、扨この構想は、上卷は哥妓情を描寫したものである、即ち哥妓のお菊と云ふのが、里橋と云ふ旦那に根引きされて妾となつて居る、其の妾宅へ里橋のとりまきやお菊の知人が來てからかふ、旦那の里橋やその友人嘉吉が暫く來ないので、からかはれるとは知り乍らも不安がつのる、そこへ嘉吉が來て里橋が家で不首尾となり、坊主になつたと注進する、お菊はそれを聞いて自らも其の跡を追ふて髮を切る、然しそれは里橋の女房たるべき女が死んだ後、仲々氣に入るのがないので延々となつて居るから、嘉吉の計ひでお菊の心底を見屆けて本妻に仲人しようとしたのである、下卷は妓婦寶で、貧を學ばうと江戸を離れて、京都知恩院古門前にさゝやかに居住する秋風を云ふ男、諸拂ひが出來ず年の暮を越し兼ねて居る、大晦日に及ふでも趣向がつかぬ、思案投げ首で居る所へお露と云ふ深く契つたます本屋の遊女が訪れて來た、掛取には晩に來いと斷つてある、秋風は堪え兼ねて外出してしまふ、留守を預つた治助と云ふ男とお露とは何うしようかと工面する、お露は自分の身につけて居る物を質屋へやつ

て金をとゝのへる、それにて拂はすました、時を見計つて秋風も歸つたが、明日から出られぬお露の事が氣になる、その折柄江戸の實家から金が屆くので、お露の入質した物を受け出して目出度元旦を迎へたと云ふのである。

本書は非本格的作品にしても、寧ろ滑稽本と云ふ感じが濃厚である、然しお菊にしても、お露にしても、何れも流れの者であり、それ等が眞實を盡すところに、全然滑稽本の範疇にのみ入れ難い所があるのである。

洒落本の中に妾宅の取材されたのは、比較的尠い、山東京傳の「古契三娼」（本大系第六卷所載）梓川子の「嘘の川」（本卷所載）柳亭種彦の「山嵐」（本卷所載）等がその主なるものである、本書も斯種の作品として珍本に屬する物である。

▲意氣客初心（いきやくしよしん）　原本　縦五寸九分 横四寸

山月庵主人作　天保七年刊

書名「意氣客初心」は序に「著二這書一。更名二意氣客初心一。爲下使二初客一至二意氣一助上」とあるので由來が知られる、或は「糸竹初心集」にでも因めるか。

作者山月庵主人は闇亭京鶴と同一人である、その傳記は「傾城情史」（本卷所載）の項を參照ありたい、校正をした吳鶴巣主人、序を淸書した碧巖園主人、山月庵主人の門人半月、跋の大和の欲若も共に傳が詳かでない。

本書は上下　冊に別れて居る、その內容は易書意氣と云ふを借りて、意氣になるべき注意を古法によつて表現したのである、古法によつて描寫された作品は從來尠くはない、「浪花色八卦」（本大系第一卷所載）、後編、「浪色今八卦」（本大系第二卷所載）三編「浪花今いま八卦」「艶古與儀抄」、「擲錢靑樓占」（本大系第二卷所載）等がその主なる物である、然しこれは何れも天明年間以前の發表にかゝる物ばかりで、其の後久しくこの系統が絶えて居た、ほゞ五十年目位に本書の發表を見たのである、そして本書は「浪花色八卦」の系統を忠實に繼いだのである、「浪花色八卦」の二編、三編にも見られない算木の手法が、「浪花色八卦」の形式と同じく、本書に試みられたのである、「浪花色八卦」は浪花遊里の描寫であり、「擲錢靑樓占」は遊客、遊女、其他の描寫であつた、本書は身の廻り品々の描寫で、前二法に見逃されて居た方面を、補足する事が出來たのである、其の取材された品々は、煙管、短冊、撥子、物差、羽織紐、三升紋、日傘、髪差、扇子、線香、鐵醬壷、髪剃、楊枝、小柄、髪添、脇差、富札、火箸、

風紐、紅筆、釘、千草結、鋏、燈心、掛物、針、尺八、蠟燭、草履、巻莨、文章、楊子等である、以上三十二形ある、六十四形の草稿が出來て居るが後編に讓られて居る。

附錄に手相が出て居る、これも「浪花色八卦」等に用ゐるられた手法の模放に過ぎない、八種類に分れて居る、其の二つは亭主と女房を云ふこと、其二つは盃の持ち方、其の四つは拳の法である、矢張り意氣を以て主眼とすることには變りはない。

意氣に〳〵と云ふのが本書の目的である、野暮を意氣に仕立つべく心組んで、本書が物されて居る、然しこの意氣を說くに當つても、努力されて居るのは諧謔を入れることである、表現方法がこの古法を用ゐた事だけでも、「浪花色八卦」其の他と同じく滑稽味を釀して居るのである、然るに、本文描寫に當つて一事物を凡る方面より論じて居る、その論法に可笑味を感ぜしめられるのである。

本書は「浪花色八卦」其他の如く、遊里を對象にした作品ではない、然し或部分は遊里に關係を持ち、形式上の類似の點もあるので、變格的作品に屬するものとして採錄した。

當世雲の川

当世嘘之川序

聖賢の教は堅く佛菩の因果は遠し伊勢源氏の物語はこと葉優に艶しといへとも久方の雲井はるかなれはからかねの土めけるは更にして粋てふますらおの耳にもうとからむかしされハ壬生の狂言空也の踊躍は凡様の目を遊はすの方便をもて勧善懲悪の理を示せとも寝られぬ夜半の伽にもならねはこたひ嘘の川と題してうその啌ならぬも誠を述老らくの寐覚を慰めうらわかき人の戒ともならんかと筆をとりしハ

粋川子也

梅松山人書

それ粋か川てふむた書をものせしもはや廿余年の星霜をへたり誠にきのふの少年はけふの白頭にして今は老のむかしかたりとなりけらしされやことし書肆何かし又もやかゝる今やうふりを毫しくれよと需められけれとなとか花街青楼にうとき老の身のなすへきわさにあらすとひたふるにいなみ侍れとあへて需めけるにそ今のわかうとらに聞およひにしあらましかいつゝりて倘いさゝか善のはしをもかいそへしはこれなんけころ流言に述る耄てふものなるへし

粋川士とやら　自序

當世嘘の川巻之一

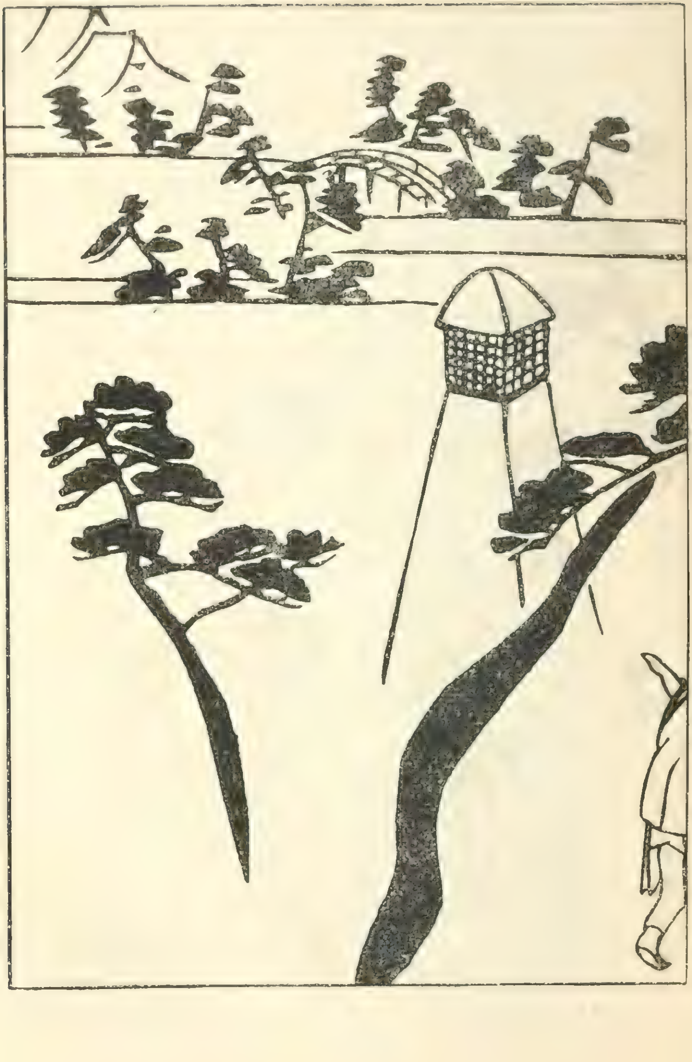
他所行

駕かりて淡路へ乗らん汐干哉とハ中むかし何某とかや云る俳人の發句てふものしけるとぞ。恐げなる千尋の海もたちまち平砂に小貝を拾ふしほひの一群。こゝに霞ミかしこに朧なる沖の氣色。實住江の春なりけらし。此日の賑ひ遠近の貴賤うち群遊興したる中にも。都の花の誰くとを連ひ夜の舟路に旅寐して終日醉を催す京師の遊客。漸春の日も西に傾く比各うちつれ浪花の日本橋近き辺に止宿して支度とり〴〵なる折から。船屋がおひ〳〵のしらせにとりいそぎ。河六の濱へ來て見ればはや乗合もぎつちりつまりし艫片間かり切にて。八百佐蒲團を敷ならべし處へめい〳〵乗うつれば白き中衆前だれした歳ばいな男が【河六】艫の間の御揃ひなされましたかナ【ともの間】よいぞ〳〵【河六】ハイとなたも御きげんよう ト聲を相手に[illegible]さし出すトとものまから手ぬぐひをかづきし[illegible]〳〵な[illegible]【中居】船頭さんちよつと待ておくれ今買物に徃た人があるわいナ トいふうちはや[illegible]ハ[illegible]けんさき[illegible]出る

アレどふしやうそいなまつておくれいナ〳〵 トはじめて御忌の山門へあがるやらにわめいているトおもての方から 「水主」エヽかわら屋橋まではしらさんセいの トいひながらかまわずさしのぼすほどなくふねハ道とんぼりを東堀へまがるト西がわのはまから 「廻し男」ヲヽイ〳〵河六ぶね〳〵 ト花色うらの毬奥の布子に黒いしまなゝこの帯竹馬仕たての花色ぱつちびんろうじのうんさいのつゝながのたびしりからげおりいろの半合羽びろうどの三寸ゑりて拭かたに引かけた廿四五なおとこがかわらやばしのはまへおりて わめいているせんどうこゝろゑふねをさしとするとかの男あやしき土で拵へたろ丸きめの左手に持ながら これハ大きにおじやま トいひ〳〵小べりえつたひとも間のねとまの間へはいるふねハだん〳〵東堀をさしのぼり大川へ出るトどらのまさしてゐるかこがとも間へこかしかけたはしらをおこしかけて 「水主」ともの間のふろしきつゝみをとつてくだんセ 「廻し男」おつとしよ トてんじやうの櫓にくゝりつけたふろしきをつりなをすト水主柱をおこしくゝり付る 「げい子小つゆ」ヲヽうれし是で髪にさわらいで能なつた磯江ゐこちらへよりんか 「いそへ」ほんにひろう成たナそこへいかうかいナ 「たいこ持のち八」いそへゐンあそこハてつぽうのねきで暑ぞへ 「いそへ」ヲヽいやふろじやといふちやりかハ ト居なおらふとする 「中居」ソレいそへゐンかうがいじや 「いそへ」おつと トくびをひねりて居ゐる 「中居」鳥孝ゐン何さがしなされます 「客鳥孝」たつた今のんでゐた煙管が見へぬ 「のち八」大かた今いそへゐンのおいどに付て往たのであろう 「いそへ」嘘とこにイナ トミなすこしひてる 「のち八」そんたら小露ゐン 「小つゆ」イヽエこゝらにハないじや 「のち八」アノ磯江ゐンも 「いそへ」ヲヽひつこ 「のち八」すりやいかやうにゆつても トちよつと新九郎がこはいろをいふ 「小つゆ」ヲヽしんきわきを尋て見イナ 「のち八」おいとしゐやとあいけうある トかたくからそこらをたづねる 「うこう」ないか〳〵 「のち八」何ほ

う埒ましても其答じやげにござります【うこう】其答とハ【のち八】しらぬ／＼しらぬ／＼

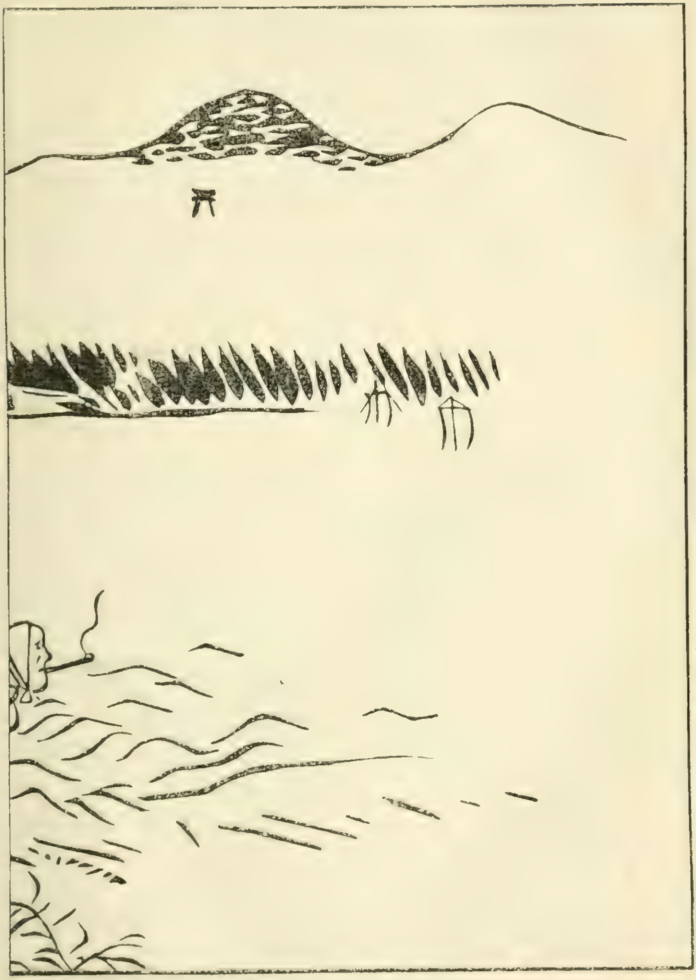
トしりのあたりへ手をあてゝいふ【廻し男】お吟どんおまへのすそにツレ【中居】どこにイナトたゞむいてほんにこゝにゐつたわいナ トきせるをだすきやく取て【うこう】おぎんがくつつりと尻であたゝめてくれた【中居】わたしやいやいな大きにしつれい【のち八】モシ御りやうけんなされませおいどで煙草のんだ云わけじやによつて尻口が揃てござります【うこう】ハヽヽヽ【中居】大きらい トのち八がせなかをひつしやりたゝく【のち八】時にたれも一盃いきたい物じやが彌助こうりよぐはいながら徳利と猪口を一寸とつてくらつい灯じや トとまのうらにつりしたばねのしのもんのつきしゆとはりのしんをなだきできる【廻し男】のち公ンぶつうおもいぞ トとつくりとちよくをさしたすをおよびごしにとつて【のち八】ありがたく旦那どふでござります【うこう】イヤ最晝のがさめかや【のち八】たつた一ッもし トちよくをさし出す【うこう】いやもう ト顔をしかめかぶりふる【のち八】しからバ雨姫權ハナ トちよくを出す【小つゆ】いやいな舩にのるとナア【いそへ】サアむねがもや／＼しておまへもか【小つゆ】いつ向わるいわいナ【いそへ】サア見んか此間から來る風 トゑりを引つけふたりもたれ合【のち八】もし此事ハどてせうナ トやはり猪口をつきさしいる【小つゆ いそへ】どふなとしいナ【のち八】御返事かへ トこれにかまはずふたりはゑんにこしをかけならふてゐる そつたれ【うこう】ヲツ ト後ハ川じやぞ トちよつとせなかへてをあてる【のち八】どつこいからだれはまつでも是さへはめにや能じや ト徳利をかゝへる【うこう】違なし／＼それがのち八が

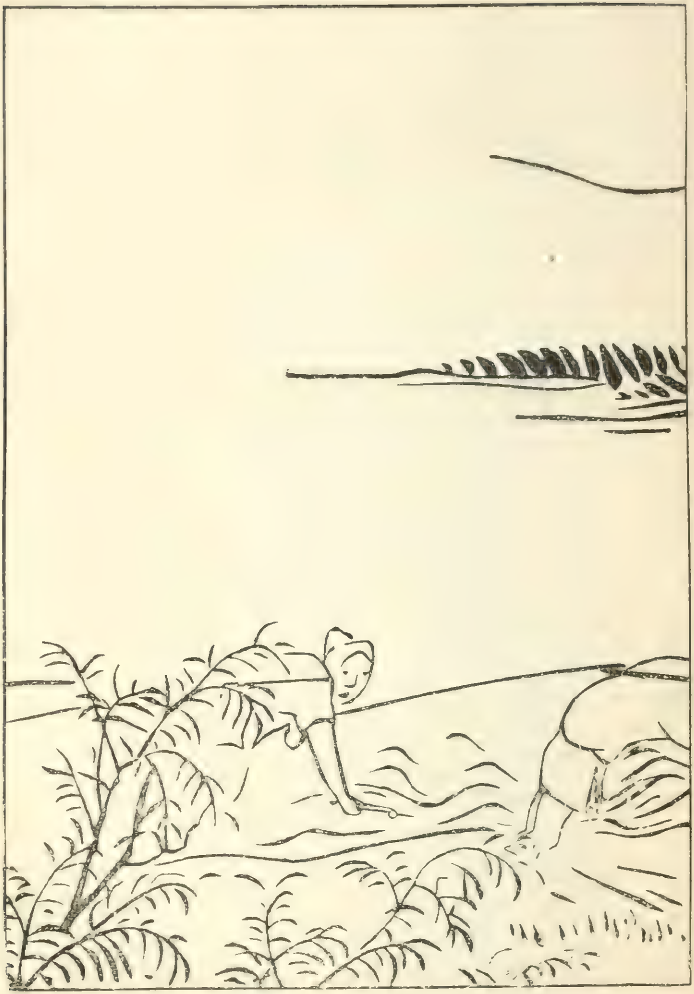


空吉の河

命じや【のち八】ハイたとへあいら二人のいてもこれハのかれませぬ【小つゆ】ヲ、なめアノ顔見んか【のち八】へ、何ぼうこんな顔でも追付のちゝ〳〵はやうじやわいな〳〵とわしなセゝり起さうがな【いそへ】ヲ、さゝなアレきゝんか何のために【のち八】へヱこれで　トさいぜんのほうろくを見せる【うこう】ハ、、、、、こいつハゑらい穴じやハ、、、、【中居】なんでもよういふ御方なアホ、、、、【小つゆ いそへ】何ぬかしくさるやら　ト兩人顔を見合しふつとふき出し　ホ、、、、、【うこう】ふたりながらまけおつたハ、、、、【小つゆいそへ中居】ホ、、、表の間にて【のり合】とかく道頓堀の船に乘るとあんな乘人ばつかりてよつひとねさゝぬて　トぼやくをのち八きゝつけいそへ小つゆの袖を引て表の間を顔でおしえる　【いそへ】そんじやてゝおまへがいろ〳〵の事いふてわらはしじやないかいナホ、、、、【のち八】シイ〳〵【小つゆ】いつたいめんめが惡わいなホ、、、、、【中居】もう笑ひないナホ、、、、【うこう】東西〳〵【のち八】小聲にて彌助こう徳利なりで火燗こうじ　橘とくらいしたいが【廻し男】待なさい炭つごか【のち八】ツリヤい勢の津しや【廻し男】ヱ【のち八】ハテまちどをな元日の上下としてこまそ【うこう】れいしゆハふるいぞ　【のち八】南無三忠臣藏の茶屋場じや【小つゆ】れいしゆハおらぬかも久敷物ナ【のち八】ドツコイ發心した熊谷じや【いそへ】是もあつたぞへ【のち八】東西〳〵【うこう】ヱ、れいしゆ坊か【のち八】コリヤ叶はぬ【うこ

う】あやまるか〳〵【のち八】何の此位な事で（トあたまをなでながら）さうじやヒウドロ〳〵じや【うこう】サアこいつハゑらい事云出しおつた【小つゆ いそへ 中居】ホンニなんじやいナ【のち八】何とどんな物じや【うこう】あやまり〳〵【三人】ヒウドロ〳〵とハヘ【のち八】ハテれいこんと云事じや【三人】とハ何の事じやいナ【のち八】ハテヒウドロ〳〵ならさしづめ靈魂といふ事かい【うこう】何じやれいこんじやれいしゆれいこんハ、、、、、コリヤいつこないハ【三人】いつこ阿房らしいナホ、、、、、【うこう】ハ、、、、、【中居】ホ、、、、、【廻し男】ハ、、、、、、【のり合】けれう舩ならこそ長屋なら家明付まする【のち八】シイ〳〵【ともの舩頭】とものまの灯を消てくだんせ【中居】アレ灯を消といナ【うこう】イヤ〳〵灯を消たらのち八がどこへはいふもしれぬ【のち八】イヱ〳〵わたしがそこらのおかたがはふてミへます【小つゆ いそへ】アノ口きゝイナ（トきのふがんくびを顔へつきつける）【のち八】ヲツトおまへかたの事しやないツレ共ふとんをそろ〳〵と（トミなたちどめ）【小つゆ いそへ】いやいナ（トふとんをむかふへつきやる）【のち八】といふて後の用意した物じや（トふとんをからだにひんまく）【舩とう】ヲイヽものひかしやまにたるけしてやらんせい【中居】のち公ン舩頭公ンがやかましいとふぞしておくれいナ【うこう】お吟舩でどふぞしてもらふと縁がきれるぞ【中居】いやいなてうちんの事でおます（トいひながらかづきしてぬぐひをとりてちやうちんのおほひにかけんとするひやうし弓がはづれてほつたり落てきへる）【うこう】ソリヤおぎんがとふぞしても





らぞと思ふて狂言かきおつたぞ【中居】いやいなゆミがはづれてきえたのでおます彌助どんそこから火をかつておくれんか【うこう】イヤ〳〵是を幕に雷子が景物とセう【のち八】コリヤ且那大あたらしミとミへまする【うこう】違ふはいの【のち八】シテ雷子の景物とハ【うこう】すぐね太郎なんとどんな物じや【のち八】ハア時にもう寐るがよいナ【小つゆ】おまへハずつとあつちへ往てねヱヤ【のち八】ずつとあつちへいてねると船頭衆の茶をわかしてやらにや成ぬ【小つゆ】【いそへ】なんのいナ彌助どんと一處にねいナ【のち八】それじやかの物を取てあげる勝手がわるいぞヱ【いそへ】知らんわいナト 兩人おなたまへに廻しよこになり ヲ、きうくつ【小つゆ】サイナ【うこう】とかく磯江や小つゆハ帶したなりに寐つけてゐるよつて【いそへ】なんとしましたへ【うこう】グウ〳〵 トたらいびきする 【のり合】ア、嬉しやどふやらかふやらねおつたさうな トのち八もふつとふき出さうとして

【のち八】グウ〳〵 トめい〳〵ころびねのくりまくらたらぬもたびの一興に前後もしらず此うちおもての間にハおちこちの旅人のり合のはなしたえまなく奥州のなまりハはなに入てめんよう風がハやるといへば・惣髮にこんもめんの長かつばきたのりやハが鼠なきしていたるゝめきついまちがひやう〳〵船中ね入しづまり何の旦那しゆ〳〵の聲もしらねばともの せんとうがはやうしてやらんせ〳〵のせわもなく折ふしとまもれて首すぢへひやくろくろがねのおとギリ〳〵〳〵とますれる川やなぎが與ハ〳〵〳〵

トかねのたらぬ大三十のやうなわからぬ事のきこへけるはや春の夜の明わたる頃淀の小橋さしのぼり

【船頭】きははるぞ〳〵 又つな塲へかゝるとおひ〳〵のぼる三十石のふねあれバ古舟あり人船あれバ五人水主の魚ぶねあり思ひ〳〵にさしぬけさしおくれ大坂六十いくはとかづおち給ふ所ハよどづゝみのまんなかあとよりさしぬける卅石小べりと小べりすりあふて二さうならんだ所がたがひに船中めいさめどきとなりのともの門からふつと見あはす顔と顔 【おらん】いそへ衆ン小つゆ衆ン〳〵たりたかいナ【小つゆ】おらん衆おまへも汐干かへ【おらん】さうしや

おいナ「いそへ」ねつからあはなんだナ「おらん」さいナア三原熊かへ「小つゆ」イヽヘ万幸じやわいナ「おらん」ムゥ渡橋公かへ「いそへ」イヽヱウル公じやわいナ「おらん」サアウル公ンじやないかいナ「小つゆ」イヽヱそのウル公ンじやない烏孝公ンじやわいナ「おらん」そふかいナお吟どんお幸公ンもかへ「中居」イヽヱ來てじや筈であつたけれどナ「おらん」又れいの積氣かへ「中居」サアそれで「おらん」久敷ものナ「小つゆ」ホンニひさしい物の次手おまへあふてきたのであろナ「おらん」なんのマア「いそへ」うそ〱「おらん」何のそんな間いないもセん物「小つゆ」ようかくすおかたナ「おらん」なんのしんでほんにわしよりおまへ恐悦じやある「小つゆ」なんでいナ「おらん」東へ引越がくるげな「小つゆ」コレ大きなこへしいないナ「うこう」どふやら聞たやうな聲じや　トいへすりながらあたまをあけるトふねハ左右へわかれる

當世嘘の川巻之一終

當世嘘の川巻之二

風呂屋

苟日新日日新又日新とハふろやの業殊更朝ゆふ洗ひミがきしげき遊さとハさらなりいものゆどたの軒の數松ゆさくらゆ大和ぶろ藥ゆの朝煙またねてゐるうちから二日醉の幇間がとを敲て入にくるより夜ハ夜半すぎるまで入くる人絶まなくいかに所からなればとてかんさらしの奴でさへ裸で道中がなるものかとうたひしに姫御前のミで門中をゆかた一まいわんはくな風が吹たらうその邊までミへさうなものよしミへてもいとひのなきハどふで追付裸に成といふかくごなるべし死にゆくミにも恐し火のこへと近松がかきしが愛らしとハ失たる人心投錢取ばにハあるじ毘須りめきたるかうざに上りてはき物衣類の氣配顏しら浪のやうな人がくるとコレ兄さん拾三番があいてあるおまへのも入て置とハ商賣功者共はたにゆけのたつ置て拭した忘八の隱居が天山で聞てきたぐんしよ噺のかたそつへよたれもミとめて相てに成物もなければこち

らにハ角力の勝負あちらにハ芝居の噂あつい〱ととよむもありぬるハ〱とわめくもありおくにハ淨瑠璃のけいこ口には物まねの試老若男女入こミに雪の肌黒のせはん赤ハぼんの宮參きたならハところのきたへゆミ五色の人の丸はだかとれがどれやらかほも朧のゆ煙の中上りはの前に牛祭の大將ミるやうな妓が糠俗をゆびのさきに卷てはえぎはの白粉をおとしていると共はたにミによもち瘤のある仲居が輕石で踉をこすり〱　コレ花衛さんゆふへ惣さんで人あざたけれど御繁昌でお出なんだな【花】ヲヽおよそどん惣さんハどの惣さんへ【中】のぼりのお客の惣さんイナア【花】ムヽアノ惣さんハいなかへ御國ハどこしやいナ【中】國ハ鞍馬【花】そんならいつやらかいてうが有て參たがたんと小判のある所しや【中】サアさうして今度こちの櫻さんのかね付してあげてじや　トはゝしのうしろからたいこ持のたゞきち【只】コレおよそとんハたしも共御客にびん上を賴でおくれ【中】びん上とハあんしやへ【只】ハテわたしがひんの此やうにひくいによつてひん上がしたひけれどおもはしいおきやくかないわいナ　ト手ぬぐひをしほる折ふし湯し男喜助きかゝり【喜】只さんわたしがいたしませうかい【只】ヲヽ喜助先生貴公も店の子達と同じやうに大事の笄に紙俗はめてじやがまだ直らぬか【喜】サアおまへのいふた利兵衛膏藥とんときかぬ是から無二膏でしあげるつもりじや　トはなしながらへふつのうちから四十ばかりの花車になこへして【花】さつきにからだまつていれば人のおいどへてを

空吉の河

やつてあんまりあほらしい（トぼやき／＼戸をあけてでるこちらの男へいきにて）【猿庵】ヲ、手がされつたら御免ゆの中で手のごひを失ふたによつて何のてんがうする物でどふぞおまへかたのおいどへ三日てをやらずにしにたいと思ふてゐます（トいひ／＼ふろからてるをみればとうりであんま）【花】ヲ、たれじやと思ふたら猿庵さんかいなふろでなつとやめんかいナ【猿】おまへがたの脊中やおいとへ手をやりますがはたしがしやうはいこれをやめますと翌からくふ事がなりませぬ【只】猿庵センせいはよいかふじやはたしを養子にしておくれんか【花】ほんに大体御はんじやうしやないわいナよんべはとふ／＼お出なんだナこんやは後過にきておくれやまつているぞへと念押ていなれしは此花車もやつはり猿庵がりうじがきに入てあるか

小樓

林和靖は舞鶴を見て・騒客の來りしを知・青樓の花車は鴉啼を聞て稀客の來るをしる・所の名さへ欲としい富永丁とかやいへる中程の表に壹間半の張出格子門口の折障子に桐のたうの紋付しは類を以て金を呼・ぎふんと見へたり主およく風呂もどりと見へて・昔は紅桔梗ともいふべき絽の帷子の胴に・南京染のくるりのしたぎ細帯ふるきありまち絞のゆかたをかゝえ・垢すり

と糠袋をはしにくゝり付た手拭にて顔をふきながら。判取に來た。店の男をとらへゆふべの花の間違を。大な聲で小言いひ〳〵もどりかゝり。やう〳〵門口まで來ると。マア線香に。さう申ませうといふを暮に。むかひ裏へはいる【花車】お捨また。門がはらずにあるな。毎朝〳〵いはひでもしれた事を トすぐにはしりにかゝり口をすゝぎ何の願ひかは縁さきにつるしてある花かごへつミ花してやゝ二度ばかりおかんでゐるト切通しの方からちゝぶの花色小もんの折目のきつとした仕きせのひとへばをりせいしつぱなたの新雪駄が前にしやんときめてこんぴら参りのもどりがけ後家のしちやのねらちでぬ手代といふこちがひのないいとおく島のあはせ黒おび 門口の障子半分あけかけ。顔さし出すを。常住上へ下たはや替しこゐる。仲居が見つけ【中】新さん是れお珍らしい。どつち風がふいたやらサアおはいり トひつくりかへつた下駄とひきずりをはいてゐるうちに客へ明もいハすかは出すをとけかゝつたおびをまへにはさみながらゑつかけて出やう〳〵くらがり町のつじでひつとらへ 【中】新さんきわるマアちよつとおかへりいナアト はをりのひもをとらへてむせうに引はる 【客】ア、是けふはやういなにやならぬ トいひ〳〵門口へもどつてくる 【中】アレ申新さんがいぬといふてござります ト此こへに花車口さし口からおもてへでゝ 【花】何じやいなぞわ〳〵とそしてマアけふれおやくそくかあるのにお歸りでれすこますまいぞへ【客】エ誰ぞやくそくしておいたかへとんと覺ぬなどゝ初心ないやミよう覺まいぞあとの月のでんからのぴたりちやんだりしてけふのやくそくを樂んでいながらむしついひかけられたやうなかりして上へあがるとほたへたしかけ硯のはたにある帳をあけて見やうとするを花車がチャッと引たくつて【花】めつさうな御家の寶藏へ手をかけてどふした物じやいなァといふにそのまゝ立て神の

棚の鈴をめつたにふりならし共手かあくとよびものに行かゝつている小めろをひんだかへていやがらし猿かふて置ても是ほどに世話ゝなけれど商賣といひ連中も多いと云處で花車も受ているとミへたりどふやらがうやる三階へほり上ると床のまの掛物ひつくりかへしてかけて置をミ付て【花】新さん何しいじやぎえんの八百いしんだ時か何ぞのやうにとつまらぬあいさつ小めろが耳ねふりにくる程なく。火の氣のない臺所からァ、ラふしぎやぱつと湯氣のたつ大平あらはれたり。すめでさへ是ほどされがしいのに一盃のんたらどのやうに有うと案るより産がやすく頓て下駄の音がきこへると。かきの物ひんづらゆふたる天童二階へめき〳〵とあまのぼり玉へば。かの狐つきどの大きにあやまり入たる体にて暫時無言此位な事ゝ花車がみてとり【花】小梅さんお出きのふゝお樂【小梅】サィナ工左衛門見いたか一向よいなァとれ當時敵役にほれるが此中間の粋がりとや【花】ほんに小梅さん妹さん出したげなマァ御はんじやうでおめでたいナ【中】モシすりものゝ禮いひんかいナ【花】ほんに見事なすり物御忝うござります。一向はなやかなナ中新さんちよつと借にやりなさらんかいナ【客】イヤ〳〵姉さんとおなじやうに大かたこれ〳〵で有ふ ト五本のゆびをかゞめてミせる 【小】大きらいいつわたしがつめな事云たいな トひさがしらへあてゝいかんくびをさしつける 【客】ヲ、あつあつあついわいなナ トちよつとふしつけてしやれるとやかく盃の廻るうちかの妹ぶんを下から三味せんばこと一所にほり上ろト新ゆまきたあしにまとはしながら

【妹】どなたも　ト半ぶんいふて小梅のそばへすはる　やう〳〵きいふまで雪隠で蜜柑の盗喰段ばしごて・かまはこのはづしぐさ・猫と一處に倭風呂ではなゐふつてるたものをむりむ体に押付うり店の男が受合でござりますときしこんだ翌日判とりに往とゆふべハひどいもの付つけたなおまへの處でハあの子でも首さんかへといなされて男がへん答にこまりそれでもそばへ寄て御覧じませ目も鼻もござりますとハ河原へ見せものにたすほどのかたわでもないと思はるぞかし此うち客ハ一向まじめに成てもてぬやうすをミてとり【花】コレだれぞ藝子さんいふておじや　ト二かいからわめく下からかんばつたこへて【小めろ】ハイ、、、、　トいふたばかり　【花】新さんけいこさんかたのおでるまてちつとの間ゐちらへ　トいふをしほに　【客】イヤ〳〵けふハもうおこう　トもじ〳〵しているをむりやりに三畳敷へおしやりへだてのふすまをひつしやり

當世嘘の川卷之二終

當世嘘の川巻之二

館

藝子妓の内を館とならはしいふハ當時の流言也

堀川の館ハ源家の古室町の館ハ足利の昔。其館にハ引替て。祇園町の片邊に溜野といへる唱婦の館ハ奥口かけて拾二三疊上り口にまへら戸の押入。庭にハ建のぼしの肴戸棚奥之間には重箪笥きら〳〵敷。床之間にハ御客から貰た鯉の瀧登りの掛物。花生にハ鼠喰の扇子二三本ふるき物指なんど投入てあれバ。壁には稽古三味線二挺。花村屋と書たる店の花帳こそ此家の内の大黒柱とハ見へたり。家内の暮しは乾鮭のごとき母親壹人。棒鱈のやうな匂ひのする下女壹人。子飼ハいくたり置ても直な物喰させねバ育つた事なく。主の溜野ハ首連中の指折年も廿三四の賣盛。千の花は月双にうるゆへ振舞をいとふと九百七八十にてしんをとめ。正月納涼の紋日月にハ二千振舞も珍らしからず。いざさらバ何處迄も轉ぶ處までと田舎客注文ハ枕掛次第。兎唇鼻欠の男撰なし。下之關の大舩頭熊野の鯨突阿波の藍玉屋諸國の名物を引受ての大あきな

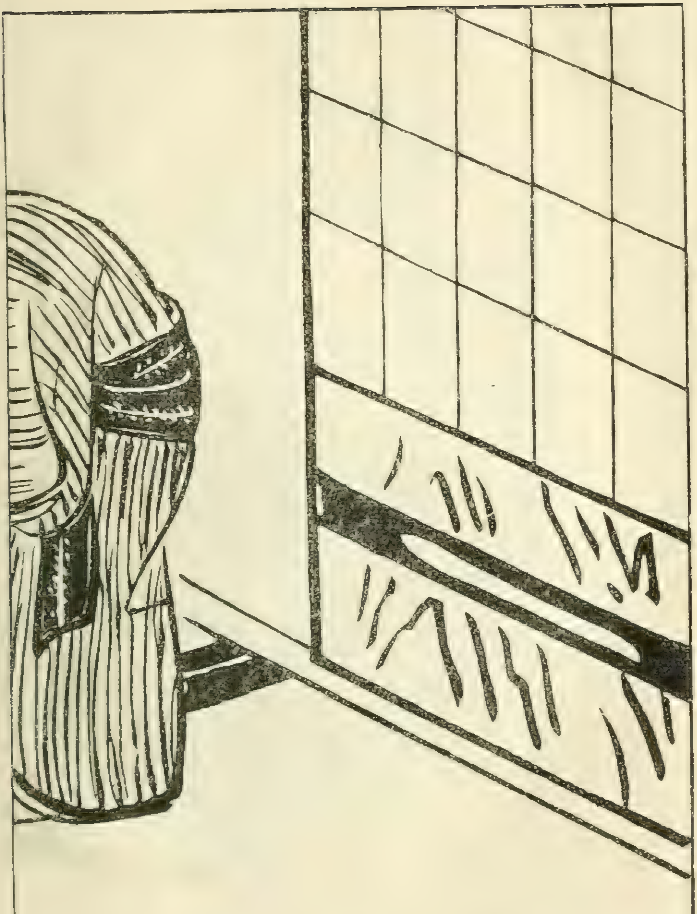
ひ。日本國が一處へよるやうな事をしてハ大金をまうけ。其上吝嗇きびしく朝夕の食物ハ客と寐た時よんで置た天井板の移るやうな茶がゆばかり。折〳〵さつま芋の物好も榮耀にハあらず米のすくなふいる工夫なるべし。六條様の火のミやぐら見るやうな鏡臺にすはつて鐵漿つける片手にも下女のお竈をしかりちらし。コレ其やうに釜の下をたいてたまる物か我物いらずの大ぎつはい人がものいひ付ると口のうちでなにをぼやくのじや全体世が世なら。よいおやまにでも成てわしが肩だすけにも成はづ。九ッの年から小便たれの世話まで仕たれど、そのやうな媿姉ゆへ祇園山東新橋へも立れず。それゆへ主の慈悲でしら奉公にして遣ふてやるをありがたいとも思はず佛頂面。また今日も食どめしやうかとねめつける顔つきの恐しき。惚てゐる客に見せたら百年の戀も覺さうな物なり。漸〳〵母親のあいさつでなき〳〵すはる晝飯も塩煮のきらずか茶かすのさたし物夜ハ小づかひ帳の勘定三文たらいでも寐る事ならずあるハ生洲の土産しはるの送り膳に生肴も不自由ならねば肴屋の出入をことはり三人の小便にて青物も事たれバ八百やとても門をゆるさず誠におしろいした郡司兵衛しやとそしらぬものもなかりけり日入の敷も枕にて崩し呉服屋の揃の殘りも手を握せて帳をけさし出る息引く息の金まうけ阿呼の一字を元手といまた類もなき能家業也されバとて川東に家屋敷を買ならバ恥かしからぬ家督もちかゝる家も

紫言の河

ちの唱妓を借屋住の御客様方が約束なとしてやるハさか様なうき世の有様なり花簪の物ずき仕出しの煙草入つきつけに來てもいつかな事受付ず其外合力會さらへ講の疊切手どのやうな義理が有ても薄情に斷をいふ氣のつよさ其くせ客の座敷でハ琴の柱が一ッこけてもヲヽこわといふ可愛らしき男の腰をぬかす事妙となり折から上京に扇九郎と云客男が能て金持でと世間にうたふハ我事と思ふ自惚から。めつきりとつかひ出して何處の靑樓でも扇九郎〳〵と名高ければ。首の唱婦をかたひしからひろひまはる內。ふと溜野に心をよせ祇園町川ばゝたの大樓にてハ面白からずと。大菊と云小樓にてのこんたん。ため野もかねて聞及でゐる客なれば。こちからもすこし氣のあるあしらいに見せかけながら急にも合點せず。なるやうでならぬやうに一月二月引はるほど客の方からせきがきて。無性にせりこむ處をつけこみ。兎の斯のと樣子を付て卅兩の枕がけにて相談極り。今宵ぞ約せし新枕其夜ハ外の末社を禁じ。妹分の唱妓壹人よばせてしめやかなる座敷。客の方にも才庵といふ辨慶壹人。兎角して店仕舞の時刻を才庵が幕切にて盃をお菊が預り。例の四疊半に寐所のしつらひうそよこれし絹蒲團の重敷も左ながら借物とハ見へたり。才庵ハ水口屋の本詰を買てもらふて昆弱ぶとんの床入も辨慶だけのあしらい。溜野ハ其間に手水にゆきしが何をしてゐる事やら半時ばかりも隙入廁を出て手を洗にもじやり

三一

人形の糸のきれたやうた仕うち・それから漸々臺所へ來て八方の影に鏡俗を出してためつすがめつ眉はき鼻たゝきの仕事終りて・直に二階へも上る事か又煙草盆引寄て長ぎせるのたばこすぱ〳〵・アノお菊さおまへが此間染てじやあつた立紋の小もん能う上つたなァ・わしもあのやうな小紋に染たいがお前の處へ來る呉服屋に染さしておくれんか・おきくハ火燵に内の子の添乳しながらはやう二階へ往てくれたが能にと思ながら調子合して・サイナ染物といふものハあれが能と云て當にもならず其後こちの道江が常着染さしたらさん〳〵の染やうした・大きな聲してハ褒られぬわいナ・それでもこちの呉服屋よりましで有ふ明日縮緬をもたしてくすほどに・あの小もんを染さしておくれとよしない噺に引はりたいほど引張てゐるゆへ・二階の客ハ長う短う成て待あぐみ・寐所をはふて出て段階子の口から下を覗て見れば・正月の五ッも有樣な顔してゆるりくハんと噺してゐる面の憎さもうかんてき起して去でこまそと思ふて見たが・十分惚て居る今夜の初舞臺此處が客の辛抱と胸をさすつてゐる内・溜野やう〳〵吸がらをあけお菊さんおやすみと段ばしごへかた脚かくれバ・客ハちやつともとの寐所へはいり例の寐たふりため野ハ元來久敷仕うちと思ひながら態としらぬ顔にて蒲團ごしに寐てゐる客の脊中の方へもたれ・二三度ゆりおこして見ても狸寐入ため野漸〳〵にゆり起して。コチヤそんな事ハ大きら



ひといひ〳〵鼻の先をつまめバ。客其手をつきのけ悪事すな〳〵ゆふべ井筒の夜明して今夜ハきつう眠たい。堪忍して少の間寐さしてくれと一寸大をあしらい。胸ハどき〳〵胴氣が打てあれど平氣の体。溜野心にハ甘客と思ながら俄に腹の立た仕うちして。どふでわたしがやうな者いやであらふぞいナそんなら初手からどふのかうのといふてなぶつておくれんが能わいなァ人にせんど惚さして置て。今更逃るのかへ厚いしろ物じやと。又はなをつまむ仕うち。ぬつくり卅匁といふ枕掛くすねて置ておぼこなせりふ兼ての仕入涙ほろ〳〵こぼして泣て見すれば。さすがの扇九郎氣の毒がり。泣てゐる袖を引はり無理に蒲團のうちへ引摺入みなわしのが悪かつた。かんにんしてくれ〳〵とハ餘り成負軍也。ため野ハ猶も腹立の躰にて客の先をとりいぬる〳〵と立騒ゆへ。漸なだめはな紙を出して溜野が涙をふいてやり。じゞかんでやらぬばかりのとろさ。そこへ付こむすつぱのかは。口舌も能かげんに納め。扨閨中ハたまられぬ面白さに客ハ一向現をぬかし。毎日〳〵の大浮。大阪くだり伊勢まゐり桂の川狩圓山の年忘と。騒たてるをため野ハつく〴〵思ふやう。よしない事に大まいの金を外へちらすハ無益の事。皆此方へ一トのミと思ふ謀反から。ある夜ひそかに扇九郎にむかひいと深切らしい顔付にて。誠にそもおなじみ申て此かた花麗なる御あそび。わたしにおいても外聞かた〴〵お嬉う存ますれど。なん

ぼうおいとひなされぬと申ながら御館の思し召もある物。またハ世間のおもはくも如何なればあまりはなやゝかなる大立ハ御止なされ。御酒の御相手にハ唱妓衆壹人二人にて御遊び。元來大菊さんもいなかの御客かなんぞのやうに。のぼしあげての取持ハ御ひいきなさるに似合ぬ不深切かと存ます。先こゝの處ハ大菊さんもおやめなされ。表向ハのいた分にしてわたしがうちへひそかに御出なさるればとんとお物の入らぬ事と申物。とかく長久な事でなければ眞のお樂でハござりませぬと。誠ゝ敷はなしければ。扇九郎ほとんど腰をぬかし遊女に誠なしとハ譯しらずのいふた事。内の女房でもそんな事いふてハくれぬ向後君の御異見に隨ひむだ遊ハ急度愼ミ。貴ゐのうちへ直にゆけば花代ばかりでも大な違ひ。外の費をしまつして奉公人のひとりも取てやれバ。きつと目にミへる功と云ものと。思ふた坪へはまつた狂言。扇九郎が心にハ花も賣ずに内へ直に來てくれとハ。眞の色あしらいと心嬉敷。俄に髪付屋の心持にておもてむきハ退た分にしてかの内へ直に入こみ。溜野が花にいた留間の中も常の下着を巨燵にかけて待て居る面白さ。初の程ハ間夫の氣持にてうれしがりしがいつ往て見ても留間ばかり。夜ハどふで内に居ぬがちと晝往て見れば狀書ているかふろやへいたかひるねしてゐるか身仕廻の最中か。一寸噺する間もなくたま〳〵とまりがけに見せ仕廻のもどりを待てゐれバ。大めれんあん

まい代させてかんじんの所へハ手もやらさず• 臺所をまかなはせ其上奉公人取こくれの催促櫛買と云てハ金を出させ• 家買た迚ハ金を足させ• 樣々揩おろさるゝつらさ• 小樓で花買た方が勝なれど今更呼出されもせず• 又非我らしておこられもせず• のこふといふたらにすりおろしと餅に搗てゐる迷惑さ• 溜野も元來惚ぬ客せんど取た其跡ハとやせん角やと思ふ折から• 其狂言か神樂講へきこへ店から溜野さん下ゲ札と云てきたハ• 物氣の幸日比始末の冥加のよさの安樂に親を養ふ孝行のきゝめか• 何にもせよ運の強藝子め

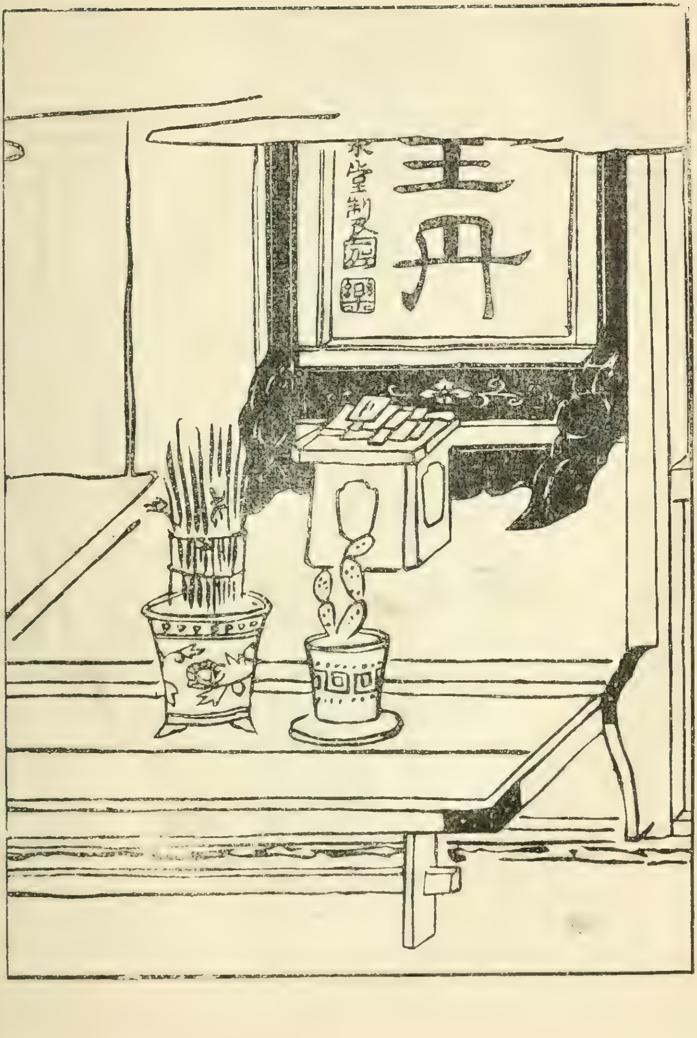
評曰　此ため野か容貌鼻高く爪長きハもと何とや云神樣の申子なれば也誰いふとなく爪野〱と異名しけるも此由緣にや• 又一說に溜野爪野タチツテトの五音相通なればかくいふ共あり性質篤實にして儉約を專とし身ををさめ家を齊へ親に孝心なる事理人の教に違はずされば若き人ゝ此藝子の行狀を見て靑樓費をへたしなミ家業大切に萬事身の愼第一なり三人行ふ時ハ則我師有

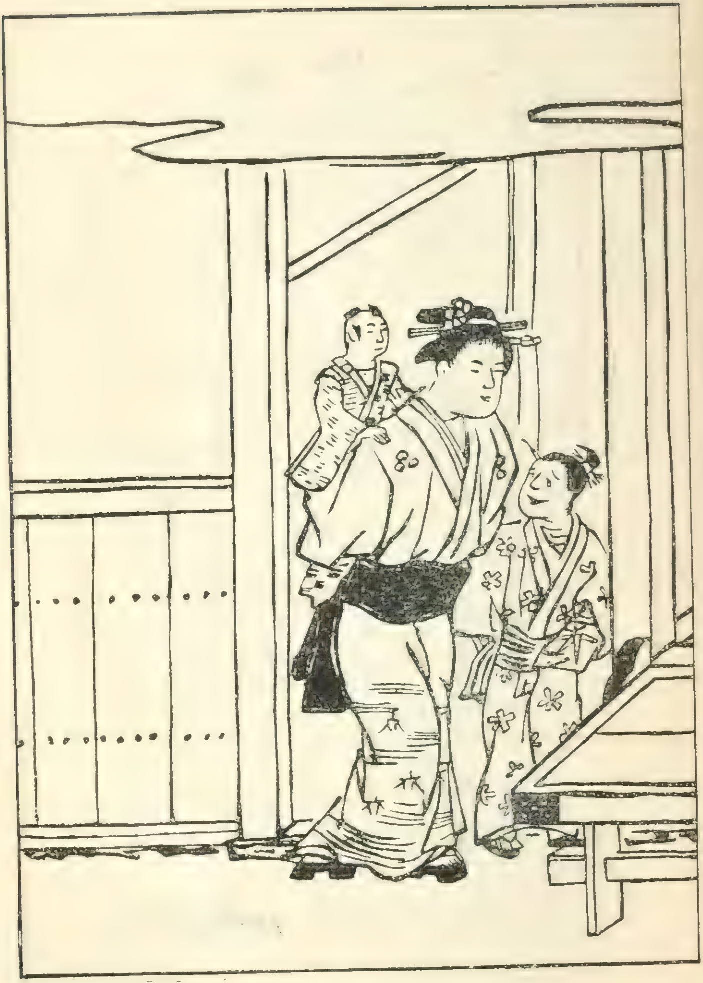
當世嘘の川卷之三終

當世嘘の川巻之四

中宿

物の名も處によりてかはりけり關東にては神といへるを上方にては辨慶と稱すあながち脊半に七ツ道具もかざらず手に大長刀も携へねど判官殿の御髭の塵とり靜御前の文の取次暑氣見舞の扇箱寒氣見舞の鷄卵箱棚にたゆる事なき押小路邊に歳ふるき辨慶の親玉三芳屋の彦二といへる男俳名は其園といふて角のとれし大通東西の遊里は勿論貴き賤き此人をしらずといふものなし二間間口の店付小奇麗にしつらひ養生丹といへる臺看板いつか藥のうれる体は見へねど夫婦眉も崩さず何を、身過のよすがと思へは小息子の茶屋の中宿大盡の金の口入縁談の執持けふは戲場の初日あすは竹之内の勸進能こゝの茶之湯の詰かしこの道具會の世話と遊ぶ商賣寸暇なく女房おきせは廿年前の藝子果何食はひでも髮結さんに毎日髮をゆはセ路考茶の布子に四文錢ほどな桔梗くづしの紋をつけて諸事粹がりのさしでの神何ぞの噺のはしにはわたしが前出てるた


王丹



時にハとの太平樂此處へ寄る社中の受にくがるこそ理なれおなじ辨慶の下ばたらきする表具屋の助七といふ若者ちよとした小風呂敷を手に提此家へ來り彥さんおきさん一昨日ハ【彥】ほんに此間ハあちらこちらへ大に御苦勞けふハ彌〳〵だんが隣の座敷へうつるはづじや【助】サァわしもたつた今富永町へ往て來た日がらも能ゆへ追付行と云て富菊先生グット姿氣に成てすました顏してゐる【彥】何時の御輿入じやあろ【助】先づ山八ッしやあろふかへ【彥】しかし若いものゝ葬ハ出かねヌ物じやて【きせ】アノごまのごな旦那にそんな事聞したららんさハぎじや【助】けふハ障子張たり腰ばりしたりどふて用が有ふ手傳ふてくれいと旦しうに賴まれて來た【彥】それハ別して御苦勞サァ先一ぷく【助】サテ今來しなに東の世話場を覗て來たが今度ハ璃寬が受たあの場大桝か書たかしらん【彥】ホンニ此間一寸狂言の筋を聞たがあれハ前せんの市紅と鯉長とのした狂言面白い事じや有た【助】センの市紅の狂言なら岡嶋屋へハはまらぬはづじやがナァ【彥】そりやどふではまるやうに手が入て有ふぞい【助】いかさま後いうれひに成てからすこしこたへぬやうながあそこらが市紅で見たら面白からふ　トくろつかしたゝばかばなしのれんのうちに女房おさせとたりの子のかゝゆふてやりとんぼかけ〳〵　こちらハいつでも小雷子がおもしろい今度ハ何になるいナア　ト斯なかばへ東ひきやくぬり樽に狀をそへてさしおする【助】狀の表書を見て里風さん大より里風にいものがとれたナ【きせ】油手をあらひ〳〵大市

さん此間こちのが大新で借て來てじやあつた下駄と傘もどしておくれそして翌來てしや時小町紅百が買て來て　ト小ふくさにちよくと錢とをわたす　【日脚】かしこまりました　ト門へ出て行　【助】何と彥州此薄紅葉遲くさう局るてハあるまい吹の元の狀を書て中取といふ狂言はいかゞ【きせ】折角貰いた物を可愛さうに【助】大事ないく【彥】助ハ果風に戀の意趣が有わいナウ【助】おきさんあつちからしやぞへ　トやがて樽をさかなとだなへかくし狀を懷中して　サア是からふきかへの工面此狀ハおきさんおまへ書ておくれ【きせ】いやいなけしが手ハよう知てじやわるいく【助】ドレそんなら僞筆と出かけやう大雅無村よりこりやちとむつかしい　ト硯引よせ書て居る　折から門口へ駕さしおろしたれを上げ【駕かき】ハイ是でござります【富きく】ヲヽ窮屈　トいひくうつむきあたまをおさへて駕を出る　【きせ】ヲヽ富さんがきてじやあつたようお出た待てゐたく【富きく】おきさん此間ハたんくの御世話もつと早う來るのじやあつたけれど髮結さんの埒明てくれぬに依て彥さん此度ハ段ゝ何も申ませぬ諸事ハ斯う　ト手をつく　【彥】おまへの色が最前から來て待てゐる　トかほて助を見て居る　【富きく】ホンニ助さん先刻ハ大に御苦勞【助】其節ハいろく御馳走【富きく】アレあれほどまゝくひんかといふたけれどめんめがいやてゝ食はすにおいてから【助】去とハ惡い間やうナア【彥】其樣に余所へ來たやうにしていんとマア上りんか【富さん】そんならおゆるし　トかゝえた取一あかり　ヲヽしんど【彥】駕に乘て來てさへヲヽしんど舁

空言の河

四〇

てきた人はとんなものコレ寄場の衆こちへは入て茶でも參れ【駕かき】ハイ〳〵お蒲團是に置ます御用か無バ御いとま申ませう【富きく】大に御苦勞でござりましたはくさんにきけんよう來たと云ておくれ　【彦】【富きく】【きせ】三人口を揃て御苦勞〳〵　ト駕へいぬる　【きせ】おもてに供のが居てしやさうなこちへはいりいナア【富きく】イヱありや八幡のほんのかゝさんじやわいナア【きせ】そんならさうと最前からいひたかよいに能う御上り被成ました【はゝ】ほんに此度は不思儀の御緣であねが事大に御世話さんに成まして忝うござります是はさもしい物でござりまするけれど　トづたぶくろより取出すつくね芋、【富きく】ヲヽ見とむなかゝさんそんなもの出しないナ【きせ】イヱ〳〵是は手前のわろかきつい好物で御座ります【彦】イヤ又手作りは格別じやそして此間から上つてか【富きく】イヽヱけふ來てじやあつた【彦】そんならくたびれしやろ奥の巨燵へあげましやいの【きせ】サア〳〵こたつへ御出なさりませ【はゝ】さやうならおゆるし　トもへぎの布子すそ高くからげきやはんながら奥へ通る　【富きく】彦さんけふからお前はわたしが爺さんしやナア【彦】ヱヘン〳〵　ト咳はらひして髭をなで　孝行〳〵にせうぞ【富きく】ヲヽうれしわしやとゝさんがたんとある【助】此町の赤とおなし事で【富きく】アレ見んかわしを犬にしいた【助】それでも首の藝子さんは寐子の恐れる物じやに依て【富きく】わたしや藝子じやござりませぬ【助】なる程こりや不調法申ました【きせ】助さんい

ちやく掃りいふといんとちよつと隣の座敷一ぺん掃て來ておくれんか【助】ヲツト合點
ト箒をかざしはうきたさげてとなりへ行 【富きく】彦さんけふ旦那さんが來てかいナ【彦】最う逢たいか【富きく】イヽエイ
ナそふじやない彦さん一寸耳かし トさゝやき どふで小遣ひが入るじやあらふに錢持てこなんだ
【彦】エヽそんな事ハとくがのミ込である トはなをしえる 【富きく】そんなら安心 トかゞみ台を出し一寸はなをなをす
【彦】大方掃除が出來たしやあろ隣へ往かふか【きセ】こゝへ誰ぞ來ると悪い隣へ往き追付にお
しめが出來たら持て往かふしかし富さんまゝ一膳あがらんか【富きく】イヽエおなかはよいお
きさん世話しいなイナ【彦】おきせ表から這入ろそちらハ道が悪いサア富さんお出や トたばこ盆をさげ隣の[illegible]へ行
【富きく】アイ トふらくとする小づまを南方の手にてとトしなにかんざしかみぞのはたへ落る ヲヽ能はまらなんだ トひらひ上たのかんざしであたまをかきくヽ 此
處が路次のくちかへツイ隣じやナア雷の鳴時にげて來るによい【彦】あるひハひだるい時コ
レ富さんこれがかくしぐろゝ此ひもをひきじやと落てあつてもあくぞへ【富ぎく】アイく
【彦】先御案内 トさきへはいる 右の方に溝ぶたがあるぞ左へ寄て御出【富きく】ほそい路次じやナア
【彦】小言いふまいおつとそこらに犬の糞【富きく】ヲヽきたな ト小づまをつとからげる 【きせ】トふりむきひたいに
手をあて 舟來會か【富きく】安房いひないナ【助】ト座敷の窓から首を出して チンチテツ、テン【彦】サア此處
じやそこからはいり【富きく】此戸わいなヲヽおもた ト戸をあけ内にはいり ムヽほんに能處じやナアちと

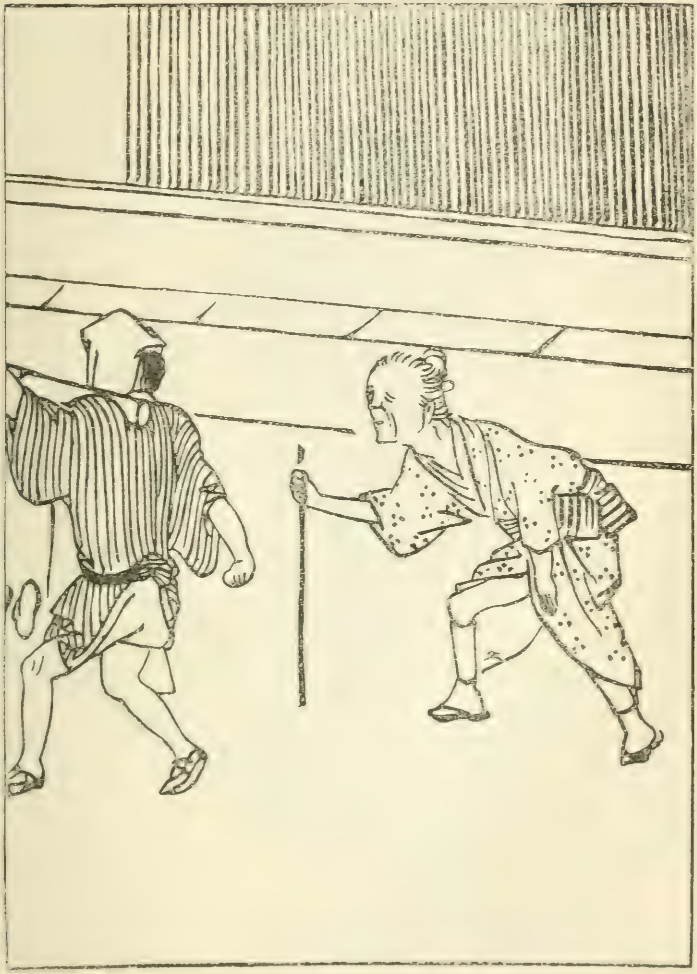
くらいじやないかいな【彥】まだ雨戸がみなあかぬさうな助何をしてゐたのじや【助】何をしてゐたとハつれない昨日の男めが何處を掃除した事じややら煤だらけ大体はいた事じやない【彥】マア戸をみなあけてくれ【助】此戸ハねつからあかぬ【彥】しりざしがあるわい【助】雨戸にあいぜんあいぐろゝこりや妾宅にハよい家じや【富きく】何としてェ【助】ハテ用心きびしいどふやらかふやら戸があいたグワラく【富きく】こゝが坪の內じやナアヲ、かハいらし何やら花が咲て有【助】アリヤ南天の實じや【富きく】ホンニ北むきの南天ハ何やら咒になるげな【彥】是ほどほれさしたらもう南天のまじなひも入まいかい【助】まだ惚さす人があるハいな今ハ大阪に【富きく】そんな事いひか【彥】助今までとハ違ふめつたな事いふまい爺がゐる【助】さりとてハ情ない是からとゝ遣ひをたんと受ざなるまい

當世嘘の川巻之四終

當世嘘の川卷之五

妾宅

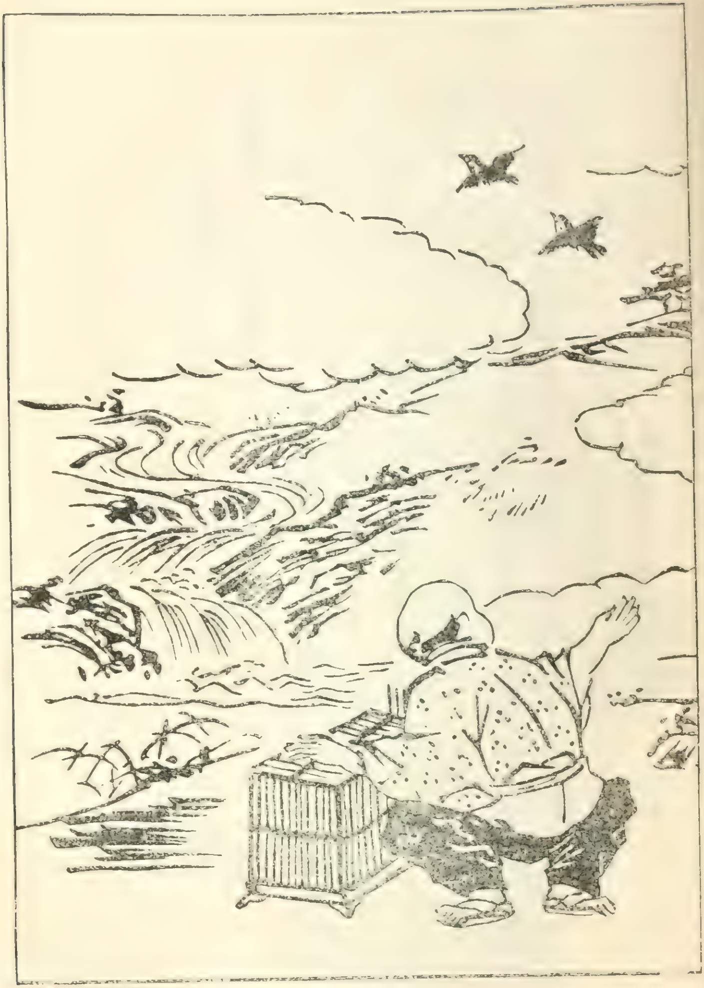
暁て跡にハ女房おきせ。煮〆のこしらへ飯のした。ひきぞわづらふ天窓の紐いそがしくいうくうと。茶もにえかへる大和風呂。直すかた手に鉄漿つけて髪なで付て。貴志嶋にちよつと着替る繻子の帯御靈祭に拵し南京染の前垂ハ世話女房の晴衣裳。出來上たる身ごしらへ夫より煮〆肴物重箱に入とつはかは隣座敷へ持來り【きせ】サア〳〵やうよと出來たが茶〳〵漬にセうか酒にセうか【彦】マア祝義に一てふ入るとセう【助】それこそ最前寡取し薄紅葉の一樽ソレト見えからはる身をしておもてへ出る【彦】何と騒しいやつなァ【富きく】それでも陽氣で能わいなァ【きせ】盃ハまだこぬかへ【彦】マアこちのなと取ておじや【きせ】ホンニ先度路考さんからきたのを持て來て御進上にせうか外に何にも取て來る物ハなかつたかしらぬ トあたりを見まはしひとりうなづいて出て行小々とりして コレ富さん親父と能相談しておくれなへ三百目じやきつと預たぞへ【富ぎく】たしかに預かりました



トうけながす【彦】こちの山じるしが折〳〵遅くさいちやりを受さすにはこまる【富きく】それでもよいお方じやわたしや大すき【彦】ホンニ在所のかゝさん呼うか【富きく】おきいなしゆんで悪い　トいふてゐる處へ助七おきせが手を引こそやへきたしうちにて　【助】一寸二階があいてあるか【彦】面白もないちやり置てくれ【助】ソリヤ親父が最りんきじや【彦】かんは行平でゆかうか【助】かんは行平肴は須广の時雨蛤と重の内より曲物取出す【彦】コリヤよい〳〵能事はよいといふて遣る【助】ちと違ふわいナ一寸いふのても奇麗いな【彦】ほめれバのるしァ女子と小人とは養がたし

ト芙雀の身であしらふ　【助】ソリヤ親父が地がねが出た【富きく】一寸おいでたナ【きせ】サア盃をさせるとお出るわいな【彦】サア先富さんから初【富きく】マアとゝさんのをいたゞこかいナ【彦】そんならかんを見よ　ト一トくちのんで　ぬるい〳〵【富きく】ぬるうても大事ないマアおくれ【助】ヲヽいやしさゝひもじいかへ富さんの盃はわしにおくれ嫁から聟へはお定りじや【彦】そんなちやりでも旦那が聞と腹を立るほどにかねて心得て居やゝ【富きく】サア近頃はひどいかんてきじや【彦】旦州のかんも増長した【富きく】ヲヽこわおとゝひの晩もどないな事じやあつたとおもひじや【助】それではをれがやうなやつしが出入したら富さんのからだに生疵は絶まい【彦】ちやりがしらも三年おけばじや妾宅の出入に助七とは旦那もさるものじや

【助】そのやうにしらでつぶしておくれないなァ【富きく】そのナァで思ひ出したわたしが名も替たい【彥】いか樣富菊でもあるまい何ぞないかいなァ【きせ】やつはりお富さんがいひよいじやないかいナ【富きく】大坂の姉さんの名じやわいナ【彥】菊ハ【助】たゞの親父じや【彥】おしやうハ【富きく】東のとゝさんがちと訛てじやによつておしやう〳〵といふてじやと御寺のやうで惡い【彥】コリヤ又旦那の物ずきがあろぞい旦那にまかしたがよいそれハさうじやがたらずまいの道具翌までに助ぼんに買て來てもらいたいそこへ書とめてもらを【助】ヲツトそこへ小口からいふたり【彥】そんなら先。茶碗十たらい大小三ッすりはち【富きく】こちや裸人形がほしい【彥】そんな物ハあとにしいナ【富きく】すこしくびをかたげにながたーして それでもほしいもの ト あまへる【彥】そんなら擂鉢にはだか人形【助】はだか人形ハどのくらゐなが能ィナ【富きく】こちの子にするのじやさかい隨分大きなが能【助】それハよつぽどむつかしかろ【彥】銚ピンを行前書か【助】さりとハ品の惡い見物【彥】さて手桶水鉢炭けし壺【富きく】不斷も當座ほしい【彥】又かいなそんなら炭けしつぼに水火壺正吸物わんも一組でハたるまい夕飯一くみ是で大かた濟【助】マァ妾宅の道具立ハ出來上つた是から旦州が毎日來るじや、ふかういふ身で ト袂から出す頭きんお内中し火ふきやた わきさしにしてたゞ取のさわおする【富きく】出しふき おきさんアレ見んか一かうよう



似たトとけてわらふ【助】アレだんなの眞似するともう恐悦じや【富きく】それでもあんまりよう似るもの【きせ】ほんにとんと生じや聲までがよう似たハヽヽヽ【富きく】助さんもうおきんか腹がいたうなつたト大わらひ最中へ旦那のあしおと【きせ】ソレ素鳥さんがお出た【富きく】みなにめはしきしてちやつとおし入へかくれる

【旦那】上田島のきる物に黒ばをりくろづるのわきざしずつとは入て　さてよい處どなたも大きに御苦勞トきよろ／＼してかんしんのものがいぬゆへあぢな顔してゐる

【きせ】くつ／＼とふき出すおし入よりもくつ／＼とわらふ【旦那】おけやい／＼帯のさきが出てある物【富きく】おしいれから出て　おきさんが笑ふてじやによつて【旦那】何のはいらん先からしつて居る扨こちらは目出たいがめでたうないものは此わろでござりますト富ぎくが顔をあふぎのさきでつく【富きく】何としていナ【旦那】くだんのりやんこの口に遠ふなつたによつて【富きく】またいな大きらひ【旦那】その大きらひもちつと直さねばならぬけふから町の女じやに依ておきさんチト町ことばおしへてやつてへ翌から白ゆもじて眉もとらさねばならぬ【富きく】まゆはもちつと堪忍していナ【旦那】又出る勝手にわるいか【富きく】ヲヽぎふんわる【旦那】それでもいつぱいしに來たのじやあろがな【彦】品の悪い旦那ナア【助】今の雷子がやつしはかしこ過てどふもならぬトあちら向ていふ【旦那】男か能といふ事かへ有がたう存ますトちよつとじぎするまね【彦】扨富さんは旦那に預けてみな退出とせうか

【旦那】イヤ／＼わしも今夜はいなねばならぬ【きせ】それでもしばらくなりともおやすみなさ

りませ【彦】嚊をのこして置ませう【旦那】そんならご苦勞ながらおきさん居て貰ふかい
【彦】千秋樂には民をなで　トうたひをうたひながら助七と一處にいなふと門ぐちへ出かゝりてよつと小もどりして　嚊火之用心
又云此素鳥といへる客は上京にて鶴屋仁左衛門といひし有徳人先祖仁左衛門はいたつて仁者にして常に貧者をめぐみ魚鳥の命を助けし事あまたゝびなり當代猶其余風を捨ず相續彌堅固なりしが此頃かゝる妓婦をまうけし事聊奢に似たりといへども左にはあらず此女もと八幡の產にして常に八幡宮を信仰し同敷仁情の心ふかく猶孝心の勤淺からざれば其志をかんじ斯苦界を助りしならんか戀せずば人はこゝろのなからまし物のあはれもこれよりぞしる深く弱る時は不善をなし實に愛する時は仁に近しされは双方の仁情合歡して家益榮ゆけるぞ目出度仁德のためしならんかし

當世嘘の川巻之五大尾

跋

粋川子之篇成也。其事也寓言乎私曲。其旨也通達乎情實。粋也者。或謂之通。蓋方定也。韓昌黎曰古之聖人言通者。百行衆藝備於身而行之者也。今之言通者。百行衆藝闕於身而求合者也。古之言通者。通於道義今之言通者。通於私曲其亦異矣。嗚呼風流閑雅。歸於粋而後已焉。將通達於大道之端。而亦勸善懲惡之一助云爾。

享和甲子春　華頂山陰蒲團述

作者洛東粹川子

享和第四甲子孟春

寺町通四條上
蓍屋善助

書林
寺町通二條下
鈆屋安兵衛

傾城買花角力

傾城買花角力叙

苦界十年の魂膽。晴天十日の角觝。しひて比いはんす。家鴨の脚絆に縫あげして。牛の小便と長短を争ハんがごときか。さはいへど。呼出しの幕のうちより。振新の中前にいたるまで。互に負じよおとらじよ。數のお客をかきころばさんと。柳をあざむく力士の腕。一番勝負の取組にも一際まさりし新手もあるべし。そも中の町の夕暮は。おいらんの土俵入にして。坐敷の洒落も中入過。お休なんしの新造が。引まはしたる屏風の團扇。木挺でもうごかぬ角屋しきも。嬉しうおつすの羽がひじめには。つい浮足の土俵ぎは。エイヤ／＼跡はないぞとや

いはまし

文化

はじめの春

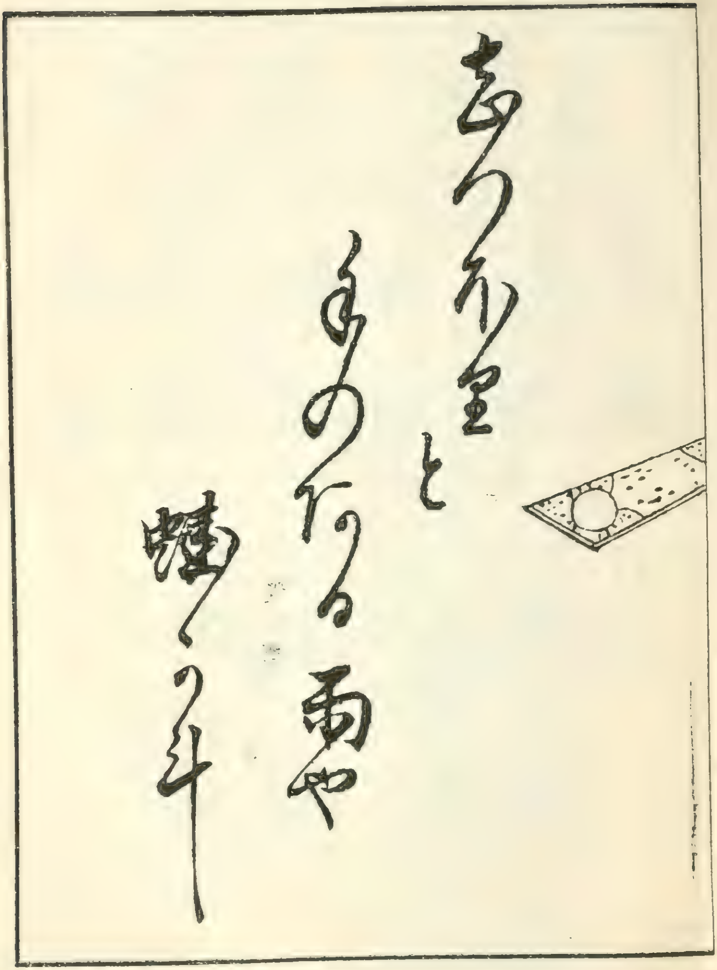
菊黄舎雲裡

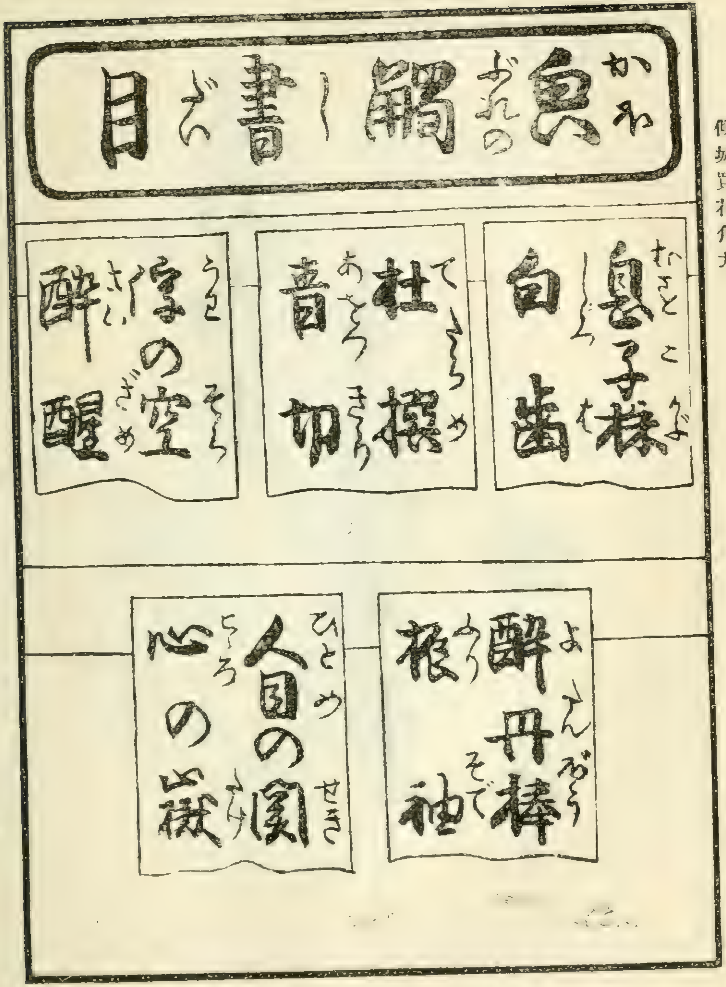
發端

本屋「御めんなせへ　トあがり口のしやうじをあけて　サテまづけつこうな春でございます　此屋のあろじ　雲坪「これハおはや〳〵と。サア〳〵あがんなせへ　本「イヽヘさうしちやア居りやすめへ。ときにさつそくだが。ちつとお咄し申てへ事がありますよ　トこしをかけ　どうぞ。ちよつとした酒落本の趣向をおたのミ申とうござりやす。雲「そりやアおめへ門ちげへだらう。どうしてわつちが酒落本どころか。てめへの名せへまんぞくにはかけやせん。本「ハテなんでもいゝからぜひ案じておくんなせへ　雲「こりやアこまりもんだ。そんなら待なせへよ。わつちが所へだれかもつて来た。わすれていつたちやうだん書の本がありやす　ト文このそこをさがしながら　マアこつちへあがんなせへ　本「さつそく咄がわかりやすね　ト上へあがる　雲「こんな本さ。四十八手の後編でもあろうかだ

本「ナニ〳〵傾城買花角力ハテ子　雲「一寸よんでミなせへ

自画賛




皮鬪の書目
息子様
白歯
杜撰
青切
憂の空
醉醒
醉丹棒
振袖
人目の関
心の嶽

○あどけない取組

内ハ大見せ客ハむすこ
女郎ハ部やもちしんぞ
うはなじミ

金谷千樹の春の花。瑤池玉楼の秋の月。ごしやうでざんすの完爾は。更に桃李のこびを欺く。つぼみの花のあどけなく。氣隨ハ里の常ながら。わきて春宵一刻もの。價千金のうちかけに。上草履の塵もいとわず。籠入五匁の南京鼠は掌中の玉とのミ大切なり。霞にしづむ上野の鐘には花の薫りを枕につたへ。うたゝ寐にきく土手の罾と越路にかへる翼かと。けしき調ふ折からに

【女郎】たゝんだ夜着にこしをかけ。ミす紙で顔をあふぎながら。くすりゆびで耳たぼへつはをつけ南氣にのぼせたといふ見へ。そのわきに十バかりのけしぼうずの【かふろ】深草やきの手あぶりのはいをかきまわしながらめそ〳〵ないてゐる

【客】てうづからかへつて來て。手をふきながらせうじをあけるトさつとふきこむ南風に。いけ花の八重梅が。ざしきぢうへちり。はんがけのほつれへついて。ひら〳〵とさかつてゐる

【女郎】ヱヽもふつよい風でおつす（トびんをなでつける）【客】いろはどうした（トかほをのぞいて見て）これなぜなく

【女郎】いくらだましいいしてもきゝいせんからだいじのまりをつかわしいしたけれどそれでも

なきいすわな【客】なぜなくのだ【女郎】なにさ。ゆふべいなかの人がめへりいしたから。それをおもひ出してなきいすのさ。こゝへお出なんし　トじしんにふとんをひろげ客をすわらせる【客】もうなくな。おれかおもしれへ事をして見せよう

ト鼻紙を出し。こよりで顔をこし…

サアこれをして見や【かむろ】うつむいてだまつてゐる【客】そんならおれがして見せよう【女郎】わたくしが出しいせう。いつそせまいのふ

ト出し物をおしのけて床のうへへふわりとすわる

【客】袖でかほゝかくして　サアだしな【女郎】あい皃でおつす【客】よし〳〵【女郎】あい鼻。そりや目でおつす。こんどハりやう方のまゝへ【客】こゝいらでよかろう【女郎】ヲホ、あい口。ヲヤ口ではおつせん耳でおつす。そりや口でおつすよ【客】めをあいて見て　コリヤアおつだ【かふろ】わらひ出して　とんと平助どんの顔のやうでおつす。わたくしがいたしいせう【女郎】マアおいらだよ【かぶろ】それでもせんにわたくしがいたしいすはづでおつしたものふ【女郎】あれさじやうのこわい

トいふ所へくるハほうばい女郎これは一座のあひ方

【ほうばい】ヲヤ金さんこんやもいなんすのかへ【客】なに四ッ時分にやけへるのさ【ほうばい】ひとりではぶつそうでおつすよ。それはそうと。ぬしにお目にかけいすものがおつす

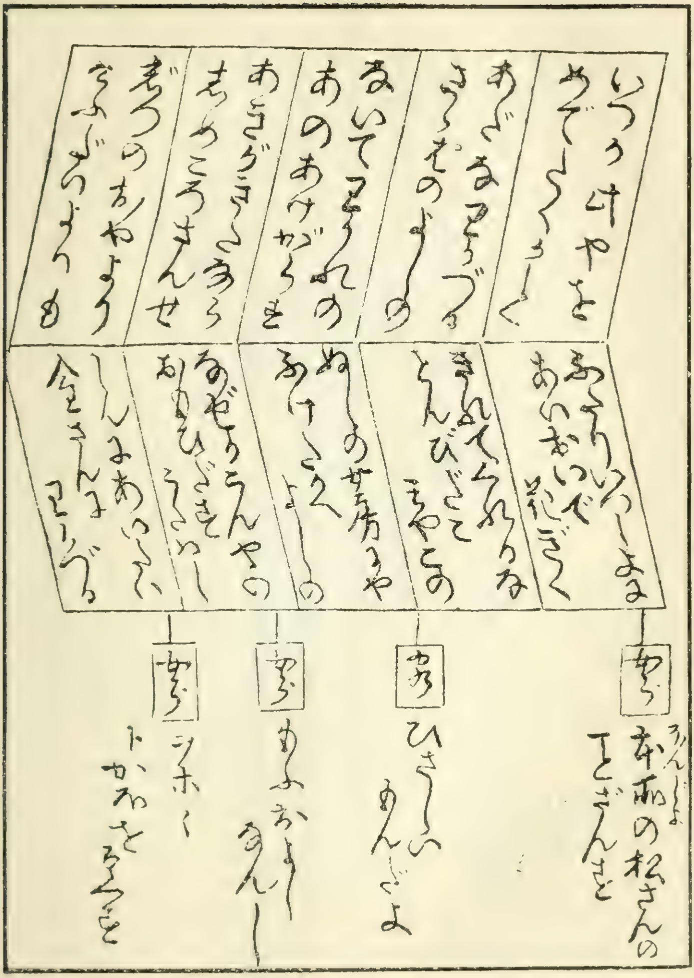
トはな紙へかいたものを出す

【女郎】千束さんおよしなんしごせうでおつす【客】どれミせな〳〵【ほうばい】こつちでごらふじいし【女郎】ほんにおよしなんしよ【ほう】よふさァな。ばからしい【女郎】そんならどふでもしなんし トつんとする【客】なんだ。いたこのてんぐばいかいだね【ほう】うへやわたくしがかきいしたからよめいすめへ。どれお出しなんし

ト下において【ほうばい】と【客】としてわらひながらよむ

其圖　左のごとし（編者註十頁參照）

【ほう】あつかましいとをごらうじいし【客】うそとしりつゝ。ありがてへね【女郎】よしかうそでおつす。千束さんのこしらへ事ざんす【かふろ】ヲヤうそではおつせんよ。ゆふべもわたくしがなきいしたなら。あしただんなさんがおいでなんすはづだから。人形をもらつてやろうとおつせへした。金さんとはいわずに。だんな〳〵と。おつせへすよ【女郎】此子もいふてへげへなとをいやよ。あきれけへるわな【客】人形がほしくてもつてきてやろふぜ【ほう】わ


本所の松さんの

かづるさんが。ぬしの所(とこ)のみをかくがおかしうおつす。わたくしどもにもかくしいして。うしろをむくハよふおつすが。なにをかくにもいゝながらかくがくせで。いろ〳〵なこんたんが。きこへいすのさ。ミなんしこふでおつす　トかくまねたして　おまいさんハいつおいでなんしてもおとまりなんしたとハおつせんから。お内(うち)のとは。あんじハいたしいせんけれど。こつちへお出(いで)なんすとがひよつと。お内へしれいしてハ。わるふおつすから。わたくしハがんがけをして。金(こん)へいとうをたちものにいたしいしたとミんなへきこへいすから。いゝではおつせんか【かふろ】ほんにそふでおつすよ【ほう】おかしいといつてハおつせんよ　トしやべりちらして　またいつてめへりせう【客】もふちつとあすんでおいでな【女郎】コレサこれをかたづけてもふやすミや【ほう】ろうかへ出てせうじのあいだからかほバかり出していて　見なんしわかづるさんが。あのとふりとこいそぎで　おつすものふ【女郎】またそんなとをおつせへすよ【ほう】じやまがられているともおつせん。たんとおたのしミなんし　トせうじひつしやり【女郎】口のうちで　しつたかすかねへよ

【ホや】なるほどこいらハ。まだあどけねへにもいたらねへ。かわいらしいせけへでごぜへやす【客】このくらいなときハ。たがいにあくがねえから。しぜんとおんかで。いりくんだおもしろい事(こと)ハあるめへが。實(じつ)に戀(こい)の情(ぜう)はふかいのさゝるおいらんが。客人と向(むか)ふじまへ出たときに。もしへ。あんまりくさの

なかへおはいりなんすな。なにがばけておりいすかしれもいたしいせんといゝやしたが。ちよつとしたとだが。ここいらが女郎の情になつていやす【本】さようさね。金魚をもちあそびにして。かわいそうにさぞくたびれたろふから。ちつとやすませてやりいせうと盆のうへへならべてねかしておいたと同日の論でございやす【雲】この次ハわつちがよミやせう

○茶かした取組

内ハ小ミせ
客ハちよつとした所のわかいんきよ
女郎ハ部やもち
尤なじミ

朧夜の風あたゝかにして。空高く飛ぶ雁の聲ハ。つめ引のいたこと共に。かすかに聞へ。中庭の梅が香。傾城の袖にかをりて。おしろいの匂ひをまし。お茶づりなんしと千鳥焼に。赤みそのふきのとうをあしらひ。はり〳〵のよめ菜青〳〵として。おのづから春の色ふかく。ほろ酔きげんに【客人】ハ。蒲團のうへに。からだをはんぶんのせて。手枕に寐ころび。唄をうたつてゐる【逢方】しんになつて耳かきできんかんのたねを出している【客】なんだ。いゝとしをして。ほうづきでもあるめへ。よつぽどよくできたもんだぜ【あいかた】あいさ。おまいに似てさ【客】おれに似ればいゝ女だ。そふしたら。こんな内にはいやァしめへ【あい】そふさねへ。その口ににたなら今時分ハ。豆藏にでもなつていゝせう【客】てめへの下の口に似ると。

かしうのばけものだ【あい】わりい口だよ。これでもたべなんし ト すゞりぶたのくわいをぶつける 【客】ヲ、い
てへヽ【あい】ヲホヽヽいゝきびざんす【客】おぼへてゐろ【あい】なにをしなんす。こつち
のほうへこゝげていきいした【客】大きにおせわさ
ト くわいをさがしながら。床(とこ)の間(ま)のすみへ手をやつて。かみにつゝんだものをだし
【客】これはなんだ ト あけてみて ごふりざとうか。きめう／＼【あい】あれさこつちへおよこしなん
し
ト とらうとする。やるまひとするひやうしに。すそがあおつてあかりがばつさり
【客】さあ／＼大さわぎだ。まあこゝをはなせ【あい】よこしなんすか【客】ヱ、くすぐつて
へ
折(おり)からくるはふり袖新造(そでしんぞう)
【新ぞう】どうなさりいした。まつくらだのふ【あい】花の香(か)さんあかりをつけておくんなん
し【新】あい ト ろうかのかけあんどうの火をうつす 【あい】これなこゝのたもとのものをとつておくんなんしよ ト ふたりして
ようよう／＼と とりかへす 【客】ヱ、大きに御くろうだつけ【あい】いゝむしさ。これハおせつさんのとこへや
るのでおつす ト いふハ此客のむすめのきなり 【客】そんならおれがもつていつてやろふ【しん】巻ぎぬさんおよ

しなんし。あのおとつさんハ。いじがきたのふおつすから【客】いまいさわぎで。でへじのものをなくした【あい】なんざんす トそこらを見て ヲャ／＼うらないをするものがおつした【客】それだ／＼【しん】さんぎとやらかへ。ぬしハうらないをなさりいすか【客】うらないはめへじんさ【あい】花の香さん。だまされなんすな【しん】本とうでおつすかへ【客】ひよつとうらなつてやると。うるせへから。しらねへふりをしているが。待人でも身のうへでも願いとでも。てきめんにあたるがきめうさ

トいふ所へほうばい女郎来り

【ほうばい】竹吉さん。そんならわつちに身のうへを見ておくんなんし【客】どれ／＼ トさんぎをなげちらし ウ、これはシンタン。カンヨヲノ。スンカンナイの封にあたつているから。おめへハちいせい時分からでへぶくろうをしたもんだわへ【ほう】きめうでおつすよ。そして。両しんがおつすが。まめでいゝすか。それをミておくんなんし【客】ずい分たつしやだが。久しくたよりがあるめへ【ほう】ほんにそふでおつすよ。去年のはるたよりかあつたまゝ。それからおとづれもおつせん。それにあにさんはあにさんで。いつそかゝさんに【客】これさそんなにいゝなさんな。おめへハ兄弟のうちに。どうらくなものがあつて。おとつさんもくろうをするだろう【ほ

う】あいその兄さんのとき。今では江戸にいゝすが。来たとうざにはこつちへもたび／＼きいしたけれど。わたしがくろうをするもきつしもせず。にくいといつてはおつせん【客】ゥ、そふだろふおまへにもぎりのわるいとがあるとこへる【ほう】まとにちつともちがいゝせん。そしてね

トくどくきゝたがるのをおしのけて

【いまひとりのほうばい】もしへどうぞわつちにも見ておくんなんし。ねがひごでおつす【客】ずいぶんさトさんぎをなげてゥ、これハヲンイン。チンノ。メン。メンコンの卦だから。このねがいハ長びきやせう【ほう】そうでおつせうよ。まあきうなとにはめへりいせんとさ【客】いづれ身のおちつきのねがいだろうね【ほう】マァそんなもんでおつす【客】ずいぶん気をながくしなせへ。さきでもしんじつなもんだから【ほう】ヲャほんざんすかへわたくしもまあ。あんまりふじつらしくハおもいへせんのさ。ちかいうちに。ほかへでるといゝしたが。本とうでおつすかへ【客】なるほどおそろしいものだ。外へ出るといふ卦があらわれている【ほう】それでもその。うへに立人に、きにいつているだけに。けつく手間のとれることもあろうかとおもいゝす【客】いつたい此人の身のうへをかんがへるに。これはまづ主人もちで。番頭とかいふような人だね【ほ

う】とうしてしれへすだろうねへきミのわりい。もしへ此ねがひはかないゝせうかねへ【客】たげへに。しんじつできさへあれば。かないそうなものさ。もしそれずれ死ぬよりほかの了簡ハねへね【ほう】ほんに。ふかくかんがへれば。そんなものでおつす。またいつでめへりいすからよくミておくんなんしよ（トふたりながらかへる）【客】てめへにもミてやらふか。おれがかくしげいハ何かあらふかもしれねへ。ごうせへなもんだ【あい】（はんきりのはしへなにかかきまるめて出し）もしへこれは人の名をかきいしたが此人ハどういふ氣でいゝすの見ておくんなんし【客】女か【あい】いゝへ男でおつす【客】客人か【あい】マァなんでもいゝからはやくおつせへし【客】（こいつおれか名たかいこよくちかまつさんだなとさつし）ゥ、これはもう中年の人で。男ハよし。じつもので。金ハあるめへが。なんでもたいのもしい人だはへ【あい】それにちげへおつせんか【客】ちげへねへのさ。そしてあだごゝろで人をまよわせる【あい】あけて見なんし【客】コリャァなんだ【あい】おまいのきらいなひきがいるでおつす【客】おきァがれこいつハあてちげへた【あい】おまいは人のいふ事ばかりかんがへて。いゝかげんな事ばかりいゝなんす。こつちでだまつてゐると。見なんしちつともあたりいせん【客】あたらねへはづだ。此さん木はよいに土手でひろつてきたのだ【あい】それ見なんし。おいねへうそつつきざんす。それだからもふ。ゆだんがなりいせん【客】ゆだんしねへがいゝ。

せうがいろ男だから【あい】あいさ男がよくつてじつがあつて。そしてこゑハよし。ひきがいるにそのまゝでおつすヲホヽヽ【客】それでてめへがまよつたといふやつだ【あい】よくおしやべりなんすよ（トきせるでたゝく）【客】ヲヽいてへ。きりおとしからばちがあたるといふだろふぜ【あい】さァ〳〵もふねなんし。やかましくつてなりいせん【しんぞう】（さきほどよりあんどうのかげでいねむりをしていたりしがふつトめをさまし）おやすミなんし（ト出て行く）【あい】エヽもふてうづにいきたくなつた【客】いつてくるかいゝまたそけへらい。たれられちやァ大さわぎだ【あい】よしておくんなんし。ね小用でもした事のあるよふに。人ぎゝがわるふおつすよ【客】ちいせい時には。きつとたれたのさ【あい】ハられへ口だのふ（トろうかへ出て）まだよふがあるからねずにいなんしよ【客】ねろといつたりねるなといつたり。さつぱりわからねへ【あい】まくらをおつつけて。ねずにいなんしといふとでおつす【客】ハイ〳〵

トまくらをならべて床の上にすはつている

【あい】すかねへどうでもかつ手にしなんし

【本や】こりやいけじやうだんな客で折〳〵いのちのせんたくにくるのでございやせう。こんなふらの客はとぼけてむすめなんぞをつれてくるのがよくあるやつさね【雲】ちつとづゝの用ハたりるとミへて

まんざらにもしねへよふだね。さる女郎がはなしに。死ぬのいきるのと。こりやつた中にすゑのとげるのはまれで。さしてほれたでもなく。ぶら〳〵とくる人に。ついせわになるよふなものが多いといゝやしたが。そんなものかね【本や】さてその次はどふいふとりくみだね

○馬鹿げた取組　内へ 小みせ　尤 初かい

まだひけ前の二かいのけしき。おあつらへのうなぎ。ぶん〳〵として。南一のおごりに客人のはなをひこつかせろうかへつき出す長ぶたの大平。むなしくたらの骨ばかりにして。あだしが原の露をものこさす。あがるお客にあく藝者。やりてに叱られる新ぞうあれば。ひとりきた一座にうらみをいふあり。若いものゝいそがしいさい中裏ばしごをあがつてくるは【内げいしや】（今日がかゝつたとへて、片手で帯のむすびだまをなで。かた手でかんざしをさしこみながら。せうじをあけよふとするところへ）○（となりの部やからでる）【しんぞう】ヲヤこゝではないよ。下のまきの葉さんのとなりだよ【げい】すかねへ藤助づらだよ（トいふ所へ）【二かいまはし】（まるの大ぼんに。おはちと。夜しよく茶わんと。こうのものとあら煮ものせたやつなめち。うしろから）すかれねへでせへだから。すかれたらなめころされやしやう【げい】おいねへへんほうらいだよ【しん】これな藤助どん【まわし】ハイ（トふりかへる）【しん】これ〳〵かおめへによくいつてくれといつたよ【まはし】そりやァ御きんとうでございやす【げい】道芝さんれ

御ぜんせいだね【しん】おゝきにさ。ちよつときゝなよ。こゝの客人はの（ト小ごへにて）初けへいすかれへやしきの人で。よいきつてねているわな。清花(きよはな)さんの客人もやつぱり初けへでおんなじよふなよい〳〵が。ふたありならんでいるからおかしいではねへかへ

トいふをとなりのとしまの客がきゝつけて

【客】なんだ。そこでべちやくちや〳〵いふなあ。どこの唐人(とうじん)だ。よい〳〵だらふが。いぬのくそだろふか。うぬらがせわになるものか【しん】ヲヤこわいのふ

ト二人そう〳〵にげ出(いだ)しはしごをおりる音トン〳〵〳〵おりた時分(じぶん)に「しつたかよう引廊下(ろうか)バタ〳〵せうじあける音スル〳〵〳〵（何がおかしいか）（ヲホ、、、、へ、、、、、ト）わらいごゑがきこへて。此客のかんしやくにさわり。むしやくしやしてこたへられねども。あいてのないけんかもできずひとりごとにぶつ〳〵と

【客】いめへましい。つれでもあればはなしにいくが。ひとりの初けへであしくされたいは。つまらねへものだ。あかりはきへてまつくらなり。もうひけだろう。おもいれごたくをきめてやろうか。しかし中(ちう)の字(じ)も。もうふるいから。やくおとしをしたとおもつて。諸事(しよじ)むちやにしてけへるべい。

トさぐり〳〵帯しめなをし。そこ〳〵にしたくして見せへかけ出し

これわけい衆まだひけめへか

折ふしわかいものゐやわせず此ころ來た中ばたらきがゐて

【中】ハイもふひけはうちました【客】ちよつとそこまでいつてきてへ。ぞうりを出して下せへ【中】女郎衆ハ【客】なにいゝ〳〵【中】さようなら　トはきものを見わけて出してやり　おはやくおかへりなさりまし【客】じきにいつてくる

○扨となりざしきの新造の客此ときふつとめをさまし。よいの酒もさめてしまい【客】ヲヽさむい〳〵サア〳〵小便大づまり

トそう〳〵かけ出し小用所をさがしあるき。よう〳〵見つけて。ひよぐりちらし。よいざめのはださむく。ぶる〳〵ふるへながらまちがへてとなりの部やへかけこみ夜着の中へ手をいれて見て

ヲヽあつたけへ。こゝだ〳〵。なんにしてもくらいにはこまりの天神だ

トふるいしやれをいゝながら手あぶりをかきまわすとちいさな火があるゆへ

ありがてへ〳〵　トあぶらをつけてふう〳〵とふくとばつともへる所をあんどうへうつし　きめう〳〵あぶらもあるがなぜきへたろう　トあたりをまわし

ヲヽやぼでねへ。しやばへ出たようだヲャ〳〵いゝ部やだねへ夜着なんぞはしやれたもんだ。し

かしどんな女だかからつきりむちやだェ、はやくくれべいゝ。とれいふものゝまつ内がつぼミか。ありがてへ。なるほどこうすつぽりとねて。びろうどのはんゑりがけむしのたかつたように。ミゝのあたりでむず〳〵するなあ。いゝ心もちだわへ

トひとりことをいつている所へくるハ此へ座の女郎。こゝろやすい一座のざしきでとつちりのんで。とゑんこ目にちどりあしで。ろうかよろ〳〵がたぴしとせうじをあけてずつとはいり。客のちがつたのにきがつかず まきじたにて

アイひへもんでおつす御(ご)めんなんなんし トよぎをまくつてはいる【客】ねたふりをしていたるがめをあいて ェ、びつくりした。おめへごうぎによつたの【女郎】ヲホ、、、、、なによヤァいたしいせん。ぬしれいつ酒(さけ)をおふるめへなんしたへ【客】わつちもよいにれおゝきによつて。なにをしたかさつぱりしられへ【女郎】さつしやれさ。もしへ一座(ざ)の客人が。きなんしてねヲホ、、、、いつそ酒をのめ〳〵といつてヲホ、、、、大(たい)きにたべいしてね。それでぬしをひとりおきいして。おそれいりまめに。はなはだおきのどくざんすよ【客】ごうぎにしやれるの【女郎】わつちらァいくらさけをたべいしてもっついに人のよふに。よろけまあつたとれおつせん。はつにお出なんしたぬしに。申にくいこつておつすがヲホ、、、 そりやァもふ三百六十よかんにち。よるひる七八人づゝ。おちや

う客人に。ついに。りひのわからねへをゝした事なし。五分でもまちがいのねへわつちでおつす【客】ゥヽ、ありがてへ。そりやァいゝがおらァさむくつてならねへ。もういつへいのミてへが。法れあるめへか【女郎】さつきのさけがたしかあるもしれいせん。そこのとこの間を見なんし【客】どれ〳〵ヲ、あつた〳〵こりやァきつい【女郎】こゝいとつておよこしなんしァホ、ぬしをつかつておきのどくだねへ【客】おきがどくだから茶わんでやらかそふェ、うめへ〳〵【女郎】わつちにもおくんなんし。あれさいつへいつぎなんしな　ト ひといきにぐつとのむ　つめたくつていつそよふおつす【客】もういつぺいのもふ。おつとありま筆だ。なむさんおてうしぎりか【女郎】もつととつてこよふおだしなんし【客】もういゝ〳〵よしにしねへ【女郎】そんならよしなんし。わつちやァもふねるよ【客】それがいゝ〳〵【女郎】ヲャぬしは見なんしヲホ、ゝ、さけがさめたら貞がかはりいした【客】どんなにかわつたへ【女郎】いゝ男になりいした【客】かくもんだの。そふかゝれちやァ。しミて湯にやァへゐられねへといふしろものだ【女郎】ヲホ、ゝ、あゝよつたく〳〵　ト□□□□□　【客】今うつの〻七つかね【女郎】かねつきばうさんにきゝなんしよ【客】もうちつとこうしな【女郎】アレサまあまちなんし　トしばらくはなしもたへたる所からとなりのせうじをあけて　【しんぞう】ヲヤまつくらだのふ御めんなんし　トしきりのふすまをあけてあかりをうつし　清花さんわつちの客人ハどう

しなんしたろうねへ（トいへどあいさつかないゆへ）ア、きミのわるい（トかけだして一ばらくしてまた來り）【しん】清花さんぬしの客人ハいなんすかへ【女郎】おいでなんすわな何をさわぐなばからしい【しん】ほんにおいでなんすかへ【客】おとなりのおいらん。こつちへおはいりなせへ【しん】ごめんなんしよ（トへうぶのうちへはいり客のかほをつく／＼ミて）ヲヤぬしハ（トらうかへかけだし）清花さんちよつとおいでなんし／＼

【本や】なるほどこいつハ大まちがへだ。しかし旅のはぢハかきずて。新ぞうをかつて。としまをだいてねたから大きにかつかうだね【雲】此女郎もよいだおれの。いくじなしでもあらふか。こゝじやアまさかわらつてもしまわれめへから。もしへこれもふしぎのゑんでおつすから。どうぞちかいうちにきなんして見たてがへにして。あすんでおくんなんし。これぎりにしなんしては。あんまりばからしうおつすと。本ねをだしてよぶようにでもせずハなりやすめへ【本】マアそんなものかね。サテあとはもふ一茶でございやすね

○うるさい取組

内ハ大ミせ
客ハむすこ
尤セかれた中　女郎ハ中三

引過の二階靜にして。上ぞうりの音もたえ。れんじへかゝる雨のあし按摩の笛のものすごく。はるかにきこゆる拍子の音。いとしめやかなる折からに。ろうかの隅の小ざしきより。そつと

出たるふり袖新ぞう。あたり見まわしぬきあししてあんどう部やへしのばせたるおいらんの手をとりて（いたつて小ごゑにて）【しんぞう】サァそこへおはいりなんして。つもるおはなしをなさりいし。いつそみんなが氣をつけへすからかならず大きなこゑをなさりいすなよ【客】西も東もしらねへおめへにまで。くろうをさせるかんにんしな【あいかた】なんにも申しいせん（ト手をあわせる）【しん】もしへわたくしの。あそこへかくれておりいすから。さとられぬよふになさりいし（トいふへひさしきなじみなるがたがいにじつにこがいりすぎ茶やのさがりにせきとめられ此しんぞうの客にばけてしのびあいたるうれしさに）【あい】もしへわたくしのしん〴〵かとゞきいしてし。こんなうれしいことはおつせん【客】おれもひさしくあわねへうち。もしやどんな氣にでもなりはしねへかと。あんじくらしている所へ。きのふのふみ。たのしみができたろふの。あいそがつきたろふのと。何もあんなことをいつてよこすことはねへ【あい】それでもぬしは此ごろ角丁へおいでなんすといふ事を。きゝいした今までどこへつき合にお出なんしても。としま業をおかいなんしたことはおつせんに。どふいふわけでそんなきにおなりなんしたへ【客】なにさわけもなにもねへ此ぢうつき合にいつたときに。一座で見たてゝだしたからしかたがねへ【あい】それになぜたび〴〵お出なんす【客】初けへぎりてハ一座がよくねへから。ぜひいつてくれろといふからゝ。二度いつたばかりだ。せつかくくろうしてきたのにひさしいもんだそんなぐちをいわず

と。笑ひ良をミせてくれろ【あい】それでも。たび〱見かけいしたといふ人がおつす。わたくしハぬしもしつておいでなんすとふり。兩親ハとうにほとけになつておりいすしいもうとハあつてない身のうへ。おやにも兄弟にもぬしばかりのたよりでおつす。それをしりつゝいなんしながら。そんなにうわきばかりしなんして。すゑにハわたくしを。ろとうにまよわせなんすのかへそふいふぬしでもないとおもつて。ほれいしたわたくしの。今のくろうを。ちつともふびんとおもひなんすならバ。おとなしくしなんして。おとつさんやおつかさんの。おきのやすまるよふにしておくんなんし。そふすれバ。來年わたくしが。らく身になりいしても。なにかのつがうにいゝでハおつせんかへ。ぬしのきのしつかりしなんすように。堀の内さんやごしやもんさんへ。おんがけをいたしいして。火のものだちや鹽だちも。どうぞとおもふこゝろから。それなそうとハおもひなんせず。あんまりでおつす トひざにもたれておこわずわつとなきいだすつぎの間にハしんぞうがもししれたらばなんとみんといきをころしてきゝ【客】これさどうしたよ〱 トいへどこたへもせうたいなく 〇
ぬおおすきかハッ山かね□ねず稲が。二かいをまわるひやうしにさきかせじとたもとをはらへおしあてゝ
つくへ…ながら【あい】もみおや〱。ほんに榮さんハ。角丁のほうへお出なんしたかよ。しミ〲にくい女郎づらかェ、くやしい トなきくづミゆめうつゝにもわすれぬまと【客】はなとりせんかたなくよせかへさんにハ人めあらいか〱れせんと士びんの毛かうつしにのますれバ【あい】つかふかふ もしへどこにお出なんす。いつそこゝがせつない【客】おれがだいているよ。氣

がついたか。これさ。しつかりしや（トちからをつける　とひそ〳〵ごゑ）【あい】あい【客】どうだいゝかよ【あい】もうようすが。もうちつとそうしていておくんなんし【客】そんならこうしや（トだいていながら　よぎひつかけ）てめへもあんまりぐちなもんだ。きのふやけふのおれでハあるめへし。初ミせの時分から。たげへにかたいやくそくをして。たとへどんなまづしいくらしをしても。いつしよにくらそふといふ。てめへのしんじつにひかされて。ミじかい年季とハいゝながら。けふが日までも。いろ〳〵とくろうして來とふした。おれがこゝろいきは。わかつているだろう。死んでもきへねへ。これ此ほりもの。ばかなことをいふよふだが。此ごろのよふに。ひさしくあわずにいると。しんにあいてへ見てへとおもふときにも。てめへだとおもつて見れば。ちつとハむねがおちつくようだ。たとへどこへいこふが。そりやァ友だちの。つき合づく。たび〳〵ミうけたといふのハ。人のしやくりだから。そんな事をくろうにせずと。きをあつさりともつて。かならずわづらつてくれるな。ほんに黒丸子をもつてきた。こりやァてめへにハ合ぐすりだから。まい日わすれずにのむがいゝよ【あい】おとつい藤さんに。とづけをしてよこしなんした。茶やのほうのとも。いよ〳〵すミいすつもりでおつすかへ。わたくしも半分ほどハつがふしておきいしたけれど。どうぞぬしにおめにかゝつてとおもいゝしたから【客】そりやァ大きによかつた。

まあちつともやつておこうとおもつたが。いゝようがきにくわねへから。なりたけすつ。パりすませてしめへてへ【あい】そふなさりいし。このごろハいつそきざなとぺかり申しいす【客】てめへいしんじつハ死んでもわすれねへ（トだきしめる）【あい】ほんとうでおつすかへ。かならず見すてゝおくんなんすなよ【客】てめへのような情のある。かわいゝこゝろいきなものを。なにがふそくで見すてるものか（ト口と口）【あい】（につこりわらつて）どうぞこゝろしておくんなんし

【本や】こりやアたまらねへハ【雲】こふいふせけへは。いわバたのしミのりにおちたのだから。おもしろい事ハなくつて。たがいにくろうばかりしているのさ【本】さようさもう一つまちがつたら。しんおらとでるやつでございやせう【雲】これで大尾だがマアもつていつて。とつくりと見なせへ【本】そんならおかり申やせう【雲】ちよつと祝義にひとつしめてもらおう

【本雲】シヤン／＼
シヤン／＼
ドツコイ
シヤン

傾城買花角力　尾

叶福助略缘记

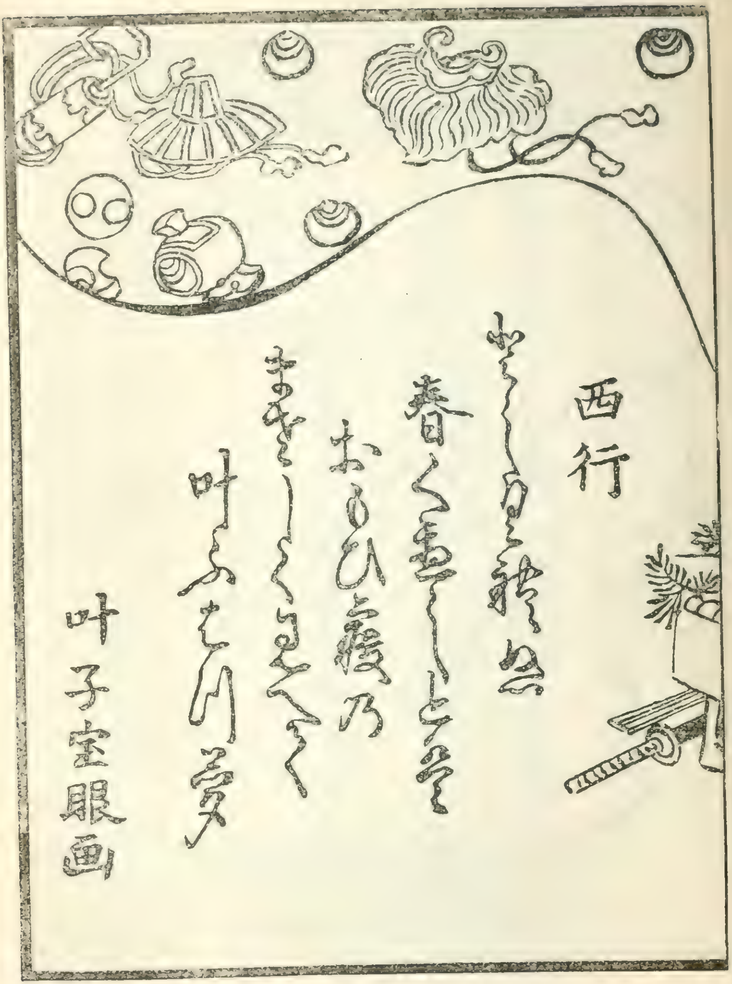
序

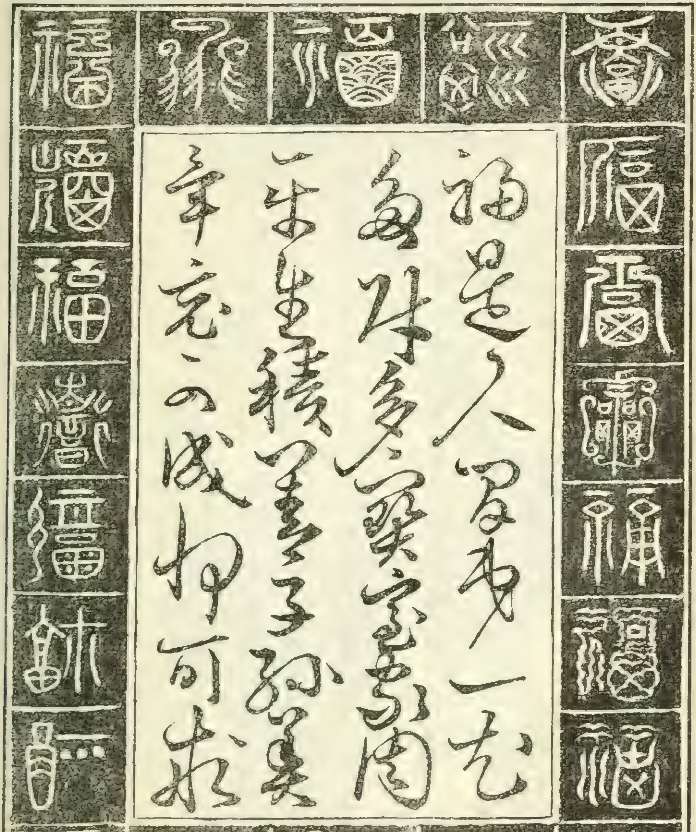
友人何某正月二日の初夢に叶福助を夢みて予に其圓夢を問夫頼朝公以來大天窓を以て名たゝる者獨福助ならすや嗚呼予夢の吉兆申さバ大黒天に按摩をとらせ辨才天ハお侍女布袋和尚がお茶道坊主福祿壽に團扇をあをがせ壽老人なお杖持見世ハ夷子に打任せ毘沙門天な金の番旦那の御果報樂隱居と即時一寸是を如斯かひてお子様方の御慰張この達摩を逆にして福助首ハ如何すと振鷺亭主人え方に向て半花水に筆を濡す

撰扯の

青陽

枕上片時
春夢中
行盡江南
數千里
岑参


西行
叶子宝眼画



叶福助畧縁記

此度回向院におゐて叶福助神の開帳あり迚両國邊の賑ひいふも更なり參詣群集の其中に田舍者親子連にて御當地はじめての見物ゆへ案内者一人先に立て旅篭屋から出て來る一人ハ四も五も喰ぬといふ親仁一人ハ慾の深そうなる婆婆一人ハ花嫁にて手織木綿の浴衣をひつ張田植笠に茜木綿のくけ紐つけたるハよつぽど見へらしき顔つきにて蛭や蝨に噬つかれたる泥の素足に藁草履はきしん〳〵はしよりにしたるしよちつぷり村一番のおしやらく風なり一人ハ檀那寺の和尚にて道中記の扇をかざし道勿躰らしく「もの爰ハあんといふ處だ」「こゝハやげん堀の不動さまでござりやす是から人でおつけいされねへからおれがゆく方へくつついてはぐれねへよふにしなさりやしよ　トいふゆへ四人ハあんないしやのしりにつゐてきよろ〳〵見物しながらゆく内よめはにわかに腹がいたみ出し目を白黒してくろしむゆへ大きに甚よたまげる　「アレはあまたつしやりましよアレサア鉦太皷をぶつたゝいてげへに騒申スはつとおもつたらのうてんへ氣を引づりあげてよこつ腹からつゝぱりかへつてゐぐり申スこりやハアこわいこんだ戻りますべいよ「そりやァ株敷の血道だんべいゐぎはなからあんとすべい「ナニはあかねたいこれ雨乞の祭でがな

あるべェわさ「ナニサあれハ兩國のかるわざのはやしさ今そこへゆくとわかるよ氣をじようぶにもつて念佛を申ながらあひびなせへ「モノ佐ゝ木殿の定紋のくつつけて長命丸と看板のうつてあるが藥屋でかなあるべェ「いつさい黑燒の藥ならなんでもありやすくしやミの黑燒あくびの黑燒血道にハ守宮の黑燒が奇妙さ「長命丸といふハあんの藥さあだ「長いきの妙やくサちいさんばあさん一包かつて長いきをする氣ハねへか川ひよふハ晩に二人の寢る時におしへてやろう「モノ然らバ一包かつて孫彥やしや子の代迄いき延ますべへ「そんな藥をのんでつゝばらミてもし申たら長いき恥多しだ「わしらあもその守宮の黑燒とやらをのんで血道のふぶつとめますべいト親子くすりをかつていたゞく「お寺さまにハ長命丸ハ禁物た此先に短命丸といふがあるサア〱あいびなせへ「ヤァげふに群集し申ス「うつたまげ申「こゝがおめへ方が見たがる兩國さまさ河岸通がつらりと水茶屋サ茶でものミながら此まあ賑な處を見なせへな「よめん女に買てきた藥さあのませたくおんじやるが腰をぶちかけたら茶代をひつたくられべへから水サア一ツばいもらつて藥をうんのまし申そう〇くミたてひやつこい道明寺砂糖水「水でも一ッぱい一文だよ「こりやァはあ水を飲にも村入用が出申ちやあ庄屋年寄談合ものだあよ「モノ在處てハ山河の清水などハのミ次第だあにさて〱當處ハきうくつな處だトおやじおしそふに一文出して水をかひていもりのくろやきをほだてゝよめがのミかゝるを「ヲツトまつ

たり硝子じやああるめへし守宮がのまれるものか此黒焼ハこうふりかけるのさ　トくすりをとつてふりかけろよめハあ
せじミたかをに黒やきがくつ付何の事ハねへかまの下からのたくり出たねこといふつらになる　「なんとあねさん心持ハどふだ「あんだかどうぜなかから水
をぶちかけられるよふにそつくら〳〵してあぢいな氣あいになり申たよ「きめう〳〵○御存の
南京操いらつしやい〳〵今か虎狩大夫揃はじまつたのハまけます跡札〳〵　どらかねたいこちやるめらとんちやんの音にびつくりして「ヤレはあおそろしいこんだ又血道さあつんでべいサア〳〵つゝぱしりもうそう　トせくこなたの矢場にてドレチリ
ンリンの音に又ひつくりして「おやつかなすんでに射ころされへいとし申たよ「モノ此弓矢を案山子へくつつけ
たら見事でよかんべい○雷獣じや〳〵いけどり〳〵かんなりのいけどりハ是じやせうの物をせ
うでお目にかけます　ト片番犬はちまきにてわり竹をたゝきたてゝいふを見「氣ちがひだんべいそばへよらつしやるな「なには
あ小屋の中でうなり申ハ家猪だんべへ田畑をあらして膽をいらしてなり申さねへいけ畜生づら
を錢寶をさんだして見物のするとハでつけいべらぼうだ○さき〳〵御ひやうばんにあづかりま
す狸娘ハこれでござりまする處ハ信州更級郡姨捨山狩人猿平がむすめ年ハ十八親のいんぐわ
が子にむくひコレ御ろうじろ看板の通りかよふなかたわな者に生れました見るハ善根見らるゝ
ハいんねん四文の錢ハ四門四宗錢ハお歸りかんばんに僞なしこりや娘よそれ旦那によくお目
にかけろ「ヤレ〳〵はあ哀なけねへはなしを聞申て涙がおつこぼれ申すよ「さんげのしめさる

順禮殿ハ娘の親たちだんべいにむごつちけねへ子をもたつしやり申たの「げゐにつくりたてゝゐ申ェうしろ姿をこゝから見ればわ孫作殿のせなあがよめんじよにいきうつしだあもさ「うしろからながら十念のさづけ申そうなむあみだぶつ〳〵「ノョでつかちなく炭小屋のかけてあるがあんだんべいな「あじよな○さきぐ〳〵御ひやうばんの玉本こきん今がてう〳〵一本竹紙わたり次ハ道成寺跡札かんじん〳〵「コレおめへ方ハ麥をついたり麁朶をになつたりして重業ハしたろふが輕業ハした事ハあるめへ這入ッて見なせへ「そんなあぶつかしいものを見申と又血道がびこつき申そふそれよりハうつついゐちこの目あきたちがべこ〳〵三絃のひゐてゐ申スを聞なさろ○義太夫夕ぎりなミだもろともにうらみられたりかこつのハ戀のならひといひながらそれハうわきな水あさぎ「水あさぎてもミづゝ田染てもィョおらかのめ「コレばあさんうかれなさんな外からほめると叱れるから内へは入ッて休ながら一段聞ねへ茶代十貮文て聞あき次第さそこで是を御たいくつといふのさ「在處でハいろりに茶釜をつゝかけてどん〳〵と焚て錢つこいらずに茶ものミ次第おしやらくふしの聞あきをし申スさあ〳〵いぎますべいよ一錢といふとにげ出すの是から廣小路のうまいもの見世を見たをさせよふ○おかけなさいお休ミなさいにうめんかなひやごうめんかな○大西瓜〳〵本なれ〳〵○かやうにやわり〳〵とおみがきなさるとしんち

うても赤がねでも此通り即坐に銀となるじやまいてうこゝもとにおいてお手にいれまするつらがかんばんうれるがしようこ千金万金の出ますする事ならバこしあんごふんべつもござろうが藥代が廿で四文わつか風前のちりじやコリヤこれお前方がおみがきなされて御座敷でのよいおなぐさミお立合のうちに御ゑんれよハないきせるをお出しなさいほうらくにみがいてあけます（ほうらくと聞てよめがこしにさしたるしゆらうの赤がねのきせるを出しみがいてあらひこくざに銀なかしとなりたるにきめたつぶし）「こりやァはあひか〳〵ぎせるになり申ていしや殿のくすりさらいぼういよふに光申お禮なかさねてしまするへい（トくすりハかわずにはしり出す）○とうもゐこしやきたて〳〵○あげたておみげよおめしなさい「モノ天麩羅とかんばんのうつて有か油揚のよふな匂ひがし申す「てんぷらとハしよむづかしい名てござり申す「モノ和尚さまたしかわし共のおんじいの戒名ハてんぷら信士とくつつけさしつたじやあござらねへか「わしも覚申さねへが戒名をうちわすれたら南無おんじい〳〵とおがんでも同じ事でござる「こいつハ大わらひぢやん〳〵おしようさんモシわつちやあ仁王さまがしんこうでござりやすが神佛の内でも仁王をおおむにハなむあミだぶつといふもよわそうなりなむ仁王さんといふもちゐがなしなんといつておがむがよからうね「仁王の眞言がおんじやる「なんとへ「おんつらまつかにおんつよそうなあつちらこつちらふんばたかりそわか「こ* 卯塔場のうしろの山にハ椎の木たらけで屁をこくう

*原本十丁・十一丁欠

ちにも一俵や二俵ハひろい中に「小ふくろで四文とハィャはやおつかねへ相場だ「ィャはやと
んだくたびれものをつれてきた○次にお目にかけますが當所兩國のけしきでござります正面
なすなわち兩國橋はしの長さハ凡九十六間むかふに見へまするがゑこうゐん橋のこなたハ廣こ
うじ見世物茶見せのてい右ハ本處一ッ目もと柳橋大はし三ッまた永代を限りて見へますまつた
左りハ北本所駒止橋しいの木三圍うしのごぜん角田川の土手を見はらし空にハ都鳥が飛こうあ
りさまてまへのかたハ柳橋おくらまへおむまやがしの渡し少しさがりまして川中へさし出まし
たハしゆびの松夫よりこまかた堂竹町花川戸淺艸くわんぜおんにハ五重の塔まつちやま今戸橋
にハさんや舟がのりこミますさて是よりハ夜分のけいしよく夕すゞミのていにござりまするよ
しのゑびす丸其外あまたの屋かた船にハたいこしやミせん上るりこわいろ舟ゆさんのてい茶屋
〳〵のあんどうちやうちん一度に火をてんじまして空にハ月星があらわれます玉やかぎやハさゆ
ふに立わかれましてりうせい玉火ほしくだりとうの花火をあげまする細工と手ぎわにお目がとま
りますればせん〴〵さまハおかはり〳〵「サァ是が兩國橋だおめへがた土のはしや丸太のはし
を渡るとハちがうによ三度いたゞゐてわたんなせへそしてはじめてわたるにハまん中の高い處
をふミはづさぬよふにむこふ迄わたるだうつかりするとつきのめされるよッレよしか○南無め

うほうれんげきやう／＼○木でもかねても耳掻が一文「とつさまな安いもんだ此耳くぢりぼうを一本かつてくれせへ正月ざしにし申す「コレ二本で一文にまけさつしやろ「かけねのねへ馬に一駄かつてもまからねへ「ヲヤゑちご屋のよふたあモシ「かうなら早く買なせい耳掻ハしけたよ一本よりかねの方かじよなめいてよふござり申ス「同し直なら中で いつそつふてらつこいのを撰どれへ「よくげハミだおんもねへのうみゝかき屋さん「アイサこふよられちやァくづが出やす（よめへみゝかきをとつてつむりにさし髪の前ざしをかつたきとり也）「あれ見せへ大だいこをぶつたゝいて來申たがあんだな「あれハもうのたいこさ又ふらねばいゝが「モノあめのふるのをたいこでしらせてまはるとハ扨／＼御當地ハ御ていねへな處だ○はなしうなぎ／＼○はなし龜○さんげ／＼六こんしようじようおじめにはつたいこんごうどうし大山大しようふどう明王なむきめうてうらい「アレはあ河へふつはまつてるきさしを持ながら勘定あいがちがつたかして大きな聲でとなり申す氣のどくなこんだの敵ハとうまおつくいのごくにおつとりまくといへども名におふ處の大剛の勇士にきりたてられ秋の木の葉のちるごとくとうざいなんぼくににげちつたり「アレ／＼げいにいきこばつて皆のふいきり中が談義そうな殊勝な事でおんじやる「ソレ橋のおりぎわだころぶめへおめへ方ハきよろつかせすとちつと下を見てあるきなせへ錢金がいつくらもはへてゐるよ○さき／＼

御ひやうばんの女曲馬ハこれじや〳〵○おかけなさい〳〵兩國名物よねまんぢうやき立さとう
餅〳〵○一山八文〳〵「サァ拜見しな是が兩國の名物サはらぶと餅でもさつまいもでも一盆ヅ
ヽおごんねへ何とむまそうじやあねへか「モノよめんしよおのしやあ新客にいたつた時江戸沙
糖のべと〳〵餅をつん出されて虫づかつゝぱしつたじやあねへかあまかんべい喰つけねへ物より
ハさつまいものでつかいのを一本つヽ辨當にほうばるがよふござる「清水殿の舞臺からおつこ
ちたとおもつて一山ヅヽおごりますべい　トさつまいもを買て皆よほうばりよめもよこぐわへにしてゆく内　「このさつまいもサァすじは
つてゐ申スせいか腹がつゝぱつて又血道がしやきばりだし申た「すきな事を御意遊すぜ血道も
すさまじいひもじいのですきはらかかぶるのだろうそれにハいゝ妙な藥かあるこつちへきな田
舍で見な五六里も山ごしに馬をひゐてむかひにゆかねへけれバならねへが御當地ハつゐくしや
ミをしてもくすりが間にあうなんと有がたい處だろう○こうばいさん匂ひ齒みがき口中一切の
妙やく「ぜんていよめごさまの御持病ハふだん口からは入ると見へるそれにハ此口中一切いく
すりを一口のむと立どころになをる　トはみがきをかわせてよめにのませるよめハ一口なめて大きにむせてなミだをながし　「是ハはあ香氣の高いく
すりさあて田舍ものゝ口にハあい申さねへたとへ此まゝおくつたばり申共もふ一口もいまれ申
さねへ「こかしをなめる氣になれバきつい事ハねへにおめへおつくたばると死ぬるよ死ぬと命

かれへよ命がねへとなんにもねへ「なんにもなくても息さへあれはよふござる「よしく／＼そん
なら此粉くすりはとつておいて此楊枝を一本おめへに進物にするから是でおめへ歯をみがいて
見なその口のくさい匂ひをさるが妙だよ「口よりは腹の匂ひをさりとふござる「はらも匂ふは
ずだはしめが守宮の黒焼ひや水さつまいもはみかきこいつは妙な御ちそうだなんぞもちつと食
腸のくすりがありそうなものだヲツトこつちらそつちへゆくと河へつゝぱ入る〇旦那大二階あ
わ等ならちや「當地へまかつてから米の飯ばかりて腹あいがさつくれ巾に茶飯なとをくつたら
ふつくれ巾そう〇おこしように一ッせん下さりませう〇めくめくらにになにもこしようこしよ
うとおほしめし〇ァ、お參り下向のたんなさまや御らんの通りかなひませぬかたわなものには
なお手もとばかりてたすかります〇こふばしい飴く／＼〇名代丁子燒く／＼「サァ是がむかし十方
八千金を埋たといふお寺さ〇是はふんてん御そんじの粟餅佛ほうさかの釋迦如來當處におゐて
御開帳の節より御ひやうばんにあつかりましてお手に入ますなれとも御當地ははんくわの地入
舩千そうあれは出ふね千そういまだ御そんしなき方もあらひてかなわぬなれバトヲ／＼ござい
く／＼むい字とういふ字も一人／＼北川の千年もぶゆの一ッ時ろせいが夢も粟のつきたて一ッ時の
あいぐわにちとせをのぶるおかれもはとちくわねバそのあおわひがしれぬどうりまつた山寺のか

ねよくなるといへども法師來ッてしゆもくをあてざればその音色がしれぬ酒屋の門に三年三月お立なさつても呑ぬ酒には醉ぬどうりいづれめしあけられましてげにかわ私が口上に違す風味相ようしきとござらバ御ひやうばんで御求下さりませう名代根元名代〳〵「これがひやうばんの粟餅つく處を見なせいおもしろいよ「わしらあ在處で粟や麥はふだんつき申から見たくでもござらねへ〇きよめのおてうづ〳〵〇せうかう〳〵「はぐれねへよふにおれにくつつゐて前へふんごり出なせへ（トおし合へし合てやう〳〵さいせん箱の前へゆくあんない者へふところから小錢百文出しさいせんになげて仰せんとはかふとする處をうしろからつかれて錢をとりはづし百ごとさいせん箱の中へおとし）「エヽいま〳〵しい（トいゝながら手を合せておがむ）そも〳〵此度開帳し奉る尊像な忝なくも南瞻部洲大日本七寳郡福徳山忠孝寺に安置し奉る處の叶福助神摩迦羅大黑天の化身なりそれ一切の衆生貧のくるしミを救はんが爲に假に福介といふ兩部二物の中間と現じ給ひ一代忠孝をつくし給ふ事はあまねく人ゝの知る處にして福介神ミづから御姿を彫刻せんと思召されけるが末世の衆生見ごらしめの爲に手輕くはりこの像を作り給ひもつたいなくも大あたまは福徳を表し數ぶとんのうへにすわらせ給ふは安樂無事のていそうまつた袴を着し給ふは我心を正しくもてよとの御事世にまれなる處の三國無双はりこの尊像と申は是なりもし人ゝ福徳を願はんものは我像をまつりて忠孝をつくさんにおいてはもろ〳〵の願に隨ひ富貴自在の身となる事さらにうたがひな

しとの御せいぐわん一たび拜する輩ハものまへ大晦日のくげんをまぬかれ福介神常に正直のこうべにやどりて守護なし給ふがゆへびんぼう神おそれをなして近づく事あたわず福徳滿足の御利生をこふむるべきものなりつゝしんで結縁のむすばれましよう○女中方ハ内おかんへとふらつしやりましよう○昔出し除の守りハ是より出ます○一まへ繪錦繪のミ影をてうだいあられましよう○れいほうハ左へ/\○是なる打出の小槌と申ハ福介神の御あたまもつたいなくもげほうのあたまなりとあざけりわらふ悪人ありしかバ福介神たちまちきいづちのあたまとなりつむりいうあより光明をはなつて種々の寶物をふり出し給ひて右の悪人を教化し給ふ處の寶物なり○是なる名玉ハむかしある長者の寶蔵のうちにて夜な/\うなる聲して光物出る人と怪ミけるにいまだ福介たりし御時にてふるふんどしをふるふんでやうに引かけて引おとし見給へバ是この世にいふ處の金玉なり○是なる竹の子笠ハうや/\しくも福介神いまだ折介たりし時しよに/\の夜是なるぼつてう笠をかぶり岡持をさげてとうふを買に出給ふ一寸ぼしの御姿ハなんの事もなくすた/\小僧のごとくにてかわおその化物なりと思ひてうしろより切かくる者ありしに御身を笠にかくして危き劔難をまぬかれ給ふ隱笠と申スハ是也○是なるかくれ簑と申ハ福介神御せいハちいさくあたまハ大きくわたらせ給ふゆへつむりより簑を引かぶり給ひて世の中

のよしあしを見ず聞ず言ずとの御ちかい則これなる短冊の哥はかくれミのうき名をかくす方もなし心に鬼をつくる身なれば衣笠内大臣の御染筆なり○是なるは心の錠まへを明まじき爲にさきをおりまげたる寶の鍵なり○是なるくゝり枕は福神の初夢枕の中て福介神大あたまなるがゆへに枕も御たいそうに大きくわたらせ給ふ是なるたんざくの哥に年くれぬ春くべしとは思ひねのまさしく見へて叶ふはつゆめ圓位上人の染筆なり○是なる名木は福介神我福德守護の神とならんしるしにとて撞木を土中にうへ給へばたちまち一夜のうちに黄金の花咲ぬ世にほしがる金のなる木と申は是なり○内靈寶へとふらつしやりましよう○これなるは福介神御姿見の鏡なりこれ福介神なおんつむりはかり鏡いつはいにうつりて肩より下は柄のごとくほそらせ給ふ則これ福介神の御かたち柄つきのかゞミに表し給ふ處にして當山第一の寶物心の御かゞミと申奉るは是なりつゝしんて拜あられませう一ヤレ／＼有がたいこつてござる　トこれより本堂へ参一休させつたい茶をのミながら
一ごちそう茶ならどふうりどふうりとのミますべい一人ミミにおつぺされて汗をこき出し申た
一ふミつぶされねへがめつけものァあねさん血道はいゝかの一さつきの歯みがきとやらいふ粉ぐすりでおさまり申たよ殊にそれさあのあついこゝろざして買てくれめされた楊枝とやらが開帳よりは有がたくござるいつしよう肌身はなさず大切にし申ス お禮の中よふがござらねへから

くげつぽうのまねをして哥をあんじ申たわらはれべいがぶちまけますべい「こいつハきゝ事どふでゑす〳〵「かたみとて齒くじりぼうをさつくれし君が心をあじやわすれべい「守宮のきどく有がたい〳〵「こつぱつかしい「あんない殿きかつしやい哥ハよめるきれうハ又村一番麥つき小町とあだ名をとつた女でごさる此都にもござるめへ「あれバとんだ化物ものだおめへ方の在所にこんな化物がはゑるならちつと買出しにゆこうこんだの開帳に見世ものにするといゝ錢もふけだ「錢もふけならいゝそうたんがおんじやる「おしようさん錢もふけとハ耳よりだね「されぼさ御當處へ活てる大蛇をもつてきてハどふだ「こいつハ珍らしいかもつてこられめへ「皆につゝんでたもとへもいれてこられる「それハ又どふして「されバサ聞ッしやいおらが寺内の蓮池に數年すんでる大蛇でござるが先月大夕立のした日雲をまいて天上しよふとしてふミはづしておらが居間へおつこちそのうち雲ハはれる大蛇ハまごつきそバにあるはいふきの中へは入ッて今にかくれて居申ス「そいつハはいふきをのぞくとおりやすか「いるとも〳〵大蛇も水けがなくてはしやぎ雲がおりるかと思つてハおり〳〵顔を出すじや又時〻はいふきの中で蛇のせきばらひがする「ほんにかへ「されバさたばこをのむとけむを雲かとおもつて大蛇が立あがらふとしてゴホン〳〵「此おしようさまハ噺のようなとんだおやかしぼうすだ扨ハいなか者

とハ僞りおれを一番あそんだのだな「よきかなや〳〵汝我〻をいなか者と欺り邪路に案内する不便さ善道に導かんが爲仮にいなかおやじと化したるハ壽老人ばゝハ是福祿壽花車形となつたるも方便各〻ほていおしよう辨才天とハ知らざるや汝よこしまなる心を改て正直に信心をなさハ今より富貴の身と成へしゆめ〳〵うたがふ事なかれとの給ふかと思へば忽然として一睡の夢ハさめぬ

日出鯛尾

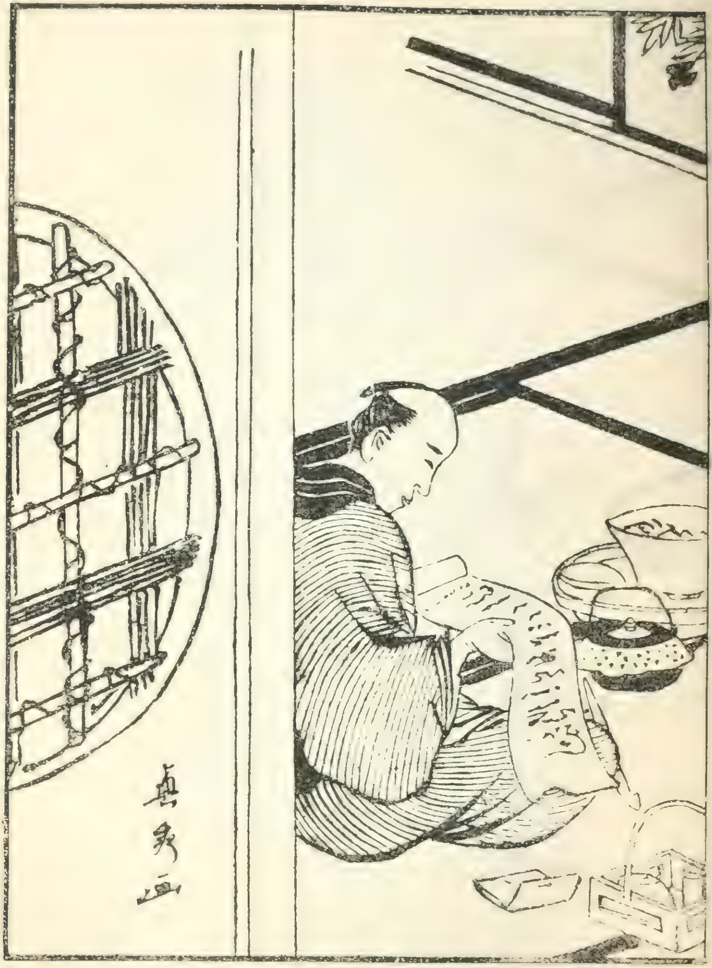
面和俱影

花妓素人 面和倶噺序

買物に飾れる花の蔭廓に。章書あれバたゝみ算。あふてうれしき夜半の契言には。誤言交のうまことをふくこと。申殘せし混章にれ、遊子の家藏殘さず投てうかれ迷ふも花妓の樓。予今年はじめてはな見に出て。荅の小女に抱とめられ。よしやれはなしやれ惡滑稽の冊子を綴る。元來旨趣は古釘の寸。足らぬところをこじつけ普請。鉄槌とともにやたらに口をたゝく事しかり

千里走春

壺樽亭主人記



品目

第一回　獨寐の咄し

第二回　あやなす噺し

第三回　眞のはなし

花妓素人 面和倶噺

遠樓亭主人戯編

第一回

見わたせば茶店旅館をこき交て。甲驛ぞ夜の錦梅。通も未至もおしなへて先を競ふ駕の聲ハ雁に似て。後興勝先興賞可以酒價などゝや謂つべし。國訛の慷慨話ハ喧嘩かとおかしく。鼻の下ハ妙法寺歸りの珠數の總とともに長し。長し短し揃ハぬ意説を。丸く取なす茶屋が挑燈い丸きも天然の道理ならん。蠟燭の流れはたへぬ驛の豐饒。おのがさま〴〵行違ふ「馬方 よんべおらがとなりのべら作めがうつけた事をしやァがつて大さわぎよ「ツレ馬士 あにをしたの「馬 あにお名主どんのところのァノおまメと下女出ゑひをしやァがつてあにをどふしたがながら歯だめのなけへおつぱまつてどけへ突かけたがないびの爪のうはなして目をつんまわすとおまメもどふしやァがつたかそけへおつころんで腰のほねを引ちげへてくびが廻らぬといふそふすると

アノ五郎兵衛どんのおぢごか出て來たのよそれでもあのおぢごハちつとァ物よミもしたげだに
醫心もあるげだァなる程それだけの事ァあるそれァマァつめ（爪）がなくつちやァならぬからこはぜ
の古ひのでもくつ付るがいゝとつてどつからかさがし出してくつ付たげだァがあんでもハァり
やうじハさま〴〵あるもんだァの「ツ馬 それァハァ いゝ時に五郎兵衛どんのおぢごがうちに
いたつけなァノべら作メもいゝとしをしやァがつて トいゝながらふりかへり あんだこのちくせうめはきり
〳〵いきやァがれ ト引はれバ馬ハ小便をしだし ジヤア〳〵。むかふから來かゝる女げいしや「そら ヲヤ〳〵八さんこつちへよん
なせへはねがかゝるヨ 男げいしや「酒八 ァ、くせへ〳〵いつそ青つくセへあをつくセへもまんざら
じやァねへしかしかう匂（にほ）つちやァぬすミもなァならねへス トミせへあがり「酒八 アイおうたさんのお座
しきへ「若者 いはゝやかエ「そら さやうしかれバごもつとも トあがる。明ひて歸る男げいしや「そへ 太夫 イヨ夫婦
づれハいめへましひな「そら きざなよしておくれ「酒 でへぶ長かつたの「そら ヲヤ〳〵おめへの
羽折のすそを見なせへヲホヽヽ「そへ なでゝ見て ヤアこいつァ又アノおよしさんだアアハヽヽヽト
すそに付し紙を取ながら出行く。これより酒八おそらも座しきへおさまりしハらしやれあれどもりやくす。酒事も出過て いたこ「ほれて見さんセ金こそなけれわしが心のつ
ゞくたけ「そら おめへさんのお心いきでござりますね「女郎 哥 フヽン トいつたばかり「茶や女 どふでこざ
ります ト客のひざをたゝく「客七 たくわい也 初 わらひながら エ、びつくりさセらアサアのまつし「酒八 イ、エモウたべ

ますめへさき程から大きにたべましたあんまりのむとこゝのかゝァがしかつてなりませんそれでもてめへの氣にむきますと一ッのミなせへ〳〵とすゝめますのさもふ〳〵すけべへなかゝァを持ますと大なんぎでござりますそふしてごろふじましあくる日けんばんをひかねへけりやァなりません「そら きざなおめへのやうなていし主をもつたら三ッ目入道でもうむものだよきびのわりひ これハ酒八がめつかちゆへ也 「皆〻アハヽヽヽヲホヽヽヽ「酒 そこでひとつたべませうコウ なんぼ目がふたつゝあるとつてそんなににらめるもんじやァねへよのミァしねへハな くびをふりながら へゝのまぬ心の中にもしハし トいひながらのむ 「そら いゝかげんにしやれなせへ トばちでせなかをちよいとたゝく 「酒 ア、いてへ〳〵いてへ七度くま野へ三どとは此時よりぞはじまり〳〵 トいゝながら新ぞうのそばへより 越後の國でいけどつたいへくらをのむけだものでござい サァいらつしやい〳〵 ト新ぞうのまへをまくりにかゝる 「新造 あれさァ ト立てにげる 「皆〻 大笑ひ・此内げいしやになかひかゝる 「半玉 もふ宴をまくにしてもよふござりませう 「七 それもよかろう トそれよりミな〳〵ひとつふたつすこぜわふあいて歸ト床おさまる 「酒 もしへおめへさんハどつかいつてるさしつたのだね「七ィ、ヱずつと來たのさ「酒 ナァニうそをつきなんしどつかおなじミのとけへいつていさしつて何かしうちがあつてけへるふりですつとこけへかごをつけさせさしつたのだねかげ見せでもミんながそふいつて居ますヨ「七 ナァニそふじやァねへのさ内のしゆびハきんじよの友だちのとこにあそんで居るつもりで

ちよつと來たのさぬしのとけへ來てへばつかりに「哥それァわつちらがやうなもんでわるふお
ぜへしたね「七ナニもつてへねへ「哥へヱ引さやうさ　トいふ所へせうじのそとから「若者もしちよつと「哥なん
だな　トいゝながらちう下へ出●しべらくして子何かはなしながら行供大せいきたる「七コゥおいらが女郎し衆客人でも來たのか「子供イヽヱ
なんだかしりません　トはぐらかせどもじつハきやくが來たゆへ女郎がいひつけてよこしたのなり「子供ちよコゥ三治どん金さんハどふした「三
じどふしたか此ごらァなぜか內にばかりいるそふだョ「吉じゥヽあのひつうけへているおけき桶金
んのぢゞむさか「三じィヽハうつちやつておかつせへ　トぶちそうにする「ちよアレまたさん治どんハな
きがほになつてはらァたつョしんにほれてるそふだァノヽせんどもおいらがァノ金とはなしを
していたらそれを見て居てのさん治どんがいふにやァコゥおちどんおめへでもあるめへおいら
と金さんの事をしつて居ながらといつたァなきざなあんなしらミつたかりとだれが色をするも
んかおいらァたゞ三治どんがおめへにほれきつているとつてなぶつて居たのョ「三治なんのお
きやァがれ此㾒小べんたれめが　トいゝながらくいつきにかゝる此金といふへまだ十二三の小ぞうなり子供らも●此さわぎのまだ十一十二のがきながらも見やう見まねにいろをする氣のあるもおかし中へ來る「三治それでもおちどんがいろ色
「哥ヲヽ〳〵此子いらァ何をけんくわをするのだしづかにしねへか
んな事をいひますものを　ト泣ごゑでいふ「ちよナアニおけ金の事をいひましたらよいつそはらァたつ
てくつつきますよ「哥わらひながらもふ〳〵てめへたちァそんなにけんくわァセずとあつちへいきや

〳〵（トいわれて皆ちり〳〵迯行）「子供（一人あわたゝしくかけて來り耳こすりなれども客へ聞へる也）アノ子幸さんがけへるといひないますよ「哥エヽモよくいろんな事をいふのウ（トいへともじつハ色容にてかねてかく狂言にて聞へるやうにわさと子どもにいわせしなり）「七（ずつと通た氣にて）どこへでもマア行て來なせへ「哥どふもいつそおきのどくでさいますいつそやかましい客人ッちやァありませんこんならちきィにきますからねなんすなよ（トおもひのほか心の内へいそ〳〵もので出行これよりやゝしばらく時うつれども女ハ來ず客はのつゝそつゝしてたばこ入もそこをはたきどふねてゐてもねられずなんのかのといふもずいぶんわるしとおもひそこらをさがし事などして女郎のたばこでものまんとたばこぼんの引だしを明るとふミのさきかけたる少しあり）

「七いめへましいこんやァこいつが來やァがつたにちけへねへどふしてやろうしらんいめへま

しい トいふうちはや引出す 「馬の嘶 ヒイン〱〱 「馬士 へひとりねるさへ小ばらがたつにヱ引あく
びアヽヽヽヽ引 「くゞり戸くわら〱〱

第二回

「客太郎 としは四十ぐらい日の目も見ぬ顔の色わる白しと見なり ア、大きに酔たく 「茶や娘 サアおやすミないまし 「太 ヲイ
くもふ何ン時じやの 「茶 ハイもふひけめへでござります 「太 エ、 「茶 こゝのつめへでござりま
す 「太 けふは仕入の事でやかましがあつておそくなつたじや 「茶 こんどからちとおはやくいら
つしやりましおめへさんはとかくおそくいらつしやるからなんのおあいだもござりません トはなす所
へ来るあいかた 「花町 二十三四にてきりやうもよしなく事がえて吉也 サアおめへさんかやのなけへへへんないまし蚊がさしいさあね
「太 さやうならお先へはいるじや トいゝながらついとはいろひやうしに蚊屋がまげに引かゝりはおけそふになるとひつくりしておさへるとつてつめてほうたつゝかさ アイタヽヽ
ヽヽ 「花 「茶 おかしけれどもわらはれもせず 「茶 ヲヤ〱おあぶなふござりますさやうならごきげんようさやうなら
いつもの通り七ッにおかごをつけませう 「太 そふじや〱おそうなつてはとつとこまるぞや
「茶 ハイ〱さやうなら花町さん ト出行 「花 おめへさんは足袋をとんないましなわつちがとつて
あけやしやう 「太 イヱ〱そのやうなぶしつけはせぬじや トいゝながらたびをとりたもとへ入にかゝる 「花 わらひながら そこの

あとのほうにおきないましな「太ハァそれでハどふやらぶしつけなやうなが爰にかの とあとの方におく
「花サァねなんしないつそおめへさんハ酔しつたよ「太 ぐら〳〵としながら へゐふたく〳〵五勺の酒に
トきいろなやうなしらつちやけたやうなあまざらしの黄ぎく・といふこゑおしてうたふこれが極〳〵一ぱいのしやれなり 折から奥座しきの方何かさハがしく若者がかけあがるやら大さわきなり 「太あれハ何事じやの「花
客人がはらァたつたのでざいませう「太イヤ〳〵やかましじやそふな出合すれなるまい扨〳〵わ
しがやうにわるひ時にばかり廻り合せるものハないじや ト立そふにする「花アレサそんなにあわてない
ますな爰へハ来ハしませんハねひとのはらァたつたにかまいなんすな「太イヤサ行かねバすま
ぬ トじふんの内ゝ紙になつて、むりに引はるひやうしにぶつと屁をひる女郎ハおかしさながらもむりにおしとめる 「太ハァそんならよいかの トねる「花 たばこをすいつけて出し もし
ヱこのあいだのみァとゞきましたかへ「太とゞひただんかあの末のほうのはやり唄でおこゝろ
ハわかつたとハいふものゝどふもしれぬものじやて「花おめへさんのやうにそふうたぐりな
いますことァありませんハテこのごろもおはなしもふしたとふりだものをナゼおめへさんハそ
んなだへこよひハまわしの客人があるけどもおめへさんのとこにばかりいますよ「太どふいふ
お心でそのやうにおもつてくださるかッレおやくそくのもの ト紙入から何か紙にぐる〳〵とやらかしたものを出す 「花ほんにお
有がたふおさいますこれであしたかゝさんがくるとやりますよほんにおやのためなればこそお
めへさんにこれなごくろうをかけますかんにしてくんないましよ「太ナニサおまへの事じやも

の此くらいの事ハやすい事さよしや命でもやる氣じやもの「花フゥヽしんじつなお心いきだね
うれしいねへ　トまくらの下へぐつと手をさしこミ　チウ「花サアこれをときないましな　ト客のおびをとききはだと〳〵　心の内でハ　ヱヽきた
ねへ

第三回

「客八五郎　としハ廿二三少し小男にて色ハ少しあさ黒くすこしにがミあり是ハ客の内なこのごろセかれてこよひハほかの茶やから初會のふりでひけ過にあがつたの也　「女郎菊里　としハ十九か廿ぐらいよつほどうつくしくこゝろ内でハたれかたなならぶるものもなき程なりこの頃少し心もちあしくむすび髪にておしろい斗少しつけてやつれた顔がかくべつうつくしく見ゆる也　「菊里　ひそ〳〵こゑ　アヽ座しきでハいつそおかし
かつたね「八ウヽヨしたがなんでも見付られめへ〳〵とおもつてアヽいつそ心ずけへだつけそ
れにおつたが（茶や女也）づきんをとんないましお初けへでそふなすつちやア女郎（菊里）しがおかしくおもひ
ないますとわるふござります〳〵といつそセわをやくにアこまりきつた「菊ほんにこまんなん
したろうねアノおめへさんハいつそやせさしつたねくろうをなんすゆへか地いろでも出來たの
かどふもゆだんがならねへぞ「八てめへよくかんけへでも見やおれが今このざまでそこどころ
じやアねへハそれアてめへのまわり氣だ「菊そしておとつさんのめへハちつともなをりそふか
ね「八ウンニヤまだとふともかたがつかねへがマアおゝきがかゝつて居るからどふかかうかな

らふハサハテ出來ざァしかたがねへハその時ァどふするものか「菊ほんにわつちもそればつかりくろうでおまんまもくわずにむり酒ばかりのんで見てもむねにばつかりあつてこのごらァおめへさんがいつきなんすかしれねへもんだから引こんじやァつがふがわるひからひつこむにァ引こまれずほんに客人でもあるといやで〳〵つるはらァ立セたり何かァしておかミさんにやァしかられるしもふ〳〵片時もあけしい間ハありませんハねそれにこよひマァかうしてあつたらよさそふなものがそんなちからねへ事をいひないますかな猶むねが一ッぺへになつてきいさァね（トうつむく）「八ァ、もふ〳〵是も親のばちだとおもやァはらもたゝねへがマァコゥてめへのやうにそんなにおもつてかならずひよんな氣でも出すめへぜ「菊ナァニそりやァあんじたいますなしかしこよひかうしてうまく狂言ハ出來てもこんどハ又どふだろうかこれぎりでわかれにならふかとおもへバいつそしんだほうがよふおぜへさあね「八ばかな事をいふもんだ死で花實がさきァしめへしハテ命があつてこそおもしろひ事も有こういふくろうもするといふもんだどふもそふいふ氣だからあんじられるァ、なんだかがうぎとふさひで來たいつそしやくがいたくなつた「菊それァわりひねへくすりをあげやうかへ「八ウンニヤ爰にあるからこしようだちよつときりを一ぺいもらひだ「菊（まくらもとのどびんからつひでやる）「八ヲッヽ有がたやま猫だ（ト新八を引よせ巾よりノすゝきを出すひやうしにちらりとみが）

出る「菊 ヲヤそりやァなんだへちよつと見セないまし「八 あれてゝ かくしながら なんでもねへョ トいゝながら烟草のミ「八 ア、いゝ心もちだ「菊 サァ今のものを見セないまし「八 アレサなんでもねへわな「八 そんなら よしないまし トすねてあちむき すこしとふざかつたうちにもふそんなこつたわつちが今いふ通りだ トほろり／＼と涙をこぼす「八 コゥそんなにはらァたつなそんなもんじやァねへわこんや來がけに聟浦へ セかれぬきへの茶やなり よつたら妾の三ッ濱さんのとこから吉がとけへのみだからとゞけてくれろとたのまれたからもつて來たのだそんなにはらァたつならよつとてめへの氣をひるて見たものよ「菊 だんまりで居る「八 コゥなぜだまつて居る トつゝつく「菊 アレサよしなんしこんなとこに居やうよりやァどけへでもはやくおめへさんのすいたとけへ行なんしさぞ待ていさつしやるだろうほんのつき合ゝに來てくんなんしちやァいつそうれしくもなんともねへ「八 コゥもふいゝかげんにしておかねへかそれならソレ見ろ ト目の前へみをつきつける「菊 ちよつと見て それァ外ヵのさ「八 そんなら紙入中でもどこでもさがして見やな「菊 少し心とけて ドレ見セなんし ト紙入の中やそこらをさがし見て ほんにねェいつそわつちにやァ氣をもませなんしたにくらしいのゥ トちよひとセなかをつめる「八 それで氣がすんだかおへねへ氣ちげへだ トそれより寂寥たる屛風の中しばらくありて「菊 エ、モゥかつかりして何のちからもありませんよァノ三ッ濱さんにわだまつているから子そのみを屆てやんないまし何か用があるそふだから はや明近くらう下をはく音さら／＼／＼／＼ はしのころがる音ころ／＼／＼「菊

そしておめへさんハつがうハいゝのかへ「ハゥ、マァいゝハ「菊それでもわつちがつがふして
おひたのがあるから手ちつとでもマァ持ていきないましな「ハゥ、そんならこんどくるにいゝ
といふもんだからそふしようか「菊こんどハ又れ茶やをけへて初のつもりできないましそふし
れへとひよつとしれると大さわぎだからね 折からかすかに聞ゆる表座しきのうた 上界へいやな人にももしつながれて
おもハぬ方へ縁あるならばいつそ死だがましじやものさりとハ〳〵はてしなや チャン「菊エ、
セゥいまにけへしもふさにやァならねへとおもやァしぬほどいやでならねへエ、モゥじれつて
へ トくだくろばかりだきしめる「作若日ア、なんとしよう
嗚呼此行末ハいかなるカ誠に阿漕がうらにひけ過の計策も度かさなればあらハれて総に身を
斃すに至るべし

面和倶嘶

自跋

魚は餌あるをしつて鍼あるを知らず。遊妓に興あつて害有をしりつゝ通ふも。悉皆虚と實のふた筋の糸にひかれくるまの廻り仕懸。尾羽うちからして。紙衣一重のそれならで。帋屑拾ふて世を渡るに到る。これを見てハ今迄細眼したる茶店旅舍徒も。かまふ事はない藤の火の見と。高ミで見物し。府境の石壁も。雪駄の銭の舌を出して笑ふ。嗚呼されど酒ハ微醉に飲。花ハ半開に見ると。古人もいひしにあらずや

遠樓亭主人

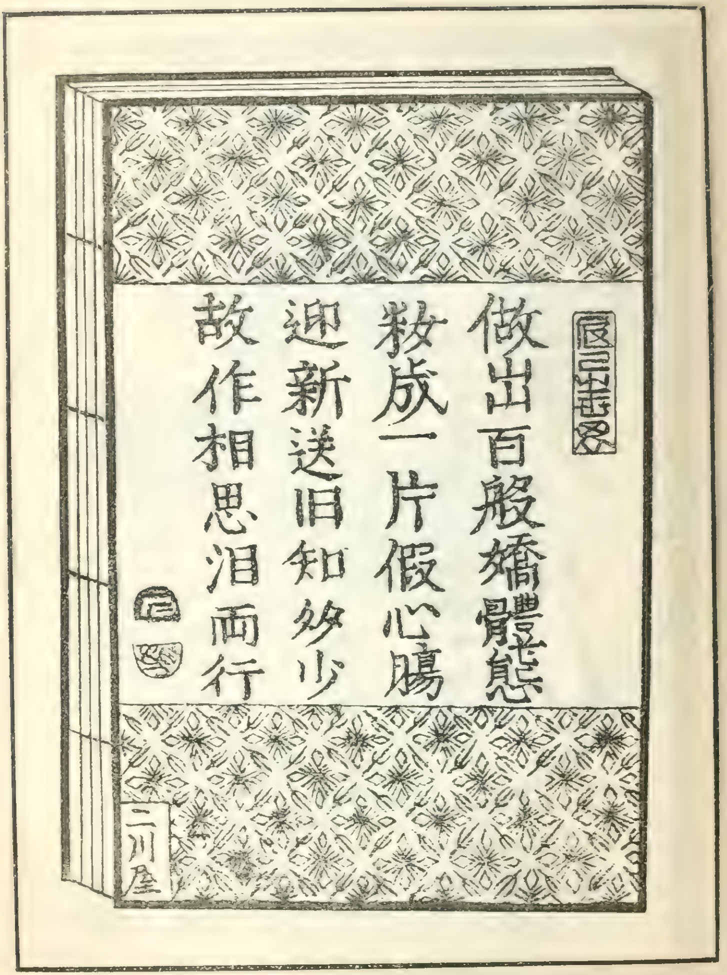
君ならは　つり
よしや　夜着
海老　命を　の
にて　進上　内
鯛　の
を

船頭滾話

四季山人戯撰
辰巳婦言第二集

船頭深話

酒落堂藏


傚出百般嬌體態
粧成一片假心腸
迎新送旧知多少
故作相思泪而行
二川屋

辰巳風俗當時流行寫眞

前後正横異様圖

巽濱の水清らバ以て朝歸の口を嗽がん。巽濱の水濁らバ以て陸歩の足を濯ハむ。淸と濁は客と密夫。實の眞水に乘出すあれバ。虛をつき出す八幡鐘に是幸の引潮あり。ぴんと心の空鎖は彼ピラ〳〵の後簪にして。娼妓の心底を見しらせ。五大力の銅物ハ船頭の烟包に附て。逆斤の无難を祈る夕の疳癪朝の更と變りつ。きのふの再會けふの玉章。御ン歸らせの跡引て。しこ〳〵苦勞の正札附。只御身の上不大切。勝手次第の出來合文句。必〳〵御ンはこばせ。御ンめもじの上ならでは。ワからぬ事もワかるのも。通と不通の中縞街。旨趣は勿論古市場を復新らしく後編に全部一本嵩を立。二川屋〳〵と云爾。

ゆし遊馴染の四季山人
七年ぶりて小本を作

附言

明の瞿宗吉が剪燈新話にブツヽカリ。船頭深話と題号をヨビダシならでフセたる而已。趣向をモラヒマワシにあらず。一寸外題にクチヲカケ秀句にナヲシた斗りにて。彼御ナジミなる辰巳婦言の跡をツケ。板元が御ムカヒを防ぐ。女郎一人りに客三人。一座ノモメのスミスマシ。一部始終をチトアチラヘト。全部仕舞の札をさぐるといふ

○青樓のしやれ本は遊子方言契情買指南にはじまり田螺金魚が虎之巻に冠たり辰巳のしやれ本ハ美地の蛎売辰巳の園にはじまり而后蓬來山人歸橋中古ニ甲たり其よりつゞいて諸名家の戯作年〳〵に増り月〳〵ニ倍す予が輩いかんぞ能く穿つことを得べけんヤ青樓辰巳の小冊毎部の趣向とふりて皆相似たり故に先年先人の糟粕をねぶりて辰巳婦言一冊を著す幸に世ニ行ハれり尤古市場の小說他ニ類書なし依之則チ後篇を作して以て外場所通の一笑ニ備ふる而已

○文法ハ前編の如く鄙俚片言を以てすたとへバ
「さやうでハござりませぬを「そうじヤァごぜへしねへ「御出なされませを「おいでないまし「このべらぼうハを「こんべらばァ
右のごとく器語する事多し推てしるべし

尾

辰巳婦言後編

おなじこの

四季山人 撰

船頭深話發語

遠き宿昔鎌倉の。都の巽しかも名も大礒小礒化粧阪の。纒計に遙越れバ迚。手越の宿と稱呼せる。放心蕩肝の娼街あり千門萬戶に酒色を鬻ぎ。美悪を競が其中にも兼て名高き市場の繁昌。今更筆に云も不盡。群來る若干の嫖客を。迎ひの船と送舟。參差たる行逢川。彼方に連檣の牡蠣売れ。廓下に束ねたる紙屑を思ひ。此地に山をなす蠙れ。新地樓をや吐けん。遙望榮鄭橋。字余り潮來曲と俱に長く。藍皮町の火見櫓れ。遊妓の氣性に似て高し。されバ釣舟に鮮魚を漁り。枝藏に名酒を湛るとも。いかでかおよバん娼閣の結構酒池肉林の歡樂を。こゝにあつむる全盛ハ、實に大都會の金藏の。財を費す土地にして。欲界の別境。昇平の樂國也。抑此風土を鑑るに。虚と實の汐境にして。はまれバ深き川竹の流の身なる浮沈を。汲わけてしる在行あれバ。

突出さるゝ竿頭遊ハ。誘ふ水の水心をしらず。つら〳〵想ふに。客ハ艀也娼婦ハ水也。戀の重揖。情の取揖。揖のふりやう悪けれバ。傀儡の浪。客の船をくつがへし終には一生をあやまつに至る。其艀催のさま〳〵なるハ。出舟千兩を費して。逆斥の最期屁を。充滿坪へ放飛せバ入艀千兩を擲て金屎を河西へ贈る即放蕩の發ハ若何。タッタ一箇の尻洞なり。たとへバヲ、さむいよと。しめつけられてハ一雙玉手千人枕なることを忘れェ、じれッてへまゝならねへの惑言を聽バ。半點の朱唇。われ獨甞る哉と思ふ。是を和漢にこじつけて評すれバ。一たび離き茗を喫して。淫聲の愢劇曲を闇記すれバ。朱子伊川も魂をへお連中なに奪ハれ。宰我子貢も神をへお近ひ内に蕩すべし。伍子胥棧橋に眼を止て四神舎がお浮雲ふと見送り。「センボ」の方言楊雄もいまだしらず。初會に出る娼の佛頂面ハ。褒似も鬪睨ハ。及べからず。口のかゝるに無塩君。閑て居る妓に小町あり。片道送つた黄頭郎ハ。范蠡が五湖に似て。亥後刻の子門ハ。暎噲が鴻門に一般。こゝに哀をとゞめしハ。朝更の俊寛。傭舟の贅價と共に。戀別を惜む。絶交て。未練の班女が思ひ。變愛妓の祇王祇女が心。只美麗によらず。嫖鬢によらず。愛則愛之雲雨の情。最愛と思ふ花孃の念力ハ。舟舍まで届き。可愛と思ふ客の執心ハ。九族昇天。艶容に戀慕浮虛の客ハ。倍棄ての後悔あり。金に恍惚たる欲心婦ハ。實に思わぬ手鍋を提る此時既に

落魄たり。夫能契情の所謂。能月日の下を羨む叓勿れ

苦界榮枯。世滯貧富。

首鼠兩端の年明まへ　へア、なんとしやう。まゝならぬツトンヂヤン

船頭深話

第一齣

自榮鄭橋至古市場話

維時春王正月。松すぎて五七日のころなり。大川につなぎたる舟のかず〳〵。あるが中にもふなばりの松かざりを取のこしたるに。

黄昏刻の光景を看るに

奴凧のからミ付たるハ是辻番の親仁に。骨からミの意見かとおかしく。實に繁昌の大湊、出船入舟先後をあらそひ。漕入るゝ押送りハ。水からくりの百足の如く。漕去舟の水あしハ一休がしの字かとあやまたる。英鄭橋の橋番ハ。御膳むぎめし温ひを喰ッて。六人前の橋錢を費し箔代建立の羅漢ハ。小サキ笠を着て雪踏なをしの定見世に隣れり。當日守護の錫杖。旦那さまごほうしやの聲ハ。英鄭園子ののうれんとゝもに川風に吹まくらるゝ丁子茶の裾をとらへて。黑縮の頭巾たもとにぶらさがりし突袖のきりゝしやんハ。掛廻りの女なりと見しハひが目か。高尾の茶見世へにつこりとして。ヲヤおばさんお休よと一寸愛敬をくれたる捨ぜりふありかゝる所へ新堀花水橋のたもとなる談義場の油虫ゑさひろひの子共大ぜいむきミ売あさりの調市まじ

りに。桶を一荷の坊主持にしてからかいのぞめき詞に。ナアエ〳〵の詞くせあるも。鄙ふりて一しほおかしからずや建長寺の七ッ坊主か。干見世の三體詩と拍子木を懐にして行過扇が谷の番替りハはさミ箱の棒のときに。下駄と辨當をぶらさげたり。辻鑰の番附ちらつくばかりにて。かい帳の札。さらによめがたき時。洲管を過るとまり烏あれバ。かぶら堀を越る夜鷹あり。其交加の千差万別。東南へ走り。西北へ去る。はや鶴岡の晩鐘に。四方の肆門戸さして。髪結床も舟人も又明日と夕間暮鎌倉雪の下新堀にかゝりたる。花水橋へ漕かゝる。一片の蘆葉【作者云】前扁辰巳婦言にて皆さま御存の客【長五郎】正銘二分程のさかやきにはけハべつたりと長くして三日市柳の下の五郎が床でさらいたてのひたい尤水髮なり衣裳付ヶ「上着ハ結城つむぎのおとなしきしまがらにて下へ本八丈のぱち〳〵したる大嶋を二ッかさねて花色繻子のはゞせまき帯を結び「纏長といふ二字を銀と眞鍮のひよくの金物に打たる三度縫大津さげのせいしつのたばこ入「るりこんの合羽も「半ぶり「見返しハお定りのびろうどヲひねつて此頃拂底の一黒らしやにてこしらへ出入場の若水手拭にもらつたそろばんしぼりをかたにかけて「あんかへ「ふとんをかけて小聲のそゝりうた〇但しこれを字あまりのそそりいたことも。そゝりぶしのいたこ落しとも云ふ

「ワしが色男ハ。神田の八丁堀の酒屋の御用さんでござりやす「ヲイまだ〳〵「ノリはやことにて朝の六ッがゴンとなるから。晩の六ッがボンとなる迄。本町や石町やうら店小店。雪隠の後や。掃溜の隣を燗鍋ちろりとつくり提て。御用はよろし。〳〵。御用ハ。是よりいたこ「よろしうと。云ふてある〳〵。ソウヲ、、、引【舩頭】すべて北せんどうハ江戸ッ子でなけれバきハめて上総房州の者なり廻りの髪結と同日のろんなりモシごうぎとさへるもんだね。おめへさん夕やけが仕やしたぜェ【長】夕やけだか朝やけだか。やけ酒をかつくらつて居たら。マア聞ッし。赤金やらうが喧嘩の中直りだつて。めど橋の升楼で又やらかしたハ。ナントこれじやア。義理にも酔ざァなるめへッ【舩】そいつハ大吞だ子。しかしわつちらが表の升楼ハ。普請已來猶よくしやすヨ トはなしながら花水橋をくゞりかゝるところへ橋のうへをたぜいどう〳〵浅黄む、をかけたる葬禮のこしをよい〳〵わい〳〵ではやしながらゆすぶりちらしてかつひでとふるいさゝであいの其中から二人り○大べんけいのひとへものを藍へ一ぺんひたしたどてら布子に髪ハ大きくじだらくにしてざくせんのはいつた二ッ折の紙たばこ入へきせるをはさんで半紙のかミ二帖二ッ折に引くるミ三まいうらのしもふり雪踏あたまハ水髮の五分さかやき中ぞりばかりそりたてど髪の間から白くすきとふるまげぶしの間へ七色茶づけから持こきたやうじを一ぽんさしてゐる今一人りハ衣裝付へミへねどどぶねづミの火事羽織にちりけのあたりへ銕といふ字をいとぶせにぬわせてびろうどのはんゑりあたまハおなじ仕立にて橋の上から立もどつて○ヲ、イ頭じやァねへかい△親方〳〵【二人】けふハどつちの方だェ。どけへいきねんすェ。ウムなんだ子。向ふかへ〳〵。跡から行やすぜ。トあこでしやくりながら大きなこへ【長】誰だ。ヲイごくろうだな。行てきや。ア、コレおれが名もナ。帳へつけさせてくりやナ【二人】アイ吞込やした【長】たのむぜ【二人】いつてきやせう ト船と陸とでわかれるとかくするうちに船ハ新石場の前へかゝるに三年屋の角から二三間めの二階でからだをふり廻してうたふやうないたこがきこゆる 〽心つくしておくりしみ

是へ船頭のきいたふう也 表二階のわけ今新市場のこらずふせ玉に成たると此書の奥にくハしけれバこゝに略ス 但シ船頭のなまきゝハ皆くち元なるさの也

も。ぬしハ茶にして枕紙。またハやぶりつ。くずハござい〳〵まだく ずハたまりませんかな くすハございの笑ひぐさサアサ、アサノ〳〵ちよいときなせへヤレコリヤどつこい。ぜにがなか質(しちよ)おけ、質おいて酒のめ。あまりで女郎買(ぢよろかへ)ソレ〳〵〳〵〳〵〳〵ソウ引などゝ大さわぎがきこゆる【長】コウこゝの表(おもて)二階ハごうぎだぜ【舩】古市ハふせだまばかりだが。新市場ハふせもありやすが。てへげへよび出しがたんとでござへやす。古市も内によつて。表二階もするけれど。マアあつちの表二階といふものハ子供部屋さ。それだから正月も松の内に行くととんだおもしれへ子。わつちらがしんになつて。いろんなことをして遊びやすよ。そして内所(ないせう)じやア子。藝者(げいしや)があつまつて茶番をして。さハひだりッ何かアするから。モウこてへられやせん【長】そいつらが遊びにほげて居る處(とけ)へ。しまいの客がきたら。欲ばつちやア居ても。うんざりだらうス【舩】ソリヤア違ねへ。コレごらうじやし。不景気だといつても。此河岸をミなせへ。べただア【長】ホンニナアどこのうちもぎつしり舟がついたぜ ちはや日ことつふりくれて古市の格子をくゞると向ふ河岸の大知屋の内から大の字のぶらてうちんで二三人の客をおくつて出る【客】唐棧(とうさん)の小風呂敷を背(しよつ)てかたへかけた手拭のあまりを風呂敷のむすびめへはさんではおりのひぼをしめながら〳〵ハ何かむさんとめにふとれかつおぎの羽織人物ハ新リ一ト振しへたり △なまけた白いもヲのヲがなアがアれた「アヽヤアレヤアレ彌兵(やへう)。〳〵。あぶねへぜ〳〵。まアこゝで一ぱんひよぐるべい ト小便をしながら酒のさめぎはとひとつあくびを二ツ三ツ ア、ア、ア、引チツト早かつたアッとばし迎(むかへ)ときたわアッ おッそうしくいそがしい。チヨツいめへましい。五明(ごあき)にすりやアよ

かつた 口とぼしむかひとへくれ六ツ過ナリ五明とへ五ツの鐘カツキりたいふ ○又ミれんをぬかすやつさ ゲイプウ トもやいにつらまりながら船の中へはい込 ヲツトまてく壹人ッ、こいく。あぶねへぞく。イヤどつことしよ。ア、かけ聲ばつかり氣がきいてらア。 トミなく船へのるその内長五郎が船ハ會代多屋大賀屋富貴岡會代倉と過て二川屋の河岸へつく 【舩】ヲイあたらアくどうするのだ出すのかそれじやアかわらねへく トおもかぢへとつてやね舟と三丁のあいだへ一ぽんぐつとさほをいれて ヲツトこべりを【長】よしく ト長五郎ハ雨ほうの舟を手で引わけると山口稲荷の石垣のわきへのりこむ舟へシユウ、、引ツとかしへつく 【舩】二川屋ャ引二川やく アイト泥事をして河岸揚の若者がんぎへ參りぼうぐいを片手でとらまへてぶらをさし出し 【若者】お初どなた【長】だれでもいゝあげろく【若】ぶつてうづらにて おまへさんおなじミでございますか。お初會ならお座鋪も。子供衆もござりません【舩】だれだ喜八どんか【若】イ、ヱ【舩】ア、こんたじやァわからねへ。引こまつせへく。【若】ヲャ山城やか。こりやァ御免なせへ。どなたかと思つた。サアおしづかに【長】此男も。ホンニコレしつかりさつせへ トせなかをたゝいて上りながら船頭のほうへふりかへり コゥ早くきさつし【舩】アイじきに參りやす トふねをかた付ている【若者】さきへたちくどりを明ケ お客だよヲ引△アイ引【むすめ分】【女】どろくと三人あがり口へ出 ヲャ長さんよくお出ないました子「ソレおつれ申なア△アイ引【長】ア、ごうぎとさむいぜヱ トいゝながらはしごばたく「河岸あげのわかひ者ハ櫓をかつぎこむ跡からふとんとむしろと火繩箱をいつしよにもち片手へあんかをさげてあがつてくる門とぐちで【舩頭倉】よろしく申てくんねへよ トすてぜりふ【娘分】とんだかんばしつた聲で 倉どんかおめへさむいのによくきたの。コゥそうしねへよ。おらが内なんざァ七夕にしておくがいゝのさ【舩】またいためるもんだ。おれが

きたくつても。お客がこねへものヲ。【廻し】ヲヤ倉どんかよくきたのおめへよく道をわすれねへの【船】アイサ聞ながらきやした【廻シ】フムそうだらうヨ。此頃ハおめへの道ハ紫蘇繼だといふこつた【船】よしねへ。ホゥけたりふんだりもいゝかげんにしねへよあんまりいおめると虫が出らァ【若者】ホンニサかあいそうに【廻し】【むすめ分】エヽあきれのむしが出るだらうおミかぎりか。お四日ぎりか何日にも顔出しもしねへでそして【船】ア、うるせへ。マア行て來て聞ふ。トはしごたあがり ヲイ長さんのお座敷ハどこだ 出し物を持た女きたり 倉どんお座しきか。つき當りで左りへまがつていゝ。拔裏から新道へ出て問ねへよ【船】コレ久しぶりだと思つてミんながいおめるナおぼへていねへ トさうじをあけては入り ヲヤ此火鉢ハ眞白な火ばかりだ チヨン〳〵ト手をたゝく【長】今に持てくるだらう【廻し】【お八重】長さんおまはんマァきついきんでございますね。今夜ハどういふ氣でお出ないましたエ おまへさま也【長】こういふ氣できたのさ【や】ヲヤおかしい氣でお出なすつた子 ト茶わんを二ツぼんの上へのせて片手にじうのうをさげて來トしが火鉢へとりわけてある火ばちの中にへるへふきりの杉ばしが五六本あるをとつて灰をならし灰だらけのたばこをほり出して たばこぼんへ捨て酒のかゝつた火鉢のふちをらうそくの紙でふき燭臺一ツへひよくらうそくにして居るその内こぢよくが盃臺を持くる人かハつてむすめぶん【おいと】てうし硯ぶたを持來りサアおひとつおあんないまし【長五郎】ナントあんまりじミるから藝者をそう 幸定役に始ませふと盃一返まハりてお定りのせじばなしめすむいつてくんねへ【娘】ハイ〳〵たれにいたしませふ子【お八重】長さんなら誰といふことなしだからマァきへにやりませう【長】待ッしョ誰がよからう。コウト。つかねへこつたが三馬が書

た辰巳婦言にやァ目ッかちの春次を呼だがあれもかわいさうに故人になつたのう【舩】さやうさ久しいものだつけ今で又めつかちのあとつぎが出來やした【長】誰【八重】松藏さんか【舩】ウム【長】ほんにそうだつけこゝの土地にやァ兎角めつかちの藝者がたゝるの【娘】ァ、わりい評判だョ松藏さんが聞たら氣にするだらうのうお八重どん〳〵指和屋ァ呼で見な【八】アイ ト言て見通しの戸を明ケ大きな聲で 指和屋ァ〳〵引 此指和屋といふハ二川やのうらにある見番のこと也 ○遠くで○ヲ、イ 二川や曾代倉の二軒ハ指和やへ近きゆへ内からよぶと聞へるなり【八重】松藏さんハあるか「きこへホ松藏さんハあるかよ。松藏さァん引よ引ェ、じれッてへ その内きこへる あるなら早く ト戸を立てはいらふとする【長】倉やモゥ一組よんでくりや〳〵【舩】おめへ一ト組でいゝになさりやし費たァおめへ【長】ハテなんでもいゝからよんでくれ〳〵【八重】呼ますかへ ト大聲で「指和屋引。外に誰があるゥ「ナニ時太夫さんかモシェ。時太夫さんがありますとさ【長】時太夫。おもしれへ〳〵【八重】大キな聲で 松藏さんと。時太夫さんをはやくよ引。ヲ、さむ トいゝながら見とふしの戸をたてる ヲヤなんだミせなコゥ倉とん見せなといふのに見せねへかうぬ トうしろからとりニかゝる【舩】腕づくなら見せやう【八重】ゥ、こいつァおもしれへおれが又うでづくでとつたらどふする トひつぱり合ふハ是ハどなた御ぞんじの火繩箱にこしらへた小サなたばこ箱也 こりやァおれがもらつたよ【舩】どこをおしやァそんな音が出ルこゝをおしたら屁が出ルだらう トお八重がしりたつツつく【八重】ァ、いてへよェ、ふけへきな櫓を押やァ舟が出ルかさいてあきれらァ

【松】ホイちつと來ねへうちにいゝ口になつたの【八重】アイサごめんよ（此内始終無事ありほとなく）【松藏】【時太夫】【三木藏】【彦】（どろ／＼とおしかけろうかのまんなかで）【時】ハイ松太夫時藏參りました【松藏】コレなにヲいわつしやる【時】な無さん名をはきちげへた【榮藏】よくそれでいゝ松藏があたまで【彦】ヲツト舞臺へさわるぜ【三木】ホイこれハしたり【松】はげ奉る御同然かハ・、、かわいそふにまだはげもしねへ【彦】ア、繪馬／＼しい（トあたまをかくしうしの外から）【松】モシちと物がうけ給ハりたふござります【女】【娘分】なんだへ【松】此御近所によしの屋松藏さまと申ス色男ハござりませんかな【娘分】アーイ、エいろ男ハしらねへがめつかちならございやすよ【松】おきやァかれまた喰ッたアアハ、（三木藏と彦ハ三ミせん箱を持て入いづれも座になおり一ぺんすういとして）【時】イヤ長さん【松】これハおちかいぶりでお目に【四人】ふらさがりました（ハ、、、、トそら笑ひ）【長】どうだ／＼【時】（首をぽち／＼しながらからだをゆすぶつて）イヤモ　どうと申しましてもどうハ此通り三味線に有ッて。やつぱり藝者を仕りましてござれべ。そこでもつてからにやはり。エヘンかたのごとく【松】ア、やかましい口だコレかたのごとく藝者をいたひておるが又なぜおのしやァかたのごとくでかたのことくだよ【時】ハテわるく聞ッしやんな松藏がの【松】松藏さんハ女房でももたしやんしたかへ【時】ウンニヤ松藏が目玉が【松】ウムおれがお目玉が【時】やつハりナツレかたのごとくだよ【松】こいつも同類たな（トにげ出すを追かけるさね）【長】アハ、、

、なぜそんなにいぢめられるコウ一ッきめさつしなまだ顔がきまらねへ様だ トさかづきをなげる【松】まつトいふ場をマァやらかせ。ナンノこれ錢の出ねへ酒だァ。トいふとあの子の顔がありやこそ【娘分】かんばしつたこゑで エ、なんだよウきつこしやれさトつめる【松】おいとさん。おいと〳〵おいとト、、、トさすりながら顔をしかめる【時】サア〳〵ア、待遠たお盃のおあきれござりませんかなハイ〳〵是ハ〳〵ト気をとり しよじ酒のことだいつそ三味線を法度にして酒ばかりといふ法にしてへコレ女子共銚子もて〳〵【八重】ヲヤあきれけへるよそんな口をきくと罸がたかるよ【時】ナニばちがたかるたかつたら熱湯をぶつかけやう【彦】たかつたら煮て喰ふがいゝ【三木】煮て喰ふ罸も好〳〵だの【時】コレなにをいわつしやる【松】お八重どんコウよしねへよいゝ年をして生〳〵しい事を申上ルの【八重】ナゼ【松】罸がたかるもおそろしい子ヱ旦那【長】うさァねへ【娘分】ナゼたかるといつちやあわりいか【松】又一ト幕出ルよ【時】コレよくつもつてもみなせへッサ藝者といふもなァ親のばちと三味せんにばちがあたつているから此上のばちハおらァあんめへと思ふ ト向島のこわいろ【大ぜい】アハヽ〳〵コホヽヽフハヽヽ【作者曰】北内にげいしやのわるくち大ぜいのむだあまたありさりながらげいしやをあげてしやれる所へとなたも御銘々に御存の事ゆへこゝにくへしくせず又云げいしやの通り文句といふハ〽げいしやをやめて薮造りの質両替をはぢめますしかも質へとりをせんがおきてになります田地をかつてあの子をつれて引込ますヨヤかつパのやうだナト、隠核聴[illegible]の出ほうだいを毎日〳〵ひとつ所をつとむるものなれべこそなさだまつた紋切形なりよつてこゝに畢す【舩】お八重どんおとさんをはやく出し申な【八重】今にきなはるヨ長さん今晩

今はやりの髮を号て引ずり出しといふ也まけのはやりハ丸まげしまだいばじりばかりためちゆ

ハちつとおわるひ 子トハおとまが今夜客が有て座しきへ出ているゆへさしづめ名代といふ所を深ひなじミなれバいつもしんぞうなしのひとりさミしくねろやつなり 【船】また廻(まハ)しか【長】なんでもいゝ來(き)てもこねへでもいゝわな雨のふらねへ巣(す)をこしれへてあつたかに寐て歸(けへ)りやァこれでいゝしやァねへかナァおいとさん【娘分】ヤレまた世事がはじまつたトいふ所へ長五郎がなじミの【おとま】衣裝付(いしやうづけ) そめ上りのぱつとしたあいおなんどちりめんに折鶴の大小をちらしにつけたすそもやうのうちかけ上着ハ紫鹿の子ド着ハ二三まいそろへふじいろかのこを着すべてかのこづくしにてひぢりめんのじゆばんに白しゆすの半ゑり黄じゆすに唐おりのぬいをしたはゞ廣の帶をしめ白ちりの長ゆもじにて髮のむすびやうハ辰巳婦言の時代にあらず五六年北かたの仕出しにてびんさしをながくしてうしろをひつつめたほハ上へのほうへあげて水がミにふつくりと少シ出しまけの一をぐつとあげて中のひくき大しまだまへ髮をすつかりとそろへこ切てかんざしでおさへたすがたハ他所へ出してめあたまばかりで辰巳仕入と見へたり 【おとま】長さん トずつとはいつて火鉢のそバへたてひざですハり アヽぞく〳〵してならねへ松藏さんおめへたのんだをどうした【松】なんだつけ子【と】ソレおめへなんざァ。そういふ情(じやう)なしだハ【時】何松藏にたのんだことハあてになりやせん私に【彦】ト申てもやつぱり【三木】せんじやう常(つね)のごとし【と】そりやァそふと今夜ハモウふけへきだつちやァねへ【長】ナゼ【と】なぜとつて開ねへまハしがこれだものを トゆびを三ぼんミせる 【大ぜい】ヨウ引【彦】そんなら昼間(ひるま)からい客人もかへ【三木】モシいゝ閨(ねど)をおとんなすつた子【松】せめて花にでもあたりてへ【時】又よくばるやつよ【大ぜい】アハヽヽヽ【と】長さんおめへ待(まつ)てゝくんねへいつてきてはなしがあるから【八重】おとまさん ト立ていつて何かこそ〳〵 【と】いゝわなうつちやつておきねへな トいゝすこゝろうかへ出てゆく 【船】サァのまふ〳〵長さん一ッ上げませうトツヾ【長】ヲットきた〳〵 ト盃へうけろすべて此土地にかぎら

ずち、さな盃、ちつとヅ、つぐことどなたも御存なるべし此内にげいしや四人に二茶ばんなどありて大さわぎもいらたんすめバ【船】チツトあちらもよからう【やへ】【いと】長さんサマ
あちらでおあんなはいませんか【長】ウ、よかろうトキニなんぞ此頃ア新ものハ出來ねへかい
【時】ヘイさやうさモシもう赤い切レがなんがれたでもございますめへ此間潮來の前引をこし
らへましたちよつと一ッ　ト松蔵と時松たハひざを四角にし二扇をしやにかまへる彦と三木蔵ハ二ツをせんたひざの上へたらゝとあげこうでまくりをするまねをしてサアこい／＼などゝいつて居ル【時松】あたまとひでたむしやうちらして
にゆすぶり　三下り〽梅の白あげミそめて染てついした事がせうとうバ末のすへまで思ひ〳〵　合くぜり
〽ゆべくそこらでいかぬ女郎なら打遣れ／＼障りしだひにあてるがいゝのさ恥をもとでにくど
ひて見なせへ三分にや廻る　合〽あふていハれぬひことの薬ならバ筆にいハせろさなんでも好に
いハせろ戀の仲立ハ筆じやものヲ、筆じや物けん毛を引のハ御免なれ　合〽いたひ〽いたひわい
な合　詞〽ヲ、いた　イタコブシ〽いたこ好く様なうハきな奴しにヱ合ナゼ／＼ほれたわたしが身の因果
サアサヤレ／＼ソレ／＼ハ／＼　トウ引う奴／＼／＼／＼【大ぜい】サアちとあちらへ【松】コレ三味せんをどう
するうつちやつてしまへバいゝ【時】すぐに藝者をやめるかあごをつるすか二ッ一ッだサアご
ざりませいハア　ツヽテン〳〵ツヽテッチ ツチテンツヽテン／＼【松】【時】【彦】【三】【船】共外大ぜいちらかをあるきながら「松ハ住吉明神さ
んの御神木。見事に青／＼と「沖にたゞよふ帆かけ船。霞たなびきちら／＼淡路嶋「かよふ千
鳥の女夫連。ふたりが中ハ二世も三世もかわりやせぬ【長】おくられながらはしごをおりて小便所へゆく【大ぜい】さよめい

御手水〳〵【長】これからお開帳をおがむのか【時】ありがてへ　小ごへ「竹に柳ハ八幡さんの御
神竹。ミごとにのびたとさ。のびる共竹どうじやいな「雪がつもりてしハ〳〵旭さす「解さ
んすのがわしやうれし【大せい】ふたりが中ハ二世も三世もかハりやせぬ【女】ア、そう〳〵
しいよゥ【松】ミどもらが下宿ハいつれじやコリヤ【長】松こう此ごろ月夜河岸で見かけたつ
けあの日にャア何所へ行ッた【松】ハテ子こうと。エ、ソレ〳〵十日の日に空の門の初毘羅参り
でござりました。ソレ手めへといつしよに【時】ム、あの日か。あの日にやァ子モシおかしい
とがございました【松】シイこりや聲が高ひ【女】ハイこゝでございます　トざしきへいれて廻しまくらのお定りをとつて紙をあたらしくしかへたぬりまくらと取かへて壁にたてかけてある屏風をたてゝあんどうをかき立【女】お羽織を【長】此儘でいゝぜ　トわたす　サア〳〵行て欲ばらつし
モゥふし〳〵【大ぜい】さやうなら此間に　ト皆〻はしごをおりる【長】ハうハ着をぬいで枕元へなげ出してまへ帯にはさんだふとんのうへゝ大あぐらになつて紙入をなげ出して船頭にわたす
【八重】ハ長五郎がきものをかたづけみにして枕元へなをし金入から金をだして紙入をふとんの下へはさみたばこを吸付てはなしをしている所へ【八重】ぼんのうへゝ茶を一ぱいのせて火入を片手にもつてせうじを明ケながら　コウ〳〵おとめどん
おゝ道川岸の傳さんがきたじやァねへか【女】ム、きたよ【八重】いゝ虫だのうコウ〳〵おれはそ
ういふッてのコウおッつけ晦日だからかたァつけておくんなせへよろしくおたのん申やすとい
ゝねへなチットその位なこたァいつてもよかろう【女】そうさノウ　トハ此らへさの客人さかりの滞りをたび〳〵船宿までせがまれてあいさつなしのおしをつよくきたやつとこへたれ【長】コレでへぶ悪しく云ふな可愛さうに【八重】イ、エサちィつと譯のあるこ

新市場の宮ニハ廣袖のぶひとがらおふくあれども古市場へあくてん客を一切いましむ是へなじミハ長五郎が顔づくにてよんどころなくあげたろとミへたり

つてございます【船】モシ今夜ハ宵立になせへやすか【八重】ナニ宵立じやァねへお歸し申ちやァおとまさんへすまねへ所詮おとまりだねへ長さん【長】マァ様子にしやうよ【船】ハイさやうなら　ト舟やどハ下座しきへゆく折ふし表二階のはしごをばた／＼と大ぜいのあし音さハがしく二かいの上り口からわや／＼と人一座の客〔作者曰〕此一座ハ先刻長五郎が花水橋で出合たる葬禮歸りのいさミれん中いづれもあだ名を一ツづゝ持て居る一人なミのきたい【あべ鉄】　但し此詞書ハ御見物の御方樣まきじたにておよミ可被下候　コレエどふするんだエ。おいらァからつきり土地をしらねへから塩梅しきを頼むぜへ【おさき松】　是ハ別てまき舌也　ヨイもンしへ。わつちらァおめへ田舎者でごぜへやす。アイおたのん申やすエ。エ、とほうもねへ壹人リ引の車引かこけが湯へ這入りやァしめへし闇とおたのん申やすた。エ、人をつけへにした　ト此おさき松がくちくせハへエ、人をつけへにしたへエゝとほうもねへへこけか何をしやアしめへしこけか／＼と何ていもかでもこけをひたがるくせあり　【あを吉】コレ鉄やナニ松ャイあんまりさハぐなエてめへッちやァ場所を踏つけねへ様でかつこうの悪い事をしらねへコウあねさんうつちやつておきねへ。あいつらにかまいなんな。ヨウヨウ。そりやァいゝが長親方が座敷ァどこだ【女】ハイ奥二階でございますこつちへお出なはいまし　トさきに立てゆく　【鉄】なんだかべらぼうに長ひぜへ松や爰の部屋ァきれいゝ居抜だぜ。戸障子から屏風唐紙。寐道具まであらァ。鍋釜ァ持て來ルとそつくりいゝぶんなしだ【吉】その氣で樽代の貳百ハおれが方へよこしや【松】ヲャ恐ろしいそんな事ァ。二百やにして置く

エエ、人をつけへにした　トいゝながらうかのかミくずをふむ　エ、きたな何だか踏付たァ【吉】ざまァみや【鉄】いゝ

氣味だァ【松】待ちやナ子種を踏びしいだ。どこの馬の骨だかエ、とほうもねへ【女】長がざしきのせうじをあけて 長さんおひとりかへ【長】障子の内にて ヲイなんだ【女】どなたかお連衆がお出なはいましたョ【長】誰だこつちへ這入らつし【吉】親方跡からしけ込やした【長】ヲイみんなよく來たなこつちへ這入りやな【二人】アイ【松】長さんの前じやァ氣がつまらァ何所ぞ小屋ァ變やな吉でめへ足場にかゝつてくれ【鉄】おばさんにそういやな【吉】ナニおばさん馬鹿ァ言やな十九やはり文庫をつらめへて【女】モシダヾァお相應でおぜへまさァな ヲホヽヽヽ ト立て行【長】マァこゝで呑がいゝコレてめへッちやァ又養奴で湯桶酒をくらつて引導前にはつしたんだらう松や手めへでへぶいゝべゞを引張たなゆかん場からそつくりじやァねへかノ【松】アイコレ 親方よしてくんねんしちゝんぶい〳〵七里けつはいしかも此べゞの質利けつはいだ【鉄】なんだつておめへ葬禮と遊の出初だアトはなしの内女きたりて サァもしおまへはん方ァこつちらへおいでなひまし【松】ヲイしめたぞ〳〵【鉄】おめへどうしても働者だぜへ【松】いゝ子だァおめへにやァコレ葬禮の强飯をやらァ【女】ヽヽきざだナ【吉】ホイ此子もかつぎ人だな【松】かつぎ人なら佛のゆれねへやうに跡棒へ廻れバいゝ【鉄】はつつけ生更め トこれめしの包がこではなをかんだ跡を格子からすてる【女】ヲヤこわいねへ【松】アレサこれめしだといふに ト立ながら そんなら親方【長】ヲイ【吉】おめへひとりかへ女ハどうしやした トあい方のことをいふなるか

まハす女郎の事を女〳〵といふ此連中の通り句也【長】今夜は廻しだァ【吉】ホイこいつァ出入ァ出來ねへ【二人】アイ休ねんし　ト三人女を先にたつて表座しきの方へ行ひきちがへてあいかたの女郎【おとま】こうだ客だりあんのねぞき〳〵三寸ほどのたいろ言因なしあて「こます戯をいにくかへたなしうつむきすがたなりのそてたあをもなから行の手へきまの、まん中でつまをとり「ぬきあしで障子を明けてはいろか、さきつばつの土地なれども長五郎がごとき割床ハかくべつの事也ちよつとしたるなじミの客二階しきも落合たる時ハ座しきの間數も遠からぬ事ゆへ大きに心づかひをする所也〽辛氣辛苦り揃積も酒ほどうれしいものハなひヲヽ小便に行たらとんだ寒くなつたおめへよく寐入らねへの

ソシテマア　この形ハなんだにへアレサ風をひくからよく着て居な　トふとんをあけて中へは入ル【長】ナニおらァ酒の勢で寒かァねへ小賓から爪先までほか〳〵すらァ【と】きついあまのじやくだのうそんなら是じやァどうだ　トつめたいあしを長五郎がまたぐらへ入ルとひいやり【長】ヲヽ引ひやつこい【と】そりやミたかあんまり立派な口ハきけねへよァ、くすぐつてへハなコゥ長さんけふハでへぶ光て來たのいゝお働だ【長】ぐらばうめへ是式な工面が出來ねへでつまるものか【と】フムそふだらふよコゥおめへ障子を上ルとき仕舞の札を見たか【長】ムヽ見たてめへでへぶさかるナ人ヲつけへにした顔見世の紋かんばんじやァねへおごうぎと大造に出たなあの札を五六枚もらいてへ【と】持て行て門口へ張んねへ疱瘡除と雷さまの呪にならァ【長】うきァねへ雷もてめへにやァかなふめへ【と】ヲヤあきれるよよろしく巾てくんなコゥよしかおとまといふ名があるとのおこりが落て魔除になるハな【長】ナニ魔除おきやァがれ玉葉除が聞てあきれらァおらァあの札の五六枚だけも金

仕舞札ハ家ノ〻ニ[illegible]

がおるとおつりきな仕事があるけれど【と】おめへもけちなをいゝねへ十や廿の金をなんにするものか【長】べらぼういへたゞとりさつまの守だ【と】そりやァいゝがなんだかふけへきだヨいつそもうきざで〳〵氣色がわるくッてならねへ【長】久しいもんだァモゥ聞あきてらァ【と】久しいもんじやァねへことしら(今年等)の仕舞だつてもおしづさんなんざァ子柄はよしききれもんといふもんだからお客ハ澤山あるしかそれについちやァ下の受もよふござへす（下とへ二かいに居て内所をさしていふ詞也）それだからわたい(私)も賣まけねへ氣でけふまではりとふして居るけれどホンニしミ〴〵とつれハこつたハな【長】そりやァその筈よあの子ハこゝの内中ゥでの潤人だといふぜ夫にてめへいやうなむねき者じやァねへ世事がいゝといふもんだから女達が思ひつくハ【と】アイサわたやァむねきな者さ是でも今迄通りやした（少しかんしやくにて）なんのいさくさァねへ思入レ情ハ情ではり通しこうぬが氣いつへいにして内へも損をかけず相應に賣て其上にする事をバ急度としておきやァどんな閻广さまの前へ出てもいゝ分ハあるめへはな【長】じきに舌を拔といふだらう【と】しやれなんな人の氣もしらねへでおめへもしつてる通りこゝい内ハ子共部屋ハひとつの樣でも新部屋と前部屋と二ッにわかつて居やす新部屋の板がしらハおしづさんで前部屋の板かしらがわたいだからソレどつちもこゝハ張合にやァなりやせん女郎のつき合といふものハ表向ハよく

つても心のうちはみんな角突合さわたいらが内はまだ中のいゝ分さ此春の仕舞札だつてもマァこうだは元日は休かェソレ二日三日四日五日六日と七種まで夫からちつと間があつて十五十六と二日さ此内といふものは氣が氣じやァごぜへしねへ他其外の子の樣に平氣孫左衛門ならそれでもすミやすわたやァ此氣性だから一人りでも余慶に仕舞て貰ふと思ふからじれて疳癪もおこして見たりくやしくつて泣てもミたり陰じやァいろんな眞似をすらァなホンニわたいが氣でもあんまり馬鹿氣た事たと氣で氣をしかつてこの頃のはやり哥じやァねへがぴんと心に錠をおろしてもつい疳癪でじれが出やす【長】ハテサそんなことを思つたつても始らねへはなしだそれも孝行の内だと思つて居やなおいらが今斯やつて居て町抱でゐの出入場でゐのとなんだか勇で暮す樣だが親方倒れの子分癈とやらで仲間の奴等に引立られるがばんいちには大きな事た夫も是も苦界だとおもやァなんのきつい出入りはねへモウちつとだ辛抱するがいゝ五大力ではわしやなけれどもさ【と】縁と時節のすへを待かェ押付おめへに飯を焚せて思入朝寐をしやうャ【長】自前でも挊がねへやうにしや【と】よしてもくんねへそふは云ふもんのおまへ故ならわしやどふなりとゝかなんとかソレ文句きどりで居るはなしかしさうなつちやァいくぢはねへのうおひやくさんやお角さんを聞につけてもいやだよ前車のくつがへるは後車のいましめとやらつ

だ〔長〕ナニ玄關の蟇がどうしたとヲンてめへでへぶ博物だな誰におそれつた〔と〕太閤記の繪木に有やす〔長〕そりやァそふとあつちの客が待てるだらう早く往きやな〔と〕マアいゝわな今夜はゐこだわるく落合た晩だ〔長〕何人ある〔と〕お屋敷がひとりにお店が壹人りそれから坊さんと芝居者のやうなふうたきいがあるはな〔長〕ムヽごうぎと押かけたな乘合の船頭にしても覺があらァみんな馴染か〔と〕しれたことさ初會廻しをナニとるものかァヽごむいのうおめへ一ぷくふかねへか〔長〕ムヽ吸付てくりやや鉄炮やるべェ　トきせるをわたすとす紙のあいだから小サなたばこ入を出しやつと手をいれてたばこをつぎ火入をとるとたどんがきへている〔と〕ヲヤ情のねへ炭團だのう　チヨン／＼／＼ト手をたゝく〔らうかにて〕アイ引ときたる〔と〕おちかさんかはゞかりながらこゝへ一ソト　ト火入を出す〔娘分〕ハイ〔長〕おちかさん／＼その序に後生だから丼に水を一ッ盃おくれ〔娘〕ナニ水をかへお茶を上ませう〔長〕ウンニヤ水がいゝ〔娘〕いかなこつても〔と〕とんだ氣違だねへ　折ふしらうかをもと太夫通りあとよりこんにやく座以來御存のおとよばアさまをつかけてきたり〔お豐〕ヲイ／＼元太夫さん／＼おめへ見通しへ出なさるか〔元〕アイ〔豐〕アノお客は隣座敷がこれものだから　ト手を拝むまねをして　あんまり騒々しくねへやうにしておたのん申やすよ〔元〕アイ／＼承知／＼〔豐〕ひよつといざこざでもおこつちやァ〔元〕ヲットのミ込やした　ト別れる〔作者曰〕おきやくにいざこざのなきやうに心をくだき坐敷をくらうかるが此ばアさんの持まへ也
〔長〕誰だ元太夫が聲だのあの男も古び人だ〔と〕アノ元太夫さんの穴づくしの淨瑠理はいつ

そおかしいよ【長】ム、何か臍の穴で落すやつかへ抑穴のはじまりハといふ語り出しで外記節やめりやすをまぜてあれハおとハ屋が手をつけたのだ【と】さうさ〳〵夫を今じやァ與市さんが義太夫に直したのさ【長】まづ元太夫が坐しきへ來ルと少しこゞそながら這入ッて夫から女をつらめへて悪口を云つて笑ハせてッシテ出し物を見當りに地ぐりたがる癖だせ【と】ホンニ進ごぜへせんどふもおかしくつていゝねへ（とかくするうち火を入てきたりちらかのそとにて）【娘分】おぼへていな伊のどん今に敵をとるによくやしくて〳〵とりつきてへハ（トせうじを明けてはいり火入を出すどんぶりへ水をくんできたる）サァおあがり【長】有りがてへ〳〵（トひといきのむ）【と】おめへナゼそんなにくやしいな【娘】それだつても子マァお聞三拳勝負で賭をしたらとつぱづして負たから又うち直したら亦まけやした腹が立て〳〵なりやァしねへ【と】弱ひのうナニ何まけることがあるもんかしかし伊之どんハ强からうよ【長】何をかけにしたおゝかた大福餅あつたかいとなんばんだらう【娘分】御兒よ【長】そんなら薩摩芋のふかし立をふかし〳〵喰たとさじやァねへか【娘分】きついしやれた舩宿楽じやァあるめへし【長】山口と常陸屋ハなんばんが無ッてわりいのう【娘分】アイサよく御存でおそれ入ますよ

【作者曰】山口ひたちやへふうりんそはの家名なり山口といふハ日の落過に早く來りそのゝちにひたちやひけ過のころになれバ菱屋といふ夜そばうり來ル是ハ此ころ別而はやりなり

一説二日ひしやのこばハ「わぎにあぶら」などゝあしらいたるなんばんの仕出しをして女郎のはらにすつパりを持こむゆへ皆をちかれて是を買ふ也外のこばやにハなんばんなしもつとも夜そばいさつま芋大ふく餅右の三種ハ冬より春へかけて此さとにかぎらず女郎やにはやる事おびたゞし

すべて女郎へばいむすびにごてんぼうをさすことなしこれへ茶やの女ばかり但シ女郎め湯へ入ルときばかりへさす也べつかうのかんざしへそりが出るといふかんりやくより出たることなり

船宿部やと分して別にへやわなしやわりミせさきを云船宿のかたまりている所故名づけたり

あんじん部屋右に同じ大船屋にばかり別にありしが今へなし何

娘分と出ちがへてまハしの女【お八重】ほんだぶとりのせいらす嶋の上着にあいおなんどのもゝ山をりの帯をむすび関東じまのまへだれ丁子茶の二寸はゞのひとへ帯ハ帯の下へまハし一ト重ハ帯のまんなかでしつかりとむすびあたまハばいむすびに銀のごてんぼうをさし八重といふ字へ五三の桐のびら／＼を下げたる銀のかんざしをうしろへさしてはしごから上つてくるこなたらの四畳しきにハ床をとりわかひ者しかも火ばちの火をじうのうのうへひろいこんでざしきをはき出しながら【若イ者】お八重どん船宿部屋に久七どんが居るならの【八重】久七どん久七どんハとつくに帰つて仕まつた勝さんがおいそぎだとつてとぼし迎で帰んなすつたハ【若】ホイそいつァおゐねへ ト下へおりさうにする【八重】コウ／＼おめへ下へ行たらのさやば町の山城屋に迎ひ船をよこせと状遣をやつてくんねへ今ツィわすれた トいゝながらおとまがざしきのせうじの外にて おとまさん一寸【作者曰】まわしのざしき多き時ハ折／＼かやうによび出すものなりいづれも様御ぞんじの事也【と】アィ今行くよ【長】それ見たか上使のお入だハ早くいきやァがれ／＼ トあしでつき出す【と】そんなにいやがるなら出て行やせふ親分が来ねへでもいゝのか三行半じやァすミやすめへ【長】長でも半でもかまハねへ判人袋の緒が切たきり／＼と出てうしやァがれとまづ夫婦喧嘩の紋切形ハこふなものだ【と】チット稽古して置やせう去られた心持ハどんなだらうの【長】なか／＼わるくもあるめへよ【と】その気で行てこよふ ト枕元の紙をとつて屏風にかけておいた打かけをひらりとすそをはせおり廊下へ出ながら コウおめへまだはなしがあるから今夜はとまんなせへしよ【長】又なき言の聞役かチットさへた面ァ見せやな

これの家にこゝも多くへはしごの下にあり

【と】さへた此面どうじやいな客につられてぶら〳〵とが閒てあきれるよ　トいゝすてゝ表二階のはしごより下ざしきへまわる

【長】ム功者にしやれらァ一昨日うせろげぢ〳〵め　など、心におもハぬにくまれをいつて横になり夜着の半襟の黒びろうどをゆびでおいとなでながら兩方の褄をからだの下へまきこんですつぼりと味る【作者曰】是ハ趣しのときのさけおしこにて些も不通も隔別なく只一人り寐るといふハまんあるゆへ女郎の寐る所もなきやうに夜着の中へふんはたかり〳〵ハふとんいつぱいに筋違にねたりなどする時也　但したなじみたるうへは女郎ゑんりよなく夜着をまくり翌へこそぐりつめるやいちやつきあれどもこれハ苦き遊びかたとしるべし一度や二度のなじみならバ情なくてわるし女郎がたま〳〵に廻つてきてもヲヤけしからぬへよなど〻すぐに行れることゝありてたび〳〵しくじるものなれバまづハ不可ならんかしかし女郎の氣性にもよるべし

〇道刻既に戌時拍版【玉縞町の番人】カチ〇カチ〳〵カ〇カチ　【此里の通人御存ジのちいさま】しる粉な能ございや雜煮なようございや【大きな聲の人】あァんまはァ引り

第二齣

下坐鋪の光景を看るに

客二人の割床四五度のなじみ客【傳吉】年ハ二十五六色白にて十人なみのおとこなれどもおしい事にハ下駄とひたいと手ぬぐいのかぶりやうと此三ツにきたなんでむせうに顔ばかり白くしたがるが此人のきづなり　友達にハ傳ぼう〳〵となぶられたがらも芝居通のきいたふうにこりかたまつた氣性にて素人のくせにわざ〳〵芝居者をまねたがり平日役者の名に筺をつけて樂屋のやうすハぐつとしりじまんいつも巳待の聲色連中夏のうちハすりがわと聲色二ツ日がハりの夜あるき仲間にてちよつとぬけからで小便するにも我レをわすれてわる見への ぎつくりなとをするくせあり割印のすわつた顔見世の手ぬぐいをバ湯にも人レずに大事にしているおさきなる人物也今夜ハ旅人客におぶさつてきたわるがそと見へたりはつの客【德兵衛】としハ四十ばかりでつくりとしたうすいものある近在の旅人客江戸の問屋へ仕切を取にきた逗留のしやれ也尤此里にハかやうなる旅人客多し故にはやり哥などハたいがいの江戸者より早くおぼへる此たぐひの客ハ板古ぶしを本に書付て國へもつて歸るふうにて　げいしやの直しぎハいたつてきたなく女郎のむかひ早きをかなしむ廻しの時などハなじみかまハずの名代をとりとかくぶう〳〵を云ひたがるもの也いつも船宿のかみさまにハ黒ごま一ト袋が國みやげにて立ぎハのかんじやうにハ錢相場むづかしく小錢で一文も余慶につりをとるが此人の國風とミへたり【作者申上候】此所ハ二人わり床にて惣方の詞大きに入り組ますゆへ【傳吉】が床は〇印をいたし【德兵衛】が方ハへ印にいたして兩方をわかちますさやうに御よミわけ可被下候〻

【傳吉】どぶねつきに蚊帳のかめ／＼ぶとりへようかんいろのづきんを留にへて夜着へはいりあをむけになつたり横になつて見たりふとんにもいつけてある鼻紙の目へゆびをいれたりきせるのやにを通したことよりをたはこぼんへ横になげこんであまりの紙をかんで天井へふきつけ夜着のうらへ手をさしこげて見たり股をあいたりふさいだりしながらがら／＼枕へト手をやると油でべつたりヘイといひながら障子をあけて居る所へあしおとをするゆへびつくりして早々にしまふほどなくきたり 【おとま】 きたりヲ、さむ トいひながら夜着へはいると 【傳】目をはつちり コウ今までどこにゐるなか町としたのだまだこねへでもいゝのにさりとれおはやしい帷幕だぜへソレお囃子なら「つッかけ」かけ入としねへ つつかけかけいりはやしナの手ニあり 樂屋番の衆じやァねへお夜着の中の大福餅よりやァあつたけへよ がくやばん引まくをかぶつてねるといふやつ也されども女郎にハ一向わからぬゆへこれらハ一割そんなけわふ也 【と】廊下をあるいたらさなせへしこんなに鉄氷になりやした 【傳】ヲ、つめてへこいつァ雨落だと鐵といふ所だ 雨落とハたじあいの鉄ぞ前をいふ 【と】なんだか根からわからねへしやれだのう トはらはいたなりて傳が たばこ入から一ぷくついで一ト引ひいたけむな居風のがま仙人へふつかけてヰアと出す 【傳】ヲイト とつこのむ行ふし五明きの客大ぜいはしごをおりる音聞へる なんだこどもしの出があるのか 【と】ナニサ左ッむけへの客人よ歸るのさ 【傳】ム、ならび大名がごうぎとさう／＼しいセ。あれまの偷のヒッ引をきつかけにっ階子がドロ／＼だから。こいつァ一ト狂言かけさふだ。モシ徳兵衛さんでへぶお静だ子。そつちの「お芝居ハ過やしたか 打出しのことをすぎたかとゝめはねたかともいふ也 モシちつとぞふいでもよふござへしやうぜ ∧【徳兵衛】わぼけた聲でちつとそゝるべいかのぞつちゃサそゝりに行くべいおトかつぺかな()【傳】こいつァ「本よミが納らねへ。イ、エサなぜか聲がしねへからさ。なんだか狂言をおつに昔なさるゝと見へて「彦兵衛の。ホチ／＼で居ながらチットはなやかな「わたり

ぜりふといふ法にしやせう（彦兵衛とへかけ合のこと也これいろつかひの方言）△【德】彦兵衛。ナニ彦兵衛サ。うつちやりだァ
子シ。彦兵衛跡から來るてつたァ。同志に來ちやァ氣づまりだァから子シ（）【傳】（よんどころなくうけて）アイ
さうさ子（小サナ聲で）おいねへでんぼうだ。コゥ隣のやうな客をとつたらつらいこつたらうの。あり
やァまあ何が面白いのだらう只とぼしがすりといふやつだらうがおんなじ蠟燭屋ならお店がよ
からう第一れこしきが光らァおめへ達も斯して每日〳〵異類異形な化ものを相手にして居ると
れいゝながら間にやァアノ男ハ好た男だどうぞこの客を呼とげて見てへと思つても客が「ちら
しじやァ蚫の貝ではじまらず（片思ひの異也）【ちらしとハそこらちらちらたくいちらしたじまぬ字をいふ辰巳にて行ハるゝ詞也又平右衛門ともいふ】そういつてまんざらでもな
く男が氣にいつて世事があつて子共部屋の噂にもなるやうだとかんじんの金がうとしホンニお
つなもんだよノゥしかしあんまりぶしつけだがおめへなんぞハマァこゝの内での「眞といふも
んだから（たてものをしんといふ）客人「（さわ山のさくさんの事也）ソレいつも「わく詰だらう（にぎやか）【と】ナァニねつからお客ハご
さいやせんテニおめへわたいらがやうな者にどんなお客が來てくんなはるものかおめへがたの
やうな後生心のあるお客こそたま〳〵にも來てくんなはるからどうかこうかお茶ァにごして居
やす【傳】よくいつてくんなせへコレモゥ淺黃の頭巾をぬく場だよ。其口の下から本名と申せ
ば。こゝのうちでも「わり〳〵」（許ばんよく大入の意也）いわせて。壹人リで「ばり附」（上ニ同じ）て居ながら【と】がり〳〵だ

かばり〳〵だかしりやせんが。川さらいからこつちへとんだ隙さ。新地へ船をつけて陸をあるくいだから。唐の客人ハいふにおよバず。てへ〳〵なら外へ行なはるのさ。それだから昼の内ハ。からッきりお客ハござへしなんだ。シタガわたいらハいつそ樂でよかつたよ。きつい親方思ひだチヱ【傳】ありがてへ〳〵ホンニそうだつけの。半丁の七さんのめへから上ッて。㊂の札を引替にして。櫓をあづけの。そして其札を。船頭の腰へ下ヶたから。べらやアねへ川さらいの日雇といふ身だつけ【と】船宿衆や藝者衆も大きな違さチヱ（トいゝながら傳吉がたばこ入を取る）フヤ五大力のかた物だチ。とんだいゝハモシ今じやア。ひら〳〵の五大力なんざアきのきいた子ハさしやせんねへ。わたいがいふことにやア。錠のつひら〳〵をさす氣なら。思ひきつてひやうたんかんざしが。ごれつていゝと云ッたら。そんなわる口な子だといつて。大笑をしやした。わたいが氣ハおつにひがむ氣さ。惣別娼妓屋の者ハ。神佛ばつかりいぢつて。塩だちだの茶だちだのときわぐけれど。私に限つちやア。ついしか願掛のがの字をねへのさ。ナニおめへてん〴〵の親にさへ見離されて。こんな苦界たざまをして居るものを【傳】ごうせへ悟ッたとだの（トハいへども五大力のかなめのがお目にとまつて たいへいたはん〳〵くじけと思ひ）されさりながら苦界のたのしミとかなんとかいふとが大有りだらうサアその噺しがイヤ聞てへ〳〵（トうぬがこハいろ）【と】アイサ外の子共ハてん〴〵にがつをこしらへて（がつと ハいろ

【ことをさしていふ是辰巳のはやり詞也】とんだおちん〳〵だが。わたいらァ正直薬りにしたくッてもごぜへやせん。そのはづだァな。三文が働もねへから。一家一もんにミかぎられ。こんなざまさ【傳】イヨいふもんの紋盡ありおてへ。道理でおれが様な。きなか者を客にとつたせ【トいゝながらそろ〳〵丘大力のあなたうめやうとごきげんをとりてかゝる】そりやァそふだが。おめへはどんな男が目づきだ【と】どんな男ェわたいが氣性をあてゝ見なせへ【傳】まちねへよ流石におめへのこつたから。ソレ生実棚の茄子へ。葛だまりをかけたといふ生ッ白ひ野郎はじきさま首にするだらう【つきりすべたくびを切ルといひかぶつたことをくびになつたといふ】【日】【もうせんをかぶるより出たる方言なり】エヽト手代敵の色悪ではいかすと。和實荒事はそつちにあるからマァ太刀打をする者はねへス。まだ半道か。さばき役だらう。マァ〳〵こゝらでごぜへせう【と】きつひてん違さ【傳】ハテナおれが役割は違ねへはつだが【と】私はおめへのやうな敵役が贔負さ【傳】ヲヤこいつァ「じわ〳〵だらうァノおれがやうな「お下でもかァノお下をお下とへいふはお町たいふイヤよつぼど人を茶ァよしかにするぜ【と】わたやァ中賣の子だからさ【傳】なんだ中賣コゥおめへどふして中賣といふ事を承知だ堺丁邊にかこはれてじやァねへか【と】生れ古郷だからしつて居やさァな【傳】ヤそいつァ面丁子茶狐の脚ッやんきりだ【と】けしからねへそりやァなんの事たへ【傳】ソレモウおも白狸の腹鼓でもあるめへじやァねへか。トキニあんまりお堅へ附合だチットト横に

寐釋迦と化れどうだ（トもすくする）ホイそうだつけ。つかねへこつたが先をくゞつて板しばりじやァねへが。内中へ惣花以の外なりさ。ソシテおめへなぞハッレおいらがやうな者ハ。お情とかなんとかもあるだらうが。何分お懐がたゝけねへから斯してくんねへッレ今夜百疋出しての。是を二階廻しと河岸番へ割振て。御堂人前龍藏づゝとおめにかけるハッレ今度來て料理番煮方にやわやすッこゝらが法の附やうだぜ。それから娘分女大ぜいサ。こいつがうるせへやつよ。共跡で張場の先生ハァ内へハいつ遣つてもいゝじやァねへか。ナントどうだ。奇妙きてれつ。おそろ（これハかんのんのきやうのもんく）觀音妙智力だらう（ト鼻紙袋の金入レをわきハ方へ廻してチヤラ〳〵と音をさせながら丞いやつとで南鐐二ツを出す金入レのなかハむさんや四文せに廿二かず紙でやんわりと包みずいぶん音のするやうにこしらへたる平生たしなミの細工なり折ふし陸ぶらの胡蝎り橋鏡にこまる時ハ此鏡怨らあらわれ出急難をすくふとあるべし）【おかぶつ】（おかぶらとハ辰巳邊船なきときか船留の時ハ船宿よりぶらちやうちんにておくることありこれをさしていふ）【久目】（うけのわるき客にハおくり船頭なくして船宿のてらちんを借すばかりなり）【又】（陸を行くをおかぶらともいふおかをぶら〳〵と行の心なるべし）【傳】サァこれをそこから序に遣つてくれねへ【と】（じろりと見て）わたやァいやでござへす【傳】なぜ【と】おめへやんなせへしな（ナニ壹分ばかりと心の内でさましてみる）【傳】フツトよし〳〵今に來たらやらふ（トすこてれぼうにてまじめになりからだぢうをもじ〳〵しながら足ハおとまが上へあげて片手でおとまがせなかをかゝへあたまで枕をそこへよせる）【と】ヲヽいにおめへのあしハ針の山だのうとんだ毛むくじやらだアレサまあらなせへし一寸行て來やせふハな【傳】何所へ行【と】河岸番をよびにさ【傳】マアいゝわ【と】それでも一寸（トおかに役其へを出しながらまくら元トに何か出しおきてあるをひいて手にもち）【と】じやアどこに行て來やす（トせうじを明ケて廊下ばた〳〵跡にうつかり傳吉ハ鳶に覺悟の油揚を大にとられたごとくにてあきれて呵めな）

かりしが小首かたむけひといこと　イヤこいつとんだ「けつさつ」だわへ。まづ今夜ハ女郎おんぶの舩賃此方マヅヨシト外に百疋が河岸番まハし。これもよしと〆上た處がてうど「里扶持」壹分二百文のおごりで差引殘りおれ一枚「はき舞臺」道具がばかりの舞臺役者引込の跡をいふとハハレマ情ねへ【四ツの鐘】ボヲンクラ「ボヲンクラ【却說おとまハ】まくらもとにてひろいたる書付をそつと頭場へもちきたり何かあやしと開きゝるに小サクとぢたる帳一冊あり是ハ先刻客入レた出る時とりおとした物と見へたり「はなはだ俗なる書かたにて

芝居でふだんにいふことばづかひの覺帳

百拾六文の札錢を　小づのといふ候
百三十二文のが　大づのと申候
貳十匁を　あたまといふ也候
廿五匁や　本直といゝ申候
卅五匁の事をバ
百五十文を　ちぎ長半といゝますゆ

【おとま】心の内でふき出し　ヲヤまアあきれたふうたきいだハあいつが床へ廻る事ハ【心の內で】まづ今晩ハ是限○かくとハ夢にもしらけたる跡に傳吉よん所なく割床の一座へ酢お買かゝる　○【傳吉】徳兵衛さん此通りだ　△【徳】何事だァ【傳】まハしのかなしさ御推察だ△徳兵衛があいかた【お大】これハいたつておてんば女郎也　おとまさんヲヤおとまさんゐなはんね

へかモシたつとおはなしにお出なせへな【傳】いつてもお邪广だらう ○折から船頭きたり △【船頭】徳兵衛さんおかへりハどふでござりやす △【大】吉どんか一ふくくらゐなよゥ【船】またお大さんのおふしぎか【徳】モゥ四ッだァらうかァ、いつそおつ泊るべェそうしてくれせへよ【船】ハイそれなら直し行をよこさせやせう ト出てゆく【徳】よび返してァ、これ/\吉や/\鱈昆布の大平だんべい質ケせへよおいらァ厭たァから。モノ起るがつれへこんだァ【船】それでもお連衆が【徳】モノそれよナ。がらうつちやァすれたァ ○【傳】イエ/\わたしなら同行としやせふおなじくさ/\【船】ハイさよふなら △【大】コゥ/\おめへの此お客をの今度から連申て來てくんなよたのむによ【船】アイ/\それだつておめへわしがなんぼ連申て來たくつても。お客の氣がすゝまねへじやァいきやせん【大】すゝますれハおめへすゝめねへな。それが働といふもんだァ。おめへ親方の飯を五六百年も喰ているだらう【船】イ、エたつた四文錢百年さ【大】口ハへらねへコゥおこういへバの。どうか此客ハ來さふもねへ顏だよ。來ざァおれが幽霊になつてとり殺してやらァ【船】ヲヤおそろしい。お休よ トいゝすてゝ出てゆく【大】モシおめへわたいがこんなおしやべりい、ざつかけなしだから。お氣にやァいるめへが無理にとハすゝめねへから來る氣なら來てくんなせへ【徳】ァ、來るさ來ざうにやァこんなにはァ能くしてくれちやァモノ翌日からでもお

つばしけるだァ。あにはァ是一年にいくたッび上下だがなしれねへ。モノ年内にも極月さし、りに來て十五日斗逗留のしたァ【大】その時ハ何處へ行なはつた【德】歳暮を引かけてあじよゥするもんだ【大】うそばァつかり。おめへ世事ハいゝのう。その世事をわたいに四文ばかりひつかいてくんな。よつぽどいゝよホンニおめへ來てくんなはるか【德】ハテうたぐり深いセノあすの晩げへ來べい【大】よしねへヨ來たらどふするといふお客に來たためしなし。つけ裏に來るお客ハ久しくつゞかねへものだ。其内にもせきこんで來ルお方ハたのしミになりやせん。お客にもいろ／＼が有りやすハ相應に金をつかつてもわるくいわれたりつかハねへでもヤレコレと内中によく思ハれたり世事上手が過てにくまれるもあればだんまり坊で可愛がられるもありやすほんにお客の上手下手でたとひ割花にしても惣花よりうけのいゝことがあるから一ト通りじやァ行きやせんハな【德】なるほど掛引どたァチシ【大】ヲヤおつに感心しなはるネおめへハ顔に似合ねへ氣がいゝのう成ほど人にハそつてミろ馬にやァ（トいゝたして何か思ひ出シ）ヲホヽヽマア斯う向なよ【德】モノ馬さ乘つてミろちうドレ馬さ乘べへがな【大】ヲヽつめたモシヱこゝを一寸いぢつて見なせへし【德】おやッかな（つよくといふ事）がしやうぎにしやくサさしこんだァの（トけゞんな顔をする）【大】（あをむけになり顔をじろりとミて）ムフ（トにつこり）「枕の外にしる者ぞなき

〔隣座舗の光景を看るに〕〔あた鉄〕〔あた吉〕〔おさき松〕　三人割床。

〔おさき松〕上着をぬいて下着の上ツはりにはんてんをうらがへしにきたやつ手ぬぐひで帶を〆ふとんの中からはいだしかたわらなるたばこぼんの中にあるもへさしの杉ばしをとつてあんどうに向ひ「まとひや「けしくちの二重文字を書ていたりしが〔松〕吉さんおめへのしからう此位にかご字を書くものはおいらが組にやァあるめへ　三人ながら屏風をかたよせてふとんの上へならんで腹這になりならずに口ハかり聞いる〔吉〕ドレ見せや。ぎまァ。馬鹿金が半分でもねへ。あのやらうはきついぜへこれおかうの消口をみたか〔鉄〕ムヽ見たァ〔吉〕あの手業じやァ障子や傘へ切り抜くのはお茶の子だぜ〔松〕こんべらぼァ安くしやァがるなそんならおれが書く字をあてゝ見ろ。待よっノヽ　トいゝながら杉ばしのさきであんどんのうしろへ繭といふ字をかく　○此べらぼうへといふと也〔吉〕ムヽウそりやァなんだは凧にあるソレアノヱヽ整だノヽ〔松〕それ見たかおさきめェ繭といふ字はナ斯して〳〵正月の正の字だァ〔鉄〕せきこんでおもしれへ〳〵おれがあてべェそいつァな艹や東の門に門たつて東や東や蘭や蘭といふ字だイ。才六め。大をしらねへでつまるもんか〔次郎太ぜい〕フホヽヽヽヽあまりにこのやきもちがあいの吉かあい方鉄があい方　またおさき次郎あきれて見ていたかた〔おさ松〕〔よ今〕〔ひとさ〕ナァサミおつと寐なせへしないつまでそうして居なはるんだ「あきれかとんぼう返りをしやさァ〔松〕その序に猪乗をすればいゝヱヽ人をつけへにした〔鉄〕うきァねへ自身番の惣寄合在人組が揃たぜ〔松〕店受が來たらすぐに佛を出さふがあきれらァこいづ念佛こうをしやァしめへしやミとしやにかまへて居るぜ〔鉄〕セシヱ何も致やせんが講頭が極引の通りぶつかけ一盃の

煮轉で青ッてくんねんしおたのん申やすヱベロ〱〱アバア（トしたを出しべつかつこうをして女郎の前へずつとつく）【大ぜい】アハ、

ヽヽヲホヽ、一（トひつくり返て笑ふ）【今】いつそ氣さんじだねへアハヽ、ア、【すミ】わたやァもう腹の皮がよれる

やうだよヲホヲホヲホヲ、おかしい（ト二人ながらなミだをふきながら笑つている）【松】コウおらがかゝァを見や色氣じミて居

るそふでまじめだァあげさげが胸につけへたか【さつ】まじめでもよふござゐやすきついお世

話さ【松】きついお世話おれが判人だものを【さつ】ぜげんがあきれらァ【松】どふしたと【さ

つ】ずつでしまいやした【松】跡から追かけやう【吉】よくしやべるいう此やらうにかまいな

んな【松】ナニあれがこつたからいゝわな【さつ】ねつからよくねへのさ【松】工面がわ【さ

つ】おたがひ長左衛門さ【鉄】ア・やかましい口だ【今】【すミ】アハヽおさつさんおめへよく〱まけね

への【さつ】ナニまけるものか【鉄】ナニおさつさん。うまそふな名だナアこいつァ温たら

うァ、耳がかゆいコウあたまの鶴を借ねへ【今】鶴とハなんだへ【吉】ヱヽソレつるッぱしよ

【松】手鳶でもいゝ【すミ】ねつからしれねへハな【さつ】是かへ（トかんざしをぬく）【鉄】ムヽその耳

ツくじりよ（ト取て顔をしかめてくびをかたむけ）どいつもさわるな〱（ト耳の穴をほじり）アヽかゆかつた【今】耳がかいゝと

いゝ事を聞くとさ【吉】ねつからきかねへどうぞ月ありか徳虎でもくたばればいゝ（月ありとへ日なしかし徳虎とれ

損料貸をいふ日なしを月有りと轉じそれからやらをと、とらと轉たるはやり詞也）サア皆寐べいぜ【松】待さつや〱一ぷく（トあんどうで吸付ながら）コウミさつし魚

油じやァねへぜ（みな〳〵床へはいる）【鉄】きいろな聲で「寺は駒込吉祥寺ィ茶の湯座敷の奥の間でェござをたゝこて
吉ミさんかッ【すミ】おかしな聲だのうお今さん聞たか【今】ァイサとんだ上手だよ【さつ】ヲヤ
お今さんおかしな哥がはやるねェ【吉】ありやァのからくりのいゝ立からはやり出したァなどん
娘な子つきをして黄色な聲でいゝ立をするからとんだおかしい【今】ほんにか見てへもんだネ
【吉】【鉄】【今】【すミ】四人の床ハ何ごもなくひつそりとして作者にもしかたず【おさき松】【おさつ】此二人の床ハかけ合のおしやべりにて寝ずにしやれてゐる【さ】床へ這入つたお定りだが今夜ハ
寒い晩かねェ【松】ウンニャ若さむくハ鉄炮の方へしつミねへてふどいゝ加減な湯だ【さ】ワ
ァイきつい行過さ私ハモウかつ〳〵とするからさ【松】おめへも綿温石でもいれたか【さ】わ
た温石とハなんだへ【松】ミ馬といふ作者が引札を書て弘めたのだ【さ】ノウしりやせんハさ
りやァいゝがおめへハどうもミた顔だよ【松】ミた顔だとハでへぶあたらしい事をいゝ出した
なそれならおれもあたらしくいふべェ此頃ァこんな顔が流行らァ【さ】ごめんよ夫でも誰にか
似て居るノゥおすミさんわたいがお客ハ誰にか似てるのう【す】さうさノゥ【鉄】松か顔か
松か顔ハナ馬鹿ばやしのひよつとこか橋際の羅漢さまにあるつらだ【皆】アハヽヽヽホヽヽヽ【松】てめへ
に似ねへで仕合た【さ】ソレ〳〵思ひ出したハ状遣のソレ向ふ河岸から来ル人に似て居らァナ
【す】ムヽさうトヨヲホヽヽ【松】でへぶ笑ふなおらァ又身替りにでも出されると思つた【さ】

コゥおめへハどつちの方だ【松】あつちのほうよ【さ】あつちとハどつちだ【松】あつちとハこつちのそつちよ【さ】ヱヽしやれなせへすなわたいがあてゝ見せふ【松】こいつァおもしれへ【さ】すつぱりといふところがなんでも橋を渡つて來る所だ【松】べらぼうめ舩で來らァ【さ】うそばつかり【松】ごうぎと安く見るなもへんがァ引ワン〳〵喰付くぞ〳〵【さ】ア、こわいハな何のきねだな【松】是かこれハかハばおりの怨靈びわようとうのふんばりあまのすそつぱり女郎のヒウドロ〳〵ワン〳〵〳〵ツレ喰付くぞ引【さ】ヲヽいやだよモゥ騷々しいわなおめへの連衆ハそんな氣作だのう【松】氣作をごらうじてお茶を上札ツン〳〵喰つくぞもへんがァ引【さ】ア、モゥいやだよゥうるせへといふに【松】ナニうるせへそのはづだァおらアこれでも本町の番頭だァ【さ】本丁いばん太郎だヱ【松】店者だよ【さ】店ざらしがあきれやす【松】おれが番太郎の店ざらしに。おめへが今戸燒のあねさま。てふどいゝ夫婦だ【さ】アイサ道理でおめへのあたまハかぼちやの火入のやうだ【松】火入を抱て寐ても革羽織ハ用心がいゝ【さ】ごめんよ表向ハ革羽織でもお心の内ハ羽二重でごぜへす。丈夫向だから買てミなせへ【松】なんだ羽二重どうりで口がたつしやだ齒が二重なら舌も五六枚ハ受合だ【さ】ヱヽにくる口だのう【松】ウンニヤ可愛口だわァんぐりトロを大きくあいてミせる【さ】ヱヽモなんだな【松】

ナントいゝ口だらう行く氣があるなら飯について見ねへ【さ】よくしやべるとだよおめへ口がくたびれやァしねへか【松】ナァニ今來ル時わらぢと脚半を等分にせんじて吞だがツイわらだに喰れたからそこで出來た口まめサ【さ】ヲヤあきれけへるよ【松】あきれも歸へるのハいゝが行がけにやァいそかしい【さ】ナゼ【松】あきれ千里を走る【さ】そりやァ地口かなんたへ【松】なんだら法師のお客をかきの種さ【さ】わたやァお客をかくことをしらねへよ。恥は常不斷かいて居るが【松】お客かお客ハ斯かくもんだ（トせなかをつめてひつかく）【さ】ヲ、いたそれじやァ虱のやうだれ【松】お客ハ虱だと思つてりやァいゝのさ【さ】いてへ爪だのうよつぽと不性者だ【松】此ごろ琴をはじめたからよ【さ】上へ仕の字がつくだらう【松】ナニ仕ごとかおきやァがれトいゝながらブイと屁をひる【松】ヲヤ此子ハ色氣のねへ屁をひつたハァ、くさい〳〵サァくさい〳〵屁ハまハないか〳〵ボコボン〳〵此子の屁ハさございい屁といふいだ。松のうちの雜煮を持こしたのだ【さ】いやだよこいお客ハモウわたいにかぶせるハないゝ出し屁の問屋だよァ、くさいぞモウト（きなこつむいてねる）【松】そりやこそ屁の證據があらわれたでござい【さ】なぜ〳〵【松】ハテ屁ひりの神ハ正直神と誰が放た彼が放たひつた方へつん向て寐たから逢ねへ〳〵。サア〳〵放屁の神の屁見世。いゝ出し屁の問屋。ホン音ハこれでござい（ト夜着のすそを足でばた〳〵とふるいながら）お隣りのおかみさんへも匂

ひのこもつた夜着のお裾分を一すかしはかり上ケやう。私らがおならハつきつと放過たがモゥ一ッおまけにブイ（トツ、ひとつひる）【さ】ア、モゥあんまり色氣がねへよ。そういつたら。色に氣がなかおかしかろといふだらう【松】先へ廻つたナッ色に毛がはへたら生肴がくすりだ。冬拵た色男が夏出して見るとかびて毛がはえるもんだ酒肴は猶の事よ。地色があきたら又客色に色上をしなァ。しかし如在ハあんめへ【さ】かしこまりました【松】ナニ寐て居ながら【さ】そんならなんといふのだへ【松】ハイ／＼寐まりまりました【さ】寐まり／＼ヲヤむづかしいのう。コゥ。そりやァそうとモゥしづかにしねへ外でやかましがられな（ト小声になつて）初會だけれど。ホンニ三年もなしんだちんころだのう【松】ちんころだおらァ犬ころだワン／＼／＼【さ】アレサ世話のやけるこ。これなにわたいおふざけもんだから。お氣にすんだら來てくんなせへしよ（トうへのかたながなかへ廻してつめこ）【松】ヲ、いたいたゞかしこましまた【さ】またとぼけなさせへす【松】とぼけじやァねへ。どりお寐だけかう

（トいつぷくのんだふきがらを）【はたく音】トン【つわはく音】ハッ【吸がらへしみる音】チウ、、引（）（きばけ鳥居に引かへて隣の座敷の傳吉へお）ときなま一ども寐ぬゆへにこんところなくふとんの上に寐やうとすれども目へさへたり、ごうはらまぎれに廊下をはたく／＼はなしたもつて小便所のはめたまじめにらみつけたら／＼だら／＼ひとくりまへしてかけをんどうの穴の用心たよこながら廊下駄のおハ寐しつまりここだまにひやくころぶら、、とおとふ廊下へ來り目をこすりながらいさゝれん中ほしきたゝわが坐しきととりちがへ。せうじを明ケてはいれどもるやつけりおのれが座しきと心へ【傳吉】ゲイ　ブウ　ア、酔たハ　口おれだつてならねへなんでも今夜ハいたゞいた晩だ。よつほど評判ハわりい【いたゞくともつけたとはたゞといふ芝居のつ

うなり【吉】徳兵衛さんよく寐るの　トいゝながらおのれが床と心得て屏風をあくれバ内にハ二人見るよりびつくり　ヲヤこいつァ大間違だ御免なせへ。おれが床だと思つたがイ【松】ハはねおきなんだ／＼屏風をことハりなしに明やァがつたハどこの馬の骨だ　トはりこまれ【傳】ハイ私イヤとんだ麁相を　トいゝながらうろたへまなこにせきこんでこちらの屏風をくいと明れバこれも同じく間違【鉄】も女房と一所ニとびおきてめをこすりながら　なんだ／＼どうした／＼今時分何をさがすのだ。松か。ヲヤ松じやァねへ。誰だ。コレおきさまハどこの人間だマァ下タに居やな。何　まごつくのだ。枕さがしハおいてくれ。何ンだかねつからわからねへぞ。こんな起ろ／＼【傳】ハひとりまご／＼しながら只きもはかりつぶしてゐる「イヱサ大きにぶ調法いたしましたトンと坐敷をとり違まして　ト額を畳にしてせうしの外へ出さふにするところを【松】ヤイきちやァがれ／＼己ハ是折角おしつまり遊ハした所へナゼどろすねをふんごんだ【傳】おすこしむつとして　ハテそれだから御免なせへと誤らア。是ほど誤たら云分ハあるめへ【松】いゝぶんがなけりやァ申分がやつとこさとあるわいコノートぼんくら文のふかし立やらうめみんなが持物の用心しろ廊下鳶がうるせへぞ【鉄】コレヱうぬらがやうな無面目なやつらに御詫宜ハむだらしいが爰を抜裏だと思やァがるか大屋さんの御條目にも紙くずひろい物もらひ木ひろい一切入べからず。損料貸日なしかし此方ハ断なく鐵借無用の張札ハ井の印とならべてあるハ。此あき盲め生盗人め。くやしくハ相手になれ　これからこゝでさわひじやァわるいからマァかんにんしてだまんなせへし【吉】二人な

がらうつちやつて道へ　ト此声を聞よりわかいもの二三人女まじりに出きたり傳吉をとらえてざしきへつれて行ふとする　【傳吉】おもいつときかぬ気になつて　乞食の駝鳥をとるやうに腰をこゞめて下から這へな。鬼坊主の人おどしに。なめ過たあごたをぶつな。生盗人だの首だのと。蒿飛車に。けんの峯。なんでも四文の持遊程ならべ立て悪言のやすめを賣るナ。買たらあたまのかけねなし。直切小切のきつたりはつたり。元直のしれた木葉やらうめこいツァうぬ喧嘩太平。こゝで安穏にやァ。すまされねへハェ【松】何をうぬ　トとびかゝつてすでに事よとミへければたゞいわい入双方を引わけて傳吉ハとゝりざしきへ入れこちらのざしきへも大ぜい来り留人をなだめる此ハ吉ハおとなしきとの故だまつて留てある　【松】尻腰もねへくせに。日ばつかりたゝきやァがるが。但シハいざりか腰抜か萌黄の蟵でも唄やァがれ。何も後生と思江。猪熊の腕をさすつて胴背中のくりからも龍と劔とのりやうけんすりやァ。振習の大縄で。野郎めわるくからそやァがるな。下手に出半鐘を打やァがると。百旦那の引導か。豆澤山の厄拂じやァねへが。ちよつくりつまんで。あつちへべイだぞ。一ッ拍子を。とつぱくるがきいごの助。百に四文の利も非も聞かねへ何處へ出してもおさきの松さん。店受が喧嘩屋庄兵衛なら。親分が中ッぱらの中左衛門だ。ワいらァ男を見損ッたか。屁の幽靈めへェ、とほうもねへ【若イ者】コレサおめへさんがたがそうおつしやつちやァわたくしどもがついてゝすミませぬこゝハモシ御了簡【女郎大ぜい】そうさモウいゝからかんにして寐なはるがいゝハな【鉄】うつちやつておけへ。てめへッちがし

つたこつちやァねへコウ此土地じやァなっ佐箱屋の吉さんや茶勘の玄象さんなんぞが口利たァ。おゐらァふだん心やすくするから。何もこゝの内へあたるのじやァねへ。殊に今夜らハ。長契方も居るから。随分疳癪をおつぺして犬子〱で虫をさすりやァ。あめへッたれた。だゝをぬかすれ。コレヱ〱。中の字のきめ引をしつた小蔵なら。目のあかを「じよれんでさらつて。鼻へ二本の棒杭をうち。口の舩留をして耳のそこりへ聞あがれとんだ土左衛門じやァねへか。あんな野郎ハ竿先へ突かけて。海の落口へつき出してやるがいゝ「乞食やらふめひやうたくれめ。うぬらが四文と出る場じやァねへ。此只今のお笑ぐさめ一なァんのこつたへ。ヘン咄のやうな【大ぜい】サァ〱モウあつちらでもあやまつてだまつたからよふござへやす【おき番の若ィ者】ハテとてもおまへさんがたのお手にハたりませぬサァもし〱皆さんそこへおよらせ申なせへモシよほど夜もふけましたへ、、、、、トそらわらひのおためごかしおまへの御むりハミな御尤とやう〱にだまして屏風たてまハしきたとなりの傳吉が床へ入り【おき番の若ィ者】へ、、、只今ハ大きにハ、、、さぞお腹たちでござりませふ【傳吉】ナニサおめへ【若者】小せなこへでどうもおまへさまァトひたいへ手をやつて四角にしてとせ鳥居がすハつている衆だからとむねたたいてこゝがおまへどうもへ、、、、イヱモゥ何分にもモシお連さまに【傳吉】ナニよく寐て居やす【若者】へィさやうならイヤほんに今おとまさんをおよこし申ます【傳】ヲイ休ねへナニよこさずといゝハな

（かすかにきこゆる）【風りン】そばィそばィ引ぶつかけなんばん

第三齣

長五郎が床にハ（二人りさし向ひのしんくり）【おとま】わたやァおめへに言ふ〳〵と思つてわすれたよ【長】何だ【と】おめへァノ藤兵へさんが内をかぶつたとよ【長】ナニ新川のか（トきもをつぶす）そして今じやァどうしたおゝかた附のぼせだらう【と】ナァニ流石に一番番頭だから。そうしがなくも行ねへのさ【長】やつぱり來るか【と】來るのさ【長】一トしきりのすがたじやァあるめへ【と】あの人だつても。其位なしがくれ有わな。此間も來た時。とても歸參ハ叶めへから。いつそ見世でも出そふかといつたッけ。何だとョ。内じやァ段〻下の者がの。くり上ケて出世するから嬉しがつて居るときさ【長】ムよつほど明たと見へるな。その亡念ハそんな手めへのからだへ移るぜへおそろしい罪つくりだ生霊や二兩じやァねへ。何百兩が取付ふもしれねへャレおそろしや〳〵【と】夫をこわがつて此商賣が片時も勤りやァしねへ。夫だから女郎の行末といふ物ハ能ハいかねへものだ。わたいらァお花荒神松かのり賣にでもなるだらう。今ッから覺悟して居やう【長】かわいがつての跡つぎにでもなるがいゝ【と】ホンニサかわいがつて程の働があ

りやァいゝわな。賃そふ思ふが悪商賣だョ。一年にハ勘定したらいくらの金高だか。身につく
木りも多きな事だが。夫でやつへしピックとくるしむ。是だけ悪錢だァな。おめへマァ聞ねへ
よ。わたいらが内あたりの女中衆ハ。お定の給金といふ物が。一年でタッタ三分さ【長】フム
安ひもんだいう。お信でも覺があらァ【と】サァそこだわな。惣花からかけて。お定りの外の
もらい物が。てへ〳〵大キイ事じやァねへ。いつも廊下で。おさわどんの扣をひろつたから。もら
一寸見たが。正月の内ばかりもざつと〆て五兩いくらと有りやすヘテよく〳〵ひまで。もら
いのすくねへ月キだつても。月に貳分ハありやせふサ。何のかのとつもると。まづざつと十五
兩位にハ。なんでも無あたりやす。夫にじゆんじて見りやァ。わたいらが身につく金ハ。猶た
いそうだらう。勿論お客次第とハいふもんの。違ハこぜへやせん【長】いゝもんだなァこゝら
の女ハ。大概な大屋のかぶりよりハいゝわへ【と】それだがてん〴〵に中宿をこしれへて一がつ
に出合たり【がつとハ色男のこと也此ころ辰巳ではやり詞なり】中宿にきものを借られたり「がつに取れたり。其上に淺遣があ
らいときてあるから。こゝでたまるめへじやァござへせんか【長】料理番なんぞハ工面がよか
らう【と】てん〴〵の年抱づくさつかんだらはなさねへといふものァ。田地をかつたり。すで
におめへ藏造りで。店へハ伴頭を置て。商をさせながらこつちへ通ふのがありやす。つかね

へ咄だが。わたいらが内は。是でも子共をばいつそかあいがる内さ。惣菜をば旦那さんが自身に煮て。もつて喰せなはる惣別の事にとんだいき渡ていゝから。そんながてん〳〵にはげむ氣になり。やつぱり親方の利口だけれとあしくされても勤るだけハ勤ねへきやァならねへから。どの道いゝ方が仕合だねへッシテその惣菜がおかしいわな今時分なら馬鹿のむきミのはなれるとれねへのさ。いもにばかとか。又ハ大根とかいふもんで間にごまめなどゝいふ妻が這入ッて。定つたやうなお菜さ〔長〕此近所ハそんなそういふもんだらう〔と〕ナニ内によつて色ゝか有りやすハな〔長〕富貴岡の内ハはで者だといふ事たの〔と〕ツゥサあすこハお逸さんがきれてゝはで好夫だから今内中の子共衆も琴や三味線をしらねへ者ハ恥のやうになつて居て。子共部屋ハとんだにぎやかだ〔長〕そふいふ咄だ。王智屋の内ハ店者のよく來る内だの〔と〕アイお店の衆と新川の衆ハ何處の内へもよく來るが。とりわけあすこハお店の客が。たんとごせへす。わたいらが内しやァおかしいよ此頃ハ内中か拳はやりだ〔長〕拳とハ木けんか〔と〕アイサおこつさんと。おいとさんか。中でも一チばんつよふごせへす。お鹿さんかまけばらをたつて。ナァもう一けん行ふとせき込のが株式で。おかしくつてなりやせん。子供部屋へかたまると。見附次第にけんさ馴染のお客だと座敷でもかまいやしねへ〔長〕おつな事がはやり出した

ナア。でへぶ奥市場もひねつて來た。安くハされねへ。しかしまだ哥詠ハあるめへ【と】うたよミハわたいさ【長】アノてめへが。そつくりと棚へ上ヶておけ。久しいもんだか今年ッから金をためる算段だモゥ手めへにも苦勞ハかけねへ。このちうしやれ本をよんで見たら。ぎつくり當つた事があるから。ぐつと仕法を替る氣だ【と】ナゼ何と書てあつたへ【長】今の客ハ初會に惚られた氣で。裏から女郎の物を引たがる今の浮世は女郎の方から取るのを色男だと思つてゐるとあるから。おれが氣性で。いめへましくッてならねへこれからあんまり度々ハ來ねへぞ【と】其氣で外へ行かいゝ【長】くそでもくらへ△はやしのゝめの明からすにつれてねんらお立出る。客をおくりの【はしごの音】トン〳〵トン こ氣をつけられ、ねこかされたる抱情ハヤヤとあきれてかけ出す【廊下の音】バタ〳〵【ねかたい聲の】おさらばよ【ぞうりの音】グワラ〳〵おちかへの内ト【おき番】が札のついたるざうりを直し【ちうかの片をくり】サラリガラ〳〵〳〵お舩がよろしうごさります【舩宿】に客もろとも村錢を守中へはんぶん着て手拭を片手にもち【あくび】ア、ア、ワツ引ゲイフウ【ねぼけた聲の唄】二上り〽宵ハ待兼夜中に恨佗しいへめ告る合鷄の聲合言傳を連の脊中へとんと打込で〽誰に思ふぬしさんに【口さミせん】ツルツ、ンツツンテチチンチテチチンツントン【自第一齣至第四齣 宵泊之部 尾】

第四齣　正月ゑびす講過の世界

朝吏の光景を看るに

ゆふべのがや〳〵に引かへてひつそりかんなる座しきのさびしさ波風見通しのふうりんにおとづれ一チリリンの音いそがしき酉巳△跡へひきなる二階の様子客をかへして嬉しきあれバ別の跡の物具ひ器盃競ひら、榮の一トねいりもはやゆりおこすそハよりも通しハ床を引ツ句かたにかけたる其所へあハたゞしくはしごをあかるハ「茶屋の手代と見へて「色白なる丸ひたい「二ずしたかのさんとめに「むへき宴のてんつる一ん、黒ふとりに帯をしめてかたの手ぬくいをとりながら一ゝろめ〳〵あいひろうとの対話をぬけさうに答て【店者】どふしや〳〵ふらふ早いご手廻ししや【廻し】ヲヤ源四郎さん今時分にどう思召て【店】イヤわしハナ今朝あさ参りを願ふて漸ゝに來たじやきやつハ夕部出てじやろナ何處にじやい。精急じや〳〵いんまのまにもどらんとふらふ間合がわるひ。ナントきびしいせがミ様じやろが【若】ツシテおまへさん陸をお出なさいましたかへ【店】陸じや〳〵ナンデモやつきもつきと走てこました そのうちに女郎出て來り今容をかへしたとみへまだ顔もなをさす青てねむたい顔ですへり 【女郎】源四郎さんなんだへとんだ時分に【店】とんだはねたかしらんが トツトモウ むちやじやわいの。ヤコレそしたらアノ迎船をおこす様なはやふ云ふてやつて【若】ハイ〳〵かしこまりましたマアお座敷をかた付やう【店】ヤアコレ〳〵なんのいのふいハ〳〵だんないわい 盃臺三ツ物こうしなと持てくる 【女】まだなんにもございませんよ【店】何があろぞいよく〳〵のあほ者でなか來やせんわいハ、アかまぼこよこちらのあてが梅干じやな。まづ朝茶の腹へやろわいのヲツトきたりテモつよヲいしやくのサアのまんか【女】私ハあさのうちハ酒だちでございます【店】なむさん仕舞たサア床〳〵。わしが遅ひと跡な並がきつゝわるひじや【女郎】モシ藝者衆でもお呼なせへしな朝ハふんぎを祝ふもんでごぜへす。いつで

もそゝくさしなはるよ【店】ハヽアゑんぎじやヱ。ハテしらん事りやナア。金ハおしまんから。なんぼでも呼こつちや私が戻ッてから呼ばんせ。ひまがおしいわいの。入用はこちへ付ておくじや。サア／＼床ハどこじや／＼【若】ハイお床がよろ【店】ヲツト合点じや来なされ／＼（ト先に立てゆく）【女郎】なんだのういつでもあゝだよ△（これちよんの間の一ト切あそびなまなかはんかの銭なきよりもはるかうへこすたのしみなるべしそれと八稲り）【新川藤兵衛】（此ヶ魂方の手拭をかぶり諸答もかなハぬ事なれどもいまだ何商売とあてもなく身銭をへらしてふらつく事の上）アヽごうせへ寐忘れたコウ夕部は起番か【女】ハイいつそれむくッてなりません。起番でいゝといふ日ハ十日ばかりでございます【藤】ムヽ金比羅の朝参りか。そりやアいゝが酒といふ所ハどうだの。チツト迎へよふか【女】此火鉢で尻焼といたしませふ（トたふしをとつて火鉢へかけ口で吹て居る）【若】（紙入の間のはた紙を遣シ）サア是で仰ぐがいゝ。ソレ髪がでへなしだ【女】ナニどうせ結直しますから（ト紙をとつてあをぐ）【藤】持髪アねへとだらう（共の内）【おとま】（一ト口つとりさ）ハ【女】ヲヤおとまさんへおりかさんが参りましたよ【おり、とハ髪ゆい也】【と】ほんにかそんなら行だふけふハ何に結ふゥ。やつハり嶋田にしやうか【女】おきつさんが丸まげの吉田しに結なすつたがアレヽ人が結ねへだけひねつていゝやうに見えます【と】あんまりハ結ねへよのゥ【藤】コゥ今じやアこつちの風といふと。かたつぽしまげの一を上へあげて嶋田の中をひくゝして。一躰にまげをふとくするじやねへか【と】そうサ元結紙なしに毛巻にするからさ。それでこそ【藤】

ム、そしてアノ丸まげの間に唐子のような物のあるのハありやァなんといふ【と】なんだらうノウ【女】お待なせへしェ、そりやァ輪出しさ【と】ありやァめつたにハ結ねへのさ【女】おとまさんにハいぼじりハ似合ませんよ【と】みんながそういふハなコウそしてのおめへアノうさぎさんが來たらしらせてくんな此間たのんだものをアノ人ハどうしてくれたろ【女】ハイ〳〵モウどれも〳〵埒ハ明ませんよ私も黒忠さんにたのんだがめつたに出來るもんじやァねへ【と】藤さんおめへけふハ居なはるだらうの【藤】どうしてもいゝ【と】生るとも死ぬともかたをつけなせへしな生殺じやァ取付やす【藤】取付世帶に取付も有がてへマァ一盃ついで下つし（ト盃をうける）【女】（硯ぶたのかまぼこへやき火ばしをちよいとあてゝ出ス）【と】きつい欲ばりさ【藤】しれた事よ十六文がつまミ菜を買ふにも、十文と六文と二度に買へバ量が違ふ。むきミも皿へ買ふハ損。水をしぼつて目籠で買へバ。一ツ杓子も徳がつくと。儉約と勘界とを等分に加減しても。よりが戻ッて尻へ拔る。能ともまた金罰があたらねへ。じミなことだが去年の極月早歸りの朝だつけ。英鄭の橋をわたると十斗りの野郎ッ子が筒ッ袍を着ておもたさふに休んで居るっ海を見たらバまだ白魚の箱が見へた。モウ七ッチット過か。見ィ。その荷ハ一荷いくらだと聞たら。能く賣て貮百がもんだト。おれも思ハず無常を觀じて泪がポロリ。夫から腰の錢入にっ小三百もあるやつを遣らふといつたら

流石に取られねへ。なる程こりやァ尤だ。そんならおれが皆買ふと。その荷を川へ放したら。惜さふな顔をして頂いて持て行たが。藝者に投た壹分よりハ。うれしがるのが大造だ夫を思へハ設悪いも金遣ひ安ひも金。世の中といふ物ハ入我我入でなんだかわからねへもんだよ【女】きよふきてヱ【と】久しいもんだまたお談義がはじまつたァあんな事をいふ時ハの耳をふさいで居ねへおいらァはやく逃て行ふ【藤】べらぼうめへおいねへ後生楽だに【と】わたいハ婆とじこたをハさらいさッシテおめへ湯へ這入んなはんねへか【藤】いやだきたねへ。わざ〳〵穢す様なもんだ【と】そんならよしなせへし。人ハ人と思つて氣を付るのに【藤】化物ハ化物と思つて這入らねへいよ【女】アハヘ【作者曰】女の笑にアハハとたつた三ツ斗り笑ふもの多くありこれよん所なくあいきやうにわらつてみせるゆへとんだ上ハでうしにて跡も先もなくアハハとわらふもの也じなたら氣をつけご御らん可被下候【と】口ハへらねへ【藤】口がふへりやァ米がいるぜ【と】ヲヤしやれださふだ其氣で行て來よふ ト出てゆく【藤】おれも行ふか【女】何處イへ【藤】王島町の湯へ【女】向ふ河岸の湯ィかへ【藤】あすこの作頭ハばァさんだの【女】ヘヱ、よく御存だネ【藤】時〳〵入込な事があるよ【女】ナニそれでも七ッから女湯だと申ます【藤】とうだか。コウこつちりい事ならおればどくハしこ者にねへぜ。つかねへ事だが子供部屋ァどこの内じやァどこだといふことハ餘程錢を打遣つてこッシテ氣をつけねへじやァしれねへ【女】そのはづさっ私どもさへろく〳〵

お國とハかこゆひをさす女かこはいあらましの名

おくにおきくおりかおひさおいろいづれあ五軒の茶やへ出入ル也二川やへハおくにおりかおいろなど別て出入ル

〳〵にハ【藤】しらねへ筈よまづ曾代倉。富貴岡とつこゝの内と。三軒の子供部屋ハ。長二階よ。其内にも新部屋。前部屋と。二ッにわかつて。兩方に板頭のあるのが二川屋一軒さ。玉留やと。古預庫。此二軒ハ。下に子供部屋がある。遊びつけねへ奴等ハ。新市場も古市場も。ミんな呼び出しだと思つて居る。去年の秋から新市場も同じくふせ玉になつた。全体またふせの方がいゝハサ。そこで藝者も兩方へ呼れると思つて居るが大きな間違たあつちハあつちで別にわかつて古市い見番ハ指和屋に葉佐屋と二軒で。ソレ指和屋の板頭が松藏か葉佐屋い板頭か巴登太夫だハ。夫からモットうかち出すとんだ珍說があるけれど。ひよつとにくまれ口になつちやァ興がねへからこんな口元を云つて居るかいゝのさ深く惡穴をならべると。舞臺へさわつて。見物も面白がらねへ（ト酒をのミながらいつぱいにきいたふうをならべているゆへ女もあいさつにこずりハイサさやうさきついもんでござりまするとゝ聞たあハせている所へ）【女】コゥおひさどんかお國さんが待て居るよ【女】ファイそうだらうモシ行て參りませうおめへこゝに居てあげ申てくんな【女】ヲットト承知モシェ藤さんおまはん（おまへ女の名）居びたれをたさるねふんしいわりひ【藤】うさァねへ序に此しめしなをとり替てくだつし（トてうしを出す）そして朝祝に誰でかけて貰ふ【女】羽織衆かへ【藤】諸事女さ【女】誰にいたしませう【藤】誰でもいゝ（此内もはや朝直しの肴も出來そちこちするうちはおりげいしや梅吉來ルいよ〳〵座しきへ大酒もり成り）〽いときさんこゝへこんせ桶屋ことしよンまいかッレいイれて底つく眞似し

よんまいかソリヤ〽こゝんな中じやかけなるいか　いれて底つくまねしよんまいかアツチヤまぬけ引【大ぜい】ヲホヽ【藤】上方のおきせんぶしをすつぱり受取たの【梅】あの哥の子。おきせんといふ事がどふもしれませんから此間上方のお客に聞ましたら子江戸で云ふ馴染や色事のことだときアハおかしい子エアハヽハヽ【女】夫でわかつた子わしがおきせん楽るじやないが【藤】それておらが馴染かこいつァ解せねへハひサアやるべい　ト梅吉へさかつきをなげる此内始終盃事お定りに…かゝる所へあいかた【おとま】身仕舞をして今湯…

す化粧…色嬋娟とあたりをてらしこも／＼面うすくれないにして洲崎の初日の出これがためにひかりをうばはれ眉へ見通しよ…こそむ安房上総のごく眼すゞやかにして月海上にすゝめるに似たり口もとのあいらしさにつこりとわらひながら白き歯をすこしあらハしたるハ蛤の貝をふくみたるやと思ふせいかつこふすらりとして。すこし中肉のおしたてよくよこ…じまんにすましたる目もと也。米ご衣こたこたきせのはりあつてつむりハ直打のあるへつこう前のあえたまし。衣裳付むらさきちりめんの無垢。下着ハ白ちりめん三ツかさね一仕立おろしのまゝでしつけの糸をとらずにおとなしく着こなし…のとりの帯ぐつとあたにむすび…小形の紙をかミ入に巻て帯へたてにはさミ白りん／＼すの長じゆばん。白ちりめんのけだしにてかけ守りのひもを…せるなどハいたつてきらいと見へて五分もすかぬこしらへすこしこへんでまんなかてつまたされ　摩利支天河岸だとさ　ト…せりふにてさしきへきたる【藝者梅】イヤおとまさん仇たのウヨウ【と】アイサ梅吉さん朝ッぱらからはしやぐの【梅】ハイお留守ハ今朝ばらからヲヤおとまさん一寸つゐら向てア、いゝ子エ一のかつこうがいつそよく出来ました【と】おりかさんだヨ　トいゝながら藤…

たさこくれろエハンこれだへといふ顔ですわつたやうすなるほど只今にもこんな徳用向けつこうなしろものもあるかいとのういまなこ…口…くしく思ハれこいつを十二匁にしたらどうだらう二匁にしてミてもよかららと一思ひ内にあればバ色ほかにあらはるゝと一動…目いうち思ハずもトロリ○此内のさわきいろ／＼あれどもあま…いくつ所に此本の丁数も足りませねばあらましこゝに畧す〽おしき筆とめけらこ【大ぜい】ヤンヤ…【藤】奇妙／＼【梅】さらバ「しやぎりと致ませうかア、高い藝者だ　ト三味線箱をしまいでつきだし　コリヤ家來ハ

おらぬかッレお先箱〳〵ァハ、、、、ハイありがたふ藤さんまた トさへぎながらうかへ出て行 ○出しものをかたつけて屏風を引まハすと二人りさし向ひのひつそり【藤】コレてめへ今朝ちらりと聞たらバ鳥居町の喜之介が夕部から來て居るじやァねへか。てめへらしくもねへもんだナゼタァからおれに隱した定て隱す理屈があらふが第一今迄酢のこんにやくので突出さねへがまづあやしいこりやァ大概聞へて居る。獨りつく〳〵考るに。おれも今しやァ內をへかぶつて一トしきりの藤兵衛じやァなしうつかりあいつをつき出して。あぶもはちもとらずでは。うぬが骸のつまりと思ひ。あれ程迄にも糸道のついたのを。たゞ合の手でまじくない。おれが前をバ一ト筋らしく。心ハ二筋三筋の糸で。二挺三弦なが〳〵とベン〳〵だら〳〵引ずつて。あがりに三弦を引かけるな【と】あがりもこはだもいりやせん。つき出すことは矢より早ひが。引しぼつた譯がありやす。なる程かくして居た事ハわたいが惡ふごぜへせうナゼ又そんなら隱すといへバァノ喜之さんも此春から親御の前が不首尾になつて大屋とやらへ當分預けられて居なせへやすサァそこでござへすぜ。わたいも此內じやァやせても板頭もして居やすサ。人にも箸にとられるだけこゝでわたいがせつねへ場だハなナゼといつてみなせへし淨るり本でもよくいふことだが。人ハ落目が大事とやらで喜之さんも心細くなつて居て便心で來る所を。いかに情なし商賣で。噓が元手の勤ハしても。わたやァ性が江戸ッ子だか

ら理にはづれた事ハ出來やせん。今にも親の腹立がゆりて。喜之さんが内へ歸つたといふ事を聞たらバ。そこでこそ奇麗に突出して。すつぱりとお目にかける氣さ。此節つき出してこそなせへし内外の者ハ云ふに不及あたり近所でわたいが事をほつても陸にハいゝやすめへナンダあれでもたて引キか。横ぞつぽうかしらねへが。おつな捌な女だといわれたら。お客の減るのハいゝとハねへが。おめえも共につぶれやせふツレモわからねへ人ならバとつくに此事ハ咄すのだが御如在もねへおめへだから壹人リですまして置たのさ是でわるくハどふともしやせふ未練でながすとつもられちやァ疳癪が納らねへふ甲斐ねへ娼妓だと思ハれるのもくやしんぼうだ神や佛がいとをきくなら云開をして貰てへわたいがお客ハ崇かしてナゼこんなにしくぢるだらう。くやしくツて腹が立ツ トうつむいてじゆばんのそでをくやしさふにかみながらきせるをとつて屏風をぶちやぶる 【藤】コレ氣の違ツた羅宇屋のやうに振廻すな。やにがかゝらァ共せりふも聞あきた二番せんじハざつとしろ。此屏風の繪を手本にして薄彩色に書くがいゝ。つべこべ利口に云ひ廻して人をバ壁の落書じやァねへが一心命と彫た名も手めへの胸の人別帳へ。居抜を買ツたせうがにハ無理八百もなんのこれ。店賃と見てすましてやるハモウ一も二も論ハねへ所詮未練な根性骨で突出すことハ氣もねへ事。縁を切るともも切られねへとも勝手次第だふんばりあまの鬼めお化め蛇遣め兩國へでも出やァがれ ト片手でがへとつきとばすおとまもあきれ

（て灯をふいゝす藤兵衛が顔をまもりつめていたりしが屏風の外にのこしあるてうしの酒を茶わんへつぎつゞけて五杯をくつとほし顔をしかめてむねをたゝきながら）【と】あれ程譯をはなしても聞分がなくいよふござへすどふするもんだなハテおめえ夫式なことヲ仕兼ねへわたいでもこざいしねへ勿論譯の分つた人ほどせく事も又強いのさ。そんなこともこんなこともこつちの體を覺悟すりやァ面倒なことも六かしいこともこわいこともおそろしいこともござりやせんモウなんにも言なはんなとゞのつまりを見せやせう（ト手をたゝくアイ引ト女來る）【女】お呼なはいましたかへ【と】爰だョ【女】ハイ【と】コウお八重どんかおめへどうぞの。此床をの。下の八疊へ敷てくんねへ【女】ハイ八疊の隣りヶ子【と】喜之さんだよいゝよッシテノ杉戸の方へとつてくんな【女】ハイ藤さんでへぶにが虫でお出なはる子【藤】（ムノトわらひ）一ッぷくのまつし○（藤兵衛ハ始終だまつてすまぬ顔にいるおとまハ酒に酔て無言になつてひちりめんのきせるで、こはちまきおするそのうちに下の座敷へ床をとりかへみなく下へおりる）【見通の方にハ】（まハしかたお八重ほうはいの女と何かおんこつにさゝやくをきけバ）【八重】それからどふした【女】熊さんに貸た着物だから歸してくんなせへとかみさんに云ッたらの。かみさんハしらねへといつたハな【八重】そんなけちな事があるもんかななんでもかした着物だから歸す事が出來すれこれを持て行くと斷ッて鍋釜でも引はづして來ねへおゝかた臺調か外本へ置て有だらふ【女】どうもそふハ出來ねへハな【八重】ナンノけちな根性だぜ夫たからいゝやうに扱れらァハテそういゝねへな中宿をして貰ふからにハつけとゞけも云ィ分なくして置やすッサ（折ふし手がなる）アイ

思人たけり立てやるがいゝ トいゝつゝ両方へわかれるこれハ按ずるに此女さる處に色男ありて中宿た頼たるが中宿のていしゆに無体着物をまげられたいきさつとこへたり 【下ざしきにハ】

【喜之介】衣裝付畢 きまりつてより内の首尾あしく勘當までにハなけれども當時ハ鳶者に預の身となりうつきをはらすけふの居ながし 【おとま】むりのこの五ヘ蓋にしきに倚てひぢりめんのきせるづゝをはちまきすハつてゐる ハテかわつた夕部の調子と今朝の挨拶すつきり何だか氣がしれねへ 【喜之介】先刻よりも何かぎつくりのいきさつあると見へ腕まくりなーにきせるをひねくり廻してりくつをならべてみる コウ何が氣にいらねへでそんなにぞん氣にあしくするのだ今朝となつてハ一返も顔出しハせず内のやつらもあんまりだ花をもらつた時ばかり。ちやほやするが人間でもあるめへ。勘當されても瘦我慢で。仕舞札もさげさせる。女に揃もしてやつたハ。今朝等の事もよく聞けよ。朝直しに廻しが有て無據ぬけられずハお仕着通りの言傳に。さみしくとも待て見れとか藝者でも呼でろとか。云つてよこしていゝはづだハ身仕舞をする片手間で顔出し位ハしてもよからう。おれがひがミかしらねへが。まハしい女まで面ッつきが氣にくわねへ。けふハ懸に出ましたの堀の内へ行やしたのと船宿から呼出させて升屋をおごれ芝居が見てへと手前の面を楯にして。してへ三味ねだり次第全体又呼寄るが見くごつた仕方だけれど。いふなり次第のおれだからいつもあいらを船で歸して。其上に丸めた紙も持らせて置く。其心いきも波分すに。けふ此頃の不調子ハあんまりしねへ欲張りめらだ。コレしお卷だか鉢卷だか丹縮緬が欠をする。首でもくゝらねへ用心しろ額口のほつちりハ灸点屋の看板か天鷺絨薬

も置にしろ隣りの客に疝氣もねへはづ頭痛に病む氣はおかたしけ面ァ見るのもむか〳〵するぞきり〳〵勝手にうしやァかれ【と】先刻よりむり酒のゑいいよ〳〵まさり座敷にゐいたゝまらすしてうつふしになつてひたいをたゝいて居たりしか　モシもふ夫て仕舞かへ私がしひれハ京へ上つてあくひハ大和廻りをして居やす狐を持て來る坊さんか。十色菓子ほどならへたつてむしやうに獨りて息せいをば。もんではつて十六文あんまり安く出なはるね。迚も又わたいらがやうな內端なお無垢な氣のきかねへ。うんのろに馴染だのが。そつちの御不肖。買かぶりさ。おめへのお心によろしく申ておくんなせへし。江戸ッ子の膽とやらも。おゝかた潰れて居なはるだらう疳癪さんへもお序に。口ハ隨分まめだから案なさんなと云ッてくんねへ。お臍が茶を煮て待てるだらうコゥ誰ぞ水でも一盃くんねへ色男の御酒を頂たら。身にしミ〳〵とうれしく醉たハ　ト聞より喜之介くハつとせき立むねんの思ひに物をもいわづおとまを目かけて立かゝりつかミつかんとする樣子をあへて止る船宿廻し【女】セシ〳〵喜之さん御尤でございますこれにハ樣子もごせへませうマア〳〵しづかにコレおとまさんどうしたもんでごぜへすな【舩】ムンニャこりやァ喜之さんのお尤だ今や始ての御客じやァなし假初にも足かけ三年たお客に對してふしだらがあつちやァ先差當て舩頭が旦那ハおろか親方迄云譯のいゝ字もねへモゥこれからハたとへ喜之さんが了簡してもおらァいやだ合點しねへコレ板頭か棒頭か板前か釜前かはしらねへが【女】コレサ忠どんおめへまでがならんでくれちやァトとめる【舩】

何の事だへ目あかしの篝か向洲の元舟じやァあんめへし。ならぶもすさましいはへ。お客に舩頭はならぶ筈だは合点しねへ【女】コレ忠どんマァこれ誰ぞ來てくんねへ　ト女二人りで喜之介と忠を引とらへおしとゞめている所へ[illegible]より三人かけ來りじや〳〵ばる忠をやう〳〵なだめつすかしつゝ[illegible]宿部屋へつれ行し跡にて【娘〳〵】【女大ぜい】モシ喜之さん必短氣はお出シなせへすなおめへさんがたは不斷あれ程中がよくッてどうしたもんでこせへやす【と】お鹿さんもお八重どんも皆が打遣ッて置ねへナ【女】コレおとまさんマァだまんなせへしよ【と】エ、やかましいおめへッちもわからねへなんぼ骸は賣物でも勝手にぶたれて濟ものかな可愛男にぶたれたのはにくる違男にさすられたより嬉しいとはむかし咄だそつくりと。こんもり高に置てくんな。何もからんだとじやァなし。氣にいらずは見立替さ。なじみもへちまも入りやセん。物云節が惡くつて氣にされつたらどふするもんか。わたやァ名代のわがまゝ者酒のわるいは正札付さ突出したくつて當りやァしねへ突出されたくつて騒ぐのなら御免も工面も入らねへはなもし旦那さんが捻ッたら口返答もしやすめへふて寐の用事も付やすめへ船頭衆さへできいたふうだ辰巳へ上ッたお客だつて辰巳上りもいけやかましい喜之さん縁切榎だよつてそう思つておくんなせへ【女】コレサまあ【と】エ、よしねへな又たち歸る未練はねへコウ喜之さんおめへわたいに是ほど云はれてだまつて居てすミやすかァハ、ハ、、、ホンニサ思へ、きられねへ所をむりに思ひ切てくんなせへしわ

たやァ七十五日ワるく云ハれると思へバきついとハねへおさらバよ　ト立てゆかふとするゆへ娘分女などより合てりかいをときながら坐しきにとめニおく喜之介ハ始終物をもいわづたばこをのミながらむねをさすつてかんにんしている　【喜】ム、その狂言ハ呑込だモゥ論ハねへ何にもいはずさおれも男をすつぱりとつぶしたからやつとゝそつとゝ了簡して居る利も非もしらねへ人でなしに。物を言もけがらハしひから我にハいわねへコゥおめへ達も一座に居た懸り合だから野暮な咄も聞てくんな今更過た事を云ふじやァねへがべらぼうにされたおまけにべらぼうの一代記を讀で聞せよう惣別客の心ハひとつで十人が十人百人が百人皆うぬが氣じやァいろ男だ夫でなければ面白くもねへといふもんの又女郎とても其通りまづ己惚が先に立其己惚の功じた上が迷ッたり迷ハせたり生死の場にもなる突出すもあり出されるもあるやうになる元トハといへバ皆外じやァねへふ孝の罰だ常〳〵立派に口も聞たおれが今おめへ達の見るめへで赤恥をかくも不孝の罰是といふも平生から親の異見も上の空にして慈悲があまれバあまる程内に居るのがうるさく成り鳥獸にも劣ッた奴にだまされるとハ露しらずのろくなつたが一生の誤り世はさま〴〵とハいゝながらあいつが腕の卵塔場へ逆朱に彫たおれが名を火葬にされたがまだ仕合さ施主が替つて土葬なら無縁になつた其上に又穴堀にさかされて先祖代〻おれ一生名のしなびる沾汚を殘すにまだしもこれが目附重法さ。思へハこれも信心する八幡さまと支天さまついてハ妻の耶摩口稲荷の

お蔭だらう何もかも親の罰だとあきらめれバ恥かしくも悪くもねへァ、よの中ハおつなもんだ忠に船を拵ろといつてくんな。モウなんにもいわねへのさ【女】イヱそれじやァ済ません何でもおる【喜】ハテはじまらねへとたれナへこんで歸りやァあの子もよかろう折角今までの馴染甲斐にあの子のお名に疵は付ねへ　トきせるを口にくハへて居たから片手できせる筒へ入レとり直して懐へ入帯を〆直さず新艘も内所へ預たまゝ心の内でしたくをしてある【おいま】ハしばらくだまつているヲヤほんに名の火あぶりで思ひ出した起請に添た髪の毛をこつちへ歸しておくんなせへひよつとうなされちやァ虫の毒だ【喜】首にかけたる守り袋より二重三重に包たる起請と切髪をとり出し　引札同然の此起請を守り袋へ大事にして。肌身はなさず持て居たが今しやァ却て恥しい最一返お役に立ろ　トなげ出してわたすおとまハとつて中ホ故懐へおさめ帯にはさみたる紙入より書付一本よりとりかへしたろきせらの上にす紙四五枚にてくるりとまき【と】サア　おめへの起請も歸すから紙屑籠の足にてもしなせへ【喜】ナニト　ひつたくつてこうはらまぎれ引さき捨んとする所を【おとま】ハ留かけ　アコレ夫ハ用【喜】ムなんだと【と】サ用ハ何にもおぜへしねへ切れたおめへにきついお世話たが引裂ても擧人ハなし船の内の慰にソレ一っ返讀で改て跡ハ勝手にしなせへし　ト心ありげのおとまが詞口をしくハ思へども起請をうけ取紙入へ納めもいはず廊下へ出んとする【娘〔…〕】納にす【女〔…〕】かれて　喜之さンマァちイッと私共のいふことも【喜】ハテさてしつこいはなしねへ【娘〔…〕】詞を【女〔…〕】抑へ　ちつとハ聞ておくんなはいまし私共がしりながらこんな事にさせ申ちやァどこへもどういゝ譯が立ません【女】おめへマァ目動さんにちよつと【女】アイト　喜人ハかけ出してゆく【と】隣りの格子の方にきかせて　わたいらァ外の

子供衆と一ッ釜にミなすつらやアチットト當りが違やすお嬉しからう藤兵衛さん　ト跡より喜之介ナふりかえり
ニ藤兵衛ム、藤兵衛とれ新川の【艋頭】ハテ四の五のも入りやせんすミ濟しも胸にあるおめへ
も喜之さん私も忠だハテマアなんでもお出なせへやし【大ぜい】コレ忠どんおめへがまた【艋
エ、やかましいさるぼふめらはかのむきミの惣菜で芋でもくらつて屁でも放れ　ト廊下をばたばたとかけ出しはだしにてつつかけ
へ出山口稲荷をよこにミてがんぎをとびとび川岸へおりもやいのつなを片手でひかへ【艋頭】モシおあふなう【喜】たゞだんまりにてへうつる　ト　跡よりあへて〳〵宮内の大ぜい娘分を先キとしてとや〳〵お
やんやはたしてかけ出　モシエ喜之さんさうなすつらやアコウ忠どんやなぜおめへお留申てくれねへかな【艋
頭】爰始てついぞ聞かねへ　トひとりでもやいの綱を鉾キ一ッ本ンさしてのり出す跡にハ大ぜい川岸ばたを右手にさてあるきながら　申譯やらう云ひわけやらう【大ぜ
いの聲】ベチヤクチヤ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵ガヤ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵ベチヤクチヤ〳〵
〳〵〳〵〳〵〳〵、ハイさやうなら〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵　といふことへばかり
【作者曰】此をなじく〳〵〳〵〳〵〳〵といふ文字を横から見れば浪のかたちになる是則古
市場の道具立で△リ升
△　然れ新市場の中程へいたる頃新市より起請をかいたの包を引ほどはべんす紙を五六まいかさねて紅筆にてかき付たる文字あり子細ぞあらんとおし開けば節や先なる女の文に
用事のミしめしら〳〵扨とよけふしの事いち〳〵御はいらふにより御心のほどかね〳〵かくこの
まへに御座い此わけ合はどふも〳〵もふしわけもなき事ながら少との あやあることと御すへに

も御さつし下されかしくどふハ申さず候まゝ今一たび御はらたちを御かんにん被成候て何とぞ〱此所書のもとへ一寸御はこばせ願まいらせ候とてもこなたへハ御入らせもあるまじくまた忠との事もきつくはら立のやふすにさつしまいらせ候これとても無理ならず候たゞ何事も申譯のかず〱御めもじのうへにてめんぼくもなく御はづかしく存ながらも此わけ一通りを申上たく候へバ何とぞ〱書添の所まで御入らせかならず〱御まち下され候やうねがひ上まいらせ候共ふしにてかれこれともにすぢの立候事ニ御座候氣つよき女と思召のほどいくゐにも御はづかしくたゞ〱思ふにまかせぬ身にし候へハしミ〲じれつたく心のうちにてふさぎおりまいらせ候しんにハおかられしきちくせうとも思召して一たび御立歸りのうへならバくれしく〱わが身むねのうち御あかし申上度それのミねんじまいらせ候わからぬやつと御つもらせもあらんなれどかよふにまでも申上候へバぜひ〲一たびハ御かえらせ神かけいのりまいらせ候筆すへながら此わけを忠とのへも鳥居町の八五郎さま御うもじゐへもよしなに御申わけ下されかし申上たき御事も此中にて候へバあら〱しめしまいらせ候めでたくかしく

【喜】ハテナこりやこれ今の樣子とハ。雲泥の相違ムさハさりながらあいつが心底。よもや斯とハおもへども夫といはれぬあの場の一埒。只何事もおとなしく。つき出されたのが後篇の

種。とれいへまざ〳〵どの面で又三編目にアイヤ〳〵互の心の眞中へぴんとおろした錠前も明ていはれぬ胸と胸ナニ〳〵處は七軒堀（トひとり手おくと思案のていごうはらまぎれの）【船頭忠】此意趣はらしハ今夜を過ざす利道て行ずハ腕づくて（折ふし新市場の二階）〽ハテなんにもいふな人でハ無ハテン　テテ、、、、、引

【わかれ三重】

是より第五齣

辰巳七軒堀おとま親里の世界

來春三編にいだし奉入御覽候

【附言】

抑おとまが性質行狀善なる歟且惡なる乎いまだ知るべからず前編長五郎に偕老の約を契ッて二客を撥し後編藤兵衞ニ同穴の情を通じて箇壯夫を倍乘す必竟する處正是一きれてこれんでトッチリ頓に立かへるの心なるべし吁薄情浮虛一三昧

船頭深話　大尾

通宝一巻記之

自序

周の彭祖は菊の酒を酌て七百餘歳の齢をたもち唐の李白は壺斗の酒吞て百篇の詩を賦す是等ハこぬ他國の陳奮漢酒にして當世通客の間にあはもりのきつゐ晒落サモ今にはじめず無理飲の茶碗酒わ眞夫の來ぬ夜のうさをわすれ離別の冷酒ハ内の首尾の悪しきを忘るされば古人も酒ハ愁を掃ふ玉箒也と言しも宜なる哉朝に積重たる酒樽も夕にげつそりとへつて低をたゝがハ追に菰をかぶる事もあるべしと予一斤の徳利の口をすぼめて一篇の草紙をつゞる目して一盃記言と云嗚呼至れる哉實に半可に劍菱の辛口あれど樓婆に味淋酒の甘口なし傾城隅田川のながれの

身なれば心あさしといへど艶男に滿願寺のうまこある事ハ此書を閲して味ふべしと味噌屋鹽屋を肴となしくひ吞ののここゑ顔で序する事しかり

五岳亭

いつそ
　きさんじらしく
　　はねまはる
　　　兎の耳の
　　　　永き春の日

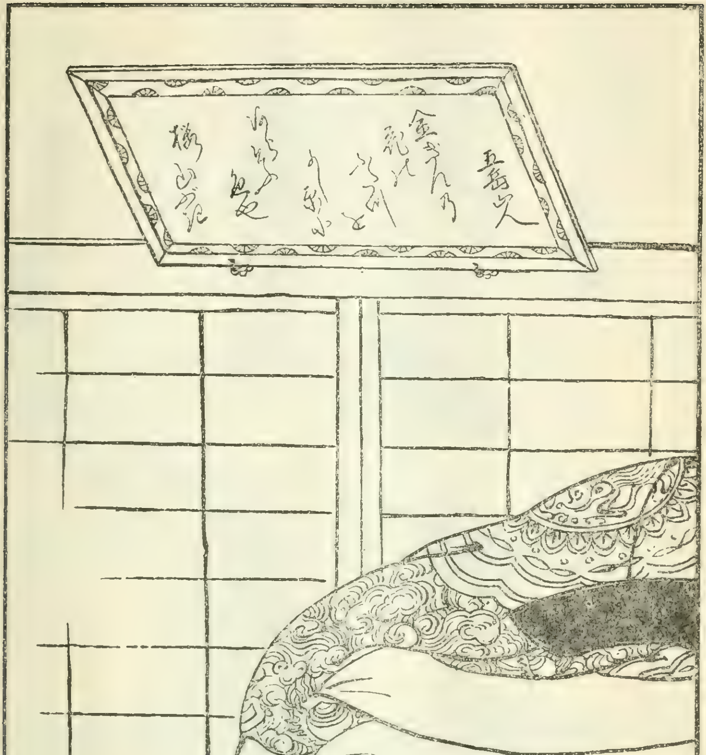
凡例

第一番目ハ
山吹の花のいろハ
生酒とあらそふ男山
つくりかざらぬ春の月
おぼろつゞれの其儘に
さハらぬ神の
たゝりなし

第二番目ハ
淺からぬ心いきハ深ミ艸
花の王是も名とりの
床の内一對並ふ
神酒とくりは
愚智のかふした
末のしん願

第三番目ハ
風に吹れてそよ／＼するハ
ほろ／＼醉の酒機けん
顔に浮名のほんのりと
櫻色なる花のゑん
結ふの神の
引合せ

五岳画賛
花いけよいけても一ト枝
春草



通客一盃記言

五岳山人著

發語

頃は彌生の中ばにて隅田も飛鳥も花盛り貴賤老若袖をつらね詩哥連誹に首をかたふける雅人あれば今様の流行文句空口あいて唄ふもありいづれをいかさま〳〵にさゝめき樂鼓腹の御代繁榮はむかしにまさる花の巷先ッ大門より水道尻まで一ト目に見せる仲の町千本の櫻歷亂としていはぬ色なる山吹の根メハ三味線のいとゝ氣を引たて花の梢ハ二階の軒端を越路の雪と見なし印の竹すだれかゝくれは玳瑁の笄夕日に輝てまばゆく蜀錦吳綾の。裳ハ春風に翻て美し實にや錦を霞となし玉を砂とするの風流花淸宮の四季折〻の樂日〻に新にして又日〻に新也といへどもわきて此頃の風景いふもおろかにして籠に馴し鶯田圃にすたく蛙凡いきとしいけるものいつれか是にめでざらんされば花街の全盛にうかれて來たる三人つれ 二人は當せい仕立のおさむらひ壹人はせうきただち位の町人とミヘて少シこさつぱりとし たな〳〵たん坐けるかし〳〵先のうすくらきにつひ角口にて犬の尾をふむ〔大か日〕キヤン〳〵〳〵〔客〕い いきしい くが・だ〔い いこのすこたんめなにをうろ〳〵とのめくらあるくのだへおれをしらねへか これエ、五町中で。

あんまはり迄。壹丁目のしろハ。きかねへ氣な。やつだと人に知られた。此しろがたゝねへぞく〳〵。今にもいしゆをけへして。みしよと。おもやかたきし。忘らぬわすれられぬ身ハおもひたしもせぬ程し思ふているぞへわしやほんにさつしてくだんせわしが身をなせふこなんしたばからしいいつそすかねへぞ　ヨハン、、、、

諺に曰しろ犬ハ人間に近しと言定て此くらいな洒落ハ口にいはねとこゝろにハ思ふたるべし

【豐】此ちくせうめ（おのか口から）ばか〳〵しいやつだといゝながらくつとのれんをくゞると【此家の若者周吉】コレハやうおいでなされました（トいゝなから坐敷へつれ行茶屋ちふな皆めよく〳〵なじんでくみハ意味あるとをへたりかの町人らしいハから口まじりのきいたふう）【穴物屋の愈不】でへぶにけへがにきやかだの（トいゝなからとつさりと大あぐらこいつさつするにらゝか一命日のはなたなくつてくるやらすなり）【此相方清舟】（としハ二十三位きりやうもよくいたつてりこうなうまれゆへないしよでもちと氣のつかわれると言しろもの小妻いつしよにたか〳〵とせり上障子さら〳〵とあけてはいりながらヒツシヤリトたてゝ）おやよくおいでなんしたね（トいゝなから片ひざたつてすわる）【豐】どふかゝれたか知らねへがまたのめ〳〵とはいすりこんだのよ（トいふとそばにいる）【ふりしん百草】（口をとがらしてチウ）【豐】なんだ鼠なきかおそれるのこんやも枕もとで三味せんをかじられるか硯箱へかゝるハへ【清ふね】きついしやれさよしてくんなんし【豐】ナニよしてくれろへくれろといつてもなんにもねへあるものハ（トわらひながら）きせるのやにと鼻ッくそだかいゝか【つれの安之助】（としハ十八九位おもひつきの有男な

りたんぼの蛙にどくけへなしやしめへしチェおいらん【豐】安さんでへぶしやれがあかつたぜへ【淸】くつとすまして横目でにらみながらふじやれなんすなといゝながらすこしわらひかけて藤さんも安さんもかんにんしておくんなんしぬしのおつせへすとでついもふしそびれへしたよくおいでなんしたね【藤治郎】年ハ三十くらおちとふさいでいふやうすにてアイこんやれでへぶあつたかだねトいつたばかりしやれめいわづわる口をきかふでもなしおちついているあゝさきまたたのもしそふにみゆる此相方【綾機】とし八十九かおちあかつてはちくらがかはゆらしくあいきやう顔にこぼれて是を一ト目みるとぞつとするほどなしろものなり豐さんいつおいでなんしてもよつたやうでおすねへトいふ所へけしぼうずかむろ[illegible]盃をもつていでる【豐】ヲットきたりサァ是からこつちの世界だ先ッ一ト口のめこミ顔の半可にた山トー早くのこぼける【綾しの】手じやくでおあかりなんすものてれおつせんよこつちへおだしなんしトなつたくるひいうしにてうしの口から酒がこぼれる【豐】サァ〳〵大水だ是じやァはやげへりの土手がきれてあした一日ぶんなかすだろう【安】鼻紙いれから紙をだしてこぼれた酒をふきながらこいつァはやくふくことだあとがびた〳〵して氣ミかわりい【淸】あやはたつ[illegible]たみたかに綾機さんどうしいせうねへせつかくおいでなんしたのに【豐】ナン〻とうしんぞうかせつかちでおいでなんしたトそうぼうづかせつこんで穴ッへへりやうするとふてこひれ先キかぼんのぼの皮ァすりむくものよそいつをむりりやうじとやらかすとなりかつかうれわるくなるし湯屋なぞへ行ッた時きァ小桶斗前へあてかつておかにァならねへ【安】わらひながら豐ハどうもへなふの部の八櫻だそんなあく洒落ハはやらねへぜ【豐】こいつァ一チばんはねられた

トあたきヲかくそのそばに安が相方【松瀧】またとしへ十八九くらいゆへいつからあどけなくかわゆらしき風俗、亭主がせなかたゝきヲヤあきれもしなんせんで【清】とつけもないとき
たまく〳〵のぬしに ト跡たいへす【綾】ホンニおきのどくでざいますねへ トいふ處へ若者【周吉】きたりて 藤さん
ちト これハなじミの客ゆへ連のいきさつハ一ツばいにとりはかろふゆへなり【藤】なんだ【周】へイ清舟さんのお客へ甚たおきのどくでござ
いますが【豊】どうしたというのだ馴染の客が來たから座鋪をくろといふのかおしのつへゝや
ろうだ【周】左様ではございませんいつれ跡でわかります事でございますが一ト通お咄し申ませ
ねばわかりませぬか如才のあらつしやらぬお客人でございますからお腹をおたち被成ますまひ
けれどあとでとのかうのと思召てハおきのどくさまでこさいますからお咄シ申ます先キ程清舟
さんの馴染のお客人かお出でゝございますによつて今ばんの處ハとうぞ名代を トいイもおへらぬに【藤】
フウそんならハこつちより先キへきてゐたか【周】左様でございます【豊】イヤこつちよりはや
いはづハねへなんでもこゝの座鋪へはゐるやいなや客かきたもんだからこいつァ一手せんをさ
ゝれたハへ【清】ぬしやいつそワるずいをまわしなんすよ【周】左様ナ事をお客人江どふいたし
まして【豊】そしてどこへ寐かすのだ【周】表のお座鋪でござりまするどふぞこふせうをなすつ
て【豊】ねつからおもしろくねへおへ野郎の大師のごせんざか店ちんのとゞこふつた店子じや
ァあるめへしあつちこつちとしりのおちつかねへなァしりやけ猿を見たやうにさるとハわりい

とりあつかいだぜ【周】イエサそこでこざりますから一ト通りおはなしもふしましたのでこざりますが【藤】そういふ事しやァおれもおもしろくねへからけふろうわな【清】けふなんす事わおつせん【豊】マァいゝじやァねへか一ッのきなせへ【藤】インニャけへるおめへにたいして氣の毒だ（トたてろうかへでにかゝるをとめる）【ふりしん二人】マァおまちなんしおけへしもふしいせんよ【豊】何にきの毒も藥もいつた唄ッじやねへ諸事こゝにありやすからわつちに義理立はいらねへわな（トむねにあたりくはびをさしなん）（ても如才ハねへふりをしたがる）【藤】インニャ氣かすまねへわつちがつれて氣でこんな遊をさせてハ氣の毒だ廻し床や名代をとるなァだれが身でもあんまりおもしろくもねへもんだからけへるがいゝこんやにかぎつた事もねへ（トこらきにきりたてるそくにいる）【安】藤さんこりやァ一ッのんだうへ兎も角もするがいゝこゝ迄ふきこんでたゝけへるもあんまり寶の山だぜへそして豊がめへふのきり立をしてけへりやァ清舟さんいめへふぎりがわるし兩方の義理をつくろうにやァとうするがよかろうスこういて見た時にやァどふやらろうかの八方か四ッ手籠の挑燈を見たやうにちうとにぶらついてゐるやつさ【豊】こいつァいゝといゝてへがねつからおさまらねへなんとこうせう藤さんおめへの身にしつちやねへのをけへろうといつてもだれもゥ、といつてけへしやァしねへいさくさなしにわつちもとりけへりやァいゝと（すこしせきこんできてたつのを）【ふりしん百草】なんさいますへばからしふすねへけへ

なんすとたァおすせんわな トとめるハせじなりこゝろの内てハ此女郎もひきつている 【豐】すんならばぐつとなかしやせう トハいへど もいつこふ座敷ノ内がわからぬゆへこいついた所がしよせんはじまらず其上いつも早やげへりなれハわれひとり先へぬけてかへれハ跡ハおさまるとおもひこそ〳〵と立ツてにかいをおりぞうりをはかんとする 【周】きたり まづおまちなさいまし【豐】コレ若柴やよくきかつせへ藤さんハ馴染の事ゆへ今つれだつてけへるのもこつちで氣の毒だなんでもおれがいてハしよせんおさまらねへおふかた今夜も。そつちこつちひけでもあらうしとても。とまられねへ身のうへだから是を幸ひにけへろふよそれに清舟も馴染の客ハ來たものをおれがいて少しの間も座敷をあけさしちやァ客の氣持といゝあの子の。ためにもハるかろふからけへりやせうあとでたづねたらみんなによくいつてくんねへ【周】左様ならいたしかたもござりませんが トいふ内二かひの上り口にて【藤】周吉〳〵 トよハろゝゆへせひなくはしご上り【周】ハイ【藤】豐ハどふした【周】ハイお客人ハ清舟ゐい馴染の客ハくるしおれがゐちやァあの子の爲にもならねへとおつしひましておけいりなさいました金銀づくならしかたもございません トいつたハきゝちがひやら作さにハわからず【藤】何に いゝならまゆをひそつて 金銀づくでかへつたとヲイ豐や〳〵けへる事ハねへハた金づくならどふともしやうといふ事だこいつァおもしろひ トいふ内いそがしそふに【豐】はしごをかけ上り なに金づくでかへつたとどこヲおしやァそんなねがでる【周】イエサ左様申たのではございませんまづ御聞なさいましあなたがおかへりなさろうとおつしいますのをむりにおとめもふしましてはまんざらむだな金をおつかわせ

もふすといふ物でございますからそれゆへ金づくともふしましたので（トだん／＼いゝわけをいわふとするを）【豊】や
かましいわへ聞たくねへわへげるぶんがわるいわへおりよヲみそくなやァがつたなしらざァい
つてきかせうか是ェへ新吉原ハヤ女郎の衣裳の金箔も錦の綾の物縫も　御法度とゝなる其後に産
毛の小ぎれに綿をいれちよつきりまげヲなでながらけんふのふとんに寐ころんで黒びろうどの
夜具の半ゑりいけんばんの名札じやァねへがかけたをす。　其度に千年むぐらの脇の下ァミるやう
に一夜にこすれてはけきるし舟も四ッ手ものりあきてこつそり大門ヲくゝろうとおもへバ七軒の
やつらァ始として秋葉山のとでへきれましやァ。　土に手形と面形をづらりとおしてはやひおそひ
の機嫌をきかれ一日影をミせねへと仲の町が闇になりますのと朝日如來の化身のやうに光りか
ゞやくそのかわりにやァ紋日の見世先のやうにうすつくらひ男じやァねへわへ（ト風の小蛇のふきちろ如くむせうやたらに）
（ならべるはへ）【周】あなた左様おつしやりましてわ先ッかやうでござります【豊】かよふもくそもいる
もんか竹村の上あんや朧月のやうにあま口でゆくのしやァねへ三ノ輪金杉あたりのなまぐさ坊
主が午房をもつてすり鉢の味噌をかきまハしたり桃燈屋で傘をはるやうに丸くまハそうとかゝ
つても穴いあな迄知りきつている穴物屋の豊さんハそん手ゝゆくのじやァねへとほうもねへ是
ゑへ柳原の土手で手ぬぐひの古ひやしめしのふるいのを買つてきて袷をつきやァかつて着た子

蛋ッ子もきいたふうな女郎となりやァ此くらひ床花をやると岩見ぎん山を喰た鼠な見るやうにチウともいわずにたちまちしぬといふこたァ胸の鏡に移してミるやうだのたまくやろうめがトへらへらとしやべりながら藤二郎どもへ座敷にいりしりをまくつてもゝゑたゝきながらどつさりと大あぐらをかいてゐるところへやり手【その】藤さんどういたしましたあなたまづお静におつしやりまし【藤】何もこミいつた事じやァねへのサァ今周吉がいふにァあの客人は金づくでおかへりなされといふからハなんぞわたしにあてつけてゞもいふ事かたとへ豐甲が事にしてもあァいふミさけられたとをいわれちやァ豐のげへぶんといゝわたし迄もげへぶんがわるいわななんでもきれいに遊バせねへしやァならねへから随分望むだけハ金をだしやせうサァいくらともきつてださつせへなトくつとおちつきはらつていふ【やりその】コレ周どんこなたハマァそんな事をいふといふ事があるものかナモシ藤さんへお腹も立チませうかその處ハどうか【周】藤さ何分御聞済下されませ只今申ました通りおむだな事だとぞんじましておふきにお腹をおたゝせもふしましたなんふへトこくらにあやまる【安】くつとすましてコウむた事たァあり内の事だぜよけいのしとといふをせへはやつたものを【豐】エひとふばかにしたあんまりきたなひれたをいつてくれるなへ蟋蟀じやァあんめへし地廻ぶしの聲にほれまして長ィ足を附やうの格子きハから暑ィ寒ィの捨せりふでしよほくた親父のふんどしの兄でへぶんちやァあんめへし狐色の繻絆をひきミんたんのにんちくりんと

して七ッやの番頭にちよつとかせのはした錢で土手の團子屋を惣仕舞にてかけるのと一ッにされちやアたつと眼がたかつたろうぜへ【周】先ッお靜におつしやいましあなたやうにおつしつてはとんとわかりませぬ何事もわたくしがわるふございましたからごかんにんなさいませ【喫】でおへのわりいなァいわねへでも知れきつてゐるわなあやまりァいゝこつたと思やァかつてなかし元へでたひきげへるしやァあんめへし日斗おふきくしてまじ〳〵とつくばつてゐる事ァねへハヘどうするのだへ【藤】コレ能つもつてミさつせへわたしもこうやつて壹年と弐年と馴染でくりやァこんなにきハぎてへこたァねへハななんとおその どんそうしやァねへかゑ【やり手】イエ 御尤でございます【藤】それだによつてあァいハれて見りやァあんなしたねへ客人をわつちが連てきたかと人に思ハるゝ處も恥しいからなんでもかでも金づくにせうから早く座鋪を明かさせるか【周】ヘイ私しの了簡でも【その】藤さんゑそりやァごむりといふもんでこざいますな【藤】ナニむりといわせるものか周吉はやく明させろ此くらゐな勝太斗りされぎァドゥいつに唐紙をぶちやぶるぞこういゝだしちやァ一寸もひかねへと [illegible]【綾】藤さんへ／＼まァおまへなんしよどふしいせうねへ [illegible]【松】[illegible] こまつたちやアせわざんすねへ安さんへわたしらアもふしいしちやアきゝいせんから【安】おれが

いつたつてこふなつてきちやァいかづかたらず我心だ【松】しやれところじやァおつせんわな【安】きのふの雨てうれすべりかしたもんだからつひしやれかでやしたかんにしなせへ トいふ折しも ひ とへへだてし坐敷の内より清升が馴染の色客聞かねて【記久屋文次郎】ェ人ヲばかにした初會やうらの客たァちがハァ貮三年もそれこそふおふにつかつて きたのだ見ればでんがくくしめらか トひとりごとに小聲でいふのをきくより清升あへたゞしくかけ行て何やらこそ〳〵しめし合けれども作者ニとんと聞とれず【藤】それときくより小びんさきへあたすじをだして だいつかでんかくぐしめらァトいやァがつたなでんがくくしがめづらしかァこゝへこひ壹本ふるまつてやりてへ【豊】こいつァでへぶおもしろくなつてきたわへ藤さん朝けへりの土手でかた先からあびせてやんなせへ【安】おちつきはらつて居たりしがこのよしをきゝて 時に一夕の輪にあらずだ今夜の所ハわつちにおまかせなせへしこをへへりこんでミりやァ内幕同士だ是から一ばんわたしが狂言をかくから貮番目の切を見てくんなせへ諸事胸にありやすから何分めんじておくんなせへ【その】おまへさまなんぶんお頼もふします【周吉】いくゑにもよろしく トとやかふいふハ清舛か色客文二郎ハ何をあいらかはがたいふかと心でおかしくおもひながらこそ〳〵とかへりしハ誠に通人極意の手なるべし

客に粋あり不粋あり粋とハ何そいへゆる通なり不粋とハ何そ野夫なりとわらひし紀久屋の文二か傾城買極儀のこんたんハ後遍に顯べし

【周】まづおさまつたりト少し笑を催して サァ〳〵あちらへおいでなさいまし客人もかへりましたからお心能お一ッめしあがりまし【藤】かへつたとそんなら豊やゆるりとのもうぜあァいわれちやァたれでもくつ

としてくるのう　ト少しわらいをふくむ　【安】おふきにそうサ【周】なんとかやういたしませう　トから紙ヲ明テ一ツにして出てゆく　【藤】是りやァかくべつのめるわへ　ト是よりしんこりと酒をのミ初める　【豊】サァちといただき女郎衆とでかけやう時に若衆や〳〵ヲイ若けへしゆどふだいねへかの　【ふりしん百草】周吉どう客人がよバつしやるよ【周】ハイ〳〵【豊】さつきハきのどくな事をしたつヶかならず氣にとめてくれめへぜ時になんとからハいを貰うのじやァねへがくされ落のねへ藝者を卜ばかりよんでくんねへ【安】豊や何もあたりもねへのにされへく事ァねへわな花も花の咲せる時節があるじやねへか【豊】それもそうだがさつきの言葉があるからさ【安】そんなら内の者としなせへコウ周吉どんそのつもりで【周】ハイ　ト立ツて行程なくして三味せん箱かくるその折から軸はいつていでると　【ふりしんあやの】ヲヤひつくりしいしたよ【綾】早くとつて捨てなんしな【豊】何ンだ〳〵おとゝいの客人か【あやしの】わらひながらぬしの事たァねァノ子げぢ〳〵とやらでおざんすよォ、、、、【豊】手のあるといふ事か【ふりしんあやしの】きついごそんじさ梶原というとでざんすハ【豊】おきやァかれ　トいふ處へ藝者來たりてさハぎもはれればはや九ツ時を四ツと知らせの引のひやうし木の音　カカカカカカカカカ　トあとのたりねを此ぞの打だしとしてミなそれ〳〵の歸庭さ内にはわからぬ一ツ世界　【豊】おつうひねつて寐かけたのそんなに他人にしてくれちやァうらミだぜ【清】ぬしに恨られる覺はおつせんハ【豊】そふいつてくれちやァ丸つぶしといふもんだ何事もいきりたらねへもんだからながめにつきやつてくんねへ【清】なんぼわたしらが

よふなわかりいせんものだとつてそのやうになぶつておくんなんすことハおざりいせん義理ハ
くておいてなんすものだからしよせんわたしらがやうなはかない出けっどふぜんの身でござんす
から呼とげもふされいすおめへさんでハおつせん【豊】コレサそう腹を立ッてくれちやァすま
ねへさつきのとたァなんぶんおれがわるかつたからかんにんしてくんなせへなんと仲なをりに
一ッふくつけてくれねへか　トいわれてふせう／＼にすいつけてだしながら　ぬしやァなんでも知りきつておいでなんすから
おつもんなんす處がはつかしふおざんす【豊】ハテやほなとをいふそんなとをいわずと打解て
くんなせへこれでけへると氣がかりだいつ來ても氣をもませるぜ　トかた先をちよひとつめる【清】アイタ、、、
、、よしておくんなんしばからしうおさァないゝかげんにぶじやれなんしなおふきな聲をい
たしいすに八　初花床の内よくあそやつけへさつとしろうや　しやかういうにはやおす香ノツ時ヲふれると【清】さつよつと下へいつてまいりイすよ　ト出て行ま　にー

客ハ我の不縁なくやミ何卒とりなたさんといろ／＼思案ヲあくらす内つかれ案入りにくつと寐る一睡とたりの世賑の四晋にのんだる大書に其まゝたおれし床の海淺心のまゝ中になれずハ物をおもふまいいつの間にかわあひなれ染て今ハ我お身のおもひまくはもき寐のあのあけがしらする

【淺草の鐘】ゴヲントともに人里はなれし鶏の聲を聞て目をひらき見るに【藤】モゥなん時だ
ろう【綾機】まだ／＼としていたりしが　今なる鐘ハ觀音さまの七ッでおざんせう【藤】フゥもうそうなるかの夕
べおふきにのまされたせへか今まできつはり知らずに寐てしまつた【綾】よくあんなにね

れへすねへ五六度もおこしいしたけれといつそたのひなくねておいてなんした【藤】そうだろうよむかうで寐たからそいはづだおのしもちつとわねられたか【綾】イヽエ今迄まんじりともいたしいせんもしおめへさんが目でもさめなんしたら水をくれろの湯をくれろのとおいゝなんしたそい時に旦那ならや綾しのさんをおこしいすも氣のどくでさんすから宵の内にとりよせておきへしたのへ今にもおきなんせうかとまつていゝしたわな【藤】そりやァ氣の毒な事をしたつけいふ【綾】そんな事ァよふおさァなサァうがひでもしなんし トどんぶり鉢の水ただしてやる【藤】ヲイ トとつて口をそゝア、氣持がさつぱりとした ト下ニおく【綾】モウよふすかへ トわきの方へかたつけて おめへさんにうらみいす事がありイすなぜあんなに苦勞をさしておくんなんした【藤】何にやう【綾】なんじやァおつせんあんまりでおすわなわたしが氣もちつたァさつしてそなんしな【藤】宵にさはいだ事かありやァすんでしまつた事だハないつ迄胸にもつていてうらそほい事をいふ【綾】そうおつせへす程猶さら氣が迷ひイすなたとへこふいふ事にかぎらす忘れ安いおめへさんの胸かとおもへハく實を盡した甲斐もなくわたしが身のうへがどうやらそられるやうでおすわな【藤】わりい了聞だご眞面にものいへはきまつたやうな事ハとんときれへだやくにもたゝねへ事までも氣にかけらァこりとハきついいくろう性だぜなんにもかまわぬ男の口上ならい心ハくらハになりきつてゐるのをそれと

いわぬからハちつとハすいりやうしてくりやれよ トすこしふさぐ【綾】そりやァごうてもざんせうが荒氣な事ョいゝなんすハ男のならいとやらでざんすとはしりながら連楽のまいゐの義理づくでついした事にも顔をおたてなんす氣になりいすもんだからもしもやどふいふいきはりで萬一のことでもできいせうかとそれがしミ〴〵くろうでおざんす【藤】なに事も酒の上でのことなれバ氣にざつくりとする事がたとへあるとも久しいもんだと氣で氣をくらつてゐてくりやよまう〳〵酒もぶんりやうしてのまうよ然シどのやうないきさつができてもいゝ程をミてするからとんと今かいまゝでおれか顔のつぶれたこともなしといつて向ふを丸つぶしにしたこともねへハな【綾】そんならよふすからなんでも是から酒をおやめなんし【藤】てめへこんやハなぜそんなにつゝしませたがる酒でものまねへけりやァ世を送る張合ィがさつはりぬけらァ【綾】今夜にかぎつてそふもふしいしやァいたしいせんおいでなんす共度事に酒ハおやめなんしといゝしたのをそれをむにしておわがんなんすからハおふかたわきにおたのしミが出來ィしたに依て今迄こんな女郎につきやつていてよゥでもねへ事をしたと見くびりなんして切る氣でおさんせうがきれる氣なら切れておミなんしうつちやつてハおきいせんまんそくで此世においでなんす共内ハわたしかからだは鳥辺野のけふりとなりいすとも心はおめへさんにつきまとひ朝夕お顔を詠ねばこれ

岾の甲斐がおつせん　トたゞうつむきしその顔にあてたる袖もびつしより泪にぬれてかなしいと艮ハ立のたこきませて　つ枕のひよく紋はなれぬ中のくり言にふさいだむねのそのいたさなた、きながら　【藤】コレ
綾機やもうかんにんしやれおのしとも〳〵愚にかへつてすこしの事にも氣がもめるァ、胸がは
りさけるやうだサァ〳〵そんなふさぎもん句ハ止メにしてきさんじな唄しにでもしやうじやァね
へか【綾】めなきはらして　ほんになぜこんな氣にハなりいしたろうねへすこしのとにもなきとうざん
すこんなにぐちになりいしたのもそんなおめへさんといふ悪玉がつひていゝすからだョ【藤】
いゝ事をいふぜどこでしつけられたかしれもしねへのをおつつけたかる　トかなしき中に又からかつて見る　【綾】エ
、モじれつとうすよどうすりやァ此胸かさつぱりとすミいせうねへひとり〳〵よ〳〵思つてゐィ
すからつひからかひだてをしいすハな　トせきくる泪をすゝり込ミ藤二が手の肉め前歯でくひきるほとしつかとくひつき　いとうざんしたろうがかん
にんしておくんなんし【藤】それでちつとハ氣がすんだか　トいゝながら是も同しく綾機かうでをぐつとまくつて見て藤命とほつてあるあたりへくひつきそふにする
【綾】そこハ大事でおさァな【藤】あんまりそうでもあるめへ　トかたのあたりをつめり　是ミや跡がこの
やうに　折しも夜あかしさハきのやぼ客とミへて表の叫聲のめりやす染糸　へむらさきのいろに心ハあらねとも深くも思ひそめ糸の【藤】
こんなにうたくりやう事もねへすこれ岾も髮ハきらせきせうもかゝせた上に【綾】ほんにう
でいほりものまでたかひにしいしたとまでをハすれへしたハあんまり氣かとりのぼせへしたか
らさ　めりやす　へいとの亂やほとけぬうき身【藤】そりやァそうとてめへ内しようのひやう判ハど

ふだあんまりいゝほうでもあるめへの【綾】どふしてよふおすものでおざんせう此間も仲の町の鞠子屋から初會の客人を連てきいして賴ミいしたから儀理にもよくしにやァなりいせんのだけれとふつ〳〵つらふさんすかられるくあたつてけへしいしたらまた夕ァきさしつた處がやつはりあしくされたもんでおすから腹を立て周吉どんへいろ〳〵むづかしく言ッてけへんなんしたものでざんすからやり手衆がおかしな顔をしてわたしを白眼(にらん)でゐゝしたれなそれからお開なんしよ綾篠さんがきいしていゝなんすにやァおいらんへさりとはむふんべつといふもんでおざんすうつとれかんかへておミやけんしお出なんす客人へも。客人へも。あんなにおかしくあたんなんしておけいしなんしちやァ內所の手前藤さんの爲にもかえつてなりいすめへ藤さんのお身のうへをおもひなんすならばうつとうき〳〵として氣に張をおだしなんしこふいつ道こふいう身でおいでなんしもしめへからとしミ〳〵いけんをいつておきかせなんしたけれども首尾のわるくなりいすなァ始からしりつゝいたしいた事でざんすから今更そんなとれうらミいせんか只ゝまゝならぬれ浮世でざんす半年や壹年の年季なられもちいすとも知つていゝすがなんにしてもいつぱいの年でざんすから心で心をしかつて辛おりいすのさ(ありやす)へなんのいんくわでしやばにきていきてそれれてまゝになる身かなんそのやうにさりとてれ【藤】ほんに綾篠れよくしんせ

つにいつてくれたの今にもきたら禮をいおふよまた年もいかねへにさりとハかわいゝ子でハあるぞへおれも世が世ならばいつをはてしに夫婦きとりでいやしめへのにしかなくなつた今の身じやァ心斗で金にハせかれどうせうかこふせうかと跡先キ斗をかんげへて見りやァ誠により身の置ところに迷ふ事もあらふかと思ひすごせばすごすっ程いゝ知恵ハさつぱりでずこふ亦神に見捨てられるといふハよく〳〵いんくわた男にやァむまれてきたよ トいゝながら男泪にくれければ【綾】こふおもひなんすもむりしやァおつせんか必たんきな事をしておくんなんすなへ【藤】それな氣はよもやでもしめへがおのしも亦心にせまつた事があるともかならすひよんな苦労をさせてくれるな若ふりやうけんでもした時にやァ是までかよつたしんせつがミんな反古(ほや)になつてしまうこよ【綾】わたしひとりで何をあてに先きだつてよふおす事なら今迠くらふハいたしいせん只此上ハわたしが元るた浅草のおぶすな様へ【藤】アノ三嶋明神様への願がけか【綾】アイおつともはやくそひとけたいゝともく〳〵祈誓(きせい)をかけへせう【藤】心だに誠の道にかなひなば ぁゝきすへ神に願をいふてもミたらまゝになる身かなんそのやうにさりとてハこほれやすさよ露の玉【綾】ねがひのかなつたその時はどうしいせうヲいつそたのしミでおざんすねへ トいゝながら今かないた氣になりてうれし泪もほつ〳〵とこぼしながらたがひにいだきしめして【藤】それその時ハこう手と手をひかれてお禮まいりに【綾】アうれ

しうおざんす　折しもろうかとんびの【穴物屋豐】はやくもおきて障子さらりとあけながら　藤さんもうきぬ〳〵れどうでござへ。せうでんさまのにこゞりかごふきとひつつきやつてゐなさんのおうら山峯の紅葉ばこゝろあらばたもう少しまつてゐますつなきの頭巾ァ、つかもねへァィ人の氣も知らねへでハ、、、

されハ此あと藤ハ夜川ケ方のうすくらきにたかひの胸ハまたわからねど忝いのへ松瀧の心いき多くの客ゥその中におもしろそうと忠ハれて迷ひはじめの

【安之助】ヲャれんじがあかるくなつた【松瀧】よか明てもいゝじやァおつせんか【安】日がでゝけへる内のめへがハりいわな【松】けへなんす氣かへ【安】しれた事さ　トおきそうにするところを【松】しつかりとだきつめて　けふハおけいしもうしんせんからつらくともつきやつておくんなんしぬしにやァまだはなしのこしたとがありいすからぜひおながしなんしな【安】おもしろい咄しならはやくはなしせへどんなそうだんだへ【松】そうきうにやァできいせん【安】きうにできねへそうだんなら知れやした年中いろ男にあげ詰にされてゐてへといふのでありやせうがそこの處はおうけゑへがてきやせん　トにこ〳〵わらふ【松】きついごぞんじさにくらしいのうと　くすぐる【安】是さ〳〵あやまつた〳〵【松】あやまんなんす事ならかんにんしておあけもふしんせうからこんたつからおつゝしミなんしよそのかわりにね　トにこつりとするを【安】そのかわりになんだとへ仲なおりにゐてくれろといゝなさんのかわつちかゐたとつておめへの氣のさへる事もあるめへからやつはりいゝ

かけんにつきやつてけへしなさるがいゝのさその跡へそれもときにまさる裏きなしとやら色男をよんでたいしみなせへ　トいゝつゝおきそふによるをなを〳〵おこさずつんとして【松】ぬしやァうたぐりふかふざんすよわたしよりやァぬしの身の上がおうらやましうざんすわゆふべお咄しもふしいした通りなぜ此間のばんかうし迠おいでなんしてから客があるならいやだといつておかへんなんしたあんまり人ヲおぢらしなんすといふもんでおさんすそしテ内へおかへんなんせんでおもしろい處へおいでなんしておたのしミなんしたじやァおつせんかへ定てわたしの事をわるくいゝなんしたろうねへそりやァそうと外へ馴染ておいでなんすのをむりにお留もふしてハお氣の毒でさんすからきれへにおけしもふしいすに依て時〻ハ格子先キ迠おいでなんして一トともものをいつておくんなんしそれ斗をたのしミいたしていゝすから【安】胃にすんだ事をいつて又貳度のいゝわけをさせなさるのかありやァあれて馴染のあるねへといふ事たァわかりきつてゐるもんだからわつちもごあひさつに及ぶめへサァ此手をはなしてくんなせへきうくつでならねへそしてあんまりおそくなつたから藤さんや豐さんのほうへいつて見てきやせう【松】よふおさァナおいでなんせんでも今にたれかきいせうハなこふやつておいでなんすのかそれほどつらかァもつとこふしておあけもふしいすにへ　ト上によりかゝつてしがミつくとほうとほうがくつついてはなれず【安】ァ、いきがつぶれたやうだ　トはなの先へあせかにじむ【松】

につこりして顏を見ながら　なぜこんなにおかしな氣にしなんした。にくゐのう【安】おれが知つた事か【松】まだそんな口をおきゝなんすよ　トわきの下をくすぐる　【安】是さ〳〵むごくいじめるの　トいふ折しも豐平が聲にて藤二郎ヲおこすやうすなれば　豐ハもふけへるそうだ朝ッからいゝげんきだ【松】さうさねへいつそいゝげんきでおさんすねへしたかあんまり口をきゝなんすよそして人のあたりをいゝなんすからわるうざんすわなヲヤこんな事をいゝしてぬしにしかられへせうかならず豐ゐにいつておくんなんすなゐこんどおいてなんすなら壹人でおゐてなんしそのほうがしつかでやうすから【安】ゥ、ひとりできやせうともこふいつちやァおかしいかねわたしらァしやれ木のやうに人のあたりや穴をほつていふなァきつゐきれへさァなんでも一九がしやれをかくやうに人のさハりにならねへのがよかろふとおもつていやす【松】夫が一チばんよふすハなぬしのめへでござんすが豐さんハどこへいきなんしてもまァあんまりよかァいゝすめへ　トはなすおりしも障子さつ〳〵とあけてはみりながら　【豐平】ごめんなせへよ安さんどうたね【松】サァこゝへおはいいんなんし【豐】アイ時にもう別のかねにむしんの金ハどだろうおつときん何だ　トあたまをおさへて　金とかねとの相性ハ凶とやらで身請のかねニ女房になる木かこいつァ大吉だ【安】今おめへのうハさをいつてゐた處だ【豐】そうだろう定てわりい評判であつたろう

ストロでハいへど心でハどこへいつてぬきがるだとかおもしろいきだとかいハる、たいつかど座を拵きとりにているしろものなり　【松】心でおかしく思ひながら　おつうおつせへすねへもしへ一

ッふくおあがんなんし トたばこをつけてだす【豊】ァイ是はありかた迫百二十里じやァねへかこいつァいゝく〳〵へ、、、、、、笑ひの番所かおきやァかれ【安】いゝきな男だぜ【豊】サァおしたくはどふだおいらんちよつと羽織をだして衣裳をつけておやんなんし世話にもならねへとをいふやつさ

【松】ぬしやァ子けふはおいでなんすとサ【安】ナニ今にけへるぜすこしまつて居ねへ藤さんはもういゝのか トいゝなから立ツて帶をしめなをしにかゝる【豊】是も今お仕度せへちうさ【松】ナンタエ鳥の立ッたやうにそうまた急におかへりなんしてへもんでおすかへ トいゝつゝ安がしめる帶のさきをしらぬふりで引つぱつたり羽織をきせなからちよいとわきのしたをくすぐつたりしなから どふでもおけへりなれへしたかァおけいしもふしいすからあすのばんはぜひおいでなんしよこころ待にまつていゝすにへ【安】しれし御事サ【豊】モウ喘しはゐゝかげんにしねへか

【安】ドレおさらばにしやせうサァ豊公いかうぜ【豊】承知の幕さカツチノ〳〵

山嵐

自序

山嵐と題号するは。康秀が古詠を。慕ふに。あらず。一日街上に豪猪といふ優揚戯を見るに。畫工異獣を丹青し内に豬一蹄をつなぐ。是この冊子に相似たりナゼナラバ。文面に古文の看板を出し。不佞種彦木戸番となつて鐵鏈を鳴し。侍るてふなどいふ和語を號ばして。俗眼を惑すといへど。實ハかの豚にして。人を化す術もなく。人を嚙害も無し。讀んで易なく。讀ぬで叓かけずと。大半二が徒のかた老爺ニ譏んを恐れ。看板に空言なしを。亀の上をもて筆をゆひ。兎のつの屋にしるす

第一

川竹の流にふん有る藪醫者ハ唐と日本のごもく言葉枕も向ぬ北へ行と吉原をさミするハ浪人者の武者片氣帥ばとんだまちがひのほつたん

淺草時代

茶店段

第三

神と佛の色事に女房がやきもちハ御七五三繩ゆふてつまらぬ八功徳池の水かナ倫をとせばわれる茶わんばち屋の説話

裏店世話

別房段

浄瑠理

いつきん／＼の　とめ
酒取物語て　菜葉蝶
つとめするそれ　と
常々愁憂　まる

春待屋　室咲　第一番目
花兄屋　猶太郎　二たて目

たつの
はる

やまおろし

やまあらし

一　淺草の段

安養世界の大立物天堂の親玉株觀世音菩薩の御誓願空しからず東都の東北つゞ淺草の精舍ハ參る人ありもどる人あり桑門あり武家あり萬葉家の哥人ハとわたる雷門を這いり儒者ハ鬼形連皷と王充が容言を思ひ出し神道の夜講聞おやぢの徒ハ龍雷の口傳としちこざひをいひ出すそれが中に風の神が袋もつさまを見て一ト人者の背中をながす身ぶりなりと笑ふハ佛工もあつからさるところなるべし老女が池の廓ほどきに竹筒てふものへあまざけいれてしつむるハ屈原をとむらふかと思ハれ鳩の豆うる女が揚枝うちながら掉をもて鳥り追ふハ高鳳が書をよむにたりおいくがひやうばん銀杏に殘り因果地藏の緣記ハ丈八お駒に演說す粟島の前にゐざりちゐねバ熊谷稻荷にあつもりをうるそばやハなし小町も奴婢につかふべき娘喜撰の茶をくミひかる君も從者とすへき息子業平橋をよきる藤屋巴屋を始めのきをならへ棟をまぢゆる料理茶屋はしごのと

んく〵やむときなくかまもとのゆげさとたつてきりふかきに似孔明が矢も爰にとり得べくそうとうこの火わらく〵ともえて良秀が不動尊ゑがく下書ともなりなん河豚い鉄炮ハ冬をさかりとしどじようのおどりこれ橘町の群をいづ松江の鱸を湖にしたて首陽山の蕨蛭子爰にゐまさバはまやきをくらひ琴高も爰に來らバほそひきをあぢわふべし夕岸のあちハ兼好か聞バ鼻とがらん生田川のあをくび函谷關のかしハめんどり三千世界をごたまぜにしないものとてハ鯨の丸やき白魚のあハにばかりならんかかゝるはんえいの鬼にかなぼう頃ハ春三月空うらく〵として千里に雫の立居なく二十軒の茶屋がせうぎにこしうちかけあれこれとむだいふてゐる男ハもと本町へんの息子株にて名を梅太郎といひうちハ諸國狀さしに狀たつふりとけこミにかなあミをはりミせのこどもの顔ハおぼへぬのがあるくらいなれどこのあいだハちともうせんのきミにて春の日の長きをこゝにくらすおりから同し茶やに這入れおさだまりの町醫誹名を春夕といひもつともたいこもち半ぶん駕に乗る時ハ唐木をいれうちに一抱子かかな本をよむたち不佞足下實にといふ口くせもつともしげしふと梅太郎が顔を見おや梅さんこれハふるいやつだがしやばいらいだねとこしをかくれバ梅太郎もわらひかけいつ見てもげんきハいひねへ春夕さんおめへにハちつとあいたかつたアイわつちもさゝトかくいふハいつたい此梅太郎さるうちの室咲といふ妓と亀鶴の

盈斎北岱画

ちぎりあさからず此ふうぶんをきかんとのとなるべし春夕ハ新渡の扇で袖口からあふきながら其ときこねへだ公の妓の所へめへりやしたがぜひ足下を唱導して格子まで來てくれろといふとさそして玉章をとづかりやした何か急用だそうだとふくれかいつたはな紙ふくろをさがして見てォイこいつあ矮屋の机上へをいてきた梅君子足下不佞の草庵へ駕をまげなせへそんならそうしやせうと如眞ごのミの烟筒を長づゝへ入るところへとろ／＼とおやしきと見え娘二三人通りかゝる春夕ハゆびさしてォ、ゥいつれの深窓にや實に絕世の佳人だたれに銀帶をゆるすこいつハきがワりいべつこうのつくり物と小まちがけの萬年もとひハあどけねへ扇ハ澤村曙山かなるほとこゝいらだらう義之が墨跡小倉山莊の色紙よりありがたいのイヤ又あとからとしまかくるぜとふねずミにちやむくハすこしくすミすぎて火ばちから出そうたものおもひすかたで百度めへりのさしをかふハ不佞が註がありやすまづかれが良人かきやつに戀々してるやすそこでそれが病根となつて陰虛火動の症だ腎氣丸をもちひても治しかたいハへちかまさりがしてどふもいへねへ實に沉魚落广のよそほひだといふを茶やの女かきゝちがへて何ちんがらくがんをとりましたわりいふくだこつちへよつてるやといふもおかしよくいろ／＼なとをいふ和尚だとうちつれだちていつれバ春夕ハしやへりやますときに梅さん一笑の說話がありやす足下もしつてる

それわつちが二町目の妓ねべん〳〵だらりをもつまらねへから一點の赤心あらばとなんだいをいひかけやすと一夕間中にいつてから見なんしとかなんとかいつて燈下へをのが玉手をさし出すと不佞が名をほりやしたそこでしんせつハうれしいかおらあしよせん死ぬつもりたとまかほでいふと甘んじて刄をうくべしといひやすマァ藥王樹ハつたえざれとなんどもかれがむねを見すかすに昔の五漣点でハねへがとふもさふするはづハなしと思ふやさき雜戸等が風説をきくとわれに臥具をあてかふ心だそうさそこで足をひいて京町へ新造買にいつた所が木人石女にものがたりするに似てこおろしが店ァかりるかろうがいやさか床をとるやうに暗いとこばかりうれしかるからはなせねへさ何一丁目からハ今こいのばんにこいのとひとり子のほうそうを受取つたよりハもうちつとうるせへをうつちやつておくと後朝に不意つかまりやしたおさだまりの振袖でとふてもするがいゝとぬからぬかほでへなるもならぬもながしめのとうなつていやしたがとう〳〵大ぼんを少〻むさぼられやしたなとゝせきこんではなすに梅太郎がうへいゝありがていあるやつさなどゝあいづちをうつてゐるうちはや新寺丁邊へ來る東どなりハかなや西どなりハ門口に池上永代千日溝の札をうちくちぐろとめし篭につんであるハ大工と見えこの間が春夕がうちにておもて出かうし三尺のひらきうちハ小僧一人もつとも梅太郎ハたび〳〵こゝのうちへも

きたるゆへ甚こゝろやすくあいさつなしにうへゝあがりそこらを見まハしホヽゥのりいれのこしばりハ目錄のぬけがらか髮ゆひ床なら津川宇まるといふ所だ貸本やが小冊の袋でへげへやくわりがきまつてゐるからいゝとこのまハ澤菴かこいつあこゝろもとねへもり口くらゐのものだらう和尙も少し道具家たから十ぐらゐのしうものべとおめにかけたらう春夕ハ此うちたはこぼんへ火をいれて來りもうわらをたきかけるぜ足下もでへぶ口が惡くなつたとつくゑの上からふミをとつてやる梅太郎受取てうすやうずりのほうゐのしをりになつてゐるからいゝ春夕ハうしろのほうからあたまをいつへんなで梅さんわたしがよミやせうかしかしちくせうめといふ私註がへへるだけよけへだすおめへの妓も賓にいつ個の墨客だどけへ出しても松花堂と見へやすけふのハせきこんで書たと見へてからくさのやうな字があるぜそれで弘安の年号があると池上からきやめが出るなどゝしやべるに梅太郎いつしんによんでゐてやかましいおセうだとこゞとをいふをりおもてから御めんなさいましおもて町のいせやからまいりましたたゞいまちよつとお出なさつて下さりましホヽィこいつハいかざあなるめへおめへすくに藥箱をもつていつて下せへ梅さんそこに厂皮紙があるからなんなら返簡をかいておきなせへとなりのかちやで不動様の夕立にあふやうなおとをさせる　とおきミやけの　しやれを　いつて出て行梅太郎ハあとに殘り小僧

どん茶をくんなと二口呑でふミをひろげあふぎをあごへあてこゝをしきつてこうせめてといふ身でよんで見るにこの日ころせかれてゐる梅太郎をかくしてあげしとあらハれ新ぞうにさげるのこしもとにするのと大もめゆえいつそのくされくらがへとふておゝせあすハそんじよそこまでさがるからしよせんいきてゐる心ハなきとの文てい扨ハわれゆへとといつおいつしあんの所へ春夕老人御在庵かねとおもてからぶら〳〵はいるハこゝのまたどなりに劍術やハらのどうぜうを出し古學もちつとよめじまんにおもてをたけごうし内をやハらだゝミになしあしたいくさがはじまるといふやうにあせ水をたらせども小人に店賃をせつかれ蘇秦張儀がべんをふるつていひわけをするもおかしィやこれハ梅太郎さま春夕主人ハおるすかねといふに梅太郎もをりふしこゝの内にて心やすくせしゆえ先生今日ハおやすミかとわらひかくればハイ今朝愛宕へ小太刀ととり繩の額をあげましてそれから叟須休ミましたとハつきもなきはなし梅太郎も無叓物ゆへ心いくつたくをかくそう申せバおまいさんがたハそんなおもひものをおさしなすつて腰がおもくハござりませんかナニサ〳〵幼少よりさしつけておればさやうもぞんぜんと四角ばつて答るに梅太郎ハわきざしをとつて見てしかしわたくしどもゝさして見たふございますこいつがあるとわたし舟と仮橋で二文かばいができるしこのとを三年はやくおもひつくとおやに苦労はかけ

ません時に先生ゆふかたからはなはどふでございます先生ふしんそふな顔て上野飛鳥ならかくへつ夕方から花とはいつちてこさるといわれてさつても箱根からこつちに皿屋敷といふ出見世か出たれはやほのせり賣もはやるそふだとこゝろにおかしく何よおまいさん丁のとでこさりますヱヘ其町とかなんとかもふすは吉原の字てはこさりませんかイヤ帶刀いたしたものゝ参べき地てこさらぬて郭ハけふりの色とも書花と柳の巷とも見へましてかの色のミをことゝ致してなにやらむつかしい字をならべたつる故梅太郎はたい〳〵こうに本店の娘のおとりをほめなから見るよりもふちつとあきが來て私共ハそんな字ハなんたかきいてもわかりません四角な字てよめるのは口といふ字はかりでこざりますといふをいねぶりを仕ながら小ぞうかきいて居て梅さんへ私も此間四角な字を一字おほへました呑太郎はきいてこふときさまの四角な字てしつているハ蘭といふ字か雷の字をたこて見たから小そうましめてイヽヱそふしやァごさりません太夫さんの障子て凧といふ字をおぼへました

心中の段

やろふ頭に孔雀染させられたる花鳥心客は迦陵頻伽の雄の如く伊左エ門が述懐もこゝに止なん

寳をもつて戀とすなと源五兵衛が執拗ハ江陵の意氣地を知らぬのかそもさハいへ今帳子のふる事まれにして萬客へもよろしいよふにもつてまいるはたとわばぐわんにん坊主の御圖に凶の出た事もなく淺草市の手桶に死といふ字の書てあつたためしもなし商賣からの空語なれはたますもとは寶なり錦の被羅陵の襠天よりふらねは地よりもわかす皆客の懐かあてなれハくらうざんすといゝつまりいせんといゝしんにきいておくんなんしとうつとふれゑ訓解すればくれろの一言に止る夫をきくを客共大盡共いはんか花とやなきの街のにきハひことふりたれハつハらにいわす茶手振のれんの染色にあかるく修行者暗にせきよう目をおほゆ春の日もはや呉竹のふしミ町を見れハ大きやかなる堤燈茶屋の椽に禿犬にからかひおるハ何れの妹妓色男にあふてふ眞猫のほれ／＼ならんと樓のいとゝ心惡其中にたた／＼の棚ハ一斤／＼のとつくり所セくならへ行燈にハ袖の梅うて茶ありのかきつけ飛行油妙ふりたし御鬮はミかきのかけ札ある賣人家より緻妓いあれたゝしく走り出るハ地色の屆文のなか宿なるへし子供いひつはりおやち客の羽織にすかりはァさんのミセ先あそんでいきなのしりこへにやハす客をさしてあの子といふハにさいへのはむき女郎をさしてはァさんと唱ふるハ年増へのしこなし若者とのいさこさハよひあかりの間違なるへく七福神の寶盡し書たるかへに懸りある三味線ハ琵琶ならぬこさんね

んなれ寂寥たるかけミセハ煙草の火うすさみしく時ならぬすかゝきにしほはなふつてこうしをたゝき門に附木をたくありしよく臺にミす紙をもやすありおまんまとんかミくすの錢をかりられ大ふかしと化れハかんさしとんて肴一斤と替る八ッ打て内所へのいとまこひハ時札のかわり過退しゝまひ札のへかさゝるハ未金のたゝさるなりしやけんたのふの流言ハ大町にもきかす折ふし向からくるハいさミと見へ 祭文 へ若衆にかつはハきんもつとつゝらの内へおしかくし 上瑠理 へ珠數さら／＼とおしもんて八ヤらう見やあのあねさんハ味噌こして買た豆腐か白こハめしのもつそふきているせ跡から來る今一人格子の前へ立留り四角ばつたつらに白あハたかあるからおきやァかれセいくらへなら横にきなセへかけつくらならころけるかゑゝなとゝそめきあるくハわかしさもやうやく世間ひつそりとしつけくなり稻荷の神燈かすかに殘る此頃あたりの裏にひやう打の腰障子をたてしハ這入口にぬり下駄二三足亭主はとでらてくらかへ證文を書てゐると表からおなしはたけの男一人八ッ七ッくらゐるとミへてひぜんの跡のある子を連親方内にかと上へあかれバ女房茶をくんて出すを一トロ呑て下におく時に親方こねへた咄しやした奉公人ハ是てごさりやすサァこつちへあかりなといわれて槇木箱のあけ板の上へすハれハ女房すゝりふたの余りのくわへと蓮根を鼻紙へのセてこれてもくひなとあいさうに出すをたまりんてかふり

をふり涙くんでゐるハかあいや年一はい二両くらゐの奉公人なりモシあのせんとの奉公人もとつておくんなさいやしな江津へていしにやつておきやしたかあすかァ四切の二〆じやァくわへていてもおさまりやせんもとかたあらつておきやしたかふミ玉なそしやァこさりやセン此間寅年なぎァ川へふつた女か亭主もちてもをかたからはれてぶつつかつたうへて二年をもらおふと云やしたつけかどうしやしたか亭主ハ證文をまきなからフ、そりやァ藝者證文てへェつてゐる女たろうおめへその江津なァ近地へふんねへ五切の四〆たセへふセと違つてまわしかねへからかすハあからねへかぬすミもみちだァありやすッシテあつちハにきやかさ尤八ッむかへめへたかセんどあちへよつて見やしたか札かきれていやしたとかつにのつて咄セべおもてから來た男も喜世留をまわしなからそんならそうしやしよふかへ亭主ハ火鉢のふいごをいこかしおめへてへ〳〵金へかりねへけりやァ四匁だァなうわはかてへ〳〵金の利にひけやす中どこが五日に五百上どこか八百サ三味線も一ト勘定百五十て立派よなどゝ商賣向の咄しにミのいる處へ二階からおりる男ハこゝの内へさかつている女郎の客にてそうおふに心づけもする故マァよふございやすなとゝ捨言葉有てかへるさて此客を送つておりた子供四人あり一人ハ楊國忠が肉障にもすぎものゝふとつてう細腰を專とする楚王もかぶりをふるやセ容まさのかつら手に持て千早振

てふ髪の毛のはげしハまミへを矢筈に引米かミへ梅干をはり此内へこきでんのきいたのハ年二十二色青白く草たばねの白歯ハ春待屋のむろ咲といふ花魁なるか梅太郎とかりそめならぬ中となり夫かくらかへの病根にてこゝの内へさかりて居るなり是も今の客のちそうになりしとミへ楊枝をかんでしたなかしへはうり出しどうこの鉄嗅き湯でうかいする折ふし表のかたを小聲にていたこの下の句ばかり〽蓮のうてなのあらせたい」此哥むろ咲か耳へ入るとひとしくァ、ラあやしゝ男の鼠なきしててうづのふりにて表へ出梅さんかかのおとこ室咲コレシイ是をきつかけに此道具ぶんまハすと

本舞臺三間の間かき落しの土手此上に常磐津連並よくならひよき所見合右の地藏釣おとしの柳きれいにすへて淺草たんほのてい虫の聲一ッ鐘にて道具おさまる

ト向ふはたくにて梅太郎出るあとより若衆二人㐂といふ字のはんてんにて六尺棒を持花道の中ころにて

一□梅太郎

一△大門口からかんばつた

一□むろ咲ハとけへこかした

ー△おいらにわたして

ー□△かんねんしろ

トふつて懸ると両人をむかふへ追込引違て又はた〳〵にてむろ咲はしり出梅太郎につきあたりびつくりして顔を見合せ

ー梅そなたハむろ咲

ーむろ梅太郎さん

上るり〽ちりて行うき世におもひをく露もいのちもきゆるあだし心も今ハ又はなれぬなかの梅と空義理となさけの中たんぽうち連立てあゆミくる中啓セリふ

〽せかれた時のかなしさハ一寸と咄すもたちかくれいつか世間をいろ〳〵とほんの女夫とゝなるさかやこの手をしめてしめかへすそれも格子かじやまになり心でむなくら取かちにかへりを千代喜ハよさんせと一日あハねハ氣にかゝり文のふうしの上書ハ男の筆にしいふ捕道のくになるあさあらし

トむまいさいちう へこのあたりの口きゝらしき男私むらのかけよりとんで出ミつけた〳〵ころしハしねへまた所のやつかいたそれたからこゝを心中地藏とわりる名を付たふ

うのわりいせんてへ心中かはやるそうた大方此間しんたもこなた衆たらう

三

かこハれの段

一寸としたことかこうして芥川梅太郎室咲はとめてのあるを幸と廓の方へもわたりをつけ本町の本店へハ昔とつた木根川の叔父をたのミこれきりのねかひも母ハ耳へたこかいつてとりあけねハ思きつて親父へふつかりしにそこか子故に迷ふ夜のつるついた錢ハ一文ッヽ指ておしミて玉祭のせうしん落に初松魚くふよふな生質なれとそれてすむ事ならハとちき箱に似た物取出してのさハきなんとゝてつ腹をゑくつたろうとの叔父の高まんに梅太郎もよろこひ室咲かかたつきハ近所のてまへ親父の心はゝきのありとハしれて先とふき別房の身分となり風雅てもなくしやれすきた跡ハせうことなしの山の宿とか山谷とか所ハしかとわすれたれど先木戸きハに雨さらしの梵天土藏ふた戸まへハ鏡の如く通りの人かうつり梁に燕の飛かふハ柱ふとく棟高く作りなしたる典當舖にて扨その隣ハ神道者門に注連繩引はへて何某の國にて神司なりといひはやせハかのしちやとくらへてこれハすゝめる天とにこれる地ほとの違ひこゝにおかしき說話ハ此先にお耶輸と異名をとりし女妓あり元來龜王か女房にもあらす其因緣を尋ぬるに近曾旅僧の

閹人となりしか桑門の僧から出山の釋迦に似たりとて夫よりして釋迦の女房の縁をとりて耶輸陀羅女の下略なりとそ此おやしはうの神道者と男女交合セし事をかゝァの細女命ほのきゝていきのはたゝおにもなしかねましきおもゝちして野良よハゝりのやきもちこゝとハ八ッの御耳をふりたてゝ聞ても居られす朝夕の飯にハおわれ神風の伊勢屋よりハ流のさいそくにおそれミノ＼をもふすと手にとる鈴もならぬしんたいのおもにゝこつけと食客のト者表へ出て人の當卦本卦ハうらなへと己か身に幸福の至らさるハ机をうつて嘆息し今日ハ曇て人かあつまらぬといふ事ハ天かんかまふくてYかあまらぬといひ雨か落てくれハサァ水はれたとのことハ己か要とする神相要書梅花心易にも見あたらすとその間にろち口ありて這入口に孫店一軒ない袖のふつてくらセぬ放鳥賣おやちか向の鰻魚屋の仕出をミてふしんに思ふも尤なりそも＼／この裏ハ闇物又ハ茶屋士弓場の女なそ居故に玉揃ひといふ心にて孔雀長屋共辦天長屋共異名セり這入口ハせまけれとも眞中に空地ありてかきの手に新道へぬけかた角に稻荷の社麹五吉源加一てんこうのり吉なといふ札八九枚もありかのむろ咲へ本町より男女五三人もつけおかれあき地をすくに小庭となし裏てこそあれ造屋の創意茶房かゝりに備後の五分へり邐際の仰塵さらし竹の椽頬折まハし主賓にハ鼈甲地錦をからませ鳳尾草玉蘂花をあいしらひし石磐ハ青苔衣に

似てねうちあり床の間に樗局象戯盤玉琴三弦とならへしハいつたい潔癖とミへたり室咲もよふ〱七夜のときの名のお町と改めきうに白徒めかすれとまたとこやらにさんす言葉かやます氣の大きいハあら錢ならぬあらかねを 塊 のことくつかへハ壹譏議を商賣にするかミさんのあつまり場所となりけふも朝からつめかけるハ長屋中て鉄棒のおなると仇名をとつたいのおしやへり亭主ハもと肴賣にて今ハ夜かこと商賣をなし夜晝かせくよりハひんほうの足早く日なしハ二七のふた口をちかミ茶屋ハ晦日のていせりをこふ九尺二間ハお定りのかんりやく枕見るよふに燒印のある戸のかたハらに鰯のかしらの殘りしは伍子胥か軍門か面影を思ひ出し隣へたつる壁ハおきやかりこふしの尻つへたよりうすくつり佛たんにハ院号のない戒名か三四まひ[illegible]うちたとゑりつけたる德利に三文花そなへしハ内損て死た先の佛へのはむきなるへけれと飲酒戒をやふれとはぬ斗の仕かた冬ハかまや炭團に寒をしのき夏ハあかりはなのへつついか邪广になりいひつにかやをつるもおかしされとこのおなるハわれあるしかほにてるすになれハかひくひのミかんの皮をゐて居て紙屑かこへほうりこミ是月をふやさんためはかりにもあらすあたまかくして尻までかくすつもりなれとなかしのうりの種へさるほうて水をふつかくるとおなしたくひなり扨亭主かもとれハおめへ足ついてに水を汲なのふりそふたから干物をとり込のとあたか

も奴僕の如くひつつかひおらァ一日かせくものたてめへ共くらゐナことれしてもいゝといへはおなる大きにいかりェ、てめへもしこなしすきたおきやァかんなせへあふらむしこそはいれへつついと戸棚もおれか物たおめへのもナァへやこのにのうてをミるよふにほりものだらけなはんてへはかしたかついて出ていくも大わらひたおめへそしてあしたけへすといつた袷ハとふしたナンニはたらきもねへくせにおきにしなせへなとこれたかにのゝしり何誰の良人ハとふたのくれかしいたんなれこふたのとまゝ子いひりをならへたてあけくのはてにれつかミやつての夫婦喧嘩仲人ハもちろん店うけ迨欠出すこと月のうちに指をおりつくすへしたま〳〵袷の丸あらひをあてかへハ百足かわらしをはき蛙かはらの灸すへるよりおつくふにおもふなとこのともから裏屋にハまゝあるものなりおなるハあかりはなからこれたかにおさんとん又いれむりかと捨言葉をいひなからあかれハお町ハ提燈屋て定紋をかゝせたおこけをかたつけヲヤおなるさんよくおいてたねへなんたかいつそさミしいよさんヤ廣嶋へ茶したしをかけやナ今日ハ何をおこりやせふモ今まて大きな聲をしてゐなすつたねよくわたし共まてきこへたよと一ふく吸付て出すなのミなからなァに肴ァよんてミやしたのッサあちハのちめてたけかねへからいけなから是てもいゝかつけへもいたからよそふといひやしたら内てくふにえへをかへといゝやすかこいつもど

うらんてくへやせん貝ハしにかひなりあの肴屋もしミつたれになりましたおや〳〵わたしともハあちといへハ一色たと思つていゝしたかねへおなるハ鼻の穴から煙を出しなからむしかれいにまてかんそうたのかしまたのと色〳〵ありやすしゞミをかおふと思へハせんぢなり川のうちてもほり下ハこまけへかいつちうまひね夫ハそれだとわたしらか隣の小間物屋のお杉さんねぜんてへちいせへヤしきのおまへんまたきだつたそうさそりやうかくそふとおもつてせうばひあかりのまねへして一ッばかりあるほり物をミセびらかしたり湯へいくとしも湯をもてへねへにつかふうちハ大笑ひだねそふしたとつてあの子なざァけびきつてゐるから長屋とはつちやァ見へやせん夫におかしいハ房州生れたからさそふだか子を寐セつける時なんだかわからねへうたをうとふかきこへやすなとゝいへと此おなるもゝとハ長屋の士妓にて泉香の灰のあるゆるりにかゝつてゐるくわんすてしも湯をつかひしつぽをきつた錢でおでんあんばいよしをかつてくつた中間にて煙草をのんで喜世留をおくにもがん首かふさると鼠なきをすることなとありお町ハにつこりわらひなから成程世間にハいろ〳〵な者かあるねへまたわたしともなざァあかりをかくそふ〳〵とおもつててへ〳〵心つけへをしひすかどふかするとしんめうをおハりといつたりはからしひか口くせになつてしかられますよといふにおなるハなむさん口かすべつたと二度氣の毒に

なりなァにそりやァしきになをりますといひましくないをしてゐる處へうハさをいへばかけとやらこま物屋のお杉おにきやかでござりますおやく／＼お町さんけふハでへぶおやつれたね大かたゆふべ旦那かおとまりで杯くらゐハしようぶたろふおやく／＼いやたねへとなんの事かしらずにいふもあるやつなりおなるハだまりんでゐたりしかコゥお杉さんおめへよんべやどうくといひやつたいおらァよくきいていたぜ何さわたしらか所の松さんハ此間ハきてもふれたそふさからつきし内にやァゐやせんそりやァなにもヤくのやかねへのといふ處しやァありやせんかかきや子供のねへじやァなしてわけをいひやしたのサおなるはすこしはなへかけて何おめへのちハけんくわも久しひ物サ此時お町ハ手を一ッ拍おやうらやまいねとあどけないのもそれしやなりこいかミさまもかくいふハまけおしミにていつたひ屋敷につとめてゐるうちより芝居噺しで今の小間物屋の足になりおばごのゆつりの柳茶うらに金糸紋飛金もうるの帯くらゐわもつてきたりしか夫も典物とへんし一年ハ一度のしらはに土弓の出女となり今もいぼちりまきにすると丁金のおれたさし四寸的か煙草入となつてゐるなとかゝる中なれハ人よりハりんきふかくたとへ火の中水の底と燒豆腐やくよふな文句もいひ合しならんかおさんハ煮花を持てはいてきましたと出すをお杉ハうけとりフヤあたまかごミだらけだよとふひてやりなからおさんどんおめへ前さし

へうきか出たよびんつけをぬつて火てあぶりねへおめへいくらでかつたフゥ八匁かかたの字し（八匁）やァたかへ力重か（五匁五分）ものはつちやァねへとハ勸學院の雀なるべしかく三人のしやへること朝市のせりものハ物かハこの處いつこう筆にもかきとれす既に日天心に至り行かふ路次下駄かしましく米つきハ越後の山にあせを流し槇木割ハけやきのしたに一身の力をあつむあき人の聲さま〳〵にて「ふるぼねおもちやととりかへましよ」「らうのすげかへ」「とりかへ茶わんばちやてござい」お町ハにばなを吞てゐたりしかおや〳〵いひ所へきたよちやつけ茶わんをかわねへけれハならねへさんやよんでくりやァなおなるハひつとつておめへさんハいつでも物のかひよふか人かいひわたしかつけてあけませふと臺所へいでゝニゥおめへそちらなァいくらたそつちのあいつきのいひのよ茶わんばち屋ハわらごミをとりなから二百五十でござりますそれおやァたかへ百三十二文にしなすこししあんをしてなんぞおしたものでもぬりものゝしゝさせたいゐなかへまハるも久しひしやれたそふいわすとまけなゝなどゝお杉と二人にいひまくられもうすこしごりやうけんをすてぜりふにけいたせハとふいふはづミかどふ板へけつまづきむざんなるかな石へあたり四百のどんぶり六百の皿ちりものこらずわれてしまへハおなるハ門口に見てゐたりしかお町さん〳〵あの茶わんばちやかまけねへはちてころんだとおもひなせへわつちかねを

つけたもミんなわれてしまひやしたお町ハびつくりしてそんならわつちかいひといつたもかへ
おなるハあいしれたことさお町ハしあんのありそふなかほでほんにかハねへてよかつたねへ

此本ハ草稿皆尾とハ安脱かけこのたひ所ハ此小冊おきに入り書房ハ米国をうるほさバ後編
ハいかなることや幕こゝでしまふかナツレ狂言の

やまあらし畢

粋好伝夢枕

粋好傳夢枕題言

兼好法師にあらねともつれ〳〵なるまゝ獨りともし灯の下につくねんと髭を見しり見ぬ世今の世の事をむしやくしやと思ひつゝけにフト彼書に玉の盃底なき如しと笑ひ給ひしに氣つき我も今より粋の道を學ばんと思ひ立しかと悲哉元より知レた卑我左衛門とんな事か粋じややら本根じややややら開雲なれは日比信する摩利支天てハなふてマイス天を祈念しつゝツイとろ〳〵と目睡中夢ともなく現ともなく陳紛漢の老翁忽然と顯れ手に奇の一巻を携示して日善哉〳〵汝野暮を恥て粋の道に入らんとす神明其志を納受し給ひ我を使として秘密の巻を與ふ汝謹而此青表紙を熟と覗置ハ譬四匁

の線香を煙八分の蠟燭を点し九尾金毛ニ圍繞るゝ共うつゝ三太郎と成リ嗟〳〵與嗟〳〵の嗟と嫌れるゝ事なく天晴粋の本釜となりウンテレカンの嘘メするのてれ慕なし努〳〵怠ル事勿レ我ハ是異見曾我に説たる處の實唐土の東坡居士支那にも粋の有ものの也トかき消ス如くウスどろ〳〵にて失給ふ忙然として奇異の思ひをなし傍を見れハ一巻の書有恭〳〵しく披き閲れハ妙なる哉奇成哉臥龍も知らぬ女郎の謀計楠公も及ハぬ藝狐の機密其外青樓娼肆の樂家穴蟻の這ふのも陰虱のいる沾掌を指が如く一ッとして洩らす事なしア、我爲の六韜三略是さへ有ハ没ル事無ひ粋か川落る事なひ女郎花有かたし〳〵と戴所を背から奪ぬ先に是に寫置ぬ見る人

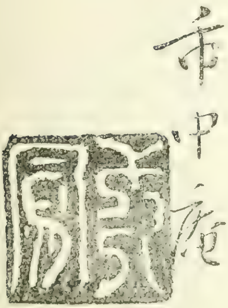
嘲弄して引裂き二階屑と一所にする事おゆるしジャヘト嘘
云

自序

もろこしの韓信ハ股を潜て漢をひらき今時の娼子は股を開て金銀をとらん竹田のからくりは箱を開て人形を出す娼子のからくりは昨日着た衿掛もけふハ七ツ屋の藏を見せん扨お客のからくりを開き見れは眞節を元として坐古隷チヨイ幕のミを願や嗚呼怖べし實にクワイ〱の世の中にやあらん穴賢〱

文政十二のとし

華月



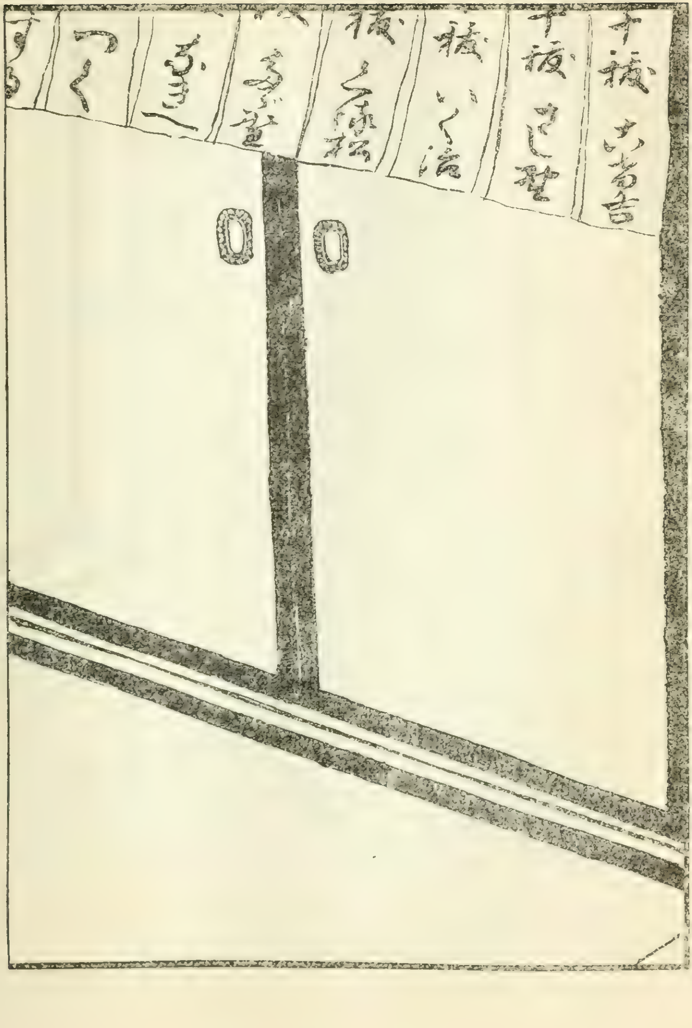
爰に武庫の浦湊川の辺りは其むかし楠公の戰ひ給し場にてありしに時代換れば品かわるとやら て今や男女戰の花里にやなりぬ我つら〳〵此花里の軍法を考ふる所其後聞傳しは茶立女と唱へ 軍女集けるか中にも娼子或ハ女郎なとゝありける此女郎と言ふハ客毎に情を商ふを是我か業と や言わんまた娼子と唱しハ酌人の替りとせしものにて坐敷淋しくなれハ三味線太鼓抔にて其場 に陽氣をふくまし坐を面白おかしくたもつが是娼子の業なり僻し我客のふては身持に迫るゝな り故に我便りとせしハいかにも深實にして一器量あるべき人柄を見込て隨分したふべしさす れは外方よりどのよふに金銀にて頰張ふか業平のよふな男か粹好の日車に乘せに來ふが龍に廻 の勞して客を振串妓子の意氣地とやいわん扨今時の娼子は三弦も彈かず酒も呑ます坐敷は淋し ふしてたゞあの客には尻眼を遣ひこちらの客には樣子を仕たりちよど田舍もいが店附買に來た よふな顏してアノ客とろふか此客とろふかと一向見苦きさまなりたま〳〵に三弦彈ば其歌にけ しのすきない此坐にあれと人眼有ゆへはつかしいなぞと我方よりいや身をつけほんに坐頭が丸 太橋わたるよふニどふやらすると轉びそふでちつとつゞないが其かわりに節季がつゝなふない といふいれ合も有れど是では藝子が女郎になりそふなまた此比横町には女郎が藝子になつたも あり誠に三千世界遣り繰り狂言のよふにおもわるゝが扨古ふ勤ての娼子さんの言ゝしやを聞ば

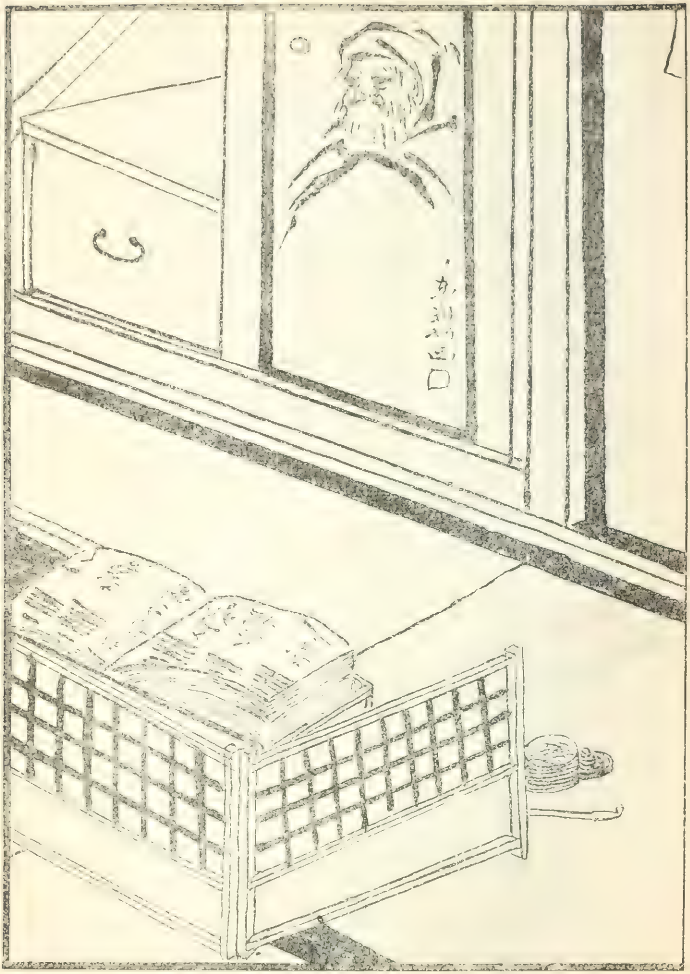
今ハ結句若ひお子がよふ轉んでしやがなるほど思案仕て見れは矢はり其方が徳しやと言ふ事ハ第一華が賣るしきすれば親方ハよろこぶッイ貳歩ッヽ貰ても五人あれハ貳兩貳歩有ほんにおふた子に教へられて我しも當世流の婺子になりましたがマア此節季ハどんなものじやとおもひじや八木さんとこでハんつけ尺長それに嵐の店て鰻ぎの頭大吉ではゆきぎの裏に仕た紅木綿代また千里でハ卷鮓長さなり四五へんもたべ山飯にうどんとごしやら八百宗にハ芋のおわしおはなきんとこへも遣ひの質拂ふたところが跡に壹朱が三ッと明石札が拾匁斗りとあるゆへこれでお雛さんを買ふてどふけづんだとおもふてじやたつた一合の白酒を部家中がお雛さんの盃きで飲で居た處へうちわやのおきちさんが來てじや有てきのどくな千倉で鉢組をとつてじやあつたゆへこれからまた酒をかいに遣るやら鮓とりに遣るやら長吉でにしん昆布卷とるやらあちらからハ豆腐買やらそつと雪ひらを持て來るやらそろ〳〵替へ三味線出してその名の當哥を彈てうけたりうけさしたりさしつ押へつ仕て居ル其中へおもんさんがお出て一寸耳かしてと言ふてじやのへ參じた所が袂から小判そつと出して是ハ路次の口からじやと壹匁來たハ奴ハ此　世古様の留守ゆへ逃仕られしとおもひ鼻挾て居たを此お客心有て銀子くれてゝ有たハ貴寡に前の禰ハ生へ日きハ此事ハ〳〵とぎにたつて其方日合い狂哥を

こけりやこそいとゝ娼子の日出たけれ
と讀て居るを折節門口に聞て居る娼子我事とおもひて此事聞すてがたしと大きに腹を立てとやく／＼と内へ這入姉さん一トロに言ふておくれなそんな娼子とハ違ますとて既に喧嘩にならんとせしをお紋さんやおきちさんが挨拶にてどふやらこふやら此場はむりやりに歸したる所へおわよほどなたぞくじ引ておー人りおこしらへなされといへばおゆるしじやナアおゝかたこんな客ハ時ぐらひ買ふて三味せんハ彈づめにさしてろく／＼に唄もしらずにはしくれ聞て來てハ郡たんひけのらうさいが聞たいのと仙人がりたま／＼に線香が詰メになれバ深切らしい顏して内證で聞てくれいのなんのといふものじやと口／＼に惡くちいふて出ゆけハ次に名指の呼出しを茶屋を何所じやとたずぬれは好なお茶屋と聞くよりも鼠啼きして飛て行く

石に口壁に耳ある世の中に唯愼しむへきハ陰口の惡しき事には寸善しやくま一人が聞は二人となり既に喧嘩となるべき所をお吉さんおもんさんの挨拶にてその日ハ濟せしが扨内へ歸り此と親方へ噺せとも親方もどちらひいても部家中の不和なりと此事チト取揚ぬ樣子と見へたりそれが咎し娼子衆寄合はや／＼行司宅へ願ありとつめかくれハ行司是ハ娼子衆願の儀とハ何事にて有けるやとたづねけれハ別の義にてはなく候桃の揚とてお茶屋方へ御禮に歩行候所フトそしり

はなしを聞候へハ今時ハ若手がよふ轉るの埿古寐でさしたのと內うちはなし此事若町衆へ聞こへなバ私とてもおなしよふニ相なり候へバ余り口惜そんじ候此分きつと御正し下さるべしと聞て行司衆申されけるハ願ひ義一チ〱承知いたしたが先此方より聞たゞし追而沙汰いたすべしと有て其日は銘〱家かた〱へ歸りける跡にて段ゝ聞合し候へハなか〱妓より囃子の客多し是でハ余り鳴の見だりと行司大キニ腹立いたし早ゝ千秋庵へ囃子惣寄と遣ひのもの觸さし候へハ部家〱の小娼ら何事にやあらんとたゝあんずるもあれバ勇も有おもひがけなき見拵へかおれ附見しまひ髪じやッレよねさんあんどやひいさん一寸よんできてのぞつきんがおやつた水おくれとうろたへる其中風呂あがりの振り開しやう〱寒さもいとわず內まへの衣裳をひろげたて裸を隠るかはづしたりホンニ夕アゝ無心の體狀とゝけわすれた提屋のとわり是も書たしこれらも仕たし上を下へと三重なりにけるもはや午時過にもなりぬれバ行司衆はしめあまたの娼子千秋庵へとこゝろざす此千秋庵と言ふハ元と吉野のかミ忠花と申人の別業にて有ける所也先やかたハ二階作りにして裏ハ湊川の松風琴の音を調べ在東ハ大海ニして大仏の帆柱家の棟に見へたり南に當りて黒雲のごとくまい上りたりコハ不思議なりと立より見ればたゝ土ごへの煙りほう〱たり前ニ流るゝ水音の耳へも入らぬ流れの身のうへ垣根に咲し山吹の心も解ぬ有頂天白まへ





衣裳の底たゝき天狗の鼻やおた福の鼻もませりてつめかくる早クヮラ〳〵と下駄の音来たしたな
での愛さかり熨斗目の衣裳の着てこなしハ末たのもしく見へにけり續てきたるその中に人の眼
に付さしものハチトぼつてりの笑顔よし是にまけじと後よりかんとふ縮の襟かけにさす簪か
うかいや櫛ハ鼈甲に六歌仙アレ〳〵そこへ賑わしく顔ハ市山聲迄きしほから聲の其くせに先正月
の書あげハ一と定まる手からものなんぼひくても高見ゆる鼻を延して入にけり是につゞきて大
勢の中に内着て遊髪の何にもさゝずすつぱりとしやう事なしの粋顔て心の内の淋しさも千秋庵
にと入にけり最早娼子衆殘らず相揃候と年行司へ申候へハ行司申けるハみな〳〵別の儀にてハ
なく候さる藝子衆餘りミだらの事有故せいりやくのうへ呵くれよと願出たりされバ後ゝ内意を
以て省略いたす所中にもおなし部屋の客を取或ハ我方より付みしたりまたハ貳詞敷の口できし
たの座古寐の口餅搗の口なとゝ鳴中のひやうばんそれに腹の子をミつにした小娘も有といふ事
ハ皆空にもせよマア藝子たるべきもののお客の數多てハいかんでないかかりそめにも七八人の客
取モシとやなど煩ふたらどしやうと思ふぞや皆我身大事親方大事急度たしなむべしと叱でそれ
ゟ願出し娼子たつぬれど誰か願たやら一向分らすあまり〳〵不思議ゆへ生木屋にて伺ひもらへ
バこれハ賣ぬ藝子衆のへんねしの魂が寄集たるにてあらんと言ふ此事能ゝ考て見れハ前ゝと違

ふて今の藝子衆ハどれも是もうつくしきゆへ惚人の多のであろふと實にかんしん仕て居たと思ふうち短か夜の遠寺の鐘ゴン〳〵と耳へ幽に眼を開き見れハ烏カア〳〵春雨の一夜を夢で明しけりであつたかテモマア不しぎと枕を見れはこんたん夢の枕とあり何にもせよと枕の當開て見ればコハいかに又も藝子や茶屋の穴客の穴までまくりあげ書つくしたる反古紙集て見れバ都合一卷手をぬらさすと後のまきくわしきは見て志り給へ

粹好傳夢枕天之終

雛の花

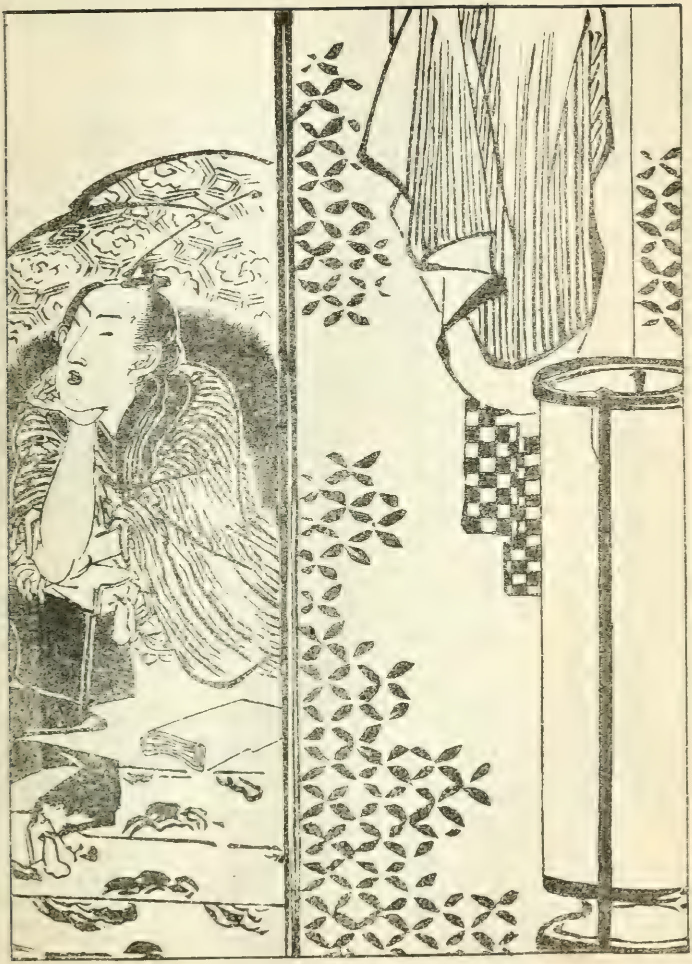
自序

娼妓の。誠と。鶏卵の四角。あれバ。晦暮に大陰も顯と。謡ひ物せしハ。其理を不究の論。可恥の妄誕也夫鳥ハよく。木を撰で捿ども。木ハよく鳥を選ざる理り。悉皆遊才の。短きをもつて獨室閨。夜の長きを識ハ。天を仰て哇唖に均しく。天を汚すして還て己が面を汚。老子の所謂。その白を知て黒を守の術を。おもふべし嗚呼。傾城には何がなる。於客〳〵の。氣がしれぬ。街の別業におゐて。昔しとつた。杵墳の主人

ひのとの
うしのはつはる

眞山人誌

青樓籬の花



○前章ハ宝晋齋
其角が秀句に寄
うくひすャ梅ハさほどにおもハねどおもふ心ハうつり香のふかきにまよふ朧月かげも
さだかにしどけなきけいせいの手くだ

○後章ハ自在庵
祇徳が名吟に寄
うくひすャあまりに愛てこぼれむめあだし心ハ八重がすミふかきにまよふ朧月すい帳
かうけいに枕ならべしけいせいのまと

娼妓美談 籬の花

鼻山人著

○前章ハ宝晋齋其角が秀句
宇久為寿や梅ハさほどにおもへねど

本朝文粋巻の九論文の中に古えの人いえる事あり荆山の璞美なりといえども琢ざれバ其寳とならずとハ實なる哉蘭姿蕙質傾國の色と情の仲の町はりと意氣地の大湊人も志案のほかけて走る放蕩ハ風のまに〳〵に入船のたそがれあれバ出舟と急ぐきぬ〳〵あり錠を卸す居續客まハし坐敷の名代雛妓夜船ごく〳〵かたハらに帆柱建て待わびしハ唯木枕の罪なるべしされバ百ねんの樂も一睡の夢の中に止り生涯の望ハ四季折〳〵の美景に殘る籬の花も散去て　こゝに梅川がざしきにハ中のしま屋の客八右衛門はなり返のねまきすがたにて大あぐら火ばちのうへにゆき平なべをかけ大ひらのざんぶつを入てぐつ〳〵〳〵〳〵トにえてゐるそばにハあひ方の梅川かたひざ立て火ばしをもち灰をならしたりかきまへしたりしてすこしふさぎしていハ八右衛門ハなんきんちよくのさかづきを左りの手のひらへのせ右の手にて人さしゆびより中ゆびくすりゆび小ゆびトじゆんにおやゆびではじきりん〳〵トならしながら【八】宵にしま屋のお仲ぼうが一寸はなした節句の事も承知とハいふものゝ忠兵衛といふ色客のあるを知つゝむだな金を出すも獣子事かとおもへバ愚痴ぽくいふ理屈ョ【梅】ぬしのうたぐりなんすも無理じやァおつせんけれど島屋のおかさんもぞ

つこんしつてゐなんす忠兵衛さんの事一ッ茶屋からお出なんす主にかくしたとつて直ニしれへすこつざんすよくさつしてもごらうじいしぬしだつても苦界のとァもつてへねへほど汲分てお出なんすものを一ト通りにおもいひすくらゐなら何も此やうに打あけてハ申しんせん【八】自惚らしいが迷た心からハよもヤさうじやァあるめへトおもつても人の噂に梅川と忠兵衛は深ひ中トいわれて見るト友達の手まへもめんぼくなく一チばん計較たのがこつちのあやまり見切ところがかんじんとあきらめて見ても悪縁のかなしさには是もやつぱり戯言かと氣で氣をとり直してハ來るやうなものゝどふも愚痴がいゝたくなる【梅】ばからしいそれハぬしの廻り氣ざんす此間もいろ〳〵とをわけておつせへすからそりやァどふとも主の心のはれるやうにいたしいしやう忠兵衛さんの事ハかならずさうおもひなんしてハ罪になりいすとあらほどまでに打あけて申しいしたぬしが今夜お出なんすトいゝなんしたゆへ先キとつておきいした　トたうづくえのうへにのせてある西のうちの紙をじろりと目でしらせ　心にもねへ事をとやかふといわれるほどしミ〳〵つらひものァおざりいせん　トなミだくむ【八】こよひきせうを書くやくそくがむねにあれバ此とバをきゝ又西の内の紙を見て　もふ〳〵何もかも愚痴ぽい事ハやめにしてまァ一ッ呑事だろう【梅】ゆきひらなべのふたをとつてヲヤ〳〵　いつそ煮つまりいしたやうざんす一寸すつておきなんし　此ときらう下たばた〳〵トかけてくるんぞらむめざとごめんなんしトしやうじをあけて【里】モシイあの硯箱をちよつトおかしなんしョ【梅】そこにあるからおも

ちなんし【里】そして梅がえさんがおとづけがありいしたアノせんこくの事をおねがひ申しんす

ツサト いゝながらすゞりばこをもついそぎ行ろう下にてたいこ持 【万里】ヲツト梅ざとさゝんうめへものか【里】サアおあんなんし

トすゞりばこをはなのさきへいだす 【万】又お針栄のところへ豆煎の催促じやアねへか壽飴ハわつちがはづミやしや

うぜ【里】しつたかよふ引ト行 これ豆いりをくつた口ハかならずそのにほひだするゆへにさとてあめをくふ事なりあめハにほひをけす大ミやうやく也 【万】やたらとせきばらいをしながら梅川がざしき

のせうじをあけ おゐらんへ万里でござります トいゝながらはいり次の間へひきがいるといふ身に手をついて 八右衛門さま御沙汰なしハちとお

うらミでござります子【八】わらひながら こつちへ來る時兵庫屋のまへで見懸たが何かいそがしさう

に見ねへふりをしたゆへその事ァこつちからいふとばた【万】ハ、アさうでござりましたか

それハ恐入ました尾張丁の出ばんで大キによいましたに時におゐらん昼間の一件ハすミましたか

へ【梅】まだすミいせんその事で梅がえさんもいつそくろうしなんすのさ【万】モシ八右衛門

さまどうも色男ハつミが深ふござりますあなたなぞもマア御用心なされませ【八】そんな事ァ

夢にもだチトあやかりてへもんだ ト梅川がかほを見る 【梅】につこりしながら つめりいすョ【八】アタヽヽ【万】そ

れごふうじませそこらが用心をする所だ子【八】おきやァがれサア一ツやらう トちよくを手のひらへのせ[illegible]す

【万】コレハありがたうトいたゞき おゐらんのお杓とハあまりけつこうすぎます トひとつうける 【八】

[illegible] サアおさかな【万】これハ雨の手に桃とさくらでござります トいたゞくこよひ万里のこゝへ來るハ梅川がたの

（ここにてふかきわけあり）おゐらん梅がえさんも源太さんにやァくろうをなさりますネ【梅】女郎衆のまよつたのハミんなあァしたもんでおつせへすョ【万】何に致ても昼間のおはなしじやァぜひ今夜のうちにどふとかかふとかお言葉かそれすべすミますまい【梅】それゆへさつきからよびにおよこしなんすけれど何もわつちが客人をひとり座敷へおき申てよその客人のせハを致しいス譯もおざりいせんからまだまいりいせんのサ【八】梅がえさんがどふした【梅】からでおざりいすのサ箙屋の客人で源太さんといふに梅がえさんもおまよひなんして内しやうへも度〱よばれて旦那さんにまで異見をいわれなんしたくらゐなこつざんすのサそれに源太さんがすこしうハきなことがおざりいして新造衆のげゞ川さんとわけがおあんなんすトいツてやかましくいゝなんしたら源太さんがかんしやくを起しなんして馳出しておしまいなんしたのサ梅がえさんもそれじやァすミいせんからゑびらやへもそふ申てつかハしたところが矢筈玉屋へおあんなんして梶の葉さんをお買なんしたわけサそこで梅がえさんおつけ斷のみをおあげなんすト梶の葉さんの所から源太さんの事ハしばらく此方へおいでなんす客人つへ人まちがひのようにいつてそのみを戻しておよこしなんしたのサその事について梅がえさんもゑびらヤへだん〱むづかしくおかけ合なんしたらゑびらやのごツさんがわつちが所へきなんして梅がえさんの事をおたのミ

なんしたわけさ トはなすめもとよりうそなれバしまいのおさまりがつかずいつまでいふてもはてしなければ梅川もこまりしやうすなりもちろんまんざらかたしろのなきことにはあらずひろまき此さうとうがすこしあつて茶ヤなどをよびにやりし事あれバそれへおにをいつけてはなしはやくとゝをぬけ出んのはかりごとなり【万】梅川がはなしのおさまりかねしをさつし モシ おゐらんそのおはなしをしめへまでなさるト夜があけますぜ【八】いかさましやれ本一ッ冊ぶりハたツぶりあるちつとも早く行て片をつけてやるがいゝ トいふをこよいきしやうたかゝせるやくそくあれバすこしもはやく用をしまへせてよぶつもりなり【梅】いつそつらうおざりいす トいやそふな身ぶりを目せて禿どもたましゐへいつかとんだところへ行てゐる おくりて あなたなざァいツてへ深川のおせけへだからこちらへいらしツてハものがてきぱきいたさんでまだるうござりましやう【八】まんざらさうでもねへものよョこツちへ來て見ると又こツちがよくなるすめバ都とやらで近ひ所をすてゝ遠ひ所へ來るも戀にハ身をやつすやツサ【万】なるほどいかさま子それについておもしろいおはなしがござります トあふぎをひとつぱちりといわせて さる所に六十ばかりなおやぢが老もんして今いツた事も直に忘れるゆへむすこがグツトあんじに京傳が所の讀書丸一トつ包壹匁五分第一きこんをつよくしものおぼえを能するといふ所からおもひ付て其親父に呑せるト今までわすれきツて居た古ひ事までが胸へうかんで來ておれが若ひ時ハよし原も強勢だツた俄のときまツがねヤのその巻が河津と股野の角力などハきもが潰れる大かなヤの白妙が雨龍の襠を着て仲の丁へ出るト雨が降た吉野やの隱居の唄にヤァさすがの藤兵衛もお

それをなした小間物ヤの里八が三味子といツてたいこ持に出た時分ハおれも中近江の内で大色ごしとこんたんのいくたてをすツぱりはなすトむす子も親父の事なればよその人の聞手まへもめんぼくなく余り不思義と能書をよんで見るト一切さし合なしハどふでござります【八】おきやアがれさし合なしハありがてへ／＼（こゝに梅川ハ八右衛門をうまくだましてざしきをぬけ出しんぞう梅ざとがねどころへこつそりといたれバ梅ざともそれとしつて梅川をべうぶの中へいれあんどうをくちもとへいだしてすゞりばこをとりいだしむだ書のふミをかいてゐるこれ此べうぶのうちの客ハこよひ梅ざとが初會の客とばけて上りし梅川が命とおもふ忠兵衛なり）【梅】（小ごへにて）さぞまちどふなんしたらう（ト夜ぎの中へはいりあたまから二人りともに夜ぎをすつぽりかぶる）【忠】かえ玉であがつたほど心遣ひのものァねへしたがあの東八が（トこれハかいものなり）よくのミこんで床も小便所のわきへまハしてくれたはよツぽとありがてへ【梅】梅ざとさんといろ事をしていゝすをしツておりいすからそこへつけこミいして主の事を打あけてたのミいしたのサ【忠】どふりで梅ざともおそろしく心遣ひをしたヨそれハさうトまアふツとした張りあひから此よふに迷ふたも悪ゑんとハいゝながら今さらかんがへて見れバ見るほどはかない身のうへしツての通り内ハ養子の事なれバ何かにつけて異質だらけしんるいハ一同におや孫右衛門どのゝ方へかへして仕廻とたび／＼の相談おふくろひとり不承知で六ッの時にもらいうけて育あげた忠兵衛が事實の子じやとおもへバ腹も立ぬ若ひものゝ事なれば引に引れぬ義理合で金つかふやうな事もあるものなれバまづ／＼しツてもしらんふりとありがたいおぼし

めしこれほどまでにおもふて下さるおふくろについぞいちどもやさしい言葉をかけた事もないふ孝な身とおもへバ穴へもはいりたくもふ〱此廓をバふりむいても見まひとおもふても思ひ切れぬ悪縁のかなしさ身で身をくふとしりツヽあれねバとかくあんじられて内にゐるそられなく見世の帳面も手につかねバ一寸外へ小便に出でもからだがひとりでにこツちへ來るやうな事で片時もわすられねへ梅川かわいさうだとおもツてくりや【梅】もつてへねへぬしをそのやうな身のうへにしたもミんなわツちが悪ふおざりいすといふて今さらこがれ死ぬまでもおもひ切る事ハどうもできいせんそれに此やうにたま〱お目にかゝりいすうへからハもしひよツとどふいふとがおざりいしてこれぎりにでもなりいしたらまァその時ハどふしいしやうとおもひすごせバいツそ死にたくなりいす此間も東八どんに内證をきゝいしたらぬしも二階をとめられなんしたトいふわけでもおざりいせんとサぬしのかんぢやうがさツぱり片がつきいせんからそこで中の嶋ヤへ相談のうへそんならまづすこしでも片のつくまでハトかうなりいしたわけざんすトきいてはらがたちいすが此事をぬしもおいゝなんすと東八どんのめいわくにもなりいすからもふだツとむしをこらへておいでなんしあの八右衛門づらのところから十五まいほど來るつもりでおざりいすから來たらすぐに嶋ヤへおやんなんしすこしでも片がつけバ何もくろうをし

ておあがんなんすわけもおざりいせんそしてもとのとふり龜ヤからおいでなんし主ハとかく八右衞門づらの事をうたぐりなんして一ッ茶屋にもおなんなんしたけれどしミしんじつぬしに見かへるやうな客人はおざりいせんちツとでもうハきらしい事がぬしの耳えきこへたらその時ハどふともしておしまいなんしたとへぬしの手にかゝツて死んでもいといゝせん心でおざりいすョ【忠】なんにしろ二かいのあくまでハ手めへも仲の丁へ出る事ァよすがいゝこツちも氣がもめてはらがたツ【梅】とふから仲の丁へハまいりいせんョそして初會の客人ハ斷し馴染の客人といツちヤァあの八右衞門づらばかりでおざりいス

作者曰梅川が忠兵衞にいろ〳〵はかないものがたりはこれまでの通本にいくらもありてめづらしからねバたゞあたりまへ斗をしるす此やうに互ひにおもひこむとほりものヤきせうハとるにたらず女郎の顏を墨でぬり又來るまで此なりで待て居よとやくそくにたがハず女郎は夜着をあたまからかぶりめし給ふ尻にまで顏を見せず癪がいたいといふて昼も屛風引廻してほうばいにも逢ず三ッどの食事もくハずたゞその客の事のミおもふて寢て待て居るの類ひあるひは又いろ〳〵なるものをかミくだいてこれをほき出して喰せるにきたないと思ハずくふしんじつがあるやうになツて來るとついに身をはたすなかだちとなるおそるべ

しく〳〵

【梅】いツそあいだから風が這入てさむなくツてなりいせん　トしできをとツてぴツたりよる　【忠】どふもこれがいんぐわだ　此ときハツ半のひやうし木カチ〳〵〳〵　やゝしばらくありて　【梅】そんならあすの晩ハかならず格子までも來ておくんなんし　【忠】承知だヨ　【梅】忠兵衛がかほの上へかほをおしつけて　いつそこゝをはなれてゆくがかなしうおざりいすト　ぼろりとこぼすひとつぶのなみだ忠兵衛がかほにおちて思ひをます　【忠】ぐちをいわずとはやく行てかんじんのものをとりはづさぬやうにするがいゝ　【梅】かならずおあんじなさりいすなあすのばんハきツト　【忠】そんならその氣で　【梅】かうしまできツと　トべうぶをあけていで　梅ざとさんワすれはいたしいせんヨ【里】ばからしうおざりいす　トせうじをあけて見おくりながら下へ行火入へ火をいれてもち來りべうぶをあけて　大かたきへイしたらうサアたばこをおあんなんし　【忠】ありがてへ〳〵かう梅ざとさんおめへハまだとしもいくめへが此やうに心遣ひをしてしんじツにおもツてくんなさるこゝろいきが泪のこぼれるほどかわいさうだヨ　【里】さうおもツておくんなんせバおせわをいたしいしたかいがおざんしてうれしうおざりいす【忠】二かいでもあいて來るやうになツたらきツトおれいハするぜ【里】どふぞおたのみ申しんすいゝ客人をひとりつれて來ておくんなんし　【忠】そりヤァいわずともだ　トおきてしたくをするやうすに　【里】どふなんすへ
【忠】もふけへりやす　【里】ばからしいまだはやうおざりいすハな　【忠】はやくねへと内のつ

がふも悪し又人日にでもかゝツちやァ梅川までがなんぎになるおめへまでもうたぐられてゐきもねへ事だ【里】それでもあんまりはやうおざりいす【忠】ハテおれがわりいとへいわれへトづきんにてかほをすツぱりかくしはをりを耳にもちはしごをおりる【若】はきものを出すうち下にてはをりをきるこれ人にふうぞくをさとられぬしうち【里】おさらばよといふをきつかけに【忠】くゞりのそとへいでゝためいきをほつとつく【七ツの】ひやうし木チヨン〳〵

これ忠兵衛が如才なきしうちにて此梅ざと若ひ者東八といふ事の譯をきゝしゆへわざとはやくこゝを出立てそのぬけがらのあとへ色男をいれさせせんはからひなりこゝらがものを言ずして人をよろこばせる心いきなるべし

【梅】ざしきへはいり万里がかほを見てヲヤまだおゐでなんしたかへ【万】おゐらんのおかへりまでトついながばなしになりました時におほねおりわどふでこざります【梅】あらかたすみいしたヨ【万】それわおめでたふござりますそんならわたくしもちよツと梅がえさんの所へトきせるをしまい御機嫌よふトそこ〳〵にいとまごひしてたちいづるこれ梅川にたのまれてざしきのあいてをゐるうちおとぎをしたの也【八】ア、大に醉たちと寐やうト夜ぎを引かける【梅】おねかし申事アなりいせんあらほど酒をおあんなんすなと申しんすにいつでもおきゝなんせんヨ頭痛がいたしいすかへもんでおあけ申しんしやう【八】なァにいゝよなんだかいツそ目がしぶくなツたやうだ【梅】ぎり一ツぺんでおかいなんす女郎だからさうでおざりいせうがほれられたがいん

ぐわだとおもッておくんなんし　トつくえのうへにおきし西の内の紙をまくらもとへもち來りきやうたいの引出しからかミそりをいだし八右衞門が目のまへにてくすりゆびのつめの下をおもひきッてきり血のぽた〳〵おちるをべにおよこの中へうけてきせうを書くこれを血ぎせうといふ又墨にて書く時ハおのれが名のところへ血をつけるなり又午王のうらへ書くときハ名のところと「からすの目のところへとく〳〵血をつけるいつれもきせうもんの事ト書出しそれよりいろ〳〵なる手まへがつてを書きならべてもしそむかバあらゆる神〳〵の御名をしるして御ばつをかふむらんとしたゝおろなりそも〳〵此きせうのうらをかまをふ見わくるじんぴのほうあり○御ばつをかふむらんト書しハまことなり又○御ばつうをかふむらんとしたゝめしハミならそなりなぜと　ふに御ばつうをしたゝむれバ文字にあたらざるゆへたとへちかいをやぶりてもつミにならずといへつ　とふ

諸客この心得あるべし梅川が此時のきせうもさだめて御ばつうとしたゝめしにうたがひなし【八】しじうのやうすをねたふりして見る心のうちわたのどし【梅】氣にいらずともどふぞとッておくんなんし【八】もふこれで何もかもわかッた節何もおれが仕舞つもりにしま屋へさういッて札をかけさせやう又十五兩の金もあした八ッ時分までにいもッて來てやるからまッてゐるがいゝ【梅】夜ぎの中へはいり　かならず見すてゝおくんなんすなよ　トたばこをすい付て出す此あとのかきもんくハたいがいを定りなれバこれを畧すとやかくするうちはやあけ六ツのかねボヲン〳〵中のしまやの【お仲】ハイ八右衞門さまおむかひでござりますヨ

○　後章ハ自在庵祇徳が名吟

鶯やあまりにめでゝこぼれ梅

ト鬼客眠實母の地金雞夜宿不萌の枝花の五街の會者定離悟れバ何のへちまの皮も迷へバ憂氣身

をやツす事今さらいふも愚痴なれど嬉しいハいとしさのはじめじれツてへハまゝならぬのおハり待身なりやこそ疊ざん　トねづミなきする梅川がごしきにハしんぞう梅はるそうじはんの禿にさしづをしておゐらんのたはこぼん十何ヤかたふかせてゐるところへさミせんばんにあたつたしんぞう　【はねたの】モシイ梅はるさん夕ァさミせんばんハだれだのふ【はる】たしかあしかのさんだツけ【はね】又こまがおざりいせん【はる】あきれもしねへ此間もしかられイしたよもふ今月も七ツほど請とりいしたけしからねへよくあしかのさんをお聞なんし　トいふハすがゞきをひくさミせんハ糸こまとゞに内せうなうけとるゆへもしなくす時ハそのばんのしんぞうなわきまへて出すか又ハ内せうへさういツてうけとるかせねハならずよつて次のばんへあかりしものへそろへてわたしたイヤうけとらぬといふろん時々ある事なり又家々によりてすがゝきのひきやうすこしづゝちがふなり二上り三下り本てふしあつてテンテヽツン／＼ノ＼トひき出す内あり又あたまからチヤラ／＼ゴシ／＼／＼トひく家ありよく／＼きをつけて見るべし引かハりて中のしまヤの女ぼう【お仲】春さんおはやくお身じまいが出來ましたね【はる】たつた今ざんス【お仲】おゐらんハお湯でござりますか【はる】身じまいでおざりいすヨ【お仲】さふ申て下さりましたゞ今八右衛門さまがいらしツてぜひこちらへよんでくれろとおツしやるゆへおしらせ申ながらおむかひにまいりました晝間の事でもござりますればどふぞいらツしやるやうに【はる】さう申しんしやうまァ一ツふくおあんなんし　トたばこをいだす【お仲】ハイありがたふ　トいたゞいてのミながら　春さんおまへのお客もけふ八右衛門さんがつれてお出なんしたヨ【はる】アノ奴さんかへ【お仲】さやうサ【はる】いやだのふいツそきいたふうだヨ【お仲】なにか氣めへらしいじやァござりませんか【はる】ごしやうざんすそれよりヤァ忠兵衛さんのつ

れて来ておくんなんした里風さんの方がしミぐ\ほれイしたヨ【お仲】あの客人ハほんとふの息
子株ふしうござります【はる】もちものや何ヤかがいツそいきでおざりいすよ【お仲】忠兵衛
さんも今に又お出なさるやうになりますのサ トきせるのすい口をそでのところでふいて下におき まアまいりませうさやうなら
おたのミ申ます トそこノ\にしてたちかへるほどなく梅川身じまいもでき衣るひた若かへて今朝内せうからもらいしおまんまのさいのれいにゆく 其風俗夭桃の春を勝るよそほひ
垂柳のかぜを含る容貌たとへ漢の李夫人をゑがきし画工もこれを寫さバついに筆のおよバ
ざる事を怪ミ巫山の神女を賦せし宋玉もこれを讃せバミづからこと葉の卑しからん事を耻
なん 作者も筆をすてゝ見とるゝ間まるハ八右衛門がしまヤへ来りしときいておなじく衣しやうを着かへかむろ梅二にむきかへさせてゐる梅川ほとなくかへれバ 【はる】今しま屋のおかさんが
来なんして八右衛門さんがお出なんしたトサおゐらんにこちらへ来るやうにとおつせへすゆへ
おむかいにめへりいしたトいゝなんすからあとからと申てつかハしいしたどふなんすへ【梅】
めへりいすめへかふいゝやうにいつておくんなんし【はる】けふハちよつとてもお出なんせバ
いゝねへかハりくツもおざりいすから【梅】さうハおもツてゐいすがひよつと仲の丁へ出たと
忠兵衛さんにしれイしたらどふしいせう【はる】ばからしいそれもやツぱり忠兵衛さんのため
ざんすものをたとへしれイしてもはらをたちなんす譯もおざりいすめへ【梅】そんならまア一
寸でもめへりいせう トいふハけふ十五日といふ食たいとらんやくそくなれバこれよんどころなき所なり梅はるハ梅川が身じしらへにかゝる内つまとくそろえてほそおこし帯をもつてこれをとめるなり帯ハ中へハあふぎをたてに入るさ

て道中して茶屋へ上りすへろ時此こしおびを手ばやくとるしんぞうこれをしまツして客にけして見せぬなりそのしやうこハ客とつれ立て茶ヤを出るに來る時のやうに雨づまをそろへてかへる女郎ひとりもなしミな雨つまのはしをむづとつかんで行又道中して客のむかひに出る時よその茶やをとバをかけらるゝ事あり此時ハその茶ヤのまへをよほど通りすぐしてアイトふりむいてへんじをするなりとバをかけられてすぐにふりむくときハすがたくづれて見にくしといふこれ女郎のつねにこゝろがけるところなり

梅川梅ざとかむろ梅二いそぎ中の嶋やへいたるこれ一寸逢ふて直に歸ん趣向なり

【梅】中のしまヤへあがらんとする時こなたのろじの内をとんでいづる【忠】梅川がたぶさをつかんで　此ふんばりめ　トくらへせろかんざし折て左右へとびちる【はる】アレ忠兵衛さんが　トその手にとりすがりてとめるしまヤのていしゆ【大介】とんでいで　忠さんこれハどふしたものでござります　ト手を引はつてわきへつれ行【お仲】おなじ梅川がたをとつていそぎ二かいへあがるきうに男にいゝつけて髪結をよびにやるむめはるハ梅二にいゝつけておゐらんのかんざしをとりにやる此時見世にハ八右衛門ふ通といふかこをあい手に酒をのミてゐたりしが梅川が忠兵衛にぶたれたるを見てくわツとせきこミしがめツたにこゝハ口出しをするところにあらずしらんふりをしてゐて梅川がやうすをミんとぐツとおちついて【八】お仲ぼう今の雷ハよツぽどひかりが强かツたの【お仲】わらひながら　さやうでござります　トたばへきたり　モシ酒らんといふものハアこわいもんでござりますョ【通】そこでこツちが酒らんふりか【おなか】なるほど子　トいふ折からはおりげいしや笹吉ひで次たいこもち万平きたりきうににぎやかになる　種〻の稽滑あれども梅川の泥雜あればこれを畧す

【忠】これにハだん〳〵譯のある事なればいづればんまでにハ來てわけをつけヤせう【大】左樣ならさうなされてくださりませさやうござりませんト八右衛門さまの前へたいしてもはなはだ御氣のどくでござります【忠】わつちも男だョ　トいゝすてゝわかれる　これ梅川か仲の丁へ出ざる約速を違し怒なり疑心暗鬼を生するとハ是非もなし〳〵　折から若ひもの東八來たりしゆへ【大】忠兵衛にわかれ東八とつれ立此事はたんまりにてまづ〳〵內へもと

りとれバざしきもげいしやにて大じやれゆへなにくわぬかほでまかり出て　八右衛門さま一ッてうだいいたしましやう【八】サア／＼まつてるた　トきかれきやる出とき梅川が發く…たくもよけれバ【お仲】八右衛門さまちつとお二階じやれハどふでござります【万】きめうだ子【通】二かいで二かいをしやれるがいゝ【万】どふもきめうでござります子　トだいもこなたにこびながらはしごを上ツて梅川を見　どふりで二かいへあがりたかつた子　と皆／＼二かいへ上り又しやれとなる梅川さこゝろならず八右衛門もむめ川が心らたくりてうきたるやうすもたければ【万】あはしをきかせて　ちト本ぶたいのしやれとしておゐらんのお座しきへめへりませうじやァござりませんか【皆／＼】それがよかろう／＼　二かいのさハぎまつまくとなる　是より八右衛門をさきへ立ふ通梅川梅はる梅二げいしや筆吉ひで次万里若ひ者東八しまやのお仲いづれもつきそひおもひ／＼のしやれあつて梅川が座敷へ至るまでの道行くわしくしるすもくだ／＼しければ先を急ぎて畧す【万】いざまず是れへ入らせられませう【筆】しからバごめん下され【通】ふうふ中ハとんだむつましい【万】イヘ顔ハうツくしいがどふもやきもちやきにハこまりきります【筆】ヲヤごせうだにヨ　ト梅川がきへれっを正しくすハ八右衛門ハ正めんに大あぐらハきにふ通すこしそげて梅川梅はるトならべて又夫さハぎとなるおい／＼ちんとかこう出てあいあいおさえありおもひざしお手もとてうしのかハりめに白ぼたんあいきつねけんあいこいこン／＼チリテツトンかおるにやれあかんじんの八右衛門がかざる…きあけて【万】うた　たゞいつまでも此ぶたいかハらぬはれの顔見せや中幕せんしうはへいいばん／＼ぜいとゆたかにこそハまひおさむ【通】おしい／＼／＼　皆から東八ろう下を通る【万】ヲッ　ト東印ちよと　ふどきめうだ子　氣がさへすぎす皐月の客此御座しきをまづ片づけなます　トいふしやれ

サ【東】かしこまりました【お仲】春さんの所ハいつもの八疊かへ【東】さやうでござります
【筆】【ひで】八さん御てうづにいらつしやりませんかへ【八】いきたくツてさツきからこらへ
てゐたトうてひよろ／＼【万】ハヽアさやうなら小便所をこれへとりよせませうかト手を引【八】アヽよツた／＼
よつたほうからなミだぐミだ【万】きめうでござります子　トミな／＼どや／＼と八右衛門につきそへ小べん所へ行その内床コがまハろふ通ハすぐに右衛門にあいさつしてむめはるが床コへ行筆吉ひで次万里お仲八右衛門を目出たくとこへおさめてごきげんよふといとまごひしてかへる【梅】モシ八右衛門さんさぞはらがたちなん
したらうによくかんにんしてゐておくんなんした忠兵衛さんハ酒のうへのわるひ客人どういふ
わけかしりいせんがあのとふりの仕打かならずぬしのお顔のつぶれるやうな事ハいたしいせん
からさうおもツてきげんを直しておくんなんし【八】はらの立のたゝぬのと言ハきゝゐな事仲の
丁のまん中で梅川が忠兵衛にぶたれたを八右衛門が茶屋に居ながら見物してゐたトうハさされ
てハどうもこのくるわへつら出しがならぬあの時忠兵衛へといきぢをみがく事もしツて居れど
ないしやうにとふいふきやうげんがしてあツてりつぱに恥をかゝせらるゝ事かトおもへばめつ
たに口出しもできずといふてまけおしみに茶屋からすぐにかへる事もならずいたばさミのけふ
の仕打ありがてへごしんせツ一生ワすれハしやせん【梅】ぬしのおいゝなんすハミなもツともさ
んすが忠兵衛さんの事ハ今申しいすとふりとかく酒をのミなんすと人でもぶちなんしたりしん

ぞう楽でもいじめなんしたりなさりいすゆへやり手楽もふせうちでもしけがてもあツてハ内しやうハすきいせんトしま屋へも斷二かいもとめられてゐなんすわけさ大方そんな事を根葉にもツていた仕打でもおざりいせうかどふもわけがわかりいせん【八】理屈といふものァどふでもつきやすひもいでなんだか陋計にされたやうでねつからうまらねへよしんバ忠兵衛ハ酒のうへが惡ひにもしろおもふぞんぶんな事をして心もはれやうがこつちの身のうへハべらぼうに𨂻子いやす（トだん／＼はなしがからんできてかの十五両のむしんもわきのけとなりせツくのしまいもおぼつかなければ梅川はこゝぞ大事のば所と心をさだめべうぶのそとへ出てきやうだいの引出しより髮そりを出しかツ山のわげをねもとよりぷツつりきりおとしべうぶのうちへはいりなんにもいわずにしのびなき）【八】（梅川がかみのみだれたるを見てびつくり）此あたまハとふしたのだ【梅】おかへりなんす道でおすてなんすまいでもどふぞもツてツておくんなんし【八】やり手にでもしれたらどふする【梅】そんな事ハいといへせん【八】そんなら忠兵衛をつき出す心か【梅】きれいにつき出してぬしのお顔を立へす【八】さういふ心なら何もかもいふ事ハねへすつぱりおれが世話をしてやるからかならずくろうにしねへがいゝ節句の仕廻も吳服屋の注文もおもふ通りにするがいゝ（トだうまきから十五両の金を出して梅川にわたし）【梅】ありがとうおざりいす（トつゝみのまゝたばこぼんのうへにのせる）【八】なんぞまだふ自由なものがあるならさういツてよこすがいゝ（ト切た髮を鬼のくびでもとツたやうにはな紙を出してつゝむ）【梅】（もふしめたものとよう／＼心おちつき）あれさそれしヤァきうくツでおざりいす（トあとハまち／＼のはなし聲もとゞまる所へたゞいとしいとかわいゝの[illegible]まくらにしばし此たすふ八右衛門がかたにて來りし）【通】（きいたふうのはだあかにて大こせのしんぞうにハすこしとがあかぬふうぞくなが

れハ梅はるもよらすさハらずおもしろおかしくちやらかされて少しかんしやく　コゥ梅はるさんいツ來て見てもそれ〳〵ばツかりして下手のこしれへた達广を見るやうにさツぱり尻がすハらねへの色事なら輕ひうちに療治をしなせへ骨がらミにでもなると一生の不具になるぜ【はる】おあんじなんすなわツちがよふな者にヤァだれもほれてがおざりいせん【通】惚れてハあるめへがおめへのほうからほれるのだからしかたがねへ此間まで挿てゐたきのし屋で大平一ッ通用といふかんざしも見へねへの色男に借りられたか此とばはなハだきいたふうにてきんく也【はる】ぐツとしてなんとおツせへすへぬしのやうな御如才のねへ客人ハわツちらがよふなたられぬ大ミ世のしんぞうを御買なんしちヤァどふで御氣にヤァいらねへのサ此とばはなハだいたいくめんなり【通】きいたふうをいゝなんなよ上ヶ褄の下に名の書てある仕着を着るうちヤァどふで座敷ぜへろくに遣れれると思ひなせへ鉄漿どぶの蛙雛子を見るやうに手も足もねへところがおめへ方のあたりめへだ【はる】そらほどにおもひなんすくらゐならおかいなんせんけれバいゝねへばからしい【通】こツちの腹の痛くねへ御振舞だからしかたなしに來るのョ【はる】そんならぬしァ神でお出なんすのかへはかねへ身のうへたねへ【通】もツてへねへ事をいゝなんナかミで來る客人があればこそおめへ方のやうなものもまァ寐所にまごつかねへのだ地金を出す客人がおめへがたの歯にたツものかそりヤァしよせんおよバぬ戀だョ、トしやべくつてゐる折からろう下にて梅ざとのこへ【里】

梅はるさんへちよツト【はる】梅ざとさんお待なんし　ト出て行あとへふ通たゞひとり貰あそびのねるにもねられぬとこの巾まじりくしてゐると　内證の

キリ〳〵チヤン〳〵　八右衛門へねとゝにふツと　【八】サア〳〵おそくなつた　トおきてしたくをする　【梅】たツた今七ツをうたいすまァようおざりいすれな【八】夕ァのけふだから内がむづかしい一寸來て歸るつもりでおそろしく手間がとれた　トいふところへふ通もしたくをして來る　【通】八右衛門さんもふ七ツでござりやすなんだか日が短ひよ【八】ミおかいのじやァねへこツちのあそびすごしたのダ　梅はるとなりざしきにて哥がるたをとつていたりしがふ通と八右衛門がはなしごへをきゝていきぎ來り　【はる】ヲヤもふおかへりなんすのかへあんまりあツけねへこツざんすよ　トたんすの引出しよりはをりを出して兩人にきせる　【八】べうぶのそとから　そんならおさらばよ【梅】どふぞかんにんしておくんなんし【八】せうちだよ【梅】梅はるさんおたのミ申しんす【はる】ヲヤどふなんしたへ【八】【通】

はしごをおりるおと　トン〳〵〳〵

賓に女の髪の毛にてよれるつなには大象も繫るゝとは此所なるべし蜀山の翁がそのむかし詠給ひし夜見世を春の夕暮は入相の鐘に花やさくらんトその香に愛てうかれ人右往左往の其中に　中のしま屋ののふれんをくゞツてはいる客へ　【忠】久しぶりでおそろしく敷居がたかいよ　ト上る女ぼう　【お仲】ヲヤ忠兵衛さんいらツしやりませ【忠】大さは留守かの【お仲】ハイたゞ今一寸堀までまいりました【忠】時にお仲ぼう今夜來たは外の事でもねへこれまで段〳〵ふ義理にしたこツちの勘定

ちツとづゝも片を付やうとおもツて都合した端下金まァこれをとツて置いてくんな　トどうまきからとりいだす小判で十両ざく〳〵といわせてお仲にやる【お仲】ふしぎそうなかほをしてうけとりいたゞいて　ありがたふございますたゞ今宿でかへりますまでお預り申ます　トかツてのかたむいて　おさかづきをはやくョ【女】ヘイト　トてうしすゞりぶたすいものいづる【お仲】お久しぶり一ッめし上りませ【忠】いかさま一ッ呑ヤしやう　ト酒をのんでゐるほどなく大介立かへる女ぼう立て忠兵衛がかんざやうのをたいつて十両の金をわたす大介うけとツてあんどうのそバにてあらためはながミへおさめ内ふところへ入て【大】これハ忠兵衛さま唯今ハありがたふ【忠】少しばかりで氣の毒ながらありツたけた【大】イエ大にありがたふございます【忠】まだひとツ言譯をする事がありやす昼間の梅川が一件サよく〳〵考て見るとこツちの内へたいしても氣のどく千万梅川がめへもめんぼくなさにどふぞ逢ふて謝らうとおもふてもさしあたつて勘定の引あひが濟ぬうちハまヅ二階をとめられたトいふ譯でハなけれどゑんりよしてくれろうと至極もつともなたのみによふ〳〵と工面して來た今夜の十両所詮足りハしめへけれどすこしでも義理がとゝけバまァ相談もできよふかといふもののお仲ぼうさうじヤァあるめへか【お仲】そりヤァおツしやるすトあたりめへでございます【大】いづれにもちよツと懸合てめへりませう【忠】善ハいそげた早ひがいゝ【大】かしこまりました　ト出て行しばらくありて大介立かへりすこしやうすをはなしてゐるところへ【はる】せい〳〵といゝながらむやミにかけきたり　忠兵衛さんよふおいでなんしたよ　トひざのそバへべたりとすわり　ヲゝせツねへ　トむねをたゝきながら　はやくお出なんすようにおゐらんが　トむねをさする

【お仲】忠兵衛さんさやうならまアあちらへいらツしやりませんかへ【忠】いかさまさうならつちやア些とちはやく【お仲】ちやうちんをつけなよ【男】ヘイ〳〵【はる】サアお出なんし【お仲】さきへいで男にちやうちんをさげさせて　モシおはきものハこちらに【忠】ヲイ「忠兵衛が心の内ハけふ梅川が髪を切て八右衛門にやツたる事をはやくもしりてかくはからひしなりおよそ女郎に惚らるゝ時は萬事油断なくさきの心のうちを十ぶんに探し見抜されバ眞のいろ客とハいゝがたしこちらの心をさきへ見抜れて色事仕かけの手くだあにふを誠なりと心得るハ大きなるうぬぼれなり　はるハさきへ行て梅川にかくとつげる【忠】ゆう〳〵とはしごを上る【東】さきへ立て梅川がざしきへあんないする【お仲】ハぶんのはきものをしまつしてあとよりおなじくする

【東】よくいらツしやりました【忠】久しぶりだの【はる】お茶をおあんなんし　トらくやきのちやわんにちやをもちきた　たばこぼんやうじの其外出す【忠】ふくさなどいつてなぎのわきへおきちやをのむ　お定りのとふり出し物ある梅川ハ八右衛門が歸りし跡に一髪ゆひをよび入髪してもとのとふりにゆひ直しけれバ少しも切しやうすハ見へ致なし【梅川】久しぶりでおきりいす　トきセルへたばこをすいつけて出す【忠】とつてのますにしたへおいて　東八をよんでくりや【梅川】アイ　ト行ばとうなく【東】手をあらひながらまる【忠】久しぶりだ一ツヤろう　トさかづきをなげてやりくつと立て梅川がまげぶしたもとゆひと引ぬけハもとより入髪ゆへすツぼりとぬける【東】こツくら【忠】コレ東八梅川ハ此とふり髪を切てゐるがこれまでおかしなうハさをきゝれた此忠兵衛梅川が色客だなどゝ身に覚ちねへ事をいわれるも段〳〵勘定あひいふ義理より一かいへもあお

られぬ譯ゆへとおもへバ外ぶんのわるさに今夜しま屋の掛合ずミをさいわい來て見れバ大それた此しだらかならず忠兵衛がしハざだろうなどゝおもハれてハとんだ迷惑いらざる世話だが誰に切てやつたのか糺して見るがよかろうおなかぼうおらァ一寸行て來る所があるから待ずに歸るがいゝ　トいゝすてゝろう下へ出る【東】まづ〳〵忠兵衛さま【忠】直に行つて來る　トいそぎはしごをおりるおとトン〳〵【東】あとより來て それじヤァあまり トそでを引とめる【忠】ハテ往て來るから理屈ハねへまァ履ものを出すがいゝ　トむりむたいにそでをふりはなしていそぎのふれんをくゞりておもてへ出るとたんのひやうしたいこ持万里ともしらずつきあたる【万】しりもちをついて ホイ

【かね四ッのひやうし木】チヨン〳〵〳〵

これより梅川忠兵衛八右衛門がしうちいかゞなるか後篇をまちて見るべし

籬の花終

雛の花後編

廓宇久為寿

來寅の春出板

[illegible]

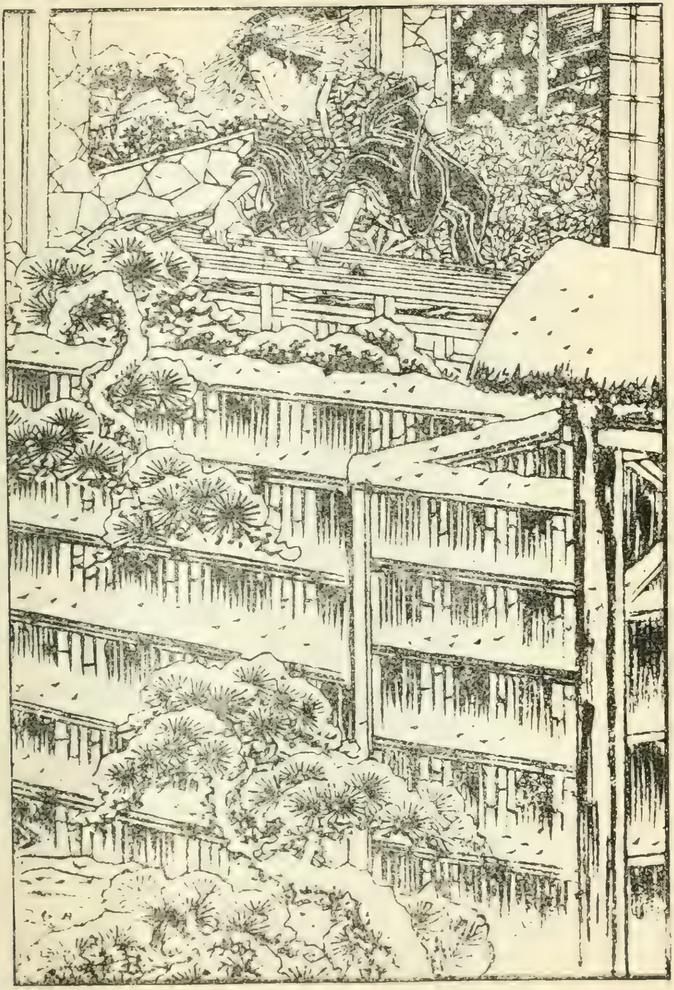
むめ川

岐蜴精子

神かけてちぎりし中をやぶりなれそれは太鼓のばちあたりどんとは野暮のかへ名にて粋とれ通をいふだすき通とふつうのなかの町茶鋪がざしきの狐けんしやん／＼／＼のかしは手れ末しやとたれかしら幣おどる藝者の八乙女あれバ千はやふるてふやり手ありしりくめ繩のひッぱりだこはやる女郎のもらひ引酒といろとの兩部のちまた遊子娛言の後扁をからすと共にカヲウ／＼と書肆のもとめに三熊野やふだらくならでじだらくな作者のもとへきし打浪あたれバ本んのおなぐさみ妓娼せいしと表題し御見物の客人のひろ前におそれみ／＼敬白

古今の好男子

鶯蛙山人書



二

三

四本柱の品目

第一精　花やかに取くんだ手

第二精　手ごれく面白い手

第三精　あぶなひ處で殘るしんの手

契情奇談 妓娼精子巻の上

鶯蛙山人作

眞乳山夕こへ行ば五百崎も。すめば都の隅田川。むかしは草茫々たるむさし潟にして。やどりをもとむる家だにもなし。在五中將の舩長の鳥の名を問給ひ。遠く來にけりと讀給ひしも。宜なりけらし。さるを。大江戸の繁花の餘りに今は家居あまた立つらね。月雪を翫あそぶ風流男。夜を日につどひあそびくらせば。茅が軒端のいぶせきも。茶屋めかして會席の料理を仕出し。此比まで木曾海道の玉味噌の如き汁に一膳めしひさきし家も〔よも〕の所に古みりんをくはへ。よし原豆腐のでんがくに。鶯茶飯も最うふるしと。四季の献立いなかめしも善を盡し美をつくし。價のたかきをいとはざれば。器までもきたな細工の樂燒をきらひ渡の鉢の物好に姫このはしと。上美過たる御好次第に。利勘の田舍味噌も鰹節に味を付ふくさとなしての蜆汁、植木屋半分かし座敷。料理に湯屋とやすめをうりて。當世の人氣を斗る。酌とりの女もおふかた廓の言葉を眞似るなるべし。物かはり星移りいくばくの。秋葉の猿も。お市や刀豆は鼻の先へをい

て。喰ぬやうに成しハ。奢にてうぜし世の中にて女の髪ハ京都風の水髪に。ぐるりおとしの厚化粧紅さへ笹色にべつたりと附て。牡丹もた程ナ両挿のかんざしをよしとするハ。にがにがしき事ならずや。されバ浅茅が原の露深きも。駕舁の稽古場となり。鏡が池の草庵も定命の側に諧あり。采女の衣掛柳に契情の實ごゝろを残せども人里遠きかねの聲は。紙砧の合の手に戈りてめり安のしん手を思ふ。爰は山谷の草ふかけれとゝいひしも。君が住家の玉の輿重箱長屋のお針の世話の年明の圍ひもの。玉姫いなりのお名は。いつもお若ひといへども。参る人稀也。横兵庫に黄楊の櫛をいくつなくさして。前垂のあぶらじミたるハ。田中から。通ふ髪結の女なるべし。鳥越の毘沙門と。柳島の妙見を。両がけして朝参の埒しや。多くハじまへをかせぐ欲ばり物にして。こま下駄の足もとわるくころび安し。衣紋ざかの葭簀茶屋も。朝歸の手水だらいに塩をそへて出す何からなにまでぬけ目なき。毛抜鮓のやたい見せから坂をおりると雪い下。田町の編笠茶屋名のミなりけりむかしのさま。馬で通ひし太夫買は。話にのミ残りてばからしく。水兜のかし。其かたはらに孔雀長屋と呼るあり。それ玉のしりへにあるをもて名づけたり。けん。是より弓手のかた袖すりいなりの向ふ。夜あかしの行燈髪結床のうらに「けんねんじかきに庭をとわざい所のはいり口におぎ江何がしと名札をかけかうし戸に鈴を付ぬくいたのきれいへつついは惣どうこにしてこわゝしきんとした住居ハ三味せんのしせうと見へて若イ衆二三人に娘の子二人もいまけいこさいちう「たばこのんでも

きせるより。のどがとをらぬうすけふり。ないてあかさぬ夜はとてもなし。人の詠となる身ハほんに。しんくまんくの苦の世界。四季の紋日ハ小車のチャン ヘよし／＼ ヘサヨウナラ お師匠さまめう日「お源さんあしに木をわすれねいでもつてきなよ「バイトミんなおちぎねしてかへろ」 若イ者 ヘおつるさん二う／＼とそいなよ ヘなんだへお若ィの一熊さんお楽だよと（こうしなあけろと鉢がから／＼）【喜佐】（なりかつこうわたしまつかねにくめん）（のほこぐけの帯を〆）ときに清雅さんと露笑さんと連弾にして。熊さんにけいせいを一番唄てもらつてへもんだ。内でたのしみにしておりやした。今ちよつと長屋内へ参りやした大かたもうけへりませう【熊次】佐さんおめへ如才もなくつて。とんだ事をいふせへ是ばつかりハごめんだ（清雅露笑は）それじやァわたしどもの三味せんだ。お氣にいるめへからだらうねへ お師匠さん【喜佐】さうさそれハ何ともいへねへのさ。おれがおしへよふがわるいから。此内で一番の罪人だ。そういはずとなにふなら【熊次】よくおれをこまらせるぜへ。おめへもしつている通り。お座敷をつとめる時分にハ。どふやらかうやらやつたが。今じやァ老こんでいけやせん。中／＼おめへさんがたの三味線を。さげすんでうたハねへなんのと。いふ事はみじんもなしさ【露笑】ひと口でもちよいとさらつておくんなせへ【清雅】わたしもねがいからつて。是なりてハどふもすみやせん【熊次】そんならお君さんがかへりなすつたら【喜佐】こいつハありが

たい。時に茶が出來たから　トうしろからちいさな茶わんへつぎめい〱に出しびぜんやきの金果とうのつぼを出しうまくなしとお口とりに卜出ス　【露笑】これはありがたひ。しかし清雅さんはおしうし違イだから【清雅】なにさわたしは天台宗でこぜいすから。朝題目に夕念佛。やらすのがさすだからかまいやせんと　つぼからやたらにふりいだしてくふ　【喜佐】コゥそうむしやむしややられては大きにしんせうだ【熊次】しれせう善光寺なら兩國へお開帳に出せべいゝ【露笑】靈寶はひだるひ〱といゝやァしねへか【清雅】おれが年がいかねへと思つてよくいぢめるやつだ　トはなしさいはかへりくるは喜佐は女ぼうとしの比廿八九きりうかつふく卜人なともとはだいてうのおしよく位をつとめし客。けとわけがあつて年があくやいなどれやいめうと十三四の小ぢよくをともにつれゆふきつむぎに黒じゆすの帶かみは日中のお吉が月壹分でいつたやつ五まい位は大ぜうぶといふかうがいになごや打の銀のかんざしをちよいとたぼおさへにさし京下駄にいよさなだのはなをまださとのことは殘りているとしるべし　【おきみ】　からし戸をから〱とあけはきものを見てかたわきのほうから上り　只今おやばからしうざいますわなどこからお客だと思つたよ。どなたもよくおいでなすつた熊さんこのあいだからおまいさんの事を申くらした子へもし【喜佐】今もいまとつてそいはなしさ。そなたの歸り次第うたつてもらう積りだ【きみ】本にかへうれしうざいます子。それはさうとお定や。そのはきものをかたづけたら。板の間をふいとの。そして茶の下もたきつけやよ【さだ】ハイ〱【熊次】ときにおまへどこへ行なすつた【おきみ】淺くさへいつて子。たからへ病氣見舞にちよつとよりましたのさ。喜佐さんあのね。熊さんふけいきな。わたしとしたことがよ。松さんも大きにあんばいがいゝとさ。こんだのおいしやさんが

もう受合だと申しんしたとさ。そしていゝものをありがとうざんすと。いッそよろこびましたよ【熊次】なんだかごうせへにあわてるの。喜佐さんがおめへの事を長屋内へいつたといひなすつたが。にたもいハふうふとやらだから。おめへもうそをつきかねやァしねへのさ【おきみ】ナニほんとに淺草へいつたのさ【熊次】こゝも淺草だハな。あふかたいろでもかせぎにいつたらう。喜佐さんゆだんをしなさんな【喜佐】ちげへねへ【おきみ】それに子。ばからしいマァおきゝな。今子。路次を這入てくれバ。犬が床へへへつておりんしたら。定が子棒でくらしんすハ子。つミだからといふのに子。通り道がございませんといつて。ひどくたゝいた物だから。ふたつになつてにげんしたよ（トまじめになつてはなすいつ向おかしくなけれどせけんをこぬせうこれたのくらいなものなり）【清雅】露笑さんトキニおらァもうたいくつをした。調子でも合せようじやァねへか【露笑】さうさおめへ調子をあはせねへ。わたしハ俳めしをあはせやう。はらがきた山しぐれとなつて來た【喜佐】これハわたしが氣がつかなんだ。おさだ煮花をしかけねへか【清雅】さつきのへ口茶をいれたらよからうじやァねへか【喜佐】ナニ藝者の内にそんな句はねへ事だ。しかし熊さん一番唄ッてから。茶づりいがよからう。コウお定どんちよつと賴まれてくんなと（はなかみいれより南りやうを一ツとり出しおとへくる〳〵とつゝみ）あいゝ。おもていうなぎやへいつて。中串をはやくといつて來さつし【おきみ】まちがハねへよふ

によ【きだ二】ハイかしこまりした　ト出て行ル　【清雅】コウ〳〵お定どんついでに、角松へいつて砂こしを一升もつてこいといつてくんな【定】ハイ〳〵【露美】サア段どりハきまつたといふもんだ。清雅さん時に調子を【喜作】おきみやその戸棚から十三の糸を出してくんな【きみ】はい〳〵是かへ【喜作】よし〳〵とてもの序にかけかへて【露美】ハイト糸をかけかへてうしたあはせ清雅とつれ弾に【熊次】かた手に扇をおひざをたゝいて〽されバとよ一ッしんれ。鏡の面にたとへたりひらけバすぐにはるゝばしき、うゐてんぺんのありさまに。色にひかれ香に迷ふなさけないぞやすぎしころわれをあだとてむごらしく。その浮雲の稲つまにはかなくなりしそのうらみはらさんためにぜひなくもかりに顕れきたりしなり〽花さいてちる事なくハ世の中の合うきは詞の華ならしその夜すがらもくど〳〵〳〵と、うつゝの苫やのあき更てうづらなくさへわしやきにかゝる合りんき〳〵と口くせにおもふもあだになさせじと。そのむつ言のかず〳〵にそれが迷ひのたねとなる合たゞはかなくも夕がほのつるにはなれしやれ車かハいといふてくれかゝるかねもかすかにひゞくなり合【露美】ホイHIまた無さんはなをかきれた　トいひながらつこンの糸まきをくる〳〵といわせ糸をかけ直ス所へ【里遊】ゆふしこげんに、だんじの糸がきゃくく子供を供につれにしたおけなから　てめへは早く帰ッての。ばんに権七を迎によこしや【子供】さようならお風呂敷ハ【里遊】しれた事を内へ持て行のよ〽ハイ〳〵といふ内せうごをひらいて【おきみ】ヲヤどなただとぞんじましたらモシヘ旦那がいらしッ

たよ【喜佐】コレハようこそ此間はきつい御見かぎりでございます。まアおあがりあそばしましヤ【里遊】とり込でゐるごようすだから【喜佐】みんな内わでございます（清雅露笑口をそろへて）熊公ともにたつた三人でござりますわな。おほくではござりやせん。ごはんじよさんでござりやすいな（ト三人ながらかほを出せバ）【里遊】おきやアがれだれたと思つたらとんだ化物やしきだ（トわらいながら座敷へなほり）「ヲヤおたいしま最中お邪魔をしやした。かまひなさらずにおやんなせへ【おきみ】ナアニ今かけやいの三味線で熊さんがやれ車をさらつて居た處さ【熊次】實はおめへさんの入らしつた斗りでたんと恥をかゝねへで仕合さ【露笑・清雅】よく合せかゞみをいふぜへ猫がわるくつてこまつたに違ひねへいさ（トなにきいても出あつらへのうなぎも出ず酒ありとなつて大さわぎその内里遊も今はふうぞくたいの物をとりまきかありとたる此内のしやれくだくしければこゝに略ス）【おきみ】わたしとしたことが何かわすれた〳〵と思ひましたがおいらんの所からお届ものがござりやした（トすゞり箱の引出しからふみ出しわたし）【里遊】コレハお世話いつ参りましたへ【きみ】尾はりやからおとゝひ届キましたがきのふも一度ほどおへんじを聞にまいりました。けふぜひやどて旦那の方へ参るはづでねへまし【喜佐】ぞんじながらおそくなりまして【里遊】何よしさいつでもがうせいに用もあるやうにみにやア書てよこすが行ッて見るとなんの事もねへやつた（トふうじのまゝたもとへいれる）【清雅】里遊さんわたしどもにごゑんりよにハ及びやせんから。そのふみをちつと讀でおきかせなせへ。定めて

しんでいといふ物だから。うらみたつふりといふころし文句がごぜへせう【露笑】さうとも〳〵わたしらせへ。去年雪のふる時分に子さる大見せの前をとふりかゝると二階でしんめりと琴の音がしやすから。茶屋の男に傘をさしかけさして〽雪にしよんぼりぬれ鷺のと。わたしの美音でさぎ娘を唄ひやすとかのおいらんが琴にあはせてやゝしばらくさ。そうすると禿を迎へによこして茶やの男に是非つれ中て來てくれろと。とゝの積りが色と成やした所が雪ふりに身揚りをする氣位なおいらんだらう。サァおもしろくつて〳〵 トむちうになつてはなしかけると 【清雅】コゥていげへに寐言をいわつし。祭の鷄のさきへ御幣をかつひて出ようといふ顔で馬鹿〳〵しい虚言もつきよふによつて請太刀がしいゝが。あんまりでお臍か茶をわかさァ【露笑】マァ聞ねへおめへなぞハ顔斗で色をすると思ふような淺はかな氣じやァいかねへぜへ。もし里遊さんの前たが。はゞかりながら恐れながら【喜佐】ヱ、たウいゝにしねへな熊公のやうにたまつてゐるものゝめへもあらァな【熊次】せんこくより酒によつてきちく〳〵してゐたりしがむかしのたいこもちのおさとをあらハして なにもうわたしは。おいこミトいふもんだから。とんといきやせん。山口巴が水道尻にゐて大三浦が紫門のぢぶんには。新造なぞにほれられるのハ。色の内にハしやせん。それにかん〳〵樓といふがいやまう賑かな事さ。其時分にやァおいらんが中の町へ出て。モシヘトたいこ持の肩へ手をかけるとおりつき壹分

ツヽにもなりやした。おめへ五町は病氣あげく。さる茶やで客人が五町が無盡をしてやり升が。どふぞそなたさまもおぼしめし次第お頼ミまうしますといつて。盃洗の丼へマア私からはじめますと。袂から小粒を一つかミつかんでかの丼へいれてサア思召次第と順に廻しにもいだから。外の客も見ていられめへ。じつき見てゐる内に一つヽみ程出來やした　ト面白くもねへはなしだならべて【喜作】あゝうち露笑とせいが八横をむいてあくびをして守そつとこつちする内もはやまつちやまのいりやいのかねヂヤン／＼／＼と共におきみと下女ハ取ちらしたるものかたづけ神だなへともしたあげ門の戸をはめかへなぞする所へ雨さら／＼と降ける

ホイまた降て來た。熊さんのモウ見ぬよの昔かたりで。一向さへねへ。爺さんの芝居好が魚樂や天幸の噺をするやうなものだ【里遊】さういヽなさんな。うつれバ替る世の中でこの節尻相撲や音なしの狐拳がはやるやうなもんで。こいつもおいらが爺さまに成る時分にやァへたばうらいで困でもあるめへよ【清雅】時に私はもうお開としやせう【おきみ】まァよふござりんすわなァ【里遊】一寸切られるも二寸きられるも同じこつた【露笑】熊さんおらァ山川町の講釋へ行がおめへいつしよに附合氣はなしか【熊次】おらァぜひさる客人の坐敷へ行かなくつちやァならねへ【露笑】なぜそれへに野暮をいふだらう【熊次】野暮でない證よ惣躰おめへも好きで三絃を弾がうたなぞといふものハかういふ雨のふる夜などに。おいらんと三ツ蒲團にくつたりとさし合てゐる次の座敷でしんめりと一番唄つて見ねへ命だらう【露笑】それハおがへね

へが。まだそのお坐敷へ行にもおそい事ハねへ　トなりやゝに熊次をつれておもてへ出るハ我て里笹とやゝそく〳〵してさかきやへ遊びに行つもりなれども熊次は酒にようとつまらぬことばかりならべたがるくせありておもしろくなければはづさんと思へどもさうもならずこれでゆゝすハこれと段どりをして露笑・引出させさて露せうもまた熊次をまきて中の町で落合つもりなりかゝる事とハお君ハ露しらす　「おきみ」熊さんも酔とこまりもんざんす。モシ旦那こんやは此糸のとこへ一寸でも行つておあげなんしほんとうに病氣で居さつしやるから。いつそ心細からうとさつしてさ「里遊」びやう氣ハ病氣たかめしをくつて寐るがやまひさ「きみ」ナアニさうじやァおざんせん。なんにもあがんなんせんで力のねへ咳斗りせきなんして。わたしが病氣見舞に味噌漬のかう〳〵を持て行ッしたらほろりとなみだをこぼして。ぬしの事計りいつてゝおざんした「里遊」そんなら鳥渡でも行やせうが。喜佐さんをかりていつてはわるひかね「きみ」だいじの物ざんすでも貸てあげへすから中の町ぎりでおかへしなんしよ「里遊」しれた事さそして内からむけへが來たらそいわの別荘へ行たといつてくんなせへ「きみ」清雅さん合羽をあげんせうか「清雅」なによし〳〵サ　トいゝながらありのまゝ出かける　「喜佐」じやのめのからかさを里遊と相合にさし千社札のはりし炙の炙の懐中てうちんをさげ　おきみいつて來るよ「きみ」早くおけへりなんし。そしてねおいりやのおきたさんへよろしくよ「喜佐」せうち〳〵これさ清雅さんこねへにいそがずとまァしづかにしねへ夜はながひわな「客を遊びながらするかごかき」もし旦那モウわつちらも是から仕舞てかへりやすからいそひでやりやす。どふぞ一ぱい呑にしておくんなさへナア棒組〳〵さうさ

それハご如才ハねへ今夜初て乘ッしやる物でも。そのくらゐな事はしつて居るはやくやりやァな トいはんとかごの中でも 〽どうともするから急いでくれ トいふたあいづにぱた〳〵とかけ出すかごわらんじのはねがせいがのあしへかゝれどかまわずいきすぎる 【せいが】ヱヽへいめへましいやつだ一大事しつぽく芋つなぎ チリン〳〵「按摩はりの療治 ほどなく田町から土手へあがると 一句ハよしかな〳〵 客を連た茶やの男かごやをよぶこえ「竹や竹や〳〵○ はなしふたつにわかるこゝにろせうハ熊次をなかにすゝめこおきてへいでやま川丁のかうしやくばへト出行に相合がさの出ればよい 【熊次】コウ露笑さんしづかにちつとあるひてくんねへ。足も下駄もどろだらけだ【露笑】ほんにかきのどくなかにしてくんな。五字の題にいぢわるナものハトいふのに借りのないほうから降つかけといふ句がありやしたが今思ひやつた【熊次】なぜへ【露笑】なにをかくさうあのそばやに借があるから。かさでよけやうと思つたらやくにもたゝないほうから降ッかけてづぶぬれさ【熊次】なきつつらを蜂とやらで。浮む瀬ハねへの。それでハ壹分が貳百文ごみとハなんぼ氣のいゝ番頭でもせうちしめへ【露笑】ハテやかましい往還だ。すこし遠慮したまへ トはなしながらゆくに程なく田川町のかどのたんごやのまへにて 【熊次】露笑さんかさをしつかり持てくんなモシだん子をちつと賣てくれたまへだんごや【亭主】ハイいかほどつゝみま升【露】なんだナだんごをかつてどふするのだこまりものだぜへ【熊次】こまりものとハぬしのこつたかうしやくへ行て何もくわづに聞かれるものか芝居へいつても酒肴とかなんとかいわづハおかしくハあるめへが【露】

おめへの御無理ハごもつともだ【熊次】トキニそこに燒てあるのハみんなでいくらだ【亭主】百三十貳文でござり升【熊次】エヘめつさうな高いものだ。團子十六文といふからもふちつとまけねへな【亭主】（ハひやかしと思ひへ、エとわらつてゐる）【露】コウていげへにしねへ見世の邪魔になつちやァわるい【熊次】露笑さんの御異見たもうなんにももうしやせんから四文斗りつゝんでくんな【亭主】ハイ〳〵（トそこ〳〵につゝんで出ス）【熊次】おつとありがたやまと（ぜにをはらひうちだ〳〵してゐる）【露笑】（ハまたことのできぬうちと熊をつれて）サアいかうめつさうにおそくなつた。もうよつぽと聞じぶんだ【熊次】それハおきのどくや蝿のあたまだ。ぜんてへおれを連て來たのが主のふりやうけんだ【露笑】なんにもいゝなさんな。おめへのがミんな尤た御酒でもあがらずはお命がつゞくめへと。大星せへ醉ッてはしあんあたわすたから【熊次】ましておいらかやうなとんちきだといわねへ斗りだの【露】なんぞといふと卷じたてきめるにはこまるよ。ヲヤそつちこつちする内もう來た。こゝのかけあんどんおそだから熊さん先へはいんな【熊】今となつて見捨られては大困りだ。ふち案内の事なれバ【露】そんならごめんなせへ（トさきへかうしやくばのせうじをあけてはいる）せきの【亭主】（ぜに百のうへにとゝこほどしほをもり大ぜに小ぜにをわけてならべ今中入と見へて茶汲ながら）入ッしやりまし。だいぶ今ばんハおゝそい事でござい升【露】ツイのんでおりやしたから遲く成やしたモウ中入かへ【亭主】只今前座がすミました【露】ホイをしい事をした（ト座に）

なはる熊次も少し洒がさめぎへと見へてやたらにあくびをしながらけさくのかへ札をもち露笑のわきへすへゐとちやをかつてくる【熊】茶をぐつとのミほしてコウもふひとつ茶をおくれ時に露笑さんおめへをしいことをしたといつたが。今迄ハなんの講釈だへ【露】白子やお駒のさばきでまことにおもしろいこつてうといふ所さ【熊次】ウヽフしろ子やかそんなら筆太夫場だ才三といふ侍あがりの髪結がやしきにゐる時からわけがあつて。親の内へかえるやいなや。そのおこまがきりやうよしといふもんだから。持参をもつて來るむこが網のめから手をだすやうにある中に喜八といふ聟がきまつて。婚禮の晩にかの髪結がぐつと積にさわつたもんだから。娘をおもいれとくづいたと思わつし【露】それは淨留理の通でだれでもしつているからだまつてゐねへ【熊】なにさマア聞ねへどくづかれると娘がなき聲でソリヤきこへません才三さんチヤン トのかだになつて貸色なこへてはなな【露】これさマアしづかにしねへおめへも如才もなくつて講釈できくと淨瑠理とハわけがちがハァな。またそれもおれがわるけりやァあやまらうからだまつてゐなさまいまへもきのどくた トたしなまされて熊ハしばしが間だんまりにてかべによりかゝりてゐたりしがしべらくたつといだきがう／＼【露笑】ハまんざのまへも氣のどくことに甲逆とやくそくをしたりけれバ我よきさいわいとことうに行ふりにてこのばをはづす「されハかうしやくの四ツのかねとゝもによミ切またぬうばんにな／＼酒かへこましおに熊ハもびつくりし一目をさましよだれをふきあたりを見廻す折しも中の丁山口巴やのわかいもの世間から紐氣にて中の丁をひきおやかの前にゐたりしがこよひこうしやくを聞にきたりいまかへらんとする所なれて熊次と心やすきなかなれは見まハして【喜八】熊さんじやァねへか。おかしな顔つきだがどふかしなすつたか。そこまでいつ所にかへりや升【熊】ヲヤだれだと思つたら善公か

おらァくやッしくつて／＼まアまア出てはなさう　トそこ／＼にかうしやくばたいでこれよりほかなにごぞんじよあかしのさかやへはいりから汁に四文こなからとしやれる
【善八】熊さんひよんな所でおめへにあつて錢をつかわせて氣の毒だ。それにがうせへにくやしがるやうすだが。一向げせねへ。どういふわけだかはなしてきかせねへ。膝とも談合だ【熊次】何ほかでもねいがけふさる供達の所へいつて酒をのんでゐたと思はつしさうするとおれがわるずいかしらねへが。さる客人とひとりの野郎と遊びに行といふしやれさ【善八】おつとあり／＼ごうせへな酌だ　トロをちよこへつけはんぶんのんで下へおきかほをしかめて　時にもふ積りつことしなせへもふ呑やせん【熊次】何是ッぱかり。獨のんでもしれたもんだマア それからあとの咄をきかつし。奇談がわるいじやァねへか。おれかわるずいかしらねへが。あつちへよつてはこそ／＼。こつちよつてはこそ／＼。はなしてとゞのつまりはおれをまかうといふ目さんとにらんだから。ぐつと癪にさはつて。それへに神がられる事もねへと。氣色をかへてぐつと立てかいろうとすると。そこの小指が熊さんなんだかしらねへがお前でもあんめへ。腹をたつちやァよくねへから。呑なほしてかへんなせへといふと思わつし【善八】おらよせへねへかゝァだの。下ッぱらに毛のねへしろものだらう【熊次】ちげへねへぬしァしつてゐるだろうッレ 榊屋の代の町よ【善八】ゥヽさうか。あれはたしか唄うたひの女房になつてゐるじやァねへか【熊次】さうさ。そこでの事さ。

それからとこのつまりがそこにゐた友達が見兼て講釈八あゆべといふから。それを塩にその野郎とおうしやくへいきやした所が。またおれを置ざりにして。三の切の筆太夫場としやァがつたらう。なんとこれではどんな佛せうなものでも。モウかんにんがなるめへじやァねへか【善八】ちげへねへ。世の中にやァ月夜斗りありハしねへ。やミになりやァとぶ板で横つつらァおんめい中でもあきれねへ【熊次】さうよ。それだからぬしにあつたが幸だから。今ッから櫛屋へ行て。あいつらにあわをふかしてやらうと思ふがどうだらう【善八】随分それもよからうが。もふいましがたひけをうつたから。客人ハともあれ一ッしよにいつたやつらハ。とふにおじきをした銀で西岸とふけたかもしれねへ【熊次】ちげへねへ。妙なことがありやす。たしかしいいなけやの内に清雅といふやつの馴染があると聞やした。そんならぬしとふたりしてしらぬ顔の半兵へきんで。ぐつと今ッから行ハどうだらう【善八】それハ噺しがかわりやすがなにをいふにもわつちの懐が【熊次】はてさその事ならバ案じなし。熊さんの胸にありさとトふ

（こうよう残り一ほん ほうりいだして）番頭さん勘定をとつてくんな【番頭】ハイ百五十六文いたゞきますと（残りをかへす）【熊次】よし／＼さァ出かけやせうと（ふたりしておもてへいづれへもはやひけすぎなれハしんとしてたゞ遠く聞ゆるかごのこゑ）「シテコイ」「ハイ／＼」

花

水橋西河岸稲毛屋の座敷

（なけ過のざしきのていせきばくとしていと淋しくあぶらいたるところにやうじをくわへたるしんぞう やりてべやにしけこミ たばこをついてゐれバ。らうかばた／＼はまぐりつまたぐつと用手）

妓情情了

で引あげたるとしま。エヘモじれつてぞようトつきあたりのへやのせうじをあけてはいろは。まゝにならぬをかこちたる廻しの多き女郎なるべし。されバあぶらをついであるくねづのばん。わほけたるかぶろをしかりこしたへやれバ。しんめりとしたおくにつめ引のいたこあた。貮朱の茶めしのだいをとりまく女郎ハまたこざんの子どものごとくあつまりて。客のうわさをなすかゝる中に。熊次と善八はざしきにまぢ〳〵として。あいがたい女郎のくるをまち硯ぶたのさかなをくひちらしてゐる所へおちやを引た女郎二人【はげ山】【げぢ川】やら〳〵身じまひをして座敷へいで熊ハはげ山善ハげぢ川へさかつきをさし。おめしかいといふばて若イものにきくに。せいがもその外のものも。とよひハこゝの内へあがらぬやうすに。げんなりせしが。かくてもはてしのあらざれハやりてのあないにあいがたのへやへいり。[illegible]へせんかたなくつとめを払ふところの紙入より出し若イものにわたすト。ヘイごきげんよろをきつかけに入替り来るあいがた【はげ山】まくら元のはこね細工のたばこ入よりきせるへつぎ　もしへ一ッふくおあんなんし【熊次】あい　トひといきすいはいふきへはたく　【はげ山】よぎをまくり足のほうからはいりびやうぶを立まハし　おかしうざい升からこつちへお休ミなんしておくんなんし【熊次】ね勝手がわるひといゝなさるのか。君のおゝせハ何なりとも【はげ山】本ざいますかうれしいねへ【熊次】あんまり嬉しくあんめい。色男をだいて。ちん〳〵鴨で居た所を廻しと来てハうんざりだらう【はげ山】おやばからしい。そんなことはしりいせん。マア聞ておくんなんし。今夜で子三ばんといふもののお茶を引ッしたものだから。内證のめへといゝ。やり手のおてつどんが鬼のようなめをして。にらめ付んしたわな。おめへさんのやうな後生ごゝろのあるものでなくつちやァ。あがつてくんなんせんのさ【熊次】ほんにか。それでもつたもんだ。おめへのようなうつくしいもの斗り責ていようなら。面のわるい女郎衆ハこなミぢんだ【はげ山】ヲヤ よろしくだよ。むだをいわつしやらづともつとこつ

ちへおよんなんしナ【熊次】よつたらまつぴらといふだらう【はげ山】ナアニうれしいのさ【熊次】それならこれでよしかへ【はげ山】ヲヤおそろしいひげざいますネ（壹間おいてとなりのへや善八とげび川のくせつをきくに）【善八】コレてまへもていげへ物をつもつて見るがいゝ。こつちは初會といふもんだから女郎のきげんを取てゐればすきなたわ言をぬかしやァがる。癪がいたひの虫がかぶるのといゝながら。ぐう／＼寐ふさつて少シそばへよると。あれさかにしておくんなんしもよくできた【げび川】あいさわつちが病氣ハいろ男にぶたれんすとなをりんすが。すかねへ客人にさすられんすと。アレ／＼又さし込ンす。モウ／＼そばへもよつておくんなんすな。ドリヤしんでいの夢でも見ん升（トうしろをむいてしら川よぶね）【善八】（お今へせんかたなく大聲あげるも初くわいゝことがいぶんわるくむねなでおろしたばこのんでもはてしなければ下でになりそつとげび川のすそをまくり足をわりこんでゆりおこすト）【げび川】ヲヤわるいしやれざいますヨウ（トふいと立てせうじをあけてかけ出す）【善八】これついでに茶を一ツもつて來てくんな（トハいへつまらぬこよひのしぎあアなんとせう）【寐ず番】（ひやうし木を打ながら）八でムり升カチ／＼／＼／＼

契情奇談 妓娼精子巻の上 終

契情奇談

妓娼精子巻の下

鶯蛙山人作

新吉原榊屋の奥二階の光景

花はさかりに月は隈なきを見るものかはと。雙が岡の法師の書られしも。むべなりけらし。津々浦々の色里の中にとりわけにひよし原と。東に高き一トかまへ。夜晝ひゞくすがゞきの。音〆の糸の先がけの鈴にはあらぬ花のくも。うつし植ても愛きやうは。露の壁にてう／＼の羽の白粉や小町紅。いろに出けり戀の闇。通ひくるわの中の町。さくらの内は二筋道。てらさるゝのもふらるゝも。雨と日和のれんじの窓。しるしの杉もなきものを。いかにまよはんへて榊屋の

このいとの座敷の内　床の間は玉むしの砂ずりに一蝶のかけものうすばたの花いけにはらんたいけあけび桐の下に猫か立かけ紙付の碁ばんのかたわきに青がいの机其上に和歌題林をつみこくじやくのはねを箒たてにさしらんまのすかし彫は三間丁の伊三郎の細工金びやうぶはにせものにこそあれ光琳の松の絵しんぞう「この番」とかふろのむかへに卑遊は女げいしや・組高雜音作その外大ぜいにてさかきやへきたるあいがたのおいらん病気ゆえしんぞうをすかひにやりし也本間のざしきげい／＼やのさわき大こいお定りなれば器ス清雅は部屋持の「おす川」ときまり喜すけあけしんぞうにてきらあげ程なく床もおさまる「この糸」少し風をひいて常外のことなれどもびやうき／＼といひた二甲遊をよびしはふかきわけあつてのこと也　次がみ次長でたばをかけ一はちまきし元のかたに手をかけそろ

〳〵あゆみ〳〵ふとんのうへに上る【この糸】おミなさんよく連中でおくんなんした。ありがたうをすよ。新七さんハへ【ミな】京町へたゞ今客人で參りました。ちつともお心ようございますか【こい濱】やつぱりおなじこつてありんすハな　トいひながらたばこを吸付て出し屏風の邊す【ミな】旦那もしへ。めう朝はいつもの時分でよふしう御座りますかネ【里遊】さうさそのつもりで駕籠を【みな】せうちいたしました。こいはまさんよろしく【この濱】もしへモウ歸らッしやるか　「おミなれせうじ引ツ立たちかへるはしこの音どん〳〵〳〵一ツ座よりこの濱は東ちらしたるものふたづけさせあまりのはじりぶたやおくりざかなた三つぐみのはちへとりかざりやぐの下とだなへ入あすのおまんまのおかずにあてたこしらへさこかふろをねかしにやりおのれも起し夜ながきてそこへねるとしらかへよふねゴウ〳〵　【この糸】モンサよく寐なんすねへ。ちつとおきなんし、こゝろ細うおすわな【里遊】つい思わずしらず一トね入したが。てめへもすこしおれがこねへうち。がうせいにやつれたが。定めて蘭蝶お琴を脊にやんでだらう。ひと通りの病氣とハ見へねへ【この糸】ヲヤかんにんしておくんなんし。なんぼといふと。長さんのことをいわつしやるが。どんなわたしのやふなまむしでも。そうくつついでもいられんせんのさ。いろも苦界のたのしみと申しんすが。まんざら身ずまりになりんすのをしりつゝ。とハいふものゝ急に見捨てもせけんもありんすわな【里遊】さうとも〳〵。またおれだとつて色男の埋草にされるやうなものゝ。今さら一文凧のきれたやうにしてハ。あんまりにせいやらうのするやうな仕打で。トハいふものゝ【この糸】おもしろくねへ

女郎だとおさげしみなんせうが。そこが苦界だと。もう少ししんぼうしておくんなんし。ぬしの顔のつぶれるやうな事もしんすめいから【里遊】これはおかたしけだ。其内には長のやらうを見るように。一家いちもんにみはなされ。かゝしの名代に出ようといふ形かたちになつて。おんひらなしの突出しは眞平だ【この糸】ちつとぐつとハすれどそしらぬふりでせきを二ツ三ツこん／＼ 成ほどさうたがひなんすはもつともざんすが。それはおまへさんでもおざんせん。こねへに病氣で此間からも堀の内のおはり護符をいたゞきんすも。今一度本復をしてぬしといつ所に暮してへ斗りでをす。マアよく積つても見なんし。長さんにはお宮さんといふおかみさんがありんすはな【里遊】トいつてうれしがらせたあとで笑うのか。女房持にもほれめいものか。といふいたこもあるはな。そんな薄ッぺらのでいく里遊さんじやァねへ ト少しまきじたていふ【この糸】なみだごゑになりて なぜそねへにぐちにならしつたらう。世の中の義理と云字は。はかねへ勤はしてゐんしても少しはかまわけておりんす。ぬしを亭主だとおもひゝせんで。いろ／＼な事をあつかましく申されんせうか。長さんだつて一朝いつ夕のこつてほれはしんせんが。おそやさんもげいしや勤の内からのいろで。女房になん／＼して。一日片時もこれでいゝとおもひなんした事はねへとの。モウせつないくるしいはなし。それを聞てまお／＼と浮氣らしくわたしだとつて。人の思ひもありんすわな。どう

まア切れずにいられんせう。殊に長さんのわたしの所へ來なんした揚代に。おミやさんが深川とやらへつとめに出なんして茶屋の拂を付なんしたとの事。さすればおミやさんをくらやミへやつたもわたしがとが。もういひ出してもおくんなんすな【里遊】ハテきつい思ひ切りよふだ。しかしいゝ男といふものハ罪のふかひものだ。なんぼ若木の花だといつて。蘭蝶もそんな事をしてハ浮ぶ瀬はねへ。てめへもゝつついてゐるとしる氣のある内はまだかせがせられるぜへ、さりながらお宮とやらを年が明まで。まぶり〳〵見て居てはてめへもすむめへが【この糸】苦界ハあいミ互でざんすから。私の年季をいれんしてもおミやさんをうけ出して。その上でともかくも【里遊】それまでおれに待ていろか馬鹿〳〵しい。五大力でハ緣と時節の末をまてといふが。小聟にしらがゝはへるまで。まぶり〳〵しても居られめいことゝすべによつたらバ。お宮とやらを請出すかねを【この糸】イ、エだしてもらいんすめひ。ぬしも男でざんせう。黒いとか白いとか。ふたつひとつに長さんの方を。わけを付ねへ内は大まいのかねを【里遊】なんのべらぼうめ。五十か百の目くされ金出してやるまひ物でもないが。マア第一腕の彫ものお氣にくわねへ【この糸】そのほりものなら。これみなんし（とうでをぐつとまくつて里遊のめさきへさしつける）【里遊】ヤアこれハ蝶といふ字をやきすてゝ。安といふ字に二世命と彫しハ【この糸】おまへの賞の妻うたがひは

らしてかわいひと。少しハ思つてくんなんし【里遊】そんなら爰に二十兩。マア是をとつておきや。跡がねハみにてしらしや（ト紙人よりこて／＼とだしてわたせバ）【この糸】うれしうざんす是でわたしの顏もたつ【里遊】シカシおれが本の名をどうしててめへマアしつた【この糸】おろかな叓をおつせいす。ほれた男の名ざんすものを。マアもつとこつちへよんなんし【里遊】あんばいがわりひにそねへに氣をもますと。ゆるりと休ミやナ。おれも最うかへらう【この糸】あれ又そんな事をいひなんす。喰つきんすにへ（トしがミつく）【里遊】それだといつて【この糸】ようおすわな□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□きつとでざんすによ【里遊】大ィぶねつがあるさうだ。どこもかしこもあたゝかい【この糸】あれさ馬鹿らしいぜうだんをしなんすとつめりいすによ□□□□□□□□□□□（チ／＼／＼作者もこゝの一段ハ屏風の外でエヘン）「評」曰女の髪にてよれる綱にハ。大象をもつなぐと。實におそろしきは淫樂のひとつにして。つゝしみたもつべきの第一也。しかハあれど。里遊の如きは已の身を尊として。他を芥のごとく思ふがゆへ。傾城のまことを得ることなし。さるによつて手管のわなにハ。鼠のあぶらけ斗りと思つて。また新手に魚のゑさある叓をしらず。鳴乎後世おそるべし。妓樓のこん膽▲一朝にかたるべからず（〇こゝに又滿雅のあいかたおす川のへ屋にハひけ過になつて露笑も來りけれくしんぞうの初はなといふあいかたを出しおちもらされの女郎あそこゝよりあつまり客のうハさはなしの大酒もり喜すけハいつのまにかかへりしと見へてあいがたのふりしん）【はげ山】もしへわたしのきやく人が子ぬしへよろしくと

さ。さうしてよんところねへ用事があるから。おさきへ歸りますとさ。しつかりおたのしミなんしとまうしんしたよ【おす川】ヲヤいつのまに歸らしつたかさつばりしりいしなんだい マア一ツおあんなんせんか。おはいりなんしな【はげ山】ありがたうおす トざしきへはいるせまい所ゆへすしをつけたごとし【清雅】ときにその猪口をちつと廻しねへ【おす川】かんにんしておくんなんし トいひながらぐつとのんではげ山にさす【はげ山】とてもい事に是にしん升 ト茶わんへはつきりうけちよこハ露笑へまハす【露笑】まづいたゞき女郎しゆとしよう。おいらが色はなせかがふせいにふさぐの【清雅】ふゥさぎ〳〵何にョゥ見でうかぬ【おす川】初花さんハ頭痛がししんすさうさ【初花】定めしつきのわるひ女郎衆だと思ひなんせうが。なんだかそれでもさつきよりハ。大きに心持がようおざりんす【おす川】少し酒でものんで見なんせんか【露笑】よしねへなほ天窓がぶら〳〵してわるからう【はげ山】あれ見なんし女房思ひざいます。はつ花さんハあやかりもんでざんす【初花】 ちよこをとりあげ はゞかりでおすが。おす川さん少しついでおくんなんし。はげ山さんになぶられても。ホンニぬしがきさしつてから。あんばいがよくなりんしたから。しかたがありんせんのさ【清雅】サア大さわぎだ露笑がよだれを流してあのめつきを細くしてゐることハ【おす川】せいがのひざをふつつりつめりながら よくあくたいひなんす。ちツとだまんなんし【露笑】それ見たかしかられたいゝきびた。時にあんまり夜がふけら

ァちつと寐ようじやァねへか。世間もさうざうしい【清雅】きつく床をいそぐやつの【はげ山】わたしらもいつてやすみんせう。ほんに寐て花をさかさつしやるもまたようざんすわな。そして是からいつ來なんすへ【清雅】二三日の内にやァきつとなァ露笑【露笑】これへでこてへられるものかかう美くしぞろひだものを【おす川】をやよろしくだよ【はげ山】その時きつとわたしの客人をつれ申ておくんなんしよ【せいが】せうちく〳〵あわゝだ【はげ山】アレ ぜうだんしやァおッせん。おやすミなんし（トらうかばたへ出て行）【露笑】そんならしつかりおしげり。こつちハ小便とでかけやう【清雅】ちつト待給へ東海道とおれもいつしよに（ト共に出て行）【おす川】（ハあとをかたづけはうきにてはき出ス）【初花】（らうかにろせうのこようより歸るを待おのがへやへともなうていくせいがハおす川の座敷の床の中へすぐによこにねる）【おす川】（たばこをすいつけて出しびやうぶひき廻ス）もしへ寐がつてがわるうおすから【清雅】これでよしかエ（トなほるおす川も床へはいり半分よぎをかけて）【おす川】なんだか今夜ハいつそあついじやおッせんか【清雅】おらァそねへじやァねへようだ【おす川】（きうに思ひ出したやうに手をせいがの枕の下へいれ）もしへあの奥ざしきのおいらんの客人ハ何處ざいますへ【せいが】（タシカ）藏前だとよ【おす川】ヲヤばからしい一坐ていらつしやりながらしんなんせんか【せいが】三味線を稽古にいつてからのちかづきだからしつかりとしらねへのさ【おす川】ぬしは正直ものざんすよ。そしておめへさんの内ハへ【せいか】わたしや馬道さ【おす川】うそをおつきなんし吉原

の内ざんせうとふも見もふしたやうな　ト少しかんがへてヲヽそれ〳〵　あの京町の小林やへいきなすつたことわありんせんか【せいか】商ひにわ行たことわありやすか。遊びにわめいりやせん【おす川】それでもあすこにいた禿が内へ來ておりんすがぬしをよくしつておりんすから。ひよつとなじみでもあらッしやるかと思つてさ【せいか】またよし原ものと見立たわ。どふいふ氣だ【おす川】いつそ取廻しがきれいで如才がないから。ひよつとさうだかと思ひゝしたからさ。しかしよしはらうただとこれからぬしを呼申たくつても。内證やほうばいしゆのめいもありんすから。大きに苦勞になりんした【清雅】そいつわマア難有てへおめへせいよんでくれるきなら。そこえいつてわおらァ一寸でも引きやァしねへ吉原ものゝように。實情のねへのじやァねへ。かねでかれねへ情がありやす【おす川】ほんにかへ。それわちげへおつせんのさ。こゝの内なぞァまァ聞なんしな。ヤレ後生をねがうなぞといつて。修行にくるぼうさんや。今日どうにもかうにもいかねへといふものにわ。壹文がこつても施しをしいせんで。おもて向ばつかり錺て子。いこぼうさんに斗り。日牌とか月牌とかいつてかねをやりんす。そして法事だといつても子。惣ざいの芋に。ぜんまいに油揚ぐらいがいひひきャ共うへ。女郎衆の方からわせうゆの十樽もつかひものをしんすわな【清雅】さうかとんでもねへ。もつとも別世界で。だれやらの狂哥に

も、せかいの人の子をすてる藪。とよんだ所だから。どふで人情を知つてゐびりの商賣ハマア出來子へかたちき。それに花をするの。ヤレ俳偕だの茶をするのといふが。つきやつて見るとなんにもしらねへ。みんな地犬が多ィのさ【おす川】それだから深川あたりとゐ大ちげへで。仕かけやなにやかやに懸り斗りかゝつて少しお茶をひくとやり手衆や内證の顔は見られんせんゐな【せいが】ナニかまう事ゐねへ鞍がへとやらかすがいゝ【おす川】わたしらァあつちの泥水ものんだ物だからそうしんせうよ【せいか】魚こゝろあれバ水とやら。その時はかた腕にもなるめへものでもねへのさ【おす川】うれしいねへマア三年もなじんだ卵ころを見るやうに。わたしとしたことが。初會からこんなはなしをしんして。かならずさげすんでおくれなんすな。ちつと寐んせうじやァおッせんか【せいか】おれもなんだかふさひで來だと（いゝながらおす川のあしの間へわり込と）【おす川】もしへいつそおきのどくざんすがきたのふおすがようおすかへ【せいか】よくうそをつくぜへ。それともいやならよそう【おす川】なにマア いやでありんせうはちがあたりんしてはわるうおすからサ【清雅】（さきほどからふんまりきれいな口たきゝいまさらむりにとこへもはいられずあくび二ツ三ツきせるたとつてはいふきへとん／＼はしごのきれのやりこべやにねぼけたこへて）【やり手】南無阿彌陀佛／＼（「ねづのばん拍子木カチ／＼／＼」）七ツでございます引カチ／＼／＼（かゝるさしきに引かへて露笑ハ廻しへやのせまいところに）【初花】（今てうづにいつたと見へてあんどうの火をかんざしでかきたて紙をちり／＼といはせたはこを付もしへといつて露笑へやりそのまゝ床へはいり）寐なんしたか

てうづにいきんしたらまだ雨がふつて居んすハナふけいきな【ろせう】ふつてもいゝじやァねへかおめへのようにいつたとつて急に天氣になるもんでもねへ【初花】それだといつておれッとうおすものを【ろせう】なぜそねへにいふのだ【初花】此間から花見にいきんすので有ますが。ぜんてへわたしらハ最ふ出られせんのでおすが。こゝの内では寮で花見をしんすからわたしらも參りんすのさ【露笑】そう聞てはもつともしごくだ。待人をかけるやうにちつと呪でもすればいゝ【初花】じよさいなく松山さんやけび野どんがてる／＼法師をれんじへかけんしたがきゝいせん【ろせう】何にしろ天氣になればいゝ。おれがさん段も惡ひ事がある【初花】内でおかみさんがあんじて居さつしやるだろふおきのとくざんす。それにおめへさんハよつぽとうんが惡うおすよ【露笑】ナゼおかしなことをいふのふ【初花】わつちらのようなおもしろくもねへ女郎を買しつて【露笑】それハこつちでいふ叓よ當世ハかたに手拭まさの下駄でいきな。にせいハやたらにいろが出來て死ふのいきやうのと。女郎衆と共に互に裸になつて。木もとげねへ事にあつくなつて。さわぐが。おいらのよふに老込んじやァいかねへハな【初花】蓼喰虫もすき／＼でいろ／＼でざんすけれども。わたしらァそんなうハきなことハいやざんす。そいだからこまッしやくれたといつて。にくまれんすがどふしても年をとつた客しゆでなけれ

ハ實ハありんせんハな【露笑】あらおそろしの上手もの。おいらもあんまり實はねへからさう思つてくんな【初花】それでもほれいしたからしかたがありいせん。おめへさんもとんだ山の神に見込れたよ。徃生しさつしやるかいゝのさ【露笑】おめへのような山の神ならぜうじう見込れてへ【初花】あれにくひ口ざんすよ（ト口をつめろふとする所を露笑ハかほをそむけ片手で初花をぐつといだくはつミにどこもかもしつくり）あれさ顔を見なんすな（トよこをむくと）【露笑】これがまよひの種となるか【初花】いつそじれつとうおす（トいふをきつかけに八聲の鷄トケツコウ〳〵「となり座敷ハしんとして心ぼそくめあんどうのそのともし火も一筋に思ひにあまる蘭蝶がれんほのきづな切かねて忍くろわの戀のやミむかしのぜんせい引かへて今ハしがなき羽ぬけどり茶や内せうにせきせかれけれてあわれぬ中となりわがミなげこん生田川それハふたりの男へしわか身ハつまと此いとにミだれ心のおミなへし露とこたへてきへたき風ぜいちゝはゝの御恩を今さらむねにいく度かおもひ廻せばおそろしやとわが身でわがミがあいそがつきいつそしなんと思ひしがこのよのおもひ出今一度此いとにいとまごときて見れべひけ過のれんじのもとにたちしハ廻し方の與七なさけあるものにて此ゆふと相だんしあげし廻し座敷なミだながらに）【この遊】氣づまりでおざん升がモツすこししんぼうしておくんなんし今においらんも來なんせうから【蘭蝶】何からなにまでおめへたちにまでいろ〳〵な苦らうをかけるかんにんしてくんねへ【この遊】あれまたあんな事をいゝなんすぬしの菲ハ世話をするハあたりまへざんす。おいらんも此間中はぬしのことばつかりいつてないてばつかりいさしッたが。そのせへか氣病とやらで。引込ッでゐなはいましたが。けふは里遊さんが病氣見舞に來さつしつたから。よんどころなく座敷へ出さつしッたのさ【らん蝶】なに今じやァあれがどんな色をしようが。おれを突出さうがうらみとハ思ハねへ。ミんな身から

出たさびだから。人にうらみはみぢんもねへと。あきらめていやす　トはら／＼となみだをこぼす　【この遊】なぜマアそれへにぐちにならしッたらう。外の女郎衆はいざしらず。おいらんにおいてぬしを見捨るなぞといふ事はありんせん。是ばつかりは請合ざんすから。そんなはかねへ事をおつせいすなと　〔はなしさい中このいとへさしきたそつとひきしほのちらかできけバらん蝶といふにとびたつこゝろねをしつとこらへこせうじたあけ〕　【この糸】この遊さん別てはなんにももうしんせん。ありがたう。與七どんにはよいやうに【この遊】なにもかもわたしが胸にありんす。最う夜があけるに間もありんすめへ。蝶さんもかならず大きな聲をしなんすなよ。久しぶりでしつかりとおしげんなんし　ト言葉数いわでせうじをたてゝ行　【この糸】あとふしおがミ／＼なとだながらに　なぜあの子はあねへにしんせつざんせう。いわばわたしは姉女郎ぶり元からつきさきまで。世話をしがちのこのわしを。かげになりひなたになり。朝夕のたべものまで。身に着てゐるものを退でなどしてくんなんす心いき。コレ　妹とはおもひゝせんこゝからおがんでおりんすトいへは【らん蝶】そなた斗りかおれにまで。今宵のしぎもこう／＼と　此いとのみゝに口　それはさうと氣がせかるゝ頼んだことは【この糸】やう／＼のこつて二十両はこせいんした。マア是をとつておいておくんなんし。そしてお宮さんの事はどうなんした【らん蝶】されバさあれだつて本は泥水をのんだ女だからそこに五分もすきはねへ。自分から好このんで身を深川へしつめた。とれいふものゝおれのし

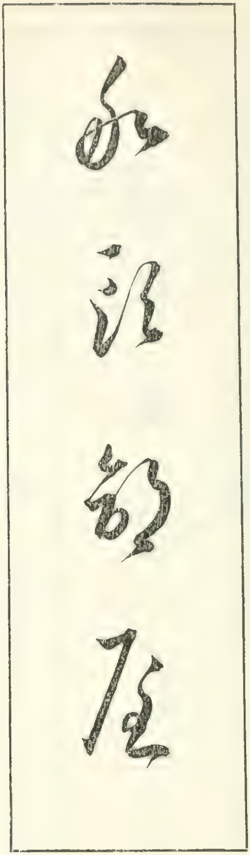
らねへうち。じぶんの身のしろをかねてそなたの方へおれが揚代金を中の町で拂てくれたのハの。そなたやおれが身にとつては。眞綿で首をくゝるやうなもの【この糸】それじやによつて此かねで。お宮さんの身請をして是ではとうでたりんすめひ。跡がねの三十兩ハ二三日の内きつとおまへのかくれがまで【らん蝶】おれも一旦はさうと思つた故そなたにむしんハいつて見たようなものゝ。やせ浪人のおれが身の上大まいの五十兩。どの道そなたの手から出たとお宮が思ふハひつ定。さすれハ己が身抜をしようと思ふくらひなら。先から身ハ沉メねへといきぢと義理にせまつて。中〳〵あれがうゝと承知するこつちやねへ【こ糸】そんならわたしが身をつくしたも水の泡となりんしたか【らん蝶】夫についてハ咄あり。そなたにはまだいわなんだが。もとやしきをしくぢつたハ。お宮のわけ斗りでもねへ、殿様からあづかりの定家の式紙。ふんじつなせし身の落度。今以おや人は坐しき牢。この頃はからすもさる道具屋にて見かけたれバ。そなたの金を手附にわたし。式紙をうけて親人の難義をすくひし其上でハ【この糸】たとひせかれてあはれずとも。みらいは必ず夫婦でざんす【蘭蝶】おミやといふ女房が。あるが中にも眞底からほれたそなたをなにすてゝ【この糸】どうした因果な悪縁やら【蘭蝶】結ぶの神もうらめしひ【この糸】モシどうしんせう　トいだきつくはづミにらで　さハらたニアイタ、【らん蝶】ヤアラ　そな

たれうでをとうかしたかとぐつときくれハ【この糸】がびつくりしながら吹けすあんどう。やミハあやなしせうじの外【この遊】おいらんへ里遊さんがおけへりなんしたよホイ

明烏(あけがらす)の聲(こえ)カア〱〱

門口のくゞり戸カラ〱〱

枝になく鶯女にすこしほれん華經と嘲れバ水にすむ蛙く
つかた〳〵の片思ひ我脊子の呪に早くよびてとはりさし
て待人かける雲雨の情ふらるゝのも照されるも曉傘の破
れかぶれ燕にあらで軒のつまどれやひ夫婦ハ巫山の夢か
よひくるわの穴の穴さがして書し遊子娛言其後編に亦も
や跋とのぞまれてせんかたつくえをトント打花の側の深
山木のごとしと顏黑主の醉丹房まいらぬ毫をとつて妙〻く
といふこと云爾



船頭深話後編

辰巳
船頭部屋
完

猪牙散人戯作

前編ノ二書盛ニ行ル千世ニ
其蕭洒亦殆ント盡セリ焉雖モ
然覧者尚未タ以テ為足レリト
故ニ捜索メ其餘零ヲ以テ献ンスト
河東遊戯之士ニ云云

船頭部屋序

船頭部屋とハ何乎。風の夜雨のふる市場。石にたつ矢の虎よりも。念力通す猪の牙の舟の。爰に臥猪の床なれバ。仮に部屋とも呼ならし。されば家鴨は枕筥から飛で出柏餅は船打場をや夢く。河岸番よく艪をあつかへども漕事を知らず。起番よく夜ふねをこげども後朝の草履を違ず。客廻の子の送り舟は傘をさして一本綱をわたるより速く。ふんながしの迎船ハ干潮にながるゝ木瓜よりも遅し。チョット作者の備舟ハずるけるにあらねども。其後編のおそなはり。やうやくつゞりて三篇目。おふねができましたよふと云爾

山下亭上に於て
醉中毫を採て

猪牙散人述

雪の下鳥井町の
息子穀屋喜之助
滑川
酒店の
番頭、
藤兵衛

五

古市場

船部屋頭

六

船頭部屋之圖

見番凡例

○船頭部屋と号するハ舟頭の寐る處にて亦子どもの客を送つて出た後で色よりかわいゝ抱火鉢の眞な噺をするなれハ船頭深話のはやり子に後をつけ後篇の南一片三編とす

○前篇の二書に古市場の穴を穿ち風俗言語の趣ハ盡したれバおとまが眞實を主とし聊流行をくはふ前後參考して其花實を知り給ふべし

○おとまが客喜之助長五郎藤兵衛三人の達引此本にそのいきさつをわけて全部三冊まるめてしまふ尤　客のもめやひハ娘分船頭幷作著のかゝりあいなりヲヤきつい苦勞性サ

以上

船頭深話後篇　二篇目

己辰
船頭部屋
三篇目

鳥居町舟宿の套
七軒堀親里乃套
るが
雀个岡山本卄套

船頭部屋

猪牙散人著

○發端

昔鎌倉の傍に手越の里といへる花巷あり。戀を買ふ肆とてその名も古き市場の繁昌。今復毫に云もつきず。そも巽の風土たるや。明の珠市に彷彿たれバ市場とハ稱なせる歟。こゝも都の辰巳とで喜撰ハ朝茶の梅干に。榮代團子の角とれて酢も甘もかみわけた。彼喜之助が息子株ハ唐の樊川晋の謝安が風流に傚ひ男がよくて金もちで。呉郡の張魁賴兼公高雄の茶店に憩て比目の眼の覺すがとし。店物の藤兵衛ハ頗瓜州の蕭伯梁に似て豪風見通を賑し。長五郎が強ハ金革を衽し比翼莚をしいて死すとも厭ず。實にはまれバふかき深川にうきかわたけの白人は多かれと。白門娘が女俠を學び。おとまが能三個の嫖客をまわす事。宛筥まわしの尻がるい如く。意と素足ハつめたけれど。あつたかい大ふく餅。お客にぶつかけなんばんそはイそばイ引と云と

鳥居町舟宿の套

神や佛がうそつくならべほれた證據をどふかこかいな。この惚やつた起證をべ。互に衣裏へかけ袋。喜之助おとまが戀中ハ。あまい艪杭のよふなれど火繩をつけて枕箱とす。娯またその中にあるべし　ここにおとまがいろきやく喜之介ハ・舟頭深話のきりに見へたるどく・おとまにつき出され・くやしくハ思へども・むねをさすつて胡がへり・鳥居町舟宿八五郎がさんばしよりあがり・かし紋のひあわいから・あしばやにかつこと・いきなりにこたつへむぐりこむ・此舟宿のによふぼハ・辰巳で娘ぶんをしていたあげくなれべ・じよさいのないふうぞくにて・そうどうこのへつつい・からかねの釜がましんちうやくわんおごたいそふに・ちつぷかつぷといわせながら【おうた】ヲヤおかへんないまし【ていしゆ八五郎】おはよふございやした。きつとおづるけたろふとおもいやした。ア、なむめうほうれんげぎやう。めうほうれんげきやう　ト葛西芝又村から出る帝釈天のひきなかけものにむかひ・どてらにうづらかわのしごきをしめ・ようじおまげにさし・いけぞんざいなりで・めうほうれんげきやうおへしといつてる・喜之介ハこたつやぐらにひたいおおしつけ・おとまときれたものおめい・とハしらずして【うた】喜之さんしつかりおつかれと見へます子ヱ【喜之介】ちつと考へる事があつてかうやつているのサ。ひよつと二河屋の女がこめいもんでもねへ。きたら居ねへよふにしてくんな　ト中ぢきりのしやうじを立きる・舟頭忠ハ河岸あげをしまひあさめしをくつてる・しようじごしに【喜之介】忠こうおとまが今朝のあんべいしきれどふだらう【忠】アイサたいへル子【喜之介】かんげいて見るに。おとまかくらいよつてゝいつたばかりでもなし。なにぶんすまぬ心のうちにもしばしだ【うた】もめでもありましたのかへ【喜之介】イヤいつこうはなしにならす大ふ

印ノゥ忠こう【忠】アイッサおもいれふんぞつてやろうとおもひやした【うた】こんたあつき申てゝどふしたのだ【忠】二番目が出ねへじやあわからねへチェ喜之さん【喜之介】そふよいま〳〵しいナァ忠こう【うた】おじよせいもなくつてゝおめへさんなによを腹ァおたちなさりやしたァノ子もどふしたのだろう【喜之介】いけふさ〳〵しいあまッ。こんどあうのが命がけだ。いつそ二河屋の河岸をかへよふかノゥ忠こう　トしようじをあけ　なんと長掉一本ハァ、リといふ目にあつたじやァねへか【忠】アイサ大きにバア、リ　トいゝかゝつて飯がのどにつかへていつくも出ず。おりしもきかゝる二河屋の女おしか。顔見るより喜之介はしようじをばつたりとたんのひようし。忠はしやつくりぎつくりしながらまきらかさんと　おしかどんバァ、引【おしか】ヲヤ〳〵忠どんたんとたべな【忠】直シの茶漬じやァあるめへし　トしやれながら。しるをすうと又しやつくり。せんろつぼんをはき出し。はなからめしがとび出すゆへ【おしか】ヲヤ〳〵　とわらひながらこしたかけて　おかミさん此間は【うた】ヲャおしかどんよく出かけたの掛廻か【しか】ハイ西河岸までめいりますからちよつとおより申ます。モゥ喜之さんはおかいなはいましたか【うた】河岸から直に歸りなすつたよ。なぜ【しか】喜之さんのこつておより申ます。ついぞねへ今朝いつこ腹をたつておかへんなはいました。もちろん藤兵衛さんといふむづかしいお客のおちやいで。朝直となつておとまさんも酔きつてゐなはいましたから。チットまちがいもごさいましたのサ。どふぞお出なはるよふにおたのん申ます【うた】ゥ、イ、〳〵喜之さんのだゝつ子も久しいものだよ。お出

なはつたらそふもふそふはな【しか】どうぞおたのん申ますコレ忠どんつれ申てきてくんなよ【忠】あかすかべい【しか】ヲヤ忠どん鼻の下におまんまつぶがくつついてるよモおかしいよへヨヲ、ホヽヽヽハイさようならおかみさん　トいゝすて・出ゆきたるあとにてしようじたあけ　【うた】喜之さんおきゝなはいましたかへ【喜之介】ゲツプアツ　ア、引聞ていて氣がくさつたいつそのくされ酒でものもふ。忠こう魚太へいつてなんぞのめるものをもつてきさつし。いめいましい【忠】御酒でもあがらずバヽふるいせりふをいふでもチイ。いつてめいにやしよう　ト投銭丁の魚屋へゆく　【うた】喜之さんおまはんマアどふかしてお出なれるよふだよ【喜之介】なぜ〳〵【うた】お顔つきがいつものよふでございませんからサ【喜之介】そのわけといふハタァ新川の藤兵衛とおやゝつてゝいきはりづくの朝直だからヽツヽむつかしからふわさ。此節藤兵衛も店をかぶつてるひがみからヽ婆嫗のてんまを見るよふに。とかくぶつつかりたがる。おとまれせわになつた客の事なり。麁末にもならず。おんぼか総代なわたるよふに。氣をながく遊せやすなどゝ。おれをべちやかしておき。うつてかわつたあいそづかしサ。充満坪の娘はきするよふに。あくたもくたをまけ出して。起請にそへた髮の毛がもけいせといふから。こいつ藤兵衛がせくなとも見たが。イヤ〳〵おれがうぬぼれのこゝだ。悟れ〳〵起請も反古一枚髮の毛そへて紙屑籠へうつちやるよりわとやつてしまひ。色氣を

すてれバ誠のお客だ。耶摩口稲荷もしようらんあれ、此初午の仕舞にも見通をひつくるけいしにぎやかにあそぶかすきで。見へにも千両一分二朱。三分五厘ひけハとらぬと。一番成田屋をいふ氣になつたが。イヤ〱此節不印の身で。くやしんぼうとおもはれてハと。なんにもいわず人でハないわいと。五大力の源五兵衛きどりて。平氣でかゑつてきたのサ【うた】そりやァ大變でござりましたネイ。そふいふ事なら二河やの女におあいなはればよかつた【喜之介】あつてハ内のあたりもあるよふ。癪でもいつてハわるいからさ【うた】おとまさんもあやまつてよこすほどて。おみをよこしなさりそふなものだに【喜之介】そのみがチツトわかりかねる。きれてしまつて舟へ乗出しとりかへした起證を川へながそふとおもつたら。上包にあいつが手でこれ見な　トみす紙五六まいに紅筆でかいたみを出す【うた】なにかおもしろそふなおみだドレお見せなはいまし【喜之介】イヤそれから御ろうじろ【うた】アレサお見せなはいまし【喜之助】ナニ見すともの事サ。文何ハしれた大安賣。他少によらず御用向とかなんとか書てありさ　トちやかしながら火鉢へくべるとぱつともへたつかんきんなしまいかゝつて【八五郎】ドロ〱〱おとまさんが高尾で出よふといふ所だアハヽヽ【うた】ヤレおしい事をなすつた【喜之介】ナァニけがらはしい　トおもひきつた顔つき此みの文句ハ舟頭深話にあれハこゝに畧す【うた】おとまはんの意いきがどふもわからねへよ。女にもたしてよこしそふなおみが。きれてしまつたおまはんの手に

わたるといゝ。焼すてゝおしまいなどハどふもあやしいテイ【喜之介】あやしくもねへおちくろくもねへみさ。チットからんだ事があつてつき出したが。七軒堀迄來てくれろ。筋道をたとる事があると。かいてあつたのサ【うた】それでハ大きに譯がありまさあ。七軒堀ハおとまさんの親元。七軒堀がかんどこの文句でございますハ【喜之介】さてハそふかといふ。ふるてや八郎兵衛じやアあるめいし【うた】ヲヤ書置じやアあるまいし【喜之介】無事息才ぶゐんの書置さ。八五郎さま御うもし倉へもよしなに御申わけ下されかしとか書てあつたつけ【うた】それでハアノ子がわたくしらにも。頼なはるといふもの。なんにしろ七軒堀へお出なはいまさざあ。わかりますまい。おもしろくなつてめいりました（チイといふ所へ舟頭忠魚太のおかもちをもつてくる・おうたハどうこ火はちへしんちうのちろりをつけ・なべ鳥をかけ・手しほちよくれんけなとみごとにならべて）【うた】お一ツあがつて御思案どころサ【喜之介】猿丸太夫奥山にといふ身だ。トかんげいて見てもいゝ知恵も出ねへ。忠こう一ツのんでわけてくだつし【忠】ナアニ四の五も入りやせん。あやまつてよこしたから。のつこんでいきなり見通へまつすぐ。イヤ二河やの廊下ハ。まがつておりやしたつけへ、、、、【うた】それじやアおとまはんの顔をふミつけにお出なはるよふぎわりいから。先七軒堀へおもひぎしサ【喜之介】うんのろにゆかれもしめへ。うつちやつてしまをふか【うた】ハテかわいそふに。おとまさんもないしようを通すにやア。なにかふか

いおはなしゑいがありましよう。おまはんも又。足かけ三年のおなじみじやァございませんか。短氣にうつちやつてしまうハおしいじやァございませんか【喜之介】ナァニ袂にいれた葬禮の強飯を。おつことしたともおもわねへのさ【八五郎】なるほどうつちやりやすいものだか。お待なせい今朝のおこりハ新川の藤兵衛（此藤兵衛へハ既已前書よりのなじみにておとまが一客なり）さんとやらだろう。しかし酒店の番頭楽で大ふうをきめても。お店を出ちやァ天とうぼしの河童棚からおちたほうろくサ。なぜほうろくなら。ぼた餅でも燒はかりで。せつこんでも手ハ出やせん。よしんバ年季をぬき。見世でも出そふが。アノ子の氣でそろばんぱち〳〵まじめになつてどふして守つていやしよう。鳶長がはじめからの色容で。達引とか。いさみとか。はだゑいとか。氣ぐれいとか。いふ所でございやしようが。まかりちがつたら。地めいをかせいですごすとか。もしもなげい年季のうち。どふ風がかわつてゝあをりをくふめいもんでもなしと。小股にきり出しているかもしれやせん。照降町しやァございやせんが。顔をふんだりさしやつたり。下駄傘の商賣づく。てりふりなしにしておくが。どうらくものさ。チヨツト湯へいつてめいりやす（トいゝすて。やわた屋の湯へ出てゆく。此ていしゆいつこくなようなれど。心へとふりものにて。奥におもしろきしゆこうあれバわざとはづせしなり）【忠】ヲツトおかわり目か。お銚子さまにハ先とこれへハどふでありますす【喜之介】おきやァがれあんまり地口がわるいから（ト南一花たやる）【うた】しみになつてゝハ

飲ませんチイ。ちつとうきやしよう　トさすがざしきをしていたそれしやのはてと　て・はしらにかけてあるしやみせんをとりて　チヤン　ヘおもふ事かなはねばこそうき世とはよくあきらめたむりな事　チヽリチヤン【喜之介】ありがてい／＼【うた】ちつとおうたいなはいましへ　トばちでかたを　つくぬからず【喜之介】ヘかミやほとけがうそつくならはほれたしようこをどうかこかいな　トうたいながらさ　かづきをとる【うた】チヤ　チヤン　としやミせんをひざにお　いてしやくをしながら　古風なよふでも起請はよつぽど意いきのいゝ文句さチイ　といゝつゝ又しや　みせんをとりて　ヘむりないゝわけするすミのばからしいほどいとしうてならぬ〇ホンニ此唄いとふり。おとまはん。おまはんへ起請の云譯がしたからふと思て。いつそかわいさうでありますす【喜之介】ナアニあのべらぼうめが【うた】むごい事ヲおつしやるよ。だまされると思て。今から七軒堀へいつてごうじや。起請の譯が分りましよう。ハテ一旦ハ藤兵衛さんの顔を立ずにもおかれず心にもねへあいそづかしを申やしたが。此上ハといふお符はんの意いきがおもしろいとこじやァありませんか【喜之介】いわれを聞ばありがてへが。連出されたとこへゆくと云をうんのつらしい【うた】ハテないしよを通したみがあればおまはんのひけにはならず。譯を聞たうへ濟すましはお胸に有ます【喜之介】じよせいのねへおめへの云につたから。行でも見よふが他所行はなるめい【うた】ハテおまはんにも似合ねへ。藤兵衛さんに用事をあづけて。寺參とかなんとかさんだんが有ましようハサ【喜之介】どふせ

ごまなからだなり。あばれ丹前で乗出そふか。忠こう鷹橋まで船をこしへさつせい【忠】又百足屋としやれやしようか トろうすべりをかつぎ出す・喜之介へおびしめなおしはねりたきる【うた】ヲヤお襟がかゑりません【喜之介】ヲーツ トきついせきこみよふサ【うた】ちつと性をつけてあげ申そふ トどふせなかを一ツくらわせてはなりのゑりをなをす【劇場の音】ドロン〳〵ドコ〳〵〳〵〳〵ヒヤイトロ〳〵〳〵

七軒堀親里の套

【女こじきどもおゝぜい】おやんなさいやしな。おやんなさいやし。御繁昌のお家さまおよめごさまの御初産でヱござりやすわな。お祝でィござりやす。こんな時でなくちやァおもらいにやァまいりやせん。とらせてやつてくださりやしな。おくんなさいやし〳〵〳〵〳〵〳〵 ト門口にしやべつている見世のものへきゝみゝつふしている ゆへしやみせんなら・一本はりあげてうしたくるわせて・きざをいゝ出す 大ぜいじやァござりやせん。此人數へくだされて。たつた千両か二千両。一萬両とも入りますまい。けつこうなお藏づくり。鼠穴でもありそふだ。大御しんぞさま。御いんきよさまおそろいなすつて御はんじようお心よしの胸氣もの。御嫁子さまがおいとしい。お質屋様かしらないが。流しておしまいなすつたら。七夜の祝義も出さねへで。ろくなこつちやァござりやせん。初てのお孫さまでござりやす。疱瘡をおしまいなさるまぢやァまい

りやせん。若旦那様ァおほふうに。女郎買ばつかりなさりやすから。若御しんぞ様ァ御心らうハおさせまり。店ざらしの番頭様。お囲ものにハお情ぶかし。お若るしゆも抜がけに遊にお出なさる事もしつておりやす。一時ほどしやべらして。まじめなつらでけつかるが。お氣のどくたからもらいやすめへ。いま／＼しいふけイきなベチヤクチヤクチヤベチヤ ガヤ／＼／＼／＼／＼／＼

△見せのものハもてあましてゐる所に。小ぞうしきりの札がとんでゐるを見つけ出して見せるゆへ。みなあやまつてチヤホヤと立さる。おとハけならひとなる喜之介ハねまじもこゝにきかされてカヤ／＼いふがみゝにとまり ○につくい口をきゝおるが。又よく聞ば尤だ。こゝの息子もおれがやうに、女郎買が好ゆへ。あいらが耳にも入り人非人にさへさけすまれるやうになつてハ。世間の人の思ハくハどうだらう。勘當されたおれが身もおなじと。親の異見もうハの空。こんなにあそびあるいてハ。番頭はじめ氣をわるくし。ミせの者もうハきになるやうでハ。あいらが云た通り。身上の勞瘵したじ。おれが心一ツから。女房子を泣せるも。不孝の罰。非人にもおとつたか ト心づきへつきながら。おもひきられぬ悪縁にて。おとまが内にたづねあたる。見せハがらくたのならべた見たふし店にて。おふくろハほろやむするとき見へおやぢハふるくぎをきたつてゐる喜之介ハふたおやに近づきになりいろ／＼はなしありて【喜之】おとまがみにこゝまでたづねてくれろといふにハ譯もあらふしと。お近付ながらめいりやした【おやぢ】御しんせつな旦那だ【おふくろ】おけすけにわたいがおはなし申シやしよう。おとまが病氣でひつこんでゐる時見舞にめいりましたら。泣事ばつかり申ました。板頭になつて人めいハいゝやうなもの。部屋のつき

あひハはるしくるしくつてならねいから。いつそ死んでしまひたいとて。かわいそうに泣ましたよ（トなきだぐと）とりとめたお客ハなし。お名馴といふはおめいさんと、藤兵衛さんと。長さんといふ三人はかりだと申ました。藤兵衛さんに年季を抜て。かこハれる所でございやしたが。ついお店をしくじつてから。おめへさんをやかましくせきなさるが。新子のときからせわになつた義理もあれば。どういふはりふいにか。おめへさんへあいそつかしをすめいものでもねへと、氣をもきつておりますよ【喜之介】（ハむねにきつくりあたりしが。起請をほぐにしたとハおしかくしへい気なかほにて）なるほど藤兵衛ハわつちより前の名馴だから。義理と下帯ハはづされねへといふ場もありやしようサ【おふくろ】お目にかゝつてお咄申ていハそこでございます。憚りながらおめへさんも。此春からお内のめへがおわるいそふなり。その所へもちこんで。切れるのつき出すのといふとハもつていねへ。勤をするほど義理といもじハはづされんといひました。喜之さんが内へはいりなすつたら。そこでこそきれいにきれるともいたしやしようす。藤兵衛さんの方ハつゝておきやすが。長さんとハ女房やくそくもして。藤兵衛さんにうたぐられ。ほりものは消ハけしたが。情をたつてあひやすから。三人おち合なすつた時。いきはりづくで。けんくハにでもなつてハ。板頭もしてるながらお客の見わけもしらねへかと。帳場の前へもすます。部屋の笑ひぐさになるがくやしいと。

アノ氣だからやきもきしておりますサア。その中でも。もしやのすゑにも。たのしミにおもふハおめへさん。尋ねてお出なさるともあらうから。お近付になつておけといひました。それにハてめへの日にハいひにくいともあり。商賣人のやうにもねへ。やつぺしまだ娘子どもでござりますよヲホヽヽ【吉】わつちも三年ごしのなじミなれバ。了簡なくてもはこびやせん　トあとハたばこのけむりにまぎらし勘當の身なれバのいきつゝ手もちいひ煙る【おやぢ】モシ旦那おめへハアノ見世にある古葛籠を買にござつたといふものだに【おふくろ】とつぎさんおめへひつこんでゐな。モシ聟でございますからひやうげた事はつかり申ます【おやぢ】旦那何か下直にたとへるやうだが。ハテ今明めへの古葛籠でも。ひつちようにハ。れんじやくといふ親御のえんがきれちやア。とんだやくなしになるものサ。　トふるかねの中にある五とくをとり出し　モシ此五徳ハ一本足がかけておりやすが。たとへていハヾ藤兵衛さんと長さんの二本の足をひかしておめへおひとりでも。たゝもしやしようが。丸つぶしにもなりやすめい。三ッ鉄輪だうつくしく、おとまが顔も立やうに旦那おたのミ申やす【おふくろ】おとまハひとり娘でござりますが。此おやぢがどうらくで。他人の金にさせるよりハと。うちうつてしまひましたが。今じやアかハのふござります【おやぢ】なんだ娘をうつたべらぼうめ。親をうらふとつて買人があるものか。キミ…そくさもんのがらくた道具屋だから。しろうと衆ハ見たをしやといひなさいやすが。

人のしんしようを見たをすでハございやせん。見たをされるやうにもちつくづした物だから。先へつついの尻がくさつて。ながしのほうへゐざり出し。腰張までひつぺがしてあるから。紙屑籠ハ腹ァくだし。はつかけ庖丁。足のきかねへ爼板。でくのぼうの手桶。目くらのわさびおろしや。鼻ッかけの阿彌陀さま。べちやァねへかたあものを買こむやうなもの。先祖代々のつたハりものだとあるとゆへいゝ物かと思へべ。くすぼりきつたくり位牌。〆ていくらがものもなければど。代呂物にしてふんで見るハ。商賣冥利。おとまがやうながらくたでも。おめへさん方に堀出されりやァ。お道具にもなりやしようが トはいふきかつちりかんくひがとぶ ホイめけたらとけべいかとこへかいつた【喜之介】なる程おめへのいふ通り。見たをされると思ふがわるい。商賣屋といふに心かつけべ。かひかぶりもあるめいが。ほしいとおもつた道具なら。直をつけて見る氣だが手附をうつた藤兵衛が。丸くいけべいゝが【おふくろ】藤兵衛さんともお近づきになりやしたから。まるくおさまるとならべ。五徳のやうになりやしようハ【喜之介】しかし長がとこゝがどうだらうか【長五郎】長たあおれがとかとなただだたれだ ト二かいからおりて來る顔を見て。思ひかけなく喜之介へどうしてこゝにときかれもせず。あきれかえつてとはもなし【長五郎】長とよびなすつたァおめいかへ三河屋の廊下や小便所で見申たおかほだ。喜之さんといふハおめへだ子 トとぼけていふゆえ【喜之介】アイわつちさ トいつたばかりたふうにたはこをのんでゐる さやうならチット きせるを

下におゐて聞てくんなせいし。チツトおたのミがございやす。おとまが事サ。三年このかた名馴こんで。友達や子分にものゝく思ハれる程だから。ぜつひ女房にしねへじやァ。組合へも立やせんから。おめへさんさのミおしくもねいとなら。きれいにおとまをわつちにおくんなせいし【喜之介】跡からあがつたわたしなら。おとなしく名代をとるか廻しになりとしやしようれ【長五郎】見通でもらひかけやァしめいし。革羽織の紐を見るやうに。よぢくれた挨拶をしなさらずと　いやならいやでようごぜへすれ。吾妻ッ子のやうにもねへ。わつちもてうがゝへをしてゐやすから。なんかんおにぶをいふでもごぜいせんが。おめへの出やうがおもしろくねへ。鷹橋へ引かけた車力じやァねへが。よこつたをしにのつかけるのだ。金比羅さまが羽團扇づかひをするやうに。高慢ハよしにしや。癪だよ。石尊さまの大太刀ですつぱりはらつた良だらうが。二河屋の帳場じやァ。糞のどく云ていらァ。屋郎ハちつと下卑てるが。おめへが藝者を一組よびやァ。こつちやァ二組三組もミこみに口をかけ。坐敷をする女どもや。かしバ箱廻シいきわたりよくしておきやァ。大纏いばれんよりやァ。ふりまハすも手がるいよ。極樂の東門の建めへ。龍宮の火の見やぐらの足代をかけたのと。見へをならべる。さんしたな屋郎たァちがうによ。しんなはなしふいをするのだ。モウこれからァおとまがからだれ。箱入のびんずる尊者でハねい

が。しまつておき手もつけさせるこつちやァねへ。腕づくでもなくみゝづくでもなく縁づくだ。いさくさなしに二親ならべ。のし水引でもらふのだ。とつさんおふくろマァそうおもつてくんねいし（おやぢおふくろハ顔をそむけてたまつてるゆえ。喜之介ハがてんゆかず。さてハ長とおとまぬくるになつて。あちな手をかきまハすな。めつたな事ハいハれぬとかんがへてゐる）【長五郎】此臺所唐人めたばこばかりくらつて挨拶もしねへ。口がきけざあ松茸か赤貝でも出しやァがれ。いゝ子のふりハよしにしやどんたくれめ。いめいましいハエイ（トたばこぼんをとつて落間へほふり出すけんかしかけと見てとつて）【喜之介】高があそびのうりものかひもの。断なしに御勝手さ（トきせるをしまつてそこ〳〵にはづしかゝる）【長五郎】喜之さんちつとおまちなせいし。お届ものがありやす（トやハらかに聲かけられたちとまつて何たと見れハおとまが起請にそへたるふみけえおしひらひて見る）

また〳〵一寸しめしまゐらせ候御まゐる御かへらせのあとへ長さま御出にてとくしんずくにてうつくしくきれ候まゝくわしきわけは長さまより御聞下されかしけさ程藤兵衛さまニせかれてつき出し申候やうなるとにてさぞかし御はらたちもあらんなれと御まゐるの男をつぶして男をたてさせ申致しかた御目にかけたく藤兵衛さまを山迄つれ出し参り居候まゝ長さまの御事を少しも御うたかひなく山本まで早ゝ御出まちあけまゐらせ候めで度かしく

【喜之介】（よみもおハらずにつこりとなり）此ふみの文句でハ長さんおめへは【長五郎】さつはりとおもひきりやしたのサ。斯斗りでハわかりやすめい。わつちも金比羅さまへ大願があつて。一生好の女郎買を

たちやした。しかしこれまではりやつて。藤兵衛引こぬかれちやァ。あいつにけされたおとまが腕い。長といふ名がすたりやす。此意趣がへしに藤兵衛がつらをふんで。おとまがつき出すはなし込いもして來て。おめへのお出をまちうけて居やした。けんのミでぶつつかつたれおめへのお氣をす引て見たいサ。情のあんなさるを見こんでおとまがおせわをおたのんまうしてい。おりよぐわいを申やしたハ御めんなさいやし〳〵 トかたの手ぬくひを取てひざつこくすぼめる 【喜之介】長さんなんにも申やせん誠に新手さ トつむりをさげる 【おふくろ】ヤレ〳〵どふかとあんじやしたにサア〳〵お煮花【おやぢ】とぼけきつた御いけんも娘かかハいさ トそはにある五とくをひつくりかえし 此通りまる おたのミ申ます【長五郎】ときにキシ藤兵衛をつれ出して。おとまが胸ハはなやかに。つき出す所は山の耶摩もと。座敷をへだつて見物しやしようじやァねへか【喜之介】前篇につき出されたその後篇の意趣ばらし【長五郎】藤兵衛に見せつける。諸事狂言の山本で【喜之介】のミのすくねとしやれやしようか【長五郎】サァめいりやしよう

【靈願の鐘】ボヲン

雀ケ岡耶摩本の套

【拳】ヾイパマリヤンでへリンぞゑがノ＼いたこへなりたやさんのおかいちやうならはやりやんすでござりやすサアササ、サ、く ちよいときなせヤレこれコレハイどつこい【藤兵衛】ひつくりけいるほどさわげ〳〵【男藝者四人】ソラさわげとのおゆるしだ。女藝者どもの尻をまくらせて。惣おどりとやらかそう【おとま】血みちが上らあよしねへな【梅吉】ソラさわぐなとサ【兼吉】だまつてゝしやれるがいゝ【松藏】女藝者どまァさわがねへとよとうしやう【時太夫】藤さんはさわげといはつしやる。おとまさんはさわぐなとか。こいざァむづかしいはへ【三木藏】そうさ兵衛いゝ智恵はねへか【彦兵衛】チヨツトうちへいつてかゝあに聞てこようか【二河やのお八重】いさくさなしに酒としねへな【船頭熊】ヤツトいゝちゑが出たの【皆〻】アハヽヽ【松藏】尻をまくらねへかはり。梅吉と兼吉にくすぐり飲つめりのミをさせやう【三木藏】梅吉でも兼吉でもより取みゝかきが四文〳〵【八重】おてうしがないよチヨン〳〵【女】およびなはいましたかへ（トいふかしそうに来る　こうしを出しながら）【八重】そして大どんぶりへ水ゥといふ所だ【女】ハイ〳〵只今あげますトゆく【時太夫】あげますの介六はどうだ【三】づぶなまでいふの。なまなかまゝへ物思ふ。イヤこいつもなまにへだ【彦】なまにへといふもなァよく酒をのむじやァねへか【松】なによヲいはつしやるしかし地口のにゑッこじれたあ。藝者の身にとつちやァ。寐でもねつかれ

ません【藤兵衛】おりしもとなりざしきへきやくがはいる藤兵衛がきゝみゝ【喜之介】にてかこゑ泉水築山を見たところハ見通しよりの
めやすぜ【長五郎】にてかこゑおざしきハせめいが二人一坐で廻シをとつたとおもやァいゝじやァね
へかチィ【おとま】ハふたりがこゑを聞つけてつつと立た【藤兵衛】どこへゆくのだ【おとま】おてうづにさト云んがわへ立て行あと
ハ口としやわるなかに【藤兵衛】ハ喜之介へあてゝつけんとものありそふにみんなハなんとおもふかしらねへが。色男氣どりて遊ぶや
つハ。おらあきつひきらひだ云ふなら蝓といふものだ【三】ナゼ蝓でござります【藤兵衛】
ハテ色ぎさへなまつちろけりやァいゝかと思つて。手も足もねへくせにひかりたがらァ、花を出す
所も目鼻があかねへ。むめんもくな所がなんと蝓だらう【松】いかさま子そんなお客ハ塩花を
ふつてとけさせてやりやしよう【藤兵衛】その又蝓をのミたがる蛙のやうな客があるやつよ
【時】ハテ子【藤兵衛】長五郎にあてつけて蟇といふやざあちうっぱらで飛出したがるが。錢がねいから
しやあ〳〵まじ〳〵グゥのねも出ねへやつさ。やにでもなめさせて遣てい。けいるのやうな客
もあるじやあねへか【彦】けいるのやうなお客にハ仕合とまだ出た事はござりません【藤兵衛】
なまころしの蛇といふ子もあるものよ。爲になる客にハかまハず。ぬらりくらりと穴ばいりを
したがるかいるは。蛇にのまれてゐるたァしらず。蛇もわれしらず蝓にとけてしまう。ゐら
いべらぼうハ、おれもよつぽと御くろうしようだ【八重】おとまはんマァなんだへ誰へひをつ

かひますへ【兼】赤がいるなら付燒にしてかんどこでもふつきらせやせう【梅】其なかでもな
めくじりハ色男だチィわつちやあまるのミにしてへよ【彦】イヤむまくいふぜ【皆〻】フハヽ
ヲホヽヽアハヽヽハヽヽヽ　トおかしくめねへ事を大わらひにするところへおとまへつきそでにつまをもちすこしこゞミすかたにてきたりぶにんさうに藤兵衞がそばへすわる【藤兵衞】なげいてう
すだよく〳〵とけなんだの【おとま】さわり用事になつたからサ【藤兵衞】久しいものよ虫がかぶ
るなら一ッへいのミや【おとま】わつちやァけふから酒だちさ【藤兵衞】のミやァがれ　トさかづきおとなげ付るとおとまかむらさきちりめんのひざへざつぶりかゝる【おとま】ヲヤきついしやれさ【藤兵衞】でいぶ平氣孫左衞門だの。そ
のはづよとぼけてるざァなるめへ。ゆふべおれにいちめころされ。ぜひなく喜印をつき出して。
おれにむまく見せかけるその欲ばつたつらァ見ろ。もとでもねへ智恵をふるッて。わいらが相
場をくるハせても。買こむやうな藤兵衞じやあねへ。鬚の一が出すぎりやァ廻シがあるハへチ
ヨットよび出しやァどの客だとさとつてるながら大目に見るのだ。長印なども切るといつたが。
突出す事ハこわからうが。はたらきのねへ根性骨で。板頭もすさまじいハへトサふう〳〵をい
ふのでハねへ。利害をいつてきかせるのだ。垢のへいつた腐緣。ちよきめにたりめにたやまめ
トサこむづかしくひねるでもねへ喜印も長印もいりやせん藤兵衞さんおせわをお願申ますとほ
んとにいやァすましてやるハさ【おとま】へぬきゑもんのじゆばんのゑりをそめながらすましてきいてゐたるがすひものゝわんをとつて【おとま】ついでくんチイ

【八重】ヲヤそれでかへ【おとま】いゝわなぐつとつぎねへ　トーツへいうけてむいきにくつとのミほし　藤兵衛さんあげやしやう【藤兵衛】なんだあやまるのか【おとま】あやまらねへ盃サ。ちつとあたらしからうぜ。ハヽヽ一旦おめへの顔をたつて。喜之さんをつき出したらいゝじやァねいかへ。それにしちこぜいをいひなはるわ。店衆のあくがぬけねへのだ。おじよせいもねへと申ていだ。おめへもよつほどなげい氣だ。わたいがやうな情のねへ。いつこくものになじんだおめへが御ごさうぜ。おめへハ大ふうにあぶらげを喰ふ子もごせいしようかわたやァあきれけいつておきやはだよ。こつたかいきがりやす。盃はさしすてドレ座敷をかへてのミなをそう　トいひすてにたちあがらうたゞ・藤兵衛おとまをだきびたつていゝ八をたゞし・たのうでをまくりあげ・ほりものゝはしなけ・ちゃかだなのすゞり引とみ・人命とかいて　【藤兵衛】藤兵衛ハきれてやる勝手なとこへうしやァかれ　トおとまをひつたて・となりのからかミをさつとあけておしこむゆえ・喜之介長五郎の分りかねてためらへば　【藤兵衛】しきるごしにすわり　喜之さん長さん。二河やで落合ましても。おぢなものでものをも申ませなんだが。あらためてお近づきになりまやす。チシ喜之さん。ゆふべおとまが氣をひきにきやしたが。よもやおめいを突出しハしめへと思ひやしたいに。いゝきつた事をしやした。しくじつてゐ藤兵衛を。たつた所ハかたじけねいが。わけのある喜之さんが藤兵衛にかへて突出にハ此仕返シがあらうかと。わるずいりやうから聞てお出なすつたいう。今おとまがきれた譯ハ私も親方へ歸参がかなひました。夫としつてりつは

に藤兵衛を突出シたれ。さすがにおとま。喜之さんの起請。長さんハはりものまで。むね氣をして。けさせやしたれ店ものゝやぼと御めんなさいやし。手代敵の藤兵衛が。實にかへるも勸善懲惡。貸本で見やしたが。しやれ本の様なホンノ遊びてござります【喜之】さすが御支配人ほどあつて。きればなれのいゝおさばきやく〳〵。大きに承知いたしやした【長五郎】出入いさくさなしにすんだうへハ。けしてしまつたおとまが腕の。二人命の一点ハ トチぬぐひにこふきけし ひとり命ハのつひきならぬそのうでづくにあるこつた トおとまが手をとつて喜之介がひざへつきたおす 【喜之介】どうらくもモウ是切。なにかのお禮ハ二河やで。お八重さきへいつて指和屋の板を買きつておきや【男けいしや口と】ヤンヤ〳〵一ッしめましやうシヤン〳〵【梅奚】わざつと トしらぎをひく ヘ岩にあそぶやよろづ代の龜ハこなかみきよむなる鶴の羽がさね千秋のえだをならさぬみよなれやばんぜいらくとぞ舞おさむッ、ンッンチャン

【附言】是より二河やになりことミ三人一坐のめづらしきしゆこう三人わりどこのまへしに三人の情をかきわけるしん手の事おとま年季を入て辰巳やぶのうちに喜之介をかこふ事おとまが貞れつにかんじて喜之介勘當をゆるされかいろうをちきる事追而出板仕候題号左の通り四編目奉入御覧候

拾遺 桟橋雑記 近刻

右ハ新渡本の板橋雑記にならひ桟橋雑記と号しおとまがいきはり明の白門娘に似たる一部始終をあらはす

船頭部屋 大尾

後序

床しき君に大磯の。とらがいしばの魂膽れ。こなさんばしの貸本に。河岸番にあらねども。ほとんどこの書にとゞめたり。抑趣向の乘込處。作者も二個舟頭部屋。吝のとりかぢおもかぢに。浮を水棹の一本とや云ん。あたかも毫の腕ずくに。櫓ぐひの早尾はしり書。この本のともに猪牙と云爾

氣散人屋根船の
裡において毫を採

吉原帽子

吉原帽子自序

近頃芳原帽子といふものあり。其製たるや。眞綿で頸の締縊。能。人の異見を聽者ハ。譬謬るとも不亡といふ事にや。そも斯を頭巾といはず。帽子といふハ奈何。夫かまど頭巾は編囤。報轤頭巾ハ壊そふ。叺頭巾ハ頬被。誰乎行燈の目斗頭巾。地色が昧す眼盗頭巾。費ベ親が究頭巾金の山岡頭巾でも。貧の偷に戀の哥。袖形頭巾の娼妓なく。嫖客に宗十郎頭巾なし。投頭巾ハ浪華の。俠客らしく覺ゆれば。一番捻て。芳原帽子とハ名づけたり。されば

吉原帽子　二

べ倡門に入る者。此帽子を被て。能寒氣を防ば亦。親の
勘氣を不受哉

煙花浪子識

小女郎之傳

小女郎美色出羣身雖曲中者流然非如夏姫也狎客玉新之及磊落佐之情益洽也亦遇豪賓出新雖勉同枕席不與之合也出新憐其賢節從良而與玉新卒歸玉家嗚呼可謂妓中貞女豈淫撿俗妓所可比綴乎

玉屋新兵衛
三國樓小女郎

中の丁

花ハ
推月ヲ
主盟ヲ
出村新兵衛

寄曾我狂言目錄

第一齣　出村玉屋ハ一家中曾我兄弟がハテ珍しき初會の對面
第二齣　虎少將ハ倡妓の貞女ヲヤ馬鹿しい小女郎が俠
第三齣　小女良が從身ハ五月下旬コリヤ難有大門の切手

從是二番日後編始

吉原帽子

○第一齣

出村玉屋は一家中會我兄弟ならぬハテ珍しき初會の對面

大盡舞に曰。清少納言がよませたる春曙とはおもしろや。とは實此曲中の事ぞかし。二日は客のきそ始。しつけ苧残る妓女の。後着の褄いよ〳〵篤く。燕亭の松飾は裾の張ぬを門並とし。倡家の門松は向前の飾と突合て。いはゞ抱ついて立る姿あり。是も色氣を含るならん。鄽はつらりと青簾垂て。綬簾を懸そめ。向側に大黒舞の狂言あれバ。此方の二階には羣妓ミな〳〵欞子より見物す。各初衣衫の綺羅を貢り、盛粧艶服光彩人心を動し。魂色陣に迷ひ。氣雄風を盡ざるはなし。洵此平康の盛事なるをや。

さて此三國屋の表座しきのおいらん小女郎が。けふしまいの大じん茶屋へ出村やの新兵衞といふきやくじんなり。一分はづんで大黒舞を見せけるうちに又小女郎が色客の新兵衛へ。なじみの茶屋玉屋にかけたゝまり。此三國やのにかいとまり。今へはかなき身となり。けんぶつくんじゆの中に立まぎれて。にかいを見あげ。小女良へ見おろし。たがひににらみあいて。上と下できをもむ〳〵大黒舞へそがきやうげんにてたいめん〳〵二重たいこ入の｜ヤみせん

〽トツテツテンツントンチンチ、リンリンチ、チンリンリン【たいこ】ド

ジドン【かぢはら】まて〳〵。つんでたやつらを見れバ。曾我兄弟のびんぼうがミだだ。春がきてもまだ中の丁のてりごまめハくらうめへ。なんだかそが〳〵したなりで。みじめなざまでござらあ。ミなわらわつせへ【ミな〳〵】ワハヽヽ【あさいな】だまりやあがれげち〳〵めら。なんと介經もし。兄弟のものにあつて。やつちやあくんさるめへか【くどう】そがとくどうハ一家中。さてハ河津がわすれがたミ。ちかづきになつてくれうが。見れバ何とやらんむねんのそうごう。当時かまくらどのゝお覺へめでたきすけつねハ。大だいじんだ。見るかげもねへそがとのばら。びんぼうにんのやせうでで。なに左衛門にはがたつものか。ばかなつらだ。

此時にかいの大じん新兵衛・こうまん【五郎】おもへバくやしい介經殿　トとびかゝり立まわりあり・玉屋の新兵衛も・くに高〳〵とせきはらひヱヘン〳〵やしくにかひたにらミつけると・小女郎はながミたまるめて打付る・てうど新兵衛が顏にあたる【あさいな】コリヤおつこてへろ〳〵【くどう】今ハうたれぬ時節をまて。五月下旬の狩場のやくめすむまでハ。此左衛門に手むかひなすと。そちたちばかりか。母まんこうにまでなんぎかかゝるが。そこの所へきがつかぬか。おやハなけれど子ハそだつと。せいじんなして祐成時宗【兩人】祐經殿【すけつね】ハテめづらしき【三人】たいめんじやよなァ　ト見へよくならんできつとなり・是にてきやうげんはねる・かくて床臺をかつぎ出せハ・けんぶつミなばら〳〵とちろにぞ・時宗のごとくにらみつめてゐたる玉やの新兵衛も・手たむなしくゆかんとするに・二かいにおゝきなこゑをして【小女良】モシヘ新さんへ。まつてお出なんしへヱヽ　トいゝすてれんじのせうじを立きつてひつこむ【玉新】まつてゐろとハおれ

へいふのか。アノ客人も新兵衛といふそふだか。なんにしろきのもめる。こじつてい正月だ
トひとりごとをいゝながらほく〳〵と立さる　へ、　にかいハ又なとしやれどん〳〵とにぎやかにて。とゞ床おさまる　【小女良】いつそ大黒舞がおもしろふおした
【出新】まへのよふに他所行がなるなら春狂言を見せに。みんなをつれていかうもの【女げい
しや】おともがしたうおざいますね【ふりしん】モシ十良とやられいろ男でありましたねへ
【ばんしん】おめへほれなんしたかばからしい【たこ八】イヤアとんだ事〳〵トテチントテチ
リ〳〵　トうわつてみておどる　【ふりしん】すかねへ鮹八づらだよふ【ばんしん】わつちやァ梶原がいつそき
にすきんした【やみ子】イヤアこいつもとんだちやじんトテチリ〳〵　ト手ばかりおどる　【ばんしん】
アイサわつちやァお心よしのむねきものだからね【たこ八】時にぞうひようどもいつたんひき
とりましよう【茶やにうぼ】おむかいハ何時にさしあげましよふ【出新】つるしのつかねへま
へにかへ　やしよう　トいふゆへこなた〳〵いとまごいしてぞや〳〵とかへる　【ばんしん】ヲヤまだ新さんの羽織が出ていゝす
よ。小夜衣さんよくしまつておきなんしにへ　トいゝすて立てゆくふりしんもはたりをたゝんでたんすへしまい立てゆく　【出新】なるほどば
んしんが顔もかおはらといふものだ【小】アイサかをばかりでおつせん。こゝがむづかしうお
ざんすから。わたくしやァたいてへ心づかいをいたしいす【出新】どこの番頭もむづかしいも
のだねへ。しかし心よくしてゐたらおいらんがすきな事をするだろう【小】なぜでおす。いろで

もしいすかへ【出新】いろをするもはたらきといふものだが。あんまりすぎるとしよくたいするよ【小】モシイわつちやァしよくたいするほど。いろをして見たうすが。わつちがよふな者。にれだれもあいてがおざんせん【出新】ツノあいてれこゝにしうちしてゐるによ【小】おまへさんのむねにかへ【出新】いんにやぬしのむねにきいて見な【小】アイサきいて見いしよう トすこしさしうつむき。にことわらつて。たばこをすいつけて出しながら アイサもしい。わつちがむねにきいて見いしたら。どふもおまへさんのきがしれいせんからよくきゝ申せといゝす【出新】きく事があるならなんでもきゝなせへ【小】そんならおきゝもふしいせう。おまへさん。アノどふいふきでわつちがよふなものゝ所へお出なんすへ【出新】くるからにしてれどふいふきでといふにもおよばぬ。べたにほれたのさ【小】ほんにかへ。うそにもマァそふいつておくんなんすれ。しんにうれしうおざんすが。どふもわたくしやあなんだかきがすみいせん【出新】なんのこつた。なにがすまねへの【小】すまぬといふれ。おまへさんのお心にもおざりいしよう。去年の市のばん初にお出なんして。わたくしがよふなものを。初會馴染になつておくんなんして。廿日から見世がひけてからも。繁〻おかよひなんして。何やかやせつないわけをもおきゝなんして。こゝろよく後着の相談から。松の内の仕舞迄。花やかに正月をいたしいすも。みんなおまへさんひとりのお

世話になり申います。ホンニもつたいないよふで。しミしんじつうれしいにつけ。よくおもつてみいすりやァ。どふもおまへさんのお心いきが。さつぱりとわたくしにやァわかりいせんで。いつそくろうになりいす。なぜとおつせいし久しくせわにしてくれなんした客人さへも暮からきてハおくんなんせん申に。まだおなじミもうすいわたくしを。しんせつにせわにしておくんなんすほどで。アノうちとけておくんなん所がおざりいすからさ。それがどふもきにかゝりいすから。おきゝ申いすのでおざんす【出新】ハテ初がなければ三年のなしミがねへ。こふしてくるからハせわハしうち。それを他人がましくいつてくれるハうらミだ【小】それがやつぱりおはぐらかしなんすのでおざんすよ。なんぼいたらぬ女良だとて。袖留たちうどかなんぞのよふに。なぶつておくんなんすなへ。わたくしやァいつそくやしいよ　トちよつとなく【出新】なにがくやしいこつたの【小】あんまりおぢらしなんすかっさ【出新】おぢらすとハなんのこつたろう【小】しれんせんかへ。わたくしがこれほどきをもんでおりいすものを。ちつとハかわいそうだとおもつてなんして。きをおちつかせておくんなんしにへ【出新】なぜきがおちつかねへの。なぜだろふ【小】なぜでもさ【出新】そんならやつぱりなせでもさ【小】ヱ、イモにくらしいおれハいつていよ　トそのまゝなまくらの下からさしこんでくるとまりよろを【出新】なぜといふハ此事か。おれもなぜのわけハこうだ

トかゝへてとつてのける【小】なぜへ【出新】きがしれぬから【小】何ざんすとへ【出新】てめへはらんでゐよふがな【小】エ、イ トひつくりおきかへり・顔色かわりきやうざめる・おりしもだやらぶのそとから【茶や男】ハイ旦那おむかひにあがりました【出新】出村屋かサア／＼いかふ／＼ トしたくして立出ながら・小づかひにと金五両だんまりにてまくらのひきだし・あけていはれぬおゐらんのはらおび・とかれぬなぞハ心のうち・そこへころしも春の夕ぐれ【あをやきずし】鯛の鮓ゥ、シ

○第二齣

虎少將ハ倡妓の貞女ヲャ馬鹿らしい小女郎が俠哀哉新兵衞ハ。玉屋の懸たゝまり。三國屋の二階とまりてより。さる裏茶屋にて出合しが。つかひはたして勘當の身。はやたちゆきもならの葉や。二人が情とたてひきに。小女良に圍れて。裏店借のひとり者。疊ハ煤に埋れて。蛛の巣の綱わたり。荒たる宿の春さむく。損料蒲團辻ばんの。今戸燒にも火の氣なく。破行燈火燧筥。とりちらしたる。しだらなさ。去年のまゝなる亂髮。三絃枕の幻寢ハ。あはれ儚姿なりける 世に男のかこいものあるハ此里ばかりなり・こゝに又小女郎ハ出村やの新兵衞を大門までおくり・内へハ中の丁にゐるかほで・かくれてこゝにあいに來り・戸をあけて見て【小女良】ヲャちよつと見なんし。此マァとりちらしたなりわへ【番新】ホンニどふさしつたのだのう。モシィ新さんへ狸をなさりいすなよ。くすぐりいすにへ【小】ヲ

ヤいやだのう。ながしがくされていゝすばからしい【番新】アイサおゐらんのとこへこゝにおきいす　トうら茶屋からもつてきたふたぢやわんをあがりはなにおいこ　モシヘわつちやァとなりにはなしておりいすから。しつぽりとおしげりなんしへ　トきをきかせ・ふを引たて、となりの女げいしやのうへよゐる・女番頭しんぞうむづかしきやつなれども・此うちに地色があれて・身にあやまりおれば・おゐらんのしだらもいわれず・しようちでゐるなりなげいしやの内にへけいこの　トふあり　へわかみをよこにうちかけにひきまといよせとんとねていだきしめゆりおこせば【小】モシイおきなんしへ。そんなにねたうおざりいすかへ　トくすぐりおこすなとつてなけ　【玉新】ねてもいゝわうちやつておけ。うぬがせわになるものか　トたぶさをとつてかきむしらんとせしが・さすがりつぱのよこびようご・まさかと手あたりしだい・火打箱をとつてながしへなげ出す　【小】ばからしうおざりいすわ。わけもいはずになにがそんなにはらがたちなんすへ【玉新】はらがたつて〱。ごうはらで。はらがへつてゐるわ。晝大黒舞の時。二階でたしかまつてゐるといふ聲がしたとおもつて。もふくるか〱とまつてゐたが。ひもじいから三絃ばかりかぢつてゐたわ【小】ホンニまちどふでざんしたろふ【玉新】まちどふもすさまじいわ。うぬにかゝつてこんなひだるい正月をするかとおもへバ。はらがたゝねへでどふするものだ。ホンニむまれてから雑煮をくわぬわ此元日ばかり。これも親のばちとおもや。いつそ死でへよふだ　トほろりとして十二月なき見えにこゝろいきなきてくと　【小】ホンニぬしもやせぼつたく。いつそきちげいしミなんしたによ【玉新】ごもちがわれねへでハさ。大晦日にわ一文なし。まき屋米やにせめられて。やせぼつたくな

つたのだ。てめへ都合しやすといつておいて。よくべらぼうにしたな【小】よふ〲都合ができいしたよ。さつき出村屋の客人が。これをおいてめいりいした　ト紙につゝんだ金五両・ひとつぶをへてやるなミだ・とつてよこがをへほふりつけ【玉新】五両ばかりなんにするものだべらぼうめ【小】それにべらぼうがいりいすかへ　とハいふものゝ大じんにさすられるより・色男にたゝかれるがよつぽどうれしくかわいゝがいろのならいにて　金がいらずれ。いつそわつちをころしておくんなんし。ホンニぬしもぐちになりなんしたももつともでおざんす。こんなはかない正月をさせ申しいすも。はたらきのないわつちがよふなものにおもわれなんしたが。ぬしのふ仕合とあきらめて。時節をまつておくんなんしへ。又かうばかりでもおざりいすまい。そんなわつちがわるふした。あやまりいすからかんにんして。きげんなをしておくんなんしよ。ハテ正月でおざりいすハな【玉新】きげんをなをしていにもはらがへつてちからがねへわ。てめへおれをひころしてしまうきだろふ【小】ヲヤおそろしいぐちをいゝなんすにへ。そふでおつしようとおもつてもつてまいりいした。サア、おあがんなんし　トいふつにしきでの三組のふたちやわん・あけて見れハ正月のぢうづめ　【玉新】なんぼはらがへつても。こんなやぼなものがくらわれるものか　トとつてながしへなげ出す・此ものおとにおどろき・ばんしんとなりよりかけつけ戸を引あけて見れバ・ながしハ大さわぎ　【ばんしん】ヲヤなんでざいますへ。ヲヤ〱おまんまもおさいもだいなしになりいした。せつかくおいらんのとこでもつてきさつしつたものを【玉新】せつかくもつてきたものならりやうけんしてたべ

てやらうから。手桶でいするてくんな【ばんしん】ヲヤばからしい。おまんまをせんたくする
のかへ　トしだらなくながしにこぼれてる正月のせうづめものたびゐいあつめる・ばからしいが此里のならいにておかし　【ばんしん】ヲヤちよつとごろうじいし。ま
つしろなかづい子がおざりいす【玉新】そりやあ火燧石だ。大わらい〳〵どふりて飯がほくち
にまぶれてごま塩になつたやつさ。イヤアやぼからぬものが。あるてりごまめか　トとつて見　おき
やあがれながしの腐木だ。ツヽヽどれ〳〵その甘露梅ハくゐるだろう　トとつて一口かぢり　ア、消炭を
くつた。バツク【ばんしん】ヲホヽヽホヽヽ【小】およしなんしばからしうざんすにへ
【玉新】ばからしくつてもはらのへつたにハかへられぬ　トまじめでいふ　【小】ぬしハそれほどまで
に。ひもじうざんすかへ。いつそはかないよ　トなこたぐミ　臺屋をとりよせておくんなんし【ばんし
ん】アノ壹分が申しいしようねへ。モウおかしくつてはらすじがよれんすよ　トそで口をおさへわらひながらかけ出し・戸を
引よつてとなりへゆく・あとにハ金太とりあげて　【玉新】すてたものならふしようながらひろつてやらう此金も出村屋の客人
がくれたのか【小】アイサかねて申しいすとふり。小遣まできをつけて。なにやかやせわにし
てくれんすほどで。去年の初會から。ついぞまだあつた事がおざりいせんよ。あんまりきがし
れへせんかへ。けふいろ〳〵きをひるてみいしたから。モシイわつちがしらんでおりいす事を。
どふしてかよくしつてそれゆへあわぬとはらをたつてかへりながらも。又此金をくれんした。

どふいふきか。ふかくおもつて見れバ。わつちやァこをふざんすよ【玉新】ムゥはてなきのしれぬ客人だ。てめへのはなしできくに。年恰好てうどおれが女房の兄源之介のよふにおもはれるが。名ハおれとおなじ新兵衛。ハテわからねへ。けふ大黒舞の時。その客人を見たくおもつたが。障子の影で見へなんだ。どふかしてちよつと見てへものだが【小】モシヘ妹があると申しいした。こないだにその妹を見物につれてくるといゝなんした。もしやひよつとその源之介さんとやらじやァないかねへ。出村屋の二階にハてうどへやがおさりいすから。かくれてゐてごろふじいし【玉新】そふきけバどふやら源之介らしい。もしその女がおれが女房な時ハ【小】どふなんすへ。そんなにおかミさんが。あんじられんすかへ。さぞかしおかミさんも。ぬしの事をくろふにして。わつちをうらんでおいでなんしようが。わつちやァ思ひきられぬゐくゐんでおざんすよ【玉新】ハテいたこの文句のとふり【小】女房もちにもほれまいものか。にようぼさらせてわしがなるかへ【玉新】といふよふに。きをつよくおもつてゐや【小】ほんにかへうれしいねへ。しかし來月ハ寮へさげると内證でおつせいすからそふなるとあわれんすつがうもしにくし。いつそ心ぼそいよふて。ひよつと難産とやらで死んだなら。又うつくしい色をおこしらへなんしようかとそれがわつちやァ。くろうになりいすよ【玉新】たれかそんな

にくろうをさせる【小】くろうをするもたのしみでおさりいすれ【玉新】コレべらほうめナゼこんなにまよわせたよ【小】ナセこんなにほれさせなんしたへエイモいつそにくいよト()蒲團の裡の雲と雨。錦の夜具をひきかへて。比翼枕もあらバこそ。哀儚巫山の契。いかなる夢をやむすぶらん

○第三齣

小女郎が從身ハ五月下旬エイ難有大門の切手青陽の空あをみたる曙より戀と情の中巷へ出村屋の二階の賑ひハ。彼新兵衛大盡。妹お房をつれきたり。小女良をあげて。大勢とりはやしたる大劇。男藝者の藝づくし女げいしやの。めりやすチヤチヤン トをさまれバ【にようぼう】ごしんぞさん。ちつとおいたゞき申ましよう【小女良】アイサ申へ トたはこをすいつけておふさへ出す【おふさ】はい トいつたばかり【出新】時にそんなもきいてくんな。あれにはらのたつはなしがあるてさ。これハおれが妹だが。よしねへ所へかたづけて。とんだくろうをするのさ。ていしゆがまんざらこつちへくるとしりながらも。薄着してお風めすなへちよきとやら。といふ何のとふり。着物の襟をもなをしてゝ。きげんよく出してハよこすものゝ。女だもの。ちつとハ角もはへそふなものさ。

姑はあんまりきさまがきがいゝからといふそふで。中にたつてしにくゝ。りちぎなきから。それをくろうにして。たつたひとりの妹を。かわいそうに癆瘵にしたのさ。よしはらといふ所は。どんなおもしろい所かといふから。氣ばらしにもならふかと。見物につれてきたが。初春早々。なかせにつれてきたよふなものだ。きらわれるていしゆでも。かわいゝかして。その事ばかりむねにあるから。此とふりふさいでゐるのさ。みんなうかしてくんな【ふさ】兄さんへ。そんな事をおつしやると。おいらんのおつもりもはづかしい。此里までもつけあるき。恥をあたへにきたのかと。おさげすミもあろうが。いふにいはれぬわけあつて。わたしはいつそすてられても。どうともなれど。かんどうはなすつたものゝ。親御たちのおあんじ。そればつかりが　トほろりとしたるひとつゆに　【小】さこへ玉新のよめごかとぞつとし・針のむしろに坐す思ひなれども・さすがに里なじみはとぼけた孫におちついて　ホン　ニ　とこの女良衆かそんじいせんが。おまへさんのそうおつせいすをきゝいしたらぃ　たいてへつらいこつてはおざりいすまい。そのお方もお目にかゝりなんしたら。さぞ穴へもはいりたふおざんしよう。おまへさんもさぞおはらがたつて。その女良がにくふおざりいしようが。ぬしがそふしがなくならしつては。猶ぎりにもどう見すてられんしようへ。かくまい申ておくほどでは。なミたいてへな。くろうじやァおざりいすまい。あだやうわきで。よび申たてもおざんすまいし。いふにいはれ

ぬわけもおざりいしようから。よく〳〵い事とおつもりなんして。かならずわるくおもつて。おやりなさいすなへ【出新】インニヤわるくおもふめへものでもねへ。女房子ハなかせておいて。女良買もすさまじい。すへしじう。りつパにもかいとふす事か。おやの内ハおいだされ。今でハこつちへきて。あろう事か女良にやしなはれてゐるとの事。それでも。女良買か。女良かわれがきいてあきれる。そんなはたらきのねへ。らちもねへ男に。貞女をたてよふより。いつそおもひきつて。妹に出てこいといつても　外へゆくきハさらにねへ。その心いきがかわいゝのさ。もひとつのもふ【ふさ】そでをひき　きのどくな兄さん。あんまりおつしやるなへ【出新】いゝハうつちやつておかつし。女良買なら。申にくいが。此新兵衛などのよふに。みんなを大勢ひきつれて。どん〳〵とにぎやかにするが。遊といふもの。そふおふに合力のせわをもするが。客人といふものだ。それに茶屋のかけハたまり。かつこうわるく二階もとまり。格子さきをうろついたり。苦界の身のせわになるよふな。いくぢのねへ。はたらきのねへはかな男があるものか。戀も情もうつちやつて。あいそもこそもつきはてた。おれが妹婿とおもや。はらがたつからいつてきかせる。あんまりしがねへ。はかねへ男だ。くやしくハこゝへ出ろッ　ト。いつちやあ　なんだかあいてのねへけんくわをするよふだアハヽヽヽ　とちやうろうす〇こゝに玉屋の新兵衛へ。小女郎が手引にて。此中村星のにか

いに。さいぜんよりうかゞひゐたるが。見れバ新兵衛といふへ。にようぼうおふさが兄の源之介にて。むねにこたゆる悪口をいゝたてられ。ひんすれバどんするると。まわりぎになりて口をしく。はらにすへかねからかゝさつとおつひらいておどり出【玉新】お房をされバ他人の源之介。今の悪口おぼへたか　ト出村がみけんをはつしとうつ。これへと皆ゝ立かゝり。まづそふほらへ引わけて。上を下へと大そうどうになり。源之介がかいほうおふかたならず【ふさ】兄さんひよんな事になりました。わたくしやあモウいつそ。死なねバなりませぬ【出新】ヲツト。こゝでいつては花がちる。その二ばんめを出すまでは。やつぱり新兵衛。さられたお房。此場のけんくわもしら魚の。すミだ川へおしながして。堀から舟としようか。イヤ駕ははいつたかの【にようぼう】ハイ〳〵すぐにいらつしやりますか【ていしゆ】それにしてはみけんのおきずが見ぐるしい。はゞかりながら私が此吉原帽子。大門までめしませぬか　トさし出すをとつて【源之介】よしはらぼうしとはおもしろい。一句うかんだ。かうもあらうか

かぶつてもかんきはうけぬ頭巾かな

アハヽヽヽさあいきましよう　トみけんのちどめに。はちまきをしたうへに。作のよくはらぼうしをかぶり。ともなふおふさはおこそづきん。おりしもばら〳〵春さめに。人目をしのぐじやのめのからかさ。此出村屋のゑんさきより。立出れバ。うしろよりは小女郎。にようぼうはじめ。みなぞろ〳〵。大門迄と送りいづる。あとにのこつて。とりこになつた玉新が。思へバむねんとせきこんで。おつて出るを【ていしゆ】まつた。申事あり。おまへを私が二階にしのばせ申たも。源之介さまへ通して。なにもかも御承知でおつしやつた。みなおまへのお為をおぼしめして。ごいけんのあつこう。ありがたくおぼしめせ。けふ御しんぞのいらつしたは。小女良さんの身うけの手つけ。内證へおわたしなされ。五月下旬

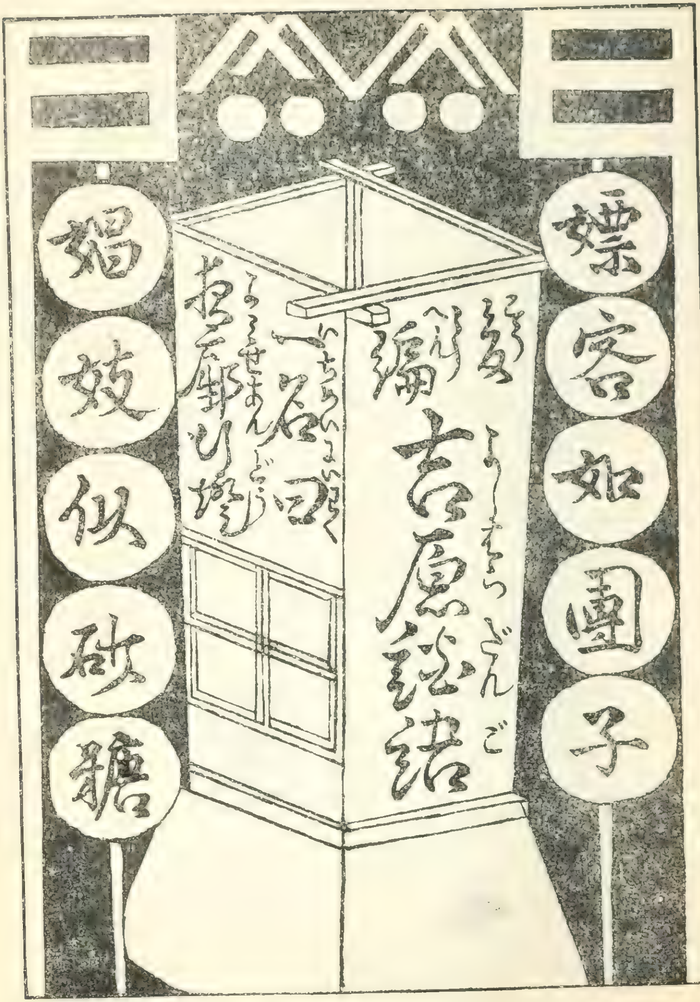
迄には親御さまの御きげんをなをし。根岸の別荘へおひきとりなされて。おいらん安産させますとの事。こんなとふりもいゝ御しんぞもねへもの。あしくおぼしめすとばちがあたりました【玉新】トきくといあきてへそふかとうれしいやらかたじけないやらうつてかへ これにてわかつた。實のあるおふさと。男氣な源之介殿。我名とおなじ新兵衛といふて。小女良へかよはれしわ。かうもおさめる狂言であつたか。そふとはしらず。はがいつて。今さらどふもめんぼくねへがソレ と・せめて一言わびをせんと・あとをしたふておつこゆく・時しも大門のそとにへかご二丁ならんで・はや源之介がのりかゝる所へ・つか〳〵とよつて・源之介にはきもんをとり・つちに手をつき・あやまりいつて【玉新】なんにも申さぬ。新さん。此とふりでござります【源】コレハ〳〵おれよがい〳〵【かごのあとぼう】だんなよろしうござりますか トかごのたれをおろす【ぼうばな】どつことな【源】はやいつ月のおいらんを。それとおふさがいわた帶みのわの例のおろし薬れ。身をうけだして根岸の別荘。あんじるよりうむがやすく。おやごのきげんのなをるまで。かならずたんきをだすまいぞ。コレ駕の者これはだれが聲色だろう。ア、おふきによつたゲツプ トよつたふりおくり出たる小女良へ・合所のつがあんどうのきわに立そひて【小】モシイごしんぞさん。ごきげんよふおいでなんしにへ【ふさ】おいらんむり酒のすぎぬよふ。ぬしをおたのミ申ぞへ【小女良】アイサおさらばでおざりいすにへ【大おん寺のかね】ボヲン〳〵

吉原帽子 大尾

吉原帽子跋

芳原をてうといふは彼胡蝶の夢に譬ふ乎。てうハ兎角とまりたがる所以也。小女良ハ菜の葉。出村玉屋ハ蝶々乎蝶ハ菜種の花しらず。菜種は蝶の味しらず。しらずしられぬ中の丁。莊周ソレ奈何。女郎のちよ〱らがとめれば。客のおちよ〱もそら　とんまつた

夜郎以怪


嫖客如團子
吉原談語

昔明道眼前有妓。心中無妓。伊川眼齊無妓。心中有妓。以定二程優劣。今斯書紙上有妓。而筆下故無妓也。何傷乎。一序之。

首序

源三位頼政は。菖蒲團子に旨事をし。在五中将ハ。宇都の山の十團子に幻をぬかす。夫女郎に苦労砂糖あり。客に狼團子有。名におふ門に聞へたる。名物大門ノキハニアルヲ云 吉原談語の一冊あり。前篇而已でハ片月見。後の月見の後篇をと。書轉して小冊にまとめぬ。素より團子の趣向なれバ。竈膽を煉。筆をでッち。花より團子の丸山から。はりといきぢの吉原團子。それがほんに本屋の一二。合せて前後の一部とす。作ハまろかれ。なかまろかれと。おもひついたたが。本しやゐ引

トテチ、リテチヤン

桃太郎月鬼宿日

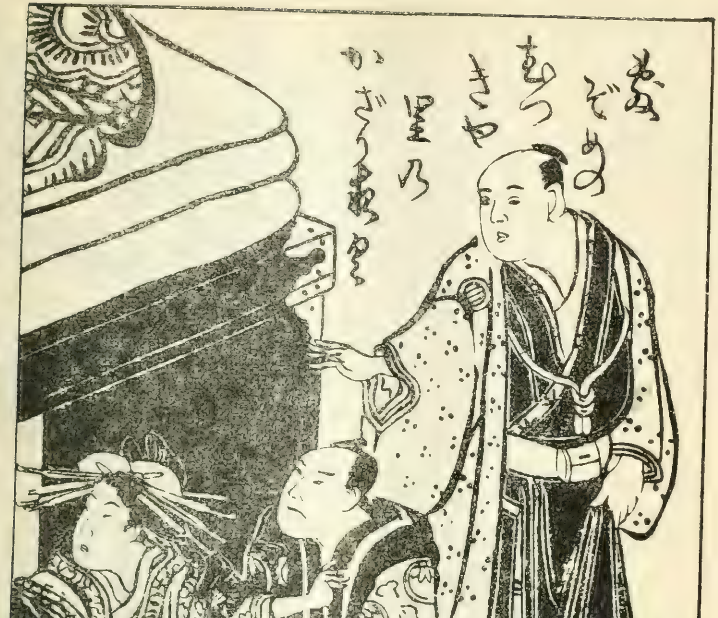
青樓薄倖の陰士

梶樹舎大雜誌

凡例

○此書前編ハ十年前ニ絶テ板木ヲ滅ス後ニ古本ニ遺ルアリ後篇モ又其頃埋レ木トナリテ知ル者稀ナリ偶コレヲ反古ノ中ヨリ拾得テ以前後ヲ合ス

○桃太郎ガ黍團子ニ倣ヘテ日本一書噺ノヤウナ吉原談語ナリ然トイヘ圧能傾城ノ實情ヲ穿チ覽者ヲメ感慨セシムルニオイテハ又身ヲ脩ルルノ戒トモナラザランヤト云爾



六

兼題◐月標

寄茶屋意（ちやゝへよせるこゝろ）

兼意ハ茶屋よりきたる返りも
あけてハかへるからのひらぬき

切盤意（きりとぎる）

きれぶくろの皿もきる∧意盤ハ
いぶれゝむさぶ袮おまゝせん

大門意（おほもんの）

名ある大意の切りのみりせバ
まゝまあんの笑ハゆるさじ

逃意（にげる）

くるしさをまぎめるとゝひつじあらど
命をしさまにげる意りも

右四首前後合九章

第六　寄茶屋戀

【河東節】トヽヽヽへあふ玉ヽヽヽさらあらたミたるあけぼのヽハツねきヽヽヽヽくとりも。わかヽヽとわかミづ。はやヽ手車ヽいそがる。くるヽヽとしヽあき　上松の内也。かたるくるわの正月ハ。とりわけ二のにぎはひ。今さらいふにおよばす。大こくまひ。大かぐら。鳥おひ。おきつねさん。などの。見物くんじゆの中に。ヽヽヽハおいらん。きせるハおすとる。おのづから道をひらいて。さん中の丁へおし出す。おいらんハ【前編】に見へたる。舞鶴やかね風。おいらのいしようあざやかし。つるのしんぞうかぶろを引つれ。つんヽヽばんとして来る○こゝに藤田屋のまへにて三浦屋の浦風ヽヽヽヽの七三郎をつかまへ。せきとどぎやる【七三郎】コレサしづかにしてくれろ。かつこうのわりい。つかまるもちゐおれへが。たかゞしれたりくつだ。なにも。しようわるをしたおぼへハねへよ【ばんとうしんぞう】らちつかれおなく　おぼへがないも。すさまじうおざりいすハ。舞鶴やへかくれてお出なんす事ハ。とふからしつておりいす。じんじようにおゐらんのとこへお出なんして。いゝわけがあるならおつしやりいし、サアお出なんしヽ　ト引ずる。又手にぶらさがつてゐるかぶろ七んのかんざしをおもたそふにひらつかせ【かぶろ】アレサつむりへきわらつしやるよ。ふけいきな　父はなりさひつぱつてゐる【ふりそでしんぞう】コレサ手をひつかゝつしやるよ。サアお出なんし　七三郎ハ此藤田屋のきやくなれハきのどくさうに【ていしゆ】こつちから七ざんをどこへもお送り申た事ハねへのう【にようぼ】アイサおつきやいで舞鶴やへいかつしつたハ。しんぞうしでございまいすよ【ばんしん】こつちの内でもわるふおざりいす。わつちらが内へぎりのわるい事をしな

んした七ぜんを。どこのか女郎衆にないしよであわせなんすといふ事もきいておりいす。どこのじようろしかしりいせんが。あんまりずるつこいよふ トやつあたりにぐしやとふミつける 【犬】キャン〳〵【ふりしん花山】アレ〳〵七ぜんでおざいますよ【ばんしん若野】モシヘごろうじいしたかへ【春風】アイサト いつたばかりこれハいつたい。七三郎と前篇よりいろ事にて。いもと女郎花山をおさきにつかひ。おもてむきしんそうかいにしてよびしが。ないしようよりせかれてにかいとまり。それより藤田屋にて七としのびあいしが。けふもあけんとみをやつて七をよびし所。元などゝの三浦やへつかまつてゆきしゆへ。大きにふさぎながらも。何くわぬかほで。あわ屋の見世へあがり。けふしまいの大じん。長兵衛が来るをまつてゐる【爰に】春風が色客遊糸ハ。去年茶やふさがり。にかいへとめられて。かうしさきであうばかりのはかなき中なりし事ハ。前篇に見へたり。其後勘當されていなかへゆき。去年いつぱいとふざかりしが。去暮おしつめて勘當ゆるされ。おやの内にてめでたき正月をむかへて。禮に出しが。かゝしめのまゝ。これ見てくれろといふりつはなる出立にて。なじみの茶屋小花やへ入來る 【ていしゆ】イヤア遊糸さま。これハ〳〵おめづらしい【にようぼ】ヲヤお禮者かとおもひましたてうど一年ぶりでいらつしやいましたネ【ていしゆ】そうさ。いなかへお出なさると申事でござりましたから。旧冬寒氣のお見まひもさし上ましなんだ。櫻のじぶんでなくてハ。おかへりハないと。申事を。うけたまわりましたがおはよふござりました【遊糸】アイサ。思ひの外はやく。かんどうもゆるされて。内へかへりやした。いなかへゆく時ハ。こつちの掛かと。なにかしたらなくしていつた。そのいゝわけにきやした トふるきかりを。先生ばらひとし。外にミなくへ祝儀をするゆへ。俄にいさミ立 【ていしゆ】むかしにおたちかへりなすつて。わたくしどもまでおめでたい。モシこふ又青簾。あを疊にしかへた所ハ。わるかァこざりますめへ。ソレお盃をもつてこいよ【にようぼ】なんにいたせ。

おはやかへりのごようすを。おいらんへおしらせもうそう【遊】イヤ〳〵よしやしよう。しかしちつとあつてきゝてへ事もあり（ト何やらけつちやくせねへ。いなかへハつてゐろうちに。ともたちの七三郎と。春風。いろ事のできた事をきゝ出したゆへ。むねのうちハにへかゑり。いつこうかず。すい物をしかけてゐろ）【わかい者】おゐらんハあわ屋のしまひ客人(きやくじん)で。もふでゝお出ないさいます【遊】あわやのきやくじんといふハ。おれとはりやつた。長兵衛たろふ【ていしゆ】けつこうなたびうとしでござります客人(きやくじん)がまだきさつしやらざあ。あわへそういつて。ちよつとよひ中かい〳〵【にようぼ】さよふなら。お二階(にかい)かよふござりましよう（ト遊糸がかミしもをとつてたゝむ。遊糸ハにかいへあがり禮くたびれにころりとたまくらになりしが。むねハわくせき春風を今やおそしとまつほどに。おりしもあとなりの二かいにてじようるり）へかわい男にあふ坂のせきよりつらい世のならひ【遊】アノうたでおもひ出す。身(み)につまされるハ伊左衛門。ホンニ夕霧(ゆふぎり)のよふに。かわりはてたハあいつがむね。アヽあゝした心であろふとハ(上るり)へおもはぬ人にせきとめられて今ハ野澤のひとつ水(みづ)【遊】アヽいかさま。一座(いちざ)のうちに色(いろ)をするよふな。ぎりしらずの女郎(ぢよろう)にあつた所がおもしろからぬアイヤ〳〵もふあわずにかへりましよう。アとハいふものゝ。あわずにいつてハ。此むねが(上るり)へすまぬ心の中にもしバしすむハゆかりの月のかげ（春風ハ遊糸か來しとのしらせにとむねをつき。七三郎が事と。かてゝくわへて。苦勞とくろうのおちあいに氣ハもめれども へいきに見せて。あわ屋の見せを立出。ニヽのにかいへあがりいたる）(上るり)へむざんやなゆふぎりハながれのむかしなづかしくとびたつ心おくまのしゆびハくちせぬゑんとゑんむねと心ハあいの山あけくれこひしいつまのかほ見るにうれしくはしりより我

身をよこに打かけに引まといよせとんとねてだきしめしめよせ泣けるが【春風】モシイ遊糸さんおなづかしうおざんした。わつちやァ病氣で。久しくひつこんでおりいしたが。よふ〳〵おして格の内もでられんす。コレ目をさましておくんなんし。モシあいとうハおざりいせんかへ
トゆりおこし〳〵いだきおこせバよつてなけ　ことばハない【遊】これからハもとの遊糸さま。どこへいつても大盡さまだ。きれた女郎にわるい事があるなら。トくどう〳〵とくらいなき【春】なんざんすへ。きついきげんいわるいこつておざりいす。わせんにへ　トひきおこす【遊】なんだ此うわき女良め【春】ヲヤわつちをうわきとハへ【遊】うわきハわけいつてきかそふ。此遊糸ハうぬがへに身をうち。いなかへゆくよふになつて。格子で暇乞をした時。なんといつた。たとへ一年二年あわずにゐても。たがいの心ハかわるまいと詞をつがつて。ほかに又色事でもしてくれちやァうらみだといつたらう。わつちがそんな事をする氣なら身のつまる迄くろうをして。おまへさんに。ほれハしいせんといつたじやァねへか。とふぞはやく勘當のすむよふに塩斷をして願をかけ。時節をまつてゐると。泣わかれにわかれたを。よもやわすれハしめへ。おれハその詞をたのしみに。いなかにゐるうち百年もたつよふで。よふ〳〵戻り。はやくあつて。よろこばそふとおもつた所。七三郎とばつとしたひようばん。外い

ものでもあるか。友達と色事され。おれらがほんたうにふたものか。よくもけたりぶんだりするな。おれも久ぶりしたけるハ（トたいいつぶんづけちらかし・く　ナなしなだいおしくだれきた）〽ゆふぎりなミだもろともにうらみられたりかこついハ色のならひといひながらそれハうわきな水あさぎ【春】ホン＝七ざんの事をきゝなんしてハ。はらをたちなんすハ。もつともでもおざりいすが。それハうわきなひとをり。おまへさんとハ初會から。花のやくそくするよふに。まんざらでないこゝろから。うれしいにつけ。かなしいに。つれてわすれた事もなく。人のあんじハちやにしたり。あたにうわきなおまへさん。二階のうちいよしあしも。としやこれかとはらがたち。せなかあわせてねて見ても。ついそれなりにはりよわく。なかなをりすりや。はやむかひ。わるどめしたり。ながしたり。それがこうじて。にかいもとまり。お目にかゝるも格子さき。いとまごいさへなくばかり。それからふたへでおとづれなく。みの返事もなんせんかられ。おふかた田舎にしよふわるなおもしろい事がでをなんして。それでたよりもなんせんかと。思へバしミ〴〵。くやしくて〳〵。むまらぬ気にもなりいしたよ。まだ七ざんがみのつて。くわしいたよりきかせなんす。そのしんせつがうれしくて。つゐした事でできたなか。わつちにうらミがあるならバ。おまへさんにもうらみがある。去年のくれからまる一年。一年ごしにたよりもせず。こがれじにを

しろとなりと一寸一筆。なぜかいてハよこしなんせんにへ。それゆへに此やまい。やせておとろへたが見へぬかへ。わつちが心がかわつたら。ふんでばかりおきなんすか。たゝいてばかりおきなんすか。コレしにかゝつておりいすよ。いつそころしておくんなんしおまへさんの手にかゝつてしぬるがわつちやァうれしうおざんす。ころしなんし〳〵　トひつしとひざにとりついて。よがりつないつわけもなき。かゝる所にあがりくる【にようぼ】おいらんへ。あわ屋のきやくじんがお出なさいましたと。おむかいがまいりました【遊】そんならはやくいきな。何もかもおれがあやまつた。二階をあけて。これからはれてあふわさ【春】イエ〳〵おまへさんがやつぱり今迄のよふなお身なら。わつちが都合して。にかいをあけ。よび申す法もおざりいすが。もとの遊子さんにおなりなんしてハ。今さらきはづかしく。わつちやァもふ。おあい申す事ハ。なりにくふなりいした。おさらばでおざんす

トいゝすて。つまをかいどりあげ。たてゝにはしごをあがり。思ひきつて所へ出る。これ春風がふかき手ごとにて。きしようにおもしろき所あれども。そのわけ後にわかる

〇ある人難じて曰。右の段ハ夕ぎりの文句をたゞごろしにしたりと。さにあらず夕ぎりハ女良の實情をとりて淨る理に作りなしたり。春風ハじようるりの狂言をかりて女良の實情をありのまゝにのべたり。彼ハ狂言是ハ實情といふ事をよく味ひて見わけ給ふべしと云

【女げいしや】〽花をかざつてはつがいなんどゝよせくるくるハどんどめく【たいこもち】ホ

、だいじまんいを見さいなア引 おもてハ大黒舞の見物おしやひ・内ハにぎやかにげいしや大せいとりまいてあわ屋の見せさきにとつきとしてゐる客長兵衛・年のころハ五十六七にもなり・春風あとぎから松の内かまひもしてちらな何かとはやかになる一きやくなり・春風ハ小花屋からきたし・つゝいおくへとたつてふたをかく【じんしんわかの】にて 小ごゑ おまへさんがまちうけていさつしやらねへかな。長兵衛さんついぞれへはらをたつてお出なんす【春】あとできゝいしようぞ モシ此みなさよつと小花屋迄【若の】ヲヤ遊糸さんかへ ト知をとつておばなやへ出てゆく【ふりしな花山】モシイおゐらんのとこへおきかづき【春】アイサ今まいりいす【にようぼう】モシおゐらんへ。おばな屋ハでいぶ。おてまがとれましたね【長兵衛】おばなやなら遊糸がいきれうでもきたろふ。アヽなんだか理におちた【たいこもち】なぜでござります。御酒がしこますめへ。いつけれあいりましよう【長】インヤやをぜんで大きによつたからもふ酒ハごめんだ トにがい顔なさる【ていしゆ】まづおいらんがうかつしやらねへ。ちつとうかしもふさうじやあねへか【長】おれもなんたかしづんできた。モウ行ときめよふ【ていしゆ】いかさまちとあちらと【たいこもち】しやござりい。おいらんなをしもよからふてアハヽヽヽ かくてミなく／＼そふにたち・わかい者ハゐんさきに長兵衛がはきものをなをす・春風がちやらちんと茶屋のかんばんとふたはんきにたて・あとからハたいこもちしんぞうかぶろ茶屋のにようぼう入まじり大かいそう／＼とつきそひゆく・長兵衛ハ女げいしやに手をひかれながらけつまづくと【女げいしや】ヲツト おあぶなふござりいますにへ【長】アヽ大きによつたケツプ トいゝながらめ詩を口ずさむ

別様風壊男酒腸（[illegible]） 作他薄倖耐他狂（たれかようつうにともなひてかれがきようにむくふ）

天公要斷煙花種　醉殺楊州蕭伯梁

第七　切髪戀

【大勢口々に】ハイありがたふござりますく〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵 これハ春風がざしきへ長兵衛が惣花の禮に出た体なり。惣花ハ家々によりて高下ありとゞ四匁位なり。先まわし方をはなばうにたて。下ハふろたきにいたるまで。あたまわりの通り。のこらずそろつておじぎをする。其体大きにおかし。あとの〳〵せへじろうのよふにつらりとつくばひ。ありがたうござりますと一口づゝにつたてじりをしていゝすて。どや〳〵と立てゆく。あとへ又どた〳〵とにぎやかにて。皆うつりげいしやミな〳〵いとまごひをしてかへり。とこおさまりて長兵へ。つくゑの上にありし。大和物語といふ本をとりてふとんのうへによんでゐる【春】ヲヤ又本かへおよしなんしな トむりにとりあげる【長】その本にハてうどきさまの身の上がかいてあるから。感心してよんでゐたのさ【春】なんとかいてありいす。いつておきかせなんし【長】むかし津の國にすむ女を。二人の男が戀あらそひになつて。女ハ男の志のまさつた方へあはんとおもふに。二人のいろ男のとしかつこう心いきまでおなじやうにて。どちらをどちらともいはれず。女ハ思ひなやんで生田川の水鳥を射あてた方へ身をまかせよふといふ時。此二人ハ男その鳥をひとしくゐあてたゆへ。女ハなんといふべきことばも出ずして

　すミわびぬわが身なげてん津の國の生田の川ハ名のミなりけり

と歌をよんで生田川に身をなげたを。此二人のいろ男も又。同じ所に身をなげてついに三人と

も死んでしまつたといふ事さ。ばからしいよふだが。よくかんがへてみればしごくぎりにせまつて尤かうありさふなこつた。むかしの女はぎりもなさけもわきまへて色戀もしたと見へるが。今時の女は口ばかりしぬのいきるのとさわぎまわつても。一過ばかりでほんのうわきといふものだ【春】モシヘわつちもうわきと見へいすかへ【長】うわき所かァノ遊糸とやらも元はさふわうなむすこかぶであつたそうだが。きさまゆへにつまらなくなつて。今ではさぞくろふをするだらふ。それをかわいそふだと思ひもせず。その又遊糸がともだちの七とやらと。いろ事をするよふな。こんなしようわるな。ぎりのわるい事もねへものだ。こふいつちやァ。いゝ年をしてなにかおれがせくよふで。あだにきこへるかはしらねへが。ほんにきほうよふ一通りにくるおれが。むすめにもしていゝきさまをにようぼにしよふじやァあるめいし。なにしにせくもいだ。そんならうつちやつておけばいゝとおもふだらふが。田舎のおふくろにもあつてたのまれた事もあるし。此夏はねんもあくし。其時はせわにして。かたづけてやりたいと思ふほどたしんせつな氣からは。きさまのためにならぬ事を見てはいられぬ。ひつきやうひゐきに思ふから。かうはいふものゝ。しよせんのりかゝつた船はとめどのねへものだ。どふせつまらねへものになるだろふとおもつて。それがきのどくさにいふのさ。今はなした生田川の女は氣に

もなつて。とつくりとりやうけんをつけて見なせいよ トしんせつのいけんひしく／＼と身にこたへ。さしうつむいてゐたりしが 【春】モシヘ若(わか)野(つ)さん 【若】なんでおざいますへ ト次の間にちやをほうじてゐたるが立てくる 【春】ソレさつきそふいつておいたものを 【若】アイとつておざいますよ トふくろだなから。てうしを出し。たんすからぎあまんのこつぷをとり出すを。春風手に取てさし出すを 【若】よふおざりいすかへ 【春】よふざんす。つぎなんし トひや酒をひといきにのミほして いつそ癪(しやく)がさがりいす。もふ一(ひと)ツ 【若】ヲヤどふさしつたのだなう トこわ／＼いつぱいつぐを二口にのんでいきだわしくせきいり。むねをたゝきなから又こつぷを出すゆへ 【若】もふおよしなんし。又ひやうきにあたりいしよう 【春】いつそあたつてしんでしまいたうざんすよ トいゝつゝ又なひのとにあきれけいれて 【若】モシ長兵衛さんへ。おまへさんだからかくさすおはなしもふしいすが。おいらんのとこでハしこないだ〻口くせのよふに。死(し)ぬ／＼といはつしやるから。そはにいゝしても。いつそ心ぼそいよふでおざいますよ。モシどうらくをなんすも。いゝかげんがよふおざいますナイ。遊糸(ゆうし)さんからつゞいて七さんの事でいろ／＼くろふがたゝまつて。あけしいまもなくきをもまつしやるから。ほんにいとしうおざいますよ。むり酒をあがんなんすも。むりじやァおざいませんが。又くれのよふにわづらいなんしようかとおもつて。それがくろふになりいす。長兵衛さん。おまへさんよくいけんをして。おげ申ておくんなんしへ トおいらん大事の心ねへ又しゆしようにも立てゆく 【春】めぢ／＼しなから モシイあのいつそモウ申かねへすがおまへさんに又ごむしんがおざりいす 【長】やけ酒をのむからし

てハ。おふかたそんな事をいゝだすだろふとおもつた。おれがしんみにいふ事ハへんじもせずッてまへがつてにむしんがあるとハよくいつた。なるほど酒でものますハいはれめへ【春】ホンニあとぎのそうだんから。松のうちのしまひ迠。にぎやかにしておくれなんしたおまへさんに。又あつかましくもふされんすぎりでハおぎんせんが。しぬきになつて申出しいした。よく〳〵の事と思ひなんして。ふびんとおもつておくんなんしへ【長】なるほど遊糸(ゆうし)と七がさわぎから。せわにする客(きやく)もおちて。今じやァとりとめてそうだんになるものもあるめいから。ひさしいなじミげいにおれにいふのか。それをしりつゝくるからハ。むしんをいわれたがつてくるよふなものだから。すべによつてハきくめへものでもねへが先きいてのうへで【春】なにもしようじきにもふしいす。おまへさんがたび〳〵いけんをしておくんなんす遊糸(ゆうし)さんと七さんの事でチツト【長】ちつとどふした【春】二十両ばかりきうに入用がおざりいすのさ。これができぬとわつちやァいきてもしんでも（トなミだぐミてしゆばんのそでで口をぬぐらす）【長】きさまハやつぱりそんなに金がやりてへか【春】やりたくて〳〵。身にも命(いのち)にもかへて。しんになんの事もおもいゝせんものを【長】おれがためになるめへといふるけんのしたから。二十両いゝかけたそのつかひ道がきゝてへ【春】わけハかうでおざりいす。七さんがけふなじミの女良衆(じよろうしゆ)につかまりなんしたの

さ。付居のみ（付居のみといふかくれて外へあがるとそのなじみの女郎からことわりのみをよこす）のまいりいした時、なにもわつちが内でハ七ざんれしんぞうしでおざりいすから。うつちやつておきいしたを三浦屋の女良衆がいつそはらをたつておりいすそふさ。そのいきさつもおざんすから。七ざんが今の身で。すこすましのできいせん時ハ、わつちへのあたりに。ぼうずにでもしてつきだされてごろふじいし。色事でもいなんのといゝながら。アノ女良ハよく見てゐたと。わつちがいわれるところが、くちおしうざんす。そこがおざりいすから。三浦屋の女良衆のほうをりつぱにかたをつけて七ざんのかほをもたて。そのうへでわつちやァ七ざんと。きれいにきれるきでおざんす【長】なるほどいつたん七ぶなんぎをすくつて、そのうへできれるとハわかつたが。そうして又遊糸ハどふする【春】さ、ておくんなんし。遊糸さんハもとのやふになりなんして。けふ小花屋であいゝした。やつぱりひかげい身なら。きるにもきられへせんが。りつぱな客人になりなんしてハ。じさんのおもわくもおざりいすから。モゥわつちやァあわれへせんと、遊糸さんにいゝきつてしまいゝしたよ。もつとも七ざんの事で遊糸さんの顔をつぶしたかわりに。わつちが又つがふして二階をあけ、りつぱに立かへらせ申たうへで。遊糸さんの方からつきたされ。わつちがいぶんをかいて。遊糸さんを人によくいはせるきでおざんす。遊糸さんも元の身ぶんになりなんしたれば。

二階をあけかねもしなんすまいが。そこをわつちが都合するが。ハテいつたんほれた情でおざんす。きつしておくんなんしへ（トなきだしおもひこんだろあわいさまに・ふしんになりて）【長】それでなにもかもさらりとわかつた。もふいわつしやんな、コレ夜具が見ぐるしいからこしらへさせよふとおもつて。二十両もつてきたが。夜具にして見世へかざらせるも。きれひきにかほをたてるも。どの道おなじ㒵の金。ソレつかいな（ト二十両紙につゝんだまゝなげ出す）【春】ほんにおまへさんには。むりな事ばかり申しいして。おせわになり申いすうへ。又こんなくろふまでかけ申います。ほんにおだおろそかにはおもいゝせん。おありがたうおざりいす【長】そんならいよく〳〵遊糸と七を【春】きれるしようこはこふでおざんす（トなつこきやうだいをとりおろしてかみそりにてかみのけひぶしからぶつゝきつてなげ出し）長兵衛さんそれをとりあげておくんなんし【長】きさま酒によつたか。氣がちがつたか【春】酒にもよいゝせん。氣もちがいゝせん。おまへさんへのいゝわけでおざんす【長】ばかく〳〵しいきさまの髪をきつてもらつてなんにするものだ。たとへほれられたとて五十六十になつてどふなるものだ【春】わつちがどのよふにほれいしたとてしようがなんすおまへさんでない事はぞんじておりいす【長】それをしりつゝ髪をきつたはいやつぱり遊糸と七への心中だらふが【春】アイどちらへもやりかねて【長】そんならおれがあつからふ　しかしもふこれ半としでねんがあいてもたのしみがなからふと。きさまの心いきが

どふもかわいそうだよ【春】モシイわつちやァぼうずになつてしまいゝすきでおざんすよ トわ
となき出す目へそでおあて。長兵衛がひざに取すがりて。しやくりあけたるくろかミの。かほにかゝりてはら〳〵と。風にみだるゝあをやぎに
春さめそゝぐふぜいなり〇かくて逆糸と七がそうだんに夜あかしひそ〳〵とのふたりがはなし。びやうぶより外しるものさらになかりけり

第八　大門戀

春風ハ長兵衛にもらつた二十両の金を以て。よく日逆糸がちや屋の小花やのかけをすましてにかひをあけ。又七がちや屋の玉田やよりかけ
やわせ。三浦やの浦風が方につかまりとめられてゐる七三郎やう〳〵その日のくれ方にすミ七三郎ハほうじよう丞にまつた鳥のよふに。三
浦屋をとび出していつさんに藤田
やへきたる。にかいにまちゐたる【春】よくまんそくでお出なんしたはからしい【七】イヤもふばからしいどころか。まつぱだかにされたり。ふりそでをきせられたり。よつてかゝつてちようさいにうにされた。こふうなりくつだとおもつて。へいきでゐるたが。しまひのつかねへ時ハ。どうしたもんだろふと。大きに氣をもんでゐた。はんごろしになつたやつさ【春】ヲヤばからしい。アノ女良衆もわつちのあたりハあり。くやしんぼうでどんな事をしまいもんでハおざりいせんから。いつそあんじておりいしたよ【七】しかしりつぱにかたがつゐたから。三浦やを出てくるにも大きにかつこうよく。わつちハいゝ男になつたが。これといふもおめへのはたらき故のいゝよふもねへ【春】ヲヤ他人がましい。まじめで禮におよびいすかものか。しかしこふしるしたものゝ。とてもつまりいせんモシ トみゝにくち。うなづきさゝやきあひて【七】そんならすぐににげるきか【春】

もし【女げいしや】ヘイヤヤチヤンもみだばのあをべにしげるなつこだち春ハむかしになりけらし　トなけいしや引出すハ。したにきやくありてによばうこなく見世の方に一酒のさいちらなれバ。おりよしと春風にかいよりおりてういふりにてかつてのすきをうかゞひ。どさくさまぎれうら口からぬけて出る。七三郎ハ又かへるかほで目せからかりんて立出。いゝあかりたるきるうらのろじにて出合。春風がうわぎをとつて七三郎がしたぎをきせ。はをりをきせてかほハふろしきつきんにてふかくかくし。よいやうたさいわいに。大門の闇にかゝる（一）此ほとくるかたにげる算段よりへ。大門の出入むづかしくなりたとへかほのしれたくるわりあるなれとも。女しやへばきつてたくてハ出さぬ事となりしが。こゝにいなか者が大門口にはいりけるか、み所がとめられこ。大門口になくさまれてゐる　【番】きつてがなくつちやア。いつしよう出す事ハならねへ。又あんないもしらずはゐるとハ。こんたしもずるつこいのだ【おやんじい】とんだあにおハア。わしらアきつてのこたアしらず。観音さまからきゝくき申て。からゝ。所へつゝぱいて。いゝわけもおぎりやしねへ。おじひでござらあ。たすけて出してくれなさろ【ばゝア】そんだアから。おらが。やだあといつたを。おんおいどん。こんたあ。いゝいけどしをして。じよなめきたおを見物ノゥすべいきから。いゝしつたりぶりをして。おらたおをとんだア所へおつぱめたあよ。こらあハアあんとすべいよ【むすめ】いつしよう出されねへといわつしつちやアうつたまげたこんだあ。人ごミて血道ナアぶちあげる。あかりサアでこつぱずかしくゞ。かゝさんなア。かなしくござるハよ　トなき出すゆへ。としまのはり番かわひそふにおもひて　【當】まんざら田舎の衆と見へる者を。いおわるく出さねへといふりくつにもあたらねへが。これもやくめだ。アレあそこの會所へいつて切手をもらつてきさつせい　トおしへる。此まぎれに春風七三郎ハなやいなめをして大門をのがれ出どこをとふか落てゆく

第九　逃戀

【大おん寺のかね】ボヲン【こわいろ】みなミまくらのあらいがミうちはなしたるけさごせん此もりとうがれんぼのやミもはれわたつてハレこゝちよやなァ【つれ】イヨかうらいやァ北ぶめきの人のゆきかふ中を・春風七三郎へうらたんぼないゝさんに大おん寺前まで落のびて【七】もふこゝが田川やだ【春】そんならよつてひといき。おぬきなんし　ト立入田川やのおくざしきへはいりふすまたてきゝてはつといきをつき【七】さてこゝ迄はおちのびたがおめへいよ／＼おれがにようぼになるきか【春】にげはにげんしたものゝ。そのおへんじは【七】ならぬといふのかそれでこそ誠(まこと)のおいらん。もと女房(にようぼ)やくそくしたはおれより遊糸その遊糸が方へいかずば。おめへぎりがたゝぬへがな【春】それではぬしへのぎりが【七】たちすぎてる。浦風に恥(はぢ)をかく所を。おめへいおかげでけつこうにぎりはたつた。もはや廓(くるわ)へはいらぬきでおめへをつれだしたは。遊糸が所へつれてゆき友(とも)だちのぎりもわきまへず。いつたんいろ事したわびをして。又もとのさやへおさめるきさ【春】ほんにかへうれしうおざんす【遊糸】イヤつれてくるまでもなく慥(たしか)にしようちいたした　ト一間のからかミおしひらいて立出るハ　【七】ヤァ、思ひがけない遊糸さん。ァ、めんぼくねへ【春】なんにも申しいせん。かんにんしておくんなんしへ　トモをあわす　【遊】若野(わかの)からとゞけたみ(ふみ)で心いき

のほどハくわしくわかつた。おれが元の身ぶんになつたゆへけつく七ざんのおもわくもあるものだから。きれてくれろとハきしようがおもしろい。まだそのうへ二階をあけてくれた志のほどかたじけない。おれハこれから。二代目の春風がつきだしをはなやかにして。それから遊びなさつぱりとやめるきだから。切みつけて春風ハ七さんへ進上【七】イヤそれでハわつちがいきつハいられぬ。おめへにハわびにいく所さ ト手づゝの中へ一間より。ばつたりとなげ出す切かミ【兩人】ヤアこれハ トおどろく一間の中。からかミさつとおひらき【長兵衛】すみわびぬわが身なげてん津の國の生田の川ハ名のみなりけり一サ此生田川のとふり、ふたりの男にひとりの女。元ハといへバ當座のうわきで。後にハぎりやかりにからまれてはてハいのちづくになる事も、いくらもあるならひ。そこを見かねて此おやじが なんのいらざるさいばきやく。モシさつぱりとした手ぎれいへ。あつぱれあづまつこの遊系さん。又七ざんが若手をとつて。すべよくされてあやまるとハ さすがハいろしの通り者。おふたりともにかんしんで、どつちへもつかず此おやじが あつかるハ。その切髪。かわいそふに春風ハ尼になりやしたハ トなミだをぬぐふ【兩人】ト腹に手たうつて あつぱれできた【春】たゝつそのふかいハわつちが身のうへ【長】これもきらりと年季をぬいたツレ【春】エイ、これハわつちがねんきじようもんなにからなにまであ りがたうござんす トふしおがむ【長】時におふたり。おいらんといゝあわせたハ。此生田川やで

おちあわせ。兄弟ぶんの盃をめてたふ。むすぶが趣向のこんたん。コレさかづきをだしてくんなせいよ　ト手をたゝく　シャン〳〵

○評に曰ものゝ貞女なると。契情を一ッ口に論すべからず。春風廓にありてハ傾城のいきはりをつくし苦界を出てハ田舎へひつこミ。長兵衛がせわにて見世をひらき二親を安楽にすごし。その身ハそぎ尼となりて世の中を風雅にのがれ。遊糸と七三郎がおり〳〵の音信をたのしミとし。一生不犯の尼にて行ひすましけるとなり。又右三人の客ハ。よく角のとれたる團子の人なり。團子に三品あり。三人の心もまた三色なり。遊糸ハ客色にて白砂糖の黄粉團子といふべく。又七三郎ハいろミたつぷり黒ざとうの小豆團子なり。長兵衛ハさつぱりとした白團子ならずや因て團子と稱す。此本の題号を味ひたもふべしと云云

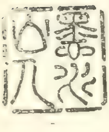
後篇吉原談語大尾

後篇吉原談語跋

夫桃太良が日本一の黍團子といへども。豈日本堤の吉原團子に逮んや。抑團子の製たるや。始金巡り臼の如く。粉になつて后身を碎き。頗世事にでつち克人に煉たるを以て漸團子の爲人。是をや靑樓に耽る者に喩ふ。嗚呼女郎に信あらば團子の四角も出來ざらんや。以是おゐらん。客を掌中にのせて。まろめる事。仍團子の如し

黑水といふ中位な男水引結ぶ

むつまし月初みのうらに識す



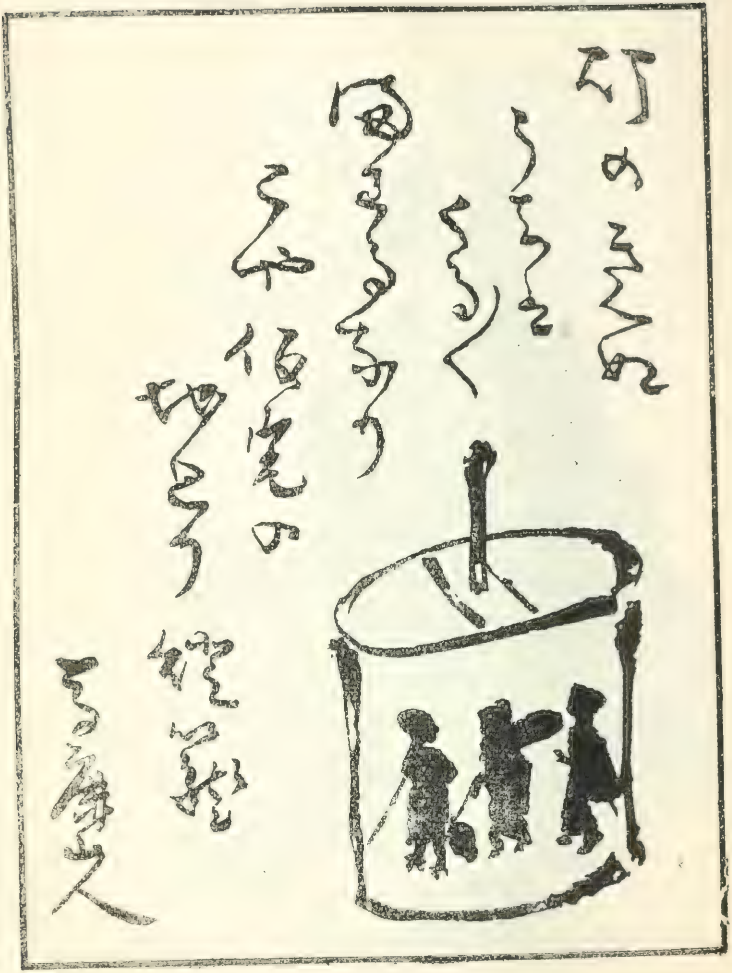
京傳居士陝

序

盛者必衰の理り誰かハ脱れん沙羅雙樹の華の色ハ變にけりな徒に小野の小町もあなめ〱左五中將も終に行冥途とはかねて聞しかど夕朝とハ思はざりけりそれ京町の名妓ハ晋子の猫句に名を知られはた京橋の大人は數多の戯作に名高かりしも分花あまりこつ菊月の節句前無常の風に唱行て婆婆の校作を遁れ法名号て一墓主となり初行ぬ闇道の九品淨土浮世の離行はいかならむや艸紙好諸君子察したまへと如此云下劣はまだ細見の山形を脊負ねど鳳凰の壁の重きは知る雛に咲る鄙菊といふ新造子四十八手ハさて置て三味番の一手もまだ出來ぬ短き才の貫衣布子に睡海鹿の眞似より外

に取所はならの葉の名にあふ宮の古事に居士讀と響の似通へどそへ万葉集こは老杉板衆や桃栗山人の間を忍んで部屋行燈のかげに懸案め懐のうちに校合じれつたいよと癇とつて前髪とともにこの艶史をかく

東垣舎主人述



馬麻山人画

昔(むかし)のたはれ女に
観音(くわんおん)地獄(ぢごく)あり蓮華(れんげ)の
花川戸に刀剣(つるぎ)の山の宿あり
嗚呼(ああ)仮宅の浮世(うきよ)尤なるや
西方(さいはう)なるや

花一本うれて
よしみの
玉かなし

菊子

○

きみは今駒形あたり時鳥とまとこもりしおいらんのほつ句をかりたく。西行もまた見ぬ花のくるれ哉とうそじやこんせぬ古人のほつ句をこゝにほんたくもくろくおわり

四十八手後之卷

馬鹿山人作

○ここへ今駒かたあたり時鳥とまこともりしおいらんのほつ句を　外花街

哲夫成レ城哲婦傾レ城とハ毛唐人の寐語とるにたらずそも外花街のにぎわひといつぱ深川はあづけて淺艸の繁榮御橋から漕出す猪牙は戀推の木にうてうてんとなり川岸裏より離行の長吉は首尾の松に内をあんじ天窓ばかり見ゆる二階格子ハ角田川をへだてゝ稲荷の鳥居に似たり我思ふ人ハありやなしやと左五中將のそゝり哥ハ獨寐都鳥が胸にこたふ梅林庭の臥龍梅ならで好かれてすゝまぬ客あればうしの御前の涎ならで惡忌がられてのろける客あり陽ハ天にして壘の琉球をそしり陰は地にして天井の葭芦をさぐる本店出店と分る内あれバ高直下直を論ずる客あり前から歸れバ後から入り茶楼かと思へば妓女楼の二階なり蓑輪から來る鷄卵賣ハ本所から出る鮓賣と言葉をかわし千住からかよふ按摩は山の手の侍に躓當る呼がかゝつて出る藝者はあい

て歸る臺の物と行合ふ茶屋〳〵の行燈光星のごく圓籠打合におつとりまき騒聲をどつとぞあげたりける所侻俠の諠嘩音たへてひつそりしたる蚊幮の中△（客伊太八廿六七しんなりとして男もよし）「いだ八コウよくめへがんけんくわがあるのうつかりひやかしてもあるかれねへ△（女郎おのへ十六七きりやう人がらもつともよし）「おのへどふしィしても丁のうちよりさう〳〵しうおつスモウかり宅もしミ〳〵あきんしたよ「いだなぜへ「おのなんだかこしをかけていんすようで物がきまりィせんものを「いだそれでも又おめへいゝ事があるだろう「おのなにがへ「いだいろ男にあつたり又ひとつほかにいゝ事がありやしよう「おのなんだへ「いだそれ「おのヲヤおつうおつせへす子わたしらがよふなものゝとこへながくきさつしやる客衆ハありんせんものを「いだごもつてへねへわたしだと命でもあげるヨおよバぬ事だが「おのヨクおなぶんなんす子ほんに今どきの客しゆにハゆだんがなりんせん女郎衆がミんなだまされんすヨ「いだなどゝいつちやァやつぱりだますのか「おのぬしやァよく人にからかわつしやるねへにくい口だのうと（わきの下をちよいとつめるあとたさする）「いだエ、いたミいつてうれしい（ろうかの八けんなにかさわつてぐるりとまハりひさきかしやうじのあいだからさすそのあかりにていだ八がかほをつく〳〵見てみぬふりし）モシエわたしがねがいをかなへておくんなんし（トいふところへしやうじのそとよりしらはのしんざう）モシおいらんへ（へんじなけれバ）モシおいらんへ「いだへんじをしてやんなゝ（ひたいへ八のじをだしふしやう〳〵に）「おのなんだなさう〳〵しいへへつていゝな

ゝ「しんアイごめんなんし　トしやうじをあけてはいりもぢ／＼しながら　「しんモシおいらんへちよつと「おのエヽ
じれつてへ子だのウモシごめんなんし　トはいだしてかやへかほをおつゝけ　なんだな　こゞゑにて　「しんアノ子源さんが
ちよつとおよびもふしてくれとかうしにまつていさつしやるヨ「おの　つんとして　おふかたそんな
事だろうと思つたきざな人だのう　トわらいながらかんざしでまへがみをかき　アノこんやハいろ男がきさしつたからでら
れませんとそふいつてけへしな　いだ八たばこすいつけてしらぬふりをしている　「しんそれじやアわるうおつさア子そうい
われんスものじやアありんせん　トいふ所へわかい者里り助あわたゞしくきたり　「里助山ざしさん／＼なにをしている「しん
いまそふ申ているのだよきついせハやきだらゝいだ「り助おいらんへちよつと　トいへどだまつていれバ
あしをばた／＼して　エヽじれつてへぞヨウ「しんヲヤきついじやうだんものだヨ「おの　わらいながら　なんだ
のばからしい今にいくハな　トいわれてわかい者ハゆくかのしんざうのこゝへ目をつけ　「おのアノきのふからあんばいがわるくつ
てひつこんでいるからこんやハかへつておくんなんしとそふいゝなよ「しんアイ　トたつ　「お
の今かしの方でミやこさんをよびしつたのハだれだへ「しん神田のいのさんに銀馬ばさんざ
います千住とやらへはいかいにいかしつたかへりだとてかうしからおかへんなんしたおいらん
へよろしくとおせへしたヨ　トしやうじをあける　「おのコレサこのたばこぼんをそつちへよせていつてく
んな「しんアイ　トわきへかたづけしやうじをたつてゆく　○あとハひつそりこなたハ二人一坐もつともしんぞうかひろうかをへだてむかふ台て床はき見りしようすこなたの客ハ女郎のこぬにたいくつしちいさなこへにて

一花もけかばに夏のよのそらもなごりと見あぐれバァ、、、引（トあくびをして）ヱ、なぜこんやハねりかれねへかしらん女好子をやすミか（こなたのきやく）「いんやまだねやァしねへちつとこつちへこねへか（じつハくるななれ）「ちつといつてはなさうかまだねるにやァはへゝ（トたばひろとけのまゝきたる）「女郎 わたしの客人ハねてばつかりいさつしやるヨちつとおはなしなんしな「ハイおまいにゝてじやァねへかへわたしやァこんやハちやにうかされたそふでさつばりねつかれやせんときに女好子きよふのくわいハちうつくれへだのウぜんてへあのまきれ丕雄がかちじやァねへこのおふぎを見ねへ成田屋にもらつたおよくかくの（こんな事ハ女郎のまへのミへなり）「一坐 遠波といふ男ハきうくつしい男だの「女好（しかたなしに）そうよおらァこんやハなんだかねむくつてならねへ（はやくいけばよいなに）「一坐 ねむいはづさゆふべの川が大もてだから（うそにもうぬが事おいわれてきうに）「女 川でへべ梅もとのおかねがこつちへくらいげへしたそふだの「一坐 ウ、かの一丁目か「女 ちげへねへなんでも女郎ハ大ミせのばんしんをかうがとくだぜだいいちさんだんができらァ「一坐 山とミやとめべの加介がなげられた花ざぬをおれが此ごろ手に入たが「女 又たれかわつちが心やすくしていたかのしんといふはたけだにほどのいゝ女郎ヨ「一坐 かのしん（トへんなかほをしてかんがへる）「女 おめへもまだいたらねへぜそれ（トおつなめつきをする）「一坐 ウ、おれが心やすくしたけいにつか われていたしんか「女 そうヨあれヨ（こんな事も見へほうのうそなるべし）「女 あれは

あげや町のおきんがいもふとだそふだのゥ「一坐あのおきんがあれをこのごろ「女ヲツト
まつたりまづうけちうんからきめよふモウ奴のかばハごめんだぜ（女郎ふたりのうぬぼれあきれてきいていたが思ひだしたように）「女郎
ヲヤおくにどんにそふいゝんす事をセシヱじきにまいりんすヨ（トはつしこゆく）「一ざどりやおいら
もふせりやしやう（トたちながらこゑをひそめ）「さつきのはおり一げんをきやつらなんと思つたろう（トいふハはおりを二かいま
できゝあがりさとられぬようにあゝあついとぬいで引ずりやらにもたしておかへしまげてこんやふたりのいとめなわ）「女 そりやァ おめへしれやァしねへどんないゝ客でも
はおりを茶屋にもたしてけへすといふハあるやつだわな「一ざそりやァそふだがさつきおめ
への女郎がしんでいといふ事をいつたがどうもげせねへ「女ナニしんでいしんでいたァ心いき
の事ヨ（これもおなじくやくしやなりしんでいとハこゝのうちにかゝりかりたくからのつうけんいろおとこの事也）「一ざそんな事だろうと思つたときに女好子ねま
おとしよふ此あついにだきつかれハごめんだひとりのほうねごゝろがいゝのゥ（まけおしみをいゝこゝはくさてしばらく
しづまる）〇（あしおとはたはたよおれむふたり）「竹の まつのどんたんといおわるをきつせへこんたの事もいつゝけるヨ
「松の そんならいつひきやるからだまつていさつせへ（トくわしふくろからほたるを一ひきやつとだす下へおとす）「アレ／＼そふつ
まむとおちでしまふヨ（トこゝおなやうしに八ツ口からみんどうまめばら／＼）「まつの いゝさうつちやつておかつせへ（トそつととりたいじに
つかんでひとりハゆくかやのうちから）「おの だれだ竹のかいゝとこへきたれんじをちつとあけてくりや「竹の アイ
トすこしあけこれでようすかへ（トゆく）△ひやうし木の音 カチ／＼／＼／＼／＼カカチ「おの ヲヤ

モウ七ッだよなぜこんやハよがミぢかいノゥもしへぬしやァねなんしたかへもしへ〳〵（トゆすりおこす）「ムヽヽついとろ〳〵したモウなんどきだの「おの八ッざいますヨモシエぬしやァおなじミのとけへいかしつちやァねなんすめへねへ「いだなにきよふほりの内のくたびれ（トはんぶんいわさず）「おのアイナ口ハちやうほうなものざんすねへわたしらがよふな女郎だといつてそふおなぶんなんす事ハおつせん（トすこしつんとすれバ）「いだまたそんな事をいつてわたしにきをもませなさるヨじつハかふだわな（トしつかりだきしめる）「おのヲヤほんにかへうれしうざんすヨ（トまくらの下へ手をぐいと入いだ八が手をわきの下へしかせ口と口はだとはだ）△（かしのうたそゝりぶし）「しよくわいにほれてとくおびのゥむすばぬゑんとすへハなるゥ△（そとにまごつく蚊が曰）「いめへましいやつらだ此あついにどこからぞへへつてさしてやりてへ△（あさくさのかね）ボヲン△（あさくさの蚊が）ブゥン

○いかなるや此閨中蚊幮ハ雲となりて涼風にうごき鴛鴦敷物は雨となりて戀水にぬるゝ巫山の夢此床にありや於戯（これさなにをいはつしやる）

○これよりおのへ伊太八たがひに思ひ思ハれいだ八ハかりたく中かよひつゞけ丁へはいつてもます〳〵かよひくるハのこんたん此間のはなしさま〳〵あれどかミかづの多くならん事をいとひてこゝにはぶく

○西行もまだ見ぬ花のくるハ哉とうそじやごんせぬ古人のほつくた

内花街

けいせいにまとなひとハけいせいにうそいふ客やいゝはじめけんとハ三馬先生ハよまれけいせいにまとないとハたがいふた目黒にのこせしひよく塚と地廻り吉公ハうたハれしされバ晦日もなかの月ハいでたまごやきの四角もあり女郎のまぢめとお客の四かくあれバみそかも吉原ばかり月夜がらすハかわひとなきまだはようおつさァ子と明のかねさへうそを月日のねづのばんひまゆくげいしやの駒げたならでながひと思ふ假宅もいつしかもとのくるハとなるかり宅でしやつきんをしよつてひつこんだ子あれバ假たくで佐渡からでさつしやる客人をつかまへてひつこんだ子ありなじミがねにきをもむすこあれバはつがねにはづかしがるしんざうあり付がねにきをつけるおいらんあれバほうバいにきがねをするつきだしありとかくかねのうきよかねがほしいなァハうめがえばかりにあらずたがいにあいたひよびたいのかづかさなりて戀の山よりしやくきんの山高くなりこすにこされぬものびせつくたがひに身のつまりとなりし伊太八ハきのふからのいつゞけたいこげい者のさわぎも今の身にハおもしろからねどやんやといつてざしきもひけびやうぶのうちしづかなり（いた八ハ手をくんでものいわすおのへハひざにもたれてなミだぐんでいるうへざうりのおとはた〳〵と）「ほうばい女郎 いつてもようざんすかへ（なきがほをかくして）「おの アイよくなくつてちつとおはいりな「女郎 ごめんなんし（トはいる）「女郎 いださんよくおながしだ子「いた こうのろけてもすへのどふなるもんだねへ「女郎 すゑハ

いわづとたがひのむねにサほんにぬしたちの身のうへにせめて三日でもなつてミたうおすヨ　ト
ゝにはさんだきんかんのほうづきをとつてふきたがらおのへがかほを見て　「女郎ヲヤぬしやァいつそかほのいろがわるうおすヨ「おのけさ
からづゝうがしてなりイせんからさつき小のうらさんにかミをくづしてかいてもらいんした
トめにうるむなミだをかほをそむけてまぎらしたばこすいつけて二くちのミ又すいつけてやる女郎いたゞいて一くちのむはたく　「女郎わたしやァこんやハまことにいやなきやく
人ざんすヨ「おのこなひだのうらかへ「女郎いんへはつでおやしきさこんやァからだがわ
りいといゝんしてもしやうちしめへいちどハじゆうにならざァなりんすめへつらひ事だいゥ
トがくむくのしつけたかんざしでひきぬく　○しんざうふたり三のゝとがいたじめのじゆばんにつかまつたよふなこへをだしてかけきたりやにへにしやうしたあけさふにする　「女郎なんだヨさう〳〵し
い「しん　ためいきをつぎながら　あの子ひき山さんの客人がへびをふところへ入れてきんしておつかけんす
ものを　ト又おもてにかいのほうへにげてゆくこれハ客人すわ丁でかつてきしへび也　○　引ちがへて又しんざう　「モシおいらんへ小三（こさ）がきのふのへんじをもつ
てきんしたヨ　此小三へしんざうかむろやりてげいしやナトかハゆがりてくはしあるひハさけなどやるなり又みなどたのむ女郎もありくるハ中こぞんしのこゝろよし也　「女郎さつきとつておい
たいまさかをやつてくんなかミにつゝんでようだんすの上にあるヨ「しんアイトはく「女郎
ヲヤようだんすのうへじやァなかつたモシエたんとおたのしミなんし「いだマアいゝじやァ
ねへかへ「女郎でも又おじやまをしてハ「おのヲヤきついこつたヨ勇さんならバ「女郎い
へ〳〵わたしらハぬしたちのよふにしのうのいきようのといふ人ハござりませんまたのち

ほど（トたつてゆくうらめしさふにかけだし）「おの 人の心もしらずいゝきだヨ（トじれてしごきのはしをくひさく）「いだ またかんしやくか
ひきしいものだ「おの ひきしいものといへばぬしやァどふしてもおかみさんをもたつしやるき
かへ「いだ ふたぐちをいふよこないだもいつたとふりたとへうちをおいだされてもてめへとそ
ひとげるといつたじやァねへかしたがおふくろがおれが事ばかりおもつて いて此ごろハろく
〳〵おまんまもあがらねへ「おの さぞおつかさんがわたしをうらんでいさつしやろうねへわ
たしがなけりやァごくろうもしなんすめへに思へば〳〵もつたひないとしつてもおもひきられ
ねへといふのハなんといふあくゐんざいましようあのおとゝひのおくすりハとゞきんしたかへ
あれハりやうにひつこんでいる花山さんがなをりィしたおくすりでござりィすなにやまひにで
もようざいますときゝセシエ金助がなにかねだつたじやァござりィせんかへあんまりあつかまし
いおやじだよそしてあそこのかミさんハぬしがいかしつたらおかしな事をいゝんしたじやァご
ざりィせんか（いだ八へしだらうつむいてものいはす）「おの ぬしやァ 人にばかり 口をきかせて なぜだまつていなんす
へェ、（トくびをふるハしひざへくいつく）「いだ ァ、いてへてめへのしんじつハわすれやァしねへ「おの かの
ものハまにあひんしたかへ「いだ アレカ あれハ五兩二分になつたからか のはなしのをやつと
おやじが與八がめをぬすんでくりまハしおふくろのきものにしのぎをたしてよう〳〵かたをつ

けた「おの そして茶屋の ほうハちつ ともおすませなんしたかへ「いだ 茶屋にしんるい ハさしおいてきんじよにぎりのわるいのが百からもあろうがおれが今の身で百どころか三文のくめんもできるものかこのごろハおやじのかほつきがわるくなつたもつともだてめへにもそんなざまをさせいゝ客をはなれさしたもミんなおれがわるいからこゝの二かいもきよふぎりだと思へばてめへにももふあわれめへ トいゝさしてうつむくなミだがぽちりと女郎のかほへかゝる「おの モシエ トかほをのぞいてミてともになミだぐミひざにかほをあてゝしばらくことばなしやゝありて「おの ぬしにいわふ〳〵とおもつて いんしたが トつゝのミこミ 「アノ源のすかんぴんがぜひ〳〵わたしをねびきすると二三日のうちそうだんがきまりィすしよせんわたしハぬしにやァそハれんすめへこれまでのゑんとあきらめておりんす トなミだでかほへまつハりしミだれげをさゆうへミすがミではらい口びるで一まいとつて手のひらにまろめかんでたてかけた琴へぶつつける ◯ しやうじのそとより「おいらんへ おくにどんがちよつと「おの いまにいくハな トいだ八がかほを見て「おの いわずとしれたぬしの事ざんしやうもうかうなつちやァやりて衆でもねへしよでもすこしもこわい事ハおつせんぬしのおそばにいられねへくらいならわたしやァいきているきハありィせん トふとんの下からかミにつゝんだかミそりをだす「いだへテてめへ そふいうきかてめへにいゝだしにくいからかくしていたがじつハおれもかうだ トおなじくふとんの下からミちかいわきざしをだす「おの びつくりして ヲヤかうまた心のあうもいづもとやらのかミさんに見はなされんしたろうぬしとしねばかの源へもつらあてにもなりんすし思ひのこ

す事ハござりイせんしたがぬしのおとつさんやおつかさんになんといゝわけがありんしよう「いゝだそりやァおなじ事てめへのおやたちもおれをうらむだろうそんな事を今さらいつてどふなるもいお同しんハおきおきをしねへか「おの そんな事をしていんすと又じやまがはいりれしてしにおくれんす「いゝだそれもそふか トひとこしをひきぬきしおぶる〳〵ふるへておもわつ手をはなす 「おの きのよわひはやくころしておくれなんしわたしやァかくごうしていんすヨ トはげまされて又とりなおす 〇 そとよりきゝなれぬこゑにて 「いつてうよしかな おのハハあせるいだ八ハおもハずなきこゑをかくすしやうじがらりと あけていふうりん〳〵たるいつこのつう人つか〳〵とはいりてすわる 「ときにおのさん伊太さんぜんざいく〳〵といゝてへとこだねまづわたしがなかだんぎをするからおやがのこゞとおふくろのいけんだと思つてきいてくんなまだおめへがたにやァおちかづきじやァねへがわたしハ予ぜんぺん四十八手をかいた山東京傳だよきよねん此しやばのくがいをのがれてめいどゝいふとこへくらげへしたがおめへがたにやァのがれねへ中だからこんやがぞうのぼうさんとゑんまのおやかたと三人一ざできたのもおふかたこふいふ事だろうと思つての事よひととおりはなさねへけりやァわからねへがおめへたちハふしぎなゑんだぜまづ伊太さんのおとつさんといふハ四十八手しんの手の伊之さん又おつかさんといふのハしんの手のさきおかさんおめへがたのめへじやァちつといゝにくひがあいほれのちくるいかんたまごの四角といふ中わつちやァあと月から月のも

のを見んせんからいつそくろふだよといふあくるとしごしんぞさんになつてうんだが此いださんおめへがことし廿七になるから廿八ねんむかしだ又おのさんのおとつさんハ四十八手しにはりした手の榮さん十六のつきだし江戸花さんにとう／＼内をらくじやうさせ江戸花さんを身うけしてあさくさへんにわびずまひのうちもふけたが此おのゑさんそれから榮さんがわづらつてよくあるやつだがおやのために身をしづめてながらそかさねたが伊太さんふたりのおつかさんハ女郎衆ふたりのおとつさんハおつかさんたちの色容さしやうべへをしたものにハめづらしくできた子どもハ今かういふなかなんとふしぎなゑんじやァねへかの又おのさんにいやがられる源さんといふお屋敷ハ四十八手見ぬかれた手の家中者尾家敷源吾といふ人のむすこ源三郎といふ人さかの源吾どのハ女房をもつてからまじめになりしよせん女房ハかうものでなしときとつてたゞ女房大事をしんかうしてさづかつたが今の源さん寛政二年よりことしにいたつて親源吾五十一になりやす又四十八手やすい手の果風ハたでくふむしもすき〲でかいくらい戸をこさとつたが三年めにころりとやられだん／＼つまらなくなつてとふ／＼こゝのわかい者となり果助といふとしこれも五十一だよなんとあのじぶんからいく流行すぎたろう此本の作者馬鹿山人なざァまだどこにいたかしれやァしねへ土平あめがじぶんのひつこそかむろも口をむぐ／＼する

口ー人口
アタヨウ
ヽ1ニ
ミヽアヌ
イウナト
ホーーフ
シラメカ
ハカサク
シヤメ

おばァさんとなつているしどふでありますときいろなこゑをしたつう人もまげをゆ屋へおとしでくる老人(らうじん)となりやしたおびやきもいゝいろ事もさめるにはやくあきるにやすくあたまゆものをこせへてやるとかれるといふにちげへなくくしかんざしのなりかたちすたればはやりはやればかれりそぢかひはおりがながくなりながいはおりがみぢかくなりけんぼうごもんをきた人ハむすこのなりをやかましくいふようになりやしたそれだから助高屋をごいきなおばァさんが梅幸びいきのまご娘ニいぢりあいやすとぼけたばァさんからねぼけたかせんせいのはやるじぶんを思へばむかしだといつたらそりやあたよあたぼうといふだろうがこれかしたりはなしにのりがきてとんだ事までいゝだした此しんぢうといふやつがやぼのうへなしといつちやァだれもしんおうなるものゝれねへがありやァわかぎのいたりでそのときのへんさそれだから見なせへ・どいしんおうでもしなねへでもいゝのがわるいきをだしやすまたあつちへいつてふうふになられようとおもうがこれもあてのない事ョあみださんやしやかさんのこそでぬふたりちんしごとトおさゐ新しにやァいふがしばいのよふにやァいきやせんよくあるやつだが半ざをわけてまつているぜへあいぶら〳〵したはすのはのうへゝどうして二人のられるものか九ほんれんだいより五しきの花ふりといつちやァたいさうだが一角の花ふるほどおもしろくもなし三ぞん佛(ぶつ)らいかう

もふたりかむろをつれたおいらんのどうちうほどれおちがきやせんみめうのおんがくも二上ッいたこほどにやァさへず百ミのおんじきもあさがへりのちやづけほどにやァくへやせんいくらいつてもおなじ事いとしいものわいゝもしんでしまつちやァはなしれねへからしぬといふしやれハよしなせへはてどつちのおやたちもむかしのわけしりやぼれしねへきをながくもちなせへわたしもあつちへいつておゝきに心ぼそかつたが淺艸の鬼武竹の塚の東子といふものがこのごろあつちへきて又はなせやす　おにたけ東子きよねん古人となれり　ア、おゝきにながばなしをしたそんなら伊太さんおのさんそのつもりでしやばのごひいきおこさまがたお女中さまがたへよろしく本所のおやかた柳高の主人にもよくいつてくんなおさらばョ　トゆくとおもへばこれふたりがそいねのゆめにしてとなりざしきをさうじするおとにめをさまし　「いだコッおつなゆめを見たよ「おの　わたしもへんなゆめを見んした　トたがいにゆめあわせをして　「いだ　そんならそちがおやたちハ「おの　アイ四十八手のしつぼりした手なかにできたハわたしざんすしてまたぬしのおやたちも「いだ　四十八手のおくのしんの手「おの　またかの源ハ「いだ　見ぬかれた手、おのわかいしゆ里介ハやすい手と「いだ　あつまるところハ「おの　ひとつところ「いだ　おもへば〳〵此ほんの四十「八手ふしぎなゑんであつたナァ　△とこの間のかけもの風で　○カタリ

【作者曰】イヨ御兩人サマありがたいと巾ヤス

四十八手
のちの卷

居

四十八手後之卷

鵆鴦丹

玉明丸

右のくすり陰事に妙ある事ゝ用ひてしるべし長命丸女悦丸のたぐひにあらず

賣弘所 百性六兵衛

當世人情 陰陽物語 馬鹿山人著

深川吉原

蝸牛の角

同作

女げい者のあなをうかゞちたる小冊也

■印　▲◑印　◑印

へまでのこらずかくやぞく

わしううがつ

そつとのぞく

妓娼の樂屋

同作

後編

源三郞里助が

事をかく

のこらず近日出來

郭寧久而壽

廓宇久爲壽序

濁水。情なしといえとも。月を浮べて。自ら。清めたり。草木。言ざれども。雨に値て。自然と。花敷く。和光同塵ハ。結縁の始也。八相成道ハ。以て其終を。論ずるとかや。倩〳〵維看バ。飛花落葉の。初更鐘に。雛妓伽闍の。有爲轉變を悟り。電光。石火の。影の中に。生死去來の睦言も。如何定離の。別苦なからん。夫世の。幻相を觀ずるに。市桝廢れて。大和柿起り。磨草縞裏て。槿花顯る。其筆勢ハ。屠文の兩師。凰東彈妓ハ。志摩登美に。名高く。三弦の醉書ハ。蜀山先生に止めたり。青樓の小格子ハ。卽席料理の。摘ミ物に均しく。西河岸の鶏

舌風呂ハ。青善の。献立に類す。土手八丁を照す。八里半の角燈。皆流行に闇からずト。獨嘆息なしたる折から。訪て來る。通子あり書肆。福壽堂の主人也。于呰先生。去年編る。籬の花の。後篇ハ。ドデス如何で菅薦の。十府から。待て居ますると。グット眞面な。催促にヲツト呑込。山櫻と。筆を採て。はなや今宵の。主人とハ。實に此廓の。語なるべし。落花もとより。心あれども。流水更に意なし。行ものハ。如斯耶。晝夜を不捨。嗚呼繁花哉春色。人を惱して。眠を得ざる叓ぞ

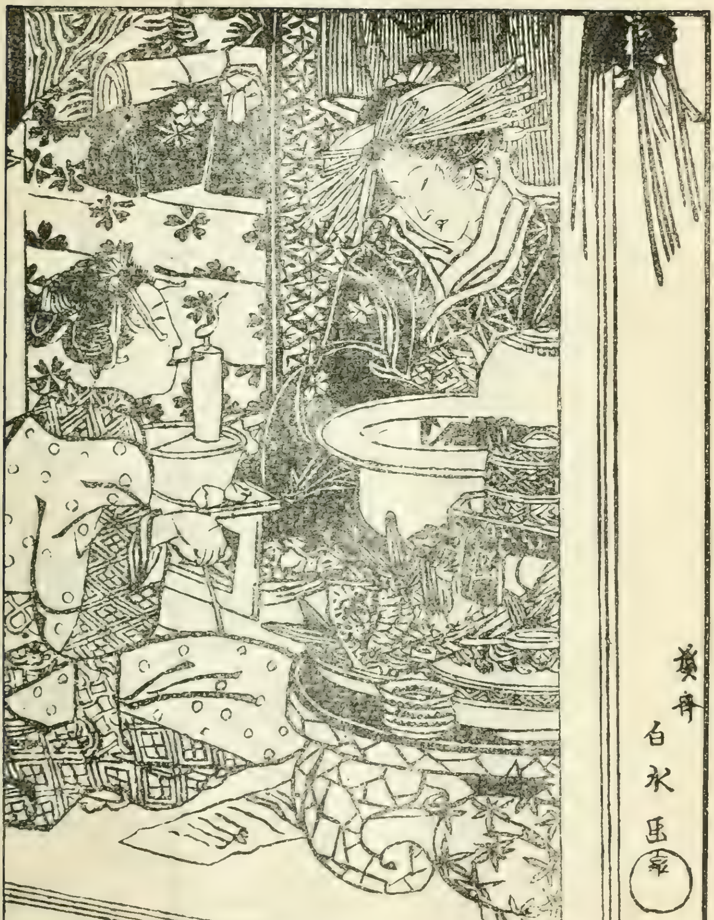
豊樂郷之隱士

戊寅三月春　雲山人誌

○目　録

○前章ハ　入相の鐘なりけりや己が身の。暮るを知らで猶をまよふらん。そのこゝろハ淵變じて瀬となるの聲。寂々として口を閉す

○後章ハ　花よりもあだなる身をバ持ながら。春を遲しと待ぞはかなき。そのこゝろハ沙長じて巖となるの頌。洋々として耳に滿つ


英斉
白水画

五.

籬の花後編

廓宇久爲壽

山人著

〇前章

花街の春色。柳栢の光景。俯て察。仰で觀バ言語はなの。四季倶に。紅白妍を爭ひて。貴妃を欺き。李夫人を壓す。その章臺に。登るの驕奢黄金を。礫のごとく。鼎を鐺のごとくに。擲て聊かも惜む心なきハ。殆俠客の謂なるべし。榮枯哀樂の相追ふと。昨日の現今日の夢。誰の常有とせざらんや。人皆目前をのミ識て。背後を視もの少なし只時を得。勢ひに乘じて。遂に亢龍の悔あるとを知る者ハ。古今に稀なり。爰に龜屋の客。忠兵衛ハ梅川に。相馴染てより。虚をハ除て。眞實づく互に漆膠の。契り深かりしが。情を鬻く身の悲しさハ僞惑。神も浮萍の。藻に住むしの我からと。與所にもまさなき人ヤあり。同じ情の捨がたくて。風に尾花のいと乱れつゝ。結ぶ契りも淺茅尾の。おのゝ篠はら忍れど。あまりて人の目に洩れ。いつか

仇名も。立田越。ふた道懸る事もヤと。疑ふ中の島屋の。きやく八右衛門が身を。戀の敵と思ふものから。其身も龜ヤを當分斷。中の嶋ヤの客となつて。梅川がもとへ通ひしかバ。梅川これを殆と心遣ひし。中〳〵忠兵衛に換て。八右衛門に身をまかすべき心ハ。露ばかりも。なけれど。爲にハ義理の愁しくも。嬉しと花の移香を。とめて見せたる。憂氣おもひ忠兵衛ハ。いよ〳〵心も荒磯の。浪に流るゝ捨小舟。定めなき身そ恨ミなりと。忍ぶにあまる戀衣おもひの丈を。梅川が色ゝと。言譯しつゝ此うへハ。客もとるまじ。仲の町へもいでまじと。堅く誓し約速も。けして虚でハ内所から會禁も金。忠兵衛が爲ぞとおもふ。一圖よりさすが如才も。仲の丁八右衛門が迎ひとて。出るを知て忠兵衛が。約を違ひし服立に。人目も恥ず梅川を。打擲なしたる傍如無人。何解語もあらし吹。三室山のむら時雨氣も紅葉ばの。いろ〳〵と八右衛門が手まへ今は。詮方なく〳〵も。想ひきり〳〵髮切て。漸ゝ濟すもミな金ゆへ。トハしら菊の露ならで。置まどはせる忠兵衛が。或夜の仕工梅川が。入髮の鬚引抜て。若ひものを呼つく。我ために仇なる浮名も。口惜ヤ是見よ斯る薄情女。かならず此后。媚施容語ないはせぞ。あきれつゝと。暇乞さへそこ〳〵に。立出る折から。鐘四の拍木。カッチリそめし紅葉傘。時雨にひらきし前編の。末意ハ荒增かくのごとし【忠】かめヤのふれんをくゞり 久しぶりで。なん

だか敷居が。高ひやうだ。お鶴ぼう此間ハ トいひながらずつとあがる 【つる】 女ぼうなり ヲヤ忠さん。よふ入つしやりました。誠におひさしぶりで。ござります子 【忠】 ひさしぶりでもねへ。先刻五十間で。見かけたぜ 【つる】 ヲヤそふでござりましたかへ。さつぱり知ませんで。お見それ申ました島屋へ。お出かけでござりますかへ 【忠】 イヽヤもふ嶋やも。面白くねへから。矢張もとい通り。此内に仕ようと。おもつて來た譯サ ト火ばちのそばへすへるていしゆ 【龜吉】 にかいよりおりてきたり これハ忠兵衛さん。入つしやりませ トひざを一ツとんとたゝひて火ばちのそばへすへりおつるにむかひ 二階のお客さまハの。此間のうらに入らつしやるつもりだから。お送り申て來さつせへ。行がける竹むらの。臺の物を忘れめへヨ 【つる】 アイ ト立ながら 喜八どん挑灯だヨ。お履ものもこちらへ廻してよ ト二かいへあがる 【龜】 モシ梅川さんい。昨日の様子も。承給ハりましたが。どふいふもんでござります。何かしまヤも困たようすで。ござりましたが。濟ましたか子 【忠】 井戸堀の。棚おろしを見るやうに。濟のすまねへのと言た所が。おさまらねへ譯サ。いつてへアノ梅川と云女郎ハ。見かけによらねへとんだ。浮氣ものだヨ昨日の譯から。此と又聞た事もあり。どふも内に居ても氣が濟す。といつて知ての通りの譯で。上る事もならねへゆへ。遣曲工面ですこし斗。今夜片を付直に梅川が所へ行て見た所が。すつぱり此方の思ふとふり。グツトあいつが。入髮を引拔て。そんなにきもを潰させた理

屈さ。あんな女郎たァ。知ずに迷つたもこつちの不運とハ。言ながら突出されたと。おもふと
どふも心悠事。ぱつかりサ夫ゆへ。ろく／＼暇乞もせず。駈出してこつちへ來たも。本木に增
る末木なし。昔馴染の所が。矢張頼母しい譯サ【龜】すこしかんがへ 然しながら。夫じやァ嶋ヤの前
が。どふも悪ふござります【忠】何にも悪ひ事ァねへ懸の片も。すこしは附て置し。此うへと
ヤかうと言へば。奇麗に拂て遣るばかりだ【龜】そりヤァあなたの。御氣性だから何にもそこ
の所じヤァ。ござりませんが只梅川さんのところが。お氣の毒の譯さ子【忠】梅川がとァもふ
思ひ切て。仕廻やした。是から又あいつが面を。踏んで見せねへけりヤァ。胸がはれヤせん
【龜】そりヤァあなたの御疑心さ子梅川さんに限ちヤァどふもそふじヤァござりますめへ
トはなす所から二かいのきやくどヤ／＼とおりて來る女はうおつるつきそへおもてへ出る
【龜】サよふなら御機嫌よふ【忠】もふそつちこつち引だら
うまァ出かけて來ヤしやう【龜】まァ一ッめし上て トおさだまりのすゞりぶたこうしさかづき先刻よりこゝに出しあればすぐにつぐ 【忠】
ヲツトありサト ぐつとのんで サァおあずけだ今日ハ昼間から呑續でせつねへ／＼ トかほをしかめてさかづきやる 【龜】
モウおひとつ【忠】モウいやだ／＼【龜】サよふなら ト手しやくでつぐまねばかり いづれにも一寸と嶋ヤへ入
らつしやる方が。よふござります【忠】どふか法が。ありヤしやう ト又いそひでかめやお出立るおもてにてたいこもちまんト忠兵衛を見つけて
【万】セシ 若だんなどふいふもんで。ござりますへ 私ハ。あなたが入らつしヤつたト聞。急

ついで行た所が梅さんハ。癪を起て一向むちうの大騒ぎ。嶋ヤの仲命に。承給ハつてそちやァもふ。強勢に膽を。潰しました。それにいま／＼しさハ。あまり急いで駈るとて。あすこへ這入といふ拍子。向ふから來るやつに。突當てコレごらうじませ。馬鹿聟の。やつとこサトいふ。瘤が額に此通り　トなでゝ見せる　【忠】わらひながら　その突當たのハ。おれだヨ【万】エ、あなただへ。それとハ知ず痛さいまゝに今まで恨めしく。思つて居ました。夫ハさふと中い嶋ヤも梅川さんの前が。どふも御氣の毒でござりますゆへいつれにも一先。お連申て來て下せへト。頼ゆへヲツト呑込山水天狗と。鼻を高くして嶋屋へ駈付ました所が。お見へなされずこいつァ急度。亀ヤと見込で。めへりました所ハ。きつうござりましやう何にいたせ是にやァ。急度深い譯がつ　ござりましやうから。いづれ胸をさすつて入らつしやる事ならう【忠】まァ／＼おれと一緒に。來るがいゝト　トお万を引つれ京丁へまがるまんりハむめ川がもとへいたる事とおもひあとについて行ト忠兵衛まひづるやの内へはいる　【万】びつくりして　モシワか旦那　トこゝをたゝる

【忠】ヨシサりくつハねへ　トいふゆへまんりもしかたなしにあとへついてあがる　【若】入らつしやりませ　トさきに立てあんないしま[illegible]へともないあんどらをかきたてゝ　よふ入らつしやりました。今ばんハよほどお寒ふござります【忠】大きにサコウ若楽亀ヤへ人をやつて下せへ【若】ハイ／＼　ト出て行引かへりて一かむろとうせんのさゆを二ツぼんにのせてもちきたり出す　【万】とつてハイ　若だんな　ト忠兵衛にやりのこりの一ツをとつてぼんをかむろにかへしかほを見て　ちつと見ねへ内に大きくなつたのコレ／＼なべ鶴さんによろしく

巾て下せへ【禿】しりいせんよふ トたゝくまねをして出て行【忠】里八と藤兵衛とおゐいトおくまでもそふ言
つて遣りやな【万】かしこまりました三味藤ハ二めへいゐなたいお跡を慕て來るつもりでござ
りますが此等もきつと當惑て大方龜やへ搜してめへりませう トいふところへお定りかすゞりぶたてうしさかづきだいいづる コレあの
子や分八どんにそふいつてのおゐいぼうトのおくまぼうを呼ぶのだヨ お客なら筆吉ト秀次が元
氣でよからう【禿】アイ トたつてゆく【万】まづ一ッめしあかりませ【忠】いかさま心のおち付た
所で一抔やらうかノ トさかづきをうけるかめやのていしゆかめ吉「たうべい」「り八つれ立來る【龜】大方如斯事でござりませうトぞんじて
お迎ひに來るをまつて居りました【藤】へイ御機嫌よふ【里】だんな些と計おうらミで。ござ
ります【藤】こゝに罪の深へやつが。一人居やす【万】定ておまごつきト。たつた今その噂サ
【忠】龜八今夜の趣向ハ。舞鶴だヨ トいふハ一トくらゐたかきにのぼりてむめ川がつらをふまんとおもふしうちなり【龜】これをさとりむめ川よりすこし上おもきまいづるをかへはあとむづか
しとおもへどもゐきはりづくの矢さきなればゐけんするともきゝ入れまじとせうちして 隨分よろしう。ござりますさりながら一寸承給はつて。まいり
ましやう トたつて行 一體此龜やハ通りよき。茶やゆへ舞鶴も幸ひ客なきまゝに。座敷のようすも
殊の外。よけれバ大に歡び。若い者分八に。斯と つげて寄り【龜】モシ忠さん上首尾で。ござりま
した【忠】そいつアありがてへ。お骨折／＼ トいふところへげいしやふで吉ひで次きたる【筆】【ひで】ヲヤ忠さん御
機嫌よふ トわきをまねて どなたにも【藤】サアノ＼賑やかに成て來た。兎角色好ようだが婦人の事が 折からかむろ

【ひな次】【つる次】（おもたさうなくびをしてするりつくいてしんそう）【ひなづる】（おるワかひめのも氷り）【分】（かめヤにむかひ）さやうならあちらの。お座敷へ（トあんないにつれてミな〳〵まいづるがざしきにいたる）そも〳〵舞鶴が。座敷の光景といつぱ。先上の間どりハ。十二疊敷床ヨの間にハ。探幽の山水の懸物。風袋ハ紺地の古金襴。一文字ハ竹屋丁。薄端の花器に四季咲の。杜若を挿たるハ。淺草蓮馨と見へる根〆。違棚の上にハ。湖月萬葉の哥書廿一代集をはじめとして。題林八重垣秋の寐覺。種〳〵の書物を飾り。唐机にハ王義之。文徴明の。法帖物をならべ。臺硯の脇に筑朱の筆立。孔雀の尾。勿論あり琴ハ瀧の俤を移し。双六盤ハ。虞氏のおもひをなす。惣體襖にいたるまで。張付ハ金紺青の。舞鶴の模様中の間ハ。八疊敷こゝにハ何にもなし。末の間ハお定まりの。六疊敷高蒔繪の長持の。上にハ二重純子に。緋びらうどの。額蒲團きん糸で。舞鶴の縫ある。黒びろうどの夜着。却て重ね單笥に。至るまでさすが見る目も。光榮てあたりも。照くばかりなり【忠】（かたくらに大火ばちたかま〳〵てくわん〳〵たろようほういわゆるくわん平ほうわうと〳〵かゝる事こそいふなるべし）おの〳〵（座さだまつて）【筆】（さゝせんのてうしをあハせてひく）【ひで】（ニてうつゞミ）【藤】（うた）よろこびありヤ有明の（トほんの座付のしうぎなれバ）袖をかへしておもしろヤチヤン【里】【万】ヤンヤ〳〵【龜】一寸あいの狂言に。忠さんお盃（トあんないにしたがつて）優〳〵然と入來るハ。花街に羽をのす舞鶴が勢ひ。さすが威あつて猛からす。巫女廊の花ハ。黄昏の露に色まし。照君村の柳ハ。雨の外に翠をなす。知す月

宮の綾伽。天よりや影向けん。龍宮の乙姫地方ャ。爰に湧出しかと。暫時言葉なくして。お定まりの盃カッチリお着替ト。舞鶴座を立前後の光景種〱の興増」色〱の滑稽流行い花言等、数多ありといへども。混乱しければ。これを畧言【分】こしをかゞめて手をもミ〱きたゝかめやにむかひ小こへにて チトお片付にいたしてハ、どふでござりませう【亀】いかさまもふ引過だの トうなづき モシ忠さん。チト切あげのちよん〱幕れ。どふでござります【万】いかさまチト。おやすミの辺に月ハ入けり。などもよふござりませう【亀】ふで吉にむかひ 先商賣道具を。寶藏へ收めなせへ【忠】まだいゝじやアねへか。紺屋丁の夕立を見るやうに。周章て仕廻ふ事もねへ【ふで】しかしながら。おゐらんの思召も。如何なれバ【里】おきヤアがれ。矢張はやく歸りてへやつよ【藤】秀ぼうなぎァ。さつきから後を向いて。屈意を幾したか知れねへ【いで】ヲヤいやたヨ【万】大方千ほど。出たらうあくび千出と いふから【里】こいつァ悪い〱【亀】サァまづお小用に。入らつしやりませ ト忠兵衛をさきにたてゝろう下へいづる【筆】【秀】さきにたつて小べん所へあんない【藤】【里】【万】も跡に付添て 小便所まで送る此内に若い者兩人して手ばやく取片付て床ヲをまハし。本間の光景忽ち。寂寞となり次の間ハ。臙脂皿き鉢。ろうぜきとして煤拂のごとし。禿おい〱是を梯の下口迄運び出す。只屏風の外にハ。大廣盃の二ッ物銚子さかづきのミぞ。殘りける【忠】小べん所よりかへりきたり ア、強氣に醉た

〳〵【龜】サア〳〵ちりと。お休ミなさるがよふござります【忠】ナアニ寐むひ事ァ。些ともなしだ　トいゝながら床ノ上へあがるもつともきたるはおりれせんこくぬがせてしんぞうが仕まひしなり　【ひな】らくやきのちやわんへうすちやを立てもち來りいだす　【忠】こいつァきめうだ　トとつてのむ　【龜】さやうなら。ごきげんよふお迎ひは。例の通り【忠】なんだか内を。案じるやつだノ【龜】とふも恍惚ござります【忠】そふ地かねを出されちやア。むり止も罪だはやく歸つて。顔を見るがいゝ【龜】ありがたふござります。サア〳〵お暇が出たから御勝手次第　ト下たでにむかつておひらきにしなせへ【藤】そんな一緒に。目高鉢と致ヤせう　トめい〳〵ごきげんよふ〳〵とあたまをさげておんを引かめキれすこしあとへのこりて

【龜】雛鶴さん。おゐらんへ宜敷お頼ミ申ます【ひな】モゥお歸りなんすかへ。おかみさんへよろしく　トわかれる　今まで賑やかなるも大風の吹し跡のごとく。静穏として唯ポッチ〳〵ト私語聲（間にハ雛妓の妄言。酒客の。鼾のミ殘りて、夜もはや全〳〵に更にけり。舞鶴ハ今宵初會の。客なれども仲の丁でハ度〳〵見懸。又梅川と深き中なるとハ。誰知らぬものもなき。忠兵衛なれバ。不審所爲とおもひつゝ床に到る【舞】おやすミなんしたかへ【忠】まだサ【舞】たばこたすいつけ　アイおあんなんし【忠】こりヤァおかたじけ　トうつむけにおきかへりてのむ　【舞】モシイ主アどふしてまァ此方へは。お出なんしたへ【忠】なぜへ來ちヤア。悪ひかね【舞】梅川さんといふ馴染の。あらつしやる客人を呼申ちヤア。悪うおざりいす【忠】そこをふり捨て來るもよく〳〵な

事ト。察して不便だと思つてくんなせへ【舞】ヲヤそんな想ハせぶりを。お言なんすト罪になりいすョ【忠】實の事ッ。初會からこんな事を。いふのもあんまり馴〻敷譯だけれど。まんざら見ずしらずといふ。理屈でもなし嶋ヤの内でも。落逢ふて度〻見懸た。おめへの事なれバ。秘隱ず打あけて。今夜初會に上ッたも。はやく言バまァ梅川に突出された譯サ【舞】なんぼ主が。そふお言なんしてもそんな知て居るす。梅川さんとの譯どふして。そふいふ事がおざりいせう。虚をおつきなんし【忠】おめへ方にまで。そふ思ハれるといふも。身に取てハ嬉しいけれど梅川が薄情事にハ。娼妓こんぜうの木地を顯し八右衛門といふ客の。襟に付て欲張きつた。さもしい心あの約速も此約速も今じヤァミんな。反古となり。そでねへ仕打をされて見りヤァ。足元のあかるいうち。此方から身を引て。あいつが面を踏ねへけりヤァもふ此廓へ。つら出しも出來ねへ譯。それゆへわざと爰の内へ上ッたと。言ちヤァどふか氣まづひ。よふなれども。是も苦界と堪忍して。どふぞ突合たくんなせへ【舞】そりヤァぬしの。短氣といふもんで。おざりいす梅川さんに。どふしてそんな心ハ。おあんなんすめへけれど。それにヤァ深い譯もありいせうし。餘心バまた惡ひ事か。おあんなんすならよく異見して。おあげなんすか。よふおざりいす。しんに迷いゝすト。どふしても愚痴になりいすもんで。おざりいすョ【忠】

人の異見を聞よふな。女郎なら頼母しいけれど。只欲心にばかり迷つて。客のふりに附よふに。なつちヤァもふ愛想盡しさ　子【舞】そりヤァ主の。疑心といふもんで。おざりいす。欲ばるのも矢張。恍惚男の爲と。苦勞を致いして勤めへすを。夫をそふとも想ひれへせんとしんに心怒て。遂愛想盡しも申しいすが。言つた跡じヤァ後悔して。誤いすが女郎衆のあたりめへでおざりいす。梅川さんだつてなか／＼主を袖になんす事ァもつてへねへこつざんすが。觀音さんかけておざりいすめへと思いゝすゆへ。堪忍してどふぞ行て。おあげなんし　ト火ばちのそばにつくはつてゐたの手をよこつ腹へあて右の手で火ばしをもちはいの中へのゝ字をむせうにかきながらいふ【忠】そのよふに眞實に。いつてくんなはる所ァうれしいが。梅川がおめへのよふな心意氣なら。何にも言分なしサ。わつちもあの女郎にヤァ。騙されてむだ金も意地づくと。まァ外聞の惡くねへよふに。是迄突合たも。末始終ハ世話にもしよふと。深く迷つた丈。つきだされたと思ヤァ。グット腹が立てもふ／＼。二度と再ふり向て。見るも嫌になる譯サ。何も手めへの恥を手めへがこんなに。並べ立て猶／＼恥を。かくよふなれど又そこにヤァ。捨る神あれバ。助る神もひよつとして有たなり。あいつが面を踏やうな。事にもならうし今と成ちヤァ。はかねへ事だが。木から落た猿を見るやうに。取付枝もねへ身のうへサ　トすこしふさぐ　【舞】しんにそふいふ譯で。おざりいすかへ夫じヤァ梅川さんも。つまらねへ女

郎衆で。おざりいす主と梅川さんとの事ァ。仲の丁でも噂が。ありいす中で其よふにぬしに。思ハれなんすといふも。よく〳〵な事でおざりいす。一ッたん浮名も立られた。くれへなら何所がどこ迄も。呼とげ申されへけりヤァ。遣手衆の手めへも。外聞が悪ふおざりいす【忠】義理と意氣地を。立る心じヤァ。まァそふいゝふものサ子。おゐらんのよふな女郎衆ばかり。廓にありヤァ何にも。客人の腹の立ㇳァねへ【舞】ヲヤわつちも客人にヤァ。度〻腹を立せへして。氣のどくな思ひを致しいすヨ【忠】そりヤァ客人の悪ひのだ。ハテ女郎衆だつて面白事ばかりあるもいでもなし心持でも悪ひ時に嬉しくもねへ事を言れると腹も立客人にも心を怒るような事があるものサ子そりヤァ女郎衆の身のうへにありうちと了簡すりヤァなんにも腹のたつ事ァ些ともなし馴染で來るうへからハしんじつづくの所が頼母しい譯サ子【舞】そふ主のように捌分客人ばかりお出なんす女郎衆に苦労ハおざりいせんがどふも想ふやうな客人のおざんせんにい。しんに苦労になりいす【忠】外の女郎衆ハ知らねへが。おゐらんにおひちヤァ。其苦労ハなしだらう【舞】傾城に苦ハないものㇳ。見ヤしやんしたら間違のㇳ。矢口の道行にありいす通りでおざりいすのサ【忠】いかさま全盛に。おもてをはれば張るほど又それだけの。苦労が内證にあらうといふもんさ子【舞】そふでおざりいすから。どふぞしんじつな　相談あひ手に

なる客人の有いす。ように信心を致しいすが。どふも不仕合でこれぞと思ふ客人も。おざりいせんから。しんに苦勞を致ひす【忠】こりヤァどふ虛らしい【舞】アレサほんのこつざんす。見へにも有と申しいす所を。打あけてチかう言すれ。よく〳〵の事ト。さつしておくんなんし【忠】虛にもそふいつて。おめへも呼んでくんなはる心意氣なら。どふぞ來て世話をしてあげてへの【舞】ヲヤそりやァ。しんの事でおざりいすかへ。おだましなんすト罪に。なりいすヨ ト火ばちのそばをたつてきてふとんの上へ身をもたれる【忠】馴染の女郎にヤア。突出されるしこんな間の悪ひ時にの どふして虛がつかれるもんか。自惚らしいが嫌でもねへト思ひなはらバ。どふぞ呼でくんなせへ【舞】もつてへねへ主が。その氣でお出なんせバすへ長くよびとげへす。氣でおざりいす【忠】トハいふもんの今夜ばかりの。合せ鏡なら思ひのたねだから。唯ひと通りに突やつて。くんなせへ【舞】ばからしい。ぬしも梅川さんの事を。打あけておつせへすから。初會の客人とも思いいゝせず。こんな事を申しいすのサ。一通りにおもひいすくらゐなら何にも。こんなに氣ハ揉ひせん トたばこをすい付て出し 屛風をぐるりつトたて廻して。襠をぬぎ。夜着の中へ。這入 作者いわく〳〵たゞのなり【忠】今まで恥をかいた代りにヤァ。是から又梅川が顔を踏んで。見せよふといふのも。おゐらんの心一ッだヨ【舞】呼びもふしいす。うへかられ主の顏の。泥れへすやうな事ァ。致イせんけれ

ど。焼ぼつ杭にハ火が附安ひとか。申しいすからひよつト又。梅川さんに見限られるやうな。事が有ィすと。どふも済ィせん譯になりいす【忠】ハテいつたんわつちが顔を。立てくんなはるもいな。何所が何處までも。またおめへの顔を立ねへけりヤア。人情が済ヤせん。そんな未練な心が有りヤア。何にもこんなに氣を揉わけハ。些ともねへのサ。まだわつちが運の能のにハ、仕合トおめへのやうな女郎衆に。出會てまんざら。わつちがいふ事も少しハ。推察てくんなはるもんだから。夫をかからに梅川が顔を。見けへす氣で居やすのサ【嫌】嬉しいが其氣でお出なんせば。しんに嬉しうおざりいす。様ざふうに申しいすがネ。いくら客人がおざりいしても。しんじつ相談相手に。なるやうナ客人ハ一人もおざりいせん夫だからネ。どふぞ時〳〵お出なんして。末始終迄世話をして。おくんなんし【忠】來るからにヤア。言ず共すへの末まで。世話をして悪だト言れるまじヤア。女房にする氣サネ【嫌】にっこりとして ほんでおざりいすかへ【忠】ハテいつたん言ひ出した事ア。反古にしねへ氣せうだから。そこで女郎衆にヤア。欺されやすいのサ【嫌】外の女郎衆ハ。どふおざりいすカしりいせんか。わつちやアとふも主に欺されへすやうで。くらうに成ィすもセシイ。はづかしい事ざんすが。しんに迷ひィしたヨトぴつたりとして アレサおさげしミなんすト。罪でおざりいすヨト。跡ハポツチ〳〵の閨話にて一向に聞

とれず。是正に花木實を。むすぶの。時なる哉〳〵　しばらくあつて【忠】しんじつその氣でありヤア。直に翌日居續して。初會馴染も迷情やうだが。梅川に膽を潰させて。やりてへ【舞】ャッかふ何もかも。打あけて申しいす。うへかられ。どうとも主の心まかせに。成ィせうがそこれ迠主も梅川さんの所へ。お出なんしてまァ浮名も。立なんす程の中で。おざりいすものを定めてお言ひかれしなんした。事もたんトおざりいせうし。怳惚したうへじヤア。ほり物も致イすやうな事が有ィすが。若しひよつト。そんな事でもおざりいす譯なら。主も隱さずに。いつてお聞せなんし【忠】成程おめへのすいりやうの通り。ほり物もして居やすが。そりヤア今にも消して仕廻やす【舞】そんならきれへに。消てお仕舞なんすかへ【忠】知れた事サ。あいつが名を火あぶりにしても。未わつちが腹ハ癒せん。したが人の事ばかり。咎め立をしても。おめへの身のうへに闇事があつちヤア。罪が深へによ【舞】そりヤア。些ともおざりいせん。寄れいなもんで。おざりいすョ恥かしいこつざんすが。怳惚した客人と。いつちヤア今夜がはじめてゞ。おざりいすものを【忠】こいつア。どふも虛らしい【舞】アレサしんのこつざんす。疑意なんすなら。どこでも改めてこらうじいし　トあをむけになり雨ほうのうでをまくつて見せる　【忠】その白ひ所へ疵を附させてやりてへの【舞】梅川さんの名を。お消しなんしたうへじヤア。どふとも主に此彼れ。

まかせへす氣で。おざりいすョ【忠】夫じヤァまふ片時も。かふして置がいやだ トたばこをすい付ておきあがりうでをまくりすいからにてほり物のやけあと／＼とな【舞】アレサお待なんしたしか袋もぐさが。おざりいした トおなじく／＼おきあがりたばこ盆のすゝにあるこばこの引だしよりもぐさをとり出して こりヤァ此間だ客人にたのまれて淋病の薬を。こしれへした殘でおざりいす。それがやくに立ィすといふも。矢張深ひ緣で。おざりいせうりん病の藥を。娼妓の製す事。諸客知る所なれバ。其法を誌さず。もつともその家／＼によりて。少しつゝの劑ハかハれども。艾薬の黑燒ハ。大概加味する事なり【忠】こいつァきめうだチットあかるくして。くんなせへ【舞】たつてあんどうをべらぶの内へ入れる これでようおざりいすかへ「これより忠兵衞ハ。もぐさをもつて腕のほり物梅川が名を燒消す。此うち舞鶴ハ。しかミ火鉢の中の炭を。まん中へ掻寄煙草盆の。火入の火をとり分てプウ／＼／＼／＼ト吹おこし。屏風の外に有。銚子をとつて。燗をする。夫人の心を惑す事。色欲にハしかずト實なる哉。和漢ともに女の爲に身を過まつ事。あげて算べからず。哲夫ハ城を成し。哲婦ハ。城を傾く恐るべし／＼」【忠】サァ此とふりだ。是でいひぶんハ有めへの【舞】ヲヤ／＼眞赤に腫へした。さぞ炎うおざりいせう子へ【忠】なァに。そんなでもねへのサ【舞】まァ一ッおあんなんし トさかづきをとつていだす【忠】こいつァ有がてへ。ア、能燗だ ト一二はいのミ モゥそつちだ。こつち夜が明るだらう。チット寐る事に。しやせう トとこへは

いる

【舞】アレサまだ色〳〵はなしがおざりいすから。おねがし申ハ致イせんコト（びやうぶをねとのぞくたて）まへしておなじくとこへはいる　○評に曰く忠兵衛今宵初會とハいへども。兼て相識る中にて。舞鶴も情移に。おもハざるの心より。互ひに言を明白になす事。是ひとへに人情の。然らしむる所ならん譬へ一夜といへども。百夜の契りを結ぶハ客の才不才に有か。將娼妓の愛縁奇縁に。よるならん耶

○後　章

天地開くるの始め。清るものハ靉びいて。てんつる天となり。濁れるものハ沈りて。ちんちり地となる。そが中に人有て。三才の糸をかけまくも。實ヤ賢きかミごまに。三弦の棹しかい。八乳の音じめ弾立て。客浮しに騙し給へバ。金はかりに遣給ふ。神代のむかし〳〵より。千早振るゝも情染も天の岩戸の床の中。闇きこそ尚おもしろからめ。情も細女のみとのりに。腹をたちからをの。力瘤ハ大に神がる事なるべし。爰に舞鶴が妹女郎。折づるが客風子會方の。とり扱ひが氣にくわねへと。言て夜更小更に。若ひ者を呼付。床のうへに大安坐銀の煙管を。

ヤニサにかまへて。人惡の太平らく【風】コレ爰の内の。家風かァ知ねへがナ。成佛不遂た幽靈を見るやうに。時〴〵面ァ出しちヤァ。姿隠去る女郎を片じめへだの早仕舞だのト風ッ吹

の湯屋を見るやうな。名を付てお客さまへ出しても。濟と思ふかへ此方がナおゐらんごかしで。突やつて遣ァ道具市の。入札を見るやうに。おかしく附上るのが。氣にくわねへ【若】それい頓だ事で。ございます【風】葛西舟の元メじヤァねへが。糞おろしにする事も。知て居るがそんな事ァこつちの畑にねへてんだ【若】至極御尤さまでございます。皆あのお子が悪ふございます。へイ〳〵〳〵【風】コレ釋迦い。誕生を見るやうに。首から茶にされちヤァ。猶了簡がならねへわへ【若】イヱどふ仕まつりまして。茶に致すのいたさぬのト。入仕事い普請場でもございませんへ、、、、どふ致してへイ〳〵（トむせうにあやまつて居る客へいよ〳〵まつかくなつてたいへいをならべるところへつんとして入り來る）【折鶴】何さんすへばからしい。若へ楽をおよびなんして。大きな聲も氣の毒でおざりいすョ。腹のお立なんす事が。おざりいすなら堪忍しておくんなんし。ばからしい（ト若ひ者にむかひて）モゥ此たァ行せへョ【若】ハイ〳〵さやうなら。御機嫌よふ（ト雨の手をたひねくりながらろう下へ出て心で大べらぼうの大はなたらしめト口のうちでいひながらゆく）【風】馬鹿なつらナおとなしくして。居りヤァあんまり安くしヤァがる【折】なんざんすへ。もつてへねへ主のやうな客人を。麁末に致ィすト罪があたりいすョ。何事も子たらわぬがよい。事ざんすから可愛想だトよ。見すてずにどふぞ來ておくんなんし【風】コレそんな。古ひ手を出してもナくふやうな。お客さまじヤァねへわへ【折】ヲヤばからしい主ァ手をおあんなんすかへ。大江

山の酒呑童子を。見るやうでっ　おざりいすねへ山伏さんの料理ばんか。切て居す所か。小冊草ざうしにおざりいすヨ【風】コレ悪くしやれるなヨ。いくらりきんでもナ。あたまい物ァ八重借の。損料で。モウ鏡と入替も承知ァしねへ。此襠も縫を解ちヤァ。色〳〵に染て返し。とゞのつまりハ黑とする見込だらう。年明前の欲ばりで。お針楽へこつそりト仕事を教へてくれろも。大われへだ　トむせうやたらきん句のさしあひたしつたかぶりにならべ立ろといへども　さすがに大見せのそだちゆへ人がらよくかぜのやなぎのしなやかに　おもしろおかしく。あやなしてとふぞはやく。夜が明ればよいトまつ心のうち。實に苦界と謂つべし君子ハ和して。同じうせず。小人ハ同じうして和せず后の譏種となることそ。古今の未在なるべし話説も忠兵衛ハ。鰈鶴が赤心の情に。惟〳〵として思ハず。漆膠の契りを結びしも偏に。梅川が意を不審。一朝の怒りに其身を忘れ。遂ひに斯る事とハなりて。夜明ぬれど居續の。二會馴染に一際花やかなる。昼の座敷。又夜の光景とハ。大ひに異なりて。湯あがりの姉妓。塩引の客を導ふ。紫の瘡ハ夕ァのくぜつの。俤にして顔に畑の雛妓ハ。百性の娘にもあるべからす。そばかすだらけな禿。粉屋の親判にもなかるべし。笑窪も。あばたと。へんくわの玉磨ぬ疵の。有る無きまで顯ハに知れる◐の世界錦の裏に。くわしければ今更又いふも。くだなりけり。爰にまた梅川ハ。此鰈鶴が座敷と向ひあハせの。住居にて往來ひとつ隔つばかり。どちら

も同じ表ざしきに。忠兵衛が笑ふ聲端間が。晒落る言葉。しんぞう禿がはなしまで手に取るやうに聞ゆるも。是皆聞かしと云ぬ斗の擧動に。梅川いとゞ悲しさの。泪に沈む心ねを。岩間の貝の。かいもなく只獨〳〵ト一人寐に。昼もさびしき屏風の中。癪が邪广してふさがせる（折からろう下をぱたぱたとかけて來る しんぞうむめはる）梅川が枕もとへ。ぺつたり居りて（なきだごへ）【春】モシィおゐらんへ舞鶴屋の。二階に忠兵衛さんがお出なんして。アノ騒ぎをお聞なんしたかへ。あんまりな仕折とおもいひすト。いつそ口惜くつてなりいせん。おいらんの客人と。いゝす事ァ花街中で。ミんな知ていゝすこつざんすから。附斷の文をおあげなんすとも。龜ヤの御亭さんを。呼なんして一通りの、むづかしくおいゝなんすがよふおざりいす。しミ〳〵腹が立て。なりいせんヨ（トかたさきをふろわせてなきだくむ）【梅】先きから何もかも聞て居ィすョその事も心付ての。いゝすけれどあの矢先へ何を巾て。遣ひしいしたとつて。中〳〵聞入なんす忠兵衛さんの。氣せうでもおざりいせんから。まァ主の心の濟いすほど。どふでもしなんすが。よふおざりいす（トしのびなミだの友ちどりほれぬひてゐるけいせいの心ねなか〳〵べつなるべしおからかむろむめに）（かいさんし かけより）【一】モシィおゐらんへ今忠べいさんが子。舞鶴さんをお連なんして。仲の丁へお出なんしたの格子先で子いつそおいらんの事を。悪くお言ひなんして。夫が悲しくつてなりいせん（トさとになれたる子すゞめのないてあはれやきこえけり）【梅】モゥなんにもおいゝなんすな。これほどまでに。苦勞を致いして。

とふぞ主の都合のいゝよふにト思いゝす心が。届きいせんでこんな災難に合ィすといふも。なんぞの罰でおざりいせう。邪見にされればされへすほど尚未練がおこりいして。何の事も思いゝせん。たゞ主のとばつかり氣に懸りいすも樂く。惡緣でおざりいす【春】おいらんの心が。それでお出なんすを。脇にしてあァいふ仕打をなさりいすから。しミ／＼腹が立ィす。トハ申いすものゝ。忠兵衛さん達ても。との分ッてお出なんす客人で。おざりいすからよく其譯さへ、立いしたら今にもお出なんすわ。急度でおざりいす。今仲の丁へお出なんしたなら。大方龜ヤでおざりいせうから。梅二を連てチョットめへりいして。その譯を申ィして。おいらんのあかりの。立いすやうに致しいせう【梅】おありがたふ。おざりいすが鶴さんも。お出なんすもんだから。若そこがひよつと。意氣張づくてト忠兵衛さんもいろ／＼愛想盡した事でも。お言ひなんすやうになりいしたらヤア。猶／＼恥をかく譯さんずからまァ打捨て置て。樣子をごらうじいし【春】それでもあまりでおざりいすト〽意氣地をみがく廓いならひ眞實誠に。恍惚ては凡そ。娼妓ほど情の深きはなし。夫にはあらで忠兵衛は。まひつるを伴ひ。仲の丁の龜ヤの二階。一しほ晴れた。ひるの遊びも。いつしか金烏西山に隱れ。玉兎東海に顯れて。花また紅葉の色深く。誰かこゝに春秋の。時を知らんヤ。夜見せのすが

ゝきなヤトラゴシ〳〵素見。地まハりの。そゝりぶし「むさし野の原に夜晝あのきり〴〵す。思ひ切レされ切れと鳴く「おばこ來るかヤァと。田歩のはしこまで出て見たが「いふとも。ふく〳〵聞すに。腹たつ未至てん。聞た風りん。そばうり。あまざけ。あつたかいコリヤいよさい。すいしよで。氣れざんザ〇有造無造の往來を。狹しと歩行一隊ゝ。舞鍋が客忠兵衛酒い嫌い。千鳥あし寶あかしのうら馴染。今宵もなかして。居續に南華のゆめおや結ぶらん。爰に又萬間万里ハ。かねて梅川が恩澤を蒙りければ。忠兵衛が今日の仕打を。氣の毒におもひ。雛ヤの尽り懸。ひそかに立寄下座敷にて。雛妓梅春に逢ふて。何かひそ〳〵ささやき

【万】いずれにも昨日の朝。亀ヤまで一寸チ【春】おいらんト相談して。置いしたが。そのつもりでおざりいすヨ【万】さやうならかならず。おゐらんへよろしく トそでをふり〳〵いでゝゆく ○花と宿る。蝶も鶯い。別れかないとし可愛をおさらばにその移香ハ殘りけり忠兵衛ハ亀ヤへ立歸り。湯豆ふの熱燗ハ。ひつかけるとも。引懸られぬ。今朝の拂ひ〆て八両三分一朱。あァこゝれな張合から。とんだむだ金を遣ふたト。おもひそろ〳〵そろばんい。玉げて居たるそい所へ入來る。梅川がしんぞう梅春夫と見るより【忠】梅春さんお早へい。お客をおくつて歸懸かへ【春】イヽヤ主に。ちつとはなしが。おざりいして。めへりいしたヨ【忠】ハヽァおれも。お

めへにヤァちつト。はなしがある。サア湯どうふだ一ッ呑な【春】おありがたふ。おざりいす。一ッおいたゞき申いせう　トそばにあるちやわんをとつて　これに致しいせう　トあたつきりで一ツうけるも忠兵衛にいゝぐさあれバさけのいきほひにぜうじてほつごんせん下夕ごゝろなり【忠】サア／＼豆ふをくひナ【春】おありがたふ　トゆどうふのゆを一ト口すい　モシイ忠さん。おゐらんの事ざんすがネ　トいひ出すを　【忠】梅春さんその咄も聞かふがノ。まァわつちが噺を先へ聞てくんなせへ。外の事でもねへ。ふつとした張合で。乙日の晩から舞鶴ヤに。居續はじめて行た内とい ゝ。又こゝの内も知てのとふり。暫らく鼬の道にして今朝の勘定ハまァ。貸てくれろ共いひにくし。人を頼んで取よせるまでも。懐中を見られる口惜サ。なんと梅川に些の間。十両ばかり働ィて貰て來て。くれる事ァ出來めへかの【春】ぬしのお困りなんす事を。申いしたらよもやおゐらんもいヤとハ。おつせへすめへ【忠】今となつちやァ、假令いやと言れても仕方ァねへが。そこが昔馴染と。紅花染だ【春】そんなら一寸行て。めへりいせうト急ぎたち戻りて。斯と梅川に告げければ。梅川ハ兼て忠兵衛に遣らんと。八右衛門より貰し十両の金を。ざつト封して置けるを直に。梅春にわたしけるまゝ。梅春ハ又龜ヤにいたりひそかに。これを忠兵衛にわたせバ忠兵衛も。思ひがけなき金を得て。歡びつゝ見れバ。ざつト封して上書ハ。忠兵衛さま梅方。としるしあれバ。封おし切て。これを讀に。その文言にいわく

一すしにまよふ心も二すしに今ぞわかるゝ道のくの忍ぶにあまるうらみをハいきてものおもはんよりもきへて嬉しき命ニてこそ候へさるにてもはかなきハかくともしらぬむつごとにともに遠山の雪を見れとよそにハしらぬかねをきよのまくらにかハせしもミないつわりの世なりしをまことゝたのむおふた心さこそおかしくおぼすらめといにし事をつミふかくくやミはへり〳〵かしこ

ト読より忠兵衛心のうちで扨ハ梅川ハ我に見捨られしとて死る覚悟か可愛ヤトおもハづ泪のハラ〳〵又立戻る執着の想に迫る。眞實誠誓らく。言葉もなかりける【春】おゐらんの苦労も。ミんな主のためで。おざりいすもいを少しハ。さつしてお上なんし【忠】ミんな此方が悪るかつた。其言譯にハ帰りかけ。ちよつト立寄て誤らうから。さきへけへつて此禮を。よく梅川へ言てくりヤ【春】そんならかならず。お出なんし　ヨトケとところへ　まんり来ト　【万】コレハ梅春さんけしからず。お早い事子。時にモウお帰りかへ　トしらばつくれてわかれるも　かねてせうちのとなるべし　旦那如何でござります子【忠】イヤきついものいサこれじヤアとふも。未練が起るしたが舞鶴が事も。氣の毒なもんだの【万】ハヽア雨の手に。桃と櫻の花角力取組でから。負たものがふ運サ子【忠】いかさま今と成ちヤア。きふより外に志案ハねへト。これより亀ヤへ勘定を仕廻万里を引連て。西河岸の丁子風呂にいたる。抑〳〵此泉湯ハ當世流行にして。却て會席の風流善盡し。美盡せり折鷹模揃の。

煎茶。南京の器に薫りを染め。舟ばし屋の菓子。樂焼の皿に奇麗なり。青竹の灰吹ハ。口切の式を學び屠龍先生の画ハ。賓客の目を驚すのしこんぶの。盃事ハ。萬歳の始めを祝し青善の献立。もつともきり目を正しうす莚上の雅品。俗様をはなれて古今別の世界なりけり。忠兵衛ハ是より万りに別れて。只獨梅川がもとへ來りしも。舞鶴が手まへを忍ぶ頬包。隠せど色か梅ばちの。紋ハたしかに忠兵衛さんト。見咎られしに氣も付ず。上るヤいなヤ。禿が使ひ舞づるがみ。梅川が返事もさすがつのめ立。うしと見しよぞ今ハ。意氣地の張合に。妹脊へだつる山〳〵の。恨ミもよしヤよしの川。おなじ流れの身をくミて。舞づるが座敷にハ。雛妓禿口〳〵に「よふおざりいす怔惡な。客人ならお歸りなんす時。大門に附へして。お連中て來いす斗で。おざりいすョゥ覺悟をしてお出なんしョゥト。いふ聲に又梅川がざしきより〽與所へ馴染んでお出なんす。客人をおあげなんすトいふハ。万治以來でおざりいすョゥ此方の客人へ。指てもおさしなんすト。罸があたりいすョゥト トロ〳〵にいふた 【梅】モゥだまつてお出なんし。こつちから彼是申イしちヤア。悪ふおさりいす トとわれてだんまり 【忠】そんな事ァ打捨ておいて。皆が酒を呑がいゝト是より車座に居り。色〳〵下卑喰に暫く時を移しける。前後の光景くた〳〵しければ略す忠兵衛ハ大酩酊となつて。梅川に伴れ床にいたれバ。其儘倒

れて。前後忘失の字形の。寐姿にフツト氣の附く。腕のほり物赤く腫れて消した跡。見るより梅川目にもつ涙。只一圖におもひ込。男心の妹始やと。身をふるハせて。ワツトばかりに嘆き沈む　くちばしる　【介】セシイおいらんへ／＼　トゆりおこされて　【梅】ホツト　ついたるためいきにあたり　エきよろ／＼見まハして　、怖い夢を見ひしたト咄すハ箕輪の。別荘に。病氣保養の。引籠中。雛妓梅春が。看病の枕もとに。小鍋立【介】セシイ粟の。粥が出來ィしたトいわれて【梅】そふでおざりいしたつけね、チツトの間トロ／＼ト眠りいした中に。おつな夢を見いして。いつそ氣にかゝりいす　トなミだはらく　盧生がおもひ。呂翁が術。邯鄲の枕にかゝる憂氣おもひ。今の中／＼堪へかねつゝ。忠兵衛方へ斯と告て。或夜月なきを幸ひ此別莊を忍び出。二の口村迄の道行は院本に譲りて。筆をとゞめ畢ぬ。

廓宇久為壽　大尾

来舟歳春叢聚　山人著

娼妓筆硯　花街壽圖女

うき川竹に品よくとまる。里すゞめハうそ八幡のたくせんより。誠をはなす放生會。かごを飛せて通ふ神。目出たく祝ふてチョン〳〵まく。しめて〳〵とも。文のこんたん極秘傳ハ。筆と硯よりほかにたれか。知るものあらん

歸身噓

序

いやな客に。明□□□□□□□啼して。よろ□□□□□□セかれて。色□□□□□□□□おし□□□□□□□□□□癡□□□□□□□□□□ころし文句てかきから道は。間夫に盡せる實情。込入たる事。新地の端の。捧抗に等しく。されバ其譯へだてハ。あるとも。皆一夜一露の。夢にあらずや。女郎の腸に、わかれ有ハ。中洲の三ツ又に。事あらねとも。可愛〳〵と。舫を解れてハ。遊子鈍通によらす。きのふの地面は、けふの薦一枚。愼べきは色のこち。迷ふも悟るも。胸ひとつ。嗚呼予ハ一足下ッて考へ。尻の先へ猪牙舟だこのいらしと。よいざめに。

婦身嘘

ぬるま水を味ふ者へ。此小冊を。参らする事。

しつかり

陶器家編成

採筆

干時庚辰夏

於出雲樓見通

輪成学而新制の藍色深川に寄て新句を綴元自新手にはまつて穴捜しの穴に落入其段取の辛苦歟將近來辰巳に流行の新句ならん歟青年才始末よんでみなせいしと云　譯露誌

當時のこと葉に習て

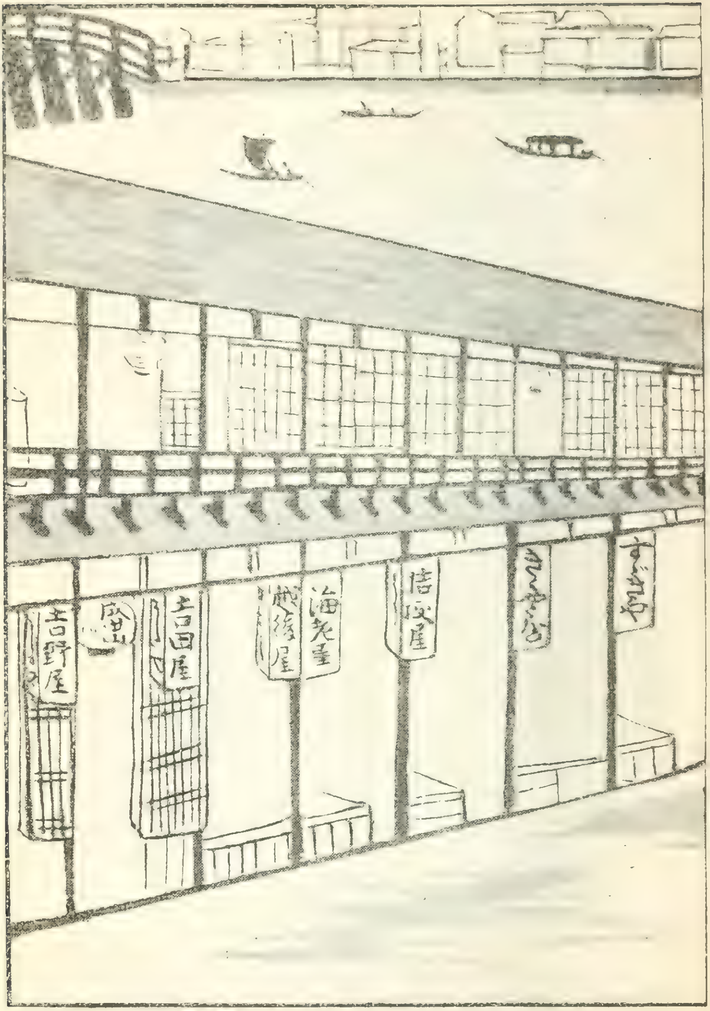
品　目

○いろじたてのぎたきな段

○うまくかゝれたばゝァをいふ段

○手こわいこつてりした段

切りはがねのまくら


吉野屋
吉田屋
越後屋
海老屋

櫓下妓談　婦身嘘

墨之山人著

千木櫻の。名題にあらねども。又辰巳にも櫓あり。上ならで下にして。吉野もまかす。惣花の櫓をあげ。百墻の猪牙船に。魂と共に虚空へ飛して。裾河岸と新河岸ゟ。のりこむ船ハ。やわら〳〵とのぼり詰。角力矢倉の太鼓にうつ。ドデツン〳〵もかいりミす。終にハ新手を持てなげられ。腹櫓にあげられて殺され。こたつ櫓のごとくなれど。當てくだける。通不通。爰に入くる遊客ハ。ひと月置の出番を誓ふ店者ハ。たゞ附登の難をいれる。或ハ淺黄の手拭肩にかけ。前へ垂腰にまとふ。客人が將。船頭ともミへ。また客ともミへ。二上りの騷唄。大きに。賓主の禮を乱す。彼未至通のきいたつらハ。逼く二三個の藝者をかければ。火の見櫓と共に高ぶり。寝より朝が鶴ヶ岡の放生會も。是にハしかじとおもふ。尤覇ハ見通しの杉戸にとんで。いまだ行方角をしらず。大一座の武士あれバ。また姿をかへたる色夫有。行歸りの客絶ずして。實や賑ふ繁花の地。おもてくゞりのガラ〳〵に。お客だよヲの美音ハ。萬客の耳をよろこばセ。なげぶしを唄ふ。船宿の兄き。樽柿くさくして。明坐敷につめて。柏餅となり。あいたる藝者の三味

線箱へ。階子のおり口にならんで。かけ行燈とにらめくらをし。庭口の戸にかけたる。子供屋のぶら燈灯へ。下座敷の行燈と共に。光りをあらそふ。水鉢へ柄杓をあてる音へ。山鐘かと眞の床でおどろかせ。ひるまの玉子ヲ引く〳〵へ。よるの汁粉麦飯と替りて。風輪蕎麦の音。あんまァ針のこへと。ともに聞ゆるへ

鎌倉和倉下伊藏茂屋の樓上と見へて

【里夕】年ハ三十四五中せいにていろのくろきにがミばしりし人物衣裳付越後の中辨慶のかたびら黒糸織の帶せいひ皮のさんど多葉粉入ひおりめんの下帶をとてくれがしに細帶のかわりにしめはだゑいのすきな男にて萬事きどつておれ壹人り江戸ツ子だといふ氣にてたゞケあくらている【女郎おなに】年ハ一十一二くらい衣裳付京上布紺かすり帶ハくろの唐じゆすあたまハあらいがミのばらりおとし大しまだまへざし簪本さしうしろに張だいに金めつききさんごじゆのさし込つけのくしをちよいとさしてづいふん此らにて一まいかんばんなりかんざして黒かえかきなから何かふさいでいる【里】てめへどふした【な】どふもしねへが。少しふさぐ事がある。かまへづとマアお寐な【里】ねるへいゝが。ふさぐ事へなんだ【な】外の事でもねへ。此間もおめへにはなした。さや町の吉田屋からくる客よ。あれか外のわけならいゝが。うちのおでんさんの所へ。なじんできなすつたか。ちつとしたわけで。あの子をよしてわたしをよぼふというのよ。そこでわたしも。外の子供衆でもよんでいなすつた。事ならいゝが。ひとつうちの女郎衆で今迄ひとかたならず。よんでいなすつた物が。どふいう譯かおでんさんをよし

て。私にでゝくれをいゝなさるが。わたしの身に取てハうれしいけれど。またミんなの口かうるせいから。おちでどんにことわつたら。おちでどんも眞事にめいわくをして。先へもいふくことわつたけれど。其人もこういゝだして。おなにはぶかれたといつてハ。ミんなのめへヱ外聞もわりいから。でられずハ座敷斗でも出てくれゝバおれが顔はたつからと。たつておちでどんをたのんだとよ。それでおちでどんもこまつてどふぞ座敷斗でもといふからそれをわたしがとやこう云とあんまりどふてうするよふだから。座敷斗でたのよ。そふするとおでんさんがおかしな事をいつて。わたしにあたるから。私もいたくねへ腹をさぐられるから。とてもわるくいわれついでに。其客を一ばんくいとめて。おでんさんのつらをふんでやろふと思つて。此間も。出たのよ【里】それじやァその客にてめへ心中を立るのだな【な】ばかァいゝねへほんの立引とハいふものゝ。其人に出ていれバ。大きにつごふもよし。おめへのためにもなるからそふしてすへヱいけバ。ほんとつき出してしまわァな【里】そこで今夜其やろふがきたのか【な】そふさそれでふさぐだろうじやァねへか【里】ウゝそんならおめへはやくいきねへすゞしくハあるしおれハ一人で寐ているからいゝ【な】あの客のきたのがてうど。いゝせへわへだろふ【里】マァそんなものよ【た】ヱ、そふいふ口をきく　トきげろでくらす　【里】早く行がいゝあ

のやろうの身にもなつてミろたいてへ苦労じやァねへモシあぶもとらずはちも取ずになろうかと案じているだろふ【な】おまへがなんとかやかましく。いつてくれるといゝけれど。おめへがわるがりすぎているから案じられる【里】大笑だ何かあんじられる【な】いゝセへわへだと思つて。また外ニやじても出来たろう。なんだかうちの左吉ッさんが。おめへをほめているからあやしいぜ【里】やかましいはやくいくがいゝ【な】そんなら今咄した通りの譯だから少シてまがとれるよ【里】ァヽしよふちだ【な】ヲヤ火がきへたもつてこよふ ト下りゆき火と茶わんと湯をもつてきたり【な】サァ湯をおあかりはやくいつてこよふ トいゝすて出てゆく一躰これはおでんがきやくにはあらずほかの客にてありしがそなに一座にてゝ其客の男ぶりにほれやじにてよぶゆなり里夕はそふとはしらずしてやつぱりおでんが客をとつたとおもひそれでもこゝろにはモシも色男ではないかと思へどもこんなおまへのためだなぞとおためごかしの気やすめをいわれしゆへそなにかくるゝをまつているほどなくうらのひけたうつにおなにはこず少しきうはらになれどもよいにすゝしいから一人でねるといゝしもいまはこふかいにてよぶにはよはれず一人りまだハヽしているうちまたはちまんかね【八ッの鐘】コヲン【里】モヲ八ッだそふたあしたは豊釣が淺いだから早くいかざあなるめへがどふもねられねへ ト壱人り事いふうちとなりの和哥松二かいにて女のこへで浄るりへいやな客にもひよくござ思ふ男のやまどりの【里】ちげへねへやつぱり心いきだ おき呑忠助あぶらたつぎにくる【忠】里ッさんまだおひんなつておいでなさい升か【里】アイ忠助どん今夜はなんだか寐ぐるしい晩だい【忠】さよふで御ざい升けしからずむします ト下へゆくまたかね コヲン〳〵【里】ヲヤもふ山鐘か。さて夜ハみじけへモヲけへろふ。ヲヤおまちどんかおめへいま時分何をしている【女おまち】ヲヤ

里つさんごふぎにけさハおはよふこざり升おなにさんハへ【里】おつといわく有さおめへこんやれあやしいゼやじがきたの【ま】ナニサこんやハおき番でけさ朝参りにいこふと思ひましたが少シゆふべまちがいかあつてけさいかれません【里】何だごふぎにそふ〳〵しかつたがなんだへ【ま】何さごけッほふでまことにきざさ【里】うるつセへのふトキニモヲひがしがしらんだっ舩頭をおこしてくんねへ【ま】さよふかへけふハいゝじやァこざいませんか【里】ナニけふハ両ごくに會があるからそこへいかねへけりやァならねへ【ま】さよふでございますか。そんならおこしましやう　ト下へゆくおもちもこんやおなにがいろ男のきているのたしつていれどもわざとしらぬふりであいさつをする心でハおかしく思へとありつがかいろといふゆへおなにをおこしてありつがとこへくるおなにもおきこゝれハ夜ハあけるしすこしハつがめへにきのどくなれバわざとはらをたつたふりをしてぎやうぶをあけてすつとはいり【な】コヲ里つさんなんぼ私がモシいやだとつてよごにおよつとよこしてもいゝじやァねへかわたしかあつちに居る心持になつてごらんまことに〳〵いやで〳〵ほんのおまへのため又おでんさんにつらあてだからよぶものゝ眞事に今じやァよせばよかつたおまへハ仕度をして歸るのか【里】けふハ両國に會があるからいかにやァならねへ【な】いゝじやァねへか。今にあのやろふもけへらァそふするとゆつくりはなしもできるからいかなくつてよければよしなよ又そふいつて外へいくのだろふ【里】ばかァいへ深川に舟ハすハつて居て仇まくらハかわさねへ【な】それが實ならばんにきなよいどまりをつけてまつ

ているかしよふちか【里】こんやハ事によると付合で外へいかざァなるめへ【な】事によらずとつき合ずとこつちへおいでまつているよ【里】てめへ勝手な女だせ【な】わたしいてめへ勝手を今おしりか【里】とんだ女をしよいこんだそれをきづにして大津美屋で安くかつたのだろう【な】わるかつたね此手ぬぐいハ【里】おれがじやァねへ【な】あつちのやろうのかいやよどふして持てきたろう【里】てめへハッヲうかれるからそろ着物がうらげへしだ【な】ヲャ　ト気かつきゝれバ着物をうらかへしにきている是ハいきうにおこされたゆへうろたへてきたゆへきがつかずそれでもさあらぬていにて【な】そんならきつと晩によ【里】ヲヽよしよふちだどりやけへろう　トろうかへでると

折から庭の枩の木でくつわ虫

がちや〳〵〳〵〳〵

△前席の客こゝろハ五分もすかぬといふ心もちいわゆるきいたつらにて女郎ハこれでなくッちやァといつでも色男きどりにてかく〳〵とおもい己がいつでもかゝれるなりよく氣をおつけなせへし

晝遊の部

【喜兵衛】年三十六七すこしさびのあるでつぷりとした人物衣裳付ハけん寶小紋羽折結城もめんもぐさ嶋ひとへ物小納戸なとこの処越川仕入たかおりのたばこ入紀の國屋でうたせたる白おめし張のきせるうす舞を呑ながらあげあぐらでいる此ハいなか者にて此くらいに江戸ですれた人なれどもしやうらいハらしなわずしてこゝとばかりいふくせあり【傳吉】是ハつれにて年ハ二十四五なりハあいせんすじのひとへ物帯ハ柳茶いろ拈珀の耳すゝかゝりしやつ氣いた風なこしらへなり【喜】こよいハだいぶにぎやかだ平清の酒がまだ腹にあつてせつねへ【傳】どこの座敷も二上りでさふぐ／＼しい【喜】此間なミよけじぶんハしづかだつたがまたはじまつたからにぎやかだ トはなしのうち女ちりめんしぼりのゆかた黒じゆすの帯まへだれハならの立じまさけじこのかゝりしやつ小紋けいのひらぐけのひも右のかたへだらりとむすびさけあたまハ丸まげのぐるりおとしばらふの深川形のくし横ツてうへさしまいざしハさハつたらおちそうにて口取呑てふしたさけてとび／＼【おすで】ヱヽぞんぜへな廊下を酒だらけにした誰れだかおそれるぜ ト座敷へきたる どなツさまもよくおいでなさいましたかめどんハどふいたしましたへ【喜】たばこをとりにやつたがまだこねへ【す】こんちハあいにくで御ざいますね外へでゝいなさいます。ちよつとおめにかゝつてまいりましたいまにおいでなさいます【喜】コヲおめへ下にいくなら、藝者をかけてくんねへ【す】藝者衆ハ誰れに致ましやう【喜】大豆と伊勢吉がよかろう【す】はい／＼ ト下へゆく【かめ】なりハ木綿ちゞみはけめじまたうらがいして仕立黒びろふどのひらぐけたくりのさきへしめけしたまの手ぬぐいこしにちよいとはさミて そふよ音や忠もうちへはすこしも寐つきへねヱうさあねへどふともしてくれろ ト廊下をすてぜりふをいゝながら座敷へ来る【喜】サア一ツのまねへか【か】いたゞきましやうげいしやハ【喜】ヲツトおすでどんにたのんだ【か】おはねさんハけふないそうで御ざいますがちとだんどりがわるう御ざいますね【喜】そんな事アうつちやつておいて盃

さよこしねへ【か】ハイあげます トはなしのうちけいしやきたる 【伊せ吉】【元八】【熊吉】ヘイどなたさまもよふお出なさいました【い】喜兵衛さん此ごろハさつはりで御ざいますねヲヤおめどんそんなにしらねへふりをする事ハねへよ【か】ヲイおかゝアかこないだあんばいがわるかつたそうだが。どふしてもおれがとおくヱはなれているから。物あんじで氣やミがでたのだろうぜ【い】そうだろうもしれねへ 座敷も引仕舞てだん〳〵大酒と成 【す】いせ吉さん雨朝さんのめりやすを覺へたか【い】なおいおらやつとでおぼへたよ【喜】なんといふのだ引てきかせねへ【い】こうで御ざいますおいやま〳〵つらからがたゞひと筋につらからで。おもわせぶりに狂はせる。てう〳〵のかんざし手に留で。見ればうわ黄な水淺黄二ッ揃ふて相生の。松の二葉も女夫じやヱ。かわらぬ色やとかゑりい。見歸り見へ此枝に。れんぼに渡る厂がねに。とふてミたきハこなんのこゝろ。迷ふといふ字もうこミなる。葛の裏葉の片思ひ情といふ事しつ一こなら。たゞよふ船をつないでと。こがれて明す夜ぞつらき。夢にもむすぶ神やあるらん ト引いまい 【ミな】やんや〳〵【傳】いゝめりやすだ【喜】作勝が手をつけたのハこれだの【か】そうだといふ事で御ざいます【い】おめどんおめへハましめだの二上りをやんねへな【か】二上り 一、八ッ九ッや明七ッおもてのくゞり戸をとん〳〵とたゝひじやなきはじやおを番衆こよいあわねハこかれじに これハ此男のくせにてうたふなり 【元】【くま】ま

ことにしんぐい〳〵 此間いろ〳〵あれどもぐだ〳〵しければ畧ス 【寸】モヲお盃をぐるりまハしにいたしましやう 【か】それがよかろう トミみせんをしまい喜兵衛傳吉下へ小便にゆきになし〳〵つきそいこそれより座敷へはいりげいしやはいり口にて 喜兵衛さんお休なさいはいまし〳〵 トたな下へ行傳吉が床ハほかの座敷也 【おはね】喜兵衛相方 よそのうちへでゝいたりしがなじみへおすこのしらせにてあいにきたとこへたり おまいおといきなさるだろうとおもつてまつていたがなぜこねへのだ 【喜】おれもこよふとおもつてハミたがよしにしたてめへけふハどこェでゝいる 【は】あがりまやで屋敷衆だが眞事にくらいよつていてやかましいからいやで〳〵なりあしねへ トいへともまことハやじたてわざとそふいう也 【喜】これうわさをきけバさや丁から金とやらいふやろうがくるじやァねへかなぜ今迠おれにかくしたサア わけをいへコヲ なんとあなをほられちやァてめへもねこばゝで有かけへひつこましていることたァできめい おはねこゝろのうちへなつくりしてかんかへている 【は】おまいもとんだ事をいゝかけて私ヲいぢめるけれど一圖におもいなすつちやァはらもたつがマア とつくりとおきゝよ針程の事を棒にいふハ世間の口だからッ それを人にしやくられておまいがあじに廻すだけワるいわな 【喜】あじもこはだもいりやあしねへ。なにから何まで氣にいらねへコレ五重のとうの鬼がわらじやァあるめへし。そんなにたけへつらァしてあやなしかけることハねへおもしろくもねへ 【は】わたしがわるけりやァあやまるからそんなにあつくならずとマアはなしがあるからきいておくれ 【喜】ェゝやかましいわへコレ二上りを燒なをしてこけをあす

ぶなあおきにしろ　おはねハなんにもいゝにきんとて【は】これさおきゝよ。いたこにもあるとふりわたしにかゝれ
るよふなおまへでもあるまいし。このあいだもあのとふりほり物もほつていて。氣起(きしやう)までとり
かわしてそんな事があるならばつくともころすともおまへのこゝろしでへにおし。かばいごなたに
になつてこんなにくろふをする者(もの)をかたなりもない事をいゝかけられゝとくやしくつてしまう〳〵
はらがたつよ　トニへをくもらしていゝけさんとする此客にやじの事をきかせてハいろ〳〵だんどりあしければころしもん何でもばかりつけこゝろのうちへちつともはやくあつちへいきたくそらなまだでいる　【喜】あても
れへ事をいふものかそんなにかばいだてをせずともいゝわ【は】まだそんな事をいゝなさるわ
たしがそれほどにもあきていやになつたのかへなぜこんなにすることなす事あだになるだろうトなく
喜兵衛も此もん句にてすこしこゝろもとけてにがりきていふものから何もいはず二三人子供のこへにて【おはね(まなく)さん】ヱ、、、、、、、引　此こへをきいておはねハこゝろのうちとびたつよふにおもへど
もわざとくちおちつきはらつていふ　【喜】それそろお使者(ししや)がかゝつたハはやくいけ【は】いくのハいやだ【喜】そ
れならやせがまんをいわずといくがいゝ【は】そんな事をいふからなをいやだよ【喜】おすでに
そふいつてだれでたいこによんでいよう【は】そんならがきいつてくるよ【喜】かつてにしろ

大ごへにて二三人おはねさんヱ〳〵いつてお出なさいまし

おはねさんヱ、、、、、、引

つつれ傳吉のいゝちらつハ後編(ごへん)にはじめにいだし御らんにいれます是よりハよいのだんはじま

り

夜宵の部

【おまつ】夜具づゝみを引ずりながら コヲ　おちよどん【おちよ】ふり返り ヲヤなんだよ【まつ】おとこさんとおすへさんならハきゝにやんな一チ座楽がおいでなすつた【ちよ】イマ　おくにさんをきゝにやつたら二人りながら出ていなはると【ま】どこに【ちよ】大智屋と久字屋だよ【ま】ない事を船宿楽にそふいゝねへ名代でもおよびなさるならあいてる子供楽をだれぞきゝにやんねへ　よこ小歌に二手のあと チヨンノ【女】アイ、、、、、、引【おむこ】しよく臺をおもそふに引さげて おすでとん見通しハあいたか【す】まだふさがつているよお初會のお二人ハよこ座敷ゝ八畳へいれもふしねへな【む】ソレ　お手がなるよ【大せい】アイ、、、、、、ハイ、、、、、、引 新さしきにいろきやく

【勝五郎】年ハ二十六七うすいものあるやせた中せいな男着物さつまもめんこんかすりひとへ肉せんさい茶ニやなぎはゞせまの帯細組でしたてた嶋ごろふの下ツ折の紙入唐皮さんとめ折部形のつゝざし多葉粉入むらたてはらせた四分一七匁ばかりのきせるなにかふきいでいたりしが鼻頭音に下へ三味せんをかけにやりつめ引て江戸ぶしたらなつている　あとがさ〜引バ袂をふりきりてゆふべの口舌けふの酒うつら〳〵とねむるてふ茶種ハ蝶ゝ花しらずうれしやなあれあれを見やむしさへも露を命の置どころいゝちといふ字ハたが書た白むくぬいで見せさんせト引仕舞コヲ音どん下へ酒をそふいつて嶋吉でもか

けてやんねへ【音】おまんまへ【勝】まだ腹がいゝから飯ハよそふ（トはなしのうちおすゞ通りかゝり）【す】ヲャおつさんこのあいだハさつぱり御とふ〱しう御ざいますね【音】ヲイおめへ下へいくならしま声をかけてやつてくんねへそして酒もよ【す】さけもうらへかけにやるのか【音】何ッてこともねへ【す】いまによ（ト下へ）【音】もふおなゐさんハかいつてきなさりそふなものだ久しくかしてやつちやァ地切されるに【勝】ナニ大の字だからまだけへるめへこうゐでもいゝハとふだむめへ事でもあつたか【音】さつぱりいきやせんおとゝいも河岸にありやしたからつい手を出してかめが着物と貳分一ぽんたねまでなくしやした。それから又狐ちよぼいちがはじまつて。これでとりけへそうとおもつて。ほねをおつてよふ〱の事で。壹分ばかりかつてそれきりしやせん【勝】いやもふ手を出しかけるとやめるのがいやでならねへくせになるやつよ【音】わりいどふほうさね（作者此みち一向くらけれバくわしい事ハあらわさず）【す】おとどんとつてくんねへアヽおもい（さけさかな臺へのせもつてくる）【音】トどつこいよし〱さあかつさんおはじめなせへ【勝】ヲイ（ト盃を呑で音へさす折からしま吉きた）【鳴吉】かつさんこないだハヲヤおとゞんさつぱりあわれへの【音】ヲイでんぼうあらいこまじりでけふハごふぎにうつくしいからァヽきい〱かわりい【鳴】ヲヲなんぞおごろふのうおすでとん【す】きめいをミせて日山ぐらいだろう【鳴】ちげへねへ【勝】藤店の石やき豆腐たてぜへだ

ろう【音】こいつあいゝ【勝】嶋吉さんめりやすを引ねへ【嶋】このあいだ一ッおそハりましたかろくに覺いません　めりやす　へおもふよりまたミじかさよ夏の夜ハ。なをもしんきな花むしろ。ながれてとまる捨小舩。夢にミるかとおもい寐の。おこされてきくほとゝぎす。木がくれをしてじれさせる。隅田の堤の植込ハ。中にもすい樹もあり。また氣にいらぬ枝ぶりのやぼはどものにこりやすく夏の木立の茂り枝ハまつてくらした朝あらしちらされてたゞむれくる小雨の情もうらめしく鳥にうたわれ明方の寒さハいとゞ獨り寐ぞうき　チヤント引仕舞　【勝】べらぼうにながへめりやすだ【音】チト　おなぶさんときているね【嶋】ヲヤほんにどふおしだ【す】大のじへいきなすつたそうよ　勝吉ろうかをとふりかゝりて　【とら】おとゞん忠さんがどこへかいくと下にまつているよ　ト下へゆく　【勝】どこへいくのだ土橋か【音】あひさけふハほふ〴〵のこずりがきたから忠がそれでいつしよに引ずり出すさんだんさ　トはなしの折から　【おなぶ】年ハ廿二三くらいなれハゑちご上布のかすりかたびら黒しゆすの帯黒ぬり古骨うちのかんざしをさし人のましないたむすびつけちよいと三日月形つけのくしをさして　【づいぶんいちまいかんばんなれどもうわきものらしき女なり】　ヲヤしま吉さんおめへにひるまたのんだものハとゞけておくれか【嶋】おあいさんのもいつしよにやりましたその本ハへ【な】これハ上方うたのゆきだのすり鉢を。うつしたのをかりてきたのさ【音】とんびをおまいなすつたね【嶋】おなぶさんそつちをむいておミせいつそいゝわ【な】きのふあらつたからむすんでおいたらほと

けてうるつせへかゝさつといつてもらつたよ【す】かつこうがよくできました【音】そんならもふさけもおんまいとしましやう（なうこれハ御たいくつ此末の丁數たりませねばあらましこゝに畧す）〳〵はや明のかねごん〳〵とめでたかりけるしだいなり【ミな〳〵】ヤンヤ〳〵【鳴】そんならまくといたそうかァ、高いげいしやだ【音】高いのハ三味センで引ではねへか【鳴】なぜだ【音】げいしやの直上りだ【鳴】アハヽヽヽ、ハイありがたふかつさんまた（トさへぎながらミなくうらかへ出て行）○（出し物をかたづけて屏風を引まへすとふたりさしむかいのこつそり）【勝】コレてめへいま大のじへいつたが。おゝかたやじがきたのだろう【な】なんぞといふとつまらねへ事をいうそれどこじやァねへ【勝】ヘン ぬすミどこであいにいつたがきいてあきれる【な】ヱヽおめへも人の氣もしらねへで。いまさらそんな事をいうが。ひるまもおめへにはなす通りどふぞいゝしあんがあろうかと寐てもおきてもかんがへてばかりいるよ（かつハまじめになり）【勝】どふもかうもいるものかおれだつてもいつまでこふしてくるものか子が二人りまである女房ハ出してしまいなんでも一座のものへたいしても外聞もわるいからひとたびゝつれていきてへとおもふが。それならバといつてておめへのからだハ。證文でしばられてあるし。又借た金もあるからおれもうかうかうつたり外からかりてもかつとやそつとハできもしよふがどふかんがへてもなか〳〵そんな事ではおいつかずァ、こゝろ一ッを二筋にだ（ト大きにふさぐ）【な】わたしもいろ〳〵な事

か氣になつて。口をかけてきても出るのがいやだけれどよふじをつけるとなんだのかだのといふからマアでゝはいるものゝそれだからお客にはろくにつとめもせずかんがへ事ばかりしているからいろ〳〵なばゝアをいわれるししミ〴〵つらくつてならねへそしてうちの廻しがあわせねへのなんいといふ事をきいたがかつさんどふしたらよかろう【勝】どふしようがあるものかおれだつても穢多乞食でもあるめへしなにもそんなに廻しがやかましくいふ事はねへなんでもこれへよりほかにしあんはあるめへ【な】そんならわたしがいふ事をきいておくれか【勝】なんだわけをはなすがいゝ（ミゝへくちをつけてちいさなこへで）【な】どふぞわたしをつれてにげておくれでないか（此文句へいわくのある事なりかつにつれてにげてもらいすこしのあいだいこてまいのからだのかたづきをさせてのちまたほんとうの色男のとこへにけてゆくこゝろ也おんなのさるぢへとはいへどもおそるべし〳〵かつはそふとはしらずいろじたてにさかてのいだきて）【勝】ずいぶんそういふこゝろならつれていこうがとてもこゝではできめへ【な】そふさ此長屋うちではできないから江戸行でなければおもふようにはいかないよ【勝】いゝしあんがある吉田屋ゑくるがいゝ。とまつていて人の寐しつまつたじぶん。夜中に二階からにげるがよかろう【な】そふしようかおまへはどふおしだ【勝】おれはいつしよににげることはできねへから。あとへ殘てしらぬふりでねているは。そうすると朝だれかおこしにきて見てておめへをさがすは。いないから是非おこすから。其時とぼけたつらできもをつぶしたふりをして。おれはど

こまでも知らぬつらよ。どこへいつたろうとそうだんするハ。なんでもおまへがかゝりやいだからさがしてくれろといふ時そとへでゝからてめへをつれて。田舎へにげるのだ【な】そしてわたしのにげていく所ハ。どこへいくのだへ【勝】所ハ金形丁だがそこのうちへハあしたおれがはなしてたのんでおくから。あさつての事にしよう【な】よいどまりでいこうかどふしよう【勝】夕方からくるがいゝこよいおちでどんにたのんでおこう【な】そうしたらわたしハどふかたがつくだろう【勝】化があらハれておれだとしれたらいろ〳〵やかましくいつてくれバこゝろ安い口きゝをたのんで。なかへいれてぜひもらおふといゝかけさせて。やかましくいつてわけをきかせたならハ。さきでてめへの事をいふだろうわさイヱあの女ハ年もまだあるし貸た金もあるからどふもやる事ハできねへから。もどしてくれろといへバ。そんなら借金の方へ少しも金をいれよふから。年季の方ハ仲人にあづけて。年割にしてくれろといつたなら。よもやがつてんしねへ事もあるめへ。そふなれバおれも外から金のかりるところもある。それを其方へいれて跡卿のうちを買てほかにいゝとこか有から新世帯とするりやうけんだ【な】ほんにそうなればいゝねへわたしハまことにうれしいよそんならあさつてをまつていよう【勝】かならず人にしられぬよふにするがいゝぜ【な】それハ氣づかいおしでない

折から見通しに美和太夫のこへにて四郎五郎のくせ

これいろへハテ そうむまくゆけばよいが トツチ、、、、ン、、チツ、、、、、、、、、、、、【ワかれ三重】

居續宵泊のだん

【六三郎】年二十四五くらい衣裳付さつま中布のかすりかたひら帯ハあさきこはくかすりじま本はかたおり持ものハ是に一御すいさつ○とむらいがいりよりいつゞけにてひるま大さわぎにうがちありてよいつぶれてかしゆかたをきて前後もしらずねているおすてたゞし肴をだいへのせておもそふにもつてくる【す】サア 六さんもしおひんなりまし。御酒でも一ツ御あがんなさいませんかもしおそのさん〳〵【女郎おその】年ハまだ十九廿くらいなりハ御すいもじおこされて目をこすりながら 六さんハまことによく寐ているよ六さん〳〵 トゆりおこされて【六】ヲイなんだまの事に今迠よく寐た【す】どつちでも御あがんなさいまし【六】こいつあありがてへ酒と出かけようか【す】さようならとふしの御肴もいつしよに出しましやう【六】そして大吉銀次大豆をかけて艘頭をおこしてくんねへ【す】熊吉さんハ今出ましたから二人りかけましやう おちよおはちをもつてきたり【す】おちよどん大吉さんと銀次さんをかけてきな【ち】アイ せんどう松ようついてきたり【松】舟頭乙見橋のあねへけふハきているなちくるいめ トふきつく【ち】よしねへなよんぢりめ トふりはなし下へゆく【す】サア おはじめなさいまし【松】ヤア またはじまりたさつきのでハ大づふろくになつたから下坐敷へねると蚊にせめられてさつぱりねつかれねヱ【六】サア 一

ツのんだ（トはなしのうちけいしやきたる）【大吉】【猿次】ヘイ六さんさきほどハま事にたべよいましたよヲヤ松どんおめへあたまへなにをつけている（ヲホヽヽヽヽヽヽヽヽハアヽヽヽヽヽヽヽ）【松】（あたまへてをやつて）だれか寐ているうちいたづらをしやァがつたそれをまたからくわらつていてすむか亭主のはじハ女房のはじだハ【大】それだからしらせてやつたのだよ【す】コヲ松どん湯屋どろほうをミたよふにかほへなにをつけたのだ【松】エ（トてぬぐいてやミとふいている）【す】そんなにふいてもつらの皮ハうすくハならねへかんなでもかけな【松】おきやァがれまたかつがれたのか【皆々】（ハハヽヽヽヽヽヲホヽヽヽヽヽ）【大猿】（はやりうた）〽とふぞわたしをそわせてとむりを出雲の神さんゑ合ねかいかけてもへんじなくこふだとひとことしれるなら少しハくろふもやすまろになぜにいふてハくだんせぬコレナア茶たち塩たちしていてもまだもたりずハコレナァなんでもわたしハするわいなァ〻引（おゝふおかたと十年もそふたうへならいのちてもヲヽ）【松】いゝわへこいつァむづかしい【す】サァ盃ハどふするのたよ【松】ヘイ旦那あげます【六】おふさへだ【松】おふさへじやあこざいャセんおやんなさいやしなおぼうさんの御いわいでございやさあ【猿】そりやァなんだ【松】女乞食よ【こ】ふけゑきないやよ【松】いやよ田舎もまたすミよかろかね【す】おめへこよいハよりぢんしきつているよ【松】よんぢりばばァめ【大】ばゞァめよりひじきにすればいゝ【松】旦那あれでもかゝァがぢくつたので御ざい升【大】おめへよ

りかいゝよ（トさハいでいるうちおむときたり）【む】六さん今久字屋からおそのさんをちよつとかりにまいりました【そ】ア、いやだま事に〳〵きざだ【松】おむとどんかすのハかしてやろふがこのあいだもふちをかいてよこしたからまたつぎにやつたとよくことハんねへ【む】そふかさつぱり氣がつかなんだよ（これハはやりことばなり）【六】はやくいつてくるがいゝ（おそのハふさいでだまつている六三ハまことのいろ男なれともくじ屋の客ハ禍清といふ大盡にてためになる人ゆへ其方へいかねばならぬ六三にハなにとかおもわれんかとこれも心にかゝりかんがへいる）【す】モシちよつといつておいでなさいましな【そ】そんならそうしよう（トでゝゆく）【大】めりやすへきゝなれしみゝにもつらきかねの音ハ。ありや八幡の七ッ八ッ。しんのはなしになかい夜を。みじかふあかすうハの空。もうきぬ〳〵が氣になりて。かわる枕い身にくらべ。あすハいづくの誰さんに。また此よふな實らしい。くぜつさんしよといゝかゝり。やすまるむねのなミまくら。ながれの身こそいとゞくるしき【松】このめりやすハ身にあたるぜ【六】これから大のミとしようぜまつ二上りをやらねへか【松】二上りじやァふせいでいる【大】そんなにぼれずとやんねへよひくぜ【松】へきれてくれろときづよくも口にハいへど目になミだ男ハそれとしやうちのを立すそとらへてなきいだしわたしがこれほどおもふゆへげいしやのろけハやめさんセ【大】へ夜着にもたれてしあんすりやそわぬ先から二世かけてもしや此世が二世目てハないかとあんじ物思ひ今ハたがいにせきせかれおもひすごしがますわいな【松】

どふともせ おすで肴をもつてくる 【六】サア いゝ肴だ一ツ呑るぜ 【松】こいつあ氣をきかせた肴だ。新らしいかにたゞぜ 【大】ヲヤいゝハけたしやァかにハすきだよ松どんかにがかたきだといふ。稲荷さまのあんどんハ御めんだよ 【松】そんな古い事をいうものか 【六】サア大吉さんさすよ 【大】チトお押へ 【六】そんならおあい ト松へさす 【松】ありがたし新内でやらかせかによりおあい御こゝろサソレ おによりこわい御心ナント 新らしかろう 【六】こいつあいゝわへ 【大】かにハおと酒ゝなうやゝまいか 【松】おつういふぜ 【六】おつういふといへバ松こう髪ハどこでいふ 【松】けふ両國までよふがありましたからけさつるさんの所でいつてもらいました 【大】いつそいきだ 【六】よく出來た鶴さんハ上手だ トはなしの所へおそのかへつてくるとて 【す】ヲヤおそのさんサア一ツおあがんなさいまし 【荻】おそのさんをミたら氣がおちついた 【松】おそのへんじをまことゝおもいお 【六】ヲヽわりい虫うりだ【大】ハアイわらつてやれ【松】まて／＼こふとおその二階へゆこうとハか 【そ】ヲヽすかねへ 【皆ゝ】アハヽヽヽヽヽヽヽハヽヽヽヽヽヽ 【す】おかたづけに致しましやう大吉さんそのお盃ながゝるりとおきハしよ【大】そうしやうへイ六さん トさすそれよりも盃かまハりいろ／＼な肴もかたづけてしまいそなく／＼さわきながらつうかへてるおすでほをく／ざくざ 【ト八】【荻】さよふなら六さんおそのさんおやすミなさいまし トみな／＼下へゆく六三ハひろさけゝあるゆへよいがましてねている 【そ】六さんサア湯をおあがり トいへどこたへもたハいなくウヽのことばもうつゝにていろやゝ時もうつりているうちおむとハひやうぶた岡ケ 【む】モシおその

さんまた久字屋からかりに參り升たが。たび〳〵だからことわりましたがぜひおかりもふしてくんなちよつとだからすぐにおかいしもふすとたつてたのミますか六さんにもおきゝなすつてくださいまし【そ】またいくのかいやだのふはらがたつよ（六三はめをさまし）【六】そんなにたのんできたものをかさねへといつてはいこじのよふだいつてくるがいゝ【そ】そんならぢきいつてくるからおまへもおきていておくれ【六】こりやァいゝおこゝろいきだ【む】さよふなら六さんぢきに（ト二人ながらいでゝてゆく）（やゝ時すぎてうらのひけをうつ六三はひとりねいらずうと〳〵している船頭松かけきたりびやうぶをあけて）【松】モシとんだ事がございます。わたしが今料理場に。忠助どんとふたりして。すぶどうまじりかんざまし。のんでいるうち下での咄し。堀井町のため本から乗てくる福田屋の。清兵衛とやらいふ客が。今おそいさんを身請して。つれていつたといふうわさ。ひよんな事ではござりませんか（トこれを六三はきいてひつくりする）【六】ヱ、そんならおそのは身請されたかはなしにきいたため本の。福清とやらいふ客だな。おれにそれとひとことの手紙一本かきのこさずだしぬかれたることよいのざま。赤はぢかくも不幸のばぢ親の異見もうわのそら慈非があまればあまる程内に片時いるのがうるさく。ちくしやうにもおとつたやつに今までおれがむま〳〵とだまされたのがくちおしい（トむねんなるおもいれ）シテ道すじはどこをいつた【松】サア くわしい事はきゝませんが。先代河岸から大橋通永久橋へかゝるといふミんなが

うわさ。たしかかごだといふ事で御ざります【六八】又其うへにこよいにかぎり。ねこかしにされたくやしさよ。おんをおもわぬ人でなし。とてもあいつがくさつた根生こりやこふしてハいられぬわへ（ト身づくろいをする松よふすなこてすそをおさへている）【松】モシけんそふかへてどこへおいでなさりますマア氣をおしづめなされまし【六八】どこへいくかハあとでしれるじやませすとそこをはなせ【松】それをきいてハはなす事ハなりませぬ【六八】ヱヽめんどふな（トはらいのける松だきとめんとするをひとつあてるうんとうしろへぶちかへる六三ハはしこをおりて忠助をおこす）【六八】コレ忠助どん今かいるからさつきあづけた脇差を【忠】まだお早ふございます（トいゝながらおへやのとだなよりわきざしをいだし六三にわたす手にとりてこしにさしおもておけさせそとへでるちがいないかと月のひかりにぬいてとる）【六八】まがいもなき家につたわる村政の一腰そんなら道ハ大はし筋ちつとも早くムヽそふだ（トあとをおつてゆくまよい子たさがすかねたいこかすかにきこゆる八ツの鐘）コヲン〳〵○（大はしむかふなかずの川ばたのところにまいにて四ツ手かごいそいでゆく六三よふ〳〵おいつきぼうばなをおさへている）【六八】マアまてかごハやる事ァならねへ【かごかき】とんでもねへ事をいふじやまをせすとそこをはなせ【かご】ぼうぐミこいつあ氣ちがへじやァねへか【六八】氣ちげへでも何でもねへシテ此かごハどこへいそいでかついで行のた【かご】いまわぐら下の久字屋から堀井町迄いそぎのかこなぜ又それをじやまァするのだ【かこ】サアどかねへか（ト六八のかごかき六三ヲつきおけ〳〵とはまた見事になげる）【六八】うぬらがよふなぶんざいで。おれにかゝるハかたはらいてへかごハしつかりあづかつた。おれにわたしておいてゆけ【かご】すきなあごたをたゝきやァが

る。こんなやつァミせしめだはんごろしにたゝんでしまへ　ト三人いきごみにてぶつてかゝりたてになるなミのおと七ツの鐘コヲン〳〵若人きられ六三にけおとされ川へおちる又大げさにきられ一人りたをれろこれをミて一人りハにげてゆく六三ハぬき身をさげておそのたごろすこゝろにてかごのたれをあげてミる　【六】ャア　おそのとおもひのほかこりや　どふだ　トびつくりするかごの中のかゞみをミて手にとり　さやにまきゑの花菱ハおそのが紋にちがいわねへからだハなくて此かごにおぞみのあるのがかてんがゆかぬ、、さてハため本にいるにちげへねへおもてからよりしのびこミきりさいなんでうらミをはらさん夜の明ぬうちちつとも早く月をたよりにいそごうか　ト六三ハかごをかゝへてほりい丁へゆく　〇夜もしらんでからすなきわたる堀井町のふなやどため本のまへのところ六三ハこゝぞとたちどまりて　【六】ア、うか〳〵と。まよへばはてし夏の夜のゆふべの雨ハ昔となり朝日にかわく此袖の。ぬれしたもとのむつごとハ。しんじつらしくあやなされ。のつたハやつぱりこつちがうつそり。只一かたなと思ひしゆへ。たれをあげれバ其かごに。おそのハなくて此かゞみ。貞事をミする女の魂。くもりし此身にかゞげものこさず。ぬすミにいつてそれなりにおしをかへたるどふぶつくしよう　おそのハこないのあまたをあけてかごの中かゝミをいだしミだれたんをかきあげ　【そ】ア、よく〳〵おもい思ふてミれバ一寸先ハやミとやら。きのふのふちハけふの瀬とかわるハ勤川竹の。ながれの身にも貞事をあかし一世とかわせし六三さん。きいふハとめて居続の積る咄も夏の夜のミじかくあかす床のうち。ちよつとぬすミにかり座敷。相談できて身請され。一筆跡へのこさねば。さぞやうらんでいさんしよう。おまへにそわねバせんない此身。じ

がいした其跡で。未來でおわびハ致しましよう【六】女郎に眞事ハなきものと。しりつゝ乘たさんばしの。かよふ小舟にこがれより。身をとりかぢとおもてをかわし。未來までものやくだくも。手のうらかへさぬ夕べのしまつ。先からよけるおもかぢの　はづれたろぐい。きれたはやをハつがれねへ【三】むすんだゑんハきるゝとも。わたしやこゝろハかわりません。おまへにおふた其日より。たま〳〵あわねバ氣がじれていやな初會のふざけ口。よふじをつけて寐ていれバ。廻しがきてハやわらかに。眞わたでくびのこわいけん。ためにならぬといわるれバ。わきまへる程なをつのり。まいばできざむ小よふじも。わずかな年季の數取て。あれもこれもとくつたくに苦づめハのびる中ゆびに。糸道つきし二上りの部屋三味セんの辻占も。待も分れもないよふに。たのしミしたかいものう。いやなおかたに身請され。ゑよふ榮花にくらすよりおよばぬながらい世帯も二人りして。くらす烟りハ細くとも。しうとごさんの御きげんとりかつらもお世話をと。思ふた事も水のあわ。今死ぬる身となつたのも。ほんに十九のやくまけかわかれにひとめ六三さん。お顔がミたいあいたいわいのう【六】草を譯てもおそのがゆくへ。今ハ此身にあわバ其場できしちかへ死ぬよりほかにしあんハねへァ、よそにきゝしが浪除も。めぐりきて。やへばに死ぬるハいとハねど。心にかゝるハ兩親の。いきてハくろふに苦勞か

け。しんでハ不幸の煙りを立。あれしのゝめつぐるからすさへ。はんぽの孝ハあるものを。人と生れしかひも無。二十五のけふまでも。一日孝ょヱ、立ず。まだ其うへにさきだつ不孝おゆるしなされて下さりませ【そ】ミるもの事が目について。夏朝皃の早咲も。露のひぬ間が身のさかり。日にかるゝとハしりながら。垣根をまとふ花のきも。夫をしとふわしが身も。心ハおなじものいわぬ。花より先へきへてゆく。有明の火もかげ細き。無常をしつてなくからす。別れときかバ清兵衛さん。さぞにくかろふおはらもたとう。人ハ身請をよろこぶに。わたしハ身うけが身の不幸。清兵衛さんへハ義理を立六三さんへハ貞節に。死ぬる命ハ一ッでも。二人りの男の顔を立。おなごの道もたつ道理トハいふものゝおんあいに。しんだときくならかへさんが。力をおとしてなかさんしやう。さきおとゝいもあいにきて。お部屋へ手ミやげはふばいに。さし出ぐちしてにくまれな。いろがわるいと氣にかけて。はやり風でも引たのか。お客にでゝもしいられてむり酒のむと身にあたる。ちいさいときの合薬くださんしたる黒丸子。他所行したら氣をつけや。けがせぬよふに水天宮。玉子守りもなくしハせぬか。風の吹日ハ舩にでな。やがて年あきかへつたら。そなたのすいた男をもたせ。うい孫のもりしやうとわらいまじりにいとまごい。廻しに迠も手をついて。なにかとお世話になりますと。子ゆへに人にあらか

わす。かいり足にもふりかいり。おふきうになつたとよろこんで。かゑらしやんした其時か。親子のわかれになろふとハ。死ぬる今迠しらずして。わたしが死んだ其後で。たよりといふハ兄さん一人り百年も御壽命すぎ未來で孝〻致シましやう【六】うか〳〵こゝまでおもわずもほれた女におびかれてきてもあわれぬ。内と外あかるくなつてハ人目あり。見とがめられてハのぞミのじやま。しのんでよふすをあきらかに照すかゞみがうらミなる。さやのもよふの花菱ハ。おそのが片身の此かゞみ【そ】おもいまわせバ六三さん。二世とかけたる此守り。けふまではだ身はなさぬハ。かわらぬしやうこたがいの氣起いまハあだなれ片身の守り　ト二かいより見おろす六三がもちしかゞミにおそのがかたうつる六三かゞみをとておどろき【六】かゞみにうつる此かげハ【そ】そふいふこへハ六三さん【六】おそのか　ト六三あたり見まハしとなりの藏のまへにある大八ぐるまをいだしひきしへたてかけこれをつたハりにかいへあがる【そ】六三さんあいたかつた　トいふおそのをつきのけたぶさたつかとひざの下へねぢふせて【六】おのれハやい〳〵。しやうねのくさつたねこ又女郎。よくも六三をかきのめしたな。そふいう心とつゆしらず。眞うけになつたがくちおしい。今さらいふもぐちながらうぬになじんた其時から。見せの帳合勘定も。とくいまハりとてもおろそかに。親類までも義理をかき。朝にかハり晩にかよい。けんぞくにまでうとまれて。たま〳〵おがむ佛壇の祖師もおのれがつらに見へ。盤若の經もみによミ。かへすぐ〳〵もこれまでの。あやなし事とハ氣がつかず。

さげすまれたがはらが立。うらミのやへばおもいしれ トつかに手にかけぬきかけるお そのハあれこゝ手をおさへ 【そ】おまへの手にかけころさるゝのが。わたしがねがいサア此まゝ死んでハ犬死同前一こといゝたい事がある【六】此場におよんでミれんのいゝわけ ト又わきざしに そりをうつ 【そ】こゝろのせくハもつともじやが。まあ〳〵まつてくださんせゆふべぬすミにかりられて。久字屋へゆけばいつにない。よふすかハつた座敷のさわぎ。身請ハすんだと足元から。むりにおしこむかごの鳥 出るとしあんのかたかへて。わたしを出して廻し舟。かごハおまへをあざむく手だて。あとへ残したそのかゞみハ。ほかへうつらぬわたしが真事。くもらぬ心おなごのたましい【六】うたがいはれたかゞミのなぞよふすもきかずはやまつた【そ】せくのもどふりわかげの花。ちらすも今の朝あらし【六】身にふりかゝる情のやへば。ちしきのいん道二人リが薄命【そ】死出も三途もめふとづれ。ミだの浄土ハ西の空【六】東のしらまぬ其うちに。ちつともはやくかくごハよいか【そ】妙法蓮花【六】南無詩經 トふりあけるやへはの下すでにこふよと見へるおりう しろのかたにふく清ハからかミあけ一こへたかけ 【清】ふたりともにはやまるまいまづ〳〵またれよ【そ】ヤア おまへハ清兵衛さん【六】見つけられてハ一大事 ト又かたなを とりなおす 【清】はてさしんで花見ハ出來ぬぞや。しさいをはなすまづまたれよいま迯名を福清とかへて。おそのどのゝ客となりしも。わけある事茶屋もひとつ所ではと。久字屋へ入込なじミとな

るも。ひとつの手だて。どふぞおそのどのを身請して。六三どのへわたすなら。身のほふらつもやむどふり。さすれバわれらが親父へ寸志【六】がてんのゆかぬことばのはし。して其元ハ

【清】サアそのふしんハもつとも〳〵。今このよふに町人と。すがたをかへてハおれどもわれら、入間の家中にて。吉田富之進が悴。吉田忠兵衛と申もの。九年已前親富之進へ。殿より御預けありし。御家の重寶譯露の香箱。紛失なし。其とがハかるからねど。御仁心をもつてわれ〳〵に。さがしいだせとおいとまたまハり。あすこゝと草を譯。吟味すれどもてがゝりなく。いかゝがわせんと思ふうち。共元親父六兵衛殿恩も所縁もないものを。身に引請て世話をいたされ。さがしいだして手に入香箱。それにてゆへなく歸參致し。今ハ國詰われ〳〵お出世もそんな親父の恩何卒少しの恩がへしもと。おもふ斗で心もとゞかす。此節江戸へ下りし所。風いたよりでうけたまハればそ其元ハ深川通。内にハ片時もいぬとの事親父の苦勞がさつしやられ。かなに見しりのないを幸ひ。おそのどのゝ客となり。身請をすましたうへからハ其元へお渡しもふす。どうぞこゝろをひるがへされ。年もよられし親父の事。何に付ても孝と第一。又壹ッにハ先祖より代〻ゆずりのかぶかとく。大事に相續いたされよ〔トしよりきいて六三へびつくりする〕【六】ヱ、それならあなたが忠兵衛樣でござりましたかつね〴〵親どものはなしにハ。うけたまハりお

りましたれど。其右りハわれらハ若年。おかをもろくにおぼへませず。只今の失禮ハ眞平御免
くだされまし。又おそのが事につき。段々のおぼしめし。御禮ハ言葉につくされず【そ】わたし
しハこふいふ事とハしらず。かゑつてうらんでおりました。なにから御禮いたしましやうやら
【清】なんの禮におよぼふぞまた此一品ハおそのどのより其元へほんの土産　トおそのが年季證文を六三へわたす
【六】なにからなにまでェ、かたじけない【そ】うれしうござんす　ト二人りながらよろこんでいるゝおき番忠助しやうじをあけあんどんをひきにくる此おとにおその目をさまし
【六】ァ、びつしよりあせになつたはてなゆふべ久宇屋身請がすんだと松がし
らしたゆへ。あとをおつかけて。たしか大橋むこふでかごかきを二人ッころしてそれから堀井
丁へいつて今ため本の二かいだとおもつたらこいつあおかしい【そ】ほんにそういへばわた
しもお客に身うけをされてたしかおまへがあとからきてため本の二かいですでに死のふとし
たつけがそのおきやくにとめられてしじうの咄シがわかつたとおもつたらョャ〳〵ゆめかのう
【六】そんならゆふべおむとゞんが二度目にかりにきたとおもつたがあれからゆめをみたのか
おきやァがれ【そ】ふたりながらおんなじゆめをみるといふもふしぎだよおまへハけさおかへ
りか【六】もふすつぱり夜もあけたけへろう【そ】けふハいゝじやァないか【六】いつゞけも
あんまりだ二三日うちにこよふ　折からそこへ【松】ハイお舩ができました

口上

愚筆にてしるしましたればよろしくはよみくだされましやう

予も未だ見悟かずして。俗をよごし。情愛を書記す事。鵜の眞似にハあれども。己が苦るし身を知つて。人を諌るのミ。足の出る貸蒲團を着て。廻し枕に天窓をいためて。藪蚊にせめられ。最照事なし。それ故野暮の道ハ得たれども。色男ちん〳〵鴨の。深意をしらず。文くだ〳〵しく其符合せざるハ。ソレさつしておくんなはいまし

墨之戯著

その後で

叙

夫魏王寶◎を得て價五城に當る亥を歡び狸は金◎を垂て廣さ八疊布るとを娯しむ船◎さまが見ゆるとは大星氏が戯言にしてイヨ◎屋とは兩國納涼に充滿たりされは◎蟲女房雉尾の的に與市をまねき◎藻前ハ◎體に近付て終は那須野に舊跡を殘すいでや皎人の涙ハ◎と變化歌に讀るヽ◎江◎島六◎川其上古ハ◎津島藥◎すヽ◎瑞香の◎味噌◎烏賊◎雪花菜◎不餘不洩◎の中に戸塚に聞へし症氣◎夫は偖置こヽに名たヽる江戸街に其名も高き◎屋の樓上四角な◎子と三十日に◎の兎あらは面向不背に照し視る虚言と眞實のふたおもて浦島髣髴の是や夜光の◎手

函あけて悔しき玉の語言もきぬ〳〵の袖に玉なす露のいろ少見しらむ白玉椿八千代をこめて酒に名付る玉箒手にとるからにゆるく玉の緒人間凡五十年樂しミ僅二十年一寸先は烏羽玉の闇をあやなす此廓こそ日の寄とこへ玉ぞろひうき川竹の流れの身樂しミあればかなしミのつらき勤や忍れむうしとミし世ぞ牛の玉おつれは仝じ谷川の其水玉の流れの身には魂膽手管品玉ならで替らぬ春揚の年玉にも通と不通を合浦の玉新にひとつの玉を磨といへども從來ひからぬ性根玉蒟蒻玉の腐し如くなんの詮なき河童の屁玉やつパり玉に瑕とやいはん偷燕石の類ひならバ請周客の哂ひは見ゆるし玉へかしといふものは

玉齋叟馬自識

四

五

述意

○嚮に二醉亭佳雪と共に角鷄卵てふ甲驛の洒落をあらハせしに幸なるかな世に行れてより契情買の美味を覺へ今亦北里玉やの世界一編を著され共元來短才愚蒙風流客ならねとも四孔の力さへなく只禿筆の横好お先眞闇喧ハゞ哂へ笑れるゝが本意所謂戯作の氣違ひか予ながら氣か知れす

○此書に㊞を用ゆるの意ハ則予か目印を世に弘めんが爲にしてあまねく大人達の御贔負をねがふのミ

○予過つる夏の頃まで東都新橋近き邊に仮住居せしかど故ありて今また行程百里を歩て西の田舎に來ッ種をとる絲瓜ならねどもぶら〳〵として當時一所不住江戸ッ子の口眞似すれとも片言不通尤多かるへし見赦し給へかし

午の春　　花山亭笑馬敬白

青樓玉野語言

發端

花山亭笑馬編

よの中に絶てさくらのなかりせばとハ在五中將の名吟宜なるかな。さなきだに賑わへる大江都なるも櫻花爛熳たる左側にハ。長閑すぎたる心榮早咲羣のきおひ子弟足弱連の遲櫻を嘲り。楊貴妃櫻の花娵をミてハ仇なき從者の姥櫻を惡む。花ハ櫻樹人は又八重掛霞のほろ醉に。うかれくるわの花見時。あしたにむれを引て夕ァに集る駕のかづ風雷門の風につれ木の葉のちるに異ならす。轎夫とんだり替ッたりヨイ〳〵宵の口舌より又の御げんを待汐や。隅田の川に船はあれど君をおもへバ歩行よりも。四ッ手に乘じて北にいさむ。コゥ〳〵の懸聲に一里や二里ハ南柯の一夢。さめぬ内こそ遊びの花と滅多に運び無正に通ふハ。病の根拔鬱氣の棄場陶倚が富も爰に盡趙李の美も爰に爭ふ。色の買込情の切賣得意と稱じて賓客をうやまひ。口入と號して幇間をいやしむ。そがなかにも釣れじ席上の外飾客は。前後不覺の怨語を吐き。無娼閨の爲閙風ハ

悋氣應變の獨寐をかこつ。雨中といへとも照さるゝ事あり晴天といふともふらるゝとあり或はかミがられてのぼせあるはすかれてすゝまぬなんど千差万別十人十色。迷の雲の眼前に晴ては居續ふさるで歸宅を催し。浮氣い風の止手に吹れては新主競ふて早行を促す。されバ土手八丁を越る左側は商山の四皓もこゝろ先達て樓上に到りきつとよの送りと葉には竹林の七賢もたましゐぬけて脊後に殘る實にや春宵一刻價千金を抛ッの徒前髪の痕もまだある青頭より莚破りの白頭までも皆夫々の糸につれたる見歸り柳此一場の繁榮は正是欲界遷都昇平の樂國とやいわまし

○こゝに江戸町玉やのおもて二階部屋の内居續の客を歸したるところへこうしもたそかれ時には針妙の休時といへるにひとしく傍輩女郎新造かふろ打寄てのうわさをしてゐる

【仇袖】松音さんではぬしがかぶらしつたもんざいますからおふさぎざいます子【松音】ヲヤいやでおすけさもかへるかとおもひんしたら居つゞけさすかねへつちやァありませんものをナゼァノ客人なざァしつゝこうおつセういやだつちやァねへ【新造】ヲホヽヽおいらんありやこりやなと斗りおつせへすよそりやァほれられたが不肖だとかんにんなさいしな【松】ヲホヽヽヽヽモゥごせうでおすそりやァそふと仇袖さん邑さんはなぜお出なんせんか子へ【仇袖】モゥあの人にもあいそづかしでおす【松】ヲヤ〳〵きついこつた子【仇】それだつておいねへうわき

のかはやきざゐまさァナこの比も喜助どんが土手であつたといひましたつけたしかゐての方がもへぼつくひておつせうよ【松】ちつとひどひめにおあわせなんしなこのぢうもはやり歌できゝいしたが人もほれるしわたしもほれたうわきよするのが玉にきずといふがありゐしたが邑さん達のこつておすせう【新】男もよしあんまりうわきらしくもねへなァ猪三さんでおつせうよ【仇】ダガァノ人もこないだハあんまりこねへよふでありますぜ【松】ナニアリヤアわけがありいすれな ト小声になり 猪三さんもこのせつレコのめへをしくじつて勘當といふでもねへがどこやらへあづけの身分でざいますとサほんにきのどくでおつす【仇】アリヤア花の戸さんがほれるもむりやァねへわつちだつてほれいすれ【松】ヲヤきついなさけしりざゐ升ヨ トはなしなかばへ花ヨリあそび居る客大たまゐいとなァかふろたおつかけ廻ろかふろうろたへこのさしきへにげこむ【仇】なんだミどりじやァねへかそう〴〵しい【ミどり】それでも馬面さんがおつかけるすものを つゐて【馬面】どふだおいらん達・松音さん・コウ松音さん【松】なんざゐます【馬】いつもおわかひ子 ト少しおくれたしやれたいゝながら ゲイプウ ト座になおる【仇】いつそいひきげんざいますネ初浪さんわへ【馬】今ねこかしにしてきいした トロをとがらひつくりかへし女のまね【松】ホヽヽヽヽいやざいますよぬしやァさけをおあがんなさるといつもおあかひ子【馬】いめへましゐ今のいしのだへしにしやれでしかへしハさすが松音大明神おそれ入ました【松】ヲヤ〳〵すか

ねへヨゥ【馬】すかねへでも又ところによつてほれてがあるにハこまりの天神さ此間もさると
ころへ遊びに行やした。尤初會で座敷はそこ〳〵の床へまわりの二ッ枕ひよくの床といふ
外題。となりざしきのめりやすをかりてモシヱぬしやァモウ寐なんすのかへそんならちよつと
まくらをおかしなんしなへととりあげられ枕をかくしてしまひサァそれからねるともならす
夜がよつぴてへつめつたりくつついたりヲヤぬしやァモウじれつたうスなんぞと【二人】ヲヤ
く〳〵すかねへ身ぶりざいます子モウよふおすぬしの色男ハミんな知ておりいすわなホヽヽ
【松】うけ太刀にこまりいす子ホヽヽヽ【馬】東西〳〵マァだまつてきゝなあんまりよく
されて我身ながらふしぎだからコウおめへハどふいふもんだか氣がしれねへおれがよふなやろ
ふにほれたといつてくれるおめへハ余程風流だせと下から出ると先の女がハテわつちがおとつ
さんハ茶湯師でざいますトサ【皆々】ホヽヽヽヽ　トわらふハわらつたがろくにこのしやれへおちがこず。あとがしらける　【馬】サァこれから
長崎看々踊でおいとまとしやせう　トひよろつくあしをふミこたへおつな身ぶりして　へかんかんのうきうのれんすきうハきう
れんす　トおどりなかバ夜ミせの鈴の音が　唐〳〵

第二章

却説星移斗轉じて引ヶ四ッの拍子木チョン〳〵と共に是よりの有さま頗變化し鯨舍の三味線いとまを給て篭の中に居寐れば燭臺役を行燈に讓りて非番となる。客をもてなす調度の器具は若イ者にいざなわれて心ならずも廊下にひそミ。長坐子弟もチトあちらへの言葉につれて小便所にまごつき遂に屛風の内に篭る。されば狸寐入の未至通は狐あたんの待俉なるを悟らず。猫なで聲の自前づとめハねずミとらずの初心なるを搔のめすなんど。かくおそろしき妖怪の幽棲四方八方寀々たる左側火の用心の割竹に忽然と目をさましたる客有

【正六】年ハ四十斗り。その人となり嵐冠十郎が山口の高慢に淺尾富十郎が九大夫の心底を當分に調合したるがごとく。内をいづる時のいしやう装ハ糸入めくらじまのわた入につや光々たるさんとめのあわせ羽織なれども。半途に心やすきかたのもて上にハかわじま下ハしまちりめんと着かへ。はおりハけんぼうのあられ小紋尤りうもんのひとへ羽織とかわる。されども衣裝と人物相應せぬゆへ外見甚あしく是別人にあらず。某商家の執權職にして金銀をすつる事あたから湯水にひとしいつたいけふおやしきの役人衆を饗應といつわり内を出しが。ひるハあすかの花見よりしてゑびやの座しきにのミあかし。これより駕にていそがせしかバこゝへ來りしころハ丁度ひとゝもしころなり。それより四ツ時分ともおぼしきころまでげいしやも二組おなおしをいとわず殘さらこよひ三會め惣花をふりしとなれば全樓の上もこにて大生醉となりしがはてハ折々小間ものとせをならべ。手足などハ氷りの如くひへ一向正體なきありさまに皆々おどろき。いろ〳〵介抱して床の内へつりこミやすませけるがやう〳〵ゑひもさめてミれバもとより酒にのまれたる大病ゆへいま又半生にかわる事なし　ア、ヲよく寐たぜ　アツ、ハヽトあくびとせのびをいつしよにして。あたりをミれどもあい方の女郎ハおらずうすぐらきあんどうのそはに新造がいびきたかやかに居眠のまにして火入の火ハいつきへたやらほとりさへなければ少しむつとすれどもむしたこらへ。のんどのかわきたへかたければ枕元に塩茶で袖の梅がとひてあるとハさつぱりわすれ。茶わんをとりて一口のミ茶とハふうミも異なればおかしな顔をしてむせうに。手をたゝく音にしんざう目をさまし。よんでめへりいせうといつたばかりにかけいだす。ほどなくあひかたの女郎【花の戸】としのころ十九か廿くらゐ。せかつこういひぶんなしむらさきちりめんとひがのこちりめんのすくむく淺黄ちりめんのしごきねまきうちかけとすがたつまにもちそへたるそのすがたぞつとするほどの佳きの床のうへにすわり　さつきハひどくおよひなんしたがモゥよふおすか。とんだやつかいものであ

りいしたョ　トにつこりわらふもはやいかりもうすらぎ　【正六】なんだかむ中でさつぱりねてしまつたそりやァそふとこゝにあつた茶わんのなかハ茶じやァなかつたの【花】ホヽヽヽ袖の梅ざゐます【正】とんだものが枕もとにあるの【花】ぬしやァさつき二タ口斗りおあがんなんして居なから【正】なるほどそふだつけのちつとばかりおぼへもあるよふだとかく酒といふやつはきめうなもんで胷からのこたァさつぱり忘れていま目がさめた時も内に居る氣ハ大わらひじやァねへか　トしだいにむねの内のむしやくしやもきへてくるこれいかんとなれば客胸中に立腹あるとをしつて女ハたゞちにゑミをふくむ・と葉にそれとハいわざれとも・あるいハかたち目元にてそのいかりをおさゆるなど・實に城をかたふくるのはかりことおそるべし　【正】コゥちよつこらだれぞよびてへが手をたゝひてもよしかへ【花】なんぞ用でもありゐすか【正】こいつがほしい　ト多葉粉盆の火入をきせろでちよつとたゝく　【花】わたしがそふもふしいせう　ト火入斗り取出しいとしりがるにたつて行・この女郎なにか胷からそわ〳〵してざしきに居つかず・正六ハ床をいで〳〵帯をぐる〳〵とまきまへの方にてはさゝ行燈をかきたてるとそばに封の切たふミがあるゆへこいつハいひものお手にいつたと・半どう敵の身にてひろひとり又床の上へあがりひらいてとんとせし所へ新造か火入をもつてくろゆへちやつと隠ス　【新造】アノ正さんに今おまんまをたべてまいりいすから夫まで目をさましてゐておくんなんしと・わつちがきつとはりばんをしいすよ【正】ヲットよし〳〵寐るとじやァねへからおいらんにゆる〳〵とたべてきなせへといつてくんな【新造】フヽン　トわらひながらゆかすそばにいるゆへとんたじやまのかこと　【正】コゥホンニそういつてきてくんな　トいふゆへ新造出て行サアしてやつたとくだんの文をたもとより出してまづうわふうじの當名ヲよむ　【正】ナンダ玉やの御内にて花の戸さま參るいもふとよりハヽァとんでもねへおらァ客のみかとおもつたこいつァざい所から來

たのだァろうなんにしろまづよんでミよふ　トひらきミれば

一筆しめしまいらせ候追〳〵あたゝかになりまし候處いよし御かわらセなふ御すまひ遊(あそバ)し候をきかまほしくわたくし事も無事に相つとめ候まゝはゞかりさまながら御こゝろやすく思し召下されかし扨とよせんしハ細(こま)〴〵との御み下されかず〳〵御うれしくぞんしあげ〳〵そのふしさつそく御返事も申上たくぞんし候へともちとした譯(わけ)も御さ候て又〻新石場の方へしかへられいろ〳〵とり込こゝろならず御ぶさた申上候段いくへにも〳〵御ゆるし下さる可候それにつきましかゝさんの病きいまに〳〵おこたりもふさずその上兄さんも同しやまひとやらひとしをあしきよし新石場へまいり候翌日(よくじつ)わざ〳〵與五六さんがたづねてきておくれなんして委しきはなしをきゝましおどろきまいらせ候今までとハちがひわたくしもすこしへだゝりそれに兄さんさへ病氣の事ニ候へばさだめしおつかさんハたよりなくおもひなんセうさぞ〳〵近所のおひとさん方のあけくれお世話におなんなんせうかとこれ又きのどくに存〳〵若姉(あね)さんおけたくしかいづれ一人内に居るなれば何かの介抱かゝさんも兄さんも心置なふおもひなんせうとこれをおもへばやるせなく何をいふても勤の身ハ儘ならず川竹の身ハたれしもかなしき事とハおもひあきらめ候へともわれらばかりのよふニおもハれ候それに兄さんが病氣な

れバいつこう居ぐひのよしそれにいろ〳〵入用もおわしゆとの事ニゆまゝわたしが共ふしありあわせの金子貳兩與五六さんへあつらへ申ましゆけふし又たよりおわましゆ處おふたりさんともいまだおすぐれなんせんよしさてしも長きやまひニハゆへとも醫しやさまのおいひなんすニハどことやらの御夢想の藥りを來月の朔日より七日があいだ朝水にてせんじのめハなおりゆよし與五六さんのふミにこま〳〵と申參ゆへ共その藥代十兩斗も出さねバ手に入不申との御事ニゆわずか十兩の金ニ而かゝさんや兄さんの命をすくふ事にゆへばわたくし手前にて三兩ばかりハとゝのへたくぞんしら〳〵間あねさんの方で七兩ハ是非〳〵來月の朔日までに間ニ合申ゆようニ御たのミら〳〵又申たき御事ハ山ニおわしゆへ共なにかのおもひ事ニやら持病の癪いたミそれにいまだなじミもつかず諸事こゝろづかひおゝく明暮おもしろからぬとにくらしら〳〵くわしき事ハ又のたよりとまわらぬ筆の跡やさきしれぬところは御すいもし下されたくまづハ此よしをあら〳〵かしこ

トよミおわり鬼をあざむく正六もおもわすほろりと一トしづく日つけをよまんとするところへ【花】モシエそりやァなんざいます　トとわれてびつくり【正】ムウいつのまにきたのだびつくりした【花】そりやァよふおすが今の物をおミせなんしな　トとりにかゝるゆへせんかたなく【正】ナニこりやァおめへがおとしたのじやァねへか【花】ヲヤ〳〵とんだものをおめにかけい

してはづかしふおすこちらへおよこしなんし、氣の毒なる顔にて文をとりかへししんにふさぎし様子【正】コゥいひじやァねへかおれだつてむめんもくな二才じやァあるめへし何も人にいわふといふわけはなしそんなにふさぐ理屈はねへわな【花】それたつてあんまりめんぼくないことをおミせ申て定メておさげすミなんせうとしんにつらふおすそしてミんなおよミなんしたのかへ【正】そふよあそこゝ本よミをしやした【花】ヲャくどふしいしやうト顔をかくす【正】ハテきのちいせへこれんばかしのことをそんなにきがねをする事があるもんかじつにきのどくなわけだの【花】アレサモゥその咄しはやめになさりいしそんなことをいわるゝ程身をきらるゝよりつらふおす【正】コゥそりやァうらみだセ【花】なぜざゐます【正】それだつてこんなことを打あけてはなす男もあるだァろうとおもやァかくしてくれるほどはらがたつは【花】ヲャくぬしやァきやすめ斗いわつしやるよなにこんな事を人に咄しいしやうたとへはなしたつて相だんになつてくれる事は扨おき大方ぬしなざァこれきりあいそをつかしてお出なんすめへとおもやァいつそ悲しふおすものを【正】ハテそんな心づけへならよしなせへどふこれきりにさられるもんかなそしてなにかおめへの親里はどこだへ【花】モゥこふミられいしたからはぬしにばかりなにもかもつゝまずおはなしもふしいすかならずお友だち衆にもお咄しは御無用でおすよァノわたしがかゝさんは麻布でざいます

がその深川からいもふとがよこしいしたみの様子でハごびやうきがおもりいしたとのまこと
にくらふさいますゆへ此ごろしやァなにかそれ〴〵して手にもつかずそれに今もふしいす通り
相談する人とてハなし何の因果(いんぐわ)でおつせうかとしんにかなしふおす（トなミだぐむ）【正】なるほどそれ
じやァくろふになるのハもつともだしてその七兩の金といふハモゥやりなすつたか【花】なん
のそこどころじやァおつせんわなぬしもしつてゐなんせうが深川とハちがひ此とちでハ紋日も
の日のミじまいもモゥそふおふにせねやァつとまりいせんからいもふとよりも一ばいくろふざ
ゐますといつていもふとでさへいろ〳〵心づかいにするかゝさんや兄さんの病氣。この七兩ハ
ぜひとも工面はせねばならずモゥ〳〵そんなをハやめにして横ニおなんなんしな（トわがミおとあにねころび今の金をまくらの引出シへ入る）【正】コゥじつにいもふとの心根(こゝろね)が不便(ふびん)じやァねへかこふいつちやァミくびりがまし
いがその七兩ハわつちが上ケよふからまづ麻布の方へはやくやるかよからふぜ【花】そりやァ
モゥありがたふおすがしミ〴〵まだお馴染もうすひぬしへこんなをがしれいしてじつにはづか
しふおすモゥこふおはなしもふした上ハどふぞつゞいてきておくんなんしほんにたよりにいた
しいす【正】ハテサはづかしいなんのとこふいふをしつたといふもふしぎのゐんだ【花】
それだつてあんまり勝手がましふおすものを【正】なんの母や兄につかふ金をかつ手ともきま

ゝともなにしにおもふもんかそりやァすこしあごのひげか手にさわるよふな年になつてハ二才や三才の客とはばんたんこゝろのおきどころが違ふわなこふいつちやァおかしらしいがおめへ達の勤の身にハ、ァこふいふくろふがあるわへといふこたァ百も二百もそんなせうちだ。かならずきがねをしねへで此後用があるならいつてよこしなきつと身におよぶだけハ力になつて上ケよふから（トいひながら枕元のどんぶり二入てあろ紙入より小判七まい出して渡ス）【花】ホンニ有がたふおすしんでもわすれいせんよ（トいふ口元のかわゆく正六もたまりかねそばによりそひからだもむじ／＼するよふすゆへ）【花】ちよつとおまちなんしよ（トいひながらはらばいになり一ふくのミそのすいがらをはいふきのふちにてすこしちからたいれてパン／＼とはたくところへひきらぶの外から）〽花の戸さん／＼【花】アイエ、モなんざいますいつそじれつてへぞョ引（ト正六を力いつぱいにしめつける）〽花の戸さん／＼あざぶから急用だといつてめへりいしたよ引（トきくよりおどろきたるかほつきにて）【花】そふざいますかモシエちよつといつてくるからかんにんしておくんなんしへ（トかいとりもそこ／＼にひつかけ出て行正六もさいぜんの為といひ今又麻布からの急用といひもし母か兄の内にへんでもあつたかとおもへバいとゞはづちめぬけ只あきれはてたるばかりにて木から落たるさるのごとし）

第三章

遠き慮なき時は必近き憂ありといへる聖語うたがふべからず爰にひとつの別世界あり客いさる所の金持の息子かふ名は【猪三郎】（衣装付くた／＼しければこゝにいわず年ハ廿四五歳性といひ人物五分もすかぬといふ色男ひところハ身分相応銭金のまわるに任せ次第につかひあらく

なり後には日かずのかぎりもなく居つゞけするも度々なれば一家親類より合てかれにさとし是にしめしつれどもいつこう人の異見は鹿の角に玉あられなか〳〵とゞまるけしきもみえねばいつそ勘當をして仕廻ふがましかといへる相談もあれども何分ひとりむすこの事殊ニ親の慈悲の有りがたさにてもし心の入かわることもあらんまづそれまでは塩をふましてみんと近ころ旦那寺の和尚を頼みあづけ日々の小づかひより外一錢もあてがわねば一向つまらぬ身の上となりたま〳〵とにかこつけて此土地へくれども茶やの二階さへふさがりとなりむねんさくやしさ面目なさ一トころのことをおもひ出しモウこゝへこまひとはおもへどもこの玉やの花の戸に深くなじみ偕老同穴ともいひかわしたることなればさすがにこゝろのこり又花の戸も此猪三郎にこそ一生身をまかせんとおもひこみし戀中なれば今かくみすぼらしき身となりてはかなしき上にいとしさいやまし折をみあはせ時々はみあがりをして呼ぶなりけふしも外にてよびむかへしかどむかしのさわぎ引かへて來るとひとしく床にいりほうばい女郎のむかしにかわらぬ深切に力を得てうつら〳〵と寐もつかずかゝるところへ【花】そつとせうじをあけ　おきていなんすかへ　ト床にいり　ホンニよくまつてゐておくんなんしたうれしふおす【猪】ハテわつちが身はどうせおめへにあげられた身だものを朝迄も待てゐる氣さ【花】アレサまたそんなことをおいひなんすかならずそんなことはいわねへで一ト頃のよふなはでな氣でおいでなんしなそりやァそふとまだおとつさんのごきげんはなおりゐせんか【猪】それについてけふもわつちが居る旦那寺の和尚からおふくろへ内々手紙をやつてもらつたがとかく親父がかぶりをふるよふすどふせまだしばらくは内へいかれぬとみへる【花】そふざゐますかこれといふもみんなわたしからおこつた事かんにんしておくんなんし【猪】ハテぐちなことをいふもんだせコリヤァそなたのわざといふじやァさら〳〵ねへおれがたましいのうろたへたのさその譯はよくつもつてもみなせへツレおめへは兩親のために身をうつていままた親方の爲にこそつらいつとめもおこたらず勤るじやァねへかまことに忠孝まつたしとかいへるおしへの通りじつに面目

次でへもねへ【花】アレサそふおいひなんすとぬしにまで勤をするよふでくやしふおす此間もしミ／＼行すへのとをおもふにつけたまにあふときへも儘にならぬといふハ一トころたくさんそふにあつたばちでおつせうとしんにかなしふおす【猪】そりやァおれだつて身分相應にあそんで居たなら二タ親ともにくろふをかけずそなたに心づけへもさせめへと思へば（トいゝさし少シふさざ）さつきもこゝへくる道で孤いちめへを身にまきつけた宿なしが旦那一文下ダさりませと地びたにひれふし手を合せしをミるにつけ・わづか一文の錢にさへあのくらいにせねばならぬものを・親父がこゝろをくだひてもふけしその金を・湯水のよふニ遣ひすて・おふくろがためし小づかひまで・あとかたもなくすつるといふハ・不孝の上の大罪人・その大ざいの此おれを・勘當もせず・どふぞ人なミのものにしよふとのおぼしめしで・旦那寺へあづけられし其慈悲ハ・今にはじめぬ事ながら・海とも山ともたとへよふもねへ御恩と・そなたをまつ間の床の内・つく／＼おもへばおもふほど是迄つくせし不孝のつミのおそろしく・いつそ死でもしまひたくなつた（トいふこゑもくもりてなみだをこぼす）【花】（これをきくよりおもハずわつとせき上る口を袖にて押へなミだを拭イ）くやんでかへらぬとでおすからモウくし／＼とおもひなんせすと・随分うき／＼とお身をだいしになさりいし・若そのおふさぎなんすこゝろから病氣でもおこつてミなんし・とゝさんやおつかさんへたいてへや大方の不孝じや

ァおつせんわな。そんなら此後(のち)こちらへお出なんすともやめにして。とふぞその和尚さんとやらをよくおたのミなんして。ちつともはやくお内の首尾(しゆび)のなおるよふになさりゐし【猪】おれもそふおもつてゐるから今夜きりて爰へもこねへつもりだ【花】まさかそふおいひなんすと一生あわれぬよふな氣(き)になりゐしてかなしふおす【猪】そりやたれしも同シ事又其内に二タ親のきげんもなおり内へせへはいればそなたの深切をはなしてどふぞ身請(みうけ)の相談の出來るよふになる事もあるであろふまづそれまでハみのたよりをたのしミにくらしやせうとハいふものゝかねてそなたにもはなして置たこちらの質物(しちもつ)とり戻(もど)さねば一チ分(ぶん)たゝず親父がなんぎになるめへもんでもねへほんに金が敵(かたき)の世の中とハ此節おもひあたつたぞ【花】その事についてもいつか中おはなしなんしたゆへ。此頃中心遣ひをいたしいしたが。今夜の客が金をもつてるよふすゆへ。松音さんをたのミいして。うそな手くだに。うま〳〵と。おもふゐつぼへはまりいして。七まいほどハくめんをしいした。これにわたしがあり合せの金子都合十両あげ申ゐすから。かねての質をお請なんし（トさきに正六よりもらひし七両と外ニ三両の金を猪二郎にわたしはじめいもふとが身のつくりものよりして後はいふきをたゝくをきつかけにあざぶよりの急用といつわりし狂言のおもむきまて委敷かたれバ）【猪】（笑ひ半分）こゝろざしハ有がたいが他人の金でわが身の事を【花】ハテ氣のよわひ事をおいひなんすァノ客がセうちでくれた金なればわたしがぬしにあげゐすものをたれがなんと

もふしいせう【猪】そんならおれが世にでるまで借(かり)ておかふ【花】ナレサモウごせうておすよ

そしてマァこちらへおよんなんし ト枕の下へ手をいれてかよわきちからいつぱいにだきしめ ぬしやァおやせなんしたよふざいます

【猪】そふでもあろふよ心づけへがたへねへもの【花】かんにんしておくんなんし トしつかとかじりつく

【猪】どふかんにんがなるものか トたかひにとけし 床の内 それハ扨置正六ハ。待ども／＼花の戸が来らざれハ。起てきたり寐てきたり。或ハ欠伸(あくび)をし。或ハ鼻(はな)くそをいぢつたり。後にハだるま大師のざぜんといふさまにて。ふとんの上にあぐらをかきて。多葉こものみあき天井(てんじやう)板もかぞへつくした時分。しきりニ小便したくなり。もよひにもよひてよふ／＼出かけ。すぐにせうべん所より帰ル時。一ト間の内にて花の戸がはなし声がするを聞付。ぬき足して少し遠方よりよふすをうかゞひければ。先刻きたりし妹よりの文をはじめまつかならずきつくめの事あり／＼よハりけれバやつきとなり【正六】エヽ花の戸の大どろぼうめ ト一ト間を目がけてかけ行所へこの物音に新造かけ来り【新】ぬしやァどこへお出なんすへ【正】くそヲくらへうぬも同類(どうるい)かくごなしやァがれ

【新】ヲヤ／＼あきれけへつたもんざいますそしてどろ坊(ぼう)たァだれがこつておす【正】ナニだれだもすさまじいこゝの内じやァおつとなじミがつくと客の金をダヾだましてとるが法しきかへおたふくめ トせきこむ【新】そりやァお客をだますハつねざいますものをマァしづかになさりまし人ぎゝもわるふおす【正】くそヲくらへしづかにすることたァいやだイ手のある女ハしつているハ手のないげへけいせいハ朝比奈(あさひな)が島巡(しまめぐ)りの記(き)にもねへさたゞさる唐人(とうじん)めら ト新造をつきとばしそのいきおひに猪二郎と花の戸が寝ところなどしきを目懸(めがけ)てかけ入りしがいかゞハしけん正六ハ猪二郎が顔をとるよりはやくみらじをひつしやり【猪】ふしぎそふな顔付して 今のハたしかに

【作者】ハイお内のおばんとうでござり升

青樓㊙の語言終

花惠鑒

花街鑑自序

娼妓に。誠なしとれ。解知らぬ。未至な口から。僻說たるも。是誠を。盡すまで買ざるの。誤りなり。喩娼妓と。いえども身に。誠あるに道あり。善を明らかにせざれば。身に誠ならず。誠れ天の道なり之を誠にするれ。人の道なり。誠れ勉ずして中。思ずして得。從容にして道に中れ。聖人なり。之を誠にするれ善を擇んて。固くこれを。執者也ト子思先聖も。客と娼妓の。胸中を穿て。偏ならざる。之を中と謂も。中の。才をも恥ざる。破家押の强れ見ゆるし。給ひねかしと。云爾。

文政九丙戌年

正月發兌

玉菊全傳　花街鑑上之卷

○第一章

【吉原大全ニ曰ク】昔角町中萬字屋に。玉菊といえる遊女あり。全盛寛活なる事ならびなく。廓中の評判茶屋の。おもひつきよければ。おのづからその名高尾。薄雲にも。長〳〵劣らざりしが。或時ふ慮の死をなせしを。人々あはれミて。その年のふミ月追善のためとて。仲の町の茶屋おもひ〳〵の。燈籠を挑げて。玉菊が亡き玉をまつりしに。万客いと珍らしとて。群をなし賑榮事夥し。これより年〳〵善盡し。美つくして。初秋より仲の町へ花燈を。出す事にハなりける　ト云ヿ

燈籠になき玉菊が來る夜かな　　其角

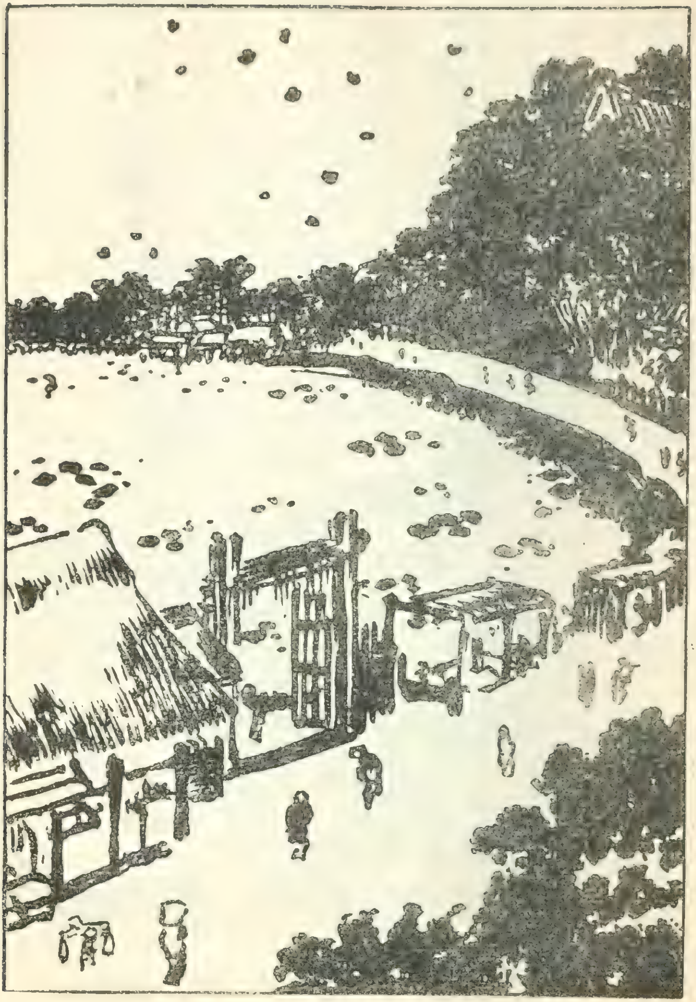
花ハ上埜の。ふもとより咲。紅葉ハ淺草の。おく山よりなる。春のあしたの蒼天に。人の心のうき立も去年の寒さの。さるとなれど。もの丶愁れを知るハ秋のゆふべに勝れりと。詩學大成

にも。見へたりける爰に昔。故あって聟しうき世を。忍ぶが岡の片邊りに。蓮見屋玉藏といふ者あり。女ぼうをお露と呼て夫婦最むつましく住ける。素よりさゞかりの家業も。しらざればゝ水茶屋ゝ見世を出して。宇治の薫りに。山吹のせゝなかりける暮しなり。些しの金も貯てゐたれば。さしてふじゆうもなく。年月を送るうち。早十歳あまりの。春秋を過て。玉藏も四十にちかきとしとなり。お露も三十を。越るといえども。いまだ子といふ者なければ。世間の人の子あるを見ても。浦山敷おもひ。嘗ゝ夫婦もろとも老の行すへ。心ぼそき事と朝夕これを歎き。何卒一ッも蔵若きうちに。子を儲たくて。おつゆも藥喰の。溫泉のと。いろ〳〵氣をもみしが。更にその驗しもなく。此うへゝ世に。まうし子といふ事あり。夫婦丹誠を盡して。祈るにゝ。しかじとある日。淺草寺ゝ觀世音に詣で。一心に立願して。是より。夫婦かゝる〳〵。日々歩行を運びける。偖も三七日に。滿るの日。お露ゝ夕方より出て。淺草寺に參詣なし。はや暮ちかき戻り道。廣小路の此方に。あまたの子供。より集りて口〳〵に「ヤア迷子じやア〳〵。みな來て見ろト。おつとり卷てはやし立。嘸とゝ笑ふ其中に。哭聲のいと愁れに聞へければ。おつゆゝ何ごゝろなく。傍ちかく寄て。これを見れば。五ッばかりなる子のたゞ彷彿と。たゝずみて歎ゐたるに。不便さのあまり「ヲヽ可愛ヤ。内ゝ何所じやサア〳〵おばさまが。

連て行てやりませう　ト手をとれバ　おさな心にも。嬉しくおもひ「アイ内ハ彼方のほうなれど。モウ内へ歸るハ悪じや。どふぞおばさまの所へ。つれて行て下され　ト袂にすがりて。放さねバおつゆハ。觀世音に立願して。けふ結ぐわんのもどり道係る迷ひ子にめぐり遭。おさなき身として。兩親をしたふ心もなくばかり。只管わが袖にとり携て。はなれざるこそ不測なり。もしや觀音さまの。おさづけ下さる。子なるかといとゞふ便に。おもひければ「ヲ、そんならおばさまの内へ。連て行てもやりませうが。まアうちハ何といふ所で。父さまの名も。知つてゐるかいの「アイとゝさんの名ハ。矢張父さんといひます。内ハ橋のある所でござります　ト。死苦／＼哭てるあハれさに。ひとまづわが家へともなひて。心しづかにやうすも聞たら。兩しんの内も知れんと。かの幼稚子を引つれて。お露ハ忍ぶが岡へたち歸り。玉藏にも斯と告て、袂に携り放さねバ。ぜひなく内へ。つれ來たれりといふに。玉藏もその容貌を見れバ。形ハ不締のいやしけれども。鷄卵を。剝たるごとき。おさな子にて。何所となく嫦態。げに栴檀ハ。ふた葉よりもかんばしきと。寵愛して。とも／＼菓子など與へ。夜食など喰するに。おさな子ハ百年も。馴染し内へ來たりしごとく。何の遠慮もなくて「ぼんハこゝのうちの子じやト。夫婦の膝にとりついて欣然さまを見るに付ても。うたがふべうもあらぬ。觀世音の。授け給へる子なるべしと。

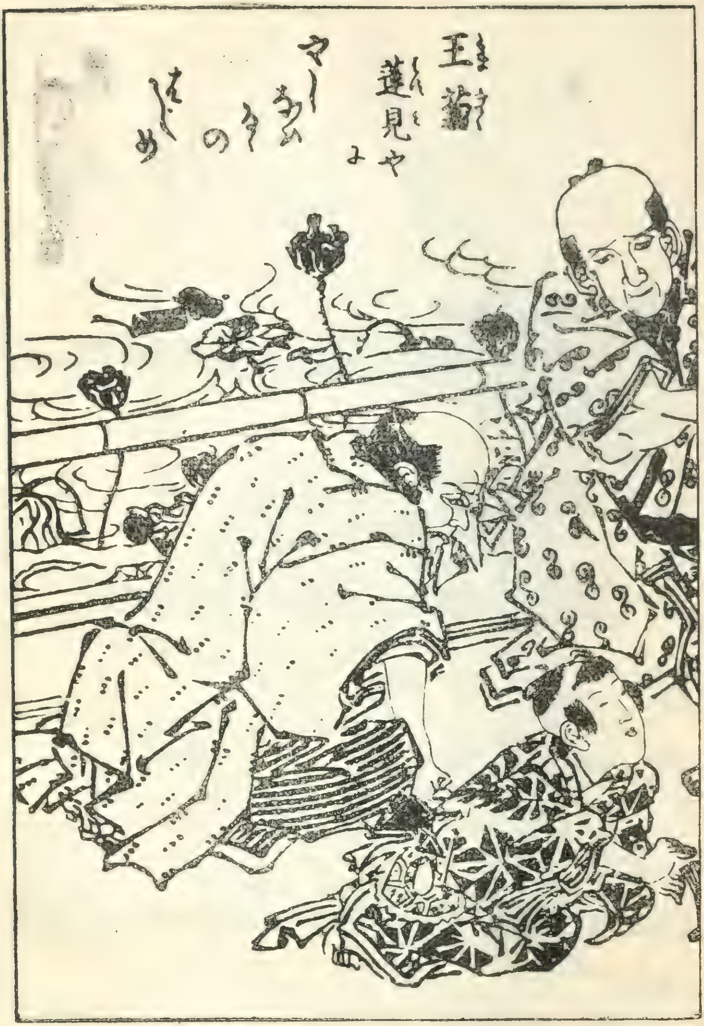
尚更ふ便彌増て吾子にもなしたくおもへど。又係る子を迷ひ子ト。なせし。兩親の心ハ。さぞや悲しくあんじわづらひ。定めて今頃ハ。所〻方〻を。尋ねわびてゐられうぞと。心に風と氣が付て。腰の守りに迷子札。玉藏ハ是を見て。何〱兩國柳橋新道。家主綠右衛門店屋根介娘。おかぢトしるしありければ。夫婦ハ驚きさらバ。今より尋ねいたり。此子を渡して歸らんと身支度なすに。おさな子ハ「イヤじや〱。内へ歸るハ惡じや。ぼんハ爰の内の。子に成たト只管歎き。かなしむに。お露もその別れを惜ミ。かほどに哭きて惡がるものを。つれ行給ふもおもひのたね。今宵一ト夜ハ。止おきて。夜もあけなバ尋ね行。やうすも聞て下されト女ぼうがすゝめに玉藏も。又したれるゝ子の。可愛さに引されて。ぜひなく其夜ハ。吾家にぞ。とめおきける。斯てその夜明て玉藏ハ。まづ兩親ハ。安否を聞んと。おさな子ハ家に止めおきておのれ一人柳ばしへいたり。やね介を尋ぬるに。内も直に知れけるが。留守にて戸もメり今朝早く。本庄。邊へ行しよし。となりの姥のいひけるに。玉藏も。詮方なくそれより。家主綠右衛門にあふて。いさゐのやうすをくわしく告。わが住居ハ忍ぶが岡の邊りにて蓮見やといへる水茶屋なり。やね介どの戻り次第。むすめの迎ひに來られよト。いひ置てぞ歸りける。その日の夕方やね介ハ。柳ばしへたちもどり家主に。いさゐの物語を聞くより。さつそく忍ぶが岡

へ。はせ付て。玉藏夫婦に識人となり。娘が大恩をうけし。一チ禮を述れバ。おさな子ハこれを。見るよりよろこぶ体もなく。父の傍へも行ずして。たゞ玉藏夫婦が。膝にすがりて一ぼんハ。内へ歸るハ惡じや。父さんが迎ひに來ても。行ハせぬいつまでも。爰において下されと。いふに夫婦も不測ごと。そのゆへを問けるに屋年介涙だを。おし拭ひ「されバでござります。いつたいわたくしハ。下總のくに佐原の生れ。おはなし申スも。恥かしながら。若氣のいたり。志案の外。おつな逢引の。張合から。庄屋の娘を引連て。此江戸へいで夫婦となり。その日暮しの友稼ぎ。そのうちに此むすめが生れまして。親子三人それハ〳〵。まめで達者で。そく才で。藥一貼呑ました事もなく。とにむすめも三ッのとし。疱瘡も輕くして。身ひんに暮すが不足ばかり。外に苦勞もなきのたね。泪のたねとなりましたハ。去年の春の時行風。かゝめが一ばん。びんぼう鬮をとりまして。死にぎハまでも。此娘を他人にかけるがふ便じやとて。哭別れにわかれましたわたくし一人の身のうへなら。直に天窓を剃とかして亡き後をもとむらふて。やりたい心でござりましたが何を申スも此娘が。親のない子とおもひますト。どふもふ便でなりませず。ぜひなく親子二人して。去年の歳ハこしましたが。遊んでゐてハ喰れぬ身のうへ。世話のやけた。初稚子を人さまにたのんでハ。氣のどくな日用雇。同家店の衆も見かねてハ。



花街鑑

八



奈何にも此子が可愛想じや。相應なものもあらバ。はやく留守居を。入れさしやれ。中〳〵男の手一ツで。とても子供ハ育て。られぬと。いハれて見ればいかさまさうじやト。死んだかゝえハ面目なけれど。娘が可愛ひばつかりに。媒妁する人の顔立て。貰ひましたハ此三月。定めて子供の身のうへも。世話してくれる事とおもひ。朝出て夕方戻る身に。安堵致して居ました。所が昨日淺草の。觀音さまへつれて行。道で迷子にしたとのいひぶん。愕然却て途方にくれ。あちこち風評を。聞ますれば日頃おもいれむごくして。まだ惡ミ足ぬト見へ。うちをつれ出し迷ひ子に。したとハよくもいハれた義理。てつきり。途中で縊り殺し。川へでもはめたであろ。見かけに。寄ぬおそろしい。鬼のやうに怖ひ女。それにつけてもいぢらしい。ふ便なるハむすめの身のうへ。あのやうにむごくされても。かゝさま〳〵トしたふた顔が。目に付て可愛想でハ。あるけれど尋ねてやるハとてもむだ。殺してのけたに。違ひハないと。いふ人ばかりが數多あり。肝が潰て胸が一ぱい。活しておかれぬやつなれども。江戸ッ子でない悲しさハ。むねんを堪へ了簡して。媒人を呼びいさゐをはなし。夕ァ直に引渡して縁切たれど。娘が事。おもひ出してハ涙にむせび。夜ひとよ哭ておりました。あんまり面の惡い仕方に。夜の明るのをまちかねて。親もとへも一トとふり。怨ミをいひに行ましたその跡へむすめの安否。戻つて聞

て又心驚。ゆめでハないかト駈付て。參つたハあなたの所。いまさらおもへバ。それハ〳〵むごくされたにこり〳〵して。そこで內へ歸るのハ。惡じやといふので。ござりませうトなミだながらに物語れバ。玉藏いさゐを聞よりも。いつたん世になき娘ぞと。あきらめられし身なりせバ。何卒われ〳〵夫婦が子に。貰ひたき存念なり。そのゆへハしか〳〵の立願もあり。又此やうにしたハれて見ますれバ。吾子のやうにおもハれて。ふ便でござる。可愛ふござるト厚きなさけの所爲に。やね介いよ〳〵有がた淚だ「ねがふたり叶たりと申スも如何でござりますれど。左樣にもなし下さらバ。娘が。誠に大仕合せ。わたくしが身にとりましても。冥加にあまる御慈悲。御情こんな。かなしい目に遭まして。もはや御當地に。べん〳〵と居ます。心ハござりませず。死んだト思ふた。此娘いかなる御緣か知らねども。御養育も下さらバ心おきなく國もとへ。歸る所存でござりまするト。身の不造化をならべたて。おもひよらざる對面に。吾子の貞もけふ限り。是が見おさめさらバぞと。夫婦のものにもいとまを告立出んとなすに。玉藏ハ「まづ〳〵暫しト引止るを。やね介袖を打はらひ。行んとなすに詮方なく。傍近くある金壹兩。紙にくるミていさゝかなれど。我〻夫婦がこゝろざしせめて。路銀の足にもと袂へ入れバ。やね介ハ摑ミ出して押かへし「エ、勿躰ないどふ致して。娘が御恩の命のおや御慈悲深ひ

心にあまへ。身のうへの事憑むさへ。あるにかいなき。義理しらず。お暇申すもめんぼくなくて。やう〳〵立て歸ります。所へ此やうな事なされては。どふやらこゝろがおかれまして。奥齒にもいゝはさまるやうト。達て辭退に玉藏夫婦「ぶしつけながら。身貧から誰しもおこるおがミ心。そのやうな氣で上ケはせぬ。不測な縁に引されて名殘おしさの心ざし。それを無にして下されては。却て此方で迷惑致すト。無理やりに懷中へ。おし入れて是非に〳〵トいはれければ。やれ介辭するにとばなく只管おのれが身を恥て。めんぼくなげに別れける。これぞ親子の手切れとは。後にぞおもひ知られける。斯て玉ぞう夫婦は。ふしぎなる縁有て。一子を儲しもひとへに。觀世音の。みち引給ふ所ならんと。いよ〳〵信心おこたりなく月ゝ歩行をはこびける。素よりおさな子は。實の父母の。ごくに夫婦のものをしたひければ。日〳〵にいつくしみ深く。是より名を。お玉と改め呼びて。月日星と詠め寵愛かぎりなくぞ。見へにける

○第二章

月日に關守居へざれば。光陰過る事はやく。夢の間に。又十歳あまりの。春秋をこへて。お玉も今は十五にぞ。成にける素より。容貌の勝れて玓瓅に。はなの蕾の綻いだす。心に色氣をふ

くミけれバ。姿のあやめ馬藿。水ぎハ立て見へけるに。むかし男の令郎株もこれが爲に惱され。今小町の娘達も。そのうつくしきに氣押れて。仇敵とぞおもハれける。爰に父質兩がハを。渡世として。土藏の三ッ四ッも持る。紀の國や名智右衛門と。いえる者のひとり息子に。瀧三郎といふ者あり。とし十八才にて。又たぐひなき美男なり。籍孺が顏色に鄧通が媚をましへ。宗朝が美あらずんバ。いまの世にまぬかれがたしとハ。係るむすこをやいふならめ。爰の娘。彼所の彈妓。おもひ付ぬハなかりけるが。瀧三ハ是を十把一ト絡となして。たゞ蓮見屋のおたまにのミ。深く心を引され。兩親の手まへハ。大師へ日參といひ立て毎日〳〵見世へ立寄りしばらく世事のよき。はなしなどしてハ歸るに。お玉もそのはじめハ。屢遠慮もありしが。來る者ハ日〳〵に。親しきとハり。いつとなく心安くなりて。兩しんをはじめ一ト方ならずおもひける。瀧三郎ハけふも大師へ。參詣の戻りとて。立寄れバおたまハあがりはなにこしをかけてひざの上へ中がたのよミ本をおきかんざしのさきで字をつきながらよんでゐたりしがたき三を見て【玉】ヲヤたきさん今日ハだいぶ。おはやくおまいり。あそバした子トいひながら立ゝしきでのちやわんへれいのとふりこしぢやを入て出す【たき】とつてのミながらそふサ曇てるから。降らねへうちトおもつて。參詣して來やしたが。雲もだん〳〵はれて。これじやァ降氣づけへも。ありやすめへトこんぎきやうにくらしやのしおらたくはまく一てたいさくうづをちやいとで大きくやつたかつぱをぬいでわきの方へおき日のふかぼりのあるきせるにてたばこをのミながらお玉さんその本ハなんだ【玉】アノこれハ

新板のしやれ本だと申ッ。只今かりました【たき】フゥ何といふ。外題だへ。チット見せなせ
へ【玉】よんでお聞せな トたき三郎がまいへいだす【たき】ハヽアなんだ。契情買傳受の卷。コイつァ。おも
しろそうだ トニ三まいあけてもくろくの所をいだし 初會から女郎に惚惚る。傳受。女郎といふ事をする。傳受。女郎
に金を出させて。おもしろく遊ぶ。傳受コイつァ。おつりきな事を書やした トしたにおいて おたまさ
ん。おめへハ本が好だから。今そこで買て來やした トしんはんの合巻を五六ばんふところから出してお玉にやる【玉】ヲヤくこれハ
面白そうだねへ【たき】ミなせへ來年の草ぞうしが。今頃。出るやうに成ッやァ。正月松過に
ハ雛さまをたてねへけりやァ。ならねへ勘定になりやす【玉】ほんにはやく。よく出來ますねへ
【たき】ミんなおめへに。あげやうから。よんでミな中にやァ。愁れにおもしろいのも有やせ
う【玉】コレハお有がたふ。ござります トいたゞひてうれしそふにまづゑばかりさつ〳〵と見てしまひ奥の方にうしろむきになつてつぎ物をしてあるおふくろに モシお母
さんこれを瀧さんに。お貰ひ申シました。新板だから御らん【母】トうしろをふりむひて見て ヲヤ瀧さんかへ
おはやく入らつしやいましたどなたかとぞんじまして。御挨拶も致しませぬ。ごめん遊バして
下さりまし。コレハいかい事有りがたふ。ござります【たき】だん〳〵寒くなるで。お仕事か
子【母】さやうでござります。追〳〵に日が迫りますから。ゆだんハできませぬ トいふ所へあるじの玉ぞうゆかへりと見へ
て手ぬぐひをさげておきてん【玉】コレハ若旦那。おはやう入らつしやいました。時に昨日ハけつこうなる お菓

龍三郎
さだめて

子を。澤山にいたゞきまして有りがたふ。むすめが大欣びでござりました。只今ではまづ抑ばしやで。ござります ト中ごしになつてたきがまへなどふれ上へあがる【たき】ずいぶん上品に。喰るいふ【主】イヱけつこうでござります。印籠菓子ハ。又あるへいや。まつ風などとハ違ひまして。製しかたによほど。善悪がござりますやうに。おもハれます【たき】ソレじやァおぢさんも。靈寳道の左りハチット。ふ得手のほうだの【主】若ひ時ハ一向饌ませなんだが。年が寄まして。意地が悪くなり。誠に少きづゝ下さります【たき】それハおめでたい。長寿をする證據だ。わつちも。數多ハいかねへ。ほんの一合上戸だが。けふのやうな寒ひ日にやらねへト。身躰にあたりやす。おぢさん二人で些とばかりやりやせう。本牧へでも行て。何ぞ温かそふな佳味ものを。見つくろつて。来てくんなせへ トまいさげから二分金を一ツ出して玉ぞうにやる【主】此やうにハ入りますまい。本鐐だけもあつらへてまいりませう【たき】そりやァおめへの。こゝろ持次第に。見立て來てくんなせへ【主】かしこまりました ト玉ぞうハ出て行【たき】カゥお玉さん。おめへハ酒のさかなでも。つまるめへ。これで中串を。大和やで焼せて。お昼のお食の。菜にしなせへ トまた壹分出してお たまのそばへおく【玉】トこれなと かねて 何私にしハよろしうござります【たき】ハテおめへばかりじやァねへ。かゝさんにも。上ケてへから。一寸くら行て来てくんな。その中見世ハ。おれが見てゐてあげる【玉】それでも。毎日

〳〵いろ〳〵な物をいたゞいて。いつそお氣のどくだ。ものを【たき】なんの氣の毒な。事があるもんか。おめへが悪ならバ母さんを憑まうか トきいておくより 【母】何ぞ御用なら。まいりませうか【たき】そんなら年寄を使ふも。心なしだけれど。何卒これだけ大和やで。中ぐしを焼せて來てくんなせへ。おめへトお玉さんへの御馳走だ【母】へ、、、これハお有りがたふござります ト壹分の金をにぎつて又おふくろも出て行 エヘン跡ハ二人のさし向ひ。いづれ劣らぬ梅さくら。互ひに其氣ハ有馬山。いなの心ハなけれども。只恥かしいが一ぱいでおたまハ。瀧三郎が顔を。睨で視てハ。につこり トうれしそふにわらつてゐる【たき】モむねどき〳〵にて お玉さん。おめへハ何がおかしくつてそんなに笑いなさる。おめへのその笑ひなさる。目つきがとふも可愛くつて。いつまでも爰に。居たくなる【玉】かほをすこしあかくして ほんとうかへ【たき】ほんとうでなくつて。毎日こんなに來るもんかの【玉】嬉しいねへ トいつたばかりたき三郎のあたりに人めのせきもなくバよいちゑもあるべけれど何をいふにもおもてハおうらいの人あししげくそばへよるさへ氣のどくにて むなしく餓鬼道の。くるしさに。煩惱の火を。胸に燃し。かほ見合せてハ。二人とも。溜息のミぞ。突にける。心の中ぞあハれなり 折から長ぞうたちかへり 【玉】サア〳〵見立て。まいりました今に持て。さんじますモシ若旦那。こゝハあんまり狹ッくるしう。ござりますから。おざしきハ何と。二階といたしてハ。どふでござりませう【たき】大きに能子【玉】さやうなら。入らつしやいまし トしんちうの手あぶりを引さげて二かいへ上るたき三郎も引つゞきてあとより上る

トほどなくあつらへたるの來たりて酒はじまるうたきと又平たる【主】お玉をよびて、コレ若だんなにお酌でも。してあげねへか。氣のきかねへ
【仁】ハイ／＼はづかしそふにまハつてみる【たき】サア／＼鰻をやんなせへ。こいつァ冷るト佳ねへやつだトおかもちの中から卜ほたけか一出しておたまにやる是よりいろ／＼。おつりきなる。さかづき事などあつて。九ッの鐘ゴヲンと。ミヽ耳もとに響べお玉ハひるめしをくひに下へ行もつともさいハかばやきなるべしすべてざしきの風景。醉中のおもむきハ。さきを急ぎて略す。瀧三郎も。よき機嫌となり。お玉に名殘りハ惜まるれど。又翌日の日をたのしミに。暇乞して立出るトぞうりもおもてまでおくつていて【主】さやうなら御機嫌よふ。コレハしたりモシ若旦那。先刻のこれがおつりで。ござりますト紙にひねりたるをだいだす【たき】コレハ義理の堅ひ事だの。つりの殘りなら。おたまさんに油でも。買てやつてくんなせへトおたまがかほたちよいと見てわかれるそれ婦人ハ。我を欣ばする男のために。容粧す。男ハ心の。欲する所に從ふて。女の爲に矩を踰おとこの。女に。のろき事ハ。和漢その例すくなからずと。いえども。又をんなの。男に。のろけしも。擧て算るに。いとまあらず。領巾麾山に石となり。日高の川に蛇身となる。うぢより育ちと。世にハいへど。育ちより宇治の橋姫ハ。かたしき袖を。波にひたす。加茂の祭に。はしたなき。御車の爭ひも。皆戀すてふ名ハまだき。立る仇心と。しられけり。偖も紀の國や瀧三郎ハ。日ゝ大師へ參詣に。かこつけて。蓮見やにいたり。おたまを手に。入れんと計りしが。ついにその年も暮て。又

新らしき春の中旬。季候逆風を發して。邪氣人家に集り。疫病大きに流行して。門並に枕をならべ。あるひハ寒ねつに。强くおそハれて。命を端的に失ひ冥途黄泉の旅に。赴く者すくなからず。此時瀧三郎も。遁るゝ方便なくして。忽まち邪風に身を破られ。倒と枕に伏たるきり。前後も更に知らざる事。およそ一ト月あまりなり。兩親ハたゞ一人子の事なりせバ。仲景。子邈が醫術を尋ね。良家。名仁の藥を乞て。療治におろかなかりければ。危き九死を免がれて。一生を得たれバ。日ゝ全快におもむくといえども。係る大病のあげくなれバ。肥立も遅く薄紙を。批すがどくに見へにける。漸ゝ百日あまりの日數を過て。吾躰のどくなりけれバ。暫らく怠りありし。大師へ參詣し見んと。いふに兩親も病後。はじめての事なれバ。ひとりやらんも心遣ひなり。番頭なりと。手代なりと。連て行べしといハれて。瀧三郎ハ心のうちに。かの蓮見屋の。お玉が安否をも聞たければ。これを辭退して調市の。長松を引連れ。久しぶりにてまづ。大師へ參詣なし。いそぎ蓮見やが許へ。いたり見るにこハいかに。住人もなき明家となり。軒端に蜘の網を張て。いと愁れなる光景に。瀧三郎ハ心驚なし何ゆへに斯。明家とハなして。いづれへか引移しとそのやうすを。聞まほしさに。隣れる家に。立寄てよそながらにこれを問ハ。その家の姥の。いへりけるハ。此春流行ました。疫病神に隣りの夫婦も。とりつか

れ。わづか三十日立か。たゝぬうちに。夫婦ながら枕を。並べて死られた。氣の毒千ばん。跡に殘るハアノ美しい娘たつた一人。夜晝内でそれは〳〵愁れな事でござりました。それに又身に染て。世話する。人もなかつたト見へて。據所なく店請が。引とつて行れました。その後人の風評で。聞ますれバおふくろの弟とやらが。谷中辺にゐられまして。此方へ連て行たトか。噂たトか中〻事で。ござります。イエもふ。此春の疫病には。大ぶ人が損じました。此辺杯は一面門並。その中でわたくしばかりは。疫病神にも。見放され。今に達者でおりまするトきいて。瀧三郎は暗を潰し。ハテそれは氣の毒な事を。致されたのふ。わつちなども。漸〻此せつ肥立で。けふはじめて大師さまへ。參詣しやした ト大きにふさぎたるていなり 【ばゞ】一ト頃は往來の人どふりも。絶るくらゐな事で。ござりましたそれにおめへさん。お聞なされまし。隣りの娘がひとりして。兩しんの看病から。薬とりにうき身をやつしその間には。よいお客でもあつたかして。けふはおいでなさるか。翌日はお出なさるかと門口に立て居た事も。度〳〵ありました。そのうち兩しんが。目を眠られて。娘一人の貧乏鬮。今は何所にゐられるやら。アヽふ便な事でござります【たき】きけべきくほど氣がふさぎ心もちのわろさに茶だいなはらひそう〳〵にして おせはでござりやした【ばゞ】ごゆるりと。おやすみなされまし【たき】アイ〳〵サア長松來いト。隣りの明家を。詠めながら愁懐と。心で待し

たのしミもおたまに逢んうれしきも。皆齟齬となり蔫かへりよう〳〵吾家へ戻りける。是より瀧三郎ハ。大師へ参詣の歸り足にハ谷中邊など。まハり道してもつぱらおたまが。身の有り家を尋ぬるに。氣を揉ばかりで。知れもせずつひに。その夏も立ち。秋も來て。そよ吹風の便りさへ。なき渡る日のはつ厂も空たのめなる文月に。その葉月も（盡はてゝ。うへさばかりたきく月の半もいつか過にける）爰に又瀧三郎が竹馬の友に。幸之介といふ者あり渠ハさバかり。有徳なる者の。紛といふにもあらす。といふて。又その日を漸〻に過る。町家の令郎株にもあらず親ハ相應なる。家屋敷もありて。商賣ハ水油の。問屋なれども。瀧三郎が身ぶんに引くらべてハ。三目ばかりも弱ミのふる。身のうへとしられける。幼稚時より諸藝の稽古ほうばいなれバ。別して無二の交り深く。とに何も一人子の事なれバ。兄弟同樣のごくにおもひ。互ひに朝夕出入りなしける。ある時幸之介來りて。ひそかにはなしけるハ。かの忍ぶが岡なる。蓮見ヤのむすめが事行衛如何なりしヤトおもひしに。今ハよし原の娼妓となつて。名も玉ぎくとかいえるよし。たしかに聞て參りやした（トきくより）【たき】（びつくりして）幸さんそりやァ。ほんとうの事か【幸】何わつちが。虚をつくもんか子。夕ァおやしきの衆に。誘引てよん所なく。あつちへ行やしたら。あの山口で。はなしがありやした（山口といへるハ山口どもへヤのことなり）五六日あとから突出しに。出たトいふ事サ【たき】そいつァどふぞ

行て。買てへもんだ【幸】（かねておたまに心を引されし事ハしつてゐるゆへ）おめへが行なさりやァむかふでも一トとふりの。お客ともおもひやすめへ。こりやァ孰にも。行べき事たらう子【たき】（すぐにも行たきこゝろなれは）ゆふ方から浅草ハ。観音へ参るつもりで。乳母へ内證を吹込で。内を出やすから。おめへも一緒に。同道なせへな【幸】（かんがへこ）タァの今宵だから。些と出にくひがどふか。嘘のつきやうが。ありャせう（トあとハひそ〳〵はなしあいてこう之介ハいとまこひしてかへる）これ正に。赤繩の奇縁を。むすぶの時いたれるかな。會ハ別るゝの。はじめにして。喜こびハ。うれいの伏する所なりト白氏がとば。後にぞおもひ當りける。

花街鑑上卷終

玉菊全傳　花街鑑下巻

○第三章

其君に非ざれバ事ず。その友に非ざれバ。友とせず伯夷を。未至なお方といへば。汙君をも羞ず。小官をも。卑とせず。柳下恵を。雑工破乱離な。人とやいハん。割床の隘しと。岡場所の。恭しからざる與君子ハ由すと孟子ィス。爰に瀧三郎幸之介の。兩人ハ。何所へ出しても。面工の能そふに見へる。令郎かぶ羽織ハ。七ゝ子の兼房小もん。裏ハ黒続紵の。毛抜合せ。定めて胴裏ハ。白繻子にて。放逸先生の。墨画にても。あるべくとおもハる。いづれもぱつち。尻はしより淺田屋あたりで。一寸と呑たと見へる。ホロ酔機嫌の完爾もの【たき】刻げんが誂へどふりになりやした。茶やハ矢張山口かへ【幸】おめへも識人だから。巴屋が好らう子【たき】久しぶりだョ去年俄の時。おめへと一緒に行た。儘だョ【幸】そうかへ【たき】亭主にヤァ折ふし。待乳山で逢やす【幸】山口巴ときちヤァ。聖天大信仰サ【たき】どふりで。強

勢に拜んでゐる所を。見かけた事がござりやした【幸】神信心ハ。よくする男サそれだから。内ハ繁昌する。事を見なせへ【たき】去年も成田の。不動の開帳に。御膳水を毎日〳〵。よく深川まで贈りやしたヨ【幸】そこハ余程氣勢さト。噺しながら。隨身神門を拔る。是より往來ハ風景こ素見地まハりの高ばなし。新内いたこの浮氣ぶし。口三弦のいとかしましきまで。昔も今も換られねバ略す【たき】【幸】の兩個ハ七軒の。山口巴にいたり。それ〳〵の挨拶より二階の手つゞき。藝者の滑稽。チリツンテン、ちやんぽんの。大さハぎなどくだ〳〵しければ。これを略し卑ぬ女ぼうハ。玉菊がやうすを聞て來り【女】丁度今晩ハ。宜しうござりました。【幸】それハ奇妙〳〵【女】モシ幸さんへ。あなたハ雛妓衆が能と。おつしやるから。もうとんだ氣めへのいゝ。おまいさんにハ夫こそ。奇妙といふを。見立てまいりました【幸】そいつア。有りがてへ何といふのだへ【女】矢張玉菊さんの。賄雛妓衆で玉章さんと。いふのでありますがネ。いつそおもしろい氣質の。女郎衆でござりますヨ【幸】そふ聞ちやァ少とも早く行て。おミこしを居る事だらう。サァ瀧さん出かけヤせう【たき】わつちやァ。强勢に醉やした（トいひながらおびをしめなおし一兩人とおしやんときまる）藝者。女ぼう。亭主。僕をはじめ。最丁〳〵敷。はやし立て是より。角町萬壽屋ハ。樓上にいたる。各坐定まつて。振袖のしんぞう。樂燒の茶碗へ。薄茶をたて。

帛紗にのせて【たき】【こう】のふたりへ出す。又座敷の光景も。これまでの小冊にゆづりて云す。偖玉ぎくハ。瀧三郎の來りしとハ。ゆめにも知らず。初會の客の事なりせバ。悠ゝ然として入り來る。その粧ひ貴妃を欺き。李夫人を壓す彼天上の榮花も。誠に斯ヤあるべきと。膽の潰るゝばかりなり ともへヤの女ぼうおさだまりの お盃 とゝいふに。玉菊瀧三郎が顏を見て。ハツトばかりに赤面なし。おもハづしらず喜ひて。胸轟すうれしさも。只恥かしさに。當惑なし。暫し立チ派も失ひしが。さすがに人目のせきあれバ。涙かくして漸ゝに。玉章もろとも立て行跡ハ直さま。サアおゐらんのおざしきへト。皆ゝ玉菊が座敷にいたる。爰にて又藝者の。大さハぎあつて然而后に。床おさまる。床おさまつて。然而のちに藝者。茶ヤの女ぼうも。いとまごひして。立歸る折から 引ケ四ツのひようし木チヨン〳〵〳〵〳〵 玉菊ハ。心のうちに待かねて。いそぎ座敷に。いたりふごへにて 瀧さんよく尋ねて來て。くださんした。わたしや此やうな。歎しい身のうへに。なりましたわいのふ トしのびなきだにむせびければ 【たき】とんだ事であつたのふ。わつちも疫病にとりつかれて。よつぼど位牌くさく成やしたがよう〳〵の事で全快て。それから御無沙汰の。いひ譯ながら。大師さまの戻り道。何の氣もつかず。行て見たら。戸が閣閉立て せんかたなさに 隣りのうちへ立寄て。樣子を聞バ。如斯〳〵トくわしい。話説に肝が潰れ。おめへの事も。叔父さんとやらが引とつ

て。谷中の方へ連て行たトおしえてくれたを娯しミに。まい日〳〵尋ねたれども。叔父さんの内も。たづね當らず氣をもんで居りやした。今夜いつ緒に來た。アノ客人ハわつちが。兄弟同様にする友達で夕ァ此里へ來て。ともへやの内で。おめへのはなしを聞たといつて。昼間しらせてくれやした。その時の嬉しさハホンニ金の百両も。貰たやうな心持で。それから内をバ。浅草の。觀音さまへ參るといつて。出て來た譯でござりやす。定めておめへも。慟しい事だらけで。さぞ苦勞をしなすつたろう。病氣トハいひながら。一チ時に両しんに。別れるほどの。運の悪ひ身のうへだものを。此くらゐな事ハ。ありそふなもんだ。隨分神信心でもして。煩ハれへやうに。しなさるがいゝ【玉】ありがたふおざりいス。初稚ときから。ひとかたならず。御恩をうけし御両親さま。實の父さま母さまに百ばい勝りし御慈悲のほど冥加にあまりし。おなさけを嬉しいとおもふたばかり。孝行らしき事もなく。御をんもろく〳〵おくらずに。御別れ申ゝ其の嘆しさ。たよりなき身に誰あつて。世話する人もなくばかり。心細さのその折から。叔父さんが來ざんして。死んだあねごや。兄き殿ハ定業でぜひかない。かならず氣欝せぬやうに。心強くおもふてるよ。姉子にかハりて是からハ。おれが世話してやるほどにと。有りがたいおことばに。哭しいながらも嬉しくて。叔父さんの所へ行ました。日がらも立ぬそのうち

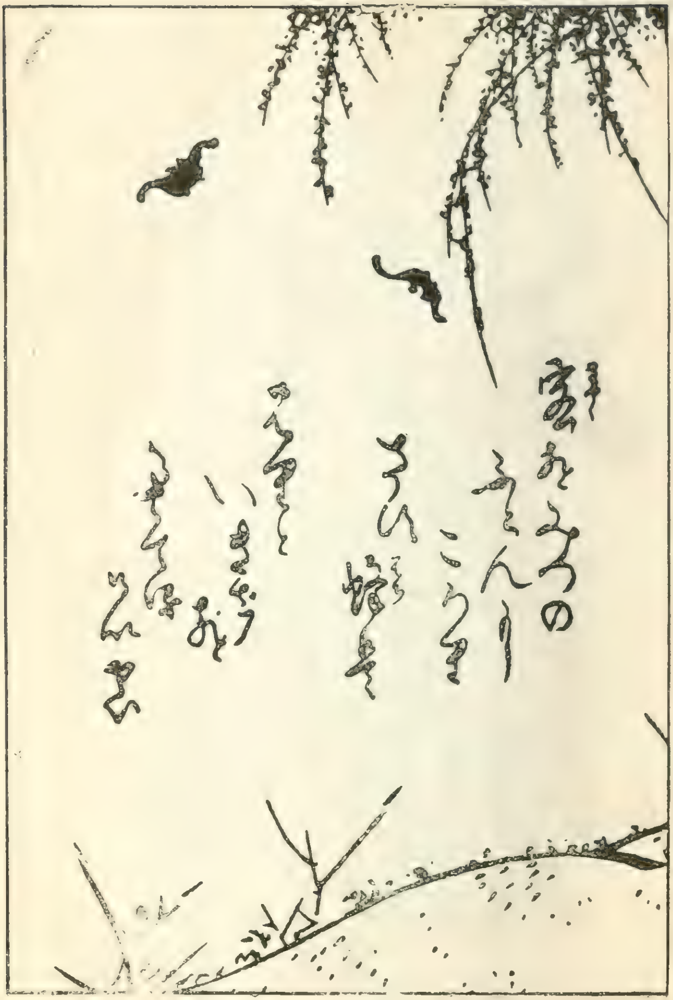
に父さんの借しやんした。金の證文じやトいふて。與處のお方が。毎日さいそく。いひ譯いふても得心なく。大金の五十両。今月までの約速なれバ。是非けふ翌日と催促られ。叔父さんも詮方なく。此うへハぜひもなし。ふ便ながらも。そなたの身のうへ。賣てなりとも。此金の片を付ねバ。亡き人達の。よミぢの障りと。聞分てどふぞ篤心してくれろト。よん所なきお憑ミも。父さんの爲なれバ。惡ともいハれぬ義理づめに。せめてもい御恩おくり。孝行の仕納めト。おもひきつての。つとめ奉公。跡でやうすを。聞ますれバ。ミな叔父さんの謀計工と。欺されし口おしさ。かなしいうへにとり分て。こんな歎しい身のうへを。はなす人さへなきいたね。ふびんとおもふてくださんせ トたもと左口におしあてゝなミだにむせぶばかりなり 【たき】ハテおめへばかりでもあるめへ。此花街へ身を賣るものハ。ミんなそれ相應に。哀しい事もあらうけれど。我身い因果トあきらめて。心のうちでハ哭てゐても。おもてむきハ。笑ひ顔でおもしろそうに。日をおくるも。そこが苦界の。勉だらうぜ【玉】ほんにそふでおざりいスヨ。かうなつてからハ。いくら人を恨んだとて。もうしかたが。おざりいせん。ほんとうの父さんにも。五ッのときに別れた切り。便りもなければ。所もしれず下總の國とやらだト。聞たばかりでおざりいす【たき】ハテの聞バきくほど。便りのねへおめへの身のうへ。およバずながらわつちが。心いおよぶたけハ

【玉】世話もして。おくんなんす心かへ【たき】これも矢張るんづくの。因果といふもんでおりやせう【玉】エヽうれしうおざりいす　トたき三郎がかほを見てはじめてにつこりとわらいながらたばこをすいつけていだし　夜が更ましたらう。又明日ねむこと。悪ふおざりいすから。此うへの着物を脱で。お休ミなんし【たき】なァに此のまんまでも能ョ【玉】それでも皺になるト。わるふおざりいす。ト女房氣どりの内まくハ。初會と更に見へざりける。是よりふたりハ。寐支度して。三ッぶとんの上へふハりと。のりの渡し舟。こがれよる身ハ。揖まくら。深契りやむすぶらん。こゝに又中の間を一ッ隔て。次の間の。屛風のうちハ幸之介會方の玉章と。ひとつ夜着に。まくらを並べて。大出來のはなし最中【たま】モシへ今夜おいでなんしたハ。おゐらんの客人ハ。アノおゐらんの。内にお出なんす時分。心安くなさりいしたお方だそふだねへ【こう】そふさ此所へ。來た事ハしらずにいつそあんじて。ゐなさるから。わつちが知らせてやりやした【たま】しんじつて。あらつしやるねへ。おゐらんもいつそ嬉しがつて。おいでなんしたョ【幸】羨敷い事だのふ。些とあやかりたへもんだ【たま】ヲャぬしも何所にか。深く馴染で。お出なんす。おゐらんがおざりいせう【幸】何所へ行ても。わつちばかり恍惚て。むかふが承知だから。身に染て馴染に。なるといふやうな。おもしろい目に。遭た事がござりヤせん【たま】うそをヽ。おつきなんし。ぬし

のやうな客人を。悪くする女郎衆があるト。罰があたりいすョ【幸】そふ云てくんなさるハ。おめへばかりだ。今までそんな事を。いハれた事がねへから。ゆめじャァ。ねへかトおもひやす【たま】そんな事を。おつせへして嬉しがらせたばかりで。これぎりお出なんせんト罪に成ィすョ【幸】そりやァ此方から。いふいひぐさだヲ。誑されるのを。ほれられたトおもつて。白惚て來るのも。脇目から見たら。さぞ獸子。もんだらうヲ【たま】今じやァ客人の方で。おだましなんすから。ほんとうにおもいひすト。いつでも恥をかきィすたとへ恥を。かきいすまでも。ぬしなら【幸】どうしたのだへ【たま】あとハもふしいすめへ。どうぞかならず。來ておくんなんしョ【こう】そりヤァ。いわずとも來やす【たま】きつとで。おざりいすよヲャぬしの膝ッこぞうハ。いつそ冷ふおざりいすねへ。溫補て。おあげ申シィすから。まァかふしてお出なんし【こう】おめへハ强勢に。肥太てゐるの【たま】これからぬしに。痩るやうに。してもらいひすのサ。アレサこれが邪魔に。成いすわな【こう】そんならおめへも。これをとんなせへ【たま】ぬしの爲なら。いくら痩ても。いといひせん【こう】ほんとうかへ【たま】ヱ、にくらしい。あれサ　トあとハだんまり　◯ こゝにおゐて。作者筆を下において。ためいきたひとつつくよむ人さつすべし

○第四章

嬉しさを。むかしハ袖につゝめども。今宵ハ身にも。余りぬるかな。偖も玉菊ハ。かねて戀しとおもふ。瀧三郎にあひ染てより。つらい勉も苦にならず。きのふㇳ過ぎけふと暮し。あすか川の淵瀬も。などかかハるべき心ハなけれども。突出しのはじめより。全盛の譽れ高く。廓中並ぶものなきも。偏に客人の驕威を。仮ものなれバ。折にふれてハさし合て。おもしろからぬ。短夜を長く明して歸るさの。そのたゝまりが愚癡となり。腹立未至な。ささどのと。後ロ合せの時もあり。されども玉菊ハ。瀧三郎に換て。いとしとおもふ客なければ。おのづから。備立の變化に。旗色の目はしを利て。陣を引敵もあり。又瀧三郎がために横槍を入れられ。遂に勝利を得ずして。敗走なす大將もあり。斯のごくして。数多の客の手を切りしも。只瀧三郎が心の。嫌疑をはらさん爲の。斗ひなりける。されども全盛の。増〱熾んなる事ハ。瀧三郎お。勢風强氣にして。金銀を礫のごくに捨。鼎を鐺のごくに抛うつて。いさゝか惜む心なく。夜を日に繼で。遊宴の驕勇。更に他を顧ざれバ。玉菊ハ大きに心配して。一天の君だにも。驕れる者ハ久しからず。いわんや北廓に。長生殿を移し。喜見城を築なバ。究めて亢龍の悔あ



る。歎しミあらんと。只管これを諫めて。瀧三郎が身のうへに。恙なきとを穴賢くも願ひける。因て瀧三郎もおのづから。ひかへめにして。余り滅法界なる金ハ。遣ハさるやうになりにける。是娼妓の。本性を顯ハして。客に誠を盡す則ハ。言語にも述がたく。筆にもおよバざる。眞實ありこれを知るに時あり。多くハ客の、身を果す。境にいたりて。顯然ものなり。その證據をいはバ「男の身でさへ出來難ひに。斯した勉のその中で。物日節句も相應に。茶屋舟宿のつけ屆け。遣手禿に仕着施まで。表むきハおれが名で。ミんな其方の工面づくゝ新内ぶしの。正本に誌せり。然るに瀧三郎ハ。根强身代の。令郎株なれバ。三百両や。五百両の金ハ。ものかハ。風前の塵のごくに。おもひければ。玉菊が眞實を盡すべき時なく。せめてハ心の僞惑を。はらすまでにと馴染重ねたる客の。かれとなく。これとなく。此方から愛想盡を。いひならべて。手切れとぞなしにける爰に誹名を。延壽と稱びて。頗る大金もちの大盡客あり。これハ玉ぎくが突出しの。むかし／＼内證より。引付の客人にて。格別世話にもなり。さすがに。その恩義をおもひて。今更强顏も。あたりがたく曾ハ身のうへの爲にも。萬端よろしきゆへ此延壽一人ハ。玉菊もとり止て。心にもなき虛もつて。眞實誠を盡す體に。見せければ。延壽もそのはじめより玉ぎくが身のうへの。便りなきをふ便におもひ。金銀も惜ます。是まで世

語なして。いさゝか疑ふ心なく。彌我より外に實の情にあづかる客は。よもあるまじと自惚きつて通ひける。又玉ぎくは兼て。此延壽が事を。瀧三郎に打明て。いはんとおもひしが。素より僞然深き氣質に。快然得心もすべからず。なましいなる事をいひちらして。却て手切れともならば。内證は。手まへもよろしからず。とにかく瀧三郎が一人。身の迫りと。なる事しれてあれば。只その物入の少なからぬ事を。一圖におもひはかりて。偖は深く秘し隱し邂逅に。さし合ふ折もある時は。初會の客といひ紛らしておきけるゆへ。瀧三郎も延壽が事を深く馴染ある客ともしらず。延壽も玉ぎくに瀧三郎といふ。間夫ある事は。尚更心も付ず。居たりける。それは偖おき爰に又。紀の國や名智右衛門は。勝瀧三郎が廓通ひも。若きものにはある習ひと。一人子の可愛さに。知らぬ。ふりしてさし置しが。増〳〵遊びに實が入て。内へ寐る夜の稀なるに。持こしの二日酔。戀に憔悴面影を。又母は苦勞になし。金遣ふは厭ねど。刻限外れに。物喰ふて。煩ひはせまひかと。あんじる胸も。安堵ねば。いつその事に氣に入た。女郎もあらば請出して。女ぼうに持せなば。おのづと内に落付て居るやうになりませうト。雌鶏進めて雄鶏は。時に。とつての能智慧ト。名智右衛門もその昔。獸子を。盡して覺ある。娼妓に誠なしト頑にも。いひおたけれど。虚と實のふた道は。勉する身の骨にして。金遣はせる手管

より。實らしい虛をもつき。また身のうへを此客にと。憑む心の誠あれバ。連れ貞女の。鑑となる。その心底をも探らずして。身請なすともおもふにハ添でぜひなく。おもハぬに添ふ〔ゝ〕かなしさに尻ハ居らず。金を出したそのうへに。ふ緣とならバ親子が恥を。世間へさらす面目なさ。やうすを篤と聞てから。誠もあらバ千両が。二千両でも身請して。夫婦に。なさんと如才なく。おつな所へ氣がつくも。正之に江戸ッ子の親父株。年ハ寄でもなか〱に。行わたりよく見へにける。斯て名智右衛門ハ。譜代なる通ひ。番頭の。堅兵衛といふ者を。ひそかに招き。躬瀧三郎がうき身をやつす。萬壽屋の娼妓。玉ぎくが心底。誠を。盡す心あるか。又虛をもつて。欺き呼べるか。是をひそかに探り知りたし。そのゆへハかくの次第ト身請いたす事をうす〱咄し。これを聞出すべき者ハ。其許より外になし。某にかハりて。智慧を一ッふるひ。呉よ憑ミけるも。これ若かりし時。一ッ穴の狐となり。馬鹿を盡せし仲間にて。とに渠が女ばうといえるハ。その昔廓の藝者なりしを。いろ事にて連來たり。世帯もち堅氣と成て。さてハ通ひ番頭をぞ勉ける。今ハ年頃の爺かぶに。大眞締の氣どりなれども。夫婦の中に子なければ。一盃機嫌に纒されてハ。折ふし命の洗たくに。出かけるよしを。名智右衛門もかねて。聞居たれバこれ幸ひなる使ひ人と。心に欣び斯こそハ。計ひける堅兵衛もこれを聞て。さても迷

惑なる事と。おもへども。さすがに恩を蒙りし。主人の憑ミに辭ミがたく最心やすき事なり。老功の智慧を出し。むかしとつた。杵塚をもつて。その虚か實を探らんと。たなごゝろのうちにありと。得心なしてぞ歸りける

○第五章

話說紀の國屋の番頭堅兵衛ハ玉菊が胸中を探らんため。萬壽屋の内へいたり。雛妓買の古風な滑稽。目ざす所ハ。玉菊が新造の玉笹を。眞と定めて。その外ハ五六人宛來る度に。揚て二階で小鍋立。雀の酒盛。目白おし。竹村の臺の物に氣を取れてハ。媚貌を失なひ。きの字屋のうつハ物に。心引れてハ。喰氣に粧容もなかりける。土用ハ口に入て凉しく。かんハ銚子に入つて。強氣に熱し花ハ遣手の。笑ひ顔に咲。紅葉ハ客の。腹立よりなる。季候のひとしからざるより。阿房の名も爰にあるべし。堅兵衛ハ女護の嶋の。布袋といふ身にて雛妓の卞卑像を。見ながら酒を呑である もつとも四五くわい目とも見ゆるこゝろやすきしうち 【堅】カゥおめへがァ。そんなにばい散亂がつて。酸合れへやうに。喰なせへョ【さく】ヲャばからしい。堅兵衛さんハ犬だトおもひなんすそふだ。もう給へすめへ ト箸をしたへおく 【堅】よく／＼腮猪に余たト見へて。箸を捨たの【さく】そんな

悪口をお聞なんすト。刮操ィすよ【堅】そいつァ御免だ〳〵【さく】玉水さんそこの茶を。一ッ酌でおくんなんしナ【水】いつそさめへしたョ【さく】ぬるくつてもよふおざりいす ト茶たハミなから又まきせんべいをとつてくふ【堅】こいつァ強勢だ。酒も呑む肴も喰。甘ひものも。通さねへトいつちやァ。三拍子揃た。一盤の中だ忘れねへやうに。喰ひ淩ひをしておくがいゝ【玉ぼこ】モシい進めておくれせなんして。悪くおつせへす事も。おざんせんねへ玉の井さん【井】お爺さんだから。おかまいなんすな。何とおいひなんしても。胎へすほうが。よふおざりいす【堅】そふサ〳〵。玉の井さんの了簡が一ばんいゝ。悪くいわれても。喰ふほどくれねへトおもひのたねだ。夢にでも見て。魘ちやァ氣がどくだ なとゝからかひながら酒のむうちだいのものもあらかた片付てしまひ 是より種々さま〴〵なる。客のうわさあつて。床おさまる もつとも引ケすぎのこくげんなるべし 今宵玉菊が。ざしきの客は延壽。瀧三郎が事を。蕩〳〵氣どつて。こゝろのうちに。その思ひありければ。色外に顯れて。つねにかわりし浮ぬ床【延】娼妓に誠なしとは。よく人のいふやつだが。貴さまに限ッちやァ。よもや虚もつくめへと便りのねへ身のうへの。心ぼそひ事をおもひやり。あんまり。推量しすぎたで。飼犬に手を嚙れた。やうな目に遭ひ。今となつて未練らしく。とやかういふもてん〴〵の恥を並べて。外聞をかくやうな。もんだけれども。いわねへけりやァ。氣も附めへし。だんまりの幕で是切

りにしたら。定めて内證の城が落て。はかなく陣を引たトか。遠ざかつたトか。いハれて見ると。二度とふたゝび。愛の内へも面出しの出來ねへ譯。愛想盡しをいつた所が。欺されたいお此方の誤まり。もう今夜限で。貴さまの所ハおさらハだ。隨分瀧三郎を。大事にして末長く。呼び逢るやうにするがいゝ男が美ッて。金があれバ。急度したお客さまだ。殊に、初稚馴染の。ふりわけ髮じやァ。些とも無理とハおもハねへヨ（トいハれて玉ぎくハ氣どられしとおもへどもかねてかくごのうへなれバ）【玉】そんな思ひも附ィせん事を。まあ此所からお聞なんしたか。そりやァぬしの僞惑と。いふもんでおざりいす。突出のはじめから。身いうへの事までも。うち明ておたのん申シイした。譯ざんすものを。中〳〵一トとふりにも。おもいゝせず何事も。ぬしを便りに致ひして。おりいすものをそんな歎しい事を（トすこしなみだぐむおもひ入れあり）【延】誑されたト氣が。付て見るトたとへ。正直の事をいつても。皆な虛だと。おもふからとても。來る心ハ些ともねへ【玉】なるほど。瀧さんの事も、お疑ひなんすハ無理とも。おもいひせんが。何にも譯のおざんせん。客人でおざりいす幼稚馴染と。おつせへすけれど。初會の時に。忍ぶが。岡で識人だト。さきでハ知て。おいでなんすやうに馴〳〵敷。おいひなんしたけれど。一向見知た。おかたでも。おざんせす深ひ譯でも。おざりいす客人ならぬしの氣質も。しつておりいすものを。たとへ義理を。知らねへ女郎だト。

おもハれいすまでも何卒。斯して。おぐんなんしと。明白にうちあけて。もふしいすそら程に苦労をして。呼び申シてへトおもいひす客人でもおさりいせんから。まァぬしにもおはなし申シイせず。おきいした譯ざんす【延】それでもおれが耳へハ。瀧三郎へ心中立。かういふ事をしたの。あァいふ事をしたのト。いろ／＼な事が聞へてゐる【玉】そりやァぬしも。一トとふりならず。斯してお出なんす事ゆへ。外客氣の入らざる世話に。何がないひ觸して。氣を揉せ愛想盡しも。出來るやうに水をさしいす。人もおざんせうけれど。それをほんまに。お請なんしちやァ。ホンニ罪でおざりいす。是ほどに。おもつていひす心が。届きいせんといふもとすこしとばとぎれてしミ／＼歎しうおざりいすトまたふさぐおもひいれあり【延】夫が。眞實誠ならおれが見るめへで。瀧三郎へ手切の。ふみを書て山口巴へ出すがいゝ。それでなくつちやァおれが心ハ。疑ひハはれねへ【玉】深ひ譯でもおざりいす。客人ならそふいふ事も。致ひせうけれど。ばからしい只一トとふりで。お出なんす客人へ。未練らしくそんな事を。致ひすも。茶や楽の手めへが。悪うおざりいす。それを。お疑ひなんして。無理な事ばかりおつせへすト。つい此方にも。怪氣が出へして。大方脇人でもお出なんすゆへ。若しひよつと知られたなら。その時のいひぐさにかういふ事も。あるものをと。おつせへす爲の。手事かとおもいひすト。腹も立いすけれど。それもぬ

しの心にあるこつざんすから。いくらとヤかう。おもいひしたつても。おうたがひ。なんしちヤァどふも仕方が。おざりいせん【延】此方にそんな。謀計がありヤァ。おもしろくねへ。しうてでも了簡して腹ハ立ねへ。ひつきやう末のすへまで。世話にも。ならうしてやらうトいつた言葉を。反古にしめへトおもふから。こんな愚癡らしい事も。いつて見るのだ【玉】ばからしい。きいふヤけふ。馴染でお出なんす。ぬしでもおざんすめへし。身いうへの事まで。何もかも知り切ておいでなんして。そんな無理な事ばかり。おつせへすとしんに哀しくなりいす【延】そんなら瀧三郎が事ァとふり一ぺんの。客人とおもつて。突合てゐるのか【玉】そふでおざりい【延】そふならバ。散亂離ッと見て。置た。手の甲の。ほり物を消がいゝトいわれてたつくり作者いハくおよそけいせいのつとめをはなれて客にほれるときハとばにものへかたきしんじつあり久きをやうなる所にまゝあれとも客ハとかくつとめの身のうへをうたがひいろ〳〵心をためし見んとてむりをいへどもほれたらへからハむりともおもいすそのとばにしたがふゆへにちよつとほりものなどさせるにも人に見られやすき所を見たてゝほらせるなりよつて手のかうなどによくあるものなりこれを人に見せまじと火ばちのそばなどへよりても手のかうにて火ばしをおさへ手のひらを上になしてゐるその心づかひがたのしみなり偖玉ぎくハ。かれて延壽に。二百兩のむしんを。いひ置し事あり。その故ハ瀧三郎。常〻茶を嗜て。或時いはなしに。利久が樽竹の茶杓。古田織部が。雲龍の蓋置。宗端が究め付し濡燕の茶碗。ゆへあつて。拂ひの形に。引とつて來りしとて。茶屋の亭主が見せしよし。只管好望體なれバ。玉菊早速これをとりよせ。瀧三郎が方へ贈りける。その代金百五十兩。今に片も付ざ

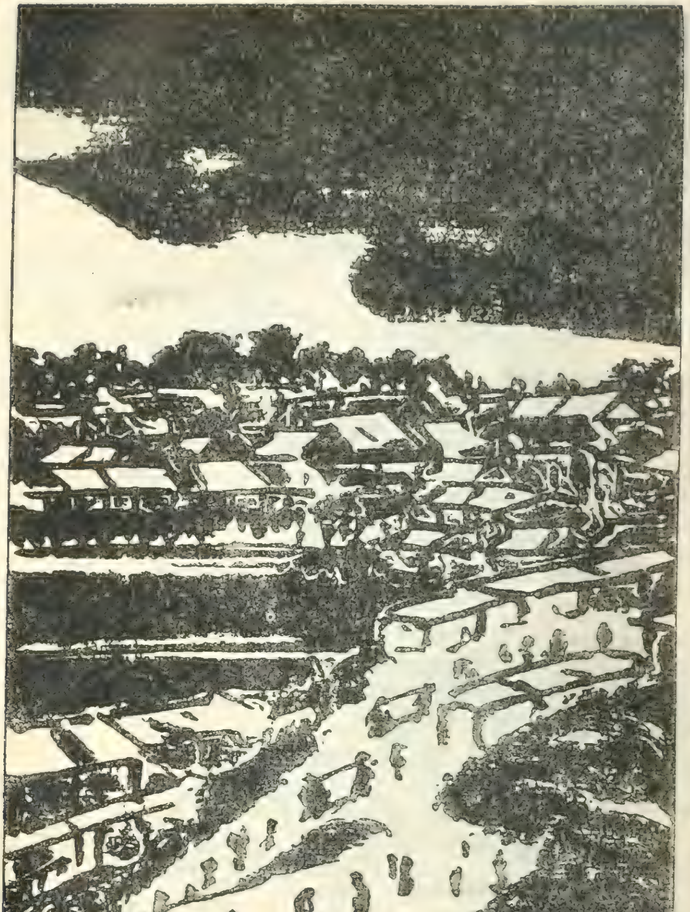
れバ。玉ぎくが心のうち。まちわびたる折から。今宵延壽がその金を。持來りしやうすに。ほり物の事をいハれ。消ねバ金も手に入るまじ。よしさらバ消たとて。心さへ換りなくバ。又詞譯も あるべしとおもひきつて 【玉】これもほんの義理づめで。よん所なく致いした。譯ざんすから氣にお懸りなんすなら。けしてしまいひす【延】それを消ハ。何にもいひぶんハねへ【玉】隨ぶん。けしてしまいひす トもぐさのにほふ屏風の内しばしことばもなかりける 次の間にハ。堅兵衛が醉倒れたる躰に見せ。襖のかたへ身を寄て。しじうの容子を聞ともしらず。雛妓のたまざゝハ。その次の間に寝こかされて。前後たわひもなき渡る。横雲のからすトともに。別れハつらききぬ／＼の。鐘ハ上野か淺草か。ボヲン／＼／＼矯ふたる珍木の顚き。金丸の懼なきことを得や。美服人の指さんことを患。高明神の惡に逼る。爰に瀧三郎ハ番頭の堅兵衛が。異見を聞て。玉ぎくが身のうへに愛想が盡。契情に誠なきハ。今に始ぬ事ながら渠が胸中。斯まではあるまじと。迷ひし心の面目なさ。トハしらずして十分に。計られしこそ口惜ャと勢ひ猛に走らする。戸なし駕のたれ込で。未練未酌も仲の町。茶ャへも寄すその足で。直に角町へぞ至りける。玉菊がざしきにハ。新造【玉ざゝ】禿【小てふ】ふたりさしむかひて。狐拳をしてゐる所へ。瀧三郎すいト這入る 引つゞきておひ者もとんで來りいろ／＼ざしきのおもむきあつて酒はじまる玉ぎくへつねにかハらぬもてなしぶりに【たき】もし玉さん。かういつちやァ些と。ぶしつけかハしらねへが。

おめへも。泥水にもまれて。とふ〳〵娼妓こんじやうに。なんなすつたの。わつちやァ、そふとも。おもひヤせず。やつぱり昔のおたまさんだトおもつて。突合て居やしたら。大きに。恥をかいたうへに。夕ァなぎァ。焼死んだゆめを見て。強氣に必驚致しやした。出雲の神も結ねへ縁とハしらず欺されて。浮〳〵來たのが。埋りヤせんこれから又。脇の内へでも行て。埋るやうな女郎業でも買ねへけりやァ。わつちも此土地へ面出しができヤせん今と成ちヤァ。愛想盡しをいふ氣もなく。たゞ此事を。一寸斷に來やした（トさかづきをとつて）小蝶一ッついでくりや（トかほを見ながら）コレ手めへも大きくなると。いゝおゐらんになるだらうが。かならずお客に。さむしいこんじやうだト。おもハれねへやうに。するがいゝ（トあちらこちらへハツあたりぐひとのんで）サァ玉さん是がお別れの盃だ。お悪でもあらうが。どふぞ一ッ呑でくんなせへ（トひざのそばへおいてすぐにそのざをたつ）【玉】ヱ、まァいろ〳〵はなしも。おざりいす（トそでにすがれバ）【たき】（ふりはなし）未練らしい。引止られるやうな科ハ。しねへはなしのあるといふハ。そりヤァ延壽さんの。間違ひだらう（ト次のまへいづるを）【玉】（なをも引とゞめて）たつた一ト言聞分ていふ工聞て下さんせ（トなをもだにむせびていひけれどもなをはりつよくはらたちて）【たき】てめへの。いひぐさを聞にヤァ來ねへわへ（トじひもなさけもあらげなくしやうじをあけてとびいだすに）【玉】チヱきこへぬこれ申シ（トいへどこたへもなくばかりきり〳〵むねへさしこむしやくにふしまろびなをだにくれぜんごふかくに見へにける）瀧三郎ハ。これより筋向ひなる。額松田屋にいたり。半部といへる娼妓に。馴染てたがひに漆膠の。

契りをぞ結びける。玉ぎくハ百度千度みしてハ。その云譯に誠を盡し。又人してハ。曇なき心の中を知らせしかども。瀧三郎ハ恨强くも。深く恨みて開けざるに。友達なる鯉之介も。はなれだこれを氣の毒におもひ。且玉菊玉章が憑に。色〳〵骨折しが得心もなく。剰へ先達て。心を盡して贈りたる。かの茶杓。蓋置。茶碗とも。その儘に戻されて。いよ〳〵手切れの歎しさに。玉ぎく今ハこれまでと。おもひつめたる一トすじを。千すぢに碎く名殘りのみ。愍れをこゝに。書置ぬ。

御とりあげもふつ〳〵御いやましニ思召候事かもはやこれをかきりの水くきのあとすへまでもさやうニ御にくしミもあるまじと一筆書おきまいらせ日にまし御さむさいやまし候へども御かハりなふおハしまし候御事御せんせいの御身さりとハ〳〵御うら山しく存まいらせさりながら御機げんよく入らせられ候御事いかほど〳〵うれしく存まいらせ誠ニ〳〵すぎしとしはかなき御わかれもふたゝびくるハにて御目ニかゝりしよりあさからぬ御事のミニあまりまいらせ神かけて御しんにそむかぬものをと思ひ參らせ候處ニ月に村くもはなニ風こなたニ覺なきさま〳〵の御むり事うき〳〵氣のどくの山もふさんやうもなくわが身くもりなき事千たび夜ニもゝたびみしてハ又人してハ申あげ候へども御きゝ入もなくみさへ御手ニふれ玉ハぬとの御事さりとハ〳〵いんぐわな

る此身と朝ゆふなミだのかハくひまもなく誠ニ〳〵かづならぬわが身とそんじ参らせ候いかほど御なさけなき御事ともつゝけ参らせ候とも君をよそに見ん事日の本の神かけて存申さず候おん心に御おぼへあるべく候ゑんじゆゑ事ハたゞ義理ばかりにわが身心をつくし参らせしやうニ思召候ハどもなか〳〵御方ゑをよそになし参らせ候しんていすこしもなくそれさへ今ハ申わけいたしゑんじゆゑニも御目ニかゝり申さす候かやうの事ニてあまたの客衆きれ参らせし御事ながらの身にてハあまりよろしからぬ御事ニ存参らせ候猶いろ〳〵御こり被成候とて御むたいの御事もふさんやうもなく九月廿一日の夜御機げんあしく御歸り被成候まゝ御そでにすがりつきとかくいづれの道ニも御心のはれ候やうニいたし度いろ〳〵御とめ申参らせ候へとも御袖ふりきりそれなあらぬ方へ御かよひ被成候事むねにたく火のやるせなく戀しきとも八屋方へまい日〳〵書おくる玉づさのちかひをたて御目ニかけ候へ共御手にさへふれ玉ハぬ御事わが身心ニ覺なき御むたい誠に日おしく存参らせ候かやうニ御とりあげもあらず御むたいニて御見すて下され候御事わが身何といたきやうもなく今ハおもひ切りじがい致し相はて申候此世にてうすきえんならぬなからんあとにてもとかくわが身くもりなきだん御せんぎ被成候て誠とも思召候ハゝどふぞ〳〵一へんい御手向にもあづかり参らせ候ハゝよの人の千べんよりもまさり参らせ候たゞさへ女ハつミふかくい



玉菊

ましめおもきニかやうに浅ましき身となり猶又やいばにかゝり候事ミらいまでおもひやられ候へ共かやうニいたし候ハねバぬし様御がつてんなく候まゝ思ひ切りら〱君こそいかやう御かハり被成候ともわが身ハかハらぬしんていニ候まゝせめて思ひをはらし下され□□様わが身ハいきのかよハん内うらミがちにてもはや身をすて候へどもなからんあとまでハさやうニもあらんと存ら〱わが身品々残しおきら〱君ならずしてとぞんじおしき黒かミを切り参らせたゞ今おくりら〱御心ニそまぬわが身かと御すてあらんなれどさやうニ思召被下まじく候茶しやくふたおきちやわんこれハ御はらたちのうへから御久しもありしと存参らせ候まゝ又〱おくりら〱かたミこそなきあとのなミたのたねとうけ玉ハり候まゝ御心直り候ハゝこれを御らんのたび〱ニ思召出させられ一へんの御ゑかうもたのミ上ら〱はしとミ様江たゞ今までふかく御通ひ遊ハし候よししんそ〱うれしからぬ御事とも候へ共ぬし様の御心のなぐさミに成ら〱御事とぞんじ候へは又うれしくも存ら〱いよ〱かぎりなふ御かたらひ被成罷下べく候玉づさどの事御ぞんじのとふりわが身妹ぶんニて身をわけたる様もたのもしく御方様とてもよそのやうにも存申さず候まゝわが身なからんあとニてもとふぞ〱御見すてなきやう御ねがひ申あげら〱内ニもふしかハしまいらせ候ちかひのみあと見るもうらめしくいくなふかやうニあらんとハぞんじ申

さぞ神ならぬ身ハ今さらばちあたりけるかとおもへバ筆のたてどもおぼへ申さずはづかしき一首も誠ニ心ばかりして

なれ染しさゝれ一夜をわすれかねうきにたくせぬ君ならすして

近きあふせのわかれさへならバやがて待わびしをかやうニながきわかれとハおもひもよらぬ御事ニて御ざ候もふし度事ハはまのまさごのかず／＼候へともなか／＼水草の黒かミも見へわかず候まゝすこしハ御ふ便とおぼしめし跡さきに成候を御すいもし被成下されべく候さて／＼かなしきハ御名残ニ御座候かしこ

たま方

多幾三郎さま

一筆申あけまいらせ候いよ／＼とゞなふ御くらし被成候事と存候さてハたき三郎さま御事そもしさまとふかく御かたらひ被成候よしさて／＼御うら山しく候心のうちなか／＼もふしあけたく候へともおなしながれの身のさハりともならんとにひかへ候／＼日をおくりわが身事ハたきさまもくずの葉の御うらミ御座なくたゞつミふかき身ニ思ひけされ候ハゝなきあとニてもしまつなき御事たきさまへ御申あけたのミ入候／＼まとニ／＼おもひがけなきむたいのつミにしづミし事これのミよミちのさハりニて候申ても／＼御両人さまの御中いろかえぬとき葉の松ニねんじ候／＼ふくさ

の内きやら壹匁これハたきさま御ひそうの品ゆへそのまゝおくりまいらせ書おき度事やま〳〵にゆへとも筆のたてどもさだかならず申入ゆ御すいもし下されへくゆ　かしく

まつだやニて
はしとミさま
御もとへ

ゆまんじゆ
玉きくゟ

我身此たびおもひきり相はて參らせし事ハかね〳〵たきさまへもそもじさま御とり次も下されゆへ共つひに御心も直り申さずあまり御むたいのたんつれなく申わけ立かねゆまゝとかくあらん世にすミ人まじわりもはづかしくゆまゝ思ひ切りまいらせそもじさまよりハわが身一ト方ならず御世話も下されはらからのちなミより一しほ〳〵御名殘おしく存まいらせ誠ニ〳〵おや兄弟より猶あまりあるなからんねハいかやう成御事ぞつゆほどもしらせ申さず御うらミゆへどもとやかくと御とい被成ゆ事とふかくつゝミまいらせ明利のならいなればあふハわかれのもとにてゆまゝ一へんの御たむけと御なじミニ願上まいらせとかくはづかしきおふさきるきのこゝもとにも物さたニなり參らせゆ事と存まいらせ共はてそなたても心中せひなく申入ゆ此みそへたきさまへ暮ミも唱被下べくゆそもじさまはじめほうばい衆もたゞ今大事と思召ゆ事かみにも書しどくニてたゝすいぶん〳〵御

つきやいよきやうニたのミ入まいらせ候

そが物語　染小袖一ッ　白むく一かさね

白人ニ首され成御座候まゝそもじ様ならでハとしんじまいらせ候此小そで少ミあかなれ候へ共内ニもよふときと御ほめなされ候まゝそもじ様へおくりまいらせ候小てふ事近きとしほどこだて候へどももはかなきい子共方おとなしく客さんたちにもかハゆがられわが身もいかほど〳〵うれしくこなたかやうニ成候事とハ夢〳〵ぞんじ申さずましてなからんあとニてさぞ〳〵なげき候ハんと存まいらせ候小てふへ遣ハし度品おくりまいらせ候小袖一ッたんすの内いろ〳〵こまもの入置まいらせ候もしや見世へ出候ハヽ御やり被成下されへく候そもじ様をひとへニ〳〵御願申候さだめし此すへハ小てふ事ハそもじ様をたよりニ候ハんと存まいらせ候御ぞんじのとふりちと〳〵ごやう身もいゆへ御ふびん御くわへ御遣ひたいミ入候又ミきもしき事ながら二かいおたよどのへ金子少ミあづけ置まいらせ候小てふ出世いおり遣され下されべく候扨またそもじ様へ金子十両つゝミおきまいらせ候しぜんわが身とゝいへきいなどわすれはらひを遣し申さず置候方へさつそく遣され下されべく候もつとも此間中方ゝ方はらひ遣し候へ共もしやとりおとし候ハんかと存まいらせ候そもじ様御願申候まゝはらひ残り候ハゝそもじ様と小てふへ遣し申度候くりことながら名残ハつきせぬうき身のすへたゞなミ

だのミ身にしたゝりらしさぞ〳〵よめかね申べくそのうへもんごん跡やさきにてたゞ〳〵むねくるしくゆまゝこれまで思ひつめらしこくげんちかより参らせゆまゝ書とめらし[?]

玉つさ　ゟ　　玉きく　ゟ

玉菊その夜の。しやうぞくにハ。うへ下ともに白小袖春中に。六字の名号を。大文字に書しるし。白繻子の帶に。金糸で八重ぎくの。縫あるもようむすぶ手水も心して。二十一期の夢見月。はかなく覺て散花に。紅顏むなしく變じつゝ。今ハ桃李の粧ひも。なき骸ばかりや殘るらん。實に色あるものハ。かならず衰へ。光りあるものハ。已にきへぬる。うき世のならい。トハいふものゝ玉章が歎き。小蝶が悲しミ愁れといふもなか〳〵に。目もあてられぬ光景ハ。作者も。筆におよびがたし。斯て玉菊が最期の。始末廓中ハいふも更なり。その貞操を聞つたへて。袂を絞らぬハなかりける。されバ瀧三郎も。後悔のなんだ胸を割。愁嘆のおもひ腹を斷。紀念こそ今ハ仇なれ。これなくバト。忘るゝ隙もあらなくて。送葬の營ミ。追福の作善。せめてもの言譯と。金ぎんも惜ます。いと佳美にとり行ひける。偖また此としのはじめ。名智右衛門夫婦も。目出度世を去て。瀧三郎家督相續なし。紀の國や文右衛門とぞ。名乘ける額松田や

の中都も。玉ぎくは正操の。死にざまにおのが心も恥入てついに瀧三郎と。遠ざかりけるとかやきのふは。けふの昔となり。春もやゝ過ぎ。夏も盡て秋は一しほ。もの愁れ勝なるに。紀文も玉ぎくが。新盆とおもへば。そゞろに涙もろく。人の命のさだめなきこそ。又是非もなき次第なりと。その追善をなさん爲。仲の町の茶や〳〵を憑み。多くの金銀をおくりて。花燈を軒に挑げしが。万客目馴れざる趣向に。いと珍らしとて。見物群集なすと夥し。いよ〳〵紀文は亡玉ぎくが。愛着にひかされて。これより百萬両の。身代も何かはせんと。生涯。此さとに遊び暮して。榮花の夢の見あきをなし。玉菊が黄泉の心ゆかしとて。もつぱら慈悲を施し。陰徳を恵し事。今の世までも誰しらぬものはなかりける。その後姿を。墨染の衣に換て向ふ嶋に草庵を結び。一向念佛の行者と成て。永く玉ぎくが。菩提を吊ひける。されば玉菊は一端の恥を忍びかねて。非業の死をなすといえども。又紀文が爲に。係る追善の供養を受て。名を末代の今にかゞやかせる事。偏に花街の鑑とも謂つべし。

花街鑑下巻　大尾

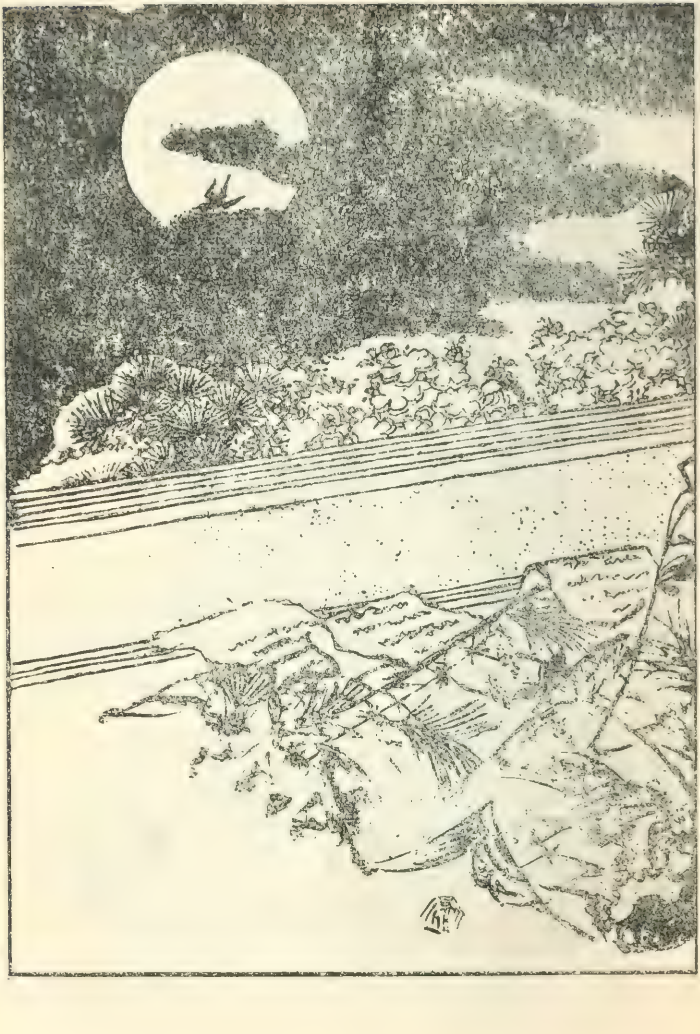
青樓女庭訓

青樓女庭訓序

玉篇に。女ふたりを。並べて姣と讀。亦姣と。讀しむおなしく。女三たりを。寄て姦と讀。亦姦。姦。姦。姦と。讀しむ。されや此女庭訓は。倡客穴學問といえる。小冊の。後編にして所謂。姣。姣の。聞著より姦。姦の。奇偶なる叓を擧て。前編の。尻を贖ふ木に竹を繼ぎ。糸に金を繋ぐの。譏はヲツト。承知の幕明と。云爾

文政六未正月　鼻山人誌

契情常磐路



三

四
客
又三郎
三浦屋の
美崎

〇目録

〇花のかほりの。移り香に。心ときめく文の便りハ。此さとの　春の部

〇手に汗握る。これ異見に。あつひ情けのはからひハ。我やとの　夏の部

〇獨り寐る夜の。肌寒に。かハり安きの空事ハ。心のうちの　秋の部

〇雪のはだへの。白妙に詠め。つめたき氷り水ハ。胸を冷す　冬の部

穴學問後編 青樓女庭訓

鼻山人次作

春の部

攜を招ぐには。禮をもつてし。遠きを懷るは德をもつてす。トいえり。德禮易ずんバ。人懷す。トいふ事なけん。爰に名を。又三郎トよべる一個の通子あり。三浦屋の倡妓。見さきといへるに。相馴染て。互ひに漆膠の契り。ふかかりしが。あるとき俳名を其洞といへる。通う客に。出會て。圖らずも千歳屋へいたりしが。常盤路と。いふ倡妓に深くおもわれ。初會馴染の居續に。一ト方ならぬ眞實も。誠を盡す情けにより。彼をも亦捨がたくて。其洞とともに千歳屋へいたるを。三うら屋の見さきは。是をしりて。又三郎事は。我方へ深馴染て來るよし。くわしく常盤路かたへ告て。とわりのみを遣はせしに。常盤路は。如何やおもひけん。その返事

さへ得もいはで。又三郎が。來りしをさいわいト。仲の丁の茶屋。藤田屋のもとより。相連れだちて。三うら屋の格子先を過りこゝにて。又三郎の名を頻りト。雛妓松の。に呼しめて。ぬしのお馴染の。見さきさんハ。今宵ハ見世においでなんせんョなどゝ。高聲にいひのゝしり。常盤路も。ホヽ笑てナニヱ。けふハ又さんが。お仕舞なんしてッありいスものをなど。口〳〵にいひ。ざゞめきて通りけるも。深き譯ありての。事なりけらし。見さきハこれを聞より。堪へかね急ぎ。又三郎が茶屋。仲の丁。よし川屋與六を呼びよせて。いさいの物語りをなしければ。與六も係る間違ひのあるべき事ハ。このさとに。なき掟てなるにッハおなじ仲間にして。藤田屋。五郎兵衛こそ心得ねト陰嚢もつりかたの。たとへによりて、大ひに心中に。憤りを含ミ。われ今より。千歳屋にいたり。常盤路さんに對面して事の是非をいひ解き。又さまお連れまうしてまいるべしト。それよりちとせ屋にいたりて。ときハだが今宵かくはからひし事ハ。兎ありしゆへ。角ありしゆへなりト。つぶさに聞て。一理なきにしもあらざれバ吾おもふ心のごとく。とりはからひもなりかねつゝ然らバ今宵ばかりハまげて。吾とばを立させ。又さまをかし給ハれト。いろ〳〵骨折さあらバ明朝ハ。かならず。こゝへお連れ申まいらせんトかたく請合。漸〻篤心させて。遂に又三郎を。三うら屋の見さきかたへつれいたりぬ。こゝにおゐ

て又三郎ハ。もとよりひよくの盟ひ。れんりのふだト契り深き中なれバ鈍くもその情に屈りて。こゝに一ト夜の夢を結びきぬ〴〵の別れに。見さきも。ときハおか。ゆふべの始末あればバ。今朝大門につけん事を推し。しんぞうならびに若ひ者を引つれ。茶屋の男ト諸共に又三郎を送りて。まづ仲の丁よし川屋の。許へいたりぬト。前編倡客穴學問トいへる。小冊ニ見へたり。斯て又三郎。よし川屋へいたれバ亭主【與六】見さき。ならびにしんぞう見舟。若ひ者甚介。ねづばんの起介。なんど鼻をそろへて。きたりけるに【與】コレハ見さきさん。どふいふおぼしめしで。此人達をトきいて【甚】モシだんな。ゆふべアノ通り。千とせ屋の内で。いきさつがありましたゆへ。今朝又さまのお歸りを。おほかた大門に。つけて居るにハ違へあるまいト。見さきさんも思ッしやるゆへ。そこでわつちどもが。お附キカテあひつらに。指でもさゝせねへ。つもりでまいりました【與】ハヽアそりやア。はゞかりながら。見さきさんもチトおぼしめし違へで。ございませう。その爲にマア痩ても。かぶれても茶屋が附て居りまする。たとへ又さまのお身のうへに。どんないひぐさがありませうとも。そのやうな手込なことを致せバ。此方で打捨てハおきません。それに何の行と敷なさるト。マア此方から喧嘩を。買うやうなものでおとなしくござりませんじやア。まアありませんか子へ。モシ又さん。さうじやア

ござりませんか【又】大キにさうだョ。カウ甚介まういゝから帰ッてくだせへ。おれも後から付て来られちやア。大門を出るも。うす合好が悪イ　此うちにお定まりどふりの。ゆどうふに。あつかんの一てうしいづる。もつとも正月の事なれバ。八寸ンのうへにのせてある、にしき手のこ二つ、このふたものには、こぶまき、にまめ。かづの子のたくひなるべし　【與】サア又さん一ッめし上ッて　トさかづきだいを。ひさのまへになおす　【又】はんぶんうけてこのみ。さかづきをてのひらへのせて見さきがまへにいだし　一ッ呑ねへか【見】たべェスめへ。いつそ癪がいたふおすから【又】それにやア。暑燗できめうだぜ一へへやるト。ぐつと開ひてくる　トいはれてしかたなしに一ッうけてグツトのミ　【見】與六にやりて　御亭さん一ッおあんなんし【與】朝ッぱらから。やりましたらいけますめへ【又】正月だから能じやァねへか　トこうしをもつゆへしんそう　【見舟】又さんわつちが　トとつてつぐ　【與】ヲットあります　ト一ッのミ　甚スー一ッどふだ【甚】イエありがたふござりますが。朝ハとんといけません。モシ見さささんさやうなら。わつちどもァ帰りませうか子【與】帰る事サ。又さんのお身のうへなら。此與六がお請合だ【見】ごつさんも。ア、いゝなんすものを。間違へもおざんすめへョ【甚】さやうでござります。さやうならバ　ト甚介起介ハ。ミな〱にあいさつして引とる　【見】又さん直に。お帰りなんしョ【又】しれた事サ【見】そふおつせへして。また千とせ屋へ。お出なんすかもしれへせんから。大門までおくつてめへりいせう【又】そりやァどふともだが。そのやうにまた僞惑ともねへの【見】わつちやァうたぐり深へ質だから。かんにんして子おくんなんし【與】モシ見さ

きさんは、そんな事なしに。又さんを。きれいにお歸し申なさるが。いゝじやァねへか子又さんだつても堪ねから。千歳屋へ入らつしやればバツリヤァ隱崩しさます。常盤路さんもァ、いふ氣めへいに女郎衆のへ、いとしいも、可愛も、恍惚たも。惚れたも。勝除になつて。たゞ逢引とし意氣張づくになりやァ、とゞのつまりハ。まァあぶもとらず。はちもとらずと。いふやうな事になりますうぞへ、又さんハとてもゝゝ。わたし方の客人で。おめへさんの所へ。馴染で行ッしやるハ。さいふやうはいこつてもなし。千歳屋ハほんの御突あひで。入らしつたうへの事だからこどふともそりァはなし合がつきませうじやァ。ござりませんかへ。それを彼是ト氣を揉でおつしやッちやァ。又さんのお心もちを。グットト悪くおさせなさる。やうなものでとんだ悪ィ(トいわれて見さきあきた あんつうられて)【見】そふぬしがのこんで。くれさつしやればなんにも。氣をもむ事ァおざんれせん【又】與六もアノ通り請合べ。何も貴さまが氣をもむ。はなしやァあるめへ。傷惑ずに行くおいらァ。おれも内へ歸る【見】そんならかならず。直にお歸りなんしョト【又】(かたへのそばへ口をよせてモシ)うすりぞんれ子。どふぞ來ておくんなんし。待ておりいスヨ(トたつ二なぞのきぬて又三郎がせなかを一ツとんとついて)かなたらずョ

ト(いとまごひしていしゆ與六 次のまに出る)【見舟】もろとも。名殘りおし氣にたちより歸る【具】(おしや おくり)て偕又さいへ、ようこそ事でござりました。わたくしハこのやうな。義ともぞんじませず。昨晩お迎ひが

てらっ千とせ屋へ。まいりまして常盤路さんの。おはなしをうけ給わり。ホンニ肝を潰しました。藤田屋も仲間甲斐のねへ男と。五郎兵衛を呼つけまして。段〻懸合ました所が。藤田屋かられ一ト通り。わたくし方へとわりました。わたくしハ一向申ませず。そこでまづ此やうな。間違ひも出來ましたト。中ものでござりますテそれゆへ。常盤路さんの所から。夜が明るや否やゆふしおんやくそくの通り。又さま事ぜひ〳〵おんつれまし。下されるやうにト申。催促が此通りト（たばこぼんの引だしから口上がきのみを出してミせ）まいつてハおりまするが。いづれにも。今日ハまァお歸りなさる。かたでござりませう【又】それでもゆふべァノ通り。請合た口上があれバ。あとで兄下が。迷惑するだろう。それも氣のどくだョ【與】へ〻そこ所ハわたくしが。方便をもつてよいやうに。申ておきまする【又】それに付ても。紙入れを。夕ァあすこへ置て來やした【與】格別。お大切の品もござり。ませずバ。跡から直に持せてあげませう。いづれこゝハ一ッ氣を拔ひて。ごらうじまするが。よふござりませう【又】ゥ、そんなら。まァいゝよふに扱かつておいて。下せへ憑ミます【與】ハイ〳〵いづれ。夕方までにハ。此方のごやうすも。申上ヶませうから。すこしもはやくお歸り。なされますはうが。よふござります。藤田屋に定めて。お連さまも。お待なされて。入らつしやりませうがへ〻それもわたくしから。よいやうに申上ヶませ

う【又】ゥ、そんならそふして下せへ。おれも今朝はやく歸るはうが。都合が。いゝ紙入れの中にも。チット入用の品ハあれとも　トいふハかの起請なれども。かれこれこゝに。ひまどらバ事むづかしとおもひけれバ。そこ〳〵にして立出る　心のうちハ。嬉しくもあり。又うすきミもわるく。急ぎ大門を出て沛公。項羽が。圍ミをのがれ。頼朝。大場が。せめをまぬかれし。心地しつるも。また樂しミの。一ッなるべし斯て與六ハ。常盤路かたへ。又三郎が事を云んとたち出しが。はや一丁目の曲り角にて　ときハぢかばんしん松がねにあひ　【松】ヲヤよし川屋の御亭さん。今ぬしの所へめへりいスので。ありますョ又さんハどふさしつたへ。おいらんがいつそ待て居なんすものを。はやくおつれ申テ來て。くれさつしやれバいゝねへ【與】その事でわつちも今。おいらんの所へ行のだが子。ゆふべかた〴〵お約束だから。今朝おつれ申ス氣で居ました處が。又さんのお宿から。おむかひが來て。何か急な用向だトおつしやッて。そこ〳〵にして。お歸りなすつたから　トはなして行うちはやちとせやのまへにいたれバはなしをやめ　いづれおいらんに。お目に懸ッておはなしをしやせう　トくゝり戸をはいり若ひ者左介へゆふべのあいさつして　是よりときハぢが。座しきへいたり又三郎が内より。迎ひの來りしなど。誠しやかに物語ていづれにも夕方までに。おむかひがてら太吉を。つかハしますつもり　など、いふにときハぢへしばしあいさつもなかりしが　【と】じつにお宿からテ迎ひが來て。お歸りなんした事なら仕方も。おざりイせんが。もしみうら屋に。居續でもして。おいでなんせバわつちが。

おもふぞんぶんにして。あげへすから。そのときァかならず。彼是いつて。おくんなんすなェ【與】はゞかりながらわたくしも。仲の丁の茶屋でござります。客人も太切又女郎衆も大事ト中もの。嘘をついた所が。直にしれます。譯でござります【と】おいて行しつたものも。おざりいすものを。ぜひお出なんすわけざんす【與】へィその。お紙入れの事も。さやうおつしやッて。お出なされました。ゆふがたまでに。人をよこすなら。その時届けてくれろと。わたくしへ。お憑ミでござりました【と】そんならみをあげへすから。届けておくんなんし。紙入れハお出なんしたとき。あげへしてもようおざりいせう。是非ばんにお出なんすやうに。こふ申テあげへすから【與】そりやァ又さんも。どふで入らつしやる。ものだから トむりに此かミ入れた。引とらんといわバふたゝくそこに。又かどがたちて。いよ〳〵むかふの氣がたつゆへぜひなくこゝへ。ぐにや〳〵にして さやうならおみをはやく。つかハされまし【と】おきに書て持せてあげへせう。共洞さんにも。くわしく今朝おたのん申テ。あげへしたがチットいひ殘した。事がおざりいスから トはやすゞりばこを引よせてみをかきかゝるゆへ【與】さやうなら。又これから藤田屋へ一寸と トそこ〳〵にいとまごいして ちとせやをたち出。ふぢたやへいたれバ。共洞月下のふたり ゆどうふにて。のんでみたるところへいたり 又三郎が内より。迎ひの事をいひのべてあしからざるやうに執成し。まづ今朝の所ハ。双方ともに浪風なく。とりおさめける。茶屋のはからひぞ。骨折なり。

夏の部

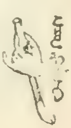
爰にまた。神田の里に。松戸屋又兵衛といふて有徳なる町人ありけり。多くの出入り屋敷ありて平生に用金など達ければ。おのづからその利とくを得て。何一ッふ自由なくくらしける。一人の躮れありて又三郎と名づく。係る有徳なる者の。家にうまれ殊更世繼子の事なりせば。ふうふかぎりなく寵愛して。月日ほしとぞ詠めしが。又兵衛かねておもふやうハ。斯いときなき時より。可愛さのあまりに。何くれとなく。心の儘にして是まで育てしが。もはや十才の歳も過ぬれバ。もの心もしりつらん。兩親の手もとに置て。成人もせバ人のおもひやりもなく。憂めつらいめもしらで。氣隨我儘の人ともならんと。遂に十二才のとき。淺草天王町なる。井出屋四郎兵衛といへる。大分限者の方へ。年季野郎どうやうに。めしつかひ下されかしト。憑ミけるもとより他人のなかを。見するまでの修行なれバ。万端身のうへの世話は父又兵衛方より仕送りしゆへ。四郎兵衛も外〳〵のめしつかひ。どうやうにもおもハず。調市奉公とハ。いえども。殊のほか情をかけて遣ひける。番頭手代にいたるまでも。なをざりなふ見へければ。又三郎も暫らく爰に。年を重ぬるうち。いつ体生れ質し利發なる者ゆへに。自然と算筆なども。

達者にとりまハして諸帳面の勘定等も。最つゞまやかに。なしけれバ四郎兵衛も。歳に似合ざる利口ものとて。十六才のとき。元服させ十八才のとき。手代やく申付て。所々諸侯がたなどへも出入りさせ。多くの金銀をとり扱かハせしに。いさゝかのふ正なく。且用辨のすミやかなる事古老の番頭も。およバざる程なりせバ。四郎兵衛いよ〳〵頼母しくおもひ。二十の歳より。番頭のかハりをもつとめさせて。金銀の出し入れも。おのれが自由なる儘に。フト悪念發起して。あるとき主人四郎兵衛の目を忍び。はじめて花街にいたりしが。仲の丁の茶やよし川屋のはからひにて。三浦屋の見さきかたへつれいたりしが。いかなる宿世の因縁ありてか。見さきも又三郎が姿にまよひ。傾城のつとめはなれて。眞實のなさけに。誠を盡せしかバ。又三郎も主人持身としりながら。見さきが事をわすれかねて。すこしのひまを窺ひてハ。三浦屋へ心引れしゆへ。萬端の事。おのづから。懈怠となりて。いつしか四郎兵衛が耳にも入りければ。かくてハ身の爲ならずとて。より〳〵異見も加へしかども。更に用ゆべき心もなくて。いよ〳〵募りける儘に。今ハうち捨も置がたく。若きものゝある習ひトハいひながら。もしも身のうへに。異變もあらバ。又兵衛どのにうらまれて。世話甲斐なしとやおもハれん。轉ばぬ。さきの杖こそ大事ト。ある日四郎兵衛。松戸や方へいたり。又三郎事是まで。實躰につとめくれし事

の。一チ禮をのべて。今ハあつぱれよき一人前の。おとこともなりければ。手もとによび。
かへて。家督相續もなし給ハれよト。眞實のことばに又兵衛も。あつきなさけの大恩を謝し。
我もたゞ獨りの躮なれバ身のうへをあんじ。行末もよかれがしト。すでにさきの年。それの
月親類方より。一人の娘を貰ひうけて家に養育おきけり。もはや是も今年。十六才になりけ
れバ。渠が女ばうとも定めて。家名をも譲るべきなどいふにぞ。四郎兵衛もソハよきさいわ
いの事なりきト。相談のうへ又三郎を。父又兵衛方へ戻しける爰におゐて又三郎ハ。主人の
家とも違ひゝ今ハ我内とおもへバ。出這入も心安しと。なを花街通ひの居續に。又兵衛もつく
〳〵トおもふやう。四郎兵衛どのも係る身の放埓をしつて。吾方へ戻されにうたがひなし。
定めて遣ひ込しゝ金などもありつらんに。その事ハ露ばかりもいわで。皈されしこそさすが
ハ。大分限者の魂胛かなト。只管その心ざしに恥て。ひそかにこれを整算なすに。四郎兵衛
方に三百五十兩の。引負あるよし聞出せしかバ。さつそく又兵衛も。此金を調達して。四郎
兵衛方へ。佗言なしけるに。四郎兵衛ハこれまで。つとめくれし給金と。おもふよしなどいふ
てきこに請とらず。その儘さし戻しけるに。又兵衛もいよ〳〵面目を失ひつゝ。又三郎にも此
事をくハしく告て。かたく異見をなし。此以後を急度つゝしミ貰ひおきたる娘。お笘を女

ばうト。定めたるうへハ睦しくして。くれよがしなといふて。恩愛の涙だに袖をぞ濡しける。又三郎も兩親の教訓に。ふ孝の罪を侘ければ。素より子の爲にハ惑ひ安き。おやの心の慈悲深く。その頃お玉が池の片辺りに。心學の先生ありて。もつぱら五常の道を諭し。忠孝の教えを講釋して。勸善懲惡の。譬を說示しければ人ゝ身の爲の。學問なりとて。こゝに集ひて。是を聴もの多かりき。又兵衛もかねて此先生と。相識の事ゆへ。又三郎が身の放蕩を。見るにつけても。能異見の。講釋なりとて。ミづから勸めて又三郎を。折ゝこゝに遣ハしける。心爰に在ざれバ。聴ども聞へざる理り。かゝる親の慈悲心を。ありがたきともおもハず。又三郎ハコハ能遣ひ拂ひの。中宿出來しと。心のうちに歡びつ。是よりして。毎度夜の更し儘に。先生の所に泊りしなど。兩親を欺きてハ。なをこりづまに。三浦屋へぞ通ひけるよつて其洞の附合として千とせ屋へもいたり。ときハ路が。實情にまた引されて。兩の手に。桃と櫻の。はな角力勝負ハいまだ分たねど入リ組し一チ条ハさても斯とぞしられけり　又三郎ハけふもまた　お玉が池の先生をつかひ拂ふ心なればすこしもはやく內へ歸らん事をおもひよし川屋のはからいヲ　さいわいときはぢがもとへかミ入れをのこしおきしまゝにてそこ〳〵にくるわをいで道をいそぎてわが家へたちかへり　【又】はいり口から　心學の講釋も毎度夜の更るにハおそれる夕アも歸らふとおもつたら丁ど九ツだつタからよん所なく先生の內へ泊ッて來た　トまじめでいゝながら奥へはいろ父又

兵衛ハとくより起て又三郎がかへりをおそしと待ちゐたれバ【父】コレ又三郎チヨツトこゝへ來やれ【又】ハイなんでござりますト おやぢのそばへすハりあやまつたいなりさまといふ身でゐるなり【父】エ、おのれハナ〳〵まア親不孝なものでハあるぞよ。色〳〵身の爲をおもふてナ。彼是と異見をしても。ホンニ馬の耳へ念佛。蛙の面へ水同前で。われハ



用ゆる心ハなく。あまつさへ講しやくを遣拂に。嘘偽りの泊り歩行。そういふふ屆きな。こんじやうでハ。とても人間にハなりおるまい。ふ便な事じやがア、疊の。うへでハ死におるまい。親の首へも。繩付るやうな事仕かねぬ奴じや。ふ屆きものめ。夕ア何所へうせおつた【又】ハイお玉が池い。先生の所におりました【父】エ、。まだ嘘をぬかしおるナ。これヤイてつきり。そふだろうト思ふたゆへ。夕ア先生のお宅へ行て。おりやア何もかも皆聞て來たぞよ。七曲りの御家中。其洞さまトやらいふお方ト又三郎どのハ。宵のくちに連立て。歸られたトあそこの内でのうハさ。左様ならバ折〳〵此方へ。お泊り申タトいふてハ。宿へ歸りまするが。さやうな事も。ござりますかと聞たれバ。イヱ〳〵遂に一チ度も。お泊りなされた事もなく。いつでもお出なさるやいなや。直にお歸りなされますト。出席の弟子衆だ。花街通ひの噂ちら〳〵先生の手まへもあれバ。そこ〳〵に暇乞して。たち歸る心のうちの面目なさ。たつた一人の子を持て。世間人の笑ひ草となるかトおもへバ、夜の目も陸に眠られず我身の因果と諦めても。子ゆ

へに迷ふハ。親のじひァ、刻限につれに物喰て。煩ひもしおらふか。むり酒呑んで。身の放らつに。長詩もしおるまいト。それを。苦に病ものあんじ。ふ孝な子ほどふ便サに。罰あたれとハおもハねど　コレ天道さまが。おゆるしなさらぬぞヨ。こりや耳の穴あけてよふ聞ヨ。世間にいくらもあるはなしじや。キツトしたおさぶらいさまの。若とのでも。御子息さまでも。倡妓ぐるひに。身のうへのふ始末から。いろ〳〵な嘘いふたり。衒り同ぜんな悪智恵ふるふて。人のものを踏倒したり。表むきハ。よい良して居られても。内證でハ盗人のやうに。噂されたり。おもハれたり。親々へハ苦労をかけ。その身ハ人に義理を欠。恥を恥とも思ハざる浅ましいこんじやうトなるも。倡妓といふ悪魔外道の。なす所爲と。心付ざる獣子ものが。箒で掃くほど。コレあるぞや。おのれも今にその仲間　ト老ひのはがみにらくるいも子のかあいさトしられけり　番頭の箕八も、見せからこれを聞かねて来たりて【サン】モシ若だんなさま。今大だんなさまの。おつしやる事を。かならす仇に。お聞なされますナ。ミなあなたの。お身のお爲でござります。花街通ひモ。お若ひ身の。ごもつともさまデハござりますれど。ハテけいせいに。誠のないがあたりまへ。モシモ聞違ツて。ありますればヨ　カノ川柳にあるとふり。運の盡でござりますどちらにしても。身の破滅と。なりまする事ハ。草ぞうしにも。滑稽本にも。よくあるやつでござります憚りながら。

お筥とよいお心をも。すこしハおさつしなされまして。モウ夜泊りハお止めなさるが。よいござります トそばからチヨツトあいさつにはもとも〲 【母】畢竟ハ我内と。出這入もわが儘におもふゆへの。此しだら今までい事ハ。仕方もなし。けふより心を入れかへて。決て外へハ出やるなヨト 母だけあまきねこなでごへ 【父】ア、そのやうな甘口な事でハ。とてもせうねに。こたへおるまい。けふからおのれハ。二階住ひに申付る三ン度の食事ハ。女ばうの役めなれバ。お筥が運びて喰するがよいぞや。コリヤ内中のものも。そふおもふてかならず。又三郎に逢たいトいふものがあつても。けして二階へ通す事ハ。ならぬぞヨ。サ、これお筥はやく〱ナ。二階へつれて行【トマ】アイ トへんじもしりからく。ただばうかた気のまぬきかに。二かいへ心おき、たゞふと〲きさてん。きくがらくさ。ふわ〱とうへに。かけまくも。神代のむかし、ちはやふる 天の岩戸の。とこやミなる。かたつむす女の心ねも。かくやとばかり見へにけり 【又三郎ハ】常盤路が事も気にかゝれど。二階住ひのかなしさハ便りの道も絶はてゝ。ひとり籠鳥の。雲を經るうちはや春すぎ。夏来たりて。目にハ若葉。山ほとゝぎすはつ松魚。まゝにならぬが。ア、浮世なるべし

作者此所よりチヨツト御ふいてう

倡婦肝潰志 全三冊

青樓女庭訓

此さうしハ。倡妓の腹の中へ。這入て見たるがごとき古今にあはれなる事。又かなしき事。おもしろき事おかしき事。せつなき事などを。くわしくしるして普く。けいせいに肝を潰させる。珍本なり

青樓女庭訓 其二

鼻山人次作

秋の部

枚乘書にいわく。泰山の霤よく石を穿ち。殫極の綆よく幹を斷。水ハ石の鑽に非す索ハ。木の鋸にあらされとも。漸靡これをして。然らしむるとかや。よしの川の水上も。葎の雫たへまなく、遂にその深きにおよぼす、爰に仲の丁の茶屋。よし川やの下僕太介ハ。ときハおがみを持參して。神田の里に來たり。兼て內通を憑める。首尾の緒といへる。水茶ヤに。いたりて又三郎に一寸。逢ん事をいひけるに。此水茶やの。女ばうトいふハ。もと松戸屋の內に。めしつかいれしものゆへ旦暮出入して。又三郎がけふ二階住ひと。なりし事もよく知りいたれバ。くわしく告て。なか〳〵今ハ逢ふ事も叶ひがたく。まづ當分ハ。おみさへ屆けべき。方便なしトけんもほろゝナ挨拶に。太介も是を聞て。ときハおがみさへ憑むべき。首尾もなく手をむなしく

たち歸りて。斯と主人與六に告げければ。與六もコハおり惡きっ又さまのおん身のうへと只管その心ねを。推し量りて。係る事のあればとて。今朝いそぎて歸り給へるも。むしが知らせしおやどのやうす。アヽお氣のどく千万ながら。チヨト此事を。ときハぢさんへも。見さきさんへも。お知らせ申さずハ。なるまいトさつそく。三浦屋。千歳屋の。二軒へいたり。又三郎が身のうへの事を告て。おみのたよりさへ。まづ當ぶんハ出來兼るよし。うけ給ハりしとのべければ。見さきハハツト當惑なし。ときハぢも。偏にゆめの心地しつ。與六が良をうち詠め。愕卒はてたるばかりなり。梨花將に涙の雨を帶荒金の土一升に。千金の價も江戸の相場とかや松戸屋の調市長松ハ。使ひ戻りの小風呂敷かたからおろして〔長〕ハイだんなさま。おへんじハ此風呂敷の中に。ござりますヲヽ太義〳〵〔トマ〕コレ長松どん。だんなさまのごようが濟だら。一寸トたのみたいヨ〔長〕ハイ〳〵何かへカノ。京橋南傳馬町の。仙女香じやァござりませんかへそれハ□□□モシお笘さんへ。今歸りがけに子。首尾の緖の見せからこんなものを。憑まれてめへりました。コリヤア若だんなさまのっお帋入れだトいふこつてござります。何所のか人があそこに居て。わつちに穩便ト若だんなさまへ屆けて。くれろトいひやしたがト見せのりをちよいと見ておめへさんにあげますから。どふぞお上ヶなすつて。下さりましトふところからそつと出しておとまにわたす〔トマ〕一ト目見て

ノ、コリヤ。若だんなさま、婿入じやないまア何所へおなされて遊んしたか。届けて下されたお人い。名でも聞たかへ【長】イ、エ首尾の緒の。おかさんがわつちを呼で子。それから憑まれて来ました。なんでも何所のかだんなで。ござりませう【トマ】ホンニそれはさうな事で。あつたわいの トいゝながらかミ入れの用たんすの引出しへ入る【長】お使ひは。なんでござります【トマ】廿通ひ帳を持ていつてアノ若だんなノ。おあがりなさるのダから。よい酒をいつものとふり。はやく持て来イと。いつてくだせへ【長】アノしん道の。いせ屋かへ【トマ】そふサ【長】モシあすこの内ア。へらぼうに。つぎが悪イといふ。評判でござりますヨ。これへだも御用どんと。おもいれ喧嘩をしてやりました【トマ】コレノそんな事をいふト。人に憎まれるから。いわつしやんなよ トかよひ帳をわたす。長松ハこれをもつて。しん道へいたる 話説此時。金烏西山に。傾むきて人影丈をなす おもてをとふるあきんどのこへ とうふうイ〳〵。又三郎は。二階ずまひの身の悲しさも。おのれから作りし罪ト。諦めて見ても。なをあきらめられぬ。見さきが事ときれおが事の氣にかゝれバ。女ばうト定まれる。お笘が。旦暮の眞實もたくもいかハト余所に見て。露ほどの情もなかりけれド。お笘ハ又三郎がかゝる鬱窓に。身を潜めて。嚴敷家内のいましめに。さぞやトばかり。推量て只管心をなぐさめつ。聊しも傍ヲ放れずして。何くれとなく。最まめやかに仕へける【又】コレお笘。となりの物干へ日々来たか

ら。もふ夜食の支度でもよかろうぜ【トマ】ホンニよろしうござりませう　トはりさしの。はりをかぞへて。はりばこのふたをそつトしめ、かたハらへよせてたつ　是より夜食の。したくとゝのへて。二階へ持來たりサアおあがりなされまし。お燗も。強溫してまいりました　トしんちうの。かんてう子へ。さけを入れてぜんのかたハらにおく。もつともぜんのうへにハ玉川やきのさけのミ。ちよくあるべし　【又】なんぞ佳味ものが。出來たかの平ハまた親父の好ミの。八盃どうふじやァねへか　トふたをとつて見て　ハヽアこいつァ。いきなものを拵れへたの。フンされ〳〵どうふに。蛎とハおつうしやれた　トひと口啜て見て　ア、したがの塩梅が。奇妙によく出來た。コレじやァ一盃呑ざァなるめへ。お箸拘でくんな　トちよくを子のひらへのせて出す　【トマ】酒をつぎながら　お氣に入りましたら。たんとお替なされましヤノおッ嬶さんが。あなたに煮てたべさせろト子。おつしやつて。いかい事お買なされましたヨ【又】ヘヽアおふくろハ。ずいぶんわかつた人だが。どふも親父の篇屈にハおそれる。それにアノ算八めが。石部金吉かな兜といふものだから。おれも往生して。まァいふなり次第になつて。日和を見てゐるのヨ　ト一はいきげんにてはなす　【トマ】父さまも。あなたがかうしておいでなさるを。つく〳〵トごらんなされて。此間もマァあァして。二階にしんぼうして居るを見れバ。まんざら太ひ心でも。あるまいトおよろこびなされましたヨ【又】フンそふいつたか。おれも籠のなか同樣な。二階すまひもくるしいけれど。馬鹿をつくした。罸なれバとふも仕方がねへ。五十日トまァ六十日しんぼうして見せ

たら。親父もよもやかうしてハ。置もしめへス【トマ】あなたがそのお心なれバ。おッ嚊さんもてへ〳〵およろこびなされます トいろ気はなれしふうふ中夜しよくもすんですへふろに はや入りあいト暮て行。二階の雨戸くる〳〵ト。はたらくお笘が。上ト下心つけ木に。あんどうのひとり。愁れを止めけり【又】酒ハ呑む。湯にハ這入し。今夜ハはや寐トしやう トおとまに床をとらせてねころぶ ○雨しんも又三郎が二かいずまひの鬱をはらさん為とて一日おきぐらいにハ。酒をのませる事とゝへたり。これまさに。その身のうへをあんじての事なるべし【トマ】モシあなたの。おかミ入れがさきほど届きましたト まくらもとへおく【又】おきなおりてこれを見るより フンこりやア。マア誰が持て来た【トマ】アイ長松どんが。首尾の緒の見せから。憑まれたト申テ。持てまいりました。あなたまア何所へ。おわすれなされて。おいでなされたヱ【又】ウ、ウ、これか。アノこれハ何よ。アノそれ〳〵。お玉が池の先生の所へ。たしか置わすれて来たッケ。大方七曲りの。共洞さんが。届けてくれさつしたのダろう。ヨシ〳〵 トとつてふとんのしたへいれる【トマ】こちらへ仕舞ておきませうかヱ【又】インヤよし〳〵 トねころぶゆへ お笘も心ならず。なんでも紙入れの中こそ、怪しとハおもへども。根どい葉どいも。する事ならず【トマ】ハ こゝろのこして さやうなら。お休ミなされますかヱ【又】ウンなんだかいつそ眠くなつて来た。ききまもはやくねるがいゝ【トマ】ハイ〳〵 ト又三郎がかたへらへおのれがとこをとりて 暫しあつて。雨しんへいとまごひにゆき。五ッの鐘ともろともに。離れ〳〵の夢を結びぬ更て行。軒端さびしき。夜あらしに。遠くきこゆる犬のこゑ

愁身にしむ。折こそあれ【又】（くびを上ケて。おとまかゞねすがたをうかがひ）お笘寐たか〳〵【トマ】（いまだね入りハ。せざれどもわざとねたふりをして）（あいさつたけれバ）【又】（ころ〳〵とおきあがり）うす暗き。あんどうを掻立て。カノかミ入れをふとんの下より取出し。（ふつゝあけて見れハうちにハ）よし川ヤの口上書に。添て見さき方よりト。ときハぢ方よりのみ。二ほんあり（さてハトうなづくおもいれあつて）封〆をまづ舌のさきにて。能濡し（かミ入れハもとのごとくふとんのしたへ入る）これ封じめを。きるとき音のせぬやうにトノ。心づかひなるべし（またおとまかかたを見て）お笘寐たか〳〵コレお笘〳〵（トおこせども）【トマ】（ねたふりをして、目を糸になし。しゝうのていたらくを見て。いよ〳〵そのやうすを見んトおもへバしんぼうしてわざとスヤ〳〵。ねいりしていにていびき）スウ　コウ〳〵【又】まづ。さきへときハおかみをとつて。蜜と（ふつじをきりて）はじめ六七寸ンほどハ。（さつ〳〵と見て）それより。二タくだり。ミくだりほど讀でハ暫しうつふして。涙だバラ〳〵。又よんでハ。びつくりするおもいれ。又よんでハ。腕をくミ。小首を傾げて。しあんの体。胸按でさすり讀おハり。捲かへし繰かへし暫らくあつて。又見さきふみの封おし切り。おなじく。是を讀たび〳〵。仰むきてハ溜いき突。俯ぶきゝてハ涙だをながし。ハテな〳〵ト口のうちゝ。右を見左りを。かへり見て。彷彿たる行状をゝ（そばでおとまがゝねたふりして。これを見こゐる。いぢらしさ）ひとへにっ啞の氣違ひが。途惑ひしたる。ごくなり【又】ハ二タ卷のみを。帋入れの中へ入れて見たり。又出して見たり。仕まひ所を。いろ〳〵考へるやうす（おとまが方をじつとみつめ）獨りうなづき（とゞのつまり）又帋入れの。奥ふかく入れテ。もとのごとく蒲團の下へおし込ミゝあんどうを横にむ

けて（まくらがミ。チヨイと一まいおりかへし。ねころば）夜着を。あたまからすつぼり（かぶる）おりから。八半の。拍子木チヨン〳〵【おとまし】ハ。しじうのやうす。ねたふりして。とつくト見るより。つく〴〵トおもふやう。係るいたづら者の、輿所に。あれバこそ。内に心もおち付キ給ハず。としごろ。日頃。わらハにも。つれなくあたり給へるハ。皆この悪黨の。なす作業と。クワツトせきたつ。心をおちつけあアうらむまい〳〵。たとへていハば。深山木ト。みやこの花と。いへるとふり。ミんな我身の。ふつゝかから。お氣に入らぬも。もつともしごく。されさりながら。いやしいけいせいに。見かえられたト。おもひますれバ。エ、口おしい。ねたましいはらがたちます。たちまするト。心のうちで。ひとりごと。歯をくひメて。しのび哭き。とハりせめて。あハれなりはやしのゝめト告わたる。鳥のこゑともろともニ。明ていハれぬ。胸のうち。心トこゝろにおさめたる。ふうふハ善か。悪縁の。あれハのちにぞ。しられけり【トマ】（二かいをはき〳〵しながら）モシさくばんの。お寐入れをこちらへ。仕舞て。おきませうかエ【又】（ふミのやうすハしらぬとおもへバ）ウ、。いつもの所へしまつて置てもらおふ（トおとまが手にわたす）【トマ】（この中にこそゆふへのふミハトおもひながら）重子だんすの。引出しへしまひにゆく。かくて二階の光景ハ。朝食過て。はた坊主の。出さかる刻限トなり。おもて見せにハ一木魚の音ポク〳〵【たゝき鉦カン〳〵れいの音チリン〳〵なまいだア〳〵【坊主】けふハ横丁の。いせやさまも。出

日だ（トうろたへまへりはしりゆく）【はちばゞ】コレ妙珍さん。しん道のたばこやハ。乙年死なれた。かミさんの年忌で。けふあすハ出るに（ヨトおなじく尻をふり〳〵さつ〳〵といそぎ行）【女太夫】（しんないぶしあけがらす）へきのふの花ハ。けふのゆめいまハ。わが身につまされて。ぎりといふ字ハ。ぜひもなやつとめする身の。まゝならぬ。わかれとなれバ。いまさらにいなせともなきはなれぎハ。【又】（やゝしばしふさぎていたりしが何おもひけん）コレ。お笘。そなたハ生涯配偶。女ばうなれバ。隠すこゝろハみぢんもない。これまでのふしだらトいふも。ホンノ義理一へんから。おこりし花街がよひ。引に引れぬ譯といふも。いらざる江戸ッ子の。意氣張づく。アレの。コレのト推量を。あんまり仕過て。ついうか〳〵ト。無益な金をつかふた罰があたり。此やうな窮屈な。二階住ひも心がらト。人にうらミハ些ともない。もとよりけいせいに誠のないハしれてある。たとへ眞實らしい事。いふたとてうそトおもへバ。末始終女ばうに。しやうトいふこゝろなれど。たゞ兄への場所。いろの中。茶ヤの手まへの義理をおもひ。今となつてハ。そなたにまで。めんぼくしだいもなき仕合せ。女ばうトいふ名ばかりで。女ばうらしい。事もなければ。定めて氣まづひ心いきと、さぞはらが立たで。あらうけれど。かんにんしてくれ。あァミなおれがわるかつた（トいつにかへりしやさしさに）【トマ】エ、もつたいない。そのやうな。氣ハ露いさゝかも。こざりません。花街かよひもおとこの名聞。手かけ、めかけを。

おく人も世間に。ないではござりませず。わたくしのやうな。ふつゝかなものでも。女ばうトおもふてさへ下されば。それほどうれしい事はござりません【又】そふおとなしくいはれるほど、今までのふしだらが。どうも氣のどくで。めんぼくないョ【トマ】いかな事、わたくしとても外ならず。子供のうちから。友達に又三郎さんのおかミさんト、なぶらるゝほど心では。潔垢うれしく恥かしく。おもひのまゝにむすばりし。縁も冥がに叶ひし身のうへ。お氣に入らずば入らぬなり。食たいてなりト。御傍に一生。居たい心のねがひ（トあからむかほ、はづかしきむすめごゝろぞ、もつとも也）【又】なんのまァ。氣に。入るの入らぬのトいふやうな。見ずしらずの中でもなしたがひにおもひつゝ井筒、ふりわけ髪の深ィえんふうふのゑんをむすびても、友達のやうにおもはれて心やすだてが仇となり。けふまでやさしいことばも掛ず。急におもひ出したやうに。こんな事いふもァ、氣のどくながら、そなたもおれが女ばうト。おもふてくれるおもふて。くれる心なら（トすこしいひかねしおもいれ）あゝァ、其洞さまに。お門にかゝつて。おたのミ申さねば。ならぬ用が、あつたれども、おもひがけなき。一階ずまひに。出る事ならぬ。身のなれ義。日暮それが氣にかゝり。けふまで胸で濟せども。すまぬ心のくるしさは、義理といふ字の。ぜひもなやト、新内ぶしのもんくのとふり。これまできへ。しんぼうした心にめんじ。どふぞそなたのはからひで。親父のまへの。萩さへき

れバこつそりト裏口から忍んで出るハ心やすし。それに付ケても。一生のお憑ミといふハ。着物と。羽織帯かミ入れ。ミんなの目にかゝらぬやうに。こつそりと。首尾の緒まで。出して置てくれれバ。あすこから一寸ト着かへて。七まがりまで行て來るうち。わづか一時か二時のあいだの事。そなたがのミこんで。くれさへすれば。誰もしらずに事すむわけ。ふうふトおもハば聞わけて。一寸トやつてくれぬか　ト おためごかしのそらおがミ 【おとま】ハそれと推量の。心とむねのくるしさハ。おつとのたのミにいなともいハれず。これをひそかにはからふて。もし兩しんの耳にも入らバ。なんと言譯なくばかり。とやせんかくやト。とつおいつ。しあんにくるゝばかりなり

冬の部

人生婦人の身と。なる事なかれ。百年の苦樂。他人によるトハ。白居易が。遺言なるかな。偖もお笘ハ夫トだいじと一トすじに。おもひつめたる心より。兩しんの目を忍びて。ひそかに又三郎が衣類を。風呂敷に包かの水茶屋なる。首尾の緒まで。屆けおきて。その日の夕間暮。いづくもおなじ火燃し頃。家内せハしき。こんさつに。時分よろしと手引して。遂に又三郎を。

忍び出しける。もつとも今宵夜もふけて。もどり給へば。かしこよりひそかにおとづれ給へかしもし又泊りて。來給へば。かならず父さま母さまの。起ぬさきにぞ歸り給へ。さなきときハわらハとても。いひわけなしと眞實の心づかひに。又三郎も厚き情けを。よろこびつかならすあんじっさぶらふまじ。夜の明ぬ間にかへりこんト。別れてこそハたち出ぬ。跡にお留ハたゞ獨り。我身のうへを。つく〴〵トおもひまハせバそのむかし。一人の姉もありけるよし。たしか七ッのとしトかや。いかなる祟りの。身に酔ひてか。神隱しとなり。行がたしれず。母さまハ夫を苦勞の氣煩ひ。わらハが丁ど五ッのとし。あだし野の。露ときへ給ひ。今の母さまハ。義理あるなりに繼子の身のふ造化を。又兵衞さま御ふうふもふ便とおもひ給ハりて。さいわいのゑんある中。又三郎が女ばうに。貰ひうけんトもらハれて。來たハ乙年十五のとき。そのお情けのありがたきハ。内に居るより百倍まさり。果報ものよト父さまも。およろこびなされしが。結びかねたる二セのえん。心もとけぬうきおもひ女ばうトいふ名ばかりで。けふまで暮す身の。かなしさ。人目ばかりの女夫中。うれしき夢さへ。見た事も。なきあかす夜のせつなさハ。いふにいハれぬ胸のうち。何たのしミにながらへて。此やうなうきおもひをしやうよりも。いつそ死んだがましぞかしト。おもひし事も有明の。つれなく見へし心ねを。うらミわびたる一トす

じが。もしやとゞきてありけるか。いつにかはりしけふの。おとば身にあまりぬるうれしさは。なにと岩まのかいもなく。ひとり寐る夜の片おもひ。それにつけても。只氣にかゝるはゆふべのみ。見たいばかりに。わすれたふりで。殘しおきたる此帋入れト。内ふところより取出しあんどうの火を掻立て。中より出す二ほんのみ。拍子におつる。かの[きせう]それと心は付ねども。これもみかト一ッにおき。先一ト卷のみをひらき。已に讀んとするおりから六ッか五ッかしらねども。ゴントひゞきし曇り音の。鐘は上野か。淺草か「おとま」はこれを。叮寧によミおはり。ホットついたる溜息も。ほのふを吐がごくにて。エヽ面にくやはらがたつト咀ゞる齒の音キリ〳〵。又一トまきをおしひらき。見ればみるほど。嫉妬とおもふ心に。むねの火は。いよ〳〵熾んにもえ立て。悋氣のうらミ。むねんのなミだ。皃に脂臙さすありさまは。鬼とも。蛇ともなるべき。いきほひ。あはれにも又凄冷きかくてかの[いつふう]をとつて。封おし切り。見れば[きせうもんの事] ヤア〳〵これはト。心驚惘然。肩先一ッふるはせて[おんまへなとふうふのけいやく致しなうへは]トよむより。たちまち手もブル〳〵おもはず下へとりおとすを。又とり上ケてヂット見つめエヽ、まア〳〵。かういふ深ひえんのある。女ばうがわきにあるものを。どのやうにおもふたとて。とても我身は。およばぬ事生涯配偶女ばうト。いはしやんしたは。うそいつは

り。忍んで出たいばつかりに。やさしいとばも。口のさき。うれしがらせて置ふトハ。そりやあんまりじやとふよくじや。お情けなやト身をふるハせ。忍び哭き入る。折こそあれ。俄かにはこぶむら時雨。ひさしに傳ふ霤れの。いとゞ淋しき音につれ。アらふしぎや捲かへしおきたる。見さきがみのその中より。青くひかれる。一トすじのほのふパットたちのぼり。お笘がゐりへ入るよト見へしが。おとまハむつくと起なをり。起請をとつてハツタトにらミ ときハちの命 エ、口おしい。おのれ安穩でおくべきか。たとへふうふのけいやくせし。きせう誓詞があるとても。いつかな〳〵配偶ハせぬと。胸を按で。額をたゝき。涙だにむせぶばかりなり。

作者いわく。此命ト書くに深きわけあり。おつてあらハすべしト。前編の作者。穴學問に誌せりその深きわけある事を。予いまだしらす。アルおいらんの。いへりけるハ。起請を書くに太切の。傳受ありまづ義理詰となつて。これを書く事あり　又過分なる金の。むしんなどいふとき。おつな張合トなつて。これをしたゝむる事もあり。さやうなる時ハかならず 神との御ばつうをかふむり ト書よしいへり眞實まことにほれて。此人にこそ我身のゆくすへハ。まかせんトおもひて。したゝむる時ハ 神々の御ばちをかふむり ト書よしされバ 御はつうを ト書ときハ。文字に當らざるゆへに。あへて罪にハ。ならずト。いひ傳へりトひそか

に。ものがたりしける。これを考ふれバ。命といふ字を書も「ばち」としたゝむるときの。事なるか「ばつう」としたゝむる時ハ。いのちといふ字ハ書ざる事か。いまだこれを詳かにせず

【又三郎】ハかくと夢にもしら壁の。土藏造りを後に見なし。いそぎ首尾の緒にいたりて。衣類を着かへ見れバ。帋入れのなきまゝに。ハツトおもひ。これハしたりァノお笘めが。そゝくさしおつてとりおとせしに。疑ひなしェ、いくじもなきやつト。おもへど今更たち戻りて。これをとらんも人目あり。ァ、儘よ帋入れが。なくともよし此形でと。はや魂神ハ七歩ほど。花街のかたへ飛せゆく。駕籠ハ四ツ手の二百まし。鄙ぶり唄の。あいの手に。乗たてうしのひようしよく。ヘイ旦那モウ大もんまで。めへりやした。その樂しミに引かへて【おとま】ハ血はしるまなこざし。あたりを見まハし立ツ居ツ。我身もともに忍びいで。跡をしたふて何所までも。そふじやくトロのうち。帶〆なをしキヨロくトはん狂亂の。所爲。雨戸ほそめに引開て。見れバおもてハ眞の闇。ェ、おりわるひ。雨か降て來たそふな。それにまァ此暗ひ。とわいのト上を見たり。下を見たりァ、どふしたら。能らふぞト。ひとり氣をもミあせるほど。なをとりのぼせて車井。のめぐる因果と引よする。輪回のつなの生死。流轉。はや手まハしれ。ホ、それ

よト。そろ〳〵うかゞふ。勝手口忍び出たる。此世の名殘。雨はしきりにふりまさる。音にまぎれて知る人も。咎むるものもなかりしが井戸の中より。一ッの火の玉現れいで。花街のかたをさして。飛行しは。いづれあやしき事なりき。

此次の草稿。出來あれども。丁數の長きを厭ひて最一ッ後編にゆづる。是より見さき。ときはちが身のうへいかゞなるべきや。覺束なしおとまが。怨念。そのうらミをむくふ。ものがたりはすなはち。後編にしるす外題左のごとし

青樓未明草 鼻山人著作

傾城情史

天保壬辰新刻

洛東 閑亭京鶴述

傾城情史 大客

道樂點

此書ハ百年先生の繆典餘師ぞなぞらん二十五年全盛なる嫖子倡妓の心理をさぐりて粋と滑稽とハ各はなし彼に有てハ孝悌忠信あるに於てハ大抵無心といふ所を知しめ夫一方ハ温良恭倹譲をもて梅幸幽吴狂言上手といへる事まで悉く註釋なし實に大通不珍番もしく諸客通り入の門也

京都書林 晴轉堂發行

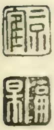
傾城情史自序

古語曰、有龍妓女之陰溝常殺人、然不見血、余欲見其龍之形、耽溺烟花已久矣、今歳雖偶見自嘖筒之裏蛇出、未見自妓女之陰溝龍出、以謂龍常出、余之通力不足而不能視、故焦思單心益耽溺矣、一夜登於嶋原之含翠樓、夜及闌、倚妓寢、傍若有二神謂余曰、吾輩是中華之薛敖曹及　本朝之弓削道鏡之靈也、汝欲視自妓女之陰溝龍出、耽溺狹斜、可謂勉矣、多々致意語汝、夫妓女者腰不厭細、帶不厭廣、巧笑倩兮、美目盼兮、以（有字字眼）其妖貌惑人、猶野干、必不可有不察之矣、亦自彼的之陰溝龍出也、徒閨中雲雨之情、不拂其雲雨則難視、拂雲雨也有術焉、爲汝傳一書、宜熟讀之耳、言終而授一卷、余蹶踞而受之時

曉鴉聒耳嘖嘖而寤打噯而覺則是南柯之一夢也於是余知神來通之看傍果而有書題大客輙雀躍而一繙一時得了其術焉余之喜亦可知而已豈慶其書哉亦倚花魁之膝探禿頭之筆註之以國字終托剞劂氏刻成更名傾城情史願遊斜郎請焚香讀了之得視彼龍之形免其害矣

天保辛卯秋八月金琵琶頻啼夜便煙草火摻毫於六曲屏風中

洛東　閑亭京鶴



附言

一 此書本客を親方とし塢兒を奉公人となすのるい尤多しこハ通俗の便りとこへたり又その文頗る野鄙なりさあれどもこは夢中に神人より授りし書ゆへ看官これを誹謗することなかれもし誹謗する時ハ忽ち其罰を蒙るべし

一 總て此書の文倭にあらず又漢にあらず按ずるに中華と本朝との二神よりして授りしものなればかくあらんや

一 註の文にひわいはの假名違ひなほあるべしこハ刻をいそぎしものなれば花魁の排軒さておゐて飛すかゝりがね八文字足のもとから鳥のたつごとき雀のちうなりと推したまへや大鵬の諸君子

京鶴再識

大客

酒氣章句

酒ハ氏氣ハ名なり世に大酒先醒と云此一卷の章の句を分ちたまふかた也酒氣章句を早口に色欲とよむべからず

酒酊子曰大客古之妓書而初客入通之門也當時可見通人爲客次第者獨賴此篇之存而枕辰次之客者必由是而遊焉則庶乎其不溺矣

此心ハこの大客の書といへるハ古への通人のかた〳〵妓女のことをしるしたる書にして世の廓にあそぶもの通人となる門口なりむかしの通人の廓にあそびし次第を當時しるべきものこの書の存ずるゆへなり扨この書についでハ箱枕辰巳婦言の二書を見るべし廓にあそぶものかたらずこの書のをしへにしたがひあそびたまへど妓に深くはまり身を崩すとなきにちかしとなり酒酊子ハ酩酊先醒なり箱枕ハ粋川子の作なり辰巳婦言ハ三馬子のさく也

夫客之道在通廓中在察妓情在止於酒宴

この段ハ此書のうちにて肝要のところなり世の人わづかに臺所酒の味をおぼへばはや廓に通ぜりと誇れども中〳〵廓に通ずとはさやうのところならずまづ通ずるといふハ本心の孝悌忠信いづれにても通ずる

をもつて廓に通ずることなり通の字義をよく〳〵わきまふべしさればたゞ目のあたりのことのミにして本心の通なくんば通といはれず妓の情を察するにありとはさぞかし苦界をのがれたくおもふらめと察しやるなり野夫なるものは廓にありては氣さんじにておもしろかるべしなどゝおもふものなり酒宴にとゞまるにありといふこゝろはこゝろのミだれざるやう酒の席にとゞまるなり　知止而后有定定而后能遊　しかとゝゞまればます〳〵定るといふは物の理なりこゝろをよく定めてあそぶはまことのたのしみなり　言有萬八花有仕掛知所線香則近通矣　万八は千三ツと同じ義にて万の中にてたゞ八ツがまことなりといふことなり　仕掛ありとは相場の仕掛とおなじ義にて線香は本たちした四本となすが仕掛なりその線香の仕掛あることまでもしるは通にちかしされどなか〳〵眞の通にてはなし　野夫之欲通廓中者先費其財費其財者亂其家亂其家者亂其身亂其身者亂其心亂其心者必實其意實其意者必望血望血在至事　人にされるを通とこゝろへて金銀を費すものはその癖ひきおよぼして家をみだし身を亂しさて心をミだすはへかたらず妓のいふことをまことにするなりまとゝなす中にも愚智なこゝろよりしてまたあやぶミ指を切れかしなどゝかならず野夫な望をなすこれ血をのぞむなりついには母親がこふの妹がそふのとさまざまのことといひいだされてそれもしやうちこれも承知之介といはねばならぬやうに持こまるゝなり恐るべしおそるべし　事至而后財盡財盡而后意無實意無實而后始悔雖悔怨無詮方　金銀なくなりてはそこに居るかともいはずすこしも實はなきものなり始めてゆめさめて元なきを知りてくやミうらむともせんかたなしある人のうたに「こひ〳〵といふ

ハ實の戀ならず金持てこひといふハけいせい

自太夫以至於辻君皆是皆以有實爲表

六十九文目の太夫より三十二文の辻君まで勤といふ身に二ツはなし實を表になすハつとめのならひとぞまた古人の曰太夫より辻君までを買ざれば男子たるものにあらずと是妓を見て僞ざるハ勇でなきなりされば買ふべきものなれども消るゝべからず

眞實無而添遂者否矣其所實者實而其所虛者虛未之有也

實とおもふか皆いつハりにしていつハりと見せかけ臆に眞實有るたり眞實ハ客と名の付者になし間夫につくす眞實なりゆへに客と添ひとげる妓はあらじ

右一章蓋好叓之言而古駒齋述之此奧十章則大通之意而粋人記之也舊本頗有謬今因酒酊子所定而更考郭中之趣別爲次第如左

上の夫客之道といふよりこの未之有也といふまでを右一章といふなり蓋らくハ好叓の者の言にして古駒齋といへる御方が述べしるしたるなりさて是より下この奥の十章とて十ケ条あるハ定めて大通なる者のこゝろを粋の御方が記せしなり古く傳へりし書ゆへまゝあやまりありしをいま幸ひに酒酊子のぎんミありしにより本付て殊にあらたに廓中のおもむきをかんがへ章を別ちて十ケ条の次第をバ左の如くになしぬと也是酒氣子の文也

誥誥曰克明實

誥ハ告ると同じから〳〵かやら〳〵と誥ていふなり是ハ妓の間夫につげていふにハわたしが是程眞實つくしておもふものかならず不了簡なことばししておくれな

へなどゝ告るなり　太鼓曰顧是天之明　時の太鼓を聞につけもはや夜明に間もあらじとはや別れをかへりみて袖のなみだをしぼるとぞ是も身あがりして間夫にあふ夜のことなり諺に曰あけのからすと鐘つく男に蘘荷を食して時わすれさしわかれのなひやうにとハこれをいふなり　抱附曰如此美男有唐土乎　別るゝ今に抱ついてこんな男が唐にもあろかとゆかりの月の文句まじり苦界の中のたのしみなり愚佛先生が詩に曰く更に一服を勧めて復抱腠とこのこゝろなり　皆自眞實也　右の三ケ条ともみな間夫への眞實なりとぞ

右第一章記明眞實　右眞實ハ間夫にあることをのべんとてむかしの通人この三ツの語を引しなりこれを十章のうち第一章とす

方燈銘曰苟日新日日新千客萬來　軒あんどうの書付ハ千客万來の四字をもつてす是はんじやうをねがふなりとぞ　禮狀曰亦賴入來　禮狀のおハりにハなほゆふかた御連中様がたおんさそひ御こしさまねんじ上まいらせ候とたゞひき入るゝ事を専一となす　使曰君雖難面其思維切　通ふことをしばらく打絶てあればふみをもちて牽頭など使となりて來りあなたハつれなくしたまふともこれほどまでにおもふて居なさるもの少しハ不便とおぼしめせなどゝそやされまた深くはたくものとぞこの心を口車にのせられてどこまで行のじやへといふ　是故野夫無所不乘其言　かやうのわけゆへ野夫なる者ハその口車に乗となり口車の説ハ曉鐘成がアカンサンサイ圖繪に委し

右第二章記引客

歌曰凡千里惟人所近
思て通へば千里が一里あハずもどればまた千里といふこゝろなり此段ハ下の戀こがるゝ叓をいへんためにいふなり
初花曰庭前黄蝶宿于枝上於宿知其有雌雄可以人而不如蝶乎
これ箱根靈現いざりの仇討九ツ目の詞なりこの詞を引て戀にせつなることをいふ
古諺曰文武久茶釜噫泡吹毛化爲人妻止於氣隨爲人妾止於驕侈爲奉公人則止於間夫與客人接則止於無心
この古諺ハ今おたま杓子が蛙となるといふに同じ氏なふて玉のこしといふことなり扱客に根びきしられて玉のこしにのるといへども眞實のこゝろなきゆへ或ひハ氣隨或ひハおごりにとゞまりて終に身を治めずまた勤をなし間夫にこゝろを止るをいふ是妓女の情なり
時曰見彼川邊綠柳猗猗有美藝子如梅如櫻如竹如藤眉兮目兮鼻兮口兮有美藝子實不可忘兮如梅如櫻者道也如竹如藤者道風也眉兮目兮鼻兮口兮者顏能具也有美藝子實不可忘兮者道一目見者之不能忘也
其角の句に〽傾城の賢なるハこの柳哉とありて川のほとりの柳かげなどにて女郎藝子を見るときハひとしほうつくしく見ゆるものなりさらぬだに顔といひ風俗といひうつくしき藝子の柳かげに有るを一ト目見るものわするゝことゝならずとかや時曰ふと時にのぞんでかんじいひし事なり猗々ハ柳のうるハしきいろなり

時日嗚呼其姿不レ忘太夫賢ニ其賢一而品ニ其品一藝ニ子愛ニ其愛一而風ニ其風一此以沒レ世不レ忘也

太夫ハ古の姿侚ありて優にやさしく上品をことゝす藝子ハこぼるゝ見ばかりの愛をもちて當世風をことゝすさやうのたくみなるすがたゆへ見るものゝ生涯わすれずとこれも野夫なる者のこゝろを察していふなるべくそれ考へたまへ久米の仙人ハ野夫の親玉でありいんす

右第三章記ニ人情與風俗一

姉日表レ實吾猶レ人必也使レ勿レ實乎無レ腹者不レ得レ盡ニ其情一大乱ニ客心一此謂ニ身之勤一

姉女郎が妹女郎に告ていふにハいやな御客に實をおもてにつとむる㕝我も他の女郎衆もかハることとなしこれをつとめといふ又もし御客へ眞實あらば親方さんの立ち所なしゆへに内心にハ實なからしめんが廓のならひなりされば腹なきものハそのいつハりの情をつくされずよく〳〵これを心にいれおほひに御客のこゝろをミださしむるを身のつとめなりきといふへうき草や月を根して風にさく

右第四章記ニ姉傳レ妹

此謂ニ身之勤一此謂ニ客之氣取一也

この段ハ右にいへる錯簡にて第五章の文をうしなへたるなり故に酒氣此下へ燒酎のちうを加へたまふ

右第五章蓋記レ爲レ勤之義ニ而今亡矣

この段ハ只右第五章とばかりあり盖といふよりハ酒氣の醉暈の詞なりはかるにこの章ハ勤をなすの義を記せるなりしかれども今ハこの文うせてなしとぞ　間嘗竊取酒酊先子之意以補之曰　これ酒氣子の詞なり吾かねてより間〳〵に酒酊子の工夫ありしこゝろもちを取てかやうにもあらんかとすいしつゞりて見たまいしなり

取客在成物欲取吾之望在無物而窮吾身也　吾氣に叶ひし男ハ決して乏しく金錢にともしき男にかゝれバ吾身困窮して店に借金出來ついに心中かけおちとなるものなりしかあれば客にかゝるハ男ハ悪くとも金錢に富て物になるにありとなり男がよふて金持でといふ代呂物ハはなはだまれなり古人いへることあり天ニ物を下さずと宜かな

蓋苦界中莫不有樂而爲所責身莫不有年惟於年有未盡故其望有不叶也　苦界の中とハいひながらたのしみなくてハつとまらずされども十年二十年と年あるゆへ我貞實をつくし居る間夫に添ふともならずついにそのおもひもかなへざることあり或が狂哥に〳〵御たがひにつとめの身なり達磨さん九年ハなんじやわたしや十年

大牽親方始教必使奉公人即凡大家之客莫不因其姿爲惚之氣而益盛之以求至乎身請　富貴客が我すがたにほれたる氣にもとづいてます〳〵實ありげにもてなし客の氣をさかんにみだし身うけをなすやうに求めしむるなりこれ親かたの始のをしへなり

至於爲勤之久而一旦豁然年明焉則身體自由無不儘而吾

心之願無不成矣此謂年至此謂年明也　豁然と年あくときハわが身わが身のまゝならざる事なくねがひしこともことゞく成就すこれをたのしミにらき川竹のながれをわたれとこれも親方のをしへなり　所謂爲表實者毋出虚於面也如好惡臭如惡好色此之謂爲勤故通人必愼溺也　あしき臭ハたれしもきらひにくむものたれどそも時によりてハ好がごとく好くしき男ハたれしもおもふものなれどそも時によりてハきらひにくむがごとくすこしもおもてにいつハりの色をいだすことなく客のこゝろにかなふがつとめといふなり通人ハ其食言が妓女の業なることを通しわきまふゆへかならずおぼるゝ事ハつゝしみせざるなり　妓女寸間逢間夫無不憚見客人厭然揜其間夫而僞之妓之親客如見其肺肝然則何實矣此謂無實於中有實於外故通人必愼溺也　親方の手前をはゞかりながらわづかの間をうかゞひ間夫にあふさて客のかほをミてハその間夫のことをおもひ厭然客をいつハる妓のさやうにいつハることハまことに其肺の臓肝の臓へもはいりしかとおもふ程なりそれなればなんの實あらんやおもひ中になけれども色ほかにあらハるとハこれをいふなり　親父曰親類所言世間所指其誠乎　廓へおぼるゝもの親類でハはやく勘當せずば妓女のいつハりにのりて親の首に縄をかくるもとなりといはれ世間でハまだゆめのさめざるかなどゝ指さゝれどもその親ハ子ゆへの暗にまよふものから親るいのいふ勘當もせず世間で指さゝれどもさほどにもおもハずうち捨て置ものなりされば次第につのりて家をほろぼす

にいたる親もはじめて勘當せんとおもへどもとおくれたるを後悔すべし　螢焦身郭公吐血心苦體胖故通人必察其情。こハ妓女をほたるとほとゝぎすとにたとへたるなり内心ハくるしきことあれどもなり　ハりふるまひハゆたかなりゆへに通人ハそのいつハりの情を察し知りてつゝしむなり

右第六章記無實

人崩身在所奪其心自有所分別則不得其所奪有所推察則不得其所奪。身を崩すハそのこゝろをうばハるゝゆへなり自ら廓ハ虚の城郭といふことを分別すればうばハれずまたそを推て知り察して知ればうばハれずとなり　心不在焉目而不視聞不聽食而不知其味。こゝろをうばハれ我腹の内にこゝろあらざればたとへ身をほろぼすこと目のあたりぶらつけども視へず親の異見をたびく聞とも聽とることかなハず食するとも味ひをおぼへずとなり　此謂崩身在所奪其心。讀にてよくきこゆ古人の句に「奪ハれし心をかへせ春の風

右第七章記可愼所奪心

所謂崩其身在所奪其心者之其所可愛而惑焉之其所首尺而惑焉

コノ間ノ文磨メツシレリヤク或シ有八略ス

推而知其虚察而知其情者天下鮮矣　その可愛と思ふこゝろよりまよひまた首尺にほれこい

るより惑ふてこゝろをうばゝるゝとなりこの下の文字磨滅しあればこれをかくこの段ハをしてそのいつハり有るを知り察してその眞實なきを知る通人ハ世にすくなしと云なり

古語有之 曰人莫知我顔之惡莫知我屁之臭

ふるきことばにもいふことあり人おのれが顔のみにくきを知らずよしとおもふものなり又おのれが屁ハくさきとおもハざるものなりこれミな推て知ることなく察して知るときなりいとはづかしきことにこそ

此謂自不察不可以至通人

右第八章記推慮察情

所謂察情必勿惑者其身惑而能知情者無之故通人不爲惑而推情於鄽孝者所以事親也弟者所以事長也推者所以接妓也

妓女の情を察するハかならず惑ふことなかれとむかしよりいへる事ありその身まよへばおぼれてその情を知る者なしゆへに通人ハまよハずしてその情を推し知るなり孝ハ親につかふミちなり弟ハ老人につかふ道なり推ハ妓女に接るミちなり推粋聲相通じてよく推するを粋と人と尊む

近松子曰如鷄卵之角心誠察之雖遊無溺矣未有遼漠之杉立與妓女之眞實也

近松子ハ近松門左衛門也傾城の眞實ハ鷄卵の三角なるがごとくなんぞあることあらんやといえりされば妓女の眞實ハいざりの杉立と一つにてあることにあらずよし有るともとんとはじまらぬものなり此こゝろを察し知るときハ鄽にあそぶといへども心をうばゝれおぼるゝことなし

一兩金一刻費之一貫

錢一刻遣之一升酒一刻飲之其氣如此此謂一婦破家一人潰家　これハ妓女を受け出して妻となすにそのとりしまりなふして一婦人よりその家やぶるゝことをいふ　椀久靡松山以通而彼從之藤伊靡夕霧以推而彼從之費其財無其通妓女不從是故通人有諸己而后與妓接無諸己而后與妓遊所藏乎身不通而能靡妓者未之有也　妓女をなびかすハ通と推となり金銀にてハ靡くものならずと扨己に有てといふハ通が有なり己に無ふしてとハいやみなきなり註者が曰こゝにいへる通と推とハ眞の通や推にあらずよしわきまふべきことなりその故ハ椀久藤伊が身のはてを見るべしことぐく書を信ずるハ書なきにしかずとかや　故靡妓在得其通　よみにてきこゆべし註者の曰くかへすぐも妓女をなびかすのゝか通や推とこゝろ得べからすこゝろ得ちがへすれば先にいへる豪所酒の通となるべし　酒曰足之浪浪顏之赧赧藝子于送宜其忘八　宜其忘八而后可以取入客人　酒に曰くハ酒の席にいふことなり足の浪ゝたるハよろぐするなり顏の赧々たるハあかくなりたるなりこれまでハ客のいふことを引ていふなり扨藝子こゝにおくるといふより下ハ藝子の心得をいふまづ御太鼓の氣どりをなしてのち御客の氣にとり入るべしとぞ御太鼓への氣どりあしければ客にとり入るとかたし　酒曰宜七宜二宜三宜九而后可以薦吾郎　このだんハ藝子拳をうちて客に酒をすゝむるをいふ七によろしく二によろしくハ拳にかつをいふなり　酒曰其間不致正此拳不勝其拳足以薦而后客亦受之

也 その間いたさずとハ右の拳をうち客かたず酒一ツをひきうけて扨その間をなせよとあれどもその間ハいたさずといふなりまた拳の上へといふをこの拳を正すといふまた客かたざるをすゝむるにたれりといふなりこれミな興に乗じて酒をすゝむるなり

此謂薦酒在乗其興

右第九章記所以接妓與妓之事

所謂在通郭中者客妓妓而妓不偽客吾吾而妓不欺是以通人有大道之道也

妓女ハ親のためまたハ兄弟のためにて苦界をつとむるといふそのもとをよく通じ妓ハ妓の道をおこなハねバならず吾ハ吾のミちをおこなハねばならぬといふ事をよく／＼辨ふときハあざむかるゝことなし

所父母之悪勿以接妓所兄弟之悪勿以接妓所朋友之悪勿以接妓此之謂大通之道

父母兄弟朋友のために悪まるゝこゝろを持て妓にまじハるときハ通といはれず父母兄弟朋友にもよく叶ふところのこゝろにて妓にまじハるが眞の通なりミぎのごとく何れへも道ある事有ゆへ大通のミちといふこの書をよむ者よく／＼これを辨ふべし

時曰捻梅

鶴菱笄之紋妓之所好好之妓之所悪悪之此之謂當時風俗

これハ當時の風俗を識るなり町かたにて廓の風を見ならふハ見にくきものなり町ハ町の風俗がよし廓ハ廓の風俗こそよけれとなりれば梅つるびし笄の紋とハ妓の好むをいはんためなり時に曰ハ誹前に見へたり誹

諧の發句に「まつハ松で有こそよけれ春の山」時日節季彼難澁維胸蠢々遺繰思案唯當方萃接妓者不可以不愼過則爲雜炊之炊矣 世に野夫なるもの節季にいたりて金につまるはまゝあることなり是といふも我ハ粋じやわしハ粋じやと已惚しはまるなれバ其の鴨川のみづ雜炊の炊となるなりつゝしまずんバ有べからず 古人曰良兼之未亡師直克遊 由良之介が師直を於廓儀監予彼忠義不忘道得通則得志失通則失志 詩ざるうちハ一力に遊んでその計をめぐらすこれ君臣の道によく通じさて廓に通じたるなり通をうればこゝろざしも得べく通をうしなへば志もうしなふべく世の人よろしく由良之介を鑑みて手本とすべしこのゆへに淨るりにハ假名手本忠臣藏と題す 是故通人必脩乎通有通此有推有推此有察有察此有情有情此有色 是謂ゆへ通人ハかならず通を身に脩む通あるゆへ推あるなりこれよりしだひに引およぼして察情色とそなへるなり 通者本也色者末也外本內末爲妓所奪 通の本と色の末と轉倒するゆへ妓のために心を奪るゝなり 故本色則惡氣增本通則惡氣去 よみにてきこゆべし 言惡氣而欲出者亦惡氣而還風惡氣而欲慰者亦惡氣而舞 出んと欲するハ茶屋をいでゝ我家へかへらんと欲するなりこれ實に

かへらんとおもふにあらずと〻めさすべきいや〻なり亦いやみにしてかへるといふハ茶屋の二階より下りかけてもまたもとの坐へたちかへるなり大小つかみざし〻どもかへるになぜで〻とめないといふ田舎大臣也さて風いやみなるハ田舎大臣にハあらざれ共虱しぼりの手ぬぐひのはしに紅をつけて持つ輩なりこのてあひハけしていやみに舞ふものなり

親方曰惟命不于常道流行則止之不流行則換之矣

あまた子どもをか〻ゆれどもはやるとはやらぬハこれ天運なりさだまりたることハなしとぞさればはやらざるときハしかへにいだすとなり

請狀曰諸親類兄弟者不及言與言名附夫及先主人拆申致奉公之妨者決無之

これハ年季證文の文言なり仕きせの義ハ夏冬とも相應のもの一ツづ〻下され候約束にてござ候など〻書つらねたる水茎にしづむその身ハいとおもき罪より金につまりたる親のためとハいひながらあハれなりけることぞかし〽我をつせ廓をいだせいかのぼり

氣證曰無以餘人爲夫以吾郎爲夫

氣證にハ他の男を決して夫といたすまじく二世かけあなたと夫婦に候など〻油ながすが妓女のならひなり註者曰くこの氣證の叓によりいとおもしろき趣向のおとしばなしあり因によりてこ〻に出さんとおもへども程なく新作はなしを出板せんと欲せバそにゆづりてこ〻にいださず

客來曰若有御心變斷兮無御出今日久久焉御出何風之吹見客之面若已有之客之野夫內心笑之不啻若自其口出實能入之以托我之娘唯願有利焉

客來に曰くハ客の來りしときにいふなりこのあいだハおとふ〳〵しもし御こ〻ろのかハりし叓やあらんとおもひしにけふし久々にて御こしハどちら風が吹しぞとなり扨已もこれあ

るが若しとハ惚てゐる氣のあるがごとしなり客のや夫なるハ内心これをわらへどもそを面にあらハさずしてたゞ口でばかりほめそやすごとくならず實によく客の氣にかなふ様になしもつて我娘のせハなどをたのミたゞ金のつるをえんとねがふなり

故客無推溺以亡身亦曰殆哉

それゆへに客推し知る事なくばおぼるゝなりされどもうハべの推にてハ間にあハず眞のすいにてなくバあやういかなとなり

唯通人父父母母妓妓此謂通人能愛妓能悪妓

まへにもいへるごとく父母に事ふミちによく通じ扨妓にまじハる道によく通じいづれにてもよく通ずるが眞の通人とぞされば通人妓をあいし妓をにくむといふ

見馬而不能騎騎而不能鞭怖也見妓而不能察察而不能遠溺也

馬を見て騎ることのできざるハ是怖なりよし騎れども鞭とのできざるハやはり怖れバ也妓を見て其僞の情を察する事できざるハこれ溺也よし察すれども遠ざかり居る事のできざるハやはりおぼれて居ればなりたゞねがハくハ妓をして馬の如くおそるゝ事を。古人奕をもつて馬とかへしことあれども妓をして馬にかへおそれよとハ當世〳〵しかれどもかゝハ是牛のごとしといへる言ありこハりん氣の角を立るゆへなり

好心之所悪悪心之所好是謂客之性能入客之氣

これまへにいへる悪臭を好が如く好色をにくむがごとしといふとおなじ義なり〽さらぬだにくもるかゞみに身をうつし客にいつハりいふハうらハ女

是故勤猶青柳之靡風也

柳ハたゞ風にしたがふものなりつとめの身も柳とおなじ事にてわが意にハ叶ハずともたゞ客のこゝろにしたがふをいふ

聚財無他走者寡病者寡勤者

衆則財多聚矣　親方ハかゝへの奉公人かけ落などするものすくなく病ものすくなくきげんよく勤る
ものおほきときハ繁昌すべししかれどもよくつとむるものハかならず病むものなり
病ずしてよくうるものハかならず足ばやにてまゝかけ落　市中之娘媿者以財發身廓
てゝするものなり親方のうちちらこれにて察すへし
中之娘異之雖媿者以身發財　町の娘の媿ハ持参金をたのんで嫁し身をおさむ廓
の娘ハみにくければ媿きにつけ身をもつて金銭を得
べし柳樽へ、徒山寺さか　未有天狗之鼻低也未有福助之目細也未有中
さまによむ嫁をとり
居之爪短也　中居の爪の長ハなほ天狗の鼻の高く福介の目の圓きが如く極りきつたものなし註者
が曰く因によつておとし噺を一ツまけますくだ〳〵しきハ免したまへあるとき藝子ニ
三人よりあひて口〳〵にいふにハ衣服の色ハむらさきがよい淺黄がよい紋ハむすび柏のことじやたちばな
が好じやなど〳〵とり〳〵にいふところへ中居一人來りければ藝子中居へむけコレお糸さんおまへ色ハ何が
すき紋ハ何が好じやいととへば中居ぬからぬ顔して紋ハ桐色ハ黄なが好き
なりといひけるとぞ嗚呼この仲居定めて顏もいびつなりをよしといわん　藩隨院長兵衞曰
阿波坐鳥者難波瀉藪鶯者京育尋附葭原雀於羽翼而江戸花
川戸之藩隨院長兵衞而御出備影膳而待居此謂男不以色爲
色以通爲色　これハ藩隨院の長兵衞が平井權八へいひし詞なりこの長兵衞などハいろを　遊廓
もつて色とせず男を立る義によく通じたる通をもつて色となすなり
而以惡風者必自野夫使野夫遊廓蓄害並至雖有通人亦無如

之何矣故唯男不以色爲色可以通爲色也　野夫なるものふかく廓におぼれ難澁となりしうへはいかなる通人ありしともせんすべなしつゝしまずんばあるべからずゆへに男子たるものは色をもつていろとし野夫となることなかれ孝悌忠信仁義禮智何にてもよくとふる通をもつていろとし扨廓にあそぶべきなり是を眞の通人といふ也

右第十章記更穿市中與廓中之事以通爲色

凡十章前四章如床盃後六章如三三九度盃其第五章乃可愼之要第六章乃可恐之本在初客尤可禄意之急讀者不可爲打嗳也

床盃のごとしとは婚禮の床さかづきの如しとなりひつつかんでかんじんのところを記したるをいふこゝろなり三三九度の盃はかさね〳〵細に記したるこゝろなり

ねがはくは讀むもの文のくだ〳〵しきを倦て打嗳たなすべからずと也

大客畢　千秋萬歳樂

跋

京雀君姓花川戸字助平髪俠客風亦髻脚蛇頭其先江戸人乃助六之後裔也性質陽而非陽陰而非陰洒雖不嗜常如酔湊雖不好亦胸有一物自少愛狹斜及長能探其幽嘗自欲見潜於妓女之陰溝龍之形授這大客一巻於神可謂奇矣今公之也其意無他蓋在欲使世之煙花的至大通鳴呼君能弘通哉

浮世繪師　菱川清春記

天保三年壬辰五月成刻

京　都　田中屋専助
大　阪　伏見屋嘉兵衞
名古屋　永樂屋東四郎
江　戸　和泉屋庄次郎

自序

諺に華は櫻木人はもの丶ふといえどさくらの嬰〱たる風情を君契情の艶〱たる容に見しは五老井か百花の賦のこにしてかりそめの筆の蹟もなしされば人情しれるひとなき世にやしかのこならす一夜かり寐の戯れ女などひたすらにいやしむるやからすくなからす江口の白女は和歌を詠じてありがたき勅選にあひ寶積の傀儡は菩薩と現しとなむ其外高位高官におもはれてはかたじけなき圓木をならぶるもすくなからすまして勤の身に實なしと嘲る昔人有ば虚なしとおもふ野暮何苦界の淺深をしらんいざ馬のり入てこゝろ見るへしと此うら人の其ひとり

とらの初冬　　盛田をしほしかいふ

竊潛妻　巻の上

盛田小塩著

哥妓情

大星よしかねが金言に噓から出た誠でなければ根がとげぬとハ宜なるかな初めハとなりの の二軒つゞきでちよつと見初たが連理ハ實生端の寮ハ參會にちよんの間の拔がけ線香三本のはつげんざんにモシナどふぞ近日噓つきなゐとちよつと脊中たゝかれしが病つき首筋元からぞつとせし戀のほつねつ身をこがす螢ほどの小玉もめつたにうかさぬ爪長が正月三日おつとせうち初午の變改おつとうけこミ伊勢參りのむほんおつとおもしろし此祭から引て出る妹ぶんの約束迄何一ッいやといハぬ氣のよいお方じやといハれたが大和橋の夕闇千鳥かとうたがふ按广の笛に行あたる向ふ見ずの周章遣ひに吞前の〆高胸おどろかす本能寺の鐘のこゑ諸行無常と手形こしらへ是生滅法とはしり出じ時限の飛脚遊びにせつかく來た所がお返事でござりますと聞てがつくりしながらもてうどよい今夜ハ木屋町へ姉貴の見舞にいた重箱じやとまけおし

んでうおく〳〵して居るうちもモウよい返事でもあろふかときせるを筒へ入ては出し〳〵しているをマアお火燵へと小ざしきに塗櫓のおきごたつ秩父うらの更紗蒲團もあとからはげる花車が容言いつたいァノ子はおまへさんによつぽど來ていますぞへマア當時うつくしうはありよう賣はする爪氣はなししやうならァノ子じやどふぞなされいナアとあいた口へもちつけた花車がすゝめにのりが來てさしむかひになつてまくらがけのさうだんそれさへ御承知ならきつとわたしがうけ合ますと伊賀守の奥方とまがきとの二役なるところそきけの大急用はまはりのはやひ花車が文体誠や女の書るくれ〳〵には白藏主もつまゝるとや終には何百兩とやら丈石風の点高見るやうな根引してひそかなる所へうゐかへきのふまでこそどりをむすびし柳の眉も秋をまたずしておりてははつ袷の袖に覆ふありしむかしこそしのばしけれとある人のうらやミし何にへくづれそめて二日牡丹のながめかなとはさもあるべき事にこそ何所やらに水際のたつすきあげ髮のかた手巻筑波染となむ江戸染の袷小袖にちいさき　の紋つけしは此頃までの全盛をかしにほはす菊枝が妓名のおもかげ隣の藏の庇間から日影さす椽さきに蒔繪の鏡だいおしなをし灘に時ばかりかゝつて鉄漿付しまひしとミへ吸がらを椽へあけながし菊コレ下女しな此椽を捨てのそふしてのちつとばかり湯をわかしてたもト勝手より下女おつかひあそばすお湯

ならわかさいでも追付おふろがわきます菊ィ、ャいのわしがつかふ湯じやなひわいのおとの浴水の湯じやわいの下女おとの浴水ならお風呂のあとがようござりませう菊ほんにそうせうかいの狆ワン〳〵ト勝手へ鳴て行菊しなまた犬がはゐつたそふなぞや下女ィ、ェ犬じやござりませんどなたやら見へましたト門口の猿戸明て來りしハ此路次の表に二間間口の住居もきれいに美聲丹の看板をすへ表家業のくすりの功能ハおぼつかなくも內業にハ遠近の大盡たちを呼子鳥の傳ハ粹學のうゐぞかしおよそ洛中に古今三人にひとりと聞へし末社の筆頭近き頃より或具州の秘藏をあづかりいる紀の國や作治が女房おつじとてとしのころハ谷汲から六七十里も行過し上州上田の袷に黑繻子の帶薄げしやうに唇の紅こまやかなるハさすが粹家の女房風俗うらからすぐに門口の水たまりに小づま引あげあしをつま立辻おしなどん久ミぞがつまつたかして水がこすぞへトいゝながら內に入る狆尾をふつてざれかゝる辻おとへおまい今わしをしかりたいトあたまをなでながら勝手よりおくをさしのぞき辻モシ菊さん店からせきにさんじたトちよつとしやれる菊おつさんどこへいきじや辻あれミんかけふハ內かたのやくそくじやがナア菊何でいナア辻アレあれほど此ぢうからやくそくの奕まつりじやがナ菊けふがかいな辻ヲ、しんきそふじやわいな菊そふかいなヲ、はや辻それで今朝からちやつとまゝを焚てしまふて髮をなでつ

ける湯をつかふかたいていやつした事かいな菊どふりでかくべつうつくしいと思ふた辻これでもおやおの氣にいらぬじや菊ヲヽ勿體なト少しうけてたばこ付て出す辻サアこしらへんかいな菊イヤいなこんな髪しているもの辻なぜいわずじや菊何じやしらんが氣がむちやくちやしてねつから髪ゆふ氣がないわいな。きのふおなをどんが來てくれてゞあつたけれどトかんざしでうしろをかく辻ついすいてあぎやうか菊モウけふわよしにするわへおまへもやめにしんか辻どふなとおまへ次第菊嬉しいなァそんならけふわ内だてにするわへ辻何だてじやヱ菊なんなと辻何およかろふぞ菊のりがあるすもじしんか辻そりやゑゝナしかし内かたのまゝわこれしこちのまゝおまだきめにやよいが菊ヲヽはやモウたべたかヱ辻モウひるやつとすぎてある菊そふかいナ是しなおひるはてうし下女アイたゞ今しかけました菊ヤウ／＼今朝おきて鉄漿つけたばつかり此二三日ハ夏書もだいぶんかりに成てある辻勿體ない外の事とわ違ふ夏書わ毎日しい菊あとで風呂へ入てからするわへけつく出ている時分わいそがしい中でもそん事したけれどとかく引てからどふしてやら二日三日ほどづゝいつしよになるトいふがやつぱり心にくつたくがあるによつてじやわいナ辻ヲヽおかし今のおまへの身に苦があるかいナ菊おつさんのあんな事いふじやなふていな辻何が苦じやゑ菊マアおまへ此間から旦那さんのおいでんが苦じやわへ辻なんの二

日や三日おいでんといふて菊何いふてじやよう二日や三日であろうぞけふでてうど七日ほとになるわいな辻そんなかいな菊ソレ此間表の浪崎さんの所にさらへかうのあつた晩にミへたなりじやわいな辻まちやそりや十一日の晩であつたによつてトゆびを折てミて辻ほんにてうど七日になるなァ菊それミんか何でじやいなア辻何のなんであらふぞいな菊イヽヱ何でも何ぞじやわいな辻チヽまハり氣やの菊何のマアなんぞならこそ嘉キさんがとんとこまいがな辻サアとんとこんなア菊それ見何でもあやしひ辻ちよつとまちわすれて居た内が明てあるお品どんまゝの下引たらちつとの間見ていておくれ下女ハイ〳〵おとおいでかど見せてあぎやうト狆を抱てうらから表の内へゆく辻ムヽそふしておまへなんぞ聞たか菊一昨日ひがしの妹の所から状に二日つゞけて里橋さんに縄手で逢たといふておこしたわいな辻そふかいなムヽそんならまあ何氣なふ嘉キさんをよびにやつてくり出して見よう菊おつさんのいゝじや事わいなようアノ嘉キづらがくりだされうぞいな辻サアそりやおまへでれいかんけれど思ひがけなふわたしが聞たらいふまひものじやなひトいふて居る所へ下女とつかハ戻つてト女モシお辻さん今ひがしの飛脚が此手がミ持てさんじたト出すお辻ちよつとミて辻ふヽこれやこちへきたのじやなひ嘉吉さま大急用おしなどんおせわへおいていきといふておくれト女イヱ〳〵おきすてにして歸りました辻ア

イよし／＼ト下女ハ又表へ行菊おつさん何所から來た狀じやへ辻いづゝやミつとしてあるこりや茶やかいな菊茶やにも井ミつといふのハあるけれどひよつとそりや井筒やのミつが事じやあるまひかいナ辻そりや嘉キさんの何ぞかいな菊何のマア嘉キさんの何でもなひけれどミつゑといふハいつやらから旦那さんがいつしによんでじやといなア辻そふかいなそんならやつぱり其ミつ江かいナ菊おふかたそふに違ひなひ何いふて來た見たいものじやなアおつさん辻まち／＼

ト土瓶の蓋を取て封じめをあたゝめかんざしの耳かきにて封しをはなし開き見るに

きのふハ御出下されゆよしおりふしまちがい御めもじなし申さず御のもじに存ら／＼扨ハ此ほど御たのミ申上ゆとふりぜひ／＼ハ菊ハやめに御なし下されゆやうたのミ上ら／＼

トよみさしちよつと思案して辻是ミんかおかしい文句なア菊ちよつと見せてかしトとつて

ぜひ／＼菊ハ止に御なし下されゆ様願上ら／＼

菊ほんにこりやおかしい文句じやなアト又次を見て

なを其事に付御相談もゆ得バ急／＼御出下されたくまち入ら／＼

菊こりや一向あやしいおつさんおまへどふ思ひじや辻ほんにこりやあやしいなア菊それ見何でもミつ江が出來たのにちがひハなひきくをやめにしてくれいハきつと私が事じやそれで嘉キさ

んい所へ頼できたに違ひなひ皆嘉キさんのせわとミへるきつい悪玉なア辻いよ〳〵そふならいつかふ濟ぬなァ菊おつさんどふせう辻マアこちのとだんかうして見菊作さんハへ辻向ひの道具やにかしらん菊ちよつとよびにやつておくれんか辻おしなどんでもだいじないなトいふている所へ門口に足音する菊作さんかいな辻何のマアこちのハ樒下駄じやあつたト門口から小間物や近武でござります菊近武さん此間の櫛もつていんでおくれ小間ハイ〳〵ト内へはゐる菊枝手簞笥より箱入の櫛を出すお辻とりつぐ小間物やうけとり菊それマアおかへすハへ小間お氣に入ませぬかナ菊イヽエそふじやないけれど旦那がまだミへすじやによつてしれんハへ小間へエそれハさやうならマァお見せなさるまでだいじござりませんのに菊そふじやけれどマア持ていんでおくれ旦那がミへたらかりにやるハへ小間直段の所ハどふとも致します又下地の櫛もずいぶん此方へおもらひ申ますならふ事なら古いのを下に遣ハされまして新しいのとおかへなされますがおとくでござります菊ヲヽ氣がゝりおつさんアレ聞んか辻そふじやなア此節下地のをよしにしてあたらしいのと替る事ハきん句じや小間それでもつむりの道具と灰吹ハあたらしいのがようござります菊あれやつぱり大きらひト小ごゑにて舌つゞミうつ小間さやうならどふぞおたのミ申ます菊アイ〳〵おとゝひおいでト小聲にて塩ばなうつまねをする小間物や門口へ出て小間エ

・あぶなひ溝板じや仕かへるとよびと出て行菊氣にかゝると思ふとやつぱりひつかう大きらひ辻かわひさふにあつちハ何にもしりもせんものト又足音する菊是かいな辻イヽヱ是もせきだの音じや菊しんきはやう戻つたがよひのに辻こちのおやぢも待るゝ時節があるしやト門口ぐわらり茶ャ村井でござります菊アイまあよいハへ茶此間からとんと御用がござりませぬ菊アイ旦那がミへすじやによつてそれでじやわいな菊へヱそれハ此頃新茶を挽しますお頼ミ申ます菊アレ聞んかいつそ氣にかゝるナ辻何がいなア菊新茶をひかすとひなア辻ほんになア菊どんな事聞ふもしれぬはやういなしておくれ辻村井さんこんどの廻りによつておくれ茶ハイ〳〵ト門口へ出て茶南無さん此雪踏もおいとまじやきれかゝつてけつかると聞きへも氣にかゝる折から戻るきの國や作次門口はいるやはいらぬから作ニおつじ葵まつりハ一年に一度じやまだしるまひ辻そふかいなトお辻もしやれてうける作若行なら箒とちり取持て行がよい辻そこ所かいな最ぜんから菊さんがたいてい待てじや事かいなァ作ハアそれハ嘸御ちそうであらふト中仕切の柱にもたれかゝる菊作さんたんと咄しがあるマア下にいひ作跡の月の晦日の晩にかぎつて中へいた覺へハごんせぬト中腰になる菊おもしろそふにそんなきげんじやないわひな作どんな機嫌じやいな辻何のいなァ此間から里橋さんハとんとミへずそれにまた嘉キさんもどふいふものかこんじや

ないかいなそこでァノお子もおかしう思ふてじや矢先へ河東のひきやくが持て來た此狀嘉吉さま大急川井ミつとしてあるによつて作開封したか辻サア明てミた所がナ作節句前の殘り早ミたのミ入ゆであらふ辻イヽヱ此間賴ミあげゆ通りぜひ〳〵菊ハやめに御なし下されゆやうと書てあるによつて何でもこりやてつきり嘉キさんが惡玉で出來たいづゝやのミつ江とやらの所から來た狀じやといふてたいていの事かいな作それハおかしゐ狀じやドレトきせるをくハへながら狀を取上見て作ハヽアよめたトいふ拍子にくハへたきせるがはつたり作ホイなむさんト膝へ落たる吹がらをはらひ落す菊作さんおまへどふよめたへ作どふよめたか聟とつたかしらぬがこりやおふどじや菊サア何でもつゐした事じやなひ作和田荻野でもいけぬわい辻菊マアどふいふものじやいなア作どふいふものといふたら今の吹がらで此通りじやトひざの燒穴をいらふて見せる菊チヽいやおふどとハ其事かいな作是ほとおふどやつたもの菊わしや又こちらの事かと思ふてびつくりしたハひなア辻サイナア私迄びつくりさしてから是其やうにいらいないらやいらふほどおふきうなるわいな作いかさまおふきうなると貴さまのやつかいじやの辻しれた事いナイ貴顏でいひふと心付思ハずふつと吹出す菊おつさん何わらひじやぞいな辻何のいナァノお人のいふてじや事をうつかり相手になつてあほらしいホヽヽヽヽ菊わしやいつそ氣が濟ぬ作さん

どふせういナ 作 ハテどふといふたら此狀ハ大間違ひじや 菊 どふして 作 間違ひといふハぜひ〳〵菊をやめにしてくれと書てあるハおまへの事じやないこりや嘉吉が商賣の注文じや 菊 おうもんといいなア 作 嘉吉ハ悉皆やじやによつて東で染物うけとつた其注文の菊をやめにしてくれじや此菊ハ大かたもやうの事であろ 菊 エヽそふかい 作 ソレかへす書に若いよ〳〵菊に致しゆハヾ光琳に致し度ゆナント 菊 ほんになアおつさんミんか 辻 ヲヽおかしいやいナ 菊 あんまりあほらしい 作 きついあハてナ 辻 しかし是で落付たであろ 作 いわひどに一てうしありそふな物じや ト いひつゝ蠅いらずをうかゞひ 作 おふかたしけであろ ト 見て 作 大坂ミづからに小梅。干大根の五分切のごぼいづけ投焼豆腐椎たけにくハへのにしめちよつぼりこゝらにこんにやくの白あゑハヽアまあしあげにハ御ていねいじや 菊 作さんいやへぎゑんのわるい 作 おつと待たり生ぶしに筍子何じやにしんのこぶまきおまへ猫と心安ひそふな 菊 いやいなそりやおとのたべものじやわいナ 作 狆こそめいわくなれ 菊 作さん大きらひ 辻 ほんにのり出しんかすもじせう 菊 さかな戸棚の引出しあけ 辻 よし〳〵 ト 引出しよりのりを出して 辻 ほんにまだ飯たべずじやなア 菊 今の騷動で忘れて居たついたべてしまうハへ ト 夫婦ハうらからすぐに内に入 辻 おしなどん御苦勞さん菊さんが飯たべるといふてじや早ふいんであげ 下女 ハイ〳〵 辻 袋戸棚より松の友三ッ四ッ出し 辻 是おとぼん

にやつておくれ下女おかたじけなふござります狆わン〳〵下女ヲヽ行義わる内でたべト裏より出て行辻おまへもかゝり合じや玉子焼ておくれ作口につかれるゝ身ぞつらやトいひつゝ火鉢の火をひろげ玉子を焼にかゝる辻うどかほしいけれど味付にやならずほんにまゝがさめにやよいがト櫃の蓋をとつて見て辻よし〳〵まだあたゝかひト二人ごて〳〵鮓つけている所へ表から息を切て悉皆や嘉吉あがり口に手をつき嘉吉御注進〳〵辻嘉キさんびつくりさしじや嘉びつくり所じやなひゐらひ事が出來た辻ゐらひ事とハ何じやいな嘉びつくりしいなや辻ヲヽいやわけもいわずに嘉いやもふゐらひ事じや辻ヲヽしんきはやういふてかしいなア嘉やかましういひないふにいハれぬ事じや辻いふにいハれぬとハ何じやいな嘉サアいふにいわれぬといふハナ里橋さんが坊主に成た辻エ嘉何といふにいハれぬ事であらふがナ辻ヲヽしんきちやりかいなびつくりさしてじや嘉おつさんちやりじやないほんまの事じや何と珍說であらふがナ辻嘘つき何の里橋さんが嘉ほんまに坊主に成た作ト思ふたら夢が覺たか嘉ゆめ所じやなひはしかじや〳〵辻はしかとハいな嘉ましんじやといふ事辻そふかいないつたい何でじやいナ嘉何でハ裏の先生の事が內へしれて辻嘉吉さんまちほんまの事ならうらの子が聞とわるひちいさい聲していひト嘉吉聲をひそめて嘉所が段〳〵去年から先生につかふた尻が皆われて備前の一家へあづけると內ゝ相

談がきハまつた所でかんてき先生ちらりと聞て何の十貫目や廿貫目のかねで一生田舎住居しやうよりといふて今朝ころりとやられた作ほんにそりやおふ事じや嘉さしづめ作さんハかけ付て殿御存生のうち御尊顔を拝し奉るといわにやならぬ役じや辻おもしろさふにそこ所かいな嘉我等さしづめ襖たゝいて郷右衛門殿〳〵といふ顔じや時にうらの先生何にもしるまひ辻私等さへ今聞たがはじめてじやもの嘉しかし聞たら恐悦であろ辻何でいな嘉ハテ里橋さんがア、なつたらまいつぱい出るであろ辻かわいそふにそんな氣でもあるまひ嘉なんの大てい皆それじやもの辻イヤ〳〵そんな事ハちやりにもいふてやりな嘉おつさん見い膳の上の箸じやト咄しして居るうち菊枝嘉吉が聲を聞付うら口より立聞して居る作治ちらりと見て作お辻うら口に誰やら立ているそふな一寸見やトいふにおどろきさし足にて菊枝うちへ戻る下女ハ水走仕まふている菊枝ハ居間に入る是をきつかけに六角の暮六ッの鐘ゴヲン折ふし表の浪崎にて

哥〽花も実もはらへべきよきたもとかなほんにむかしのむかしのことよわが待人ハわれをまちけん

ト弾出す此哥を聞ながら思案して居たりけるが何思ひけん硯取出し行燈のもとにて長〳〵とふみしたゝめ扨鏡臺におし直りつく〳〵と我顔をうち守り思ハずほろりとなミだぐむ

縞滑妻

哥〽おしの雄鳥にものおもひねの氷るふすまになく音もさぞなさなきだにこゝろも遠き夜半のかね

ト寺〻につきすつる鐘ゴヲン〳〵

哥〽きくもさびしきひとりねの枕にひゞくあられの音ももしやといつそせきかねておつるなミだのつらゝよりつらき命ハおしからねども戀しき人に罪深く思ハぬ事のかなしさにすてた浮すてたうき世の山かづら

ト連彈のあわれを聞に付我身かなしく髮すきあげ左に髻右に剃刀を持友白髮までもと思ひしかいも朝な夕なちすじとなでし黑髮をおもひ切て根もとよりふつつとおし切折節中仕切の襖をおしあけ辻菊さん何しいじやト聲かけられはつと斗にさしうつむくお辻ハ周章かけよつて辻おまへマアめつさふな事しいたなアトおつじが聲におどろき作次も共にかけつけ作おまへマァ何でこんな事したのじや辻お前何ぞ聞たかト夫婦せりかけ尋ねけるに菊江ハなミだの顏を上菊嘉キさんのはなし聞たによつて作里橋さんの事を菊何ぼうふがいなひわたしでも旦那がそんな身になりなさつたと聞てどふマアかうしていらるゝものでといふてそんな身になりなさつたらとても一所にハいられまひと思ふによつて作たとへ尼のすがたに成ても里橋さんとそいとける心

で辻そりやおまへしれた事其氣でなふて此やうに思ひ切た事がなるものかいナ作いよ／＼おまへ其心ならねがひの通りにしてあぎやう菊そんならわたしを作尼でハおかぬがもじを入てもとの姿に菊そふしてどふするのじやゑト此時勝手より孫千秋万歳い。おはこのたまをたてまつるト片手にてうし片手にのりずしを丼に入持て來り眞中へなをし置菊作さんこりやマアどふじやいなア作まづ此様子といふハおまへも聞ての通り里橋さんにハ中立賣の森井のむすめ御をもらふはづでいひやくそくがあつた所が去年の冬そのむすめが死れたじやそこで其後方／＼から言入ハあれど兎角里橋さんが合点せぬでマア嫁ざたハわいやりになつてあつた所が此春の親旦那の本卦ですぐに隠居のつもりなれどかんじんの嫁がきハまらぬので隠居がならぬと一家業が毎日／＼の相談里橋さんハぜひお前を内へ入たい心なれど腹ハ立テなじやがもしやお前が一ぱいする氣でいまひものでもなひのにとも／＼世話して内へ入さした時ハ私等もすまずしかし實くおまへ里橋さんゆへなら尼になつてもといふ心ならハテ里橋さんハもとより其氣わたしらもとも／＼いひ入て白むく着て盃がさせたさ來たおる里橋さんを禁足させた此狂言の作者ハ近松作ナ孫筆とりハマアわしおい辻ほんに思ひがけもなひ何所で仕組で來てやらわたしにもしらさず孫ハテ七人の子ハなすともじや辻ヲヽすかん菊作さん何にもいひませぬ是じやハヘト手

を合す作マアわるう聞ておくれぬでわしもうれしい何よりかおまへの誠がミへて里橋さんもさぞおよろこびおまへも仕合わしも世話したかいがあるといふもの是を思へば玉子の四角がないとれいれぬとばつたりきせるを落し芙雀の氣どり辻これじやら〳〵といわずと菊さんのアノつむりかどふせうぞいな作どふといふて俄にはへるものじやなしナント菊さんもいか談合じやがおまへその天窓を幸ひに親旦那と隠居さんか菊こちやいやいナト行燈のかげへかくるゝ嘉時に此やうすを聞に旦しう追付おなりであろ菊そふかいおつさん此髪どふせういナ辻ほんにどんなものじやなアトいふて居るうちしと〳〵とあやしき足音する嘉吉聞耳を立そつとうかがひ小聞にて嘉是たしかトたか〳〵ゆびを見せる辻だんなかへ作シイトおの〳〵無言になると切戸がギイ菊枝行燈をフツ

竊潜妻　巻の上　終

竊潛妻　卷の下

盛田小塩著

妓婦賛

唐土の孫敬ハ草廬を鎖して學ビ休穆ハ冠の落るをしらずして學ふぶちや伊左衛門ハ粹を學ばんとして終に旧家を出て馬町の閑居を鎖して冬編笠の赤ばりしをしらずとなん爰に東都淺草邊の秋風なる者貧を學ばんとして既に古郷を去て京師に登る。所ハ知恩院古門前に新しき格子づくり門口ハ間半の猿戸をたて竊なる住居ハ何渡世とハしら川のながれに近き秋風がわび暮し男世帶の氣さんじハ鍋の尻かゝざれバ許多の薪の費をしらず八方の燈火ハ六つより六ッ迄燈捨なればバ油ハ水のごとくに遣ひ捨る銀の冥加に月夜も闇も妓婦に打こミ頓て紙古を着斗り大方本望遂たりとハ此大三十日のむつかしさけふぞ越なん年の關と秋風ハ奥の間に二日醉のむかひ酒出入の按广に酌とらせ白身鋤燒の鴨のあぶらハいとおろかなる食追從按广旦那は强酒にきハまつたきのふからの飲つゞけにむかひざけならあつさりと湯豆腐に錦木といふ所を鴨の鋤燒とハ恐入ま

した 秋風 何さ上方の酒だから中／＼持まへい手なミが見せられ子ェどふいつても江戸で飲酒ハ七十五里の遠州灘を越たもいだから和らかさも和らかし肴も口にあつているからのめるとたしちやァ酒天童子が干鱈つかつておじぎするくらいだつケ 接ド いかさまこれより深酒なつたまりますまい 秋風 かの寺岡平右衛門が御酒でもむりにまいらずべよもお命もつゞきますまいといつたれどおれがやうに飲でハよもお命もつゞきますまいだッレ 小山しぐれじやあつい所をいかつしナ 接ド 私ハ先こくからたいぶんやりました治助さんハどふじやナ 秋風 そふサ治助一ッのま子ェカ 治助 有がとふございます今少し算用をして居ますと臺所にて帳面扣へ十露盤をおいて居る 秋風 ハテいくら十露盤おいたといつて迚もはじまら奴せつきだ打やつて置がいゝ 治助 イヤそふでもございませ奴 トやはりぱち／＼やつて居るト表から 酒や おと多ござりませう 治助 たれだナ 酒や 酒屋でござります 治助 酒やさんか段々おそくなりましたが ト半分聞ず 酒や だん／＼お掛ひがのびましてござりますどふぞ今日ハおかし下さりませ 治助 サアそれハ至極御尤だが迚も今日の事にハ 酒や テモ今日ハ大節季でござります 治助 サア大節季は承知して居るが何分困なつたよりがねエからトぐつ／＼いふて居るを秋風聞かね 秋風 治助いゝハナばんほど勘定致すといふがいゝ 治助 それじやと申まして 秋 ハテそれでいゝ晩ほど／＼ 酒や ハイさやうなら晩ほどお頼申

ます〳〵ト出て歸る治モシ旦那酒屋も彼是二節季またしたから十五貫斗りござりますおまへの樣にばんとおつしやつちやア晩に來た時はらを立ます秋風ハテマア晩にして機嫌よくけへすがいひ一寸のごれがひろといふハナ治それじやと申ましてト治助ハ天窓かきながら投首しているト表の猿戸がぐわらり治助ハ南無三又來たとヒヤリと思ふて居る所へかごしまの音カラ〳〵ト内に入ハ秋風が深きゑにしをむすびたるます本やのつゆとなん聞ゆ當時の名妓年の頃ハ廿二三にていつたいじまのこひと見髮の道具も當時流行の狐とやら怪しきを用ひず尤櫛ハ風折蒔繪の木ぐしなれども笄玉簪の類ハ鼈甲にてさしならべ生壁羽二重の小袖に金糸なしの糸錦の帶神參りの戻りとミヘ少婢を門口よりかへしそつとさし足にて中戸口から露おことうござりませう治ハヽ何屋さんだ子ト露ふつと吹出す治助見て治かけこひかと思つたら露さんかおめへのぶしやれハ能承知していて時々くふよ露チヽうそてうし合して置て治何サほんとサマアおあがり露秋さんハへ治奥に居さつしやります露そふかひトいひながら上り露ヲヽしんどト火鉢の傍にかしこまりたばこいそながら露モシゆふべの物見せんかト奥より秋何を露何をもすさまじいわしやよふしつているけれど秋しつているなら見ずともよかろふ露イヽヱあんまりかくしなさるから秋何だかしりもし子ヱもの露急度しらずかおまへに見せる物がある秋おもしろひ子露チヽにく誤りなゑト

立てつか〳〵と奥に來り露何じやいナ昼中に屛風を立てヲ、くらト按广の傍にすハり露おまへそれほど覺へのないものが一昨日のばん繩手の拔うらから何で出ゐたそれでもかくしならト按广をこそぐりにかゝる按广たまらず吹出す露此聲を聞てヲ、いやたれじやいナ按广ハイわたくしトつゆ顏をすかし見て露いやゝの犬悦さんかいなすかん按广そふいおつしやつて下さりますな何ぼう私じやとて露ほんに失禮な勘忍しいヱいつたいくらひによつてわるひト自身立て屛風を明ヶて秋さんのいぢわるちやつとこたつにかくれて居て秋何さかくれるじやねヱが犬悦子と何かむつかしい取合だから聞ていたのさ露いやいナ何の犬悦さんと何いふものでいナ按广イヱ〳〵それでも今おとゝひの晩わたくしが大新の拔裏から出た事をすまんといひなさつたじやないか露ヲ、いや按广そんならおつしやらなんだか秋いつた〳〵おれが聞ていた露ヲ、お慮外だれが聞ていておくれといふたへわしやおまへにいふたのじやわいな按それでも一昨日のばんぬけうらから出たれ私じやもの露おまへが出てゞあつた事を誰が何といふものでいな按今のはどりんきしておいてから露ヲ、きたなだれかおまへのりんきをするものでいな秋サア〳〵こりやァたいへんにこれしかけた犬悦子すむめへ按さやうじやなちと立にくいな秋まだ立にくいおこしてれねヱが按イヤモウそりや何時でもどのやうなはやわざでもお目にかけるじや露ヲ、な

さけな犬悦さんによばれた女中ハ難義であろふナ按なぜな露なぜてゝト犬悦が顔を見てちやつと顔に袖をあて笑ふ按けふ中たら少しうけにくいかハぞんぜぬが私が一度よんだ女郎ハ一生得わすれぬげな露ヲ、いや何でいな秋あたご山サ露ム、しんどいかへ秋何サ長床坊といふ事だ客ア、なさけな按何でもとくしんさすじやてそこで忘れられぬから一いきハモウ色がふつて〳〵後にハへとの出るくらひでござりました秋そこで名が犬悦サ按ハヽヽヽヽト表がぐわらり肴やハイ肴やでござります治扨毎度氣の毒だがト奥から秋晩だ〳〵肴やさやうたらお賴申ますト出て行治助ハ小ごへにて治是ハこまつたものしやト又表がぐわらり生酒ハイ松源でござります秋晩だ〳〵生酒ハイ〳〵ト出て行露秋さんあしたのこしらへハモウ出來たかいな秋こしらへとハ何を露あしたハ元日じやないかいな秋たしかそんな事じや露サアそれで何やかやのこしらへの事じやわいな秋何やかやとハ何をこしらへる露ヲ、しんきマア組重からおぞうにからそふしてアノ何。三寶に何やかやたんとのせるものから皆けふのうちにちやんとして置ものじやないかいな秋そりやア女房の役だおれに聞せずともして置がいゝ露ハイ〳〵ト勝手へ立て來る按モシ御酒ハどふでござります露いやいナ此いそがしいに酒所かいなト少し女房の氣どりにていふ秋しかし手間取ていたらおふくろが小言いわふ露何のマアだいじないわいな是治助さんおむし

があるかへ治ミそれきのふのが残つてあつたかしらねエト立て肴戸棚より竹の皮に包ミし味噌を取出す治是でいひかへ露チヽすくなたつた是だけかいな治おめへ何にしなさる露おぞうにのむしをすつておくのじやわいな治ハア上方の雑煮ハ味噌でするけへ露そふじやわいな治ハテナア江戸じやァ醬油のすまし雑煮さ露すいなものじやナァトいひながら立て露おむしするものハどこに有ゑト奥から秋それハたしかおたび町の茶碗鉢やと矢脊のかゝアの所にあつたと思ふた露しらんわいな秋ハテしらぬからおそへてやるのさ露いかいおせわさんへトいひながらはしり先のすりばちすりこぎを取て來て露治助さんはしりにある頭ハまだどふもせずにあるな治かしらとハエヽ大そう大きな芋頭の事けへ露あいな治ありやアきのふ小便取が持てきたがどふしてくつたらよかろふ露チヽしんきあれハあしたおぞうにの中へ入れるのじやわいな治そうけへ露いつかう何にもしてなひそふなトすり鉢へ味噌を入ぐわら〱と摺かゝり露しんきいつそいごいてどふもならぬ治持ませうか露イヽエだいじないわへ按イヤ下拙持ませうト出て來り摺鉢を持露こりやお慮外さん按是ハ〱何とかわりませうか露イヽエだいじないわへヲヽしんどちと休もト表ぐわらり女ハイ藤やでござります治藤屋とハエヽ二軒茶やの藤屋か子女さやうでござります秋藤やもばんだ女ハイ〱お頼ミ申ますト出て行露モウよいかいな按私ハしよてから

よいが露何がいな按とかくサ女ハおそうよふがるものじや露それでもこりやモウ是でよいか
わるひかしりもせんもの按まそつとしんぼうなされモウ追付ようなりますぞ露チヽしんどどふ
やらセウよいようなわいナ按サアモウようなる時分じやて露いつそそこらがうへついたわいな
按サアよふがるといつでもそうじやて露ちよつとまち一へんふくハヘト紙を出して擂鉢のふち
を拭ふ按つゐでに是もお頼申ますト味噌の付たすりこぎを出す露ちよつとまちへトのべ紙二三
枚にてすりこぎの柄を握りてふいてとり不斗犬悦と顔を見合し露チヽあほうト笑ひ出すト又表
を明て犬悦いおとヾわり〱として呑やまた修羅道の鬨の聲矢さけびの音しんどうしてチンチッ
ンツ　シツ〱トツツンツンツンツト少し酔きげんにてうたひながら中戸口へはいる犬悦是ハ
一太の番頭ゑらきげんじやな呑サアけふハ少しげんきづかにや懸がとれぬじやそこで一てう入
て氣を丈夫にして拂ひをいおやつくやつがあると。又修羅道の鬨の聲と少ゝいおやもやらにや
ならぬじやハヽヽ犬悦是ハお得意さきで近頃失禮なあいさつじやな呑何の内方の拂ひにいち
やおあつてよいものかナア中番頭さん治イヤ〱めつたな事ハいわれねヱ呑なぞと人に物を思
ハすように。そりや何いハんす五郎八さん明秋一太何と其口へ今一ツ入ハどふだ呑そりや有が
たいた秋ドレ〱ト奥より猪口とてうしを持て出秋犬公火鉢を是へお頼ゝ申すト犬悦心得おく

つ火鉢を持て出る呑さやうたらおじぎなしに秋ぬるくれねヱかあつくしてやろふト火鉢へてうしをおけ日時にいかめしくいつたが肴ハ相州五郎正宗だ呑名作かな秋イヤされもいだ漸これ一種さ呑何じや鴨の鋤焼とハきびしいものじやこりやいめるナ秋どれちよつとト一口呑で秋とふり過たくふひじやト猪口を出すと一寸璃寛の聲色にて呑是徳兵衛さんきげん直して盃さいてやらんせいのふチヽそふじやくそこで一太がいたゞいたものじやコレいたゞくのおゝサンマ又あろかいのチヽチヽヽトチンチヽトいひながら自身酌して呑大あら吉ハよつぽど手に入たものじや呑なぞとてうしを合してくれる事もないじやないか調子より献を合して秋ハテいひハナ静にのむがいひトいひながらはしり先を見て秋治助いつの間にか花がかつてあるいゝけき花やお持てまいりました秋うちやつておいちやアわるひ露一太さんおまいがいつち近ひアノ花取てかし呑名ざしにおふたれ千代がめいわくトかたりながら花を取てさらバ椿上と出す露取つぐ秋風とつて秋モウ木咲かしらねヱよく蕾を持たト露盆をとつてわたす秋風白梅と椿を前におき二重切の置花生を取て来り生にかゝる呑露さんといふ色をも香をもある白梅を挿てねじめハ玉椿の八千代をこめし旦那の手いけハテ色のうき世じやよナアト鯉三郎の聲いろ露いやいナようおだてる人ナアトいふている折節表に寐ている犬を叱りつけ。ぐわらりと明て来りしハ此

家の家主四十六七とも見へて短き羽織によごれた革足袋冠落した稲玉といふ顔でやつとはいり家主今朝からも何の御沙汰もないが家賃はどふ成ますとあがり口にこしかける治段々と間違ひまして申わけもござりませぬがどふぞ春早々迄御ふしやうをお願ひ申ます家主是々春までとはどふした御あいさつでござるそも／＼九月前から滞つてそれから中仕切にもさたなし又此大晦日もかたが付ひでは甚ふらちと申さふか済ぬしかたではないかぜひけふは算用なされうそをいふもほどのあつたものじやトにがり切ていふ治助も詞なくぐづ／＼して居る秋風さいぜんより花を生ながら聞居たれバ秋是はよく御出なされました先刻からいさゐうけ玉はりましたが一／＼御尤千万しかし江戸表から便があるはづて御勘定を致すつもりでおりましたがどふいふ事か川のつかへる時分でもねエに今に沙汰がねエから只今の通り申たのでございますと申て段々の延引御立腹は聞へてござります晩ほどはいかやうとも都合致して御あいさつ致しませうから左様思し召て下さりませ家主どふぞ間違ぬやうなされませもし晩が間違と氣のどくながら請引取へとゞけ家を明てもらはにやならぬ秋いさゐかしこまりました家主そんなら必ず晩ほと御左右まつていますトにつこりともせず出て歸る肴やはじめ一座興をさましいる秋風はひとり悦び秋けさからくるかけ乞に家主ほどのやつがねエからことわけいふにほねがおれいでおもしら

うなかつたやう〳〵家主が小言を聞たで少し大三十日の心持がした肴私はせつかく醉た酒がどこへやらいてしまふたこりやまひとつ呑にやならぬとてうしを取上肴なむさんつぎめじや犬悦さんおまへのうしろの樽をちよつと犬爰で直さふとてうしを取樽を見て犬南無三こゝもつぎめじや秋イヤ〳〵迚も肴のなひ酒はのんでいられぬ二軒茶やといふしやれもまんざらじやあるめへ一太どふだろ肴どふで祇園町へ参りますおとも致しませう秋おもしろい犬悦子露もいかねヱかといへとも露はうつむいている秋ハヽア酒といふとお氣にいらぬト羽織を引かけ出ようとする治モシ旦那晩ほど大屋をどふ致しませう秋ハテどふともならふはナト一太引つれ表へ出て行犬悦もともに出ようとする露ちよつとさゝやく犬悦何か承知して出て行治助は大きにふさぎし体にてうつむいている露さしよつて露治すさんいつたいどふいふもんじやいナア治どふいふものは國から金が來ぬから九月前から內證の大わづらひ段〳〵ぶさただらけがおしつめたけふになつて誠に壹歩のあてもないにめつたやたらに晩に〳〵といふてかへしどふする旦那の心やらいつそ私は穴へもへいりたい心持さイヤ又つまらねヱも尤かい夜昼なしに酒ばかり呑でかれは湯水と遣ひ捨江戸にいさつしやる時もしらぬ所へ來ている時もおなじ心でござつてはきりとはつまらぬといひさし不斗露を見て少しさし合と心づきけるにやアヽ苦のせかいではあると火ぜ

ゝりして居る露ハきいぜんより何かしあんありがほに襟に顔をさし入ていたりけるが何思ひけんつと立上り下へおりる治おめへおけへりか露アイ今ちつと思ひ出した事があるよつてちよつといんで後に來るハへ治モシ旦那にあいなすつたらはやくお歸るやうおたのミ申やすト露ハ申戸口へ出かける折節撞出す暮六ツハ治助が胸と露が身にいとゞひゞかれ治ありやモウ暮六ツいかねのうき世じやナアト露ハ出て行治助ハこて〳〵灯をともしそこら取片付いる

○此内米屋木やハいふに及ばずすべて懸乞矢をゐるごとく來る治助も今ハふせぎかねたゞ後〳〵といひのがれける事初夜より四ツに至る別にかはりたる事なかれバ此一件を畧す

兎角して四ツの頃治助ハつく〳〵思ふに旦那も歸り來すかけこいハます〳〵引もちぎらざれバきつと思案を極めこれハ旦那を尋ねがてら内にいぬがよいと火の用心を見て灯を吹けし表へ出かとする所へたれかハとつかハ來る体南無三文かけ乞かとすりぬけんとする所露治すきんか治つゆさんか露是一寸はいり治きよと〳〵しいト兩人内へはいる尤くらき臺所にこし打かけて露秋さんハまだかへ治サア今尋ねにいてかふと思ふて出かける所サ露そりや幸ひじやがかならずしうさんにハ沙汰なしじやがナ是トくらがりにて治助が手をとり何か手にわたす治助持てミるに重かりければ治露さん是ハ露どふぞそれで今夜の所をよいよふにしてあげておくれ治ムヽそ

んならこりやたしか金じやナマアまちトつけ木をともし行灯につけかの品を見て治こりや大かた十四五両おまへどふして此かねをトふしぎさにつく〳〵と露を見るに櫛かうがいはいふに及ばず簪一本あらバこそありしにかハる露がかざりのさびしきに心つき治こりやおまへつむりの道具を露是大きな聲しいないナ治おめへの誠を聞れたら定めし旦那もうれしからふがつねと違ふて明日ハ元日そんなあたまでハいられめへ露何のいナ正月三日ハとても見へるお客ハなし爰へ來ていれハよい治そふしてこんやハ露モウいなねハへトツイと奥へいて火燵へはいる

○此うち昼から約束のかけこひ追〳〵にせめかけける治助もしばらくしあんして居たれども何ぶん臺所ハ弓張の二三十もならびけれバモウぜひがなひと包をとき片はしから拂ひかけまたゝく中に十四五両はらひ切と皆逆さまになつて歸ることちよさアヽうれしやとハ思へともつゆがあすから出られぬに又ひとつ胸をいためいる折ふし歸るあるじ秋風すつとはゐつて

秋治助さぞおしかけたであらふどふ切ぬけた治是ごろふしませト受取の帳面ひろげて出す秋風一〳〵見て秋こりやアどふじや家主はじめ残らず金の受取ハト治助かの露が情の一件をさゝやく秋風大にかんじ又明日の事をあんじ主従顔見合て小首かたぶけながらとても今ハぜひなしと

秋風ハ奥に來り秋つゆ何にもいわぬ是じや〳〵と手を合す露こちやいやェしらんわいナ秋じやといふて其あたまでハ露ヲ、ひつこおまへをふさげさすまいと思ふたにやつはり其やうにふさいでから秋おつと其心ざしのむそくにならぬ様氣を取直してねるにせうかト火燵へはいる折節表をゴト〳〵〳〵秋治助モウかけ乞ハ藥にしたくてもねエはづだが治さやうサトいひつゝ表に出治だれだ男淺草や周治郎さまハこなたかナ治アイこつちじやがト戸を明る男御狀がまいりましたうけとりを下さりませト治助狀を取さら〳〵と受取してわたし秋風が前に來り治モシ江戸から御狀がめいりました秋どれと封おし切ト壹歩で四五十兩ばら〳〵

作者此所にて口上

是にて露が情の質もうけ出しわきてめでたく元旦をむかへなを末ながくかたらひしハ全く女郎の實一旦の功をなしたる事爰に畧す

竊潛妻 巻の下 大尾

鶴潜妻

文化四卯正月成刻

醒井五条上ル丁
伊豫屋佐右衛門

伏見下板橋二丁目
亀屋伊兵衛

言葉客初心

山月庵主人

意氣客初心序

予此草帋に序を書んとおもへとも帋を費さん事をいとひ今様をかえて長文を不書廼先立の禿筆を採て板木の櫻に書附て曰く天保本を空しうする事勿れ時に凡例なきにしもあらす

丙申開歳　呉鶴巣主人識

碧蘿園主人書

眉言

古人曰。醫者意。易者意氣。宜哉。世人雖知雉子之鳴乾野狐之啼坤。未知蝙蝠之鳴離駱駝之啼兌。是無意氣故也。苟有意氣則上自蝙蝠之玅音。下至駱駝之奇聲。能知之焉。余近頃曉鐘鳴坎而惜別。暮鐘鳴艮而又通之暇。著斯書。更名意氣客初心。爲使初客至意氣一助。豈有論文言之鄙俚哉。覽者幸勿作蒼卒之看。云爾

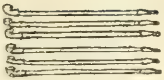
天保乙未夏五月阿玉杓子變靑蛙日

山月庵主人題

門人半月謹書

意氣客初心卷之上

山月庵主人著　呉鶴巣主人校

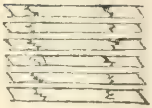


煙管

晝夜立煙之画
金與竹交之形

此形ハ煙管にして五行にとつてハ金なり○男ハ陽なる故に多く延付を持也女ハ陰なるゆへに中絶て次煙管をもつ也○心中にもや〳〵と思ふ時一ぷくすれバ欝散をする意あり○名所ハ大阪の四ツ橋とす○銀の煙管ハ常に巾着切の用心すべし○意氣に曰く悪て叩くと思ふな煙管可愛けりやこそ口で吸ふと有て至つて人に愛される也○されバある人の哥にもへよの中に絶て煙管のなかりせバ思ハぬ人の口ハすハまじ又愚佛先生の詩に更に一服を勸めて後抱瞭と見へたるハ則ち此煙管の吏にて閨の中にてハ一の道具とす○扨又雀海中に入てハ蛤となり煙管閨中に入てハ

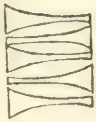
比翼の鳥となるといふ事あれバ縁談にハ至つて吉とす



短冊

天地雲水之画
折三懐中之形

此形ハ短冊にして數ハ五七五七七と三十一文字の數あり○名所ハ加賀の墨流し又ハ木曾の櫻皮などなり○時候ハ春三月さくら見か又ハ秋九月紅葉見か○折々いけもせぬ手にて書つぶされるとあり用心すべし○又生洲會席などの挑灯の尻に付とありて多くハ井筒屋井の上屋京井筒屋櫻井屋などにて兎角井に縁あり狂言作者南北先生曰く小野小町是を持ときハ雨則ち降高の師直是を見るときハ怒忽ち起といへり

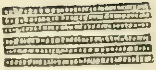


撥子

藝子常持之画
客楽失心之形

此形ハ三味線の撥子にしてツヽンテンといふ藝也此藝に名を得たる人ハ祇園新地にてハ京政と

す〇木性とハ中よけれども竹性とハ至つて中わるし〇名所ハ勢州相の山なり則ち此撥子にて錢を受ると眞によく手錬なしたるもの也通名お杉お玉といふ〇或人の咄に曰く相の山にて錢を一二文づゝ彼お杉お玉の顔へ當んとて投るといへども撥子を持てよく受るとゆへ四五文づゝ兩方より一どきに投けるがすぐさまこれを受とむる事實に新田義貞の宇治の戰に矢をはらひしよりハなほ速かなれハ今後ハ百の錢を一時に投たりければお杉ハもはや撥子にてハ迚もとまらじと思ひとりも眞さず三味線にて受とめければ百の錢三味線に當ると三味線が鳴てベランボウン



物差

量物爲極之画
添針差箱之形

此形ハ物差にして多く女の道具とす五行にとつてハ金差といふ生類にとつてハ鯨差といふ〇庚申の日にハつかふとを忌なりされバ禁咒の哥あり曰く「あさ姫のおしえ始めしから衣たつたびどにきそひます哉此哥を三べん唱へてつかふときハ庚申の日にてもくるしからず〇安保陀羅經に曰く武士ハ二本ざし獵師ハ鳥さし藝子ハ證さし才領ハ貫ざし茶人ハ水さし商人ハ物さしとい

ふ〇名所ハ京都六條の念佛ざし也〇但し當ものなれバ鯛なるべし證にハ一巴の發句に「鯛の目に物さしあてる彌生哉あてるといふが則ちあてものによくあたりし事なり

羽織紐

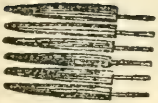
平生在胸之画
左右結置之形

此形ハ則ち羽織の紐にして二筋相結るの形也〇質屋へ羽織をやれバ内に殘す意あり又内ハ木綿なれど外ハ絹の意あり〇總て男にかぎるものとす〇幇間これを持ときハ蛇と變化なすなり〇羽おりハ夏と冬とかハれども紐にハへだてなしいつにても間にあふ也されバ二上りのすり鉢の哥にもあふひもよるハといへり〇且又當時の通人羽おりハ蝙蝠の首のごく短かくなせども紐ハ鶴の足ほど長くするなり案するに是團十郎と芝翫とを一ッにして一個の通人を作り立たといふ意どりなるべし〇而軍記にハ通の羽織短かしといへど是をつかバ悲ミなんと見へたり

三升紋

當時親玉之画
汲市川流之形

此形ハ三升の紋にして成田屋といふ〇失物ハ入子の箱を吟味すべし〇縁談ハ白猿契りなりしとて大いによしとす〇人氣を立るハ當時第一とす〇時候ハ十一月とす證あり眞顔先生の哥に〽大入に入日をまねくいきほひハ當時市川一陽來復〇名物ハしバらくの役とす哥に〽市川のながれ絶せず白猿の目にもの見せるしバらくの役〇數ハ七とす哥に〽白猿となのりて今年西遊記これぞ七世の孫悟空かも〇また詩に曰く當時名人團十郎狂言每々必大當見物感心是親玉三都最負豈難量

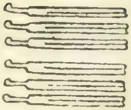


日笠

日中凌暑之画
日暮邪广之形

此形ハ日笠にして色ハ青く是を紺と号く紺ハ則ち女とす男ハ白といふ是を名づけて紺ハ天に皈

し白い地にかへる紺白の變といふ也○但し男にても醫者か又ハ出家なれバ紺に隨ふ意○或人の句にへ漣や舟にも見ゆる初月傘とありて旅行にハ至つてよし○但し又仕入ハ桔梗か桐の紋多し○小兒なれバ英泉繪の張まぜよし○古語に曰く嫁遠目傘のうちとて女これを持ときハ大いに愛を增とあり○名所ハ都の島原なり太夫星是をさしかけて出る若夢の句にへ青柳や太夫の傘ハこしてゆく○又古くなれバ伏見人形と交易をする意あり

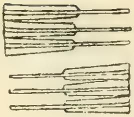


髮差

女郎頂頭之画
折々入質之形

此形ハ髮差にして是を投て待人の來るか不來かを疊算に占ふとあり長月なれバ來るとす半月なれバきたらずとす○人物ハ傾城の類なり惡い洒落に曰くわたしが妹此かんざしにつとめ奉公するときくと出たり○此髮差に三味せんの三の糸をはさミしハ余程あだなものなり○捻楳鶴菱を附るハ當世にあらず珊瑚樹もとより流行におくれたりとす○妾旦那の耳のくそをとる意あり○下女達井戸へとり落さぬやう用心すべし又雪隱へ行時氣をつけてよし○鼈甲なれバ栢の油

を折〳〵附てよし銀なれバ灰汁にて時〳〵洗ふてよし〇或人の戀の付句にへ髪差と小柄とかえる舟の中又煙管のそうじ行燈の搔立木のかハり戸のせんなどに縁ありて至つて重寶の形とす〇滑稽咄に曰く奥さま旦那と倶〳〵に六枚屛風の其中にて睦言もやゝしづまりてのち髪差を拔て行燈の火皿の上へ置給へバ屛風に繪がきし七賢人の阮籍がこりや皆の衆必ず鈹を出まいぞ髪差の鼈甲が火皿によると地震の氣ざしじや〇作者曰くかゝる場所をもし飲中八仙の汝陽に見せバ麴車に逢ざれとも口涎を流すべし



扇子

持手作禮之画
酩酊落路之形

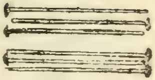
此形ハ扇子にして是も白き骨のを男となし黒き骨のを女とす〇四氣にとつてハ夏となす禮義にとつてハ春となす吾師山東先生の狂哥にへありがたき御代にあふぎの天地金箔のついたる春ハ來にけり〇當時一名三非扇といへるがありて多く廣がり婦人にハよく相生す〇いけもせぬ手にて狂歌俳諧を書たるハ大いにあしく白扇がおくゆかしくて吉とす〇但し此下に笑といふ字を付

ると咄家の首魁となり長といふ字を付ると生洲の親玉となり九といふ字を付ると青樓に名高し何れとも高名とする也○天時は風とす或人の哥にへそよとだに荻は動かぬ夏の日に扇は風のやどりなりけり○又狂哥にへあつき日のせめをはづせし扇こそかミの恵かのりの助けか

線香

立神佛前之画
量女郎花之形

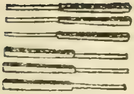
此形は線香にして多く佛前による也又は神事にももちゆる事あれども是は花火線香とす○天時にとつてはかミなりの鳴時○やいとの時出る○五行は火による也○藝子女郎の花代をしるとあり吾友東都の浮世師三橋の柳樽にへ線香でかりねの夢の寸をとりとむべなるかな漢名これを時計香といふ○但し相場の火縄仕舞よりは傾城かひの線香別れはつらいもの也○落し咄に曰くある女郎東寺の弘法様の前にて線香にて手を淨めながらふしぎな顔して連の客にへモシわたしの店と大師さまとはどちらの店が大きいへ



鐵漿筆

以鴨毛製之画
一本六文之形

此形ハかね筆にして年二十歳已上の女による也これをつかひながら近所の戸をわるふしやべる意ありつゝしミてよし○庚申又ハ月の八日廿日の夜にハつかふべからず○かねとふしの粉を一ッにまぜてつかふ時ハ其艶至つてよしといふ○但し古くなりしあとハ竺を折て捨てよし○病人かね筆にて口へ薬を含すやうになつて不治とす諺に煎薬なんぞて大病のくるしミをすくハんやといへり○たしなミのよき女夫に見せぬ意あり○内にいふ或男かねハ至つて匂ひのあしきもの也といへハ女こたへてさほど悪き匂ひの口中なにゆへ殿達の好給ふといふに男暫らく言葉もなくさしうつむいてにが笑ひせしも又おかし



髪剃

眉毛能作之画
首筋美成之形

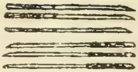
此形ハ髪剃にして是も多くハ女による也黒打をよしとす○紙を切と大いにあしゝ○心中だてをして指をきる時用ひて至つてよし○神前へ近付べからず祟りありとす○旅僧常に用意する叓あり○三世相に曰く髪剃の前生ハ雪踏の金にてありしゆへ其縁により頬の皮にあたり又首筋に足を付るといふ○大つ繪の大黒ハ槌を持ずして必ず是をもてりとす○世にあぶなき渡世をするを髪剃の刄わたりといふ用心すべし○手に息を吹かけてためし見る意○川柳點に へかミそりを魂 にする色男

楊枝

食后浚齒之画
大通差髪之形

此形ハ楊枝にして五行にとつてハ木也○手から手へわたさぬ意○必是を持て鬼燈をほる叓あり○名所ハ東都の淺草か京都の御旅丁か○煙管のつまりを淩る意あり○京傳先生の晒落本によし原楊枝といふあり大いに吉原の叓をうがつ○藝子客に是を出してくれるやつハよしまにかぎる○鰑か棒鱈を喰あとハ是非ともつかふ意あり○酉年の女のつかひし楊枝と居守とを黒焼にな

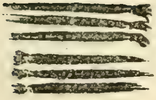
したるが惚薬なり作者去方より傳ハりし祕事なれとも茲に記す○また武士による意あり諺に
曰く武士ハくれねど高楊枝



小柄

爲金無垢之画
剝梨子皮之形

此形ハ小柄にして芝居道にてハ手裏劔となる其とき尺八か又ハ柄杓にて止る意あり○多く敵のてがゝりこれよりしてしれるなり○硯箱に潜む意あり○手妻つかひ目より入て口から出す意（）卦算の替りに成とあるべし○野がけのせつ柿梨子の皮をむく事あり其あとハよく〳〵拭ひ置べし（）あれてもの取落すと有用心すべし



髪の添

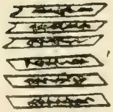
病后添結之画
名物源八之形

此形ハ髪の添にして女にかぎるものなりもしたまく男がつかふ叓あれども間夫でもして髪を切れし時なりとす○死髪と活髪ハ其艶にて知るべし○又五十已上の女とす○おりく紅灰汁にて洗ふべし○天窗の道具多くさしたる女ハ五十をまたずしてつかふ意あり○黒油とハ相性よしとす○女の切し髪にハ象頭山をもつなげども男の切し髪にハ金比羅さんもちとうるさかるべし

脇差

男子爲レ魂之画
閨中不レ免之形

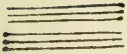
此形ハ脇差にして男の魂とす○丸し四角し長し短しといふ意○たわけの番附に曰く脇差に比翼紋付る人○是も素より男による也適々女によるとあれどもそれハ芝居の女形とす○よき身ハ備前物といひわるき身ハ丹後物といふ是赤鰯の緣による也○男伊達かならず是を差意あり古人の發句にへ梅の月わきざし光る男伊達



富の札

突留千両之画
見徳能當之形

此形ハ富の札にして十二支或ハ松竹梅による○方角ハ東西南北なり○走り人の用心すべし○運至つて強き人ハ両袖にかゝり玉もどりの悦びありとす○又當時三百両を得んと欲せバ梅がえよりも富かえといふとあり○古井流行の哥にハ當時はやるものハ駄弓の稽古に珊瑚樹富の札焼たお芋になんじやいふてるハと出たり○又古札もつて助炭をはる意ありこいつハよつほど氣の見へたもの也○或人の哥に「富かふた其錢かねハつち山や見れバ涙の雨のふる札○又うたに「一入に富にこつたる其末ハ皆園七の宿なしとなる



火箸

貞女當顔之画
明穴灼子之形

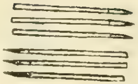
此形ハ火箸にして五行にとつてハ金により又火による也〇悋人の臺所の火鉢にハ火箸ハ多く附ておかす是常に火をかきさがさぬ用心也されバ菓子賣の親仁も「火箸持て灰突す灰盛てひィばちィといへり〇作者曰く此こじつけをかうバしくて歯に付すはもろうてかうバしいとよく味ハふてきこしめせ〇古くなつて折ると金魚屋の下おひとなる意〇妓院の小女郎火箸を鼻の穴へ入るくせあり〇又今昔物語に様子あり氣に火箸うかゞふといふ猫がよんだる哥を出せり〇且又足ハ鉄弓手ハ金火箸啼聲吹子に似たりけりと頼政の鵺退治のとき鍛冶屋の手代人がいへりしとあり

虱紐

七日受合之画
價五十文之形

此形ハ虱紐にして多く鰥によるもの也〇常に虚弱なる人ハ用ゆるとあしく〇結ぶところハ臍より一寸上とす〇辻君と契るを虱紐のえにしといふ〇失物ハ六十日を限りとす四條川原枩原川原をもとむべし〇肉食を多くする人必ず用ひて吉とす〇余或人に虱ひもの製法を傳ハり置た

り因によつてこゝに記す水銀　梅肉　粘　右三味等分〇多く用ゆる人ハ農人の娘か儒者の諸生か〇或人の句に〽葉櫻やちぎれ〳〵の虱紐



紅筆

女爲懐中之画
急時書文之形

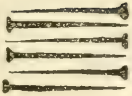
此形ハ紅筆にして女による也多く釘の折のごき手にて文を書るゝ叓あり〇延紙による意あり〇人に隠してつかふ意〇上唇にハそつと當り下唇にハつよく當る意〇有とき紅筆粉白筆と鉄醤筆に向ひわしハ美人の唇に付て樂しむといへバ粉白筆わしハ美人の顔に付てたのしむといふにぞ又鉄醤筆がわしハ美人の口中に入て其樂しミを極むると思ひ〳〵の咄のさいちう側に居たりし日記筆うらめしそふな顔をして偖〻各ガハよき色男のおたのしミ夫に引かへ拙者等ハ若い春毛の其時より只帳合を大切に日夜かけての動きづめされどもいかなる悪業にや了にハ錢獨樂の不廻りにより尻を切れてやう〳〵に命毛だけを全ふなし今ハ矢立のうき住居かく墨染の身となれどもお若い白髪がうらやましいテナ〇此紅筆につかふ毛に種ゝあり娘のつかふハ石灰

藏の鍵の毛仲居のつかふれ腹の下の白い狐の毛舞子のつかふれ腹皷打狸の毛なりそこで世の諺に女を畜生めといふ〇千代の句に〽朝かほや宵の紅筆今朝の猪口こいつもやつれり猪によるか

意氣客初心卷之上了

意氣客初心卷之下

山月庵主人著　呉鶴巣主人校

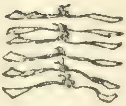


釘

直歪以遣之画
号並三寸之形

此形は釘にして液をつけて打込意あり○相性は木による也もし糠によるときは馬の耳に風又は蛙の面へ水と同意なり○嫉妬ふかき女丑の時まいりに用ゆる意あり○歌に「戀こがれおまへ大名わしや乞食祇園山鉾釘と金槌といへる叓あり此こゝろは皆様よく御ぞんじなるべし○歯のいたむときの咒に曰く蟲といふ字を白紙に朱を以て三字書その紙を四ッ折にして乾の柱に三寸釘を以て打つけおき歯のいたむたびに彼釘を少しづゝ打こめば即座に歯のいたみ止といへり○書を能かゝぬ人を釘のおれといへば画をよくかゝぬ人は鋸の歪といわんか○落し咄に曰く金

槌が相場店を出してチョンノ五厘く\といへバ戸のせんがこうたく\と出かけると釘がヲット金槌さんうつておくれ○又曰く釘が金槌にむかふて兎角おれの角があつて下に濁があると人々にいわれるがもう是から濁るこゝろハやめにしやう拼三寸さきハ暗の夜じやといへバ金づち大いに笑ふて貴様に濁りがなかつたら人さんのよいくひものになるじやあろ○作者曰く茶漬のさいか



千草結

記男女名之画
女中爲戯之形

此形ハ千草結にして緣談にとつてハいたつてよしとす○奥女中などの慰に多くなすの意○火まハしのあとさきにかならずなす意對叁にもつゞく意あり○我思ふ人と結ばれたるハ南天の七葉と共ぐ\に鏡のうらにひそむ口傳○眞實好な男と結ばれたるを見て思ハず顔を赤うするハ是娘の娘たる所にしてお乳母おはりのたぐひにハ決てなし○右のごとく娘子の千草結をするハよほどむかしの事にて今時の娘子ハなかく\千くさむすび所でハなしいつの間にかハ親達の目をぬ

すゝ縁をむすぶの神さんへ互ミに二世も三世もと願ひをかくる眞むすびなるべし川柳點に「箱入のあいだに娘酢を好ミ○定めし當時の娘子ハ新車や璃珏嵐吉などゝ結バれん㕝をねがふべし且又藝子や女郎ハたゞお上りと結バれん㕝を欲すといふ○因に曰く或藝子丸抱で男のよひより金滿なら男のわるいがよひ人さんにとられる心づかひがなふてよしとハよつほど爪な代物なりこゝらの敵輩がたゞお上りとむすばれん㕝をねがふなるべし嗚呼性ハ錢なる哉

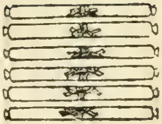
鋏　取爪切休之画　小兒持叱之形

此形ハはさみにして多く女による也○腰のよハいを節とり鋏といふ腰のつよいを爪とりはさミといふ○ふろ屋の上り場にあつてハ尻に札がつく意髪ゆひ床の仕事場にあつてハ逆にかけらるゝの意○蟹が猿の嶋へ敵うちのとき石臼や燒栗と共〴〵に大いに高名をなせし㕝あり○娘子の手にもたれる小鋏ハ繪に切をいれ或ハ紋形折形などにつかハれて至つて仕合ものにてくすやの大はさミとハ雲𡋽の相違とす○婆々がもつたハ雀の舌切はさミなれど娘がもつのハうハ氣で指切鋏か○懷中の七ッ道具のうちにてハ一ばん間にあふ意○日より坊主をこしらへる時いそが

燈心

不用日中之画
附身狐蠱之形

此形ハ燈心にして五行にとつてハ火による也○小兒の戯れに蠅の尻へさゝれるとありとす○絹地か唐紙などへ物を書損じたるとき用ゆる意あり○百物語の時ハ火皿の四方へ分る意○腸滿の藥に用ゆる意○子を產ぬ女ハ地獄にて是を持して竹の根をほらす㕝あり○油屋の歳暮に祝義になる意○商ひハ子の日を吉とす○傳授やの店に釣ておくハもはや流行におくれて傳授ハ人々承知之介也○行燈を釣て小兒を遊ばすとあり其とき髷のいちの損じざるやう用心すべし○戯に針の耳へ通す意ロ傳○平の忠盛が祇園の油取の坊主をつかまへし時この燈心坊主めがとしやれたる㕝あり○夜店の紙燈にハ多く用ゆる意○夜四ッすぎより只一筋になる意○吉原のおいらん燈しんしよう火がくらくなりいんしたといふ

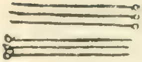


掛物

添樟脳香之画
多有贋物之形

此形ハ掛物にして多くハ画により又ハ書による意○數ハ一幅か又ハ二幅對三幅對か○極札そふ意○髪ゆひ床の掛物ハ多く國貞か英泉の女繪とす○古道具屋にあるやつハ多く三社の託宣か又ハ寶船の石摺か○一休禪師弘法大師などの掛物ハ決して山師の手にかゝる意あり○牙軸角軸などを爭ふ掛物ハあまり高名になき人の書画とす俗にこれをホンノ表具直打といふ○當時表具の名人ハ京都におゐてハ一条の表新とす○一九が故事附咄に曰くある白痴友達うちの所へ行掛物をながめ居たりしが側に一人の客ありて同じく掛物をつら／＼ながめ亭主に向ふてあの賛ハよほど面白しとほめけるゆへ彼白痴なんでも掛物をほめるハさんといふてほめるがよしと思ひ又ある方へ行て掛物をながめアノさんハよほど見事なりといひけるにぞ亭主されバアノ詩ハ随分面白しといひけるにぞ彼しれもの又外方へ行て掛物をながめアノしの意ハ奇妙也とほめたるが

其家の亭主あれハ詩にあらず禪家の語なりといひければ彼しれものハ三四五とつゞきしゆへ今度ハある方にて六のあんばい甚だよしとほめければ亭主ぬからぬ顔して左様におほめ下さるな六な物にてハなしホンノ七の流を買ましたのサ

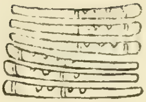


針

供養獵八之画
奉栗嶋樣之形

此形ハ針にして大ちやぼ小ちやぼ夜着とぢなどゝ種〻別名あり〇八月十五夜の月あかりにて此耳へ糸を通せバ思ひ事かなふ意〇名物ハ三条のみすやとす〇古哥に曰く去し女房のかたミとて行燈に残る針の迹といへり〇いそがしきとき髷にさしおく意有〇されどもこいつハ中から下の女房の業とす〇もし紛失のときハ 呪の哥あり此哥を唱へバ出ずといふ事なし「きよ水の音羽の瀧に願かけてうせたる針の見えぬとなし〇女中墨打のせつまゝ取殘しおく事ありて手を突もの也用心すべし〇哥に「はりさしの山ほとゝぎすふりつゞく雨のいと間に耳を通して〇むかし太公望ハ夜着とぢ針にて渭濱といへる所にて魚を釣て居られしが女房の馬氏といふものこれをも

どかしがり夫に向ふて夜着とお針にて魚を釣べとて鯨差でもかゝりはせじ元來何の魚を釣氣じやと尋ねければ太公望はうまい顔して鯛を釣氣じやと答へけるゆへ女房は夫を馬鹿にして去狀をもらふて夫婦別れをなしたりしが其後太公望氣長にかゝつて終に鯛のつくり身だけを釣たる故事有



尺八

古以譜教之画
今寄哥習之形

此形は尺八にして芝居道にては多く捌方これを持りとす○尺八煩腦戀無常といへば無常にもより戀にもよる意○夜道にて吹を咎る意あり○五人男必ずこれを持かたち也○三節目まで根のあとの見へるは至つて相にあしゝ所持し給ふべからず○音の立ざる時中を覗く意あり○薦僧と薦僧とあふ時は帶竹と倶々左右の手にのる意○作の名人は古橋鐵扇とす○大鵬宗閑などを近世の名人とす如水素滴などを當時の名人とす川柳点に「こも僧の下手こそ鳶の巣立吹○又戀の狂

哥に「わが思ふこゝろのたけを尺八の音色をかりて君に告ばや

蠟燭

号四郎様之画
眞切美男之形

此形ハ蠟燭にして五行にとつてハ火による也但し芝居の蠟燭ハ魚による大いにわる臭き意あり○名所ハ奥州會津○六の數ありわづか六銅でおらうそくが上り升スといふ○青樓の蠟燭ハ八分に定り開帳のらうそくハ六文にかぎるといへり多く夜にかぎる意ありたま〳〵日の中につかふハ物の紛失のとき椽の下などを見る意○又蓋の油ハらうそくの火を中につり傾城のあぶらハ思ひの火をむちうにするといへり○古い狂哥に「らうそくのたゝぬゆへんをかんが見べながれの君とよこねせしゆへ

草履

履新痛足之画
爲古附皮之形

此形ハ草履にして男ハ蒲か又ハ白の木綿鼻緒か女ハ緋天鵞絨か又黒天鵞絨か○緋ハ娘により黒

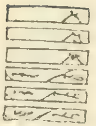
ハ女房による○是を履ハ多く上品なる人による遊所にてハ多く用ひず○雪踏直し草履を直すときハ大いに骨を折なり是を穢多草履のくるしミといふ○また女護の嶋にてハ男を定めるにこの草履をもつてすといふ○上草履ハ吉原の二階に多く用ゆ又ハ商人の土蔵のうちに用ゆ起逸点に
「かけてきた姿の見ゆる上草履又川柳点に「石ハ黒岩ハ草履で名を起し○又或人の戀の狂哥に
「どふ思ひ直して見ても直されぬ別るゝときの君がはきもの

枩葉

社人常搔之画
拾聚焚付之形

此形ハ枩葉にして多く茶菓子などにあるやつなり○小兒これを數珠にする意あり○人物にとつてハ尉と姥とによる意○人に可愛がられんと思ハゞ五葉の枩の六葉あるのと南天の七葉とを鏡のうらへ入おくべし祕傳なれどもこゝにしるす○むかしの裾もやうに多くあるなり○この形を髪ざしに用ゆるハ天明年間の流行とす○名所ハ播州高砂か江州唐崎か○むかしの哥に曰く松の葉のやうなこまかい氣をもつな廣い芭蕉葉の氣をもちやれと云ゝ○また四季にとつて夏四月落

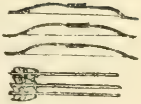
葉すと俳諧の季寄に見へたり○ある人の發句に〽蚊とんぼの押えられたり散松葉



文章

中宿屆客之画
何止無心之形

此形ハ文にして多く無心にとゞまるもの也○女夫喧嘩これよりしておこる○千話文ハ衿より手を出して見るかたち○九太夫是を見るときハ椽の下に潜む形○中宿の手ふき紙になる意○此文に口がきもせず名も書ぬやうになつてハやがて家滅亡のきざし○野夫なる客ハ此ふミをもつていよゝ實か誠かといふ事を墨色見に見てもらふとあり墨色ハ當時方角南禪寺のほうを吉とす○むかしハ正月元日に京都の町々を賣歩きし意〽懸想文賣人もつゝむ面哉○菜の葉にいハくどれ〳〵さまの千話文も別にかはらぬさまゝいるとあれバ多く名あてハせぬものと見へたり○此文の中に哥の一首もいるやつハよほど時代めきたるもの也○よむときハ「としてハ」と云ところより心をつけてよむべし○扨又見しあとハかならず引さき捨てよし火にくべるも尤よし



楊弓

初當衝立之画
后爭勝負之形

此形は楊弓にして數は一手八本とす元來楊貴妃がかゝる弓矢を製して戯れに射たりしより始りしゆへ楊弓と名づくるといひ又楊の枝をもつてはじめは作りしゆへ楊弓と名つけたりなどゝ其說また／＼なれども意氣にて考えるときは陽九なるべし或人これお難じて陽九なれバ一手九本なるべきに何ゆへ八本ぞといふにこたへて曰く七ッ道具をさしながらむさし坊と辨慶をいふが如しとこたへしも又意氣ならずや○方角は多く東山による意古哥に曰くかつちり楊弓ざゞんざざゞめく東山○玄人は左を以て押手とす素人は右をもつて押手とするかたち○人物は出家多し宮川町の戻りがけに立よる意されバ百中を總穴といふ○作は風竹齊の作をよしとす○たとへかるたにはたんすと楊弓きりがよいと見へたれども富のふだと淨るりもやつぱりきりがよかるべし○鎭西八郎も楊弓場の連名には爲朝さんと喚れしといへり是景淸も花見の席は七兵衛さんといはれしと同じ意か○去狀書には三下り半圍を建るは四疊半楊弓射には七間半と古しへよりき

まりきつた法式とす○當時ハ蟹を多くつかふ意あり廿年前まではたへてなき事とす○籾の灰を手に付て射意○詩に曰く百發百中妙名人少不違可憐田舍漢當太鼓尤稀とありて田舍もい多く衝立にあてるかたち○畢竟此卷の後に楊弓を出せしも是此本の當りを得て利を射んといふ作者のねらひ諸君子高評をねがふのミ

作者曰く已上卅二形をもつて此編の終とす總て六十四形の草稿出來あれどもあまり丁數の多からんとをいとえバ殘り卅二形ハ追て後へんに著明すべし

意氣客初心卷之下了

附錄手相

〽これがナやかましいさかいナなどゝいふ

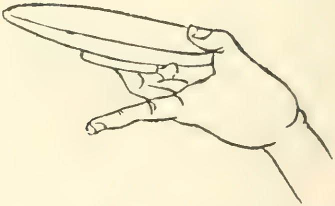
○此手相ハ内の親方などのことをわるういふ手相なりつゝしむべし

〽是にさたなしにナとうぞエしておくれエなどゝいふなり

○此手相ハ内のかミさんなどのことをわるういふ手相とす

○此手相ハ東都深川にかぎる至つて意氣にてよし

○此手相ハ都の祇園町なとの手相なり是も粋にて大いによし

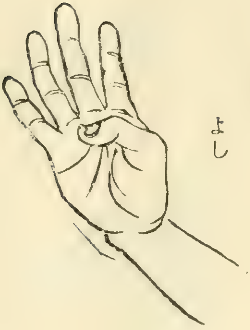


○言葉も東都の深川ハござんすなり吉原ハありいすなり京のぎおん町ハありますといふ

三四

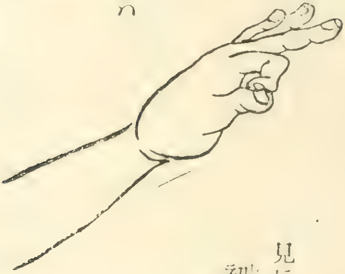
平生のスウと出す手相ハ如此

○この手相スウと出す時意氣にて大いによし



拳をけんとして意氣に勝よとハこれ古しへよりのおしえなり

左の手相
リンといだすときハ此手相よしとす



同じサンにても此手相至つて見にくし初心の人まゝある事也つゝしむべし

七一

因に曰く秩父の庄司重忠れこの手相を見るといたつて名人なりされバ阿古屋も重忠のとを指相をさとる御方といひしとあり

ばつ

嗚呼此書誠に意氣也作者☶(サン)月子の方實に☰(ケン)なる哉世の人☵(カン)☳(シン)して是を見は書肆れ☲(リ)を得て☱(ヨロコビ)とせむ

大和の欲若識

洛　山月庵主人著

仝　呉雀巢校

繪本三食志　近松翁遺稿　近刻

天保七季　申春發版

京都　書林

山城屋佐兵衛

吉田屋新兵衛

青山　茂
江木　仲
大槻正二
大槻尹一
高木好次
校

昭和七年四月二十三日印刷
昭和七年四月二十八日發行

洒落本大系第十二卷

非賣品

著作權所有

編纂者　高木好次

編纂者　山本鍊藏

編纂者　渡邊幸

東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
發行者　株式會社林平書店
代表者　林善七

東京市牛込區矢來町三十六番地
印刷者　本間十三郎

發行所
東京日本橋區吳服橋
振替東京二三三七一
株式會社林平書店

印刷所清揚社

京傳筆

[illegible]

貫之

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02995 1878